佐賀県文化財調査報告書第140集

戦場古墳群

戦場ケ谷遺跡
浦田古墳群
寺ケ里遺跡

［本文編］

1999年 3月

佐賀県教育委員会

「戦場古墳群」佐賀県文化財調査報告書第140集［本文編］　正誤表

頁	誤	正
P．20 31行目	……116-319が16.7cm杯蓋。	……116-319が16.7cm。［削除］
P．87 4行目	ありその間隔は約4.0cm。	ありその間隔は約8.0cm。
P．146 30行目	306は石室床面の……割れている。	［全文削除］
P．153 3行目	５．奈良～平安時代の遺構と遺物（Fig.１２２～１２６）	５．奈良～平安時代の遺構と遺物(Fig.１２０～１２６）
P．176 Fig.128 キャプション	Fig.128 ＢＦ25，26、ＢＧ25Ｇｒ出土遺物垂直分布状況	Fig.128 ＢＦ25，26、ＢＧ25Ｇｒ出土遺物垂直分布状況（※図中のA，A′，A″，B，B′，C，C′はFig.127に対応）［加筆］
P．188 30行目	押型文土器（Fig.135－26～99）	押型文土器（Fig.135－26～58，Fig.136－59～99，）
P．211 20行目	外反する口縁部形態から早水台式相当に……	外反する口縁部形態から早水台式類似に……
P．236 12行目	99～100は青銅製の不明製品。いずれも……	99～101は青銅製の不明製品。いずれも……
P．262 Fig.192図中	ＳＫ０１１	ＳＸ０１１
P．271 26行目	156～61は東壁土壙内からの出土	56～61は東壁土壙内からの出土
P．277 32,33行目	口縁部内面には赤色顔料が認められる。80～82は脚部。くびれ部に断面三角形の突帯を貼り付ける。……	口縁部内面には赤色顔料が認められる。［改行］80～82は脚部。くびれ部に断面三角形の突帯を貼り付ける。……
P．283 28行目	……底部付近の破片である。なお21は外面に原体条痕のみ……	……底部付近の破片である。なお20は外面に原体条痕のみ……

佐賀県文化財調査報告書第140集

戦場古墳群

戦場ケ谷遺跡
浦田古墳群
寺ケ里遺跡

［本文編］

１９９９年　３月

佐賀県教育委員会

調査対象地区全景（南より）

戦場古墳群６区ＳＸ０５６出土
青銅製鋤先

戦場古墳群６区ＳＴ０３３古墳出土
銀象嵌刀装具

序

この調査報告書は、佐賀県教育委員会が佐賀県土地開発公社の委託を受けて、平成５～９年度に実施した三津工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録です。

調査の結果、縄文時代から中世にかけての住居・墳墓等の遺構が明らかになったほか、銀象眼を施す刀装具や青銅製鋤先、あるいは土器・石器・鉄製品など、当時の暮らしぶりを生々しく伝える多数の遺物が出土しました。

調査の成果は本書に詳しいところですが、その内容が学術文化の向上に寄与するとともに、県民の皆様が郷土の歴史と文化財を愛し、守っていくための資料として広く活用して頂ければ幸いに存じます。

なお、発刊にあたり、地元の皆様をはじめとする関係各位から賜った深い御理解と多大な御協力に対し、心から厚く御礼申し上げます。

平成11年３月

佐賀県教育委員会

教育長　川久保 善明

例　言

1．本報告書は三津工業団地造成に伴う事前調査のうち、平成４年度から平成９年度に発掘調査を行った、戦場古墳群１～６区、戦場ヶ谷遺跡２区、浦田古墳群１，２区、寺ヶ里遺跡２区の調査報告書である。

2．発掘調査は佐賀県土地開発公社の委託を受けて佐賀県教育委員会（平成５～９年度）、東脊振村教育委員会（平成４年度）が実施した。

3．発掘調査にあたって、佐賀県土地開発公社、東脊振村教育委員会・企画課並びに地元の方々の協力を得た。

4．調査記録の整理と報告書作成作業は佐賀県文化財課・文化課で行った。

遺構実測：細川金也・松尾法博・市川浩文・小松譲・谷口加代子・藤山友紀・(有)埋蔵文化財サポートシステム

遺物整理・実測・製図：井 節子・一番ケ瀬富士子・植村美鈴・江島美恵子・江副朋子・大柿珠美・上瀧光子・谷口加代子・田中ハルミ・鶴田啓子・中島美須三・藤山友紀・皆越弘子・村里育子・市川浩文

遺構写真撮影：細川金也・松尾法博・市川浩文・小松譲

遺物写真撮影：渋谷 格・市川浩文

写真現像焼付：黒木優子・奥知恵子

自然科学分析：（株）古環境研究所

5．報告書作成に際して下記の方々から指導・助言・協力を得た。

蒲原宏行・黒田裕一・中野 充・渋谷 格・七田忠昭・菅谷文則・細川金也・松尾法博・森田孝志・百崎正子・佐賀県工業技術センター（順不同、敬称略）

6．本書の編集・執筆は各調査員の協力のもと市川が行った。

凡　例

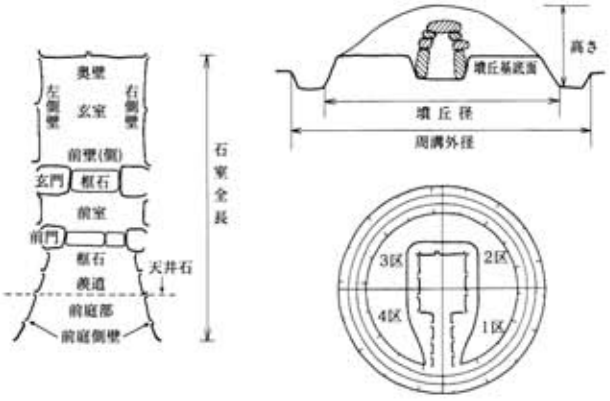
1．遺構は遺跡毎に一連番号を付け、ＳＴ：古墳、ＳＫ：土壙、ＳＪ：甕棺墓、ＳＰ：土壙墓・木棺墓、Ｐ：柱穴・小穴、ＳＸ：不明遺構（祭祀遺構・集石遺構等を含む）の略号を用いて標記した。

2．寸法の表示に用いた単位は、遺構がm、遺物がcmである。

3．方位は、すべて座標北（G.N.）である。

4．遺物実測図のうち、断面塗り潰しは須恵器、断面トーンは赤焼き土器・瓦器、器面トーンは黒色土器あるいは赤色・黒色顔料等を塗布したものを表す。

5．文章中の古墳の各部名称・計測値は右図による。



〔凡例〕古墳各部名称と計測法

本文目次

第１章　地理的・歴史的環境 …… 1
１．地理的環境 …… 1
２．歴史的環境 …… 3
３．調査対象区周辺の遺跡について …… 7
第２章　調査の概要 …… 12
１．調査に至る経過 …… 12
２．調査の組織 …… 13
３．調査の概要 …… 14
（１）調査区の設定について …… 14
（２）発掘調査の概要 …… 14
（３）古墳時代須恵器の編年的位置付けについて …… 19
第３章　調査の内容 …… 22
Ⅰ．戦場古墳群１区の遺構と遺物 …… 22
１．遺跡の概要 …… 22
２．縄文時代の遺構と遺物 …… 22
３．弥生時代の遺構と遺物 …… 45
４．古墳時代の遺構と遺物 …… 48
５．奈良～平安時代の遺構と遺物 …… 69
６．結語 …… 73
Ⅱ．戦場古墳群２区の遺構と遺物 …… 76
１．遺跡の概要 …… 76
２．古墳時代の遺構と遺物 …… 76
３．結語 …… 78
Ⅲ．戦場古墳群３区の遺構と遺物 …… 79
１．遺跡の概要 …… 79
２．古墳時代の遺構と遺物 …… 79
３．奈良～平安時代の遺構 …… 88
４．結語 …… 89
Ⅳ．戦場古墳群４区の遺構と遺物 …… 90
１．遺跡の概要 …… 90
２．古墳時代の遺構と遺物 …… 91
３．結語 …… 93
Ⅴ．戦場古墳群６区の遺構と遺物 …… 94
１．遺跡の概要 …… 94
２．縄文時代の遺物 …… 97
３．弥生時代の遺構と遺物 …… 100
４．古墳時代の遺構と遺物 …… 106
５．奈良～平安時代の遺構と遺物 …… 153
６．結語 …… 162
Ⅵ．戦場ヶ谷遺跡２区の遺構と遺物 …… 171
１．遺跡の概要 …… 171
２．縄文時代の遺構と遺物 …… 173
３．弥生時代の遺構と遺物 …… 194
４．古墳時代の遺構と遺物 …… 197
５．奈良～平安時代の遺構と遺物 …… 208
６．戦場ヶ谷遺跡の放射性炭素（14C）年代測定結果について …… 210
７．結語 …… 211

Ⅶ．浦田古墳群１区の遺構と遺物 ……215
１．遺跡の概要 ……215
２．縄文時代の遺構と遺物 ……216
３．古墳時代の遺構と遺物 ……221
４．その他の遺構 ……238
５．結語 ……240
Ⅷ．浦田古墳群２区の遺構と遺物 ……245
１．遺跡の概要 ……245
２．縄文時代の遺構 ……245
３．古墳時代の遺構と遺物 ……246
４．その他の遺物 ……258
５．結語 ……260
Ⅸ．寺ヶ里遺跡２区の遺構と遺物 ……262
１．遺跡の概要 ……262
２．縄文時代晩期末～弥生時代前期初頭の遺構と遺物 ……263
３．平安時代の遺構と遺物 ……271
４．中世の遺構と遺物 ……271
５．小穴・遺物包含層及び遺構検出面出土遺物 ……277
６．結語 ……279
Ⅹ．七田家所蔵遺物について ……283

挿図目次

Fig.1 周辺遺跡分布図 ……2
Fig.2 調査区周辺遺跡分布図 ……8
Fig.3 調査区周辺地形図 ……15,16
Fig.4 調査対象地地区割図 ……18
Fig.5 出土古墳時代須恵器・土師器編年表 ……21

戦場古墳群１区

Fig.6 戦場古墳群１区遺構配置図 ……23,24
Fig.7 縄文時代早前期遺物分布状況及び調査区土層 ……26
Fig.8 ＢＣ54・55，BD54・55Gr遺物出土状況 ……28
Fig.9 縄文時代遺物包含層出土遺物垂直分布状況 …29
Fig.10 SX011，031，042集石遺構 ……31
Fig.11 SX025，028，043，045，050，051集石遺構…32
Fig.12 SX029，046集石遺構……33
Fig.13 縄文時代の遺物１［土器］ ……35
Fig.14 縄文時代の遺物２［土器］ ……36
Fig.15 縄文時代の遺物３［土器］ ……37
Fig.16 縄文時代の遺物４［石器］ ……39
Fig.17 縄文時代の遺物５［石器］ ……40
Fig.18 縄文時代の遺物６［石器］ ……41
Fig.19 縄文時代の遺物７［石器］ ……42
Fig.20 ＳＪ013，024，027，032，041甕・壺棺墓 …46
Fig.21 甕・壺棺ほか弥生時代前期の遺物 ……47
Fig.22 ＳＴ001古墳測量図 ……49
Fig.23 ＳＴ001古墳石室 ……50
Fig.24 ＳＴ001古墳閉塞状況 ……51
Fig.25 ＳＴ001古墳出土遺物１ ……52
Fig.26 ＳＴ001古墳出土遺物２ ……53
Fig.27 ＳＴ004，005，007，020古墳測量図 ……55
Fig.28 ＳＴ002，008，009古墳測量図 ……56
Fig.29 ＳＴ004，005，008，020古墳土層図 ……57
Fig.30 ＳＴ002古墳石室 ……58
Fig.31 ＳＴ004古墳石室平面及び閉塞状況 ……59
Fig.32 ＳＴ004古墳石室 ……60
Fig.33 ＳＴ005古墳石室 ……61
Fig.34 ＳＴ007古墳石室 ……62
Fig.35 ＳＴ008古墳石室 ……64
Fig.36 ＳＴ009古墳葺石検出状況 ……65
Fig.37 ＳＴ009古墳石室 ……66
Fig.38 ＳＴ020古墳石室 ……67
Fig.39 ＳＴ004，005，007，020古墳他出土遺物 ……68
Fig.40 ＳＸ003火葬墓，026集石遺構及び出土遺物 …70
Fig.41 ＳＸ006火葬墓，021集石遺構及び出土遺物 …71

戦場古墳群２区

Fig.42 戦場古墳群２区遺構配置図 ……76
Fig.43 ＳＴ010古墳測量図 ……77
Fig.44 ＳＴ010古墳出土遺物 ……77
Fig.45 ＳＴ010古墳石室 ……78

戦場古墳群３区

Fig.46 戦場古墳群３区遺構配置図 ……80
Fig.47 ＳＴ014，015，016古墳土層図 ……81
Fig.48 ＳＴ014，015，016古墳測量図 ……82
Fig.49 ＳＴ014古墳石室平面 ……82
Fig.50 ＳＴ014古墳石室 ……83
Fig.51 ＳＴ015古墳石室 ……84
Fig.52 ＳＴ016古墳葺石検出状況 ……84
Fig.53 ＳＴ016古墳周溝内土器出土状況 ……85
Fig.54 ＳＴ016古墳石室 ……86
Fig.55 ＳＴ015，016古墳出土遺物 ……87
Fig.56 ＳＸ019，023集石遺構 ……88

戦場古墳群４区

Fig.57 戦場古墳群４区遺構配置図 ……90
Fig.58 ＳＴ012古墳石室 ……91
Fig.59 ＳＴ012古墳平面 ……92
Fig.60 ＳＴ012古墳閉塞状況 ……92

戦場古墳群６区

Fig.61 戦場古墳群６区遺構配置図……95,96
Fig.62 縄文時代の遺物１ ……98
Fig.63 縄文時代の遺物２ ……99
Fig.64 ＳＸ050支石墓 ……101
Fig.65 ＳＸ055不明遺構及び出土遺物 ……102
Fig.66 ＳＴ033，034墳丘及び墳丘下出土弥生土器 103
Fig.67 ＳＸ056青銅製鏃先出土遺構及び出土青銅製鏃先 …104
Fig.68 ＳＴ033古墳測量図（墳丘遺存状況） ……107
Fig.69 ＳＴ033古墳測量図（地山整形状況） ……108
Fig.70 ＳＴ033古墳土層図 ……109
Fig.71 ＳＴ033古墳張り出し部土層図 ……110
Fig.72 ＳＴ033古墳石室平面 ……110
Fig.73 ＳＴ033古墳石室 ……111
Fig.74 ＳＴ033古墳墓道遺物出土状況 ……113
Fig.75 ＳＴ033古墳出土遺物１ ……114
Fig.76 ＳＴ033古墳出土遺物２ ……115
Fig.77 ＳＴ033古墳出土遺物３ ……116
Fig.78 ＳＴ033古墳出土遺物４ ……117
Fig.79 ＳＴ033古墳出土遺物５ ……118
Fig.80 ＳＴ033古墳出土遺物６ ……119
Fig.81 ＳＴ034古墳測量図 ……121
Fig.82 ＳＴ034古墳土層図 ……122
Fig.83 ＳＴ034古墳石室平面 ……123
Fig.84 ＳＴ034古墳石室 ……124
Fig.85 ＳＴ034古墳墓道遺物出土状況 ……125
Fig.86 ＳＴ034古墳出土遺物分布状況 ……125
Fig.87 墳丘内土器出土状況 ……125
Fig.88 ＳＴ034古墳出土遺物１ ……126
Fig.89 ＳＴ034古墳出土遺物２ ……127
Fig.90 ＳＴ034古墳出土遺物３ ……128
Fig.91 ＳＴ034古墳出土遺物４ ……129
Fig.92 ＳＴ034古墳出土遺物５ ……130
Fig.93 ＳＴ034古墳出土遺物６ ……130
Fig.94 ＳＴ034古墳出土遺物７ ……131
Fig.95 ＳＴ034古墳出土遺物８ ……132
Fig.96 ＳＴ039古墳測量図 ……133
Fig.97 ＳＴ039古墳土層図 ……134
Fig.98 ＳＴ039古墳石室平面 ……135
Fig.99 ＳＴ039古墳石室 ……136
Fig.100 ＳＴ039古墳閉塞状況 ……137
Fig.101 ＳＴ039古墳出土遺物 ……137
Fig.102 ＳＴ040古墳墳丘測量図 ……139
Fig.103 ＳＴ040古墳土層図 ……140
Fig.104 ＳＴ040古墳石室平面 ……141
Fig.105 ＳＴ040古墳石室 ……142
Fig.106 ＳＴ040古墳石室前面石積状況 ……143
Fig.107 ＳＴ040古墳閉塞状況 ……143
Fig.108 ＳＴ040古墳墳丘下土器出土状況 ……144
Fig.109 ＳＴ040古墳石室床面埋土堆積状況 ……144
Fig.110 ＳＴ040古墳出土遺物 ……145
Fig.111 ＳＴ049古墳測量図 ……146
Fig.112 ＳＴ049古墳石室平面 ……147
Fig.113 ＳＴ049古墳土層図 ……148
Fig.114 ＳＴ049古墳石室 ……149
Fig.115 ＳＴ049古墳閉塞状況 ……150
Fig.116 ＳＴ049古墳出土遺物１ ……151
Fig.117 ＳＴ049古墳出土遺物２ ……152
Fig.118 ＳＴ049古墳出土遺物３ ……153
Fig.119 ＳＴ053古墳測量図 ……154
Fig.120 ＳＸ035,036火葬墓及び出土遺物……155
Fig.121 ＳＸ037,038火葬墓及び出土遺物……156
Fig.122 ＳＸ054祭祀遺構及び出土遺物 ……158
Fig.123 ＳＸ054祭祀遺構出土遺物 ……159
Fig.124 ＳＸ054祭祀遺構ほか出土遺物 ……160

戦場ケ谷遺跡２区

Fig.125 戦場ケ谷遺跡２区遺構配置図 ……172
Fig.126 縄文時代早期の土器,石器出土分布状況……174

Fig.127 ＢＦ25,26、ＢＧ25Gr遺物出土分布状況……175
Fig.128 ＢＦ25,26、ＢＧ25Gr出土遺物
垂直分布状況 ……176
Fig.129 ＢＤ15～19Gr土層図 ……177
Fig.130 ＢＤ21～24Gr土層図 ……178
Fig.131 ＢＤ21Gr遺物出土状況 ……180
Fig.132 ＳＸ012,020,023,024,025,026集石遺構……182
Fig.133 ＳＸ028,031,032集石遺構、ＳＫ013土壙 …183
Fig.134 縄文時代の遺物１［土器］ ……185
Fig.135 縄文時代の遺物２［土器］ ……186
Fig.136 縄文時代の遺物３［土器］ ……187
Fig.137 縄文時代の遺物４［石器］ ……190
Fig.138 縄文時代の遺物５［石器］ ……191
Fig.139 縄文時代の遺物６［石器］ ……192
Fig.140 ＳＫ005，006土壙・及び出土遺物 ……193
Fig.141 ＳＸ018不明遺構及び出土遺物 ……194
Fig.142 ＳＴ004古墳測量図 ……197
Fig.143 ＳＴ004古墳石室平面 ……198
Fig.144 ＳＴ004古墳石室……199,200
Fig.145 ＳＴ004古墳出土遺物１ ……201
Fig.146 ＳＴ004古墳出土遺物２ ……202
Fig.147 ＳＴ004古墳出土遺物３ ……203
Fig.148 ＳＴ010，011古墳測量図 ……204
Fig.149 ＳＴ010古墳石室及び出土遺物 ……206
Fig.150 ＳＰ002，003土壙墓、ＳＸ009不明遺構
及び出土遺物 …207
Fig.151 ＳＰ014木棺墓、ＳＰ017土壙墓
及び出土遺物 …209

浦田古墳群１区

Fig.152 浦田古墳群１区遺構配置図 ……217
Fig.153 SK004，005，007，008，010，
014，015土壙 ……218
Fig.154 SK009，011～013，016土壙……219
Fig.155 縄文時代の遺物 ……220
Fig.156 ＳＴ001古墳測量図 ……222
Fig.157 ＳＴ001古墳平面 ……223
Fig.158 ＳＴ001古墳土層図 ……224
Fig.159 ＳＴ001古墳石室……225,226
Fig.160 ＳＴ001古墳閉塞状況 ……227
Fig.161 ＳＴ001古墳石室遺物出土状況 ……228
Fig.162 ＳＴ001古墳出土遺物１ ……229
Fig.163 ＳＴ001古墳出土遺物２ ……230
Fig.164 ＳＴ001古墳出土遺物３ ……231
Fig.165 ＳＴ001古墳出土遺物４ ……232
Fig.166 ＳＴ001古墳出土遺物５ ……233
Fig.167 ＳＴ001古墳出土遺物６ ……234
Fig.168 ＳＴ001古墳出土遺物７ ……235
Fig.169 ＳＴ002古墳測量図 ……236
Fig.170 ＳＴ002古墳石室 ……237
Fig.171 ＳＴ017，018古墳、ＳＸ020不明遺構 ……238
Fig.172 ＳＴ017，018古墳、ＳＸ020不明遺構
出土遺物 …239
Fig.173 ＳＰ019土壙墓、ＳＸ021・022不明遺構 …240

浦田古墳群２区

Fig.174 浦田古墳群２区遺構配置図 ……246
Fig.175 調査区基本土層図 ……246
Fig.176 ＳＸ024・025集石遺構 ……247
Fig.177 ＳＴ021古墳測量図 ……247
Fig.178 ＳＴ021古墳墳丘土層図 ……248
Fig.179 ＳＴ021古墳石室平面 ……249
Fig.180 ＳＴ021古墳石室 ……250
Fig.181 ＳＴ021閉塞状況 ……251
Fig.182 ＳＴ021古墳出土遺物 ……252
Fig.183 ＳＴ022・023古墳測量図 ……253
Fig.184 ＳＴ022周溝内土器埋置状況 ……253
Fig.185 ＳＴ022古墳墳丘土層図 ……254
Fig.186 ＳＴ022古墳石室 ……255
Fig.187 ＳＴ022古墳出土遺物 ……256
Fig.188 ＳＴ023古墳葺石検出状況 ……257
Fig.189 ＳＴ023古墳墳丘土層図 ……258
Fig.190 ＳＴ023古墳石室 ……259
Fig.191 その他の出土遺物 ……260

寺ケ里遺跡２区

Fig.192 寺ケ里遺跡２区遺構配置図 ……262
Fig.193 ＳＫ008土壙及び出土遺物 ……264
Fig.194 ＳＫ009土壙及び出土遺物 ……265
Fig.195 ＳＫ014・020土壙及び出土遺物 ……266
Fig.196 ＳＫ017・019土壙、ＳＸ011不明遺構
及び出土遺物 …267
Fig.197 ＳＫ018土壙 ……269
Fig.198 ＳＢ005竪穴住居 ……270
Fig.199 ＳＢ005竪穴住居出土遺物 ……272
Fig.200 ＳＢ001掘立柱建物……273,274
Fig.201 ＳＢ001掘立柱建物出土遺物 ……275
Fig.202 ＳＢ011掘立柱建物、ＳＸ020柵列状遺構 …276
Fig.203 小穴・遺物包含層及び検出面出土遺物１ …278
Fig.204 小穴・遺物包含層及び検出面出土遺物２ …279

七田家所蔵遺物

Fig.205 七田家所蔵遺物 ……284

表目次

Tab.1 戦場古墳群１区遺構一覧表 ……25
Tab.2 戦場古墳群１区縄文時代の土器一覧表 ……43,44
Tab.3 戦場古墳群１区縄文時代の石器一覧表 ……44
Tab.4 戦場古墳群１区弥生時代の土器一覧表 ……48
Tab.5 戦場古墳群１区古墳時代、奈良・平安時代の
土器一覧表 ……73
Tab.6 戦場古墳群１区鉄製品ほか一覧表 ……73
Tab.7 戦場古墳群２区遺構一覧表 ……76
Tab.8 戦場古墳群３区遺構一覧表 ……79
Tab.9 戦場古墳群２区・３区出土土器一覧表 ……88
Tab.10 戦場古墳群２区・３区鉄製品一覧表……89
Tab.11 戦場古墳群４区遺構一覧表……93
Tab.12 戦場古墳群６区遺構一覧表……94
Tab.13 戦場古墳群６区縄文時代・弥生時代の
土器一覧表……105
Tab.14 戦場古墳群６区石器ほか一覧表 ……106
Tab.15 戦場古墳群６区古墳時代、奈良・平安時代の
土器一覧表 164～168
Tab.16 戦場古墳群６区鉄製品ほか一覧表 ……169,170
Tab.17 戦場ケ谷遺跡２区遺構一覧表 ……171
Tab.18 戦場ケ谷遺跡２区
縄文・弥生時代の土器一覧表 …195,196
Tab.19 戦場ケ谷遺跡２区
縄文時代の石器一覧表 ……196
Tab.20 戦場ケ谷遺跡２区
古墳時代、奈良・平安時代の土器一覧表 …213
Tab.21 戦場ケ谷遺跡２区鉄製品ほか一覧表 ……214
Tab.22 浦田古墳群１区遺構一覧表 ……215
Tab.23 浦田古墳群１区土器一覧表 ……241,242
Tab.24 浦田古墳群１区鉄製品ほか一覧表……242～244
Tab.25 浦田古墳群２区遺構一覧表 ……245
Tab.26 浦田古墳群２区土器一覧表 ……261
Tab.27 浦田古墳群２区鉄製品・ガラス製品一覧表 261
Tab.28 寺ケ里遺跡２区遺構一覧表 ……263
Tab.29 寺ケ里遺跡２区土器一覧表 ……281,282
Tab.30 寺ケ里遺跡２区石器・鉄製品一覧表 ……282

口絵写真

上　調査対象地区全景（南より）
左下　戦場古墳群６区SX056出土 青銅製鋤先
右下　戦場古墳群６区ST033出土 銀象嵌刀装具

報告書抄録

ふりがな	せんばこふんぐん
書名	戦場古墳群
シリーズ名	佐賀県文化財調査報告書
シリーズ番号	第140集
編集者名	市川 浩文
編集機関	佐賀県教育委員会
所在地	〒840－8570　佐賀県佐賀市城内１丁目1－59　　TEL. 0952（24）2111
発行年月日	1999年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査対象面積 ha	調査原因
戦場古墳群１区 ２区 ３区 ４区 ６区 戦場ケ谷遺跡２区 浦田古墳群１区 ２区 寺ケ里遺跡２区	佐賀県神埼郡 東脊振村 大字三津					19930701 ～ 19970117	59,300㎡	工業団地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な出土遺物	特記事項
戦場古墳群１区	遺物包含層・墓地・古墳	縄文時代・弥生時代・古墳時代・奈良～平安時代	集石遺構、甕・壺棺墓、古墳、火葬墓	土器・石器・鉄器・ガラス製品	
２区	古墳	古墳時代	古墳	土器・鉄器	
３区	古墳・墓地	古墳時代・奈良～平安時代	古墳・集石遺構	土器・鉄器	
４区	古墳	古墳時代	古墳		
６区	古墳・墓地	縄文時代・弥生時代・古墳時代・奈良～平安時代	古墳・集石遺構・火葬墓・祭祀遺構	土器・土製品・陶磁器・石器・鉄器・銭貨・ガラス製品・青銅製品	弥生時代の青銅製鋤先、古墳時代の銀象嵌刀装具、奈良時代の土馬・土製品
戦場ケ谷遺跡２区	遺物包含層・古墳・墓地	縄文時代・弥生時代・古墳時代・奈良～平安時代	集石遺構、古墳、火葬墓、土壙墓、木棺墓	土器・石器・鉄器・銭貨・ガラス製品	
浦田古墳群１区	遺物包含層・墓地・古墳	縄文時代・古墳時代・中世～近世	古墳、方形周溝墓、土壙墓	土器・石器・鉄器・銭貨・ガラス製品・青銅製品	古墳時代の特殊偏壺
２区	古墳	縄文時代･古墳時代	集石遺構、古墳	土器・石器	
寺ケ里遺跡２区	集落	縄文時代末～弥生時代初頭、奈良～平安時代、鎌倉時代	土壙・竪穴住居・掘立柱建物・柵列	土器・石器・鉄器・陶磁器	

第１章　地理的・歴史的環境

１．地理的環境（Fig.１）

有明海沿岸の最奥部に位置する佐賀平野は、東は筑後川を挟んで筑後平野と、西は六角川を隔てて白石平野と分割される東西約35km、南北15～20kmの範囲に広がる。その景観的な大きな特徴は、佐賀平野の北側に位置する脊振山系の山々と、有明海を取り巻く広大な沖積平野との対比である。この脊振山系は有明海沿岸地域と玄海灘沿岸地域を南北約60kmにわたって隔てており、標高1055.2mの脊振山を始め、標高500～800m級の山々が数多く連なり、その基盤は主に花崗岩からなる。これらの花崗岩は紀元前１億４千年前の中生代白亜紀に古生層の下から盛り上がって山地を形成したものである。佐賀平野においては、この脊振山系山麓部から平野部に向かって、後期洪積世に形成された段丘が南側に低く長く幾筋も伸びており、その南端はほぼ国道34号線を越えた付近にあたる。これらの段丘は高位・中位・低位の三つに区分され、花崗岩の基盤上に山地から流出した花崗岩礫や砂からなる河床堆積物が厚く堆積したものであり、その上面には後期洪積世末期の火山活動による火山灰層が不整合に載っている（鳥栖ローム、上部ローム）。脊振山系南麓より伸びる段丘の標高は概ね40～50mを最高位とするが、脊振山系の山々は最も平野に接近した部分でも標高200m前後の急峻な尾根が連なり、山地と段丘部の高低差は大きい。

脊振山系の断層に沿って生じた大きな河川は、佐賀平野に流れ出る急斜面では山地をさらに侵食してＶ字谷や峡谷を作り、谷部からの出口付近では砂礫性堆積物により扇状地を形成、扇端部より下流では段丘と段丘の間に扇状地性低地を形作る。一方段丘部においては、小河川により細かく開析され複雑な谷状地形が生み出されている。このような段丘と扇状地・扇状地性低地・谷状地形の繰り返しからなる起伏に富む地形は、特に鳥栖市の西方から大和町付近まで顕著に認められ、中でも戦場古墳群の位置する東脊振村を始め、神埼町・三田川町・上峰町・中原町・北茂安町を含む旧神埼郡・三根郡付近において最も発達していると言えよう。また、平野部と段丘部は、東西方向においてはその標高差によって明瞭に区別できるが、段丘南側は漸移的に低くなりつつ平野部に没し、現況ではその端部を視認することは困難である。この段丘部と平野部との境が不明瞭になる部分からさらに南側には、標高2.0～8.0mの平坦低地が南北約15kmの幅を持って有明海との間に横たわる。この平坦低地は河川堆積物と海進時における海性粘土（有明粘土層）の堆積を主な成因としており、近世以降に干拓された部分も含めて広大な水田地帯を形成している。現在、この水田地帯に大きな地形的変化を認めることは難しいが、実際には微妙な起伏を持つ複雑な地形がその下面に埋没しており、遺跡の分布・立地と密接に関わっている。

戦場古墳群・戦場ヶ谷遺跡・浦田古墳群・寺ヶ里遺跡は神埼郡東脊振村大字三津に所在する。地形的には佐賀平野に南面する脊振山系の支峰、標高515.9mの大高山から南に伸びる山麓部と高位段丘（吉野ヶ里段丘）との境界付近を中心に位置し、その範囲は神埼郡東脊振村に含まれ、神埼町との境に接している。吉野ヶ里段丘は基部付近で約1.5km程の東西幅を持つが、南に伸びるに従って次第に幅を狭め、吉野ヶ里遺跡付近では幅0.5km程で細く伸びる。この吉野ヶ里段丘の東西には、東に田手川、西に城原川の二つの大きな河川が南流し、いずれも平野部に流れ込む部分で扇状地を、さらに段丘と段丘の間には広範囲に扇状地性低地を形成している。

田手川の東岸には標高403.5mの鷹取山から続く目達原段丘が伸びるが、この段丘は基部付近では１km程の幅であるのに対し、さらに南側の横田・吉田付近では幅2.5kmと大きく広がって台地状をなし、弥生時代から中世にかけての遺跡が数多く立地している。このうち、段丘上西側の横田・大曲付近はほぼ平坦な地形をなすが、東側の二塚山遺跡の立地する松葉付近では丘陵部と谷部からなる起伏に富んだ地形をなしており対照的である。この台地上の段丘は国道34号線より南側にも幅2.0kmと大きく広がって伸び、前方後円墳５基を中心とする目達原古墳群が形成される。

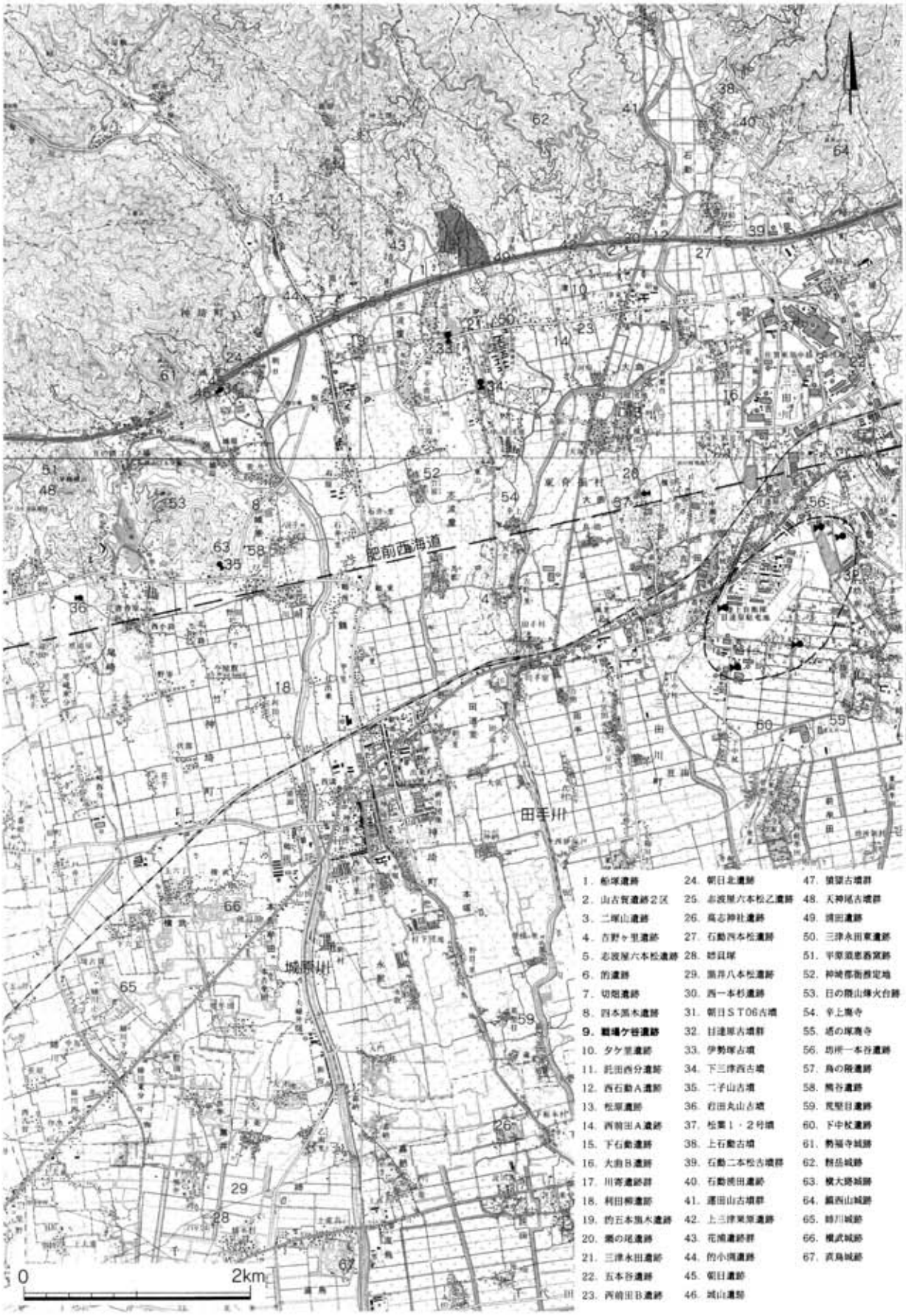


Fig.1　周辺遺跡分布図（1：50,000）

一方、城原川の西岸は土器山（標高429.9m）の裾部の朝日地区から菅生地区、二子地区にかけて段丘が伸びるが、見かけ上は目達原段丘ほど南側に長く伸びることはなく、川寄地区付近において段丘部の段差は消失し、扇状地性低地との境は不明瞭になっている。この段丘面は城原川・田手川流域において幸いにも大規模な開発をまぬがれている地区であり、各時代における遺跡が良好に遺存している可能性が指摘されている。菅生地区、二子地区の西方には脊振山地が一旦途切れ、再び円錐状の独立した丘陵が東西に並んでいるが（日の隈山・早隈山・帯隈山）、これらの山体は脊振山系が隆起する以前の古生層の名残であり、上部の堅い結晶片岩が侵食されずに残ったために、このような形状をなしているものである。特に日の隈山は遠方からも良好に視認でき、律令期には神埼郡の烽火台が置かれていたとされている。

なお、城原川・田手川の両河川流域では、段丘が途切れるあたり、田手川においては標高８mの衣村・伊保戸地区、城原川においては利田・日出来地区付近（標高７m）より南側では扇状地性低地から有明粘土層からなる三角州性低地へと漸移的に移行していくが、前述のとおり現況では旧地形を把握することは難しい。しかし、田手川流域では標高４～５mの地点で弥生時代の遺跡として託田西分貝塚・高志神社遺跡などが、城原川流域では同様に姉遺跡・黒井八本松遺跡など弥生時代中期から後期にかけての遺跡が多く分布しており、河川の蛇行、あるいは有明海の著しい干満差により生じた微高地状の砂礫堆に弥生時代以降の遺跡が立地しているものと考えられる。

２．歴史的環境（Fig.１）

戦場古墳群・戦場ヶ谷遺跡・浦田古墳群・寺ヶ里遺跡が位置する吉野ヶ里段丘を中心とした城原川・田手川流域周辺は、佐賀平野全体においても特に遺跡の分布密度が濃い地域であり、また数的な多寡はあるものの各時代にわたる遺跡が確認されている。ここでは、両河川流域周辺の歴史的環境について時代毎に述べる。

【旧石器時代】 城原川・田手川流域周辺における旧石器時代の生活の痕跡は、神埼町船塚遺跡[1](1)及び東脊振村山古賀遺跡２区[2](2)において確認されている。船塚遺跡では多数の石器群及び集石が検出され、在地系の石器群と共伴して瀬戸内系のナイフ形石器が出土し、山古賀遺跡においても、黒曜石製・サヌカイト製のナイフ形石器が集中して検出されている。この他、東脊振村二塚山遺跡[3](3)や吉野ヶ里遺跡[4](4)においても、ナイフ形石器・台形石器・角錐状石器等が表面採集や後世の遺構への混入により出土している。確認された遺跡数としては未だ少数ではあるが、山麓部より段丘上にわたって、当該期の遺跡が存在している可能性は高い。

【縄文時代】 縄文時代の遺跡のうち、早期のものについては高位段丘から脊振山系の丘陵部に、後期・晩期については中位段丘上、または丘陵裾部から扇状地上の各所で確認されているが、前期・中期については早期の遺跡と重複して若干の遺物が検出されているに過ぎない。縄文時代早期の遺跡としては押型文土器を伴う集石遺構を検出した神埼町志波屋六本松遺跡[5](5)・船塚遺跡・的遺跡[6](6)・切畑遺跡[7](7)・四本黒木遺跡[8](8)など段丘裾部や扇状地上に立地するもののほか、今回発掘調査を行った、「戦場ヶ谷式土器」として学史的に著名な東脊振村戦場ヶ谷遺跡[9](9)を始め、同じく東脊振村山古賀遺跡など段丘尾根上に立地する遺跡もみられる。このほか、戦場ヶ谷遺跡からさらに北に登った標高150m付近の谷部に面した緩斜面や、日の隈山裾部周辺などの数箇所で押型文土器が表採されており、当該期には食料の良好な採集地を求めて、丘陵部・段丘上から扇状地上にかけての各所に小規模なキャンプを営みつつ生活していた情景が想像できる。前期の轟・曽畑式段階の遺物はほぼ早期の遺跡と重複して検出されているものの、格段に出土量は少なく、また、中期についても同様で、志波屋六本松遺跡など、山麓部を中心に阿高式土器の小片が幾らか確認されているのみであることから、その主体は早期の遺跡とは異なる場所に立地していた可能性も考えられる。後期には円形の竪穴住居が志波屋六本松遺跡や東脊振村夕

ヶ里遺跡[10](10)において検出されており、前者は山麓部に、後者は扇状地の扇端部近くに立地する。晩期、特に晩期末の遺跡については、志波屋六本松遺跡において土器棺墓が検出された他、山古賀遺跡１区等の山麓部の遺跡において確認例が増えてきているが、なお資料的には不足している。集落としては、船塚遺跡において晩期後半代に位置付けられる円形の竪穴住居が１棟検出されているのみで実態は明らかでなかったが、今回、工業団地の建設に伴って発掘された寺ヶ里遺跡では縄文晩期末の夜臼式段階の土壙数基と多くの土器片が検出されており、佐賀平野において当該期の集落を確認した例として貴重である。

【弥生時代】 弥生時代には遺跡数が著しく増加し、分布域も拡大する。前期前半に溯る生活遺構は吉野ヶ里遺跡及び千代田町託田西分貝塚[11](11)で検出されているが、集落としてある程度のまとまりを見せ始めるのは前期末以降である。東脊振村西石動Ａ遺跡[12](12)、神埼町切畑遺跡、吉野ヶ里遺跡においては前期末～中期前半にかけて、また少し遅れて中期前半に集落の形成が始まるものとして、東脊振村松原遺跡[13](13)・西前田Ａ遺跡[14](14)・下石動遺跡[15](15)・大曲Ｂ遺跡[16](16)等が挙げられる。このうち、大規模に展開しながら後期まで存続する吉野ヶ里遺跡や松原遺跡等の拠点集落が営まれる一方、中期前半のうちに活動を終える切畑遺跡、大曲Ｂ遺跡、下石動遺跡等がある。またその立地状況については主に標高15m以上の段丘上あるいは扇状地上に占地するが、神埼町川寄遺跡群[17](17)・利田柳遺跡[18](18)、あるいは託田西分貝塚等、標高5.0～7.0m前後の微高地付近に掘立柱建物を中心とした集落が形成される。後期には吉野ヶ里遺跡、松原遺跡等では大規模な環濠を巡らしさらに大きく展開する。中期に形成され後期まで存続する的五本黒木遺跡[19](19)、西前田Ａ遺跡等の集落認められる一方、瀬の尾遺跡(20)、夕ヶ里遺跡等は後期後半より営まれるものである。なお、吉野ヶ里遺跡・松原遺跡・瀬の尾遺跡・夕ヶ里遺跡などの大規模な拠点集落は後期終末に至るまで存続する。

墓地については、前期前半の壺棺墓が山麓部を中心に散在するのみだが、前期後半及び前期末より後期前半にかけて無数の甕棺墓を主体とする墓地が地域を問わず広く分布する。大規模なものとしては、東脊振村三津永田遺跡[20](21)・二塚山遺跡・上峰町五本谷遺跡[21](22)・松原遺跡・瀬の尾遺跡、及び２基の墳丘墓を含んだ吉野ヶ里遺跡があり、これらの墓地のうち、三津永田遺跡からは獣帯鏡・明光鏡など、二塚山遺跡からは青白鏡・獣帯鏡など、松原遺跡［横田遺跡］からは方格規矩鏡など、吉野ヶ里遺跡からは銅剣７本・把頭飾２点など、舶載鏡を含む豊富な青銅製品を始め、多数の副葬品を出土している。また、これに対して前期後半､あるいは中期前半から中期中頃の比較的短期間に造墓を終えるものとして、東脊振村西前田Ｂ遺跡[22](23)・神埼町四本黒木遺跡など、段丘上の平坦地に営まれるものと、神埼町朝日北遺跡[23](24)・志波屋六本松乙遺跡[24](25)等、山裾の痩せ尾根上に位置するものがある。そのほか、沖積地の微高地上に立地する託田西分貝塚・高志神社遺跡[25](26)では中期前半を中心とする甕棺墓・土壙墓群が確認されており、特に高志神社遺跡では汲田期の甕棺墓の副葬品として細形銅剣が出土している。なお、埋葬形態は後期前半の内に甕棺墓から土壙墓・石棺墓へと移行し、その数も減少する。その中でも、東脊振村石動四本松遺跡[26](27)・二塚山遺跡では多数の土壙墓・箱式石棺墓を中心とする墓地であり、石動四本松遺跡では石棺内より連弧文昭明鏡が出土している。

【古墳時代】 古墳時代前期に入ると、墳墓としては東脊振村西一本杉遺跡[27](30)・山古賀遺跡、神埼町朝日ＳＴ06古墳[28](31)等の山麓部、あるいは吉野ヶ里遺跡群等の段丘上に古式の古墳が築造され（３世紀末～４世紀前半)、佐賀県下においては基肄・養父地域（鳥栖・基山地域）と共に最古段階の古墳が確認されている地域であるが、４世紀も後半になると上記の古墳から継続して築造される古墳は認められない。

肥前東部地域における古墳時代の首長墓系列について少し述べれば、４世紀後半から５世紀前半にかけては佐賀平野の中部域である、佐賀地域の佐賀市銚子塚古墳［98m］や西部域である小城・佐賀西部地域において小城

町茶筅塚古墳［56m］、大和町風楽寺古墳［44m］など古式の前方後円墳を初現とする首長墓系譜の形成が始まるが、前者は4世紀末の佐賀市熊本山古墳から5世紀末～6世紀初頭の関行丸古墳まで系譜が連続するのに対し、後者においても5世紀前半の大和町導善寺古墳［60m］を経て5世紀半ばに県下最大の前方後円墳大和町船塚古墳［118m］が築造される。城原川・田手川流域が含まれる神埼・三根地域（旧神埼・三根郡）においてもこれらの動きと連動して、5世紀初頭の瓢箪塚［27m］、5世紀前半の上のびゅう塚［48m］から6世紀前半の稲荷塚古墳［50m］に至る、5基の前方後円墳と円墳1基からなる目達原古墳群(32)が形成される。5世紀から6世紀の前半にかけての佐賀平野の主権は、これら三地域の首長墓系列に集約されると考えられるが、6世紀後半に至っては調査区の南々東0.5kmの段丘上に位置する、神埼町伊勢塚古墳［80m］[29](33)、東脊振村下三津西古墳[30]［53m］(34)の2基の前方後円墳からなる志波屋古墳群の被葬者が、当該期の佐賀平野全体を統括していたものと推定できる。特に伊勢塚古墳は6世紀後半代の肥前東部地域（佐賀県下）における前方後円墳が押しなべて墳長40m以下の小型前方後円墳である中で最大規模を誇り、その石室も玄室・羨道の各壁に2×3m以上の巨石を用いる県下最大級の巨室・巨石墳である。また、6世紀後半代の城原・田手川流域におけるその他の主要古墳についてであるが、まず小型前方後円墳として、神埼町二子山古墳[31][18m](35)・岩田丸山古墳[32][28m](36)、大型円墳として東脊振村松葉1号墳[25m]・2号墳[35m][33](37)が挙げられるほか、東脊振村上石動古墳群(38)中には一辺20mを測る方墳の存在が知られている。こういった大型前方後円墳を頂点として、小型前方後円墳→大型円墳→群集墳といった、墳墓の階層性によって政治・社会体制を具現化する在り方は、その他の肥前東部地域では既に希薄となっており、当該地域が旧来の在り方を最も新しい時期まで堅持していたと言えよう。

さて、今回の発掘調査では5～6世紀の群集墳として27基の小円墳の調査を行ったが、肥前東部地域全体においても神埼町・東脊振村の丘陵部は群集墳の密度が高い地域のひとつである。分布状況から見れば、群集墳の中でも数基からなる古墳群は中位段丘上にも散在して立地するが、集中するのは標高40m以上の高位段丘上から脊振山系南麓の丘陵部であり、今のところ最も高位のものは標高180m付近である。ある意味、その範囲で山麓部にベルト状に分布していると言えるが、中でも今まで発掘調査を行ったものとしては、東から東脊振村石動二本松古墳群[34](39)・石動裏田遺跡[35](40)・運田山古墳群[36](41)・山古賀遺跡・西一本杉遺跡・上三津栗原遺跡[37](42)、神埼町船塚遺跡・花浦遺跡群[38](43)・志波屋六本松乙遺跡・的小渕遺跡[39](44)・朝日遺跡[40](45)・朝日北遺跡・城山遺跡[41](46)・猿嶽古墳群[42](47)・天神尾古墳群[43](48)などが挙げられる。古墳群の形成における特徴的な点としては、築造のピークが5世紀後半代と6世紀後半～7世紀の2時期に分かれ、6世紀前半代が空白期となる点、朝日北遺跡・天神尾古墳群のように7世紀後半代の古墳のみからなる密集型の群集墳を形成する点が指摘できる。同様の状況は戦場古墳群・浦田古墳群の中でも看取され、三養基郡中原町から小城郡小城町付近までを含んだ脊振山系南麓の古墳群で共通して見られる要素と言える。

古墳時代の集落としては、弥生時代後期より引き続いて夕ヶ里遺跡・西前田A遺跡・瀬の尾遺跡等田手川流域を中心に古墳時代前期まで集落が営まれる。群集墳との関連が注目される古墳時代中～後期の集落については、浦田遺跡[44](49)・三津永田東遺跡[45](50)・夕ヶ里遺跡・下石動遺跡で確認されている。特に今回の調査区に隣接する浦田遺跡では27棟の竪穴住居が、また、東南東800mに位置する夕ヶ里遺跡では前期のもの20棟のほか、後期のもの16棟が検出されており、当該期には背面に墓地を控えた段丘上・扇状地上に、集落がある程度間隔をもって散在していた状況が伺える。そのほか生産遺跡としては、早隈山西麓では6世紀後半（陶邑TK43併行期）の須恵器窯である平原須恵器窯跡[46](51)が確認調査（平成6年度町教委実施）により確認されており、県下では表採資料以外の古墳時代の須恵器窯出土資料として重要である。

【奈良・平安時代】 奈良時代には城原川・田手川流域は郷９所を持つ神埼郡に含まれ、吉野ヶ里段丘西側の竹原の集落付近は郡衙跡(52)と推定されている。吉野ヶ里遺跡においても、志波屋三の坪・四の坪地区では、駅屋と関連すると思われる、総柱の高床倉庫を含む多数の堀立柱建物が規則性を持って配置されていた状況が確認され、また、日吉神社裏の段丘を南北にカットする切通しが、駅路跡（肥前西海道）であることが明らかとなった。これらは神埼町日の隈山烽火台跡(53)、東脊振村辛上廃寺[47](54)の存在ともあいまって、当該地が神埼郡の中心地であったことを示唆する。その一方、田手川を挟んで吉野ヶ里段丘と対峙する二塚山段丘上では、段丘南端部に奈良時代寺院塔の塚廃寺[48](55)が築かれる他、奈良期の竪穴住居群及び平安時代前期の大規模な掘立柱建物跡群からなる上峰町坊所一本谷遺跡[49](56)が存在する。

肥前西海道、いわゆる官道は三田川町鳥の隈遺跡[50](57)、吉野ヶ里遺跡の切通しを経て、日の隈山南方の二子地区付近の段丘上を東西に走るが、この官道推定路線からほぼ北方約500mの地点では平成５年度に発掘調査が行われており［熊谷遺跡］[51](58)、約80棟からなる奈良～平安時代の掘立柱建物群が確認されていることから、日の隈山烽火台の管理に関係する施設の可能性が推定されている。

なお、このほか浦田遺跡、下石動遺跡では古墳時代のものと重複して竪穴住居を主体とする集落が形成され、前者は平安時代初頭まで継続するが、肥前東部地域全体の在り方として９世紀前半を境に掘立柱建物を中心とした集落へと移行して行くようである。

平安時代以降、神埼郡はその生産性の高さから皇室領に取り込まれ神埼庄となったが、「長秋記」によれば平忠盛が神埼荘の荘官となり日宋貿易を独占していた様子が見え、神埼町荒堅目遺跡[52](59)、三田川町下中杖遺跡[53](60)などから出土する多数の輸入陶磁器からはその地理的重要性についても窺い知ることができる。平安時代の神埼荘は現在の東脊振村・神埼町のほとんどが含まれるが、その他「石動荘」（安楽寺草創日記）・「三津荘」（門菜記）があったとされ、後者は権現山南麓の三津一帯と考えられる。

なお、平安時代末期には田手川の上流域に山岳仏教寺院、霊仙寺[54]が築かれ、昭和53～54年の発掘調査では経塚・火葬墓等が発見されている。

【中世】 平安時代後期の肥前東部の在地武士団は、その多くが平家側であったが、平家没落後は龍造寺・綾部氏など有力武士団はいずれも源氏側につき、肥前の武士の御家人化が進んだ。神埼荘については、鎌倉時代の初期までは、院がその支配権を主張していたが、承久の乱を経て院の支配が及ばなくなり、文永・弘安の役後には恩賞地として多くの武士団に分け与えられることとなった。

南北朝以降、この地は両勢力の争奪の地となったが、それは南北朝期には南朝方の肥後菊地氏と山浦・原口・石動氏に対する北朝方の少弐氏と高木氏・千葉氏との対立であったり、また室町期・戦国期における肥前守護少弐氏（龍造寺・千葉氏が支援）と九州探題である渋川氏との対立といった構図であった。特に少弐氏は勢福寺城(61)を居城として、肥前地域に進出を図った大内氏と在地の武士団を二分しつつ攻防を繰り返したが、1534年には釼岳城［飯盛城］(62)に陣を構えた大内氏側の陶興房を急襲してこれを破ったとされ、戦地とされた権現山南麓の通称名である「戦場ヶ谷」の由来とされている。その後も豊前大友氏を後楯とする少弐氏と大内氏の支援を受けた龍造寺氏（家兼・隆信）の対立の中で、この地は少弐氏側についた江上氏の支配下にあったが、1570年の今山の戦いにおける敗戦により大友氏が肥前から撤退すると、急速に勢力を伸ばした龍造寺隆信により、その他の在地勢力と同様、勢福寺城の江上氏・綾部城の綾部氏共に龍造寺氏の支配下に下り、近世以降の鍋島家の佐賀領支配に引き継がれることとなった。

この地が在地・外来勢力の両者が入り乱れたせめぎあいの場であったことは、多くの中世城館が存在すること

からも伺い知れ、鎌倉期から南北朝期、室町・戦国期には、中世武士団によって丘陵部は勿論のこと、湿地性の平坦低地においても城館築造が行われる。前者は急峻な山頂部を利用する山城で、前述した神埼町勢福寺城・横大路城(61)・仁比山城(63)、東脊振村羽岳城、上峰町鎮西山城(64)などが挙げられる。後者はその低湿地性を防御機能に活かしたもので、館の周り及びその内部まで水を引き込み堀としている。神埼町姉川城[55](65)・横武城跡[56](66)や千代田町直鳥城跡[57](67)などが挙げられる。また吉野ヶ里遺跡の北墳丘墓周辺には日吉城の存在が知られており、平野部を臨む段丘上という立地状況において、上述の両者とはまた異なった在り方を示している。

3．調査対象区周辺の遺跡について（Fig.2）

今回発掘調査を行った戦場古墳群を始めとした各調査区は、前述したように脊振山系南麓の花崗岩を基盤とする丘陵部と高位段丘とが接する部分に位置しており、侵食の進んだ痩せ尾根と深い谷からなる平坦部の乏しい地形である。確認された遺構は古墳・火葬墓などの墳墓のほか、縄文時代のキャンプサイトが中心となるが、これらの遺構は丘陵尾根上や谷部の緩斜面など占地に適する限られた場所に立地している。周辺の丘陵部では以前にも九州横断自動車道建設や土砂採取に伴って古墳・甕棺墓等が確認されているが、同様に谷部に面した丘陵緩斜面や段丘裾部の僅かな平坦地において、旧石器時代の遺物包含層や古墳時代から古代にかけての集落が検出されている。また、横断道以南は段丘がより低く長く南に伸びるが、その間には大小の扇状地が広がり、両者の起伏が緩やかになることに起因して段丘上・扇状地上共に遺跡の分布する密度が高くなる。この付近は古くは九州弥生時代甕棺墓編年における「三津式」の標識遺跡となった三津永田遺跡を始め、近年でも調査例の増えつつある地区であり、ここでは調査対象区に近接するこれらの調査例及び主要遺跡について簡単に述べる。

浦田遺跡[43] 白京溜池東岸の段丘上に位置する。九州横断自動車道建設に伴って昭和54～55年度に発掘調査が実施され、35軒の竪穴住居跡のほか、掘立柱建物跡６棟、古墳１基、溝１条が検出されている。竪穴住居は６世紀代のもの27軒と奈良末～平安時代初頭のもの８軒の２時期に分かれ、掘立柱建物はいずれも古墳時代のものとされている。竪穴住居ははいずれの時期とも竈を持つものが多いが、後者においてはいずれの住居にも長い煙道を付設する炊き出し口を持つ竈を有している。遺跡の広がりとしてはまだ南北に続くものと推定されることから、100軒以上の住居からなる大集落であるものと思われる。今回調査を行った群集墳と火葬墓の造営時期と重複する点からもその関連性が注目される。

寺ヶ里遺跡[58] 浦田古墳群１区の立地する丘陵の、南に伸びる同一尾根上に位置する。昭和54年度に横断道建設に伴って調査が実施され、古墳１基と土壙３基が確認されている。古墳は径10m弱の円墳で、内部主体は袖石・羨道を有さない長方形の玄室を持つ横穴式石室で７世紀後半に位置付けられる。土壙については骨片が出土したということで火葬墓の可能性も指摘されているが詳細については不明である。調査区ではほかに、縄文時代早期の押型文土器、後期の北久根山式土器が出土している。

戦場遺跡[59] 戦場古墳群６区の立地する同一丘陵の南側に続く尾根の、西側斜面上に位置する。昭和54年度に同じく横断道建設によって調査が行われ、土壙３基、溝２条が検出されている。土壙は倒木痕と思われ、明確な遺構としては確認されなかったが、押型文土器のほか、縄文中期の阿高式土器、晩期の浅鉢・深鉢などが出土している。

船塚遺跡[1] 戦場古墳群６区の立地する丘陵と小河川を挟んだ西側の丘陵部との間に広がる扇状地の東側、段丘裾部付近に立地する。昭和58年度に県営ほ場整備事業に伴い発掘調査が実施され、旧石器時代・縄文時代前期の遺物包含層のほか、縄文時代晩期の竪穴住居跡１軒、古墳４基、古墳時代の竪穴住居跡４軒、古代以降と推定さ

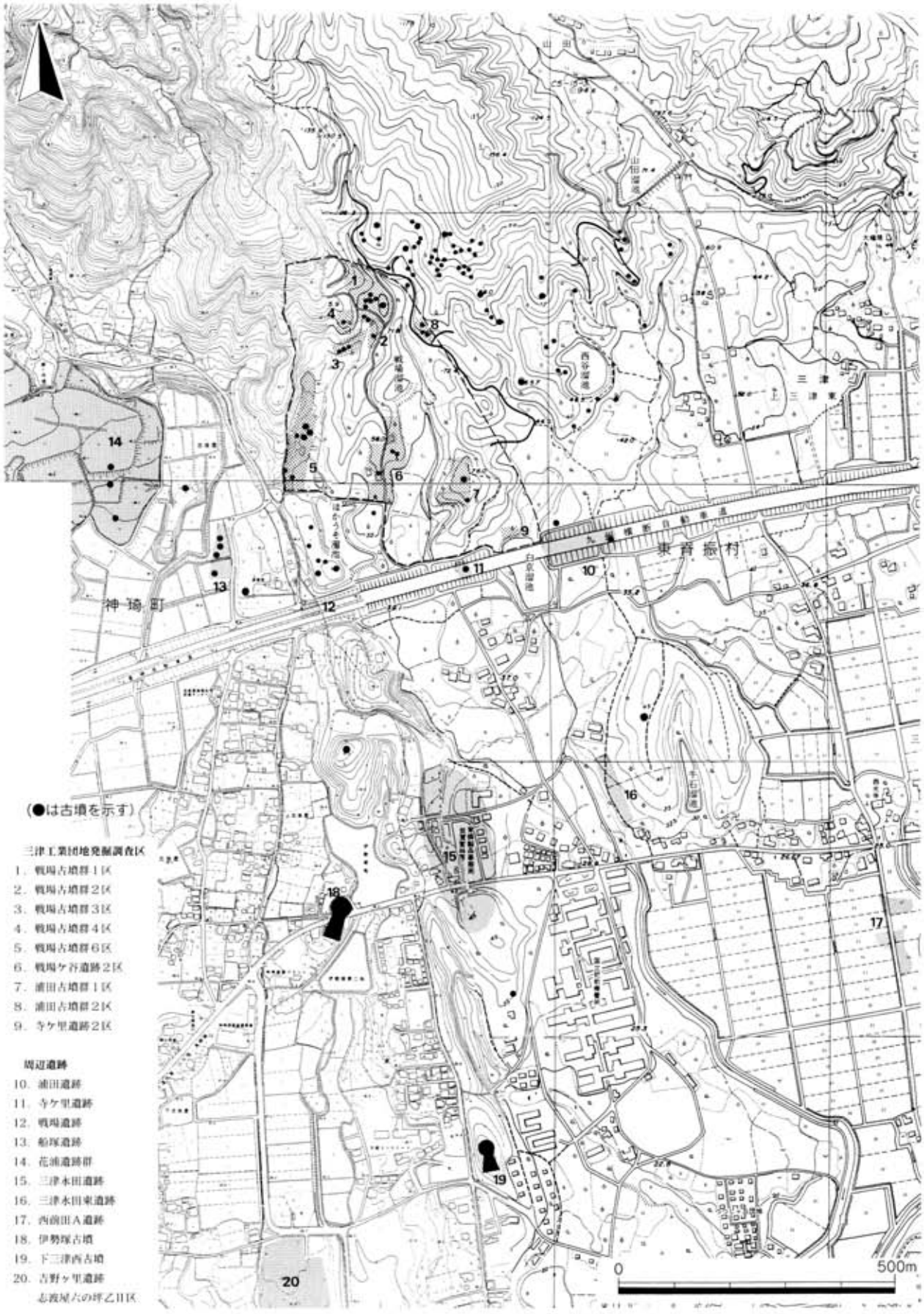


Fig.2　調査区周辺遺跡分布図（1：10,000）

れる掘立柱建物５棟が確認されている。特筆すべきは旧石器時代の遺物包含層であり、約2,300点の石器のほか、８ヶ所で礫群が検出されており、東脊振村山古賀遺跡２区、小城郡三日月町老松山遺跡と共に脊振山系南麓で当該期の遺物包含層を調査した数少ない例の一つである。特に石器組成においては、九州系のナイフ形石器・剥片尖頭器・台形石器と共伴して瀬戸内技法による国府型ナイフ形石器が出土しており、瀬戸内文化の九州への流入時期を考える上で重要である。

花浦遺跡群　戦場古墳群６区の立地する丘陵の西方、船塚遺跡を挟んで対峙する丘陵部全体が含まれる。昭和62年度から平成元年度にかけて土砂採取に伴い発掘調査が実施され、古墳十数基のほか、弥生時代の甕棺墓・石棺墓等多数が確認されている。特筆すべきは県内初の検出例となった古墳時代後期の横穴墓の存在である。横穴墓は標高約80mの丘陵尾根上からやや東に下った斜面に立地しており、３基が確認されている。時期的には６世紀末～７世紀に位置付けられ、横穴墓内からは須恵器・土師器などの供献土器のほか、十数体の人骨が検出された。本横穴墓は花崗岩を刳り貫いて掘り込まれており、花崗岩の脆弱な地盤からなる脊振山南麓には横穴墓は存在しないとの従来の考えに一石を投じることとなった。

三津永田遺跡[20]　戦場古墳群６区の立地する丘陵から南に続く段丘の、東側緩斜面上に立地する。昭和28年に堤防復旧工事の採土地となったことから日本考古学協会等により緊急に発掘調査が実施された。調査区域内では20基の甕棺が検出されたが、全体としては100基以上の甕棺墓・石棺墓・土壙墓からなる墓地であったと考えられる。以前出土したものも含めると、漢鏡７面・鉄刀・鉄鏃・鉄釧・貝釧・ガラス製管玉など豊富な副葬品が多数出土した。また、出土した後期前半に位置付けられる甕棺は「三津式」と呼ばれ、形式編年学上の標準資料となっている。

三津永田東遺跡[29]　浦田遺跡の立地する同一段丘、南側400m離れた西側斜面の段丘裾部に立地する。三津工業団地線・個人住宅建設に伴って平成６・７年度に発掘調査が実施され、６世紀前半に位置付けられる竪穴住居跡６軒が確認されている。また、このほか丘陵裾部を南北に走り、さらに直角に折れて丘陵を東西に縦断するように直線的に伸びる溝１条が検出されており、中世城館に関連する溝の可能性が指摘されている。

西前田Ａ遺跡[14]　工業団地調査区の東側、西光寺川によって形成された扇状地上に立地する。昭和55年度に県営ほ場整備事業に伴って発掘調査が実施され、弥生時代中期初頭から後期、及び古墳時代の集落が確認された。検出された遺構は竪穴住居25軒・掘立柱建物19棟・土壙16基などであるが、中心となる時期は弥生中期中頃であり住居の約半数を占め、掘立柱建物の多くは高床倉庫と推定される。このほか、西光寺川を挟んだ東側200m離れた地点では宅地造成に伴って西前田Ｂ遺跡の調査が行われ、西前田Ａ遺跡と時期的に重複する甕棺墓140基・土壙墓５基・石棺墓２基からなる墓地が確認されている。

伊勢塚古墳[29]　三津永田遺跡の立地する段丘の西側、現在溜池となっている開析谷を挟んで南に伸びる段丘尾根上に、南側に前方部を向けて立地する前方後円墳である。現在、くびれ部に県道が走っているため南北に分断されているが、墳長約80m、後円部径36m、前方部長45mに復元される。前方部は一部墓地に利用されているために墳形の詳細は不明であるが、周溝は持たないようである。墳丘全体で円筒埴輪が確認されており、ほかに人物埴輪の顔の部分も表採されている。内部主体は玄室・羨道の各壁に花崗岩の巨石を用いる単室両袖型の横穴式石室で、石室長16.7m、玄室長3.8m、玄室幅3.2m、玄室天井はドーム状に持ち送り、その高さは4.0mである。須恵器の出土は知られていないが石室構造から６世紀後半でも第３四半期に収まるものと思われる。玄室奥壁の上部には赤色の円文があったとされるが、現在は肉眼では確認できない。６世紀後半の佐賀県下では、墳丘・石室共に卓越した規模を誇る地域首長墓である。

下三津西古墳[30] 三津永田遺跡の立地する段丘がさらに南に伸びた尾根上に立地する。伊勢塚古墳と同様、前方部を南に向ける前方後円墳で、伊勢塚古墳との距離は500mある。平成７年度に重要遺跡確認調査に伴い測量調査が実施され、墳長約53m、後円部径30m、前方部長22m、前方部幅31m、くびれ部幅16mを測る。内部主体は伊勢塚古墳と同じく両袖型の横穴式石室と推定されるが、右壁壁体の２石を残して全ての石材が持ち去られており、形態・規模については詳細不明である。壁体腰石の根固め石などから、伊勢塚古墳とほぼ同じ玄室規模を持ちつつ玄門幅が格段に狭いことから、伊勢塚古墳にやや先行する時期が推定されるが、時期決定できる遺物もなく、伊勢塚古墳と異なり円筒埴輪も見られないこともあり、その前後関係は不明である。

吉野ヶ里遺跡志波屋六の坪乙Ⅱ区[60] 下三津西古墳の西側400m、段丘尾根から一段下った低位段丘上に立地する。工業団地造成に伴い平成６年度に発掘調査が実施され、16世紀代に位置付けられる濠に囲まれた館跡が確認された。館跡は隅丸長方形の環濠で東西二つの屋敷地に分けられ、環濠内からは掘立柱建物数棟のほか、井戸・畑状遺構が検出された。出土遺物としては土師器・瓦質土器・石臼・滑石製石鍋・国産陶器類のほか、中国明代の青磁・白磁などが見られ、環濠の存在・建物配置・出土遺物から戦国時代の館跡と考えられる。このほか、奈良時代の土壙10基、弥生時代の箱式石棺墓が検出されている。

註文献

1）八尋 実　「船塚遺跡」神埼町文化財調査報告書第10集　神埼町教育委員会　1984
2）徳永貞紹・田平徳栄　「山古賀遺跡」『西石動遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書（12）1990
3）石隈 喜佐雄・七田忠昭　「二塚山」佐賀東部中核工業団地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　佐賀県教育委員会　1979
4）七田忠昭他　『吉野ヶ里』神埼工業団地計画に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書　佐賀県教育委員会　1992
5）八尋 実・緒方祐次郎　『志波屋六本松遺跡』神埼町文化財調査報告書第９集　神埼町教育委員会　1983
6）家田淳一　「的遺跡」『志波屋六松乙遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書（13）　佐賀県教育委員会　1991
7）田平徳栄　「切畑遺跡」『切畑遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書（16）　佐賀県教育委員会　1993
8）八尋 実　『四本黒木遺跡』神埼町文化財調査報告書第６集　神埼町教育委員会　1980
9）七田忠志　「佐賀県戦場ケ谷遺跡出土弥生式有紋土器に就いて」『史前学雑誌　六巻二号』1934　史前学会
10）久保伸洋　「夕ヶ里遺跡」『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告1』　佐賀県教育委員会　1983
11）森田孝志・徳富則久　『託田西分員塚』千代田町文化財調査報告書第２集　千代田町教育委員会　1983
12）立石泰久　「西石動遺跡」『西石動遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書（12）　佐賀県教育委員会　1981
13）河野竜介　『松原遺跡７区』東脊振村文化財調査報告書第20集　東脊振村教育委員会　1997
14）岩永政博 編　「西前田遺跡」東脊振村文化財調査報告書第５集　東脊振村教育委員会　1981
15）高瀬哲郎ほか　「下石動遺跡」『下石動遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書（６）　佐賀県教育委員会　1987
16）久保伸洋　『大曲遺跡群Ⅱ』東脊振村文化財調査報告書第９集　東脊振村教育委員会　1985
17）天本洋一　『川寄吉原遺跡』佐賀県文化財調査報告書第61集　佐賀県教育委員会　1981
18）岩永政博　『利田柳遺跡第Ⅲ区』神埼町文化財調査報告書　神埼町教育委員会　1980
19）緒方祐次郎　『的五本黒木遺跡』神埼町文化財調査報告書第11集　1985
20）金関丈夫・坪井清足・金関 恕　「三津永田遺跡」『日本農耕文化の生成』日本考古学協会　1961
21）七田忠昭・木下 巧　「五本谷遺跡」『二塚山　佐賀東部中核工業団地建設に伴う埋蔵文化財調査報告書』　佐賀県教育委員会　1979
22）久保伸洋　『西前田B遺跡』東脊振村文化財調査報告書第6集　東脊振村教育委員会　1982
23）高瀬哲郎ほか　「朝日北遺跡」『朝日北遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書（15）　1992
24）高瀬哲郎ほか　「志波屋六本松遺跡」『志波屋六本松遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書（13）　1991
25）平成９～10年に千代田町教育委員会が確認調査実施。
26）細川金也　『石動四本松遺跡』東脊振村文化財調査報告書第19集　東脊振村教育委員会　1995
27）松尾吉高　「西一本杉遺跡」『西原遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書（３）　佐賀県教育委員会　1983
28）田平徳栄　「朝日遺跡」『朝日北遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書（15）　佐賀県教育委員会　1992
29）神埼町史編纂委員会 編　『神埼町史』　1968
30）細川金也　『平成６・７年度東脊振村内文化財調査報告書』東脊振村文化財調査報告書第21集　東脊振村教育委員会　1997
31）佐賀大学考古学研究会　『概報　二子山古墳』　1981
32）佐賀大学考古学研究会　『概報　岩田丸山古墳』　1981

33) 木下之治ほか　「Ⅵ　古墳」『二塚山　佐賀東部中核工業団地建設に伴う埋蔵文化財調査報告書』　佐賀県教育委員会　1979
34) 小松 譲　「石動二本松古墳群」『西石動遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書（12）　佐賀県教育委員会　1990
35) 徳永 貞紹・藤口 健二 編　『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書７』　佐賀県教育委員会　1989
36) 倉庫建設に伴い東脊振村教育委員会が発掘調査実施。
37) 種浦　修　「上三津栗原遺跡」『西原遺跡』　九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書（３）　佐賀県教育委員会　1983
38) 昭和62年度から平成元年度にかけて土砂採取に伴い、神埼町教育委員会が発掘調査実施。
39) 桑原 幸則　『的小渕遺跡』神埼町文化財調査報告書第61集　神埼町教育委員会　1998
40) 註（28）と同じ
41) 小松 譲ほか　「城山遺跡」『朝日北遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書（15）　佐賀県教育委員会　1992
42) 渋谷 格　『猿嶽Ａ遺跡』『切畑遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書（16）　佐賀県教育委員会　1993
武谷 和彦・川副麻理子　「猿嶽Ｃ・Ｄ遺跡」『切畑遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書（16）　佐賀県教育委員　1993
43) 桑原 幸則　「早稲隈山」神埼町文化財調査報告書第59集　神埼町教育委員会　1997
44) 立石泰久・堤 安信『浦田遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書（３）　佐賀県教育委員会　1983
45) 註（30）と同じ
46) 註（42）と同じ
47) 松尾禎作　「東脊振村辛上廃寺跡の調査」佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告第５輯　1936
48) 松尾禎作　「塔の塚廃寺跡」佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告第７輯　1940
49) 徳富 則久 編　「佐賀県文化財年報１」　佐賀県教育庁文化財課　1996
50) 小松 譲 編　『古代官道・西海道肥前路』　佐賀県教育委員会　1995
51) 註（48）と同じ
52) 八尋　実　『荒堅目遺跡』神埼町文化財調査報告書第12集　神埼町教育委員会　1985
53) 七田 忠昭ほか　『下中杖遺跡』佐賀県文化財調査報告書第54集　1980
54) 田平徳栄　『霊仙寺跡』東脊振村文化財調査報告書第4集　東脊振村教育委員会　1980
55) 河野 史郎　『姉川城跡』神埼町文化財調査報告書第50集　1996
56) 河野 史郎　『横武城跡』神埼町文化財調査報告書第57集　1997
57) 平成６～10年度に千代田町教育委員会が確認調査実施。
58) 堤 安信　「寺ケ里遺跡」『香田遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書（２）　佐賀県教育委員会　1981
59) 堤 安信　「戦場遺跡」『香田遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書（２）　佐賀県教育委員会　1981
60) 徳富　則久 編　『佐賀県文化財年報１』　佐賀県教育庁文化財課　1995

第２章　調査の概要

１．調査に至る経過

三津工業団地造成予定地の位置する東脊振村大字三津字戦場一帯は、昭和60年度より工業用地の適地選定における候補地として挙げられていた地区である。その後、吉野ヶ里遺跡の保存決定による神埼工業団地の縮小に伴う佐賀県東部地域における工業用地の不足から、この地区における事業計画が具体化し、平成３年度より用地買収等の開始、平成６年度の完成を当初の予定として三津工業団地造成計画が策定された。当該地は吉野ヶ里遺跡の立地する段丘（吉野ヶ里段丘）の付け根にあたり、多数の古墳時代の群集古墳や縄文時代研究史上著名な戦場ヶ谷遺跡などが含まれ、神埼郡内においても埋蔵文化財の密度の濃い地域のひとつである。このことから、平成３年度９月に県文化財課と産業開発課は遺跡の保存も含めた文化財調査についての第１回の協議を行い、同年10～12月にかけて埋蔵文化財の分布状況の把握を目的として、県が調査主体となり確認調査を実施した。

確認調査の結果、造成予定地内に古墳101基（未確認推定150基）、遺構15,700㎡の存在が明らかとなり、造成計画における設計変更等も含めて協議を行った結果、古墳50基・古墳～近世の集落5,600㎡、及び表土剥ぎが必要な部分として118,000㎡を調査対象とすることで合意した（発掘調査費総額は178,000,000円）。また調査体制については、村教委が村営住宅・自衛隊官舎建て替え、あるいは土地区画整理事業等に伴う発掘調査の事業量が大きいこともあり、平成４年度は東脊振村教育委員会が調査主体、平成５～８年度は県文化財課が調査主体となり、東脊振村からも調査員が参加することで協力を行うこととなった。

発掘調査は平成５年３月より開始したが、当初の計画では平成５，６年度で発掘調査、７，８年度で整理作業の工程であった。しかし、造成計画における地権者交渉と並行しての調査であることから、買収後ではなく借地による対応であったため、平成６年度後半より調査に着手できない状況が生じ、調査の工程は平成７年度以降にずれ込むこととなった。また、工業団地計画自体も用地買収等の難航から当初計画の見直しが行われ、平成６年12月には全体計画を一期・二期の２期工事に分け、当面は一期工事のみの実施となった。これに伴い、開発面積の減少から発掘調査対象面積についても当初の123,600㎡から59,000㎡となった。また、調査対象地も当初計画から一部変更が行われ、緑地保存としていた戦場ヶ谷遺跡２区（7,000㎡）が対象地に含まれた他、確認調査の結果、新たに平成８年度に寺ヶ里遺跡２区・浦田遺跡２区（計960㎡：村道三津工業団地線新設工事に伴う白京溜池改修工事）、平成９年度に浦田古墳群２区（540㎡：工業団地内道路建設）が本調査対象に加えられ、最終的な調査対象面積は59,300㎡である。また、事業としては当初計画の４ヵ年から、平成10年度までの６ヵ年に延長となった。

５ヵ年にわたる文化財調査では、縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、鎌倉時代の各時代における遺構・遺物が確認された。特に縄文時代早期のものでは石組炉を含む集石遺構と共に、多量の押型文土器・無文土器が出土し、脊振山南麓において当該期の居住地を調査した例として重要である。また、古墳時代の墳墓として、４世紀後半～７世紀後半の径４～18mの小円墳を29基、奈良～平安時代にあたる８世紀後半～末の火葬墓等10基、９世紀前半の土壙墓２基・木棺墓１基を検出しており、古墳時代の古い段階から平安時代前期に至る墓制の変遷について、墓の形態・祭祀などの各方面からの研究を行う上で、貴重な資料を提供したと言えよう。

なお、佐賀県土地開発公社・企業立地課・東脊振村・地権者の方々を始め、関係各位には、埋蔵文化財保護について御理解と多大な御協力を頂きましたことを、深く感謝申し上げます。

2．調査の組織

[発掘調査及び整理作業・報告書作成]

調査主体　佐賀県教育委員会

事務局	[総括]	堤 清行	佐賀県教育長（平成５年度）
		川久保 善明	佐賀県教育長（平成６年度～10年度）
	[局長]	高島 忠平	文化財課長（平成５年度～８年度）
		佛坂 勝男	文化財課長（平成９年度，10年度）
	[次長]	中牟田 賢治	文化財課長補佐（平成５年度）
		田平 徳栄	文化財課長補佐（平成６年度～８年度）
		東中川 忠美	文化財課長補佐（平成９，10年度）
		瀬戸 明廣	文化財課長補佐（平成５～７年度）
		深町 昌司	文化財課長補佐（平成８～９年度）
		園田 義孝	文化財課長補佐（平成10年度）
	[庶務会計]	永松 和久	文化課庶務企画係長（平成５年度）
		岩瀬 茂生	文化課庶務企画係長（平成６年度～９年度）
		津野 建夫	文化課庶務企画係長（平成10年度）
		濱野 清子	文化課庶務企画主査（平成５年度）
		古屋 きよみ	文化課庶務企画主査（平成６年度）
		相川 ミエ子	文化課庶務企画主査（平成10年度）
		鷲崎 義彦	文化課庶務企画主査（平成５年度～平成７年度）
		久保 信行	文化課庶務企画主査（平成７年度～10年度）
		吉村 俊也	文化課庶務企画主事（平成８年度～10年度）
		池田 学	文化課庶務企画主事（平成５年度）
		毎熊 近	文化課庶務企画主事（平成10年度）
		富窪 道代	文化課庶務企画主事（平成７年度～９年度）
	[調査担当]	天本 洋一	文化財課指導係長（平成５年度）
		西田 和己	文化財課指導係長（平成６年度～10年度）
		松尾 法博	文化財課主査（平成７～８年度）
		小松 譲	指導主事（平成６年度）
		細川 金也	文化財保護主事（平成５年度）
		市川 浩文	文化財保護主事（平成６年度～10年度）
	（東脊振村教育委員会）		
		松尾 法博	主　査（県派遣：平成４～６年度）
		細川 金也	主　事（県派遣：平成６～８年度）
		樋口 秀信	文化財係長（県派遣：平成７～９年度）

３．調査の概要

（１）調査区の設定について

調査にあたっては、現地踏査及び確認調査によって遺構の存在が確認された地区については本発掘調査を要する範囲として設定し、また地形的に遺構の存在する可能性が極めて低い地区、あるいは現況で土砂採取・蜜柑園造成等により旧地形が著しく損なわれていると推定される地区については調査対象地から除外した。しかし、前述したとおり、調査対象地は起伏の大きい丘陵地であり、丘陵尾根から斜面については削平により、あるいは谷部においては流土が厚く堆積していることから旧地形がかなり改変されている。特に調査区のほぼ全面が蜜柑園となっているため、ある程度規模の大きな古墳については現況でも残欠が視認できるが、小規模・低墳丘のものについては全く確認できないものが多く存在するものと推定されていた。これらの遺構を確認調査によって検出することは非常に困難であることから、現況で、あるいは確認調査で遺構の存在が確認できなかった地区でも、地形的にその可能性が考えられる場合には、全面についての表土剥ぎ、あるいはより密度の高いトレンチ調査によって遺跡の有無について確認を行った。

また、調査区の区割りについては公共座標を基に調査区全体に任意のグリッドを設定した。グリッドの設定にあたっては調査区の南西にあたる、Ｘ＝38800.00(m)・Ｙ＝－57600.00(m)の地点を０として、Ｘ軸については北側に向かって00，01，02，03・・・と、またＹ軸については東側に向かってアルファベット順にAA，AB，AC・・・AZ、BA，BB，BC・・・BZ，CA，CB，CC・・・CZとして、一辺10m区画の方眼を組んでいる。調査にあたってはこのグリッドを基本とし、さらにこれを一辺２m四方からなる25の小区画に分け、南東隅を０として、一段目を東から西に１，２，３，４，５、二段目を同じく東から西に６，７，８・・・と並べ、北西隅を25とした。

（２）発掘調査の概要

調査にあたっては、前述のとおり、確認調査の結果遺跡の存在が確認され、本発掘調査が必要と判断された地区（計　２６,８００㎡）の他、確認調査では遺構は確認されなかったものの、地形的に遺跡の存在が予想されることから、全面的に表土剥ぎを実施し、遺構・遺物の有無について精査を行う必要がある地区（計　２７,３００㎡）、遺跡の存在する可能性はより低いものの、トレンチ調査によって遺構・遺物の有無について確認を行う必要がある地区（計　５,２００㎡）に区分され、これらを合わせた総調査面積は５９,３００㎡である。以下に地区毎に概要を述べる。

①本発掘調査実施地区（計　２６,８００㎡）

Ⅰ 戦場古墳群１区　【調査対象面積】４,８００㎡　【調査期間】平成５年３月、７月～平成６年３月

【遺跡の内容】［検出遺構］縄文時代早・前期の遺物包含層・花弁状石組炉を含む集石遺構１１基、弥生時代前期の甕・壺棺墓５基、古墳時代中期～後期の古墳８基、奈良～平安時代の火葬墓・集石遺構４基

［出土遺物］縄文時代早・前期の土器・石器、弥生時代前期の壺・甕棺、古墳時代の須恵器・土師器・鉄製品（鉄鏃・馬具〔轡・雲珠・鐙〕）・ガラス小玉、奈良時代の土師器・鉄製品（刀子）

Ⅱ 戦場古墳群２区　【調査対象面積】８４０㎡　【調査期間】平成５年７月～平成６年３月

【遺跡の内容】［検出遺構］古墳時代中期の古墳１基　　［出土遺物］古墳時代の土師器・鉄製品（鉄鏃）

Ⅲ 戦場古墳群３区　【調査対象面積】２,１００㎡　【調査期間】平成５年７月～平成６年３月

【遺跡の内容】［検出遺構］古墳時代中期～後期の古墳３基、奈良～平安時代の火葬墓・集石遺構２基

Fig.3　調査区周辺地形図（アミかけは本発掘調査実施地区、1：3,000）

［出土遺物］古墳時代の土師器・鉄製品（鉄刀・鉄鏃・刀子）・奈良時代の須恵器

Ⅳ 戦場古墳群４区　【調査対象面積】８２０㎡　【調査期間】平成５年７月～平成６年３月

【遺跡の内容】［検出遺構］古墳時代後期の古墳１基　　［出土遺物］なし

Ⅴ 戦場古墳群６区　【調査対象面積】６,８００㎡　【調査期間】平成６年４月～10月

【遺跡の内容】［検出遺構］縄文時代早～中期の遺物包含層、弥生時代前期の支石墓１基、弥生時代後期の青銅製鋤先出土遺構１基・不明遺構１基、古墳時代後期の古墳５基・時期不明の古墳１基（周溝のみの確認）、奈良～平安時代の火葬墓４基・祭祀遺構１基

［出土遺物］縄文時代早・中期の土器・石器、弥生時代前期・後期の土器、弥生時代の青銅製鋤先、古墳時代の須恵器・土師器・鉄製品（銀象嵌刀装具・鉄鏃・馬具〔轡・雲珠・鐙・鞍金具・飾金具〕・弓付属金具）・耳環、奈良～平安時代の須恵器・土師器・土製品（土馬・人形・鏡形等）、近世の陶磁器・銭貨（寛永通宝ほか）

Ⅵ 戦場ケ谷遺跡２区　【調査対象面積】９,０４０㎡　【調査期間】平成５年７月～12月（A区）、平成７年２月～５月（B・C区）、平成９年４月～８月（D区）

【遺跡の内容】［検出遺構］縄文時代早期の遺物包含層・花弁状石組炉を含む集石遺構９基、弥生時代前期の不明遺構１基、古墳時代後期の古墳２基・時期不明の古墳１基（周溝のみの確認）、奈良～平安時代の木棺墓１基・土壙墓２基

［出土遺物］縄文時代早期の土器・石器、弥生時代前期の土器、古墳時代の須恵器・土師器・鉄製品（鉄鏃・馬具〔鐙・飾金具〕・弓付属金具・釘）・ガラス小玉、奈良～平安時代の土師器・鉄製品（刀子・釘）、近世の陶磁器・銭貨（寛永通宝）

Ⅶ 浦田古墳群１区　【調査対象面積】１,２００㎡　【調査期間】平成６年１月～８月

【遺跡の内容】［検出遺構］縄文時代早期の遺物包含層・土壙、古墳時代前期の方形周溝墓２基、古墳時代後期の古墳２基、時期不明の土壙墓１基

［出土遺物］縄文時代早期の土器・石器、古墳時代の須恵器・土師器・鉄製品（鉄鏃・鉄剣・鉄鉾・鉄鑿・馬具〔轡・鐙・辻金具・飾金具〕・弓付属金具・不明青銅品）・ガラス小玉・切子玉、近世の陶磁器・土師器・銭貨（寛永通宝）

Ⅷ 浦田古墳群２区　【調査対象面積】５４０㎡　【調査期間】平成９年９月～12月

【遺跡の内容】［検出遺構］縄文時代早～中期の遺物包含層・集石遺構２基、古墳時代中期～後期の古墳３基

［出土遺物］縄文時代早～中期の土器・石器、古墳時代の須恵器・土師器

Ⅸ 寺ケ里遺跡２区　【調査対象面積】６６０㎡　【調査期間】平成８年11月～平成９年１月

【遺跡の内容】［検出遺構］縄文時代終末期～弥生時代前期初頭の土壙７基、平安時代前期初頭の竪穴住居跡１棟、鎌倉時代の掘立柱建物跡２棟・柵列１条

［出土遺物］縄文時代終末期～弥生時代前期初頭の土器・石器、平安時代前期初頭の土師器・鉄製品（刀子）、鎌倉時代の青磁

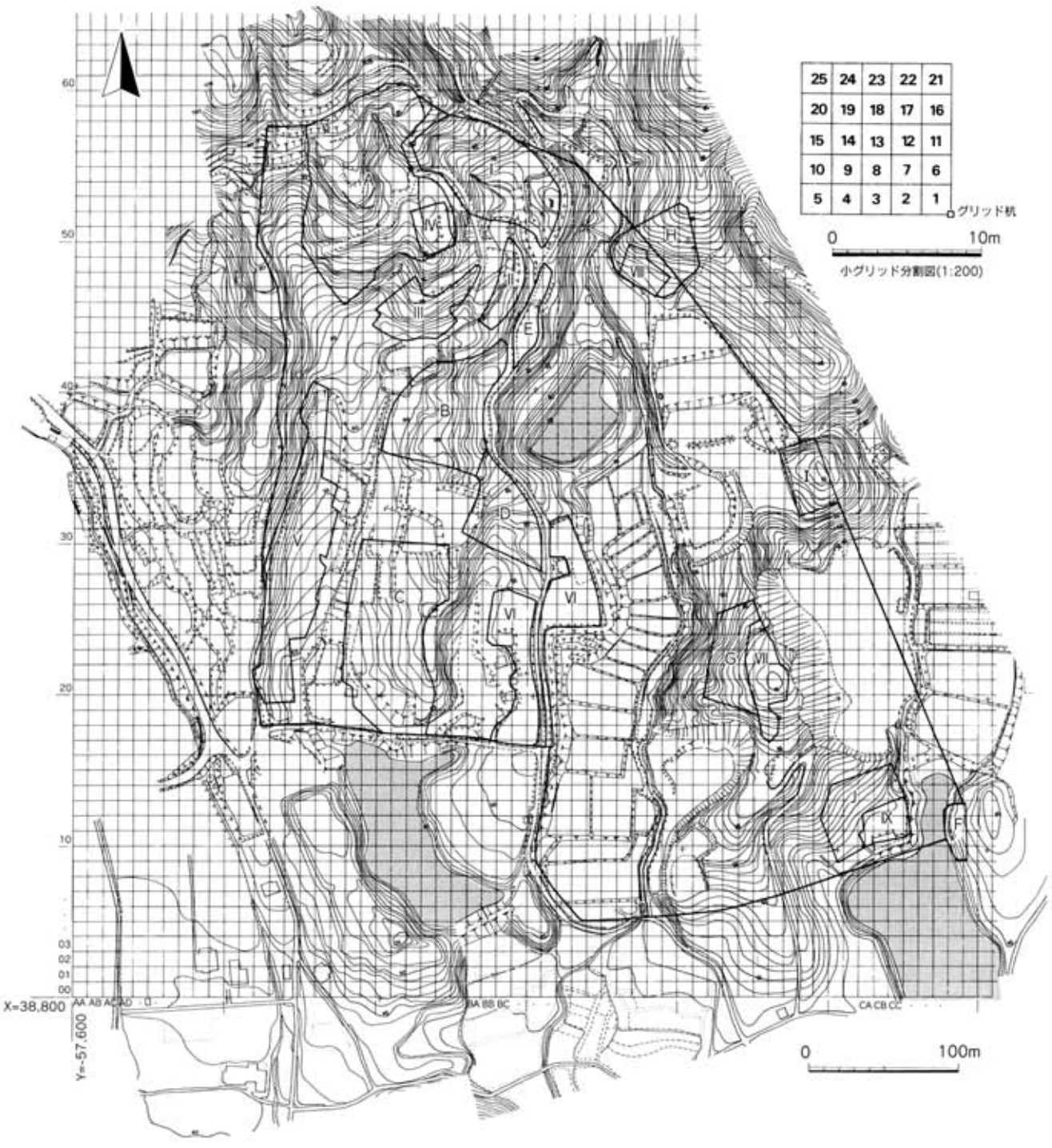
②表土剥ぎ実施地区（計　２７,３００㎡）

Ａ 戦場古墳群１区　【調査対象面積】８,６００㎡　【調査期間】平成５年７月～平成５年12月

【調査の内容】遺構・遺物なし

Ｂ 戦場古墳群５区　【調査対象面積】５,０００㎡　【調査期間】平成５年７月～平成５年12月

【調査の内容】遺構・遺物なし



○本調査実施地区

番号	地区名	番号	地区名
I	戦場古墳群1区	VI	戦場ケ谷遺跡2区
II	戦場古墳群2区	VII	浦田古墳群1区
III	戦場古墳群3区	VIII	浦田古墳群2区
IV	戦場古墳群4区	IX	寺ケ里遺跡2区
V	戦場古墳群6区		

○表土剥ぎ実施地区

番号	地区名
A	戦場古墳群1区
B	戦場古墳群5区
C	戦場古墳群5区
D	戦場古墳群5区
E	戦場ケ谷遺跡1区
F	浦田遺跡2区

○確認調査実施地区

番号	地区名
G	浦田古墳群1区
H	浦田古墳群2区
I	浦田古墳群3区
J	寺ケ里遺跡2区

Fig.4　調査対象地地区割図（1：4,000）

C 戦場古墳群５区　【調査対象面積】８,５００㎡　【調査期間】平成５年７月～平成５年12月
【調査の内容】須恵器・土師器小片出土、遺構なし
D 戦場古墳群５区　【調査対象面積】３,４００㎡　【調査期間】平成５年７月～平成５年12月
【調査の内容】遺構・遺構なし
E 戦場ケ谷遺跡１区　【調査対象面積】１,５００㎡　【調査期間】平成５年７月～平成５年12月
【調査の内容】遺構・遺物なし
F 浦田遺跡２区　【調査対象面積】３００㎡　【調査期間】平成９年９月～平成９年12月
【調査の内容】土師器小片出土、遺構なし
③トレンチ調査実施地区（計　５,２００㎡）
G 浦田古墳群１区　【調査対象面積】１,３００㎡　【調査期間】平成６年１月～平成６年８月
【調査の内容】遺構・遺物なし
H 浦田古墳群２区　【調査対象面積】１,０００㎡　【調査期間】平成９年９月～平成９年12月
【調査の内容】遺構・遺物なし
I 浦田古墳群３区　【調査対象面積】９００㎡　【調査期間】平成９年９月～平成９年12月
【調査の内容】須恵器・土師器小片出土、遺構なし
J 寺ケ里遺跡２区　【調査対象面積】２,０００㎡　【調査期間】平成８年７月～平成８年８月
【調査の内容】弥生土器小片出土、遺構なし

（３）古墳時代須恵器の編年的位置付けについて

本調査区では古墳29基を確認しているが、このうち浦田古墳群１区より検出された周溝墓を除く27基は５世紀後半から７世紀後半の時期幅を持ち、その多くが須恵器・土師器を伴っている。これら各古墳の時期的な位置付けには須恵器の検討が最も有効であるため、遺構・遺物の概要を述べるに先立ち、本報告で扱う須恵器編年について、ここで整理を行うこととする。

脊振山南麓に現在までに知られている古墳時代の須恵器窯跡は、神埼町の平原須恵器窯跡群[1]（小田編年ⅢＢ・ⅢＣ期相当？）、あるいは佐賀市神籠池窯跡などが知られているに過ぎず、またこれらは発掘調査も実施されていない。よって当地域における須恵器編年については小田富士雄氏による北部九州須恵器編年[2]、または田辺昭三氏[3]・中村浩氏[4]による陶邑編年をそのまま援用、あるいは出土須恵器の型式分類を行った上での援用が行われるのが常である。よって本報告では出土須恵器のうち、特に杯蓋・杯身について先行研究をもとに分類のうえFig.5のとおり編年表を作成し、その時期的な区分としてＩＡ～Ⅷ期の12期を設定した。なお本調査区で出土した須恵器は６世紀後半～７世紀に集中するため、その他の時期の補完資料として調査対象区に隣接し、当該古墳群の造営主体と推定される、浦田遺跡[5]・三津永田東遺跡[6]の住居跡出土資料についても加えている。以下に各時期の特徴を述べる。

Ⅰ期　杯蓋の天井部と口縁部の境が明瞭で、鋭く突出して稜を作る。天井部はヘラケズリを入念に行い平坦であるのに対し、口縁部は真っ直ぐ下方に伸び、端部端面には沈線を巡らす。杯身の底面も同様にヘラケズリが入念で、かえりの立ち上がりは高く、受部の端部は鋭い。全体的にシャープな作りである。187-22,23は浦田古墳群２区ＳＴ022の周溝内で壺・把手付き碗と一括で出土したもの。杯蓋の口径は11.2cm、杯身は10.0cm。

Ⅱ期　ⅡＡ期としたものは、杯蓋の天井部、杯身の底部のそれぞれが丸みを持ち、口径に対し器高が高くなるも

の。口径はそのものは前代と大きく変わらず、杯蓋は12.5cm、杯身は10.5cmと大型化に至っていない。杯蓋天井部と口縁部の境は鋭い稜から段へと変わる。本調査区で出土例はなく、浦田遺跡及び三津永田東遺跡住居跡例を挙げている。これに後出するもの（ⅡB期）として、より大型化の傾向を示しつつ、受部の立ち上がりが長く直線的で古相を示す段階があるものと思われるが、古墳からの出土例はみられず、ここでは浦田遺跡出土例を示す。

Ⅲ期　杯蓋はかえりを持たず、杯蓋の天井部と口縁部の境が不明瞭で、天井部外面のヘラケズリを口径の2/3以上施すもの。天井部と口縁部の境は時期が下るにつれてより明瞭さを欠き、一体化するものと思われ、退化した段を伴うもの（ⅢA期）、鈍い沈線を伴うもの（ⅢB期）、段・沈線が消失し、緩やかに湾曲するもの（ⅢC期）へと変化する。また、口縁部端部もⅢA・ⅢB期には端面、あるいは段を持ち古相を示すが、ⅢC期段階では丸く収められる。口径はⅢA期、ⅢB期で15cm前後、ⅢC期で13cm前後と少しずつ小型化の傾向にある。杯身も同様にⅢA期に口径が最も大きくなり、以後小型化がみられるほか、受部の立ち上がりの長さがⅢA期では1.0cmであるが、次第に短くなる傾向にありⅢC期では0.5～0.7cm程である。しかし、立ち上がりが直線的に伸びる様子はⅢ期を通じて基本的に変わらず、外反ぎみになるⅣ期との違いがみられる。

Ⅳ期　杯蓋は口径12cm前後と前段階より小さくなり天井部のヘラケズリの範囲もより狭くなる。天井部と口縁部の境はほとんどみられない。杯身も口径10.5～11cmと小型化するほか、立ち上がりはより短くなり、さらに外反する点がⅢ期と異なる。

Ⅴ期　杯身にかえりを持つセットでは最も小型化し、杯蓋は口径11cm前後、杯身は口径10.5cm前後。それぞれの外面はヘラケズリを行わずヘラ切り離しのみで、ナデで仕上げる。新たにかえりを持つ杯蓋がみられ、天井部外面には擬宝珠形のつまみが付く。受部の立ち上がりは受部より下方に伸びる。同種の杯蓋ではこの段階が最も口径が小さいものと思われ、90-197は口径9.4cm。

Ⅵ期　杯蓋と杯身は完全に逆転し、かえりと擬宝珠様つまみを持つ杯蓋が主体となる。受部の立ち上がりはわずかで、受部とほぼ同じ高さである。同種の杯身は高台を持つものと持たないものがあり、高台は断面方形で高い。110-284,288、及びより小型の110-278,286は戦場古墳群6区ST040からの一括出土資料であり、法量の異なる2者が併存していたものと思われる。杯蓋の口径は284が11.2cm、278が9.1cm、杯身は288が12.0cm、286が10.0cm。

Ⅶ期　杯蓋・杯身が大型化するとともに、杯蓋のつまみとかえりに変化がみられる。つまみは扁平化してボタン状つまみとなり、受部の立ち上がりは短く、口縁部より内側に収まる。ただし、かえりが退化して非常に短いもの（90-191）と、以前はっきりと受部を形作るもの（116-318）がみられる。杯身は高台を伴うもののほか、高台を持たないものもあるが、器の底面がより平坦になる点で前段階（Ⅵ期）と区別できるかと思われる。

Ⅷ期　杯蓋はかえりが消失し、端部を下方につまみ出すように折り曲げるのみとなる。また体部が扁平ぎみになり、つまみも前段階と同様ボタン状になるが116-319のようなまだ高さを保つものもある。杯身は1点のみの確認であるが、口径に対して深さが増し、直線的に開く体部となる。高台は低く、外方に開く。杯蓋の口径は145-163が11.2cm、116-321,320が14.4cm、116-319が16.7cm杯蓋。

註文献

1）桑原 幸則　『早稲隈山』神埼町文化財調査報告書第59集　神埼町教育委員会　1997
2）小田 富士雄　「筑前における須恵器の編年」『塚の谷窯跡群』八女市教育委員会　1969
　小田 富士雄　「九州の須恵器」『世界陶磁全集2　日本古代』
3）田辺 昭三　『陶邑古窯址群Ⅰ』（『平安学園研究編集』）　1966ほか
4）中村 浩　『和泉陶邑窯の研究―須恵器生産の基礎的考察―』　柏書房　1981ほか
5）立石泰久・堤 安信『浦田遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書（3）　佐賀県教育委員会　1983
6）細川金也　『石動四本松遺跡』東脊振村文化財調査報告書第19集　東脊振村教育委員会　1995

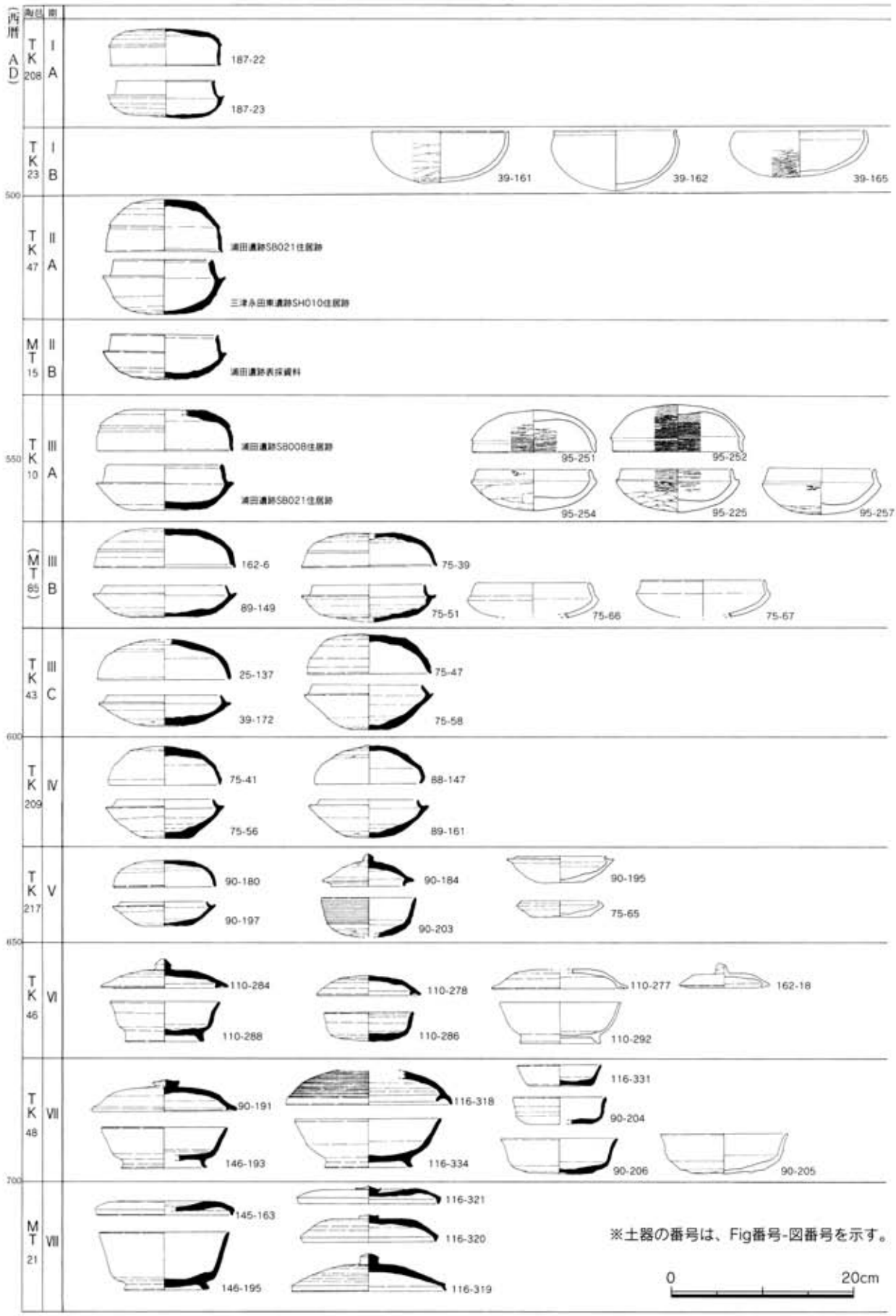


Fig.5　出土古墳時代須恵器・土師器編年表（1：6）

第３章　調査の内容

Ⅰ．戦場古墳群１区の遺構と遺物

１．遺跡の概要（Fig.6）

戦場古墳群１区は工業団地開発対象範囲の最も北にあたり、北方から南方に伸びる丘陵尾根頂部に古墳１基（ＳＴ001）が立地し、それと対峙して伸びる西側尾根上（戦場古墳群４区）との間の谷部に古墳７基他の遺構が所在する。この谷部は、現在ほかうそ溜池となっている戦場古墳群６区南方の谷部から続くものであり、戦場古墳群３区付近で分岐して北東方向に向かって細く深い谷となって伸びるが、１区のあたりでは傾斜の緩やかな凹地となり、ちょうど、谷を登りきった谷頭に当調査区が立地していると言える。標高は最高所で78m、谷部の最も深い所の現況は68m付近にあたり、古墳７基他の遺構が集中するのは標高69～75mの緩斜面上である。ただし、調査を進めていたところ、ＳＴ004・005・007・008・020古墳とやや空間を空けて所在するＳＴ002・009古墳の間で埋没していた狭い谷が確認されたことから、本来は前述の谷が続いて伸びていたことが明らかとなり、これら７基の古墳は地形的には谷部の東西斜面に分かれて別々の支群を形成していたものと考えられる。

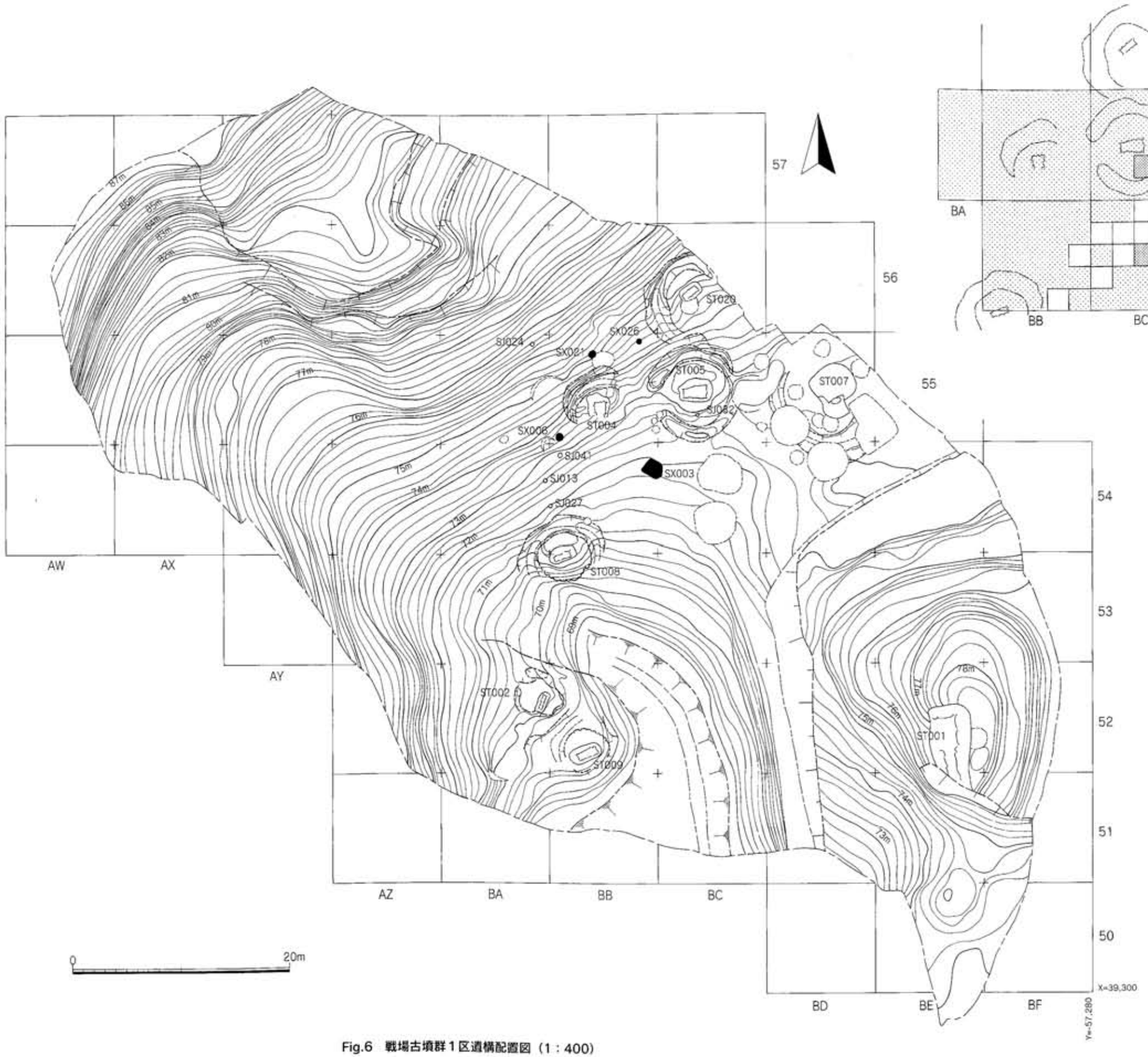
調査前の現況は全面が蜜柑園であり、ＳＴ001については蜜柑園造成、及び東側に接して走る農道建設の際に四方から掘削を受けて旧状を大きく損なっているものの、石室壁体の約1/3のみが遺存して露出していたため、その存在が知られていた。しかしその他の遺構は谷部への流土によって埋没し、さらに蜜柑園造成によって地形的な改変を受けていたため、確認調査前までその存在については不明であった。しかし平成３年度に実施された工業団地建設地全域を対象とした確認調査では、この谷部において石棺系石室１基（ＳＴ002）と縄文時代早期の遺物包含層が確認されたことから、丘陵上の古墳以外に、谷部においても古墳時代の群集墳と縄文時代早期のキャンプサイトの存在が予想された。この結果を受けて、約4,800㎡を対象に平成４年度（東脊振村教育委員会が調査主体）及び平成５年度に発掘調査を実施した。

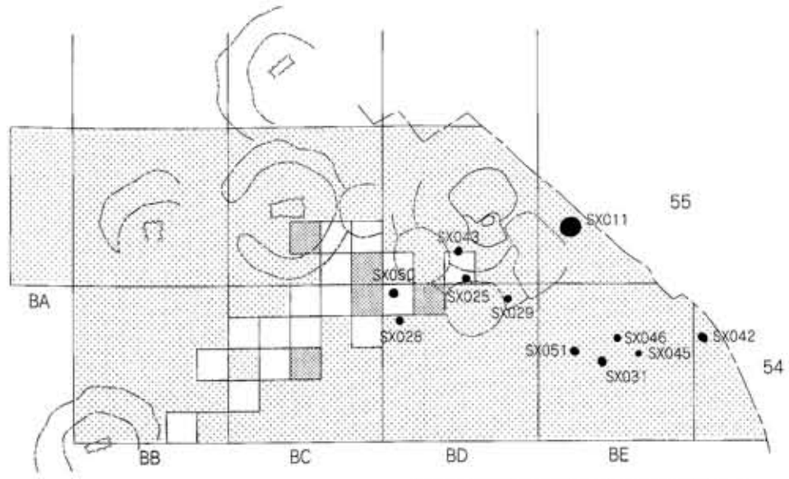
発掘調査の結果、弥生時代前期前半の甕・壺棺墓５基、古墳８基、奈良時代から平安時代前期にかけての火葬墓を含む集石遺構４基の他、縄文時代早期から前期にかけての遺物包含層約800㎡が確認された。またこの遺物包含層中からは縄文時代早期と推定される集石遺構11基が検出されており、縄文土器研究史上、著名な戦場ヶ谷遺跡周辺において、当該期の生活遺構を初めて確認できた例として重要である。以下に遺構毎の概要を述べる。

２．縄文時代の遺構と遺物

（1）土層及び遺物の分布状況（Fig.7～9）

調査区内の北東側、ＳＴ004・005・007古墳が分布する緩斜面を中心として縄文時代早期から前期にかけての遺物包含層が約800㎡の範囲で確認された。地形的には谷を登りきった谷頭にあたり、また調査区背面の丘陵斜面とＳＴ001が立地する南側尾根頂部との間の鞍部にもなっている。遺物包含層は谷部に面した緩斜面上に堆積しており、大きく見ればかなり急な斜面によって囲まれた窪地のような空間と言える。土層の堆積状況はシンプルであり、表土である蜜柑園の耕作土（Ⅰ層）下に黄褐色粘質土からなる遺物包含層（Ⅲ層）が厚さ30～150cm、平均50cm程度で広がっている。この包含層は同時に弥生時代以降の地山となっており、弥生時代の甕・壺棺墓、古墳などはこの黄褐色粘質土に掘り込まれて構築されている。ただし、古代の火葬墓は弥生時代以降にこの黄褐色粘質土上に形成された腐食質土性の黒褐色粘質土（Ⅱ層）上に造られている。





縄文時代早期・前期遺物出土状況(1:400)

土器・石器出土頻度

100点~

50~99点

0~49点

Fig.6 戦場古墳群1区遺構配置図（1：400）

Tab.1　戦場古墳群１区遺構一覧表

遺構番号	種　別	形　態　及び　特　徴	規　模 (長さ×幅×深さ):m	主軸方位	出土遺物	時代・時期
ＳＴ００１	古墳	墳形不明（横穴式石室）	規模不明	Ｓ－10°－Ｅ	須恵器（杯･蓋･短頸壺･提瓶？） 鉄器（轡･雲珠･鐙）、ガラス小玉	古墳後期（6C3/4）
ＳＴ００２	古墳	円墳（石棺系竪穴式石室）	径　7～7.5m	Ｓ－23°－Ｗ	なし	古墳中期（5世紀後半）
ＳＸ００３	火葬墓	方形の集石	一辺1.6～1.7m	—	蔵骨器（土師器椀･皿･蓋）、鉄刀子	奈良～平安（8世紀末）
ＳＴ００４	古墳	円墳（横穴式石室）	径　5.5m	Ｓ－20°－Ｅ	須恵器（杯・長頸壺）	古墳後期（7世紀後半）
ＳＴ００５	古墳	円墳（横穴式石室）	径　7.5m	Ｓ－85°－Ｗ	土師器（杯）	古墳中期（5世紀後半）
ＳＸ００６	火葬墓	円形の集石	径　0.8m	—	蔵骨器（土師器鉢･蓋）	奈良（8世紀後半）
ＳＴ００７	古墳	円墳（竪穴系横口式石室）	径　9　m	Ｎ－29°－Ｗ？	土師器（杯）･鉄器（刀子･鏃）	古墳中期（5世紀後半）
ＳＴ００８	古墳	円墳（竪穴系横口式石室）	径　6.5m	Ｓ－72°－Ｗ	なし	古墳中期（5世紀後半）
ＳＴ００９	古墳	円墳（竪穴系横口式石室）	径　5.3m	Ｓ－43°－Ｗ	なし	古墳中期（5世紀後半）
ＳＸ０１１	集石遺構	花弁状石組炉	径　0.7m	－	なし	縄文時代早期
ＳＪ０１３	甕棺墓	楕円形掘り込みと甕破片	0.9×0.85×0.1	－	弥生土器（甕）	弥生前期前半
ＳＴ０２０	古墳	円墳（石棺系竪穴式石室）	径　13～14m	Ｓ－50°－Ｗ	須恵器（短頸壺・鉢）	古墳中期（5世紀後半）
ＳＸ０２１	集石遺構	不定形の集石	1.0m	－	鉄製刀子	奈良～平安（8世紀後半）
ＳＪ０２４	甕棺墓	浅い掘り込みと甕破片	1.0×0.55×0.15	－	弥生土器（甕）	弥生前期前半
ＳＸ０２５	集石遺構	不定形の集石	径　約1.2m	－	なし	縄文時代早期
ＳＸ０２６	集石遺構	楕円形掘り込み、集石有り	0.8×0.7×0.2	－	なし	奈良～平安（8世紀後半）
ＳＪ０２７	壺棺墓	楕円形掘り込みと壺破片	0.5×0.4×0.05	－	弥生土器（壺）	弥生前期前半
ＳＸ０２８	集石遺構	花弁状石組炉	径　0.5m	－	なし	縄文時代早期
ＳＸ０２９	集石遺構	不定形の集石	径　約1.0m	－	なし	縄文時代早期
ＳＸ０３１	集石遺構	花弁状石組炉	径　1.0m	－	なし	縄文時代早期
ＳＪ０３２	壺棺墓	楕円形掘り込みと壺破片	0.65×0.47×0.2	－	弥生土器（小型壺・大型壺）	弥生前期前半
ＳＪ０４１	甕棺墓	甕破片のみ	－	－	弥生土器（甕）	弥生前期前半
ＳＸ０４２	集石遺構	花弁状石組炉	径　0.7m	－	なし	縄文時代早期
ＳＸ０４３	集石遺構	不定形の集石	径　約1.2m	－	なし	縄文時代早期
ＳＸ０４５	集石遺構	不定形の集石	径　約0.7m	－	なし	縄文時代早期
ＳＸ０４６	集石遺構	不定形の集石	径　約1.2m	－	楕円押型文土器2点	縄文時代早期
ＳＸ０５０	集石遺構	花弁状石組炉	径　0.5m	－	なし	縄文時代早期
ＳＸ０５１	集石遺構	花弁状石組炉	径　0.8m	－	なし	縄文時代早期

縄文時代早期から前期にかけての遺物を含んだこの黄褐色粘質土は、花崗岩の風化土壌と黄砂等の風積土からなっており、工業団地調査区内のみならず、脊振山地南麓における当該期の遺物を多く包含する層として広く分布している。今回、戦場ケ谷遺跡２区において確認された黄褐色粘質土層について火山ガラス分析を行ったところ、微量ながら、ＡＴ（姶良丹沢）火山灰、アカホヤ（鬼界カルデラ）火山灰が検出されており、旧石器時代から縄文時代前期にかけて、こういった火山灰や黄砂等を取り込みながら次第に厚く堆積していったものであろう。しかし、発掘調査段階では土層断面観察、あるいは平面観察においてこの層中の生活面を押さえることは極めて困難であった。特にこの戦場古墳群１区においては11基の集石遺構を確認したが、その遺構に伴う生活面については、土の違いを肉眼観察で識別することが出来なかったことから、本来は数面にわたるであろう時期毎の遺構面についてはほとんど把握できなかったのが現状である。また遺物の分布状況も、後述するように二次堆積によって新旧の遺物が混在し、層位的にも上下に区分できない状態であることから、遺物の分布状況によって生活面を押さえることも不可能であった。なお、この遺物包含層下には、粘性の乏しい黒褐色砂質土層（Ⅳ層）が確認されているが、これはほぼ遺物包含層下の全域で見られる安定した層である。この黒褐色砂質土層は戦場ケ谷遺

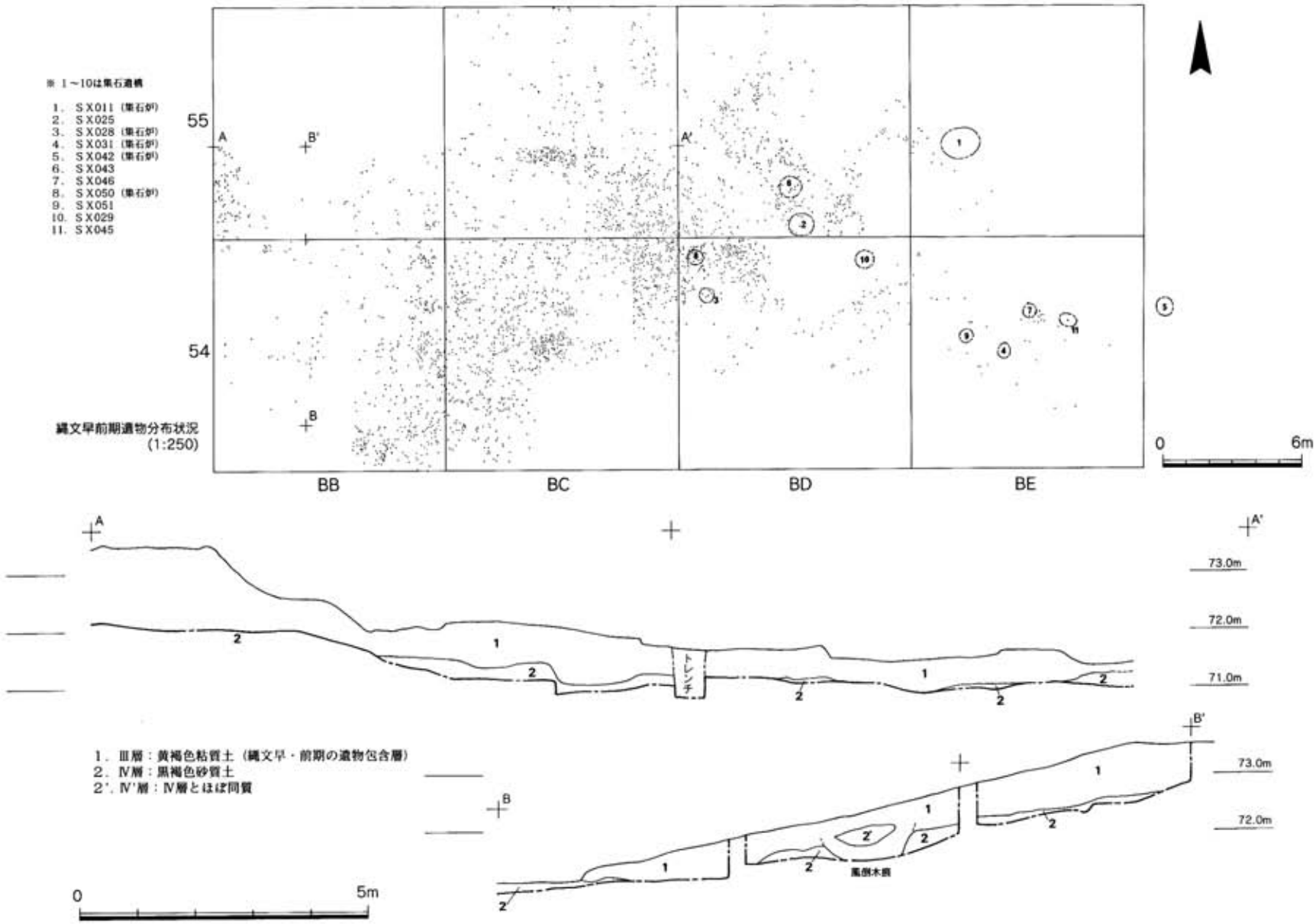


Fig.7　縄文時代早前期遺物分布状況及び調査区土層（1：100）

跡２区でも同様に黄褐色粘質土層下で見られるほか、工業団地調査区の西に隣接する船塚遺跡においても縄文時代前期の遺物包含層の下位で確認され、その上部では旧石器時代の多量の石器及び礫群が検出されている。

前述のとおり、縄文時代早期～前期の遺物包含層である黄褐色粘質土中からは11基の集石遺構が検出されている。集石遺構の詳細については後述するが、これらは地形的に傾斜が最も緩やかになる鞍部付近を中心に分布しており、ほぼＳＴ007古墳の周辺、グリッドで言えばＢＤ54，55、ＢＥ54，55の範囲に含まれる。平面的にはＢＤ54，55グリッドにまたがって分布するグループと、ＢＥ54グリッドに含まれるものと東西に大きく分けられるが、層位的な上下の違いはほとんど見受けられない。

遺物包含層中からは縄文時代早期から前期にかけての土器及び石器が出土している。数量として土器は約2,400点、石器約1,000点が出土しているが、土器の９割以上が大きさ５cmに満たない小破片であり、比較的大きめのものでも底部付近を欠損するなど全形を窺い知れるものは皆無である。このうち、早期のものとして、押型文土器・無文土器・条痕土器・撚糸文土器、前期のものとして隆帯文土器（轟式Ｂ式に相当する）・沈線文土器（曽畑式を含む）などが見られるが、主体を占めるのは早期の押型文土器、及びこれに伴うと思われる無文土器である。この押型文土器は編年作業の進んだ東九州の押型文土器編年で言えば、稲荷山式・早水台式・下菅生Ｂ式・田村式・手向山式に相当するものが含まれ、早期の古い段階から末にかけての長い時期幅を持つ。遺物の分布状況について、まず平面的な分布については、ＢＣ55・ＢＤ55グリッドの南側、ＢＣ55グリッド杭付近から南西方向にかけて最も集中しており、集石遺構の位置とはやや南東側にずれた地点に遺物分布の中心がある。中でもＳＸ011や051，031，046，045，042の周辺では遺物の密度はかなり薄くなっている。遺物平面分布を見てみると（Fig.8）、早期・前期の遺物がかなり混在しており、僅かに前期の条痕土器（62・63・71）、沈線文土器（66・67）がＢＣ55－8，9グリッド付近に比較的集まって見られる以外にはグループ毎のまとまりを見出すのは難しい。特に土器によっては５m以上離れて出土したものが接合関係にあったり、あるいは同一個体と考えられるものが広域に分布していたりという状況が見られる。一方、遺物の層位的な分布を見てみると（Fig.9）、出土遺物は上下の幅概ね0.3～0.6mの中に収まるが、一定の高さに集中するような分布状態は示しておらず、この上下幅の中でほぼまんべんなく分布していると言える。前述したとおり遺物包含層であるⅢ層中では、土層観察から生活面を把握することはできなかったため、これら遺物包含層中で上下の分布を示す遺物群を層位的に区分することは出来ず、残念ながら本調査区における出土土器は層位的資料にはなり得ない。しかし少なくとも新旧の土器が大きく逆転するようなことはないようで、Fig.9で参照されるように、早期の押型文土器・無文土器（10・19・30・44）が下位に、前期の沈線文土器（58）、条痕土器（60）、太形爪形文を施す土器（65）が上位から出土するなど、早期と前期の土器については概ね上下に分かれて分布しているようである。ただ、その一方で下菅生Ｂ式併行（10）と早期末に下る手向山式併行（44）のものがほぼ同一層位から出土するなど、層位的な細分は極めて難しいことが示されている。遺物の全体の平面分布においても、集石遺構群の位置からは地形的に低い、谷部に近い部分にその集中が見られることから、本調査区において出土した縄文時代前期・早期の遺物の多くが二次的な堆積によって原位置を大きく移動しているものと考えられる。

(2) 集石遺構（Fig.10～12）

縄文包含層（Ⅲ層）中から集石遺構11基が確認されている。Ⅲ層中には花崗岩礫が多数含まれており、おそらくはⅢ層が堆積していく過程で風化した露頭から流れ込んできたものと思われるが、集石に用いるために人力によって運ばれてきたものも少なからず含まれよう。事実、遺構と認定できたもの以外にも集石遺構の可能性がある一群も散見され、後の古墳造成や土の流出によって失われたものもあると推定される。

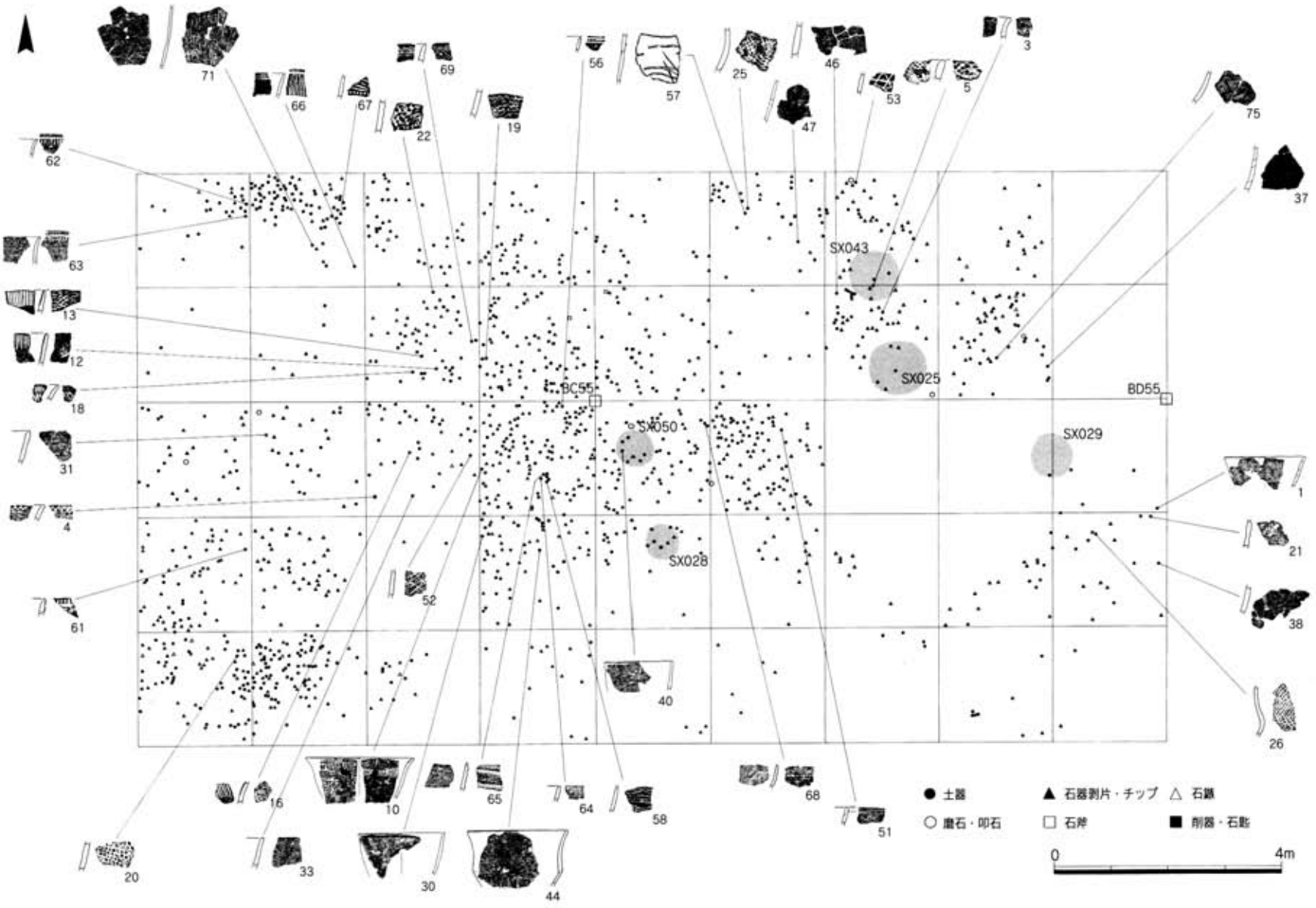


Fig.8　BC54・55, BD54・55Gr遺物出土状況（1：100）

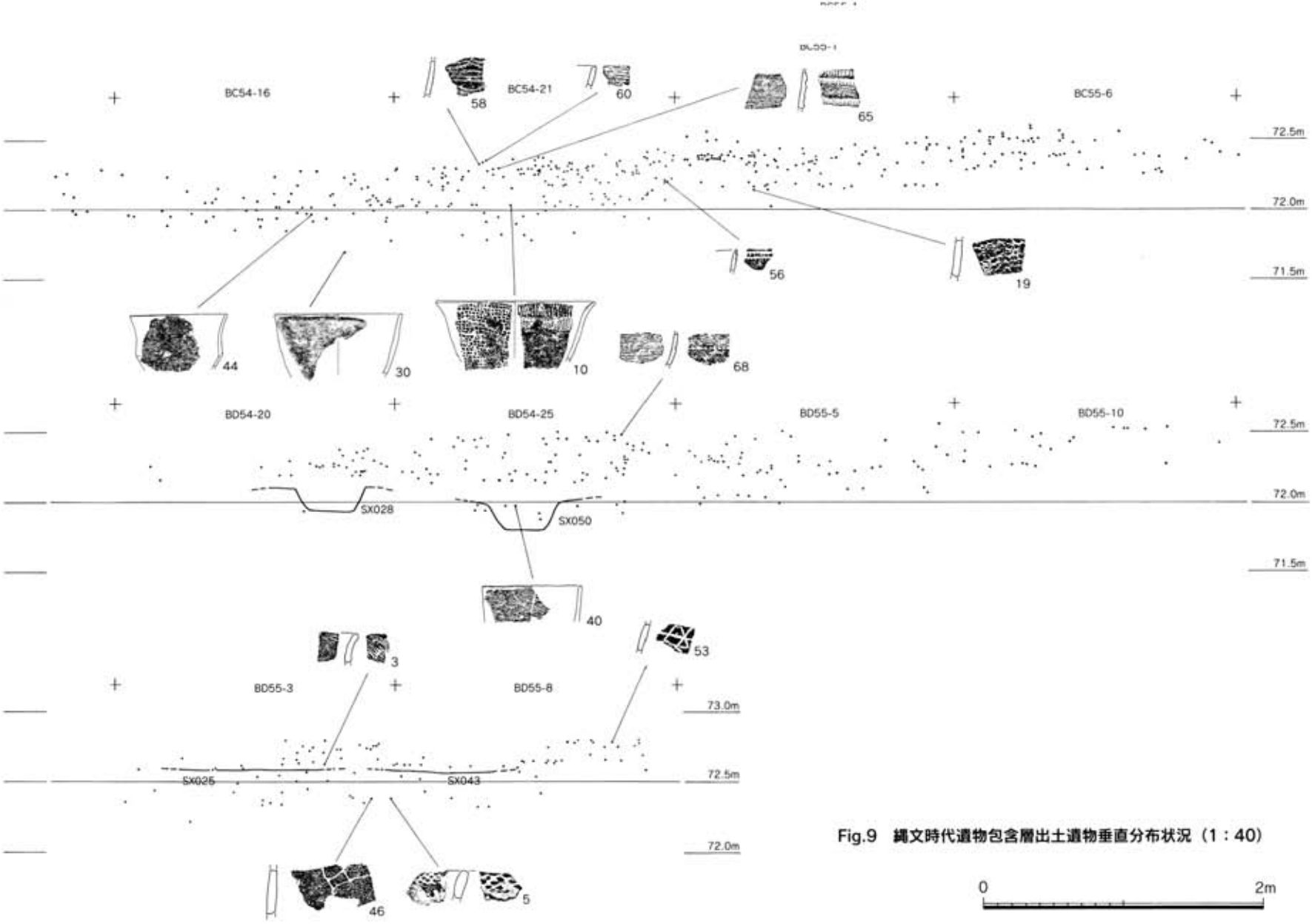


Fig.9　縄文時代遺物包含層出土遺物垂直分布状況（1：40）

0　2m

11基の集石遺構のうち、炉壁となる石を円形に立て並べる、いわゆる花弁状石組炉（A類）が6基（SX011・028・031・042・050・051）あり、その他不定形のもの（B類）として、平面的な広がりを持つもの4基（SX028・042・050・051）、上下に層状に重なるもの（C類）1基（SX046）が見られる。このうち、花弁状石組炉（A類）には3種に分けられ、一つは炉壁の石が立ちぎみで、炉の中心に石を敷かないもの（A－Ⅰ類：SX028・050）、炉壁を寝かせぎみにして、炉の中心に石を敷かないもの（A－Ⅱ類：SX011・042・051）、より大型で炉壁の石は立ちぎみのもの、寝かせぎみのもの両者があり、炉の中心に石を敷かないもの（A－Ⅲ類：SX031）に分けられる。またB類は、直径1.3m程度の大型のもの（B－Ⅰ類：SX025・043）、直径0.8m程度の小型のもの（B－Ⅱ類：SX029・045）に分けられる。

平面的な分布状況については、まず花弁状石組炉のSX028・050、及びSX051・031がそれぞれ近接してグループをなしており、SX011は他の集石とやや間隔を置いている。SX051・031の東側にはB類集石のSX045、C類集石のSX046、及び花弁状石組炉のSX042が位置しており、SX045・046についてはSX051・031と同一グループと考えられるが、SX042については調査区境に近接することもあり、いずれかのグループに含まれるかどうか不明である。また、B類集石のSX025・043は近接し、Fig.9に見られるとおり遺構面もほぼ同じ高さで、不定形のSX029も含めてひとつのグループと捉えたい。なお、集石に伴うと思われる土器としてSX046の集石内部から楕円押型文を有する胴部片2点（Fig.13－27・28）が出土している。また炭化物がまとまって検出されたのはSX031のみであるが、その他の集石でも周辺の土中から炭化物が若干量検出されている。以下に遺構毎に述べる。

SX011集石遺構（Fig.10）花弁状石組炉A－Ⅱ類である。集石の大きさは径0.7m程で、大きさ0.2～0.3m程度の細長い石4枚を寝かせぎみに並べ、本来は円形に並べていたようである。中心には平たい石を3枚置く。検出時には上面に径0.1～0.2mの礫が集中していた。掘り方は径約0.5mの円形である。

SX025集石遺構（Fig.11）不定形の集石（B－Ⅰ類）である。大きさ0.2～0.3mのやや平たい礫が径約1.2mの範囲に集石されている。礫の重なりはなく平面的に広がり、掘り方も有しない。

SX028集石遺構（Fig.11）花弁状石組炉A－Ⅰ類である。集石の大きさは径0.5m程と小さく、大きさ0.3～0.4m程度の細長い石6枚を垂直に近いくらい立てて並べる。中央には石を据えない。掘り方の径は約0.5mの円形である。

SX029集石遺構（Fig.12）不定形の集石（B－Ⅱ類）である。大きさ0.3～0.4mの比較的大型の礫5個を中心としたもので、集石全体の大きさは約1.0m程である。火熱を受けて赤変している石が多い。礫の重なりはなく平面的に広がり、掘り方も有しない。

SX031集石遺構（Fig.10）大型の花弁状石組炉（A－Ⅲ類）である。大きさ0.4m程度の平たい石を6枚円形に並べて炉壁とするが、北西、南東側の壁を欠く。炉壁のうち、南側の1枚は垂直に近いくらい立てるが、他の炉壁は45°程度に寝かせる。検出時には炉の内部に径0.1～0.2mぐらいの礫が多量に充填された状態で見られ、この礫の下部は炭化物により黒く煤けていた。掘り方は径0.8～0.9m程度の円形である。

SX042集石遺構（Fig.10）花弁状石組炉A－Ⅱ類である。集石の大きさは径0.7m程で、大きさ0.2～0.3m程度の板石7枚を寝かせぎみに並べ、中心には長さ0.3mの平たい石を1枚置く。この石は火熱を受けて赤変している。検出時には上面に大小70個程度の礫が集中していた。掘り方は径約0.8mの円形である。

SX043集石遺構（Fig.11）不定形の集石（B－Ⅰ類）である。大きさ0.1～0.3mの礫が径約1.2mの範囲に広がる。礫は取り立てて平たい石を選んでいる様子は見られない。礫の重なりはなく、掘り方も有しない。

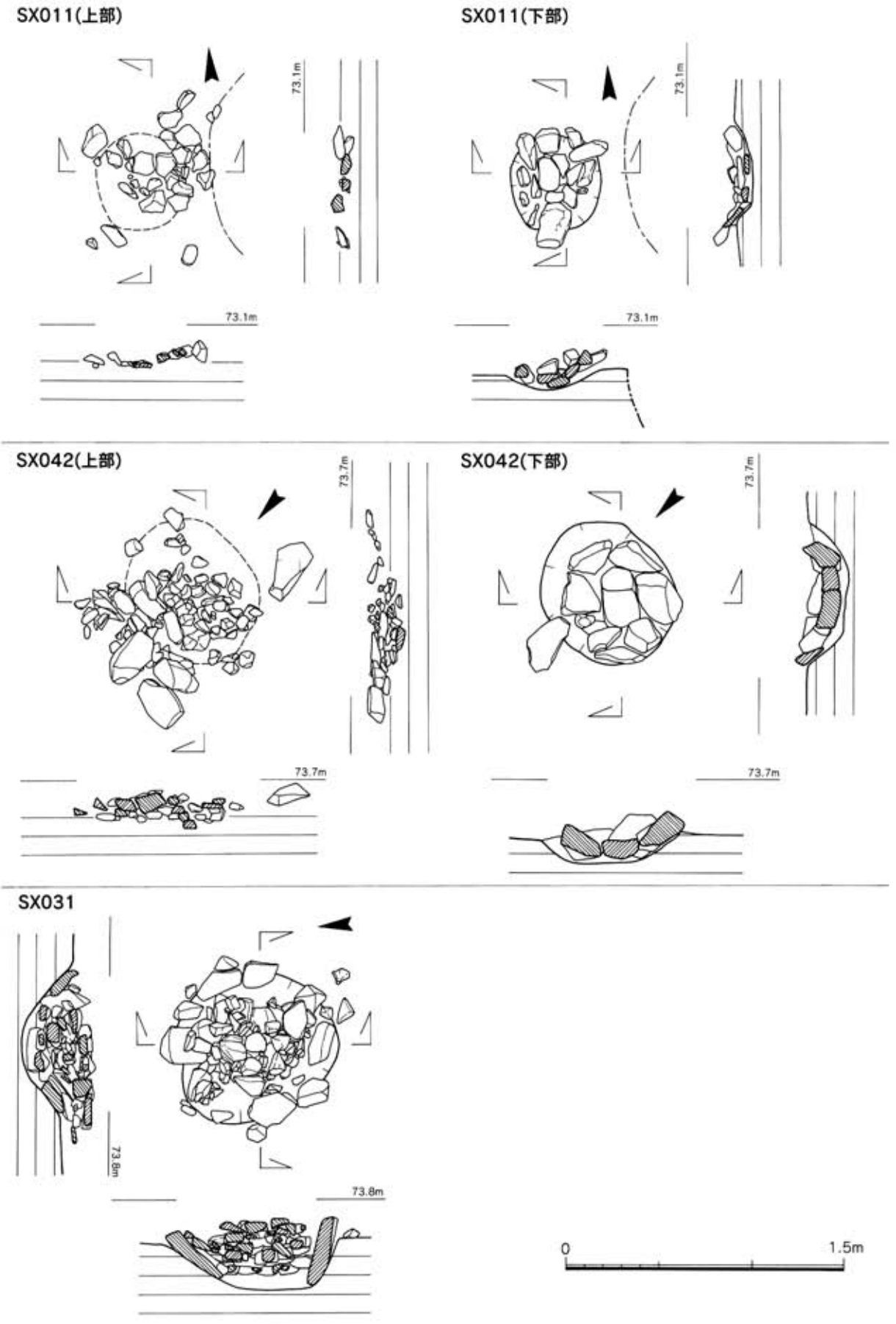


Fig.10　SX011，031，042集石遺構（1：30）

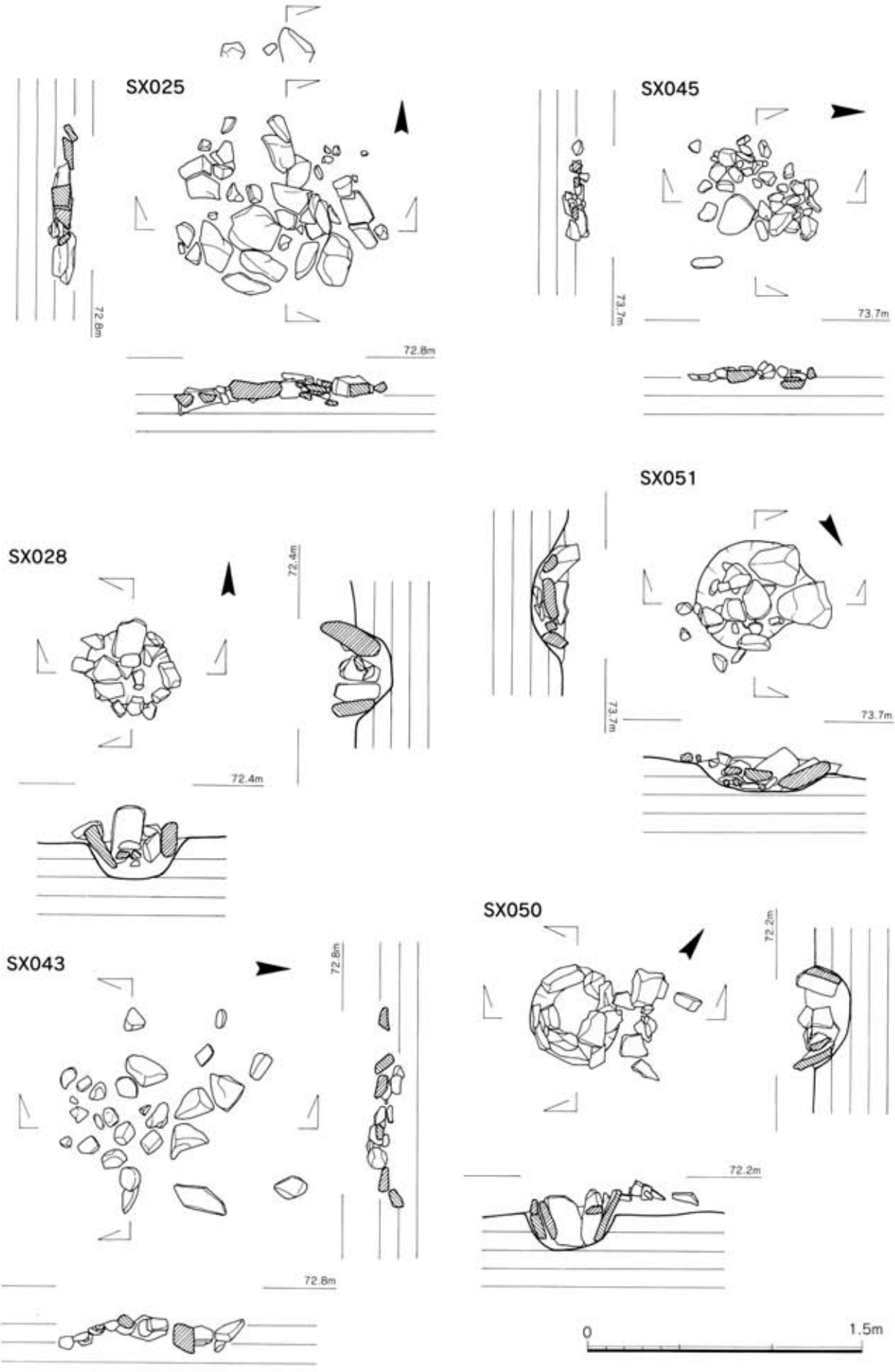


Fig.11　SX025，028，043，045，050，051集石遺構（1：30）

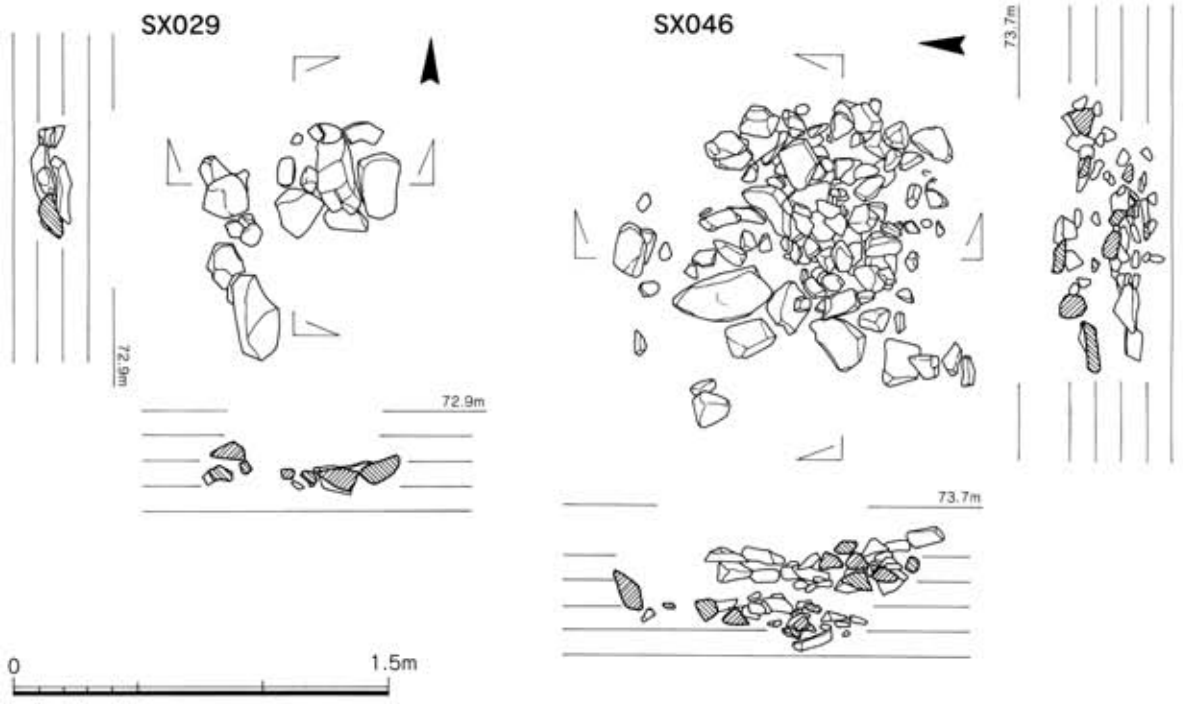


Fig.12　SX029，046集石遺構（1：30）

ＳＸ０４５集石遺構（Fig.11）不定形の集石（Ｂ－Ⅱ類）である。大きさ0.3m程度の礫が一石見られるほかは0.1m以下の小礫30個余りが径約0.7mの範囲に集石されている。礫の重なりはなく、その広がりは平面的で、掘り方も有しない。

ＳＸ０４６集石遺構（Fig.12）約0.5mの厚さで層状に重なる集石遺構である（Ｃ類）。平面的には約1.2mの規模を持ち、大きさ0.3～0.4mの礫が６個見られるほかは、大きさ0.2m未満の小礫が約80個程度重なって集石されている。集石の内部から楕円押型文土器の胴部片が２点出土している。掘り方については検出していない。

ＳＸ０５０集石遺構（Fig.11）花弁状石組炉Ａ－Ⅰ類である。集石の大きさは径0.5m程と小さく、大きさ0.3～0.4m程度の細長い石７枚を垂直に近いくらい立てて並べる。炉壁はほぼ全部が遺存しており、残存状況はSX042と並んで良好である。中央には石を据えない。掘り方の径は約0.5mの円形である。

ＳＸ０５１集石遺構（Fig.11）花弁状石組炉Ａ－Ⅱ類である。集石の大きさは径0.8m程で、大きさ0.3m程度の板石２枚だけが残存しており、いずれも寝かせぎみに並べられる。中心には大きさ0.2m程の平たい石を３枚置く。この石は火熱を受けて赤変している。掘り方は径約0.6mの円形である。

(3) 縄文時代早・前期の遺物包含層出土遺物（Fig.13～19）

①土器（Fig.13～15）

縄文時代早期・前期の土器として、押型文土器・無文土器・条痕土器・撚糸文土器・沈線文土器・隆帯文土器などが見られる。押型文土器・撚糸文土器は早期、隆帯文土器は前期のものと考えられるが、無文土器・沈線文土器・条痕土器としたものには早期に含まれるもの、前期に含まれるものの両者がある。土器の出土点数は約2,400点が数えられるが、ほとんどが部位不明の小破片であり器形を窺い知れる資料は極めて限られる。これらの小破片の大半が外面に楕円押型文・山形文が施文される押型文土器あるいは無文土器で占められる。ここでは口縁部片・底部片のほか、土器の様態が窺える比較的大きめの破片について図示する。

押型文土器（Fig.13－1～29・Fig.14－41～47・Fig.15－48）　1は直線的に開く深鉢の口縁部で、口唇部は平坦である。胴部には口縁部直下まで紡錘形の楕円押型文を縦走させる。押型文は紡錘形で大きさは5mm程度、原体の幅は約5cmである。内面は丁寧にナデを施す。底部付近は欠損して明らかでないが、尖底となり、底部から胴部・口縁部にかけて直線的に開く器形をなすものと推定される。復元口径約24cm。2・4～6・8は同じく直線的に開く口縁部を持つものと思われる。2・5・6はかなり厚手で、口縁端部は丸みを帯びる。2は外面に楕円文を横走させ、内面にもより小さな楕円文を横走させる。内外面とも楕円文は紡錘形で、外面のものは長さ13mm、内面は長さ10mm、幅4mm。4は外面に楕円文横走、内面は口縁端部のみに楕円文を横走させる。楕円文はいずれも大型で長さ・幅共に約9mmである。5も外面及び口縁部内面に楕円文を横走させるもので、外面の楕円文の方がより大きく長さ12mm、幅7mm、内面のものは長さ7mm、幅5mmの紡錘形である。6の器表面はかなり荒れているが、外面及び口縁部の内面に楕円文を横走させる。楕円文の大きさは長さ9mm、幅6mm。8は外面の押型文が磨耗で失われており、口縁部内面のみに楕円文が遺存する。楕円文はかなり円形に近いものである。3・7は口縁部が緩く外反するもので、3は外面に楕円文を斜走、口縁部内面に横走させるもので、いずれも楕円文は細長い紡錘形で長さ8mm、幅3mmである。7も緩く外反するものであるが、外面は楕円文を横走、口縁部内面には山形文を横走させる。山形文下の無文部はナデを施す。なお9は口縁端部付近を欠き器形不明であるが器壁の厚さ15mmの厚手のもので、外面には大型の楕円文を斜走、口縁部内面には楕円文を横走させる。外面の楕円文は菱形に近く、長さ10mm、幅7mm、内面のものは紡錘形で長さ7mm、幅4mm。10～18は口縁部内面に原体条痕を施すもの。10は底部付近を欠くが比較的大型の破片で、緩く外反する口縁部から湾曲する体部へと続く。体部外面には粗大化した楕円文を斜走させ、楕円文の大きさは長さ9mm、幅6mmを測る。口縁部のちょうど外反する部分の内面に長さ3cm程度の原体条痕が縦方向に施され、その下位に楕円文を横走させる。内面の楕円文は紡錘形で、外面のものより小さく長さ5mm、幅2mm。内面の無文部はナデを施す。復元口径約33cm。11は僅かに口縁部が外反するもので外面には菱形に近い大型の楕円文を斜走させ、内面には原体条痕を施す。外面の楕円文は長さ11mm、幅9mmである。12・13は直口する口縁部となるもので、いずれも器壁の厚さ8～9mm程度と薄く、外面に楕円文を横走させ、内面には縦位に原体条痕を施す。いずれも楕円文は紡錘形となり、12では長さ8mm、幅3mm、13では長さ9mm、幅5mm。14は口縁部の形状は不明だが、内面には縦位に原体条痕、外面は楕円押型文を横走させる。15・16・17は緩く外反する口縁部片で、内面の原体条痕はいずれも斜位に施される。15・16では楕円文を横走させるが、17は外面にも斜め方向の原体条痕が見られる。18は口縁部が緩く外反するもので内面には原体条痕が短く二段に施される。外面の楕円押型文は斜走で、楕円は長さ10mm、幅7mmと大型のものである。19～28は外面に楕円文を施す胴部片、20・21・23・24・26は紡錘形の小振りの楕円文を施すもの、一方19・22・25・27・28は粗大化した楕円文を施すものである。特徴的なのは26であり、「く」の字状に屈曲する器形の胴部片と考えられる。おそらくは底部から緩やかに膨らんだ胴部が、屈曲部から内傾しつつ口縁部に向かって開いて行くものと推定され、屈曲部の下位では楕円文を横走、上位では縦走させている。楕円文は小型の紡錘形で長さ8mm、幅4mmを測る。27・28はＳＸ046集石遺構中から検出されたものである。29は数少ない底部の小片である。外面に僅かに楕円文が遺存し、底部は平底、底径は約11cmに復元される。48は緩やかに外反する口縁部で、器壁の厚さ7mm程度と薄い。施文方法はほかと異質で、外面は口唇部下に約5cmの無文帯を持ち、その下位に楕円文を横走させるが、楕円文は長さ4mm、幅3mmと非常に小ぶりである。内面は口唇下より約6cmの幅で同じ施文具による楕円文を横走させ、さらに長さ2cmの原体条痕を口唇部下に縦位に施す。

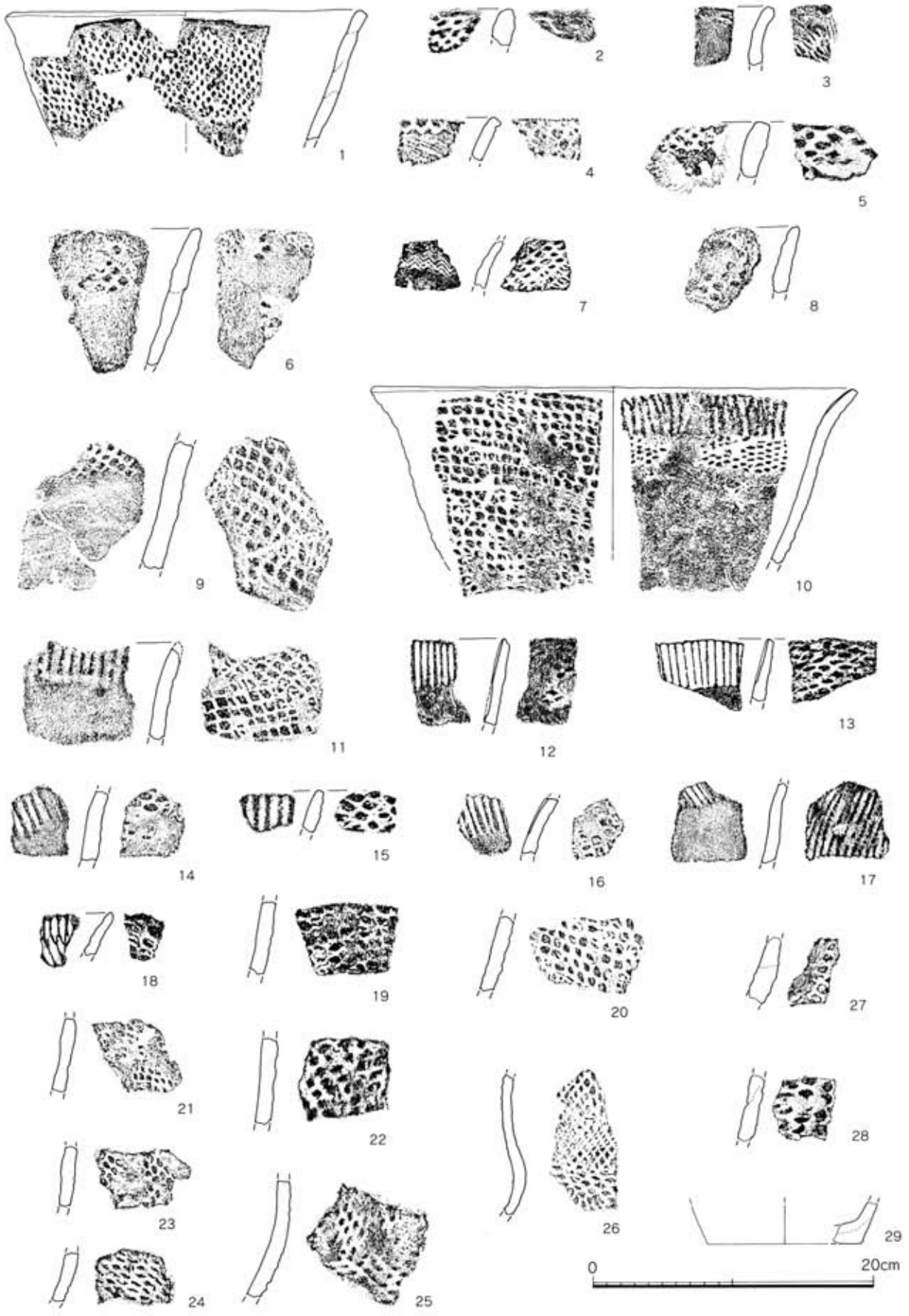


Fig.13　縄文時代の遺物1［土器］(1：4)

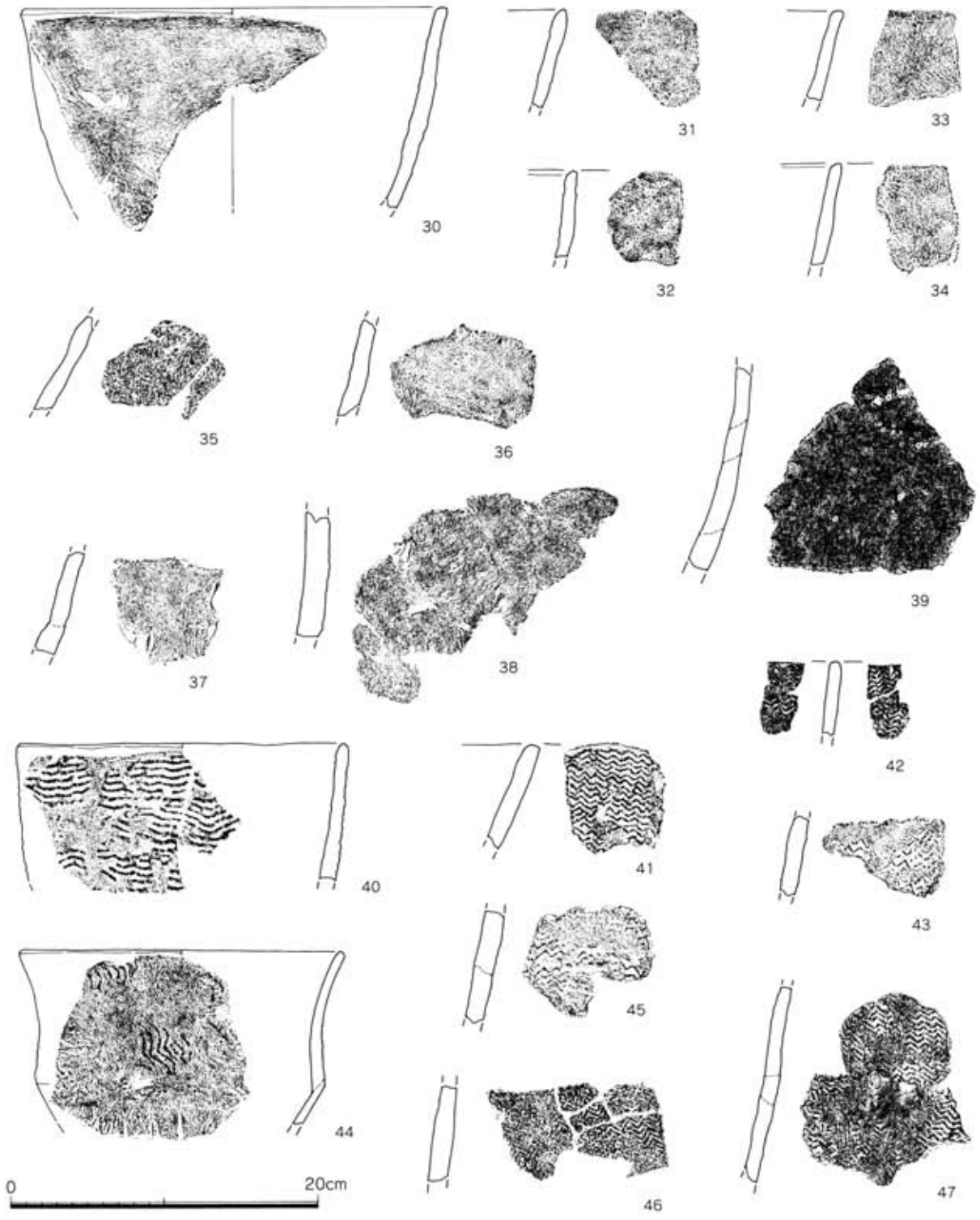


Fig.14　縄文時代の遺物2［土器］（1：4）

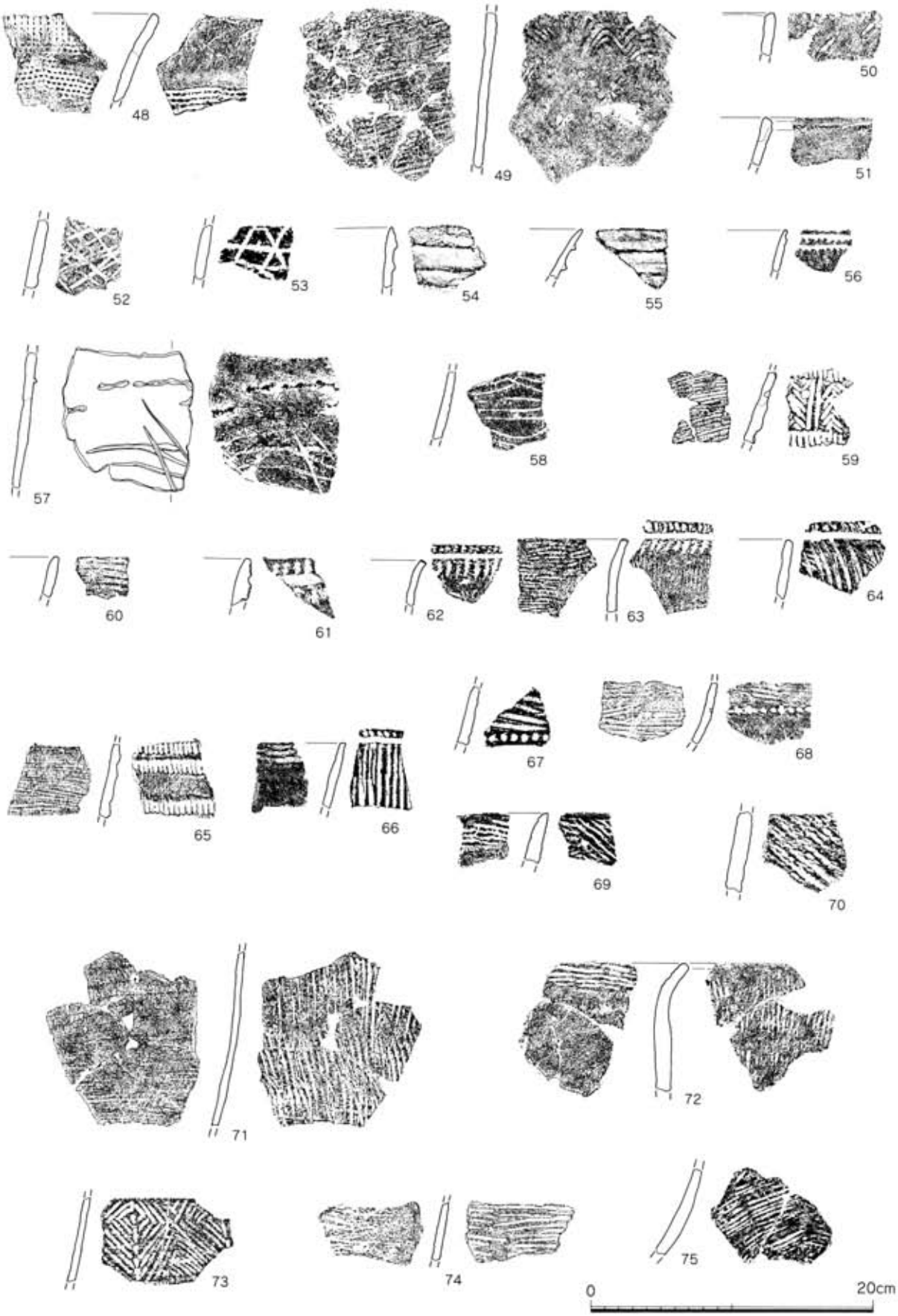


Fig.15　縄文時代の遺物3［土器］（1：4）

41・42は直口する口縁部をなすもので、41は外面に山形文を横走、内面は丁寧なナデ。42は外面に山形文を横走、内面も口縁部に外面と同じ施文具で山形文を横走させる。43・45～47は胴部片でいずれも山形文を横走。44は胴部でいったん屈曲し、緩やかに内傾しつつ口縁部に向かって外反するもの。屈曲部より上の体部外面に山形文を縦走させ、屈曲部下の外面、及び内面はナデである。器壁の厚さは約５mmと薄い。復元口径約20cm。押型文土器の胎土中には砂粒が多く含まれるほかカクセン石が混入しているが、特に2・5・6・9・11・44・46には多量に含まれる。

無文土器（Fig.14－30～39）　30は緩やかに湾曲する体部から口縁部が直口するもので、内外面に丁寧なナデが施される。復元口径約27cm。31～34はいずれも直口する口縁部片。31の外面は横方向の条痕をナデ消している。33・34は内外面に丁寧なナデが行われ、33は30と同一固体の可能性がある。35～39は胴部片、特に35は底部に近い部分で30と同様に外面に丁寧なナデが施される。39は内面のナデは荒く胎土中の砂粒が露出するほどであるが、外面はミガキとも言うべき丁寧なナデが行われる。38は器壁の厚さ1.4cmとかなり厚手のもので、内面はミガキに近いナデが施されるが、外面は器壁が荒れており調整は不明である。

無文土器の胎土中にも多くの砂粒が含まれるほか、30・38にはカクセン石が見られ、特に38には多量に含まれるが、39には全く混入していない。

条痕土器（Fig.14－40・Fig.15－49・60・62～64・66～68・71・75）　40は外面にハイガイの貝殻腹縁を押し付け、引っ張ることによって緩やかな波状の条痕を施すもの。器壁は８～９mmと厚手、体部から口縁部にかけては直線的で、僅かに開きぎみの円筒形の体部をなすものと推定される。内面は横方向に条痕を施した後にナデ消している。胎土中に多量の砂粒とカクセン石を混入している。復元口径約21cm。49は薄手のもので、外面に波状の条痕を、内面には横位に条痕が施される。60は直口する口縁部片で端部は面取りが施される。外面には貝殻腹縁による横位の条痕が見られ、内面は横位の条痕後ナデである。62・63は外反する口縁部で外面には貝殻腹縁による押引文を施し、その下位には条痕が見られる。口唇部にも同じ施文具で刻目を施す。内面は62がナデ、63は横位の条痕が残る。64は直口する口縁部片で外面には条痕が見られるが施文具は不明である。口唇部にも同じ施文具で刻目が施される。内面はナデ。66は直口する口縁部で口唇部は面取りを施す。外面には貝殻腹縁による縦位の条痕、内面の口唇部下には横位の条痕が施される。また、口唇部にも同じ施文具により刻目が行われる。67は外面に横位の条痕と刺突列点文を施すもの。68は緩やかに丸みを持つ胴部片で、内外面に横位の条痕が見られるほか、横位に刺突列点文が施される。71は器壁の厚さ６mm程度と薄い胴部片で、外面に貝殻腹縁による縦位の条痕、内面は横位の条痕後にナデ消しを行う。75は底部付近の部分片で外面には貝殻側縁による条痕が施され、内面はナデ。胎土中にカクセン石が含まれる。

撚糸文土器（Fig.15－69・70・72）　いずれも器壁が厚手のもので、69・72で見ると外面及び口縁部内面に撚糸文が見られる。撚糸文は内面では横位に、外面では69・70では斜位、72では縦位に施される。72の内面文様帯の下位では丁寧にナデが行われる。72の胎土中には多量にカクセン石が含まれている。

沈線文土器（Fig.15－52・53・57・58・73・74）　52・53・57は外面に斜格子状の沈線を施すもの。調整は内外面共にナデで、57の外面には隆帯が２条貼り付けられているようであるが、それぞれが連続せず、途中で止まっている。58は器壁の厚さ５mm程と薄手で、外面に細い沈線文で曲線と直線を描き区画を構成しているようである。内面はナデ。73・74は外面に沈線文を連続して施すもので、73・74の胎土中には滑石が含まれる。73は「×」の割付けを繰り返し、短沈線をさらに充填するものである。74は横位の沈線が連続して施文される胴部片で、内面は荒い筋状の調整痕が見られるが調整具は不明である。

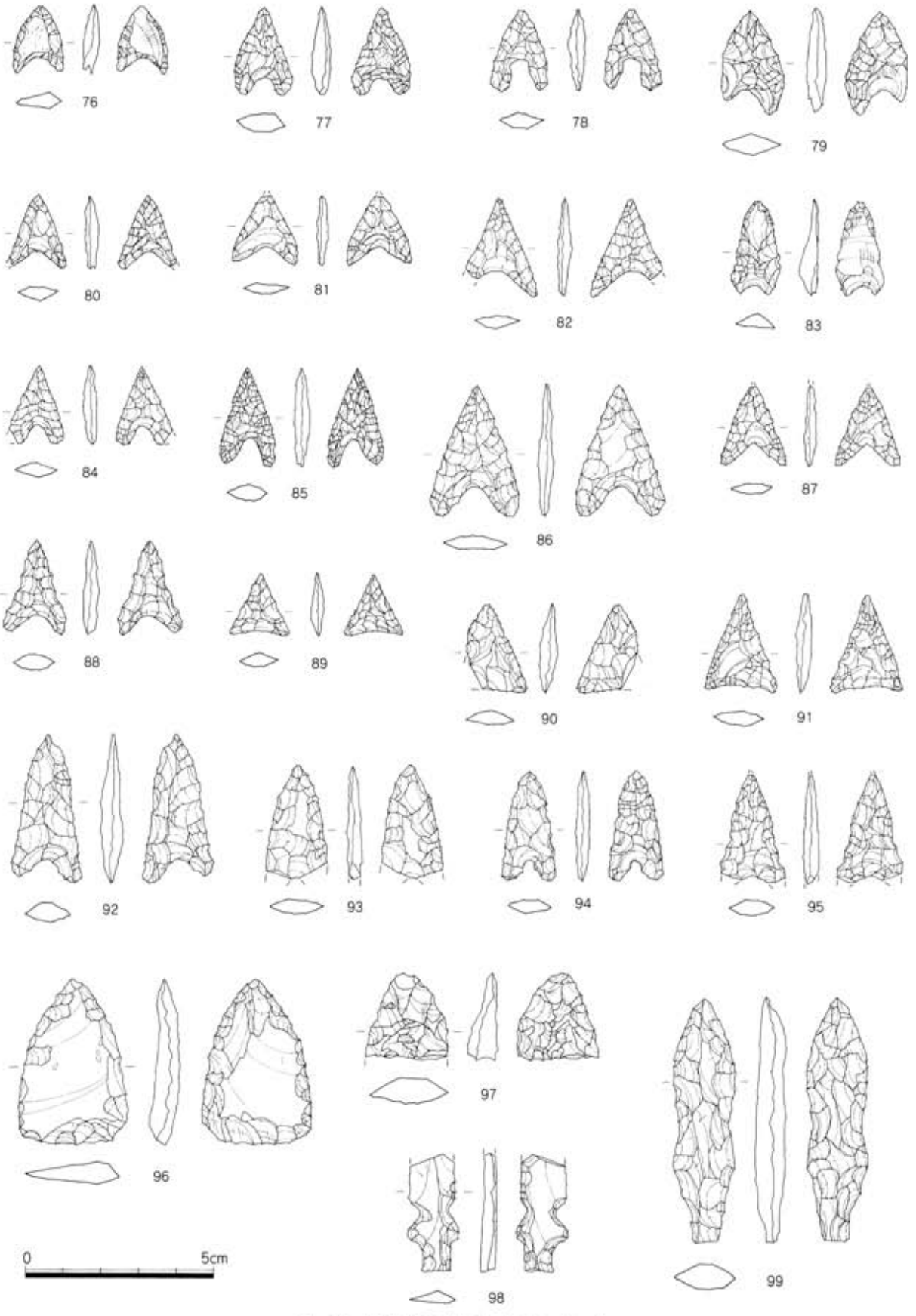


Fig.16　縄文時代の遺物4［石器］(2：3)

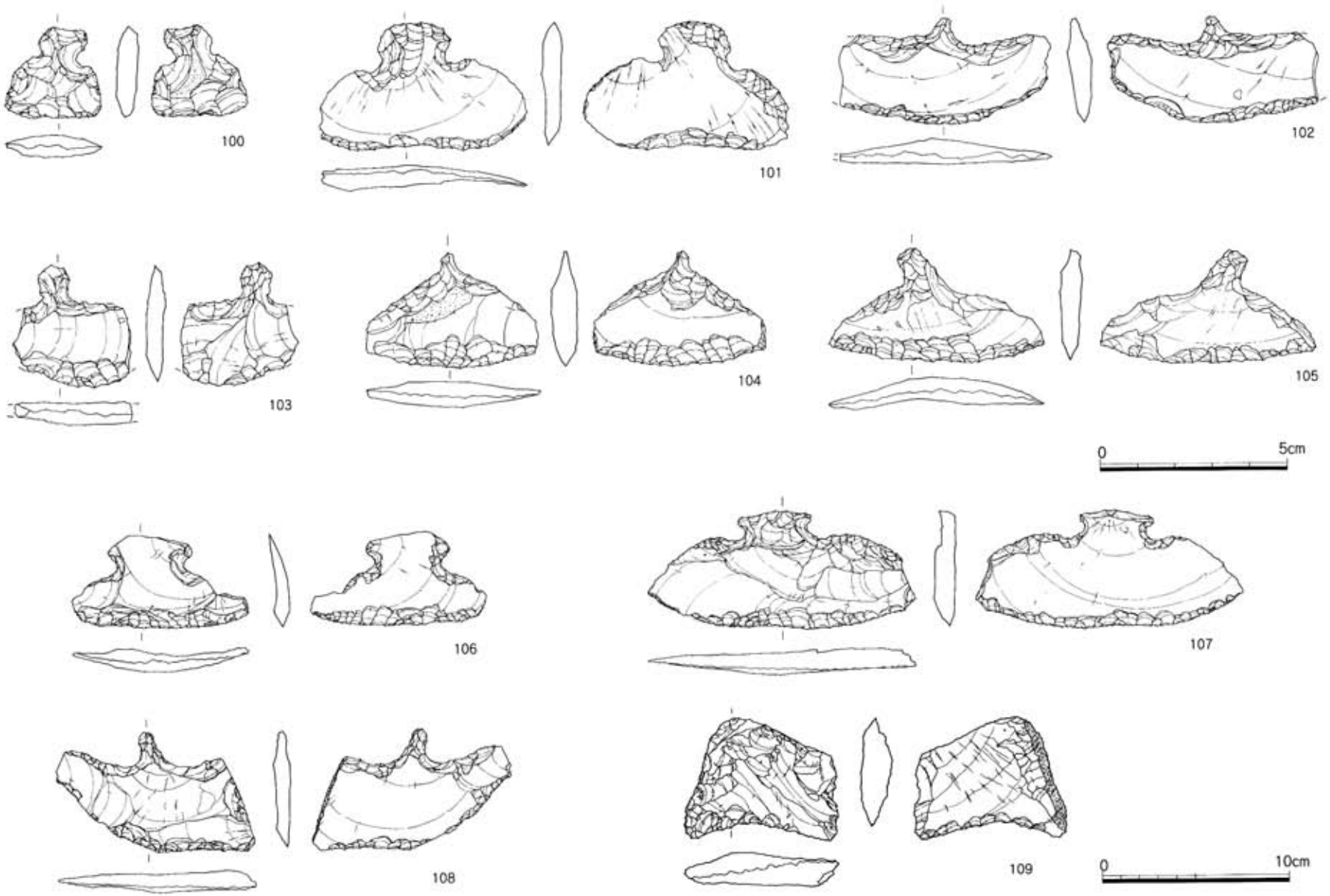


Fig.17　縄文時代の遺物5［石器］（100～105は2：3，106～109は1：3）

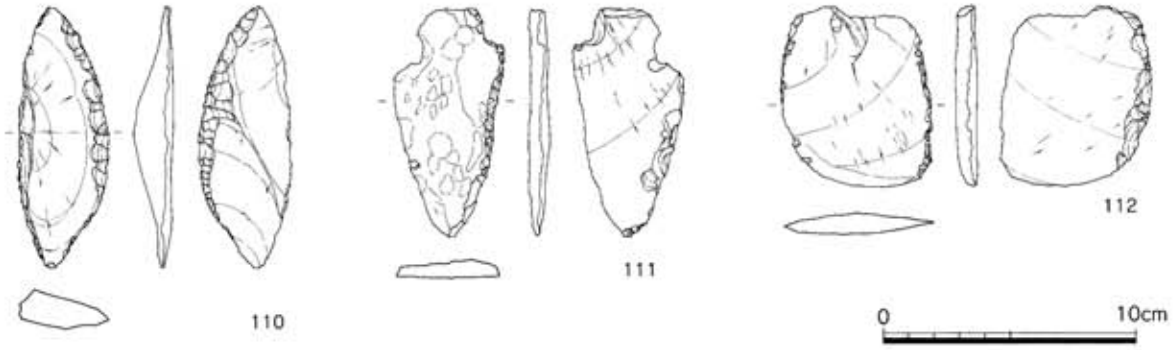


Fig.18　縄文時代の遺物6［石器］(1：3)

隆帯文土器（Fig.15－54・55）　54・55は外面に数条の隆帯を貼り付けるもので、54の口縁部はかなり立ちぎみで、55はやや外反する。隆帯は断面三角形、器壁は５mm程度と薄手、調整は内外面共にナデである。

その他、分類不能のものとして、51・56・59・65を図示している。51は外面の口唇部直下に僅かに隆起する突帯を持つ。内外面とも調整はナデ、56は直口する口縁部で、外面の口唇部下に薄く鋭利な施文具による刺突文が連続して二段に施される。器壁は厚さ５mmと薄手である。59・65は外面に連続する太型爪形文を持つもので、59は二条の太型爪形文に区画された、縦位・斜位の沈線文による文様帯を持つ。内面は横位の条痕が見られる。その他、補修孔と思われる穿孔が見られる。65は太型爪形文に区画された部分が無文帯となるもので、同じく内面は横位の条痕である。

②石器（Fig.16～18）

石器は、剥片・チップを含めて約1,000点が出土している。このうち製品としては石鏃・石匙・削器・磨製石斧・磨石などが見られ、それぞれの点数は石鏃が95点、石匙９点、削器15点、磨製石斧２点、磨石19点が数えられる。また、石鏃95点の内、未製品が13点含まれる。

76～97・99は石鏃。76～88・92・94・95は凹基無茎式のもので、76～79は両側辺が丸みを持つもの。このうち78は抉りが深く長脚となるもので鍬形鏃に含まれる。80～82は両側辺が直線的になるもので、全体として平面形が長さと幅がほぼ等しい三角形となるもの。84～88は同じく両側辺が直線的になり、長さが幅を上回る平面二等辺三角形となるもの。83・92・94は両側辺が直線的となるが先端部付近でややすぼまるもので、平面形は二等辺三角形で幅に比べてさらに全長が長くなり、抉りは浅い。このうち83は剥片鏃である。89～91・96は平基無茎式のもので、89～91は両側辺が直線的となり、平面形は89・90が正三角形となり、91はやや幅より全長がやや長い二等辺三角形となる。96は全長4.35cmと大型の剥片鏃で両側辺は丸みを持つ。99は有茎のもので幅1.6cm、全長6.4cmと細長く、両側辺の中央部には浅く抉りが入る。なお石材は76・77・79・83・85・91・97が黒曜石、87がチャートで他はサヌカイトである。

100～108は石匙、すべてサヌカイト製である。103を除くすべてが横長剥片を素材とするもので、103のみ縦長剥片を用いており、いずれも鋭い側辺・縁辺に両面から剥離を加えて刃部を作り出している。つまみの形状には二通り有り、両側辺からの抉りが深く、幅広の形状をなすもの（100・101・106・107）と、丁寧に剥離を加えて細く小さく突起状に作り出すもの（102・103・104・105・108）の両者がある。

109～112は削器でいずれもサヌカイト製である。109は縦長剥片を素材とするもので、鋭い縁辺部に両面から剥離を加えて刃部とし、側辺の片側は自然面を残し、もう片側はそれと形状を整えるようにポジティブ面より剥

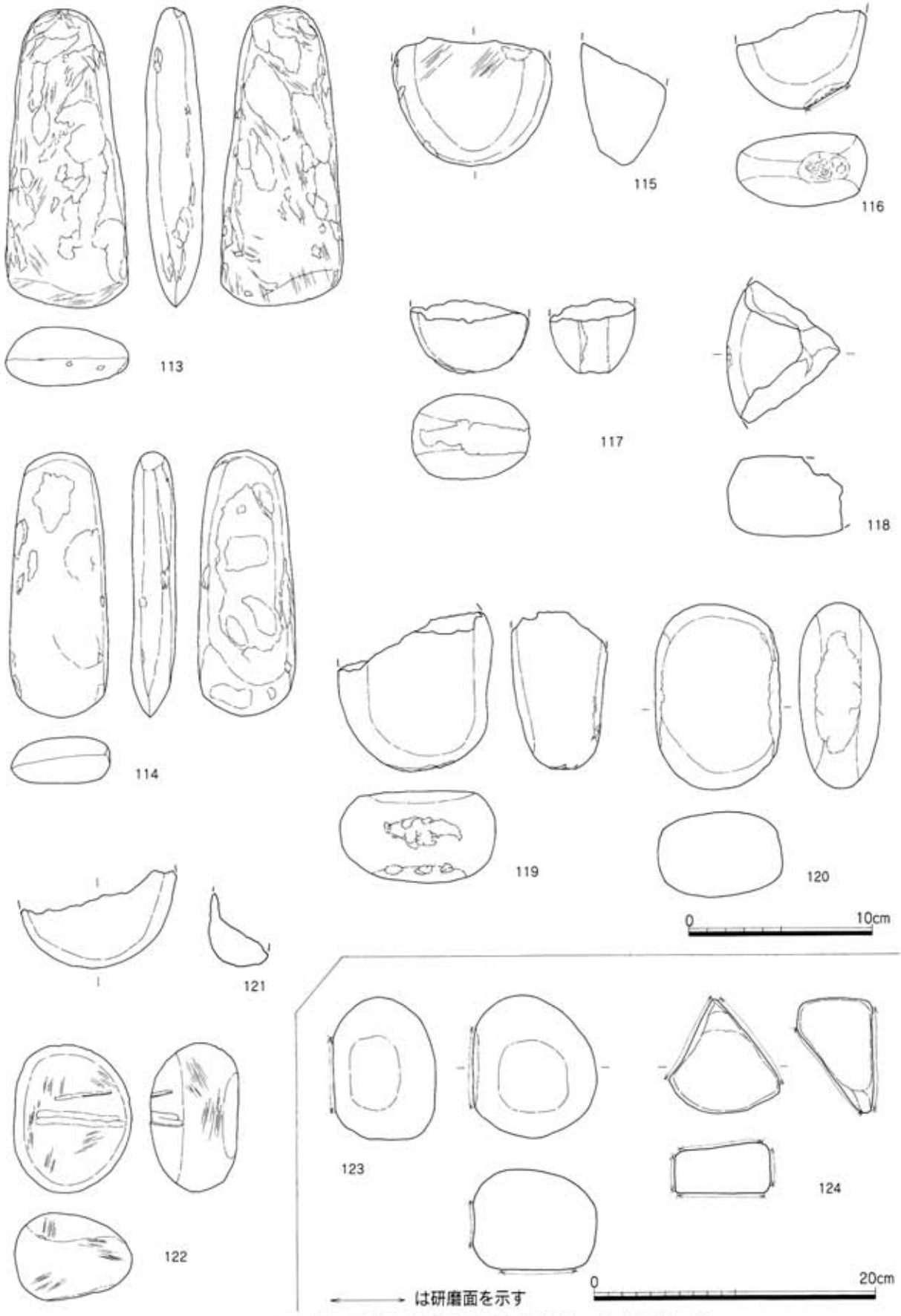


Fig.19　縄文時代の遺物7［石器］（123，124は1：4、ほかは1：3）

Tab.2　戦場古墳群１区縄文時代の土器一覧表（１）

Fig. 図番号	PL. 番号	県遺物登録番号	出土地点	種別	器種	法量（cm）			胎土 ※混入物	色調	文様・調整	
						口径	器高	底径			外器面	内器面
13-1	PL.10-6	97002941	ＢＤ54－21，№6	縄文土器	深鉢	(20.0)	(9.8)	—	小石・砂粒・雲母	褐色	楕円押型文縦走	ナデ
2	11-2	98001513	ＢＥ54－18，№8	〃	〃	—	(2.6)	—	砂粒・カクセン石	褐色	楕円押型文横走	口縁部楕円文横走
3	11-2	98001497	ＢＤ55－3，№28	〃	〃	—	(4.2)	—	砂粒・雲母	黄橙色	楕円押型文斜走	口縁部楕円文横走
4	11-2	98001566	ＢＣ54－22，№56	〃	〃	—	(3.0)	—	砂粒・カクセン石	橙色	楕円押型文横走	口縁部楕円文横走
5	11-2	98001522	ＢＤ55－3，№56	〃	〃	—	(4.0)	—	砂粒・カクセン石	明黄褐色	楕円押型文横走	口縁部楕円文横走
6	10-6	98001548	ＢＢ54－15，№3	〃	〃	—	(9.7)	—	砂粒・カクセン石	鈍い黄橙	楕円押型文横走	口縁部楕円文横走
7		99003326	ＢＣ55－1，№61	〃	〃	—	(3.5)	—	砂粒	鈍い黄橙	楕円押型文横走	口縁部山形文横走
8		98001594	ＢＢ54－19	〃	〃	—	(4.6)	—	砂粒・カクセン石	橙色	楕円押型文？	口縁部楕円文横走
9	11-2	98001510	ＢＥ55－18，№7	〃	〃	—	(9.0)	—	砂粒・カクセン石	鈍い黄橙	楕円押型文斜走	口縁部楕円文横走
10	11-2	97002942	ＢＣ54－2，№103	〃	〃	(34.0)	(12.5)	—	小石・砂粒・雲母	黄橙色	楕円押型文斜走	原体条痕、楕円横走
11	11-2	98001518	ＢＤ54－14，№14	〃	〃	—	(6.4)	—	砂粒・カクセン石	黄橙色	楕円押型文斜走	縦位の原体条痕
12	11-2	98001213	ＢＣ55－2，№72	〃	〃	—	(6.2)	—	砂粒・カクセン石・雲母	赤褐色	楕円押型文横走	縦位の原体条痕
13	11-2	98001212	ＢＣ55－2，№65	〃	〃	—	(4.5)	—	砂粒・カクセン石	橙色	楕円押型文横走	縦位の原体条痕
14		98001533	ＢＣ55－21，№3	〃	〃	—	(4.7)	—	砂粒	明黄褐色	楕円押型文横走	斜位の原体条痕
15	11-2	98001520	ＢＤ55－14，№25	〃	〃	—	(3.0)	—	砂粒・カクセン石	明褐色	楕円押型文横走	縦位の原体条痕
16		98001565	ＢＣ54－22，№40	〃	〃	—	(3.8)	—	砂粒	鈍い橙色	楕円押型文横走	斜位の原体条痕
17	11-2	98001516	ＢＥ54－19，№1	〃	〃	—	(5.4)	—	砂粒	鈍い黄橙	斜位の原体条痕	斜位の原体条痕
18	11-2	98001215	ＢＣ55－2，№66	〃	〃	—	(3.0)	—	砂粒	鈍い橙色	楕円押型文斜走	原体条痕二段
19	10-6	98001208	ＢＣ55－1，№62	〃	〃	—	(5.2)	—	砂粒・カクセン石・雲母	橙色	楕円押型文横走	ナデ
20	10-6	98001524	ＢＣ54－14，№99	〃	〃	—	(4.8)	—	砂粒	明黄褐色	楕円押型文斜走	ナデ
21		98001534	ＢＤ54－16，№11	〃	〃	—	(5.2)	—	砂粒	鈍い橙色	楕円押型文斜走	ナデ
22	10-6	98001211	ＢＣ55－2，№60	〃	〃	—	(6.0)	—	砂粒・金雲母	橙色	楕円押型文斜走	ナデ
23		98001541	ＢＤ54－25，№74	〃	〃	—	(4.3)	—	砂粒	鈍い黄橙	楕円押型文斜走	ナデ
24		98001547	ＢＢ54－11，№84	〃	〃	—	(3.3)	—	砂粒・カクセン石	橙色	楕円押型文斜走	ナデ
25	10-6	98001512	ＢＥ54－18，№3	〃	〃	—	(7.2)	—	砂粒	明黄褐色	楕円押型文斜走	ナデ
26	10-6	98001540	ＢＤ54－16，№14	〃	〃	—	(9.8)	—	砂粒	明黄褐色	楕円文縦走・横走	ナデ
27		99003324	ＢＥ54－18№4,SX046	〃	〃	—	(4.5)	—	砂粒・カクセン石	明赤褐色	楕円押型文横走	ナデ
28		99003323	ＢＥ54－18№8,SX046	〃	〃	—	(4.5)	—	砂粒	鈍い黄橙	楕円押型文横走	ナデ
29		99003322	ＢＣ54－25，№30	〃	〃	—	(2.7)	(11.0)	砂粒	橙色	楕円押型文	ナデ
14-30	12-1	98001523	ＢＣ54－16，№73	〃	〃	(27.0)	(13.2)	—	砂粒・カクセン石	鈍い橙色	ナデ	ナデ
31	12-1	98001527	ＢＣ54－23，№1	〃	〃	—	(6.3)	—	砂粒	明黄褐色	横位の条痕後ナデ	ナデ
32		98001514	ＢＥ54－25，№1	〃	〃	—	(5.7)	—	砂粒・カクセン石・雲母	橙色	ナデ	ナデ
33	12-1	98001564	ＢＣ54－20，№53	〃	〃	—	(5.6)	—	砂粒	明黄褐色	ナデ	ナデ
34	12-1	98001511	ＢＥ54－13，№1	〃	〃	—	(6.7)	—	砂粒・カクセン石	橙色	ナデ	ナデ
35	12-1	97002939	ＢＤ55－15，№24	〃	〃	—	(6.0)	—	砂粒・カクセン石・雲母	褐色	ナデ	ナデ
36		98001529	ＢＣ54－23，№24	〃	〃	—	(4.9)	—	砂粒	明黄褐色	ナデ	ナデ
37		98001546	ＢＢ54－11，№79	〃	〃	—	(6.6)	—	砂粒	橙色	ナデ	ナデ
38	12-1	98001538	ＢＤ54－16，№2	〃	〃	—	(7.7)	—	砂粒・カクセン石	明褐色	ナデ	ナデ
39	10-6	97002937	ＢＤ55－2，№21	〃	〃	—	(13.2)	—	砂粒・雲母	黄橙色	ナデ	ナデ
40	10-6	97002943	ＢＤ54－25,№77,76	〃	〃	(21.0)	(8.9)	—	砂粒・カクセン石・雲母	鈍い黄橙	波状の条痕文	条痕後ナデ
41	10-6	98001521	ＢＤ55カクラン	〃	〃	—	(6.7)	—	砂粒	浅黄橙色	山形押型文横走	ナデ
42	10-6	97002935	ＢＤ55－13，№7,6	〃	〃	—	(4.7)	—	砂粒・カクセン石	黄橙色	山形押型文横走	口縁部山形文横走
43		98001531	ＢＣ55－17，№7	〃	〃	—	(4.8)	—	砂粒	橙色	山形押型文横走	ナデ
44	10-6	97002944	ＢＣ54－16，№57	〃	〃	(20.0)	(11.3)	—	砂粒・カクセン石	暗赤褐色	山形押型文横走	ナデ
45		98001530	ＢＣ55－17，№2	〃	〃	—	(6.7)	—	砂粒	橙色	山形押型文横走	ナデ
46		97002932	ＢＤ55－3，№64	〃	〃	—	(6.1)	—	砂粒・カクセン石	黄橙色	山形押型文横走	ナデ
47		97002940	ＢＤ55－9，№35	〃	〃	—	(12.6)	—	砂粒・カクセン石・雲母	橙色	山形押型文横走	ナデ
15-48	11-5	98001517	ＢＤ55－14，№40	〃	〃	—	(6.7)	—	砂粒・雲母	鈍い黄橙	楕円押型文横走	原体条痕、楕円横走
49	11-5	97002945	ＢＣ55－24，№1	〃	〃	—	(11.0)	—	砂粒・雲母	褐色	波状の条痕文	横位の条痕
50		98001535	ＢＤ54－12，№8,12	〃	〃	—	(3.0)	—	砂粒	黄橙色	凹線文	ナデ
51	12-3	98001536	ＢＤ54－24，№119	〃	〃	—	(3.4)	—	砂粒	明黄褐色	隆帯を一条持つ	ナデ
52		98001528	ＢＣ54－22，№25	〃	〃	—	(4.8)	—	砂粒	橙色	沈線文	ナデ
53	12-3	97002936	ＢＤ55－8，№5	〃	〃	—	(3.7)	—	砂粒・カクセン石・雲母	褐色	沈線文	ナデ
54	12-3	98001551	ＢＢ54－21，№14	〃	〃	—	(4.0)	—	砂粒	橙色	隆帯を二条持つ	ナデ
55		99003321	ＢＣ54－13，№115	〃	〃	—	(4.0)	—	砂粒	橙色	隆帯を二条持つ	ナデ
56	12-3	98001561	ＢＣ54－21，№123	〃	〃	—	(3.0)	—	砂粒	鈍い黄橙	刺突文	ナデ
57	12-3	97002933	ＢＤ55－24，№1	〃	〃	—	(9.5)	—	砂粒・雲母	赤褐色	沈線文、隆帯	横位の条痕
58	12-3	98001560	ＢＣ54－21，№21	〃	〃	—	(4.7)	—	砂粒	鈍い橙色	沈線文	ナデ
59		99003325	ＢＤ54－25，№21	〃	〃	—	(5.1)	—	砂粒	橙色	爪形文、沈線文	横位の条痕
60		98001562	ＢＣ54－21，№61	〃	〃	—	(2.9)	—	砂粒	褐色	横位の条痕	条痕後ナデ
61	12-2	98001558	ＢＣ54－19，№10	〃	〃	—	(3.5)	—	砂粒・カクセン石	褐色	貝殻腹縁押引文	ナデ
62	12-3	98001222	ＢＣ55－9，№38	〃	〃	—	(3.3)	—	砂粒・雲母	橙色	貝殻腹縁押引、条痕	ナデ
63	12-3	98001221	ＢＣ55－9，№35	〃	〃	—	(5.2)	—	砂粒・雲母	橙色	貝殻腹縁押引、条痕	横位の条痕
64	12-3	98001216	ＢＣ55－8，№118	〃	〃	—	(4.0)	—	砂粒・雲母	鈍い橙色	条痕	ナデ
65	12-2	98001559	ＢＣ54－21，№5	〃	〃	—	(5.4)	—	砂粒	橙色	爪形文	横位の条痕
66	12-3	98001217	ＢＣ55－8，№118	〃	〃	—	(4.7)	—	砂粒・雲母	橙色	縦位の条痕	横位の条痕、ナデ
67	12-2	98001218	ＢＣ55－8，№92	〃	〃	—	(4.3)	—	砂粒・雲母	鈍い橙色	横位条痕、刺突列点	ナデ
68	12-2	98001542	ＢＤ54－25，№16	〃	〃	—	(4.4)	—	砂粒	鈍い黄橙	横位条痕、刺突列点	条痕後ナデ

Tab.2　戦場古墳群１区縄文時代の土器一覧表（２）

Fig.図番号	PL.番号	県遺物登録番号	出土地点	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土 ※混入物	色調	文様・調整 外器面	内器面
69	12-2	98001214	BC55－2，№73	縄文土器	深鉢	—	(3.6)	—	砂粒・雲母	鈍い橙色	斜位の撚糸文	横位の撚糸文、ナデ
70		98001515	BE54－14，№3	〃	〃	—	(5.5)	—	砂粒	鈍い黄橙	斜位の撚糸文	ナデ
71	12-2	98001220	BC55－8,№109,110	〃	〃	—	(12.3)	—	砂粒・雲母	明赤褐色	縦位の条痕	横位の条痕後ナデ
72	11-5	97002934	BD55－19，№18,29	〃	〃	—	(9.0)	—	砂粒・カクセン石	鈍い橙色	縦位の撚糸文	口縁横位撚糸文、ナデ
73	12-2	99003327	検出面	〃	〃	—	(5.8)	—	砂粒・雲母・滑石	橙色	沈線文	ナデ
74	12-2	98001543	BB55－2，№1	〃	〃	—	(4.0)	—	砂粒・雲母・滑石	橙色	沈線文	不明調整痕
75	12-2	97002938	BD55－2，№16	〃	〃	—	(6.0)	—	砂粒・雲母・カクセン石	橙色	横位の条痕	ナデ

Tab.3　戦場古墳群１区縄文時代の石器一覧表

Fig.図番号	PL.番号	県遺物登録番号	出土地点	器種	分類	石材	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	備考
16-76	12-5	96001508	BD55－7，№15	石鏃	凹基無茎鏃	黒曜石	1.8	1.3	0.4	0.7	
77	12-5	96001506	BC54－21，№87	〃	〃	〃	2.3	1.5	0.5	1.2	
78	12-5	96001502	BD55－2，№52	〃	〃	サヌカイト	2.2	1.5	0.4	0.8	剥型鏃
79	12-5	96001503	BD55－2，№65	〃	〃	黒曜石	2.75	1.6	0.5	1.7	
80	12-5	96001499	BB54－11，№14	〃	〃	サヌカイト	1.9	1.5	0.35	0.5	
81		96001498	BC54－14，№71	〃	〃	〃	(1.8)	1.7	0.3	0.6	
82	12-5	96001494	BB55－1，№15	〃	〃	〃	2.6	(1.9)	0.4	1.5	
83	12-5	96001505	BD54－14，№41	〃	〃	黒曜石	2.5	1.2	0.5	1.0	剥片鏃
84	12-5	96001500	BC55－1，№74	〃	〃	サヌカイト	2.0	1.5	0.4	0.6	
85	12-5	96001507	BC55－18，№2	〃	〃	黒曜石	2.5	1.5	0.4	1.0	
86	12-5	96001493	BC54－14，№19	〃	〃	サヌカイト	3.4	2.5	0.4	2.0	
87	12-5	96001490	BC54－16	〃	〃	チャート	2.1	1.7	0.3	0.7	
88	12-5	96001497	BC54－14，№10	〃	〃	サヌカイト	2.5	1.7	0.4	0.9	
89	12-5	96001501	BC54－10	〃	〃	〃	1.6	1.6	0.35	0.5	
90	12-5	99000991	BC54－13，№99	〃	平基無茎鏃	〃	2.3	(1.5)	0.4	(1.0)	
91	12-5	96001504	BB54，ST008周溝	〃	〃	黒曜石	2.6	1.9	0.4	1.2	
92	12-5	96001481	BC54－19	〃	凹基無茎鏃	サヌカイト	3.9	1.8	0.5	3.0	
93	12-5	96001496	BB54－17	〃	不明	〃	(3.0)	(1.6)	(0.4)	(1.8)	
94	12-5	96001491	BB53－16	〃	凹基無茎鏃	〃	2.8	1.4	0.4	1.2	
95	12-5	96001495	BB54－1，№58	〃	凹基無茎鏃	サヌカイト	(2.8)	(1.7)	0.4	(1.5)	
96	12-5	99000992	BC54－13，№40	〃	平基無茎鏃	〃	4.35	2.9	0.6	8.0	剥片鏃
97	12-5	99000993	BC54－22，№10	〃	不明	黒曜石	(2.3)	(2.3)	(0.8)	(2.7)	
98	12-5	96001509	BC55－6，№38	石刃	石刃	サヌカイト	(3.1)	(1.3)	(0.4)	(1.6)	
99	12-5	96001510	BB55－3，№2	石鏃	有茎鏃	〃	6.4	1.6	0.8	8.6	
17-100	12-4	96001492	BC54－12，№13	石匙	横型	〃	3.2	3.4	0.8	7.9	
101	12-4	96001488	BD55－5，№1	〃	〃	〃	4.5	7.3	0.7	19.1	
102	12-4	96001529	BC54－18，№10	〃	〃	〃	3.8	7.5	0.8	20.8	
103	12-4	96001528	BB55－1，№9	〃	〃	〃	4.1	(4.2)	0.8	13.4	
104	12-4	96001489	BB54－2，№73	〃	〃	〃	4.1	6.1	0.9	18.6	
105	12-4	99000989	BB55－18，№6	〃	〃	〃	4.0	7.6	0.8	20.7	
106	12-4	96001487	BB54－21，№1	〃	〃	〃	4.9	9.4	1.1	32.1	
107	12-4	96001485	BC54－19，№1	〃	〃	〃	6.2	14.2	1.2	89.5	
108		96001486	BC55－18，№5	〃	〃	〃	6.4	10.6	1.1	57.0	
109		99003329	BD55，カクラン	削器		〃	6.55	8.1	1.6		
18-110	12-4	96001482	BB54－13，№11	〃		〃	10.3	3.6	1.6	40.9	
111	12-4	99000997	BD55，ST007	〃		〃	9.2	4.4	0.8	28.7	
112	12-4	99000996	BD55－2，№1	〃		〃	7.0	6.0	0.8	47.0	
113	12-3	96001476	BC55－1，№1	磨製石斧		頁岩	16.0	6.5	3.0	455.0	
114	12-3	96001477	BD55－5，№2	〃		〃	16.0	6.5	3.0	455.0	
115	12-3	99000994	BD55－2，№13	磨石		凝灰岩	(6.9)	8.5	4.5	251.3	
116		99001683	検出面	〃			(5.2)	(7.1)	(3.9)		
117		96001478	BD54－25，№85	〃			(3.9)	6.3	4.6	123.0	
118	12-3	99001682	BD55－2，№51	〃							
119	12-3	96001483	BD54－25，№86	〃			(8.4)	8.2	5.1	440.0	
120	12-3	96001484	BC54－23，№36	〃			9.9	6.7	4.5	418.0	
121		99000987	BC54－20，№51	〃			(5.2)	(8.3)	3.1		
122		96001479	BF54－15，№1	〃			8.0	6.2	4.6	269.0	
123	12-3	99001681	BD55－8，№14	〃			10.2	8.7	7.1		
124	12-3	99001684	BD55－3	〃			8.15	7.9	5.5		

離を施している。110は横長剥片の縁辺部に両面から剥離を行い刃部を作り出している。111・112は縦長剥片を素材とするもので、111は片面に自然面がそのまま残り、鋭い側辺部の一方のみに急角度に調整された刃部を作り出す。刃部の調整は片面からのみ施される。上部には両側から粗く抉りを入れ、つまみ状に作り出しているようである。112は両側辺の端部付近のみに小さな剥離を加えて刃部を作り出すもの。その他、98はサヌカイト製の不明製品で縦長剥片の図中下方に茎部を作り出し、さらに両側辺から抉りを入れるもの。さらにその上位では片側側辺に小さな剥離を行い刃部を作る。

113・114は磨製石斧で完形である。いずれも両刃で蛤刃をなし、刃こぼれ全く認められない。ほぼ前面に研磨が施され、113は石斧主面と側縁の間に明瞭な稜を持たず、横断面形は楕円形を示すが、114は一方の側縁に面を持つ。115～124は礫石器でほとんどが磨石として使用されたものであるが、116・119などでは側縁部部に敲打による剥離が見られる。また、123・124は平滑になるまで磨かれた面を持つもので砥石的な使用がなされたものと推定される。

この他、石核が11点余り出土しており、このうち３点は黒曜石でほかはサヌカイトである。黒曜石は６cm未満の小型のものであるが、サヌカイトはより大型のものが多く、20cmを超える大型のものも見られる。このことは剥片石器の素材が、小型の鏃のみ黒曜石で、ほかはすべてサヌカイトを用いている点と合致している。

３．弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構として、弥生時代前期前半に位置付けられる甕・壺棺墓５基が確認されている。これら５基としたものは、僅かに楕円形の浅い掘り込みとその内部の埋土中から検出される甕・壺の破片から推定したものであり、明らかに棺体として埋置された状態で確認したものは皆無である。また、出土した土器については甕・壺共に器高30cm未満の小型品が多いが、底部片のみながら底径からやや大型の壺かと思われるものや、埋葬専用の長胴壺なども見られる。推定の域は出ないものの、甕については小児棺、壺については小児棺の他、供献土器である可能性も高く、本来的には支石墓であった可能性が考えられる。後述する戦場古墳群６区では上石を欠いた支石墓１基が確認されており、本調査区においても、かつて支石墓であった遺構が、古墳築造の際の地山整形により削平を受けた上、上石が石室石材に転用されたりして大きく破壊を受けたものと推測できよう。

(1) 甕・壺棺墓 (Fig.20)

ＳＪ013甕棺墓　調査区のほぼ中央部、ＳＴ008とＳＴ004の間に位置し、北に約１ｍ離れてＳＪ041が、南に約１ｍ離れてＳＪ027が検出されている。ＳＪ013では長軸0.9ｍ、短軸0.85ｍのほぼ円形に近い楕円形の浅い掘り方の中央部から、甕の口縁部及び胴部片が十点余り出土している。掘り込みの深さは約0.1ｍと浅い上に、土器は検出面からほぼ浮いた状態で検出されたことから、遺構についてはほとんど削平を被っているものとみることができよう。

ＳＪ024甕棺墓　調査区中央のやや北より、ＳＴ004古墳の北東約５ｍに位置する。確認された遺構は平面不整形の浅い掘り込みで、長さは1.0ｍ、幅0.55ｍ、深さは最大0.15ｍである。遺構のほぼ底面近くから甕の胴部片が三十点余り出土しているが、形態が窺える部位が見られないため、出土土器については図示していない。土器の他、大きさ30cm程度の花崗岩礫が見られ、土器を押し潰すような形で検出されている。

ＳＪ027壺棺墓　ＳＪ013甕棺墓とＳＴ008古墳の間に位置し、平面楕円形の掘り方の中央から壺の底部片が検出されている。掘り方は長軸0.5ｍ、短軸0.4ｍで、底面付近で埋土と地山の境が不明瞭となるため詳細は不明であるが、検出面からの深さは最大でも0.05ｍ程である。壺は底面を下に向けた状態で検出されており、体部のほと

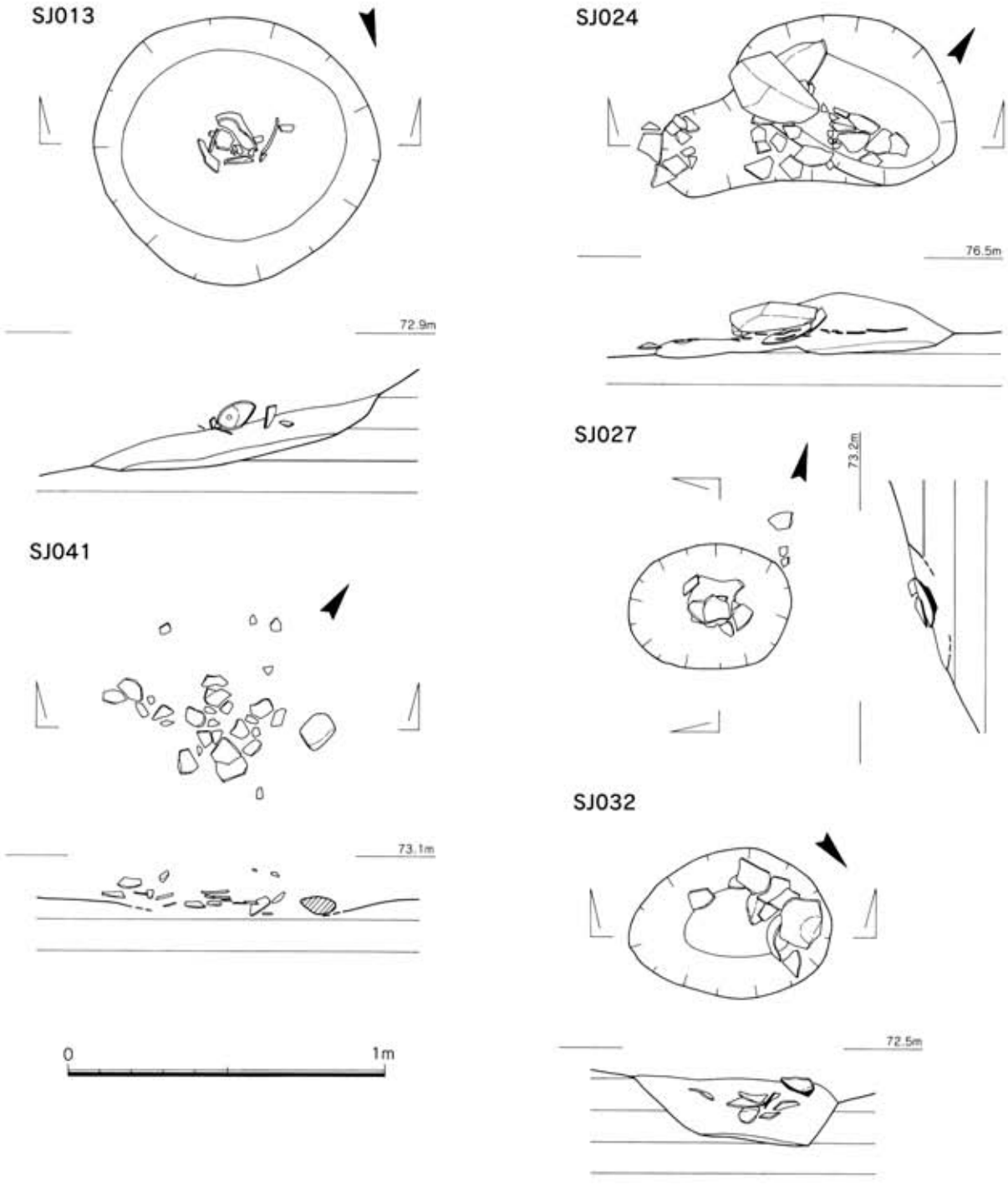


Fig.20　S J013，024，027，032，041甕・壺棺墓（1：20）

んどを削平されているものの、かろうじて埋置されていた状態を保っていると言える。

ＳＪ032壺棺墓　ＳＴ005古墳の石室南側の墳丘下より確認されたもので、ＳＴ005築造時の地山整形により削平を受けたものと思われる。ＳＪ027甕棺墓と同様、楕円形の掘り方内部より弥生土器の破片が検出されたもので、掘り方の長軸は0.65m、短軸は0.47m、深さは甕棺墓の中で最も深く、検出面からの深さ0.2mである。出土した土器は十数点であるが、特徴的なのは供献土器としての小型壺の他、長胴型の大型壺が検出された点で、供献土器を伴う壺棺墓であったものと推定される。

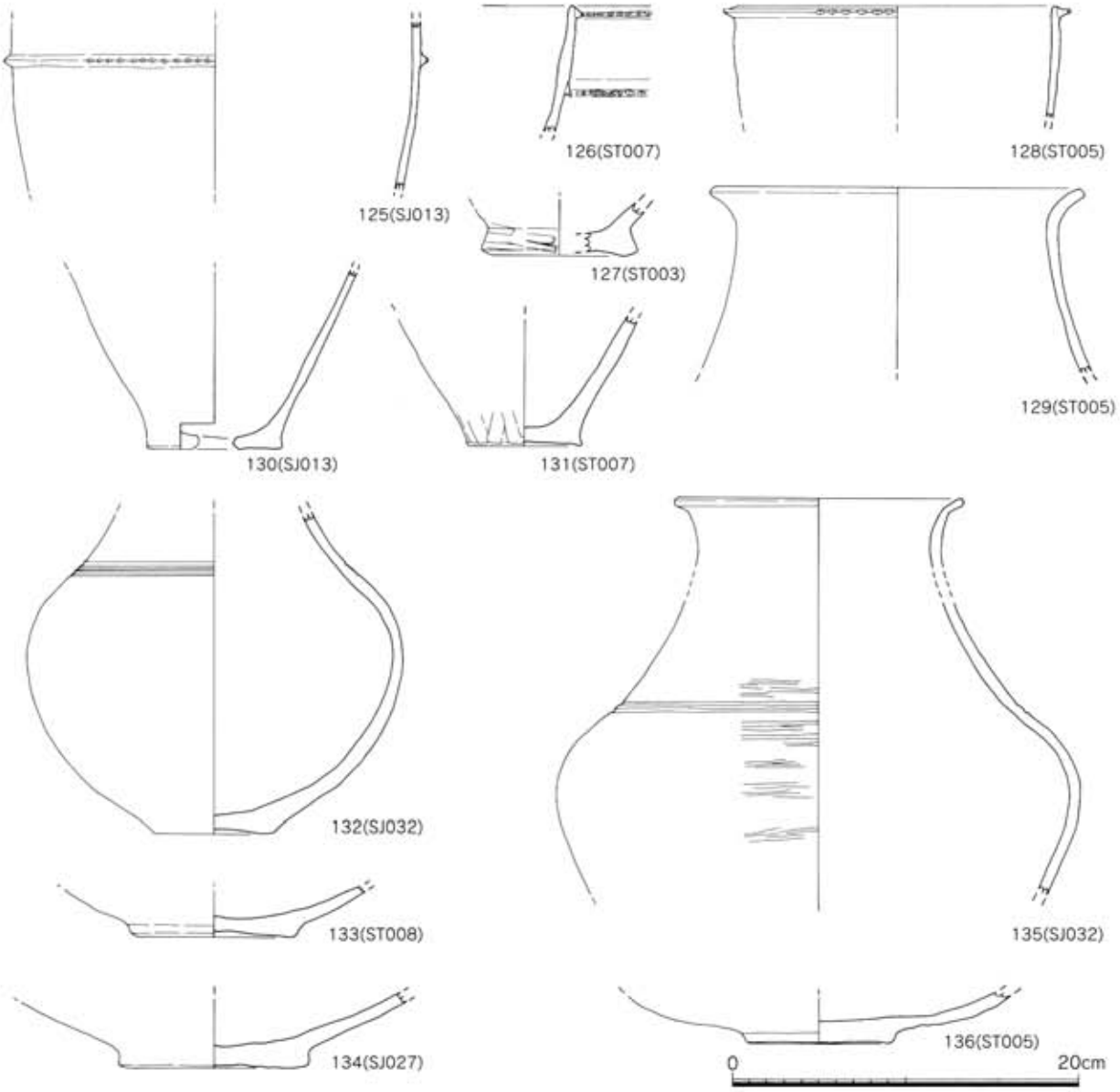


Fig.21　甕・壺棺ほか弥生時代前期の遺物（1：4）

ＳＪ041甕棺墓　ＳＪ013甕棺墓とＳＴ004古墳の間に位置する。本遺構では明確な掘り方は確認されておらず、破砕された甕の破片が集中して検出されたことから甕棺墓の存在を想定している。甕は小型の突帯文土器と思われるが、口縁部及び底部を欠いており、図示に耐えるものは見られなかった。

（2）甕・壺棺墓に用いられた土器等（Fig.21）

甕・壺棺墓の他、古墳の墳丘盛土中及び遺構検出面上で弥生時代前期前半の土器が確認されている。

125・130はＳＪ013甕棺墓出土の甕で同一個体である。125は胴部上半部で二条突帯の下部のみ遺存する。突帯は断面形が三角形で端部には浅く小さな刻み目が施される。130は胴下半部で底部は僅かにくびれる。底面には焼成後に穿孔が施される。いずれも調整は内外面共にナデである。132・135はＳＪ032壺棺墓出土の壺、132は小型の壺で球形に膨らむ胴部から頸部に向けて緩やかにすぼまるようであるが口縁部を欠いている。肩部には細い沈線を３条巡らす。135は長胴壺と思われるが胴部下半部を欠く。肩部は丸みを持って張り、頸部は一端すぼま

Tab.4　戦場古墳群１区弥生時代の土器一覧表

Fig.図番号	PL.番号	県遺物登録番号	出土地点	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土 ※混入物	色調	文様・調整 外器面	内器面
21-125	13-3	96001034	ＳＪ013	弥生土器	甕	—	(9.5)	—	砂粒多量	暗赤褐色	ナデ	ナデ
126		96000496	ＳＴ007周溝3区	〃	〃	—	(7.3)	—	砂粒多量	橙色	ナデ	ナデ
127		96000500	ＳＴ003墳丘1区	〃	〃	—	(3.1)	(9.0)	砂粒多量	橙色	ヘラナデ、ナデ	ナデ
128		96001037	ＳＴ005墳丘2区	〃	〃	(18.0)	(6.5)	—	砂粒少量	褐色	磨耗のため不明	磨耗のため不明
129		96001033	ＳＴ005 3区	〃	壺	(20.8)	(10.6)	—	細砂粒多量、雲母	橙色	ナデ	ナデ
130		96001034	ＳＪ013	〃	甕	—	(10.2)	7.8	砂粒多量	暗赤褐色	ナデ	ナデ
131		96000497	ＳＴ007周溝3区	〃	〃	—	(7.6)	6.3	砂粒	橙色	ヘラナデ、ナデ	ナデ
132	13-3	99003330	ＳＪ032、№9	〃	壺	—	(18.5)	(7.0)	小石多量	橙色	ミガキ	ナデ
133		96000498	ＳＴ008墳丘	〃	〃	—	(3.0)	(9.0)	小石少量	橙色	ナデ	ナデ
134		96001032	ＳＪ027、№5	〃	〃	—	(4.3)	(10.8)	砂粒多量	橙色	ナデ	ナデ
135	13-4	99003331	ＳＪ032、№7・8・12	〃	〃	(17.0)	(23.0)	—	砂粒多量	橙色	ミガキ	ナデ
136		96000499	ＳＴ005墳丘	〃	〃	—	(3.0)	8.0	小石、細砂粒多量	橙色	ナデ	ナデ

り口縁端部付近は外方へ折れる。134と同様肩部に２条の沈線を持つ。調整は134・135共に外面ヘラミガキ、内面はナデである。134は壺の底部片でＳＪ027壺棺墓出土。底部から体部にかけてはかなり大きく膨らむようである。

126～129・131・133・136は古墳の墳丘盛土・周溝埋土の出土。126・131はＳＴ007古墳出土で、126は二条突帯を持つ甕の口縁部、胴部から口縁部にかけては緩やかに内湾して続く。上部突帯の上端は口縁端部に接しており、突帯はいずれも断面三角形で細く浅い刻み目を連続させる。131は甕の底部で底部付近で僅かにくびれぎみになり、胴下半部は直線的になるようである。127はＳＴ003古墳出土で甕の底部、131と異なり胴下半部は膨らみぎみになるようで、底部のくびれ具合も大きく、底部底面は僅かに凹面をなす。胴部外面は条痕後ナデ、底部の外面はヘラ条工具による横方向のナデを施す。128・129・136はＳＴ005出土。128は口縁端部に突帯を一条持つ甕で、突帯はつまみ出すように外方に伸び、端部には浅い刻み目が施される。129は大型の壺の頸部から口縁部にかけての部分で、口縁部は大きく外反する。136は大型壺の底部。133はＳＴ008古墳出土で同じく壺の底部。

４．古墳時代の遺構と遺物

古墳は８基が確認されており、細かくは４つのグループに分けられる（Fig.６）。このうち、ＳＴ001古墳は調査区内東側の尾根上の高所に単独で立地しており、石室規模は最も大きい。谷部にはその他７基の古墳が位置するが、前述のとおり旧地形ではさらに深い谷が南から伸びて北西方向に続いており、谷部の古墳群を南北に分けている。北側にはＳＴ004・005・007・008・020古墳が分布するが、ＳＴ008古墳が他の４基と12m程と若干の距離を空けており、他の古墳は周溝を接する、あるいは４m程の間隔を持って近接して密集する。また、谷部の南側にはＳＴ002・009古墳の２基が近接して分布しており、谷部北側の一群の周辺には未だ古墳を築造できるスペースが残っていることから、やはり意識的に谷で隔てられた対岸に別個の墓域を求めたものと推定される。この他、奈良時代から平安時代前期の火葬墓と思われる集石遺構はすべて谷部北側に位置し、特に７世紀後半のＳＴ004古墳の囲むように分布しているのは興味深い。

古墳の残存状況は、谷部の古墳については流土に覆われた後に蜜柑園造成により削平を被ったためか、周溝及び墳丘下部・石室下部については比較的遺存しているものが多いが、天井石が残っていたものは見られなかった。またＳＴ001古墳は尾根上部、ＳＴ007古墳は尾根の鞍部に立地しているため、造成及び蜜柑の植樹壙による破壊が著しく、特にＳＴ007古墳は奥壁と推定される立石が残るのみで石室規模でさえ詳細不明である。以下に古墳毎に概要を述べる。

ＳＴＯＯ１古墳（Fig.22～26）

墳丘・周溝（Fig.22）　尾根上に単独で立地する。全面が蜜柑園造成による破壊を受けている他、古墳裾部東を

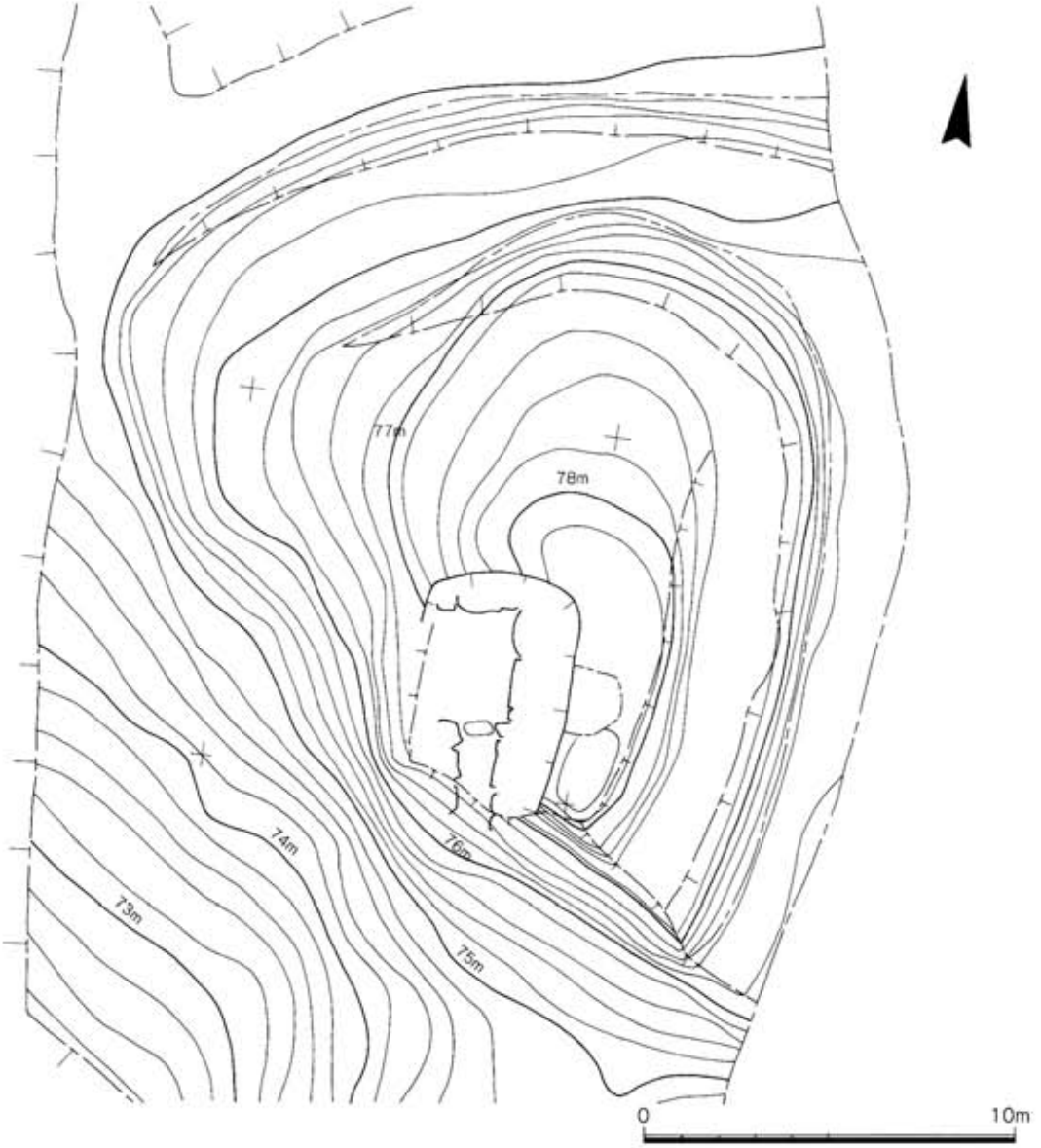


Fig.22　ＳＴ001古墳測量図（1：200）

南北に走る農道によりカットされ、旧地形はかなり改変されている。よって墳丘は東側に僅かに遺存するのみでとんど失われている上に、石室北西側から南東側までが地山面に至るまで二段にカットされていることから墳裾は明らかでなく、墳径は不明である。また、僅かに地山面が旧状を留めていると考えられる石室北西側においても周溝の掘り込みは検出されておらず、その有無についても不明であるが、尾根上の立地ということを考慮すれば本来的に周溝を持っていなかった可能性も十分考えられる。なお、石室前面も羨道部まで掘削を受けており、墓道についても検出されていない。

内部主体（Fig.23）　単室両袖型横穴式石室で、ほぼ真南に開口し、石室の主軸方位はＳ－10°－Ｅである。石室は西側から南側にかけて石室掘り方まで掘削を受けており、石室西側壁体及び羨道羨門部分の石材は完全に失われている。また壁体が遺存している各壁体についても、石積みは玄室右壁が最大５段残る他は、奥壁は腰石のみ、羨道は右・左壁共に３段程度がかろうじて旧状を留め、天井石については全く残っていない。

石室掘り方は左壁奥隅から右壁奥隅、右側羨道部分まで残存するが、奥壁側のコーナーは比較的緩やかなカーブを描き、玄室から羨道にかけてはすぼまって続く。また、掘り方の上面は石室東側のみが削平を被っておらず、

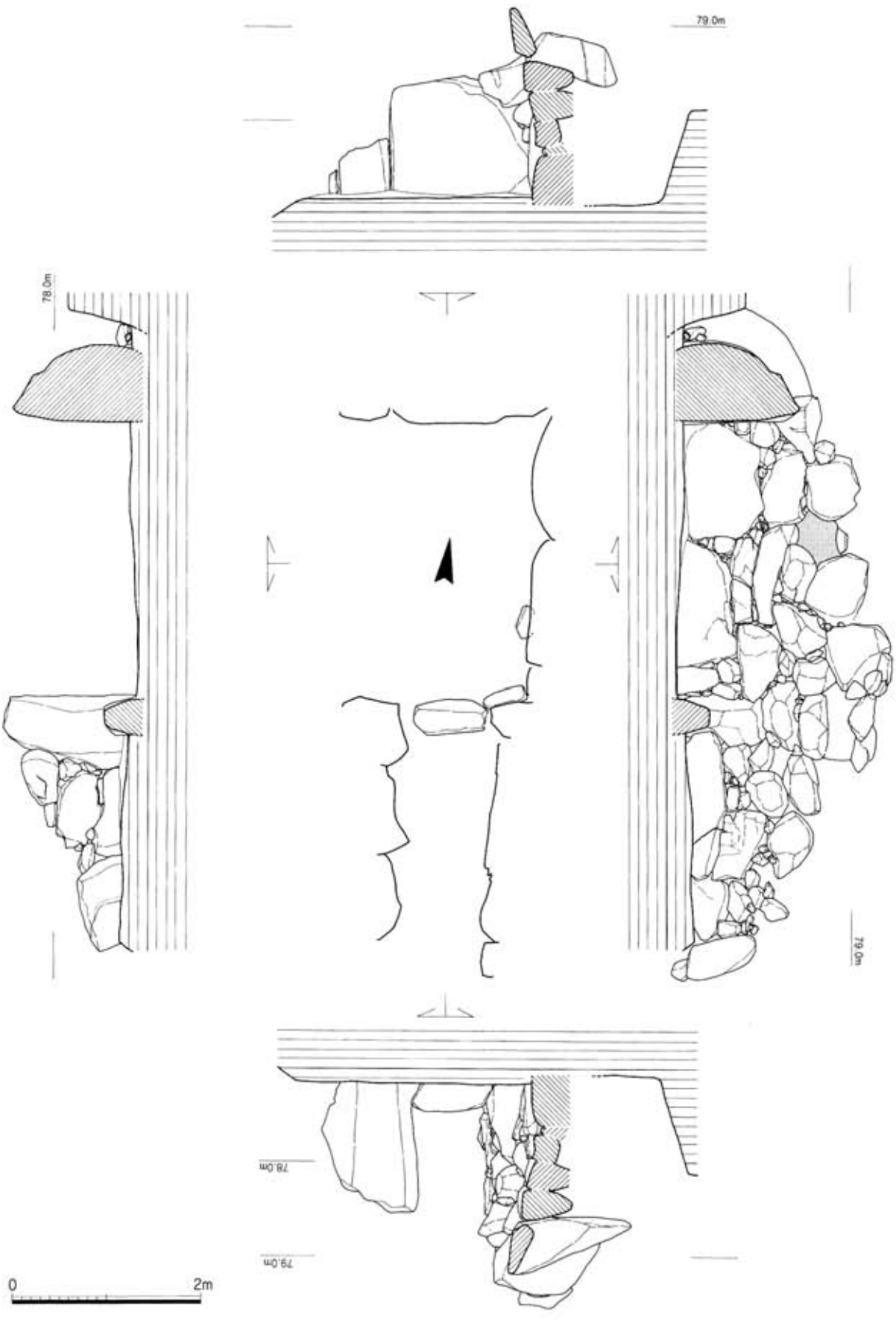


Fig.23　ＳＴ001古墳石室（1：60）

上面から掘り方底面までは約0.1mの深さがある。

右壁側で見る限り、掘り方の掘り込み面の高さは腰石上面のレベルとほぼ揃っている一方、奥壁側については腰石より0.6m程低い位置に掘り方上面レベルがくるが、特に石室北側は墳丘基底面まで削平を被っており、本来の掘り込み面の高さは石室右壁側とほぼ同レベルであろう。

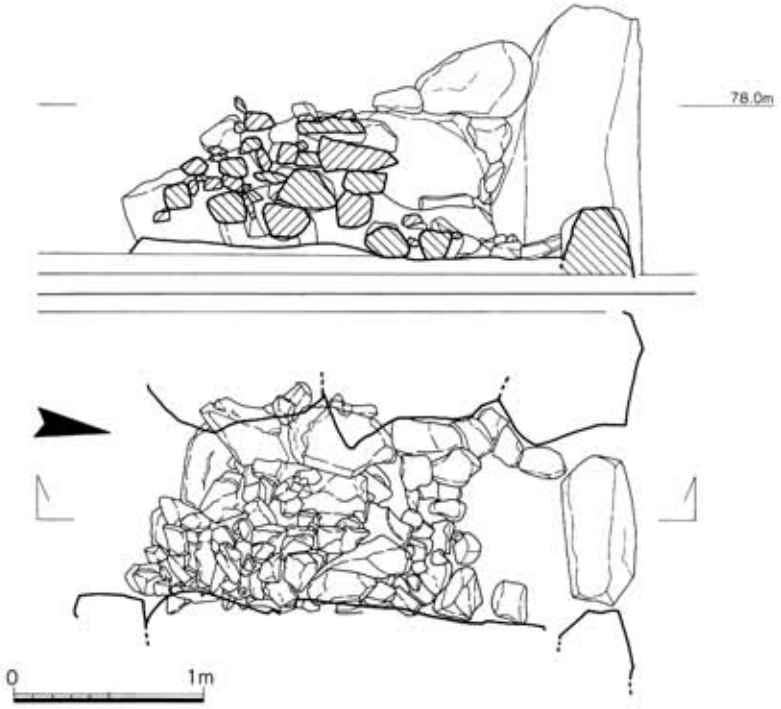


Fig.24　ＳＴ001古墳閉塞状況（1：40）

石室は残存長約７m、長方形玄室に天井石を架構する長い羨道を付設するものと推定され、袖石は内側に突出せず、玄門幅と羨道幅はほぼ等しい。玄室は左壁が失われているものの、奥壁・前壁共に壁体下部のラインはほぼ完全に残されている。玄室は整った長方形をなし、奥壁幅2.1m、前壁幅約２m、右壁長3.0m、左壁長3.0mで玄室長と玄室幅の比は１：1.5である。壁体構造では奥壁・右壁共に腰石を配置するが、奥壁は右壁よりに幅約２m、高さ約1.5mの立面形長方形の大石を横位に立て、その左側に幅0.5mの石を配置して幅を調節している。右壁は二つの大型の石を横位に置いて腰石とし、さらに袖石との間に小さな石を立てて長さを調整しているようであり、奥壁側の腰石は長さ約1.2m、高さ約0.8m、前壁側の腰石は長さは約1.3m、高さ約0.5mで、さらにより小ぶりな横長の石を前壁側の腰石上に横位に配置して両者の上面の高さを揃えている。この腰石上の壁体は大きさ0.6～0.8mの転石からなるが、特に横長の石材を選択的に選んだ様子はないものの、ほぼ一段毎の目地が揃うように横位に積み上げてあり、持ち送りは緩やかで、個々の石材の内側に向く面がほぼ面を揃えている。

玄門部は右・左側共に立柱石を立てて構成しているが、左右の石材の形状・大きさは全く異なり、左側には高さ約1.4m、玄室側の幅で約0.6mの大石を立てるのに対し、右側は高さ約0.9m、玄室側の幅約0.35mの小型の石を配置しており、結果的に玄室前壁のやや右よりに片寄って羨道が取り付けられている。興味深いのは左側立柱石の上面と奥壁腰石の上面の高さがほぼ等しく、さらに石室掘り方上面の高さともほぼ同じになる点であり、おそらく石室構築にあたっての最初の工程として掘り方上面の高さと揃うように下部壁体を積み上げているものと推測される。なお、楣石については既に失われているが、左袖石の直上に架構されていたものと推定され、この場合は玄室床面から楣石の下面まで、いわゆる前壁高は約1.4mとなる。

羨道は前述のとおり、玄門部幅と変わらない幅で羨門方向へ伸びるもので、玄門部幅は約１m、袖石間には框石が一石配される。羨門部分は失われており、右壁で約2.8m、左壁で約2.4mが遺存する。羨道壁体は左右とも最下段には横長の石材を横位に配置しており、残りの良い右壁で見ると上部壁体よりやや大きな石を用いている。また、右壁最下段では二石を横位に据えたさらに羨門側ではやや小ぶりの石を縦位に立てている。なお、壁体は

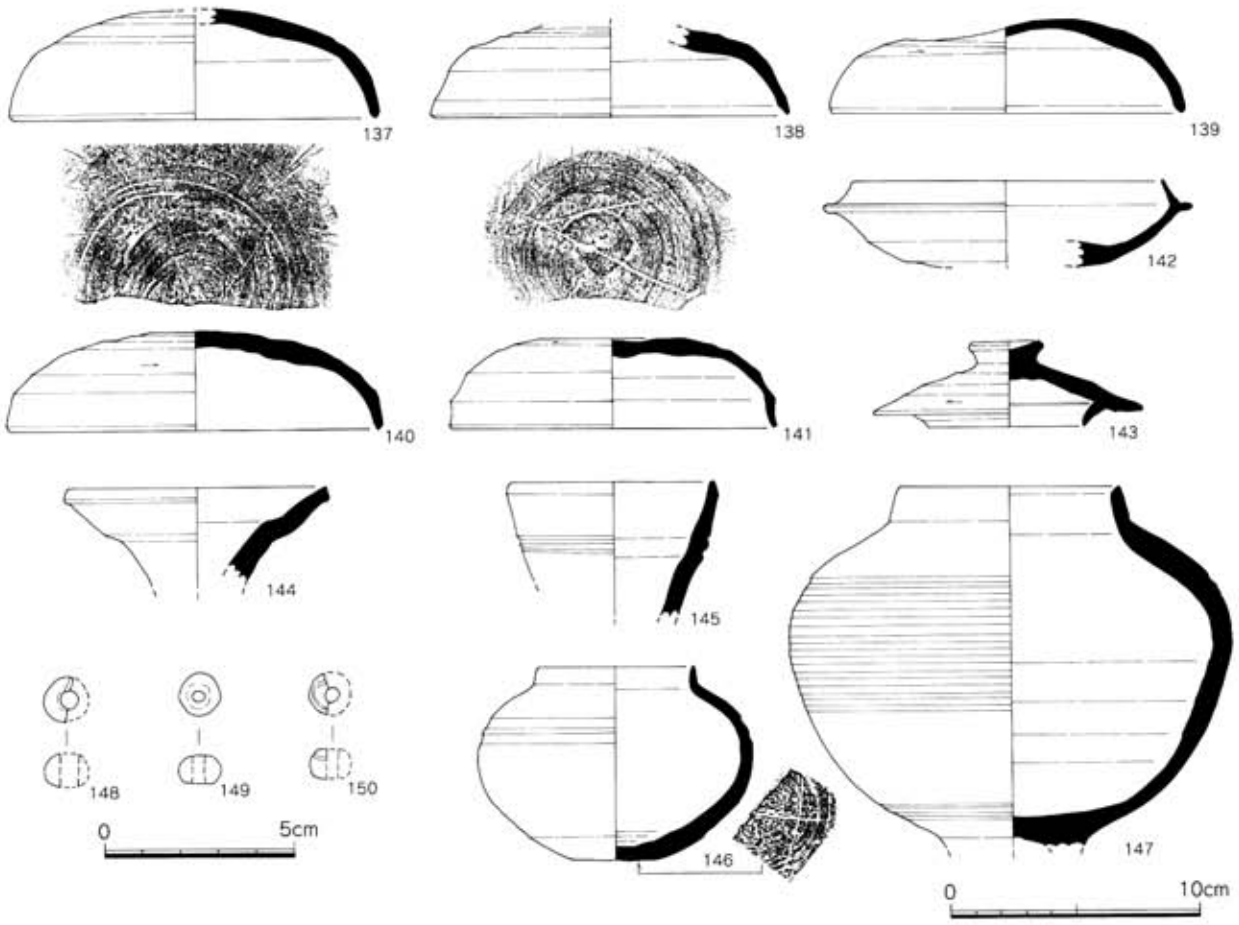


Fig.25　ＳＴ001古墳出土遺物１（148～150は1：2、他は1：3）

玄室の積み方と大きな違いはなく、目地も玄室と揃うことから、玄室・羨道同時に構築されたものであろう。

玄室・羨道共に床面には敷石は全く遺存しておらず、かなり撹乱を受けているが、原位置は留めていないものの、須恵器及び馬具等の鉄製品が出土している。

閉塞石（Fig.24）は羨道部で一部残存しており、框石との間に約0.5mの空間を空けている。石積みは塊石積みで高さ約0.7mが残っており、下部及び玄門側に大きさ0.3～0.4mの礫を、上部及び羨門側には大きさ0.2m以下の小礫を積んでいるようである。

ＳＴＯＯＩ古墳出土遺物（Fig.25・26）　須恵器の他、ガラス製小玉、鉄製品として馬具が玄室・羨道より出土している。

137～147は須恵器、杯蓋・杯身・甕・短頸壺の他、提瓶あるいは平瓶と思われる口縁部が見られる。137～141は杯蓋である。141を除くいずれも口径14cm以上で、141は口径約12.8cmである。140・141は天井部外面にＶ字形のヘラ記号を持つ。142は杯身で口径約12.4cm、立ち上がりは直線的に伸びて内傾し、その長さは約0.55cm。144は甕の頸部から口縁部、口径10cmと小型のもので、頸部から一度段を持って口縁部は緩く外反する。145は直線的に開く口縁部で、口縁下に二条の沈線を巡らす。提瓶あるいは平瓶と思われるが、大きさから提瓶の可能性が高い。146・147は短頸壺で、146は口径6.2cm・器高7.6cmと小型、147は口径8.7cmで脚台が付く。146は胴部中央に最大径が位置し、最大径のやや上位に二条の凹線を巡らす。底面には十字形のヘラ記号が見られる。147は胴部のやや上位の最大径が来ることによりやや肩の張った器形をなし、胴部中央にはカキ目が施される。なお、143

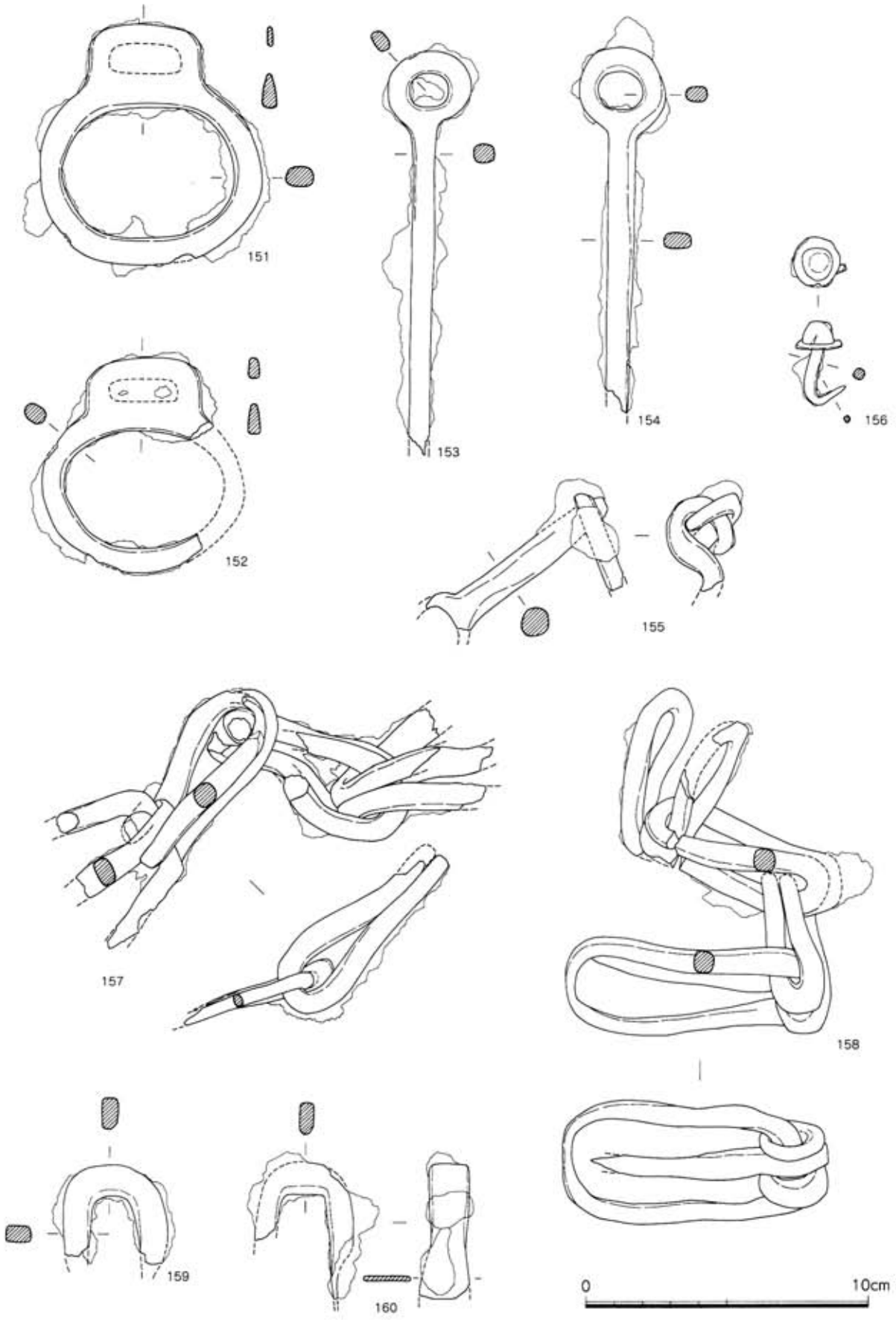


Fig.26　ＳＴ001古墳出土遺物２（1：2）

は壺の蓋と思われ、ボタン状のつまみが付く。

148～150はガラス製小玉、いずれも径約1.2cmで厚さは約0.7～0.8cm、孔の径は0.35～0.4cm、色は148・150が淡緑色、149は表面風化のため不明である。

鉄製品は馬具が確認されており、轡・雲珠・鐙が見られる。151～155は轡で、151・152は板状立聞素環鏡板である。いずれも楕円形で、151で見ると鏡板は長軸8.0cm、短軸は約7cm程、立聞幅約4cmである。153・154は引手、155は銜である。156は貝製雲珠の座金具であり、円形の座金具の裏面に貝殻の圧痕が観察される。座金具は直径約2.5cm、宝珠飾の高さは約0.7cmである。157から160は木製壺鐙に伴うものと思われ、157・158は鐙靼で兵庫鎖と鉸具が遺存する。鎖は3環が連接する。159・160はU字形金具の付け根部分である。

ＳＴ００２古墳（Fig.28・29・30）

墳丘・周溝（Fig.28・29）　調査区内の南側、ＳＴ009と1.5m程の間隔を持って隣接し、細く深い谷を隔ててＳＴ008と南北に対峙する。墳丘はすべて削平され、基底面まで掘削を受けているが、内部主体は小型の石棺系石室であるため、本来的な盛土は蓋石を覆う程度の0.6～0.7mぐらいのものであったと推定される。周溝は山側にあたる北側及び西側のみに巡り、北西側で1m程途切れている。周溝の上面も削平を被っており、現況では最大幅0.8m程が遺存する。正確な墳径は不明であるが、おおよそ7mから7.5mと思われる。

内部主体（Fig.30）　各壁の最下段の石材を石棺状に縦位に配置して竪穴式石室を構築する、いわゆる石棺系石室である。石室の規模は全長約1.8mと最も小型であり、石室掘り方は壁体を据えるに足るだけの最低限の大きさで長軸2.0m、短軸1.0mを測る。石室平面形は南側小口が狭く、北側小口が広い概ね長台形をなすことより弥生時代後期以来の箱式石棺に良く似ており、北側小口を頭位とすれば石室主軸はＳ－23°－Ｗとなる。しかし、南側小口の壁体は、長辺にあたる東西の壁の長さがそれぞれ違う（西壁長1.5m、東壁長1.2m）ことから斜めに配置されており、北側小口での内法幅0.35mに対して、南側小口では幅0.45mと計測値上では逆に南側が広くなっている。前述のとおり、各壁はまず石材を立てて据えることによって構築されており、南北小口部分では1石、東西の長辺では東側で3石、西側で5石が配される。上部の壁体は1段遺存しており、下部に立てた石材よりひとまわり小さな石を用いているが、概ね平たい石を選択しており、竪穴式石室風に面の揃った小口部分を石室内側に向けて積んである。天井石はすべて失われており石室天井高は不明であるが、ほぼ同規模の石棺系石室である浦田古墳群2区ＳＴ022・023で見れば、壁体はあと2段程度は積まれていたものと推定され、石室天井高は約0.6mから0.7m程であったと推定される。石室内は撹乱を被った様子は見られないものの、敷石は検出されておらず出土遺物も未確認である。なお、石材はすべて花崗岩である。

出土遺物　本墳からの出土遺物は確認されていない。

ＳＴ００４古墳（Fig.27・31・32・39）

墳丘・周溝（Fig.27）　谷部に位置し、ＳＴ005・007・020と共に一群を構成する。ＳＴ004古墳は最も小規模のもので、墳丘は他の古墳と同様、削平を受けているが、石室背面を中心に約0.3cm程度が遺存している。周溝は山側、つまりは石室背面から石室西側のみに半月形に巡り、断面形はＶ字形、幅は最大約1.6m、深さは約0.6mである。周溝内から古墳に伴うと思われる遺物は確認されていない。墳径はおおよそ5.5m程度と思われる。なお、古墳の南西側には約1.5mに奈良時代の集石遺構ＳＸ006が、周溝北側約1mには同じくＳＸ021が近接する。

内部主体（Fig.31・32・39）　横穴式の小石室でほぼ南に開口し、主軸方位はＳ－20°－Ｅである。石室は比較的良好に遺存しており、天井石及び上部壁体を欠いているが本来的に石室高は低いものと思われ、壁体についてはほとんど旧状を残しているものと推定される。

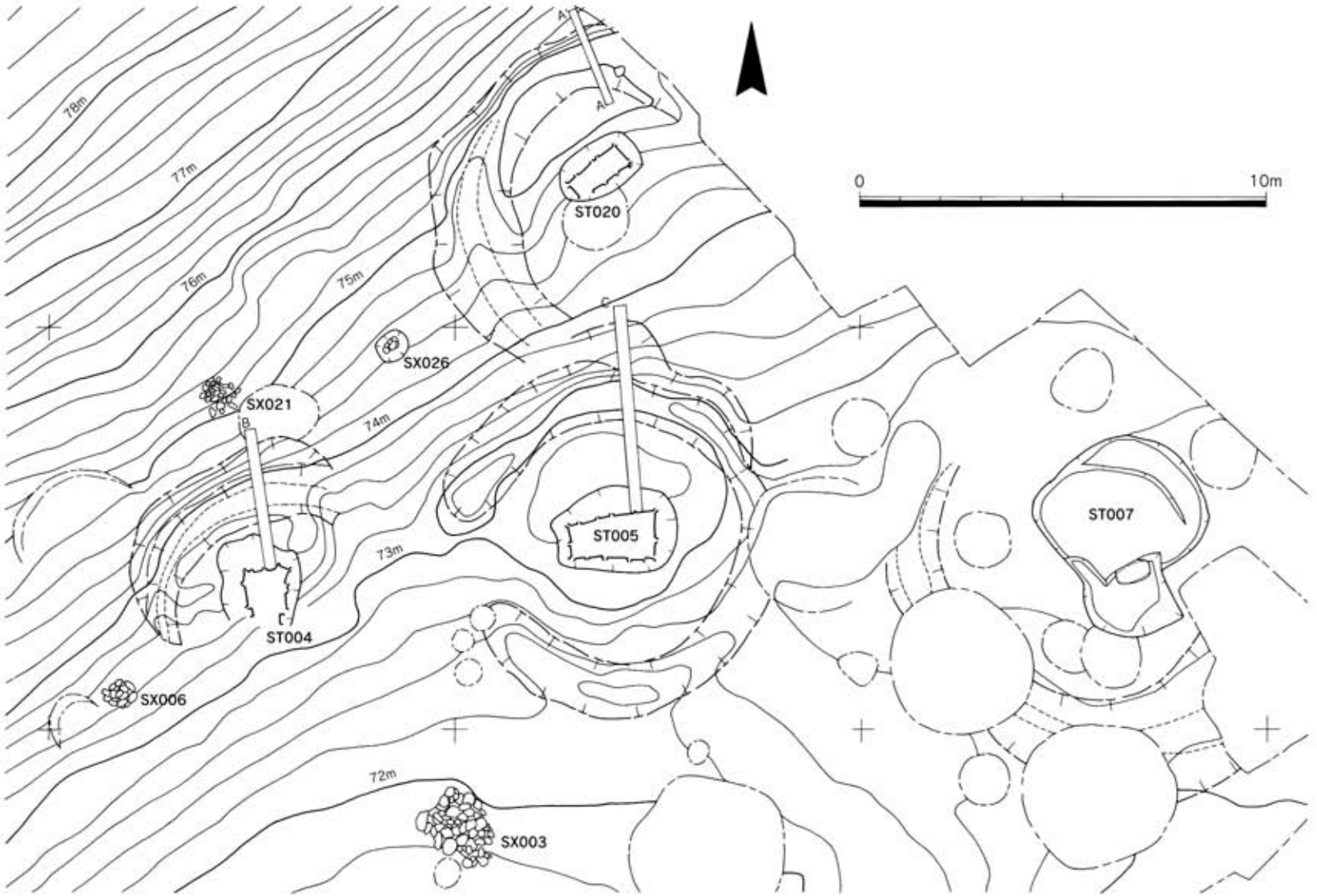


Fig.27　S T004，005，007，020古墳測量図（1：150）

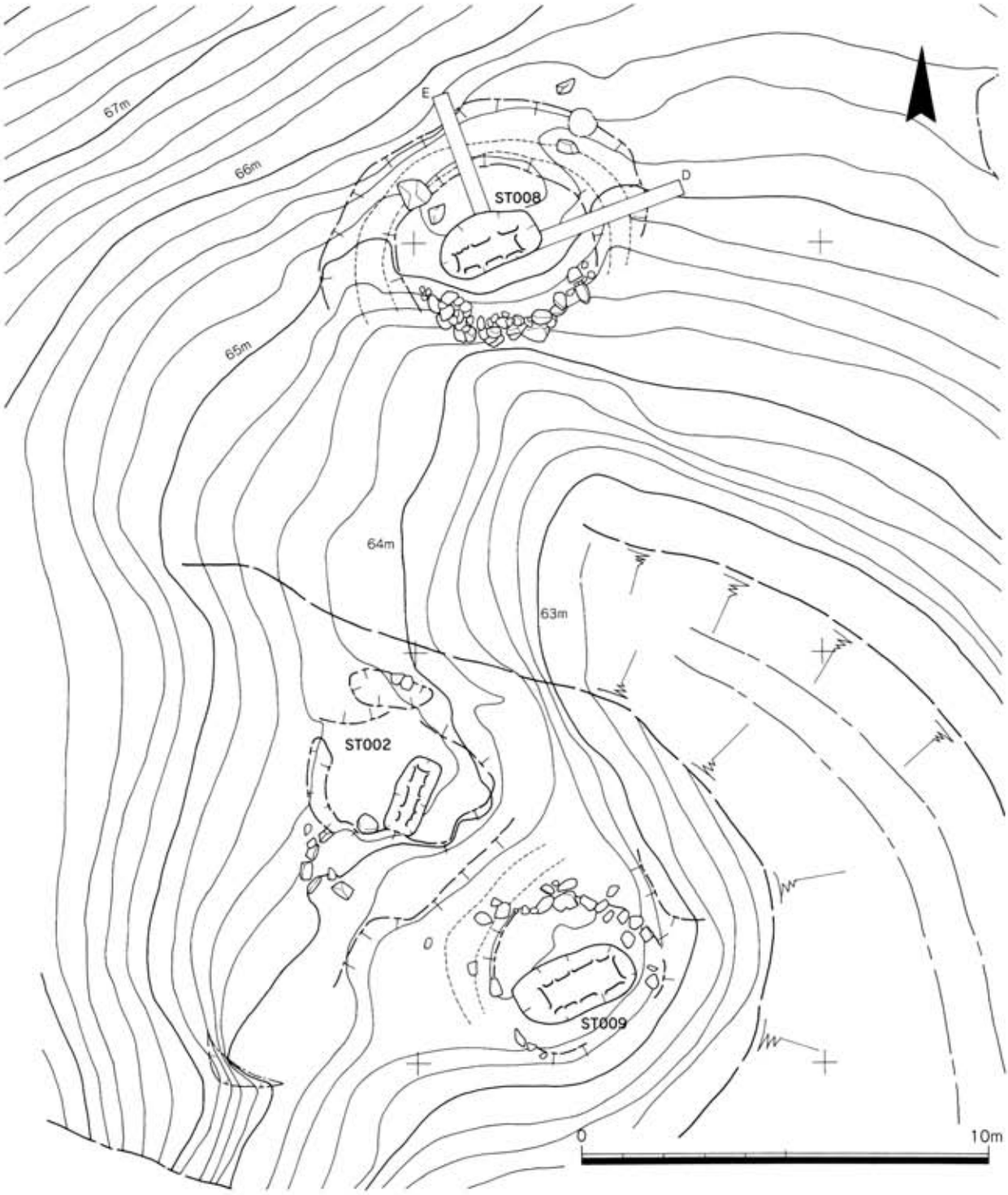


Fig.28　ＳＴ002，008，009古墳測量図（1：150）

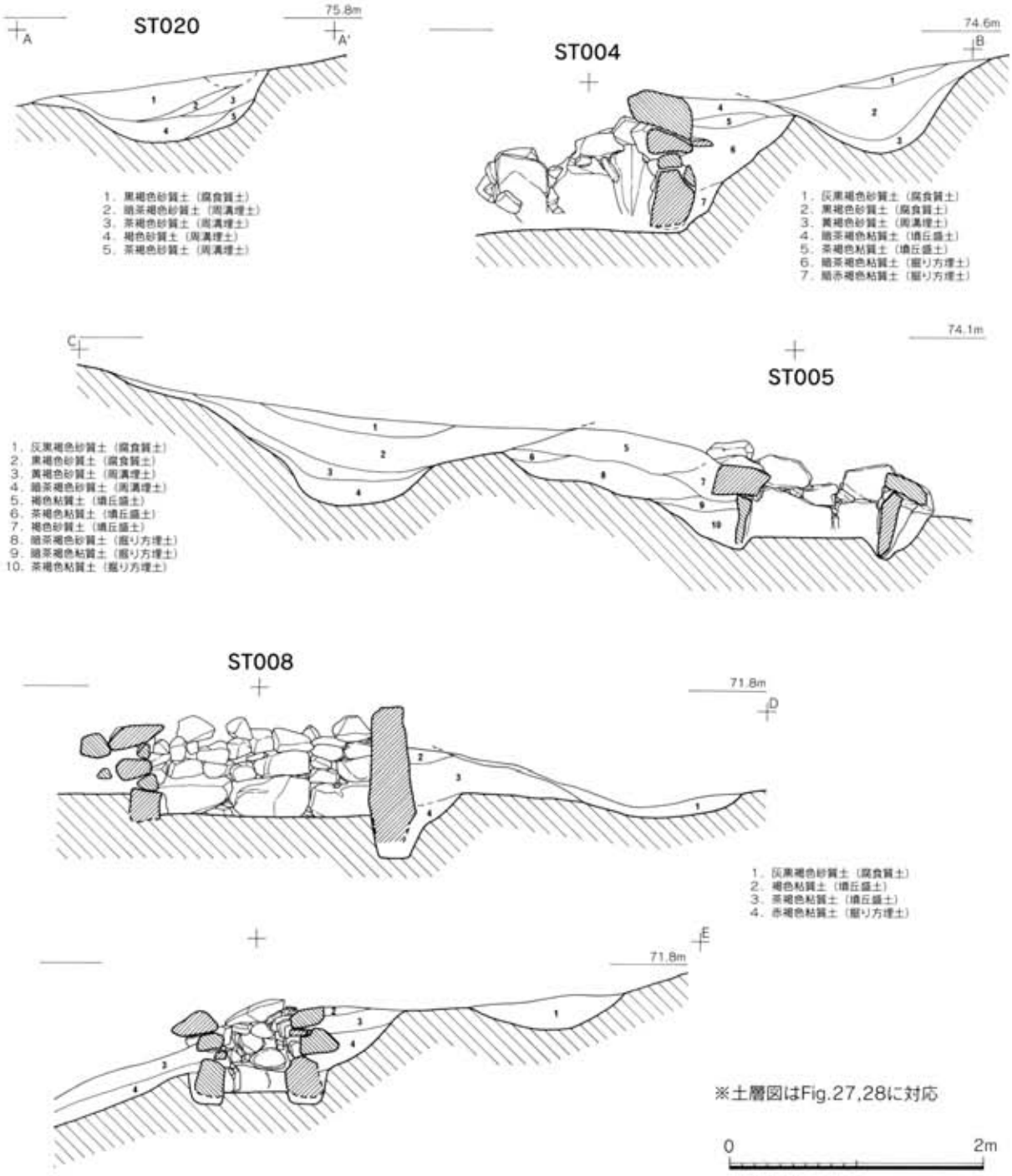


Fig.29　ＳＴ004，005，008，020古墳土層図（1：50）

石室掘り方は不整形で石室規模とぎりぎりの大きさに掘削されており、奥壁側で見れば掘り方上面から底面までの深さは約0.9mを測る。掘り方上面と奥壁の残存高は0.3m程度しかなく、墳丘はその多くが地山整形によって形造られ、盛土は数十cm程の厚さしかないものと考えられる。

石室平面形は略方形で両袖式と思われるものの、右壁では明確に袖石を配置するが、左壁では奥壁から３石目を僅かに突出させるのみである。石室規模は奥壁幅1.1m、前壁幅0.9m、右壁長1.0m、左壁長0.85m、玄門幅は0.6mとやや歪んだ方形をなす。壁体構成は通常の横穴式石室の構築技法を引き継いでおり、最下段には大きめの石材を奥壁側は横位に３石、右壁は２石、左石は３石を縦位に配置し、腰石を意識しているものと考えられる。

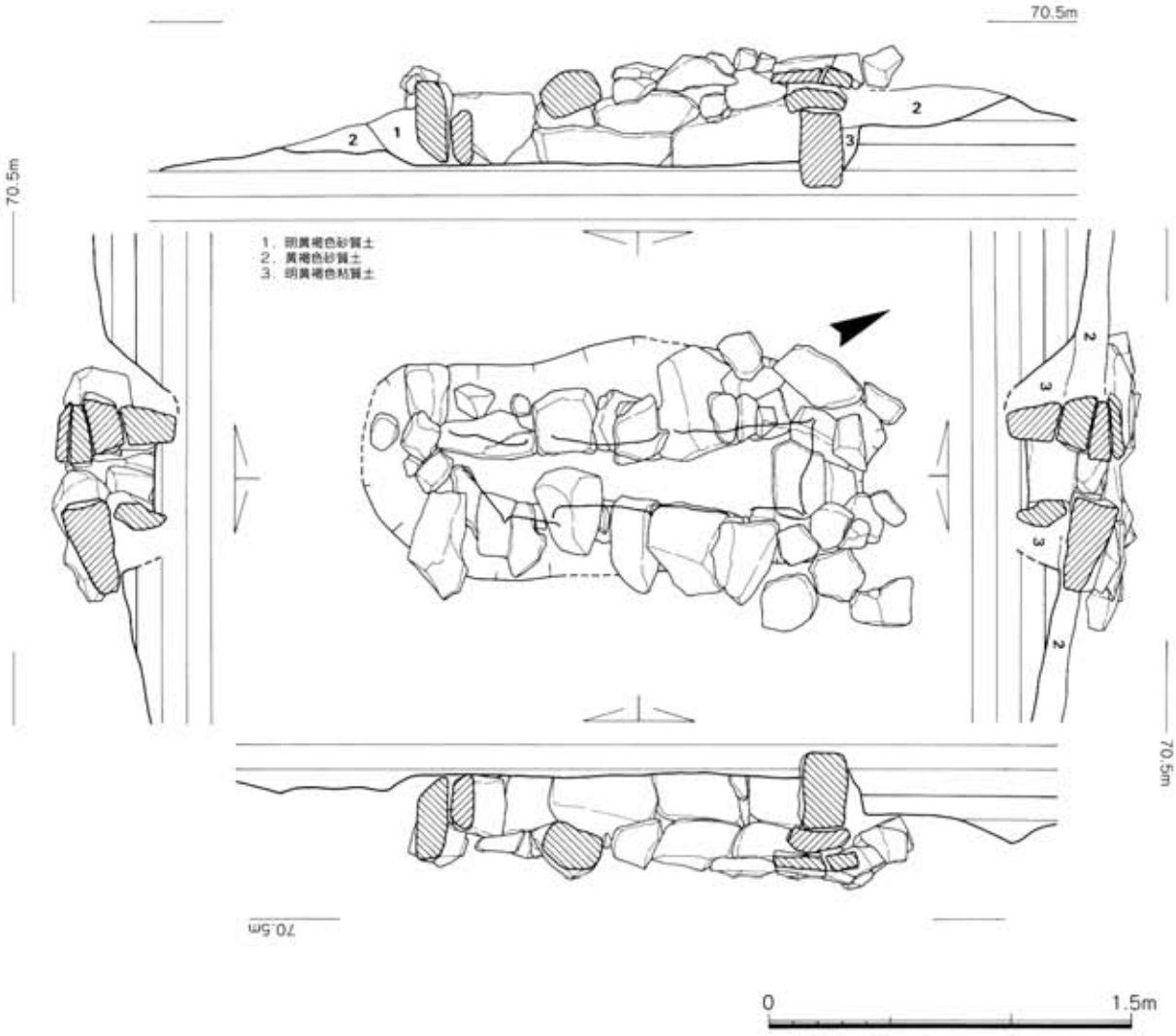


Fig.30　ＳＴ002古墳石室（1：30）

腰石上の壁体は奥壁で約３段が遺存するが、用いられる石材は大きさは不揃いながら横位に積み上げる点ではほぼ共通しているようである。なお、持ち送りは比較的急で天井部はドーム形をなしていたものと思われる。

石室床面には大きさ0.1～0.3ｍの小礫が敷き詰められており、撹乱を受けた様子はなく、また数面が重複している状況も確認されていない。

石室は羨道を持たないが、前庭部に面して玄門から左右に開いて続く石積みを付設しており、右側で約1.2ｍ、左側で約0.9ｍが遺存している。右側の石積みは更に直角に折れて北側に続くものと思われ、３石が列石状に並ぶ。同様の石積みは戦場古墳群６区ＳＴ040、浦田古墳群２区ＳＴ021など７世紀後半の無羨道石室に伴う構造物と考えられる。

閉塞石は玄門部から前庭部にかけて検出されている。塊石積みで玄門部では大きさ0.4ｍ礫を据え、前庭部側にはより小さな礫を積み上げているようで、高さは約0.45ｍが遺存している。なお、用いられた石材は、石室・閉塞石共に花崗岩である。

出土遺物としては閉塞石右側より須恵器杯身・長頸壺が確認されているが、玄室内からの出土遺物は見られなかった。

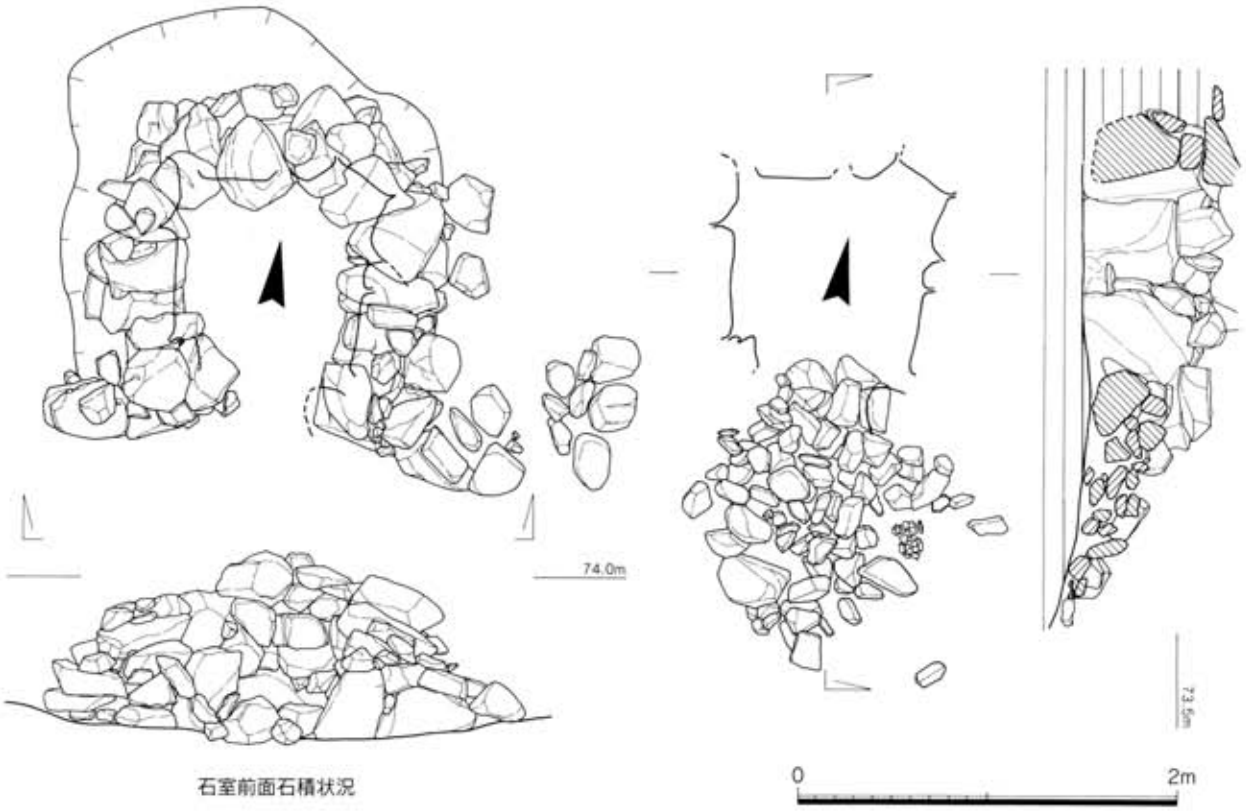


Fig.31　ＳＴ004古墳石室平面及び閉塞状況（1：40）

ＳＴＯＯ４古墳出土遺物（Fig.39）　須恵器の杯身・長頸壺が出土している。168は杯身で口径約16cm、体部は直線的に開き、底部底面には断面長方形の高台を貼り付ける。169は長頸壺で口縁部と底部底面を欠く。胴部は上位に最大径を持ち、肩が張って緩やかに内湾しながら底部へと続く。底部底面にはハの字形に踏ん張る高台を持つ。

ＳＴＯＯ５古墳（Fig.27・29・33）

墳丘・周溝（Fig.27・29）　ＳＴ004・007・020古墳と共に支群を構成しており、これら３基に囲まれるように位置している。このうち、東西に分布するＳＴ004・007とは約２ｍ程度の間隔を空けているが、北側のＳＴ020とはより近接しており、仮にＳＴ020の周溝が全周していれば周溝同士が切り合うような位置関係にある。墳丘は石室周辺から北側に高さ最大0.5m程が遺存しており、比較的残存度は良い方と言える。周溝は山側だけでなく整備な円形をなして石室を囲んでおり、地形的に古墳が傾斜の緩やかな鞍部に位置するため、南側にも周溝が巡っているものと推定される。周溝は東側に約２ｍの空間を空けて掘り残してあり、この方向が石室開口方向にあたるため、立橋部を意識したものと考えられよう。周溝の断面形は底面がやや不明瞭なＵ字形をなし、その幅は約1.3mから1.5m、深さは最も深い部分で約0.7mである。墳丘盛土は１工程がかなり厚みをもって盛られており、ほぼ壁体の石材の上下端で分層できることから、石室の壁体構築と並行して墳丘を形造っていったものと考えられるが、用いられる土については地山の土をそのまま盛り上げた感じであり、砂質土と粘質土を選択的に用いた様子は見受けられない。なお、墳径は約7.5m、周溝外周では約９ｍを測る。

内部主体（Fig.33）　単室の横穴式石室で、玄門の前面には羨道及び前庭側壁等は付設せず、石室全長は約3.2m、開口向はほぼ真西を向き、石室主軸はＳ－85°－Ｗである。石室壁体は２段程度が遺存しており、天井石につい

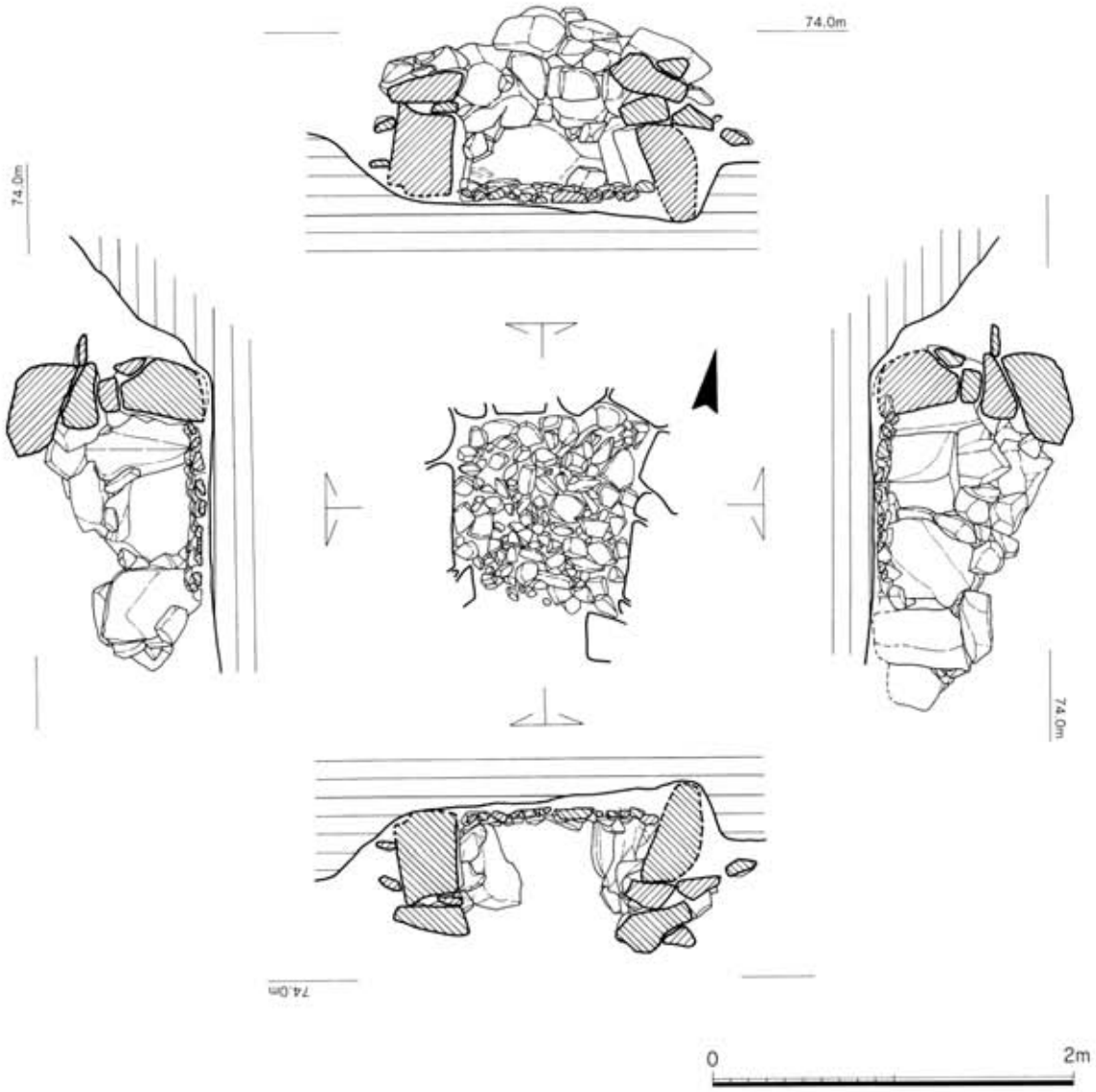


Fig.32　ＳＴ004古墳石室（1：40）

てはすべて失われている。

石室掘り方はほぼ平面隅丸長方形を呈するが、基底面の高さがより高くなるためか、山側にあたる北側の長辺は膨らんでおり、掘り方の長軸は約3.0m、短軸は約2.1m、上面から底面までの深さは最大約0.5mである。

石室平面形は奥壁幅に対して前壁幅の狭い、いわゆる羽子板形をなしており、奥壁幅1.15m、前壁幅0.8m、右壁長2.1m、左壁長2.2m、石室中央部の長軸は框石から奥壁まで2.15mを測る。壁体最下段は板状の石材の長辺を横にして立てて据えており、奥壁で２石、右壁で４石、左壁で５石を配置するが、左右の壁体では奥壁側により大きめの石材を用いる傾向が窺える。この石の上には１・２段分の石材が残存するが、最下段の石に比べて極端に小さな石を用いている様子は見られず、やや小ぶりか、逆に下位の石より大きなものを積むなど、大きさについては石の選択に細かい制約はないように思える。また、石の形についても小口面が整美な長方形をなすような平たい石を特に選んで用いている様子は見られないが、個々の石材の平坦な面を石室内側に向ける意図は明確であり、各壁はほぼ面が揃っている。この場合、必ずしも石材の小口部分を内側にするのではなく、長側縁を向

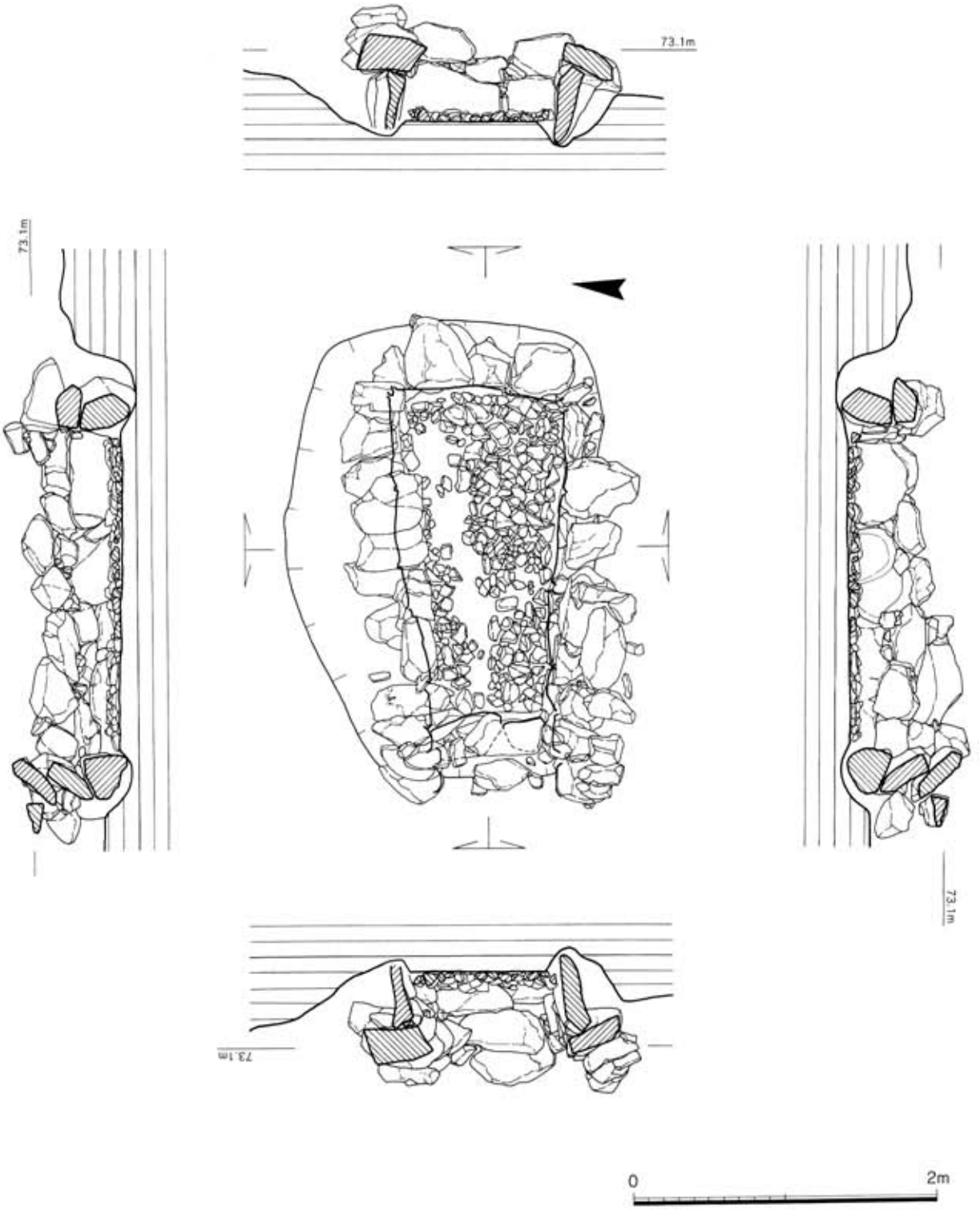


Fig.33　ＳＴ005古墳石室（1：40）

けるものも見られるようである。なお、石室残存高は左壁奥隅が最も高く、高さ約0.75mである。

玄門部では袖石は立てず、両側壁がそのまま続き、床面に框石状に２石を配することによって、石室と前庭部を区分している。この二つの石については、袖石の間に配置されるものではないことから、竪穴系横口式石室における前壁の性格が強いが、石室床面と前庭部では段差を持たないことより、ここでは框石として取り扱う。両側壁はこの框石内面から２石程度、右壁で0.55m、左壁で0.45m程伸びて、前庭側壁状を呈するが、さらに石室前面に長く伸びていたかどうかは、遺存状況から考えて明らかにし得ない。ただ、ハの字形には開かないようなので、類例から鑑みて長さ１mを越すような長い前庭側壁を付設していたとは考え難いようである。

石室床面では敷石が検出されており、大きさ0.2m以下の小礫が敷いた状態で確認された。敷石は右壁側に寄って玄門側で幅0.4m、奥壁側では幅0.75mで集石されており、屍床を形造っているものと考えられるが、上下の重なりは見られない。

閉塞石は板石を用いており、長さ0.6m、幅0.4m程の２枚の板石のうち、１枚の下端を框石に前庭部側から立て掛け、さらにその上にもう１枚を同様に立て掛けて玄門を塞いでいるようである。

ＳＴＯＯ５古墳出土遺物（Fig.39）　本墳では石室北西の墳丘上より土師器杯が１点出土しているのみであり、これについても撹乱時に原位置から移動したものと思われる。土師器杯（165）はほぼ完形で、丸底の底部から口縁部まで緩やかに内湾する器形をなす。体部は内外面共に丁寧なヘラミガキが施される。

ＳＴＯＯ７古墳（Fig.27・34）

墳丘・周溝（Fig.27）　ＳＴ005古墳の東に隣接し、地形的には墳丘全体が尾根の鞍部に位置している。蜜柑園造成による削平を最も被っており、墳丘は基底面に至るまで削られている。また、蜜柑の植樹壙による破壊も著しく、特に石室はこれにより掘り方まで掘削されて一部を残すのみとなっている。かろうじて周溝は石室西側から南側まで半月形に遺存しており、墳径についてはおおよそ９m程度に復元される。

内部主体　奥壁にあたると考えられる石材が残るのみで、その他の壁体についてはすべて失われている。この石は幅1.1m、厚さ約0.6mで、ほぼ真っすぐ据

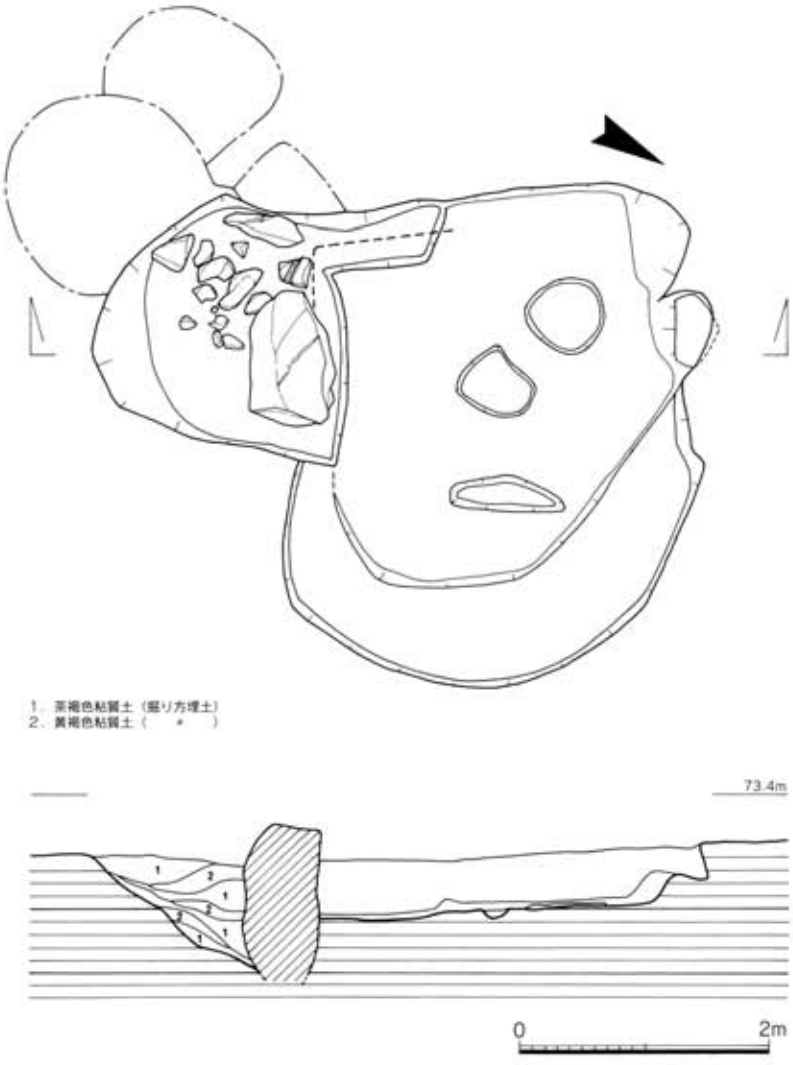


Fig.34　ＳＴ007古墳石室（1：60）

えられており、石室床面からは約0.8m、掘り方内に潜っている部分も含めると長さ1.3m以上になる。また、石室掘り方も東側に植樹坑が重複するため失われるが、西側から北西側にかけてはかろうじて残存しているようで、前述の立石が北々西に面を向けることから推定して、石室の主軸としては北々西－南々東と復元される。石室の形態については、北々東側の石室掘り方が立ち上がっていることから、横穴式石室とは考えられない。また奥壁と考えられる立石のみが特別に大きく掘り込みも深い一方、その他の壁体は深く掘り込まれないため、竪穴式石室である可能性も低く、おそらくはＳＴ008古墳と同形態の竪穴系横口式石室と思われる。この場合、開口方向は北々西となり、石室主軸はおおよそＮ－29°－Ｗぐらいになるものと復元されよう。

石室規模については推定の域を出ないものの、奥壁から前壁側の掘り方までの内法は約2.6m程度であり、石室長については2.3m前後と考えられる。

ＳＴＯＯ７出土遺物（Fig.39）　本墳では検出面で土師器の杯２点、石室内埋土中から鉄製品として刀子、鏃が出土している。

161・162は土師器の杯でいずれも底部から口縁部まで緩やかに内湾する体部をなすが、161はそのまま真っすぐに立ち上がって端面は面取りが施される一方、162は口縁端部が僅かに外反する。調整は161が体部外面にヘラケズリを行い、内面はナデ、162は内外面共にヘラミガキを施す。163は刀子の刀部で刃部側に関が見られる。164は鏃であるが篦被部のみで鏃身部と茎部は欠損する。

ＳＴＯＯ８古墳（Fig.28・29・35）

墳丘・周溝（Fig.28・29）　調査区のほぼ中央部に位置し、南方約10m離れたＳＴ002古墳とは、間に細い谷が介在することから群としては単独で存在するものと推定される。残存状況は比較的良好で、墳丘については上部を削平されるものの、ほぼ全面に残っており、谷側に面する墳丘南側には葺石が遺存する。周溝は山側にのみ伴うものと考えられ、石室東側から北側、西側にかけて半月形に巡る。周溝は底面がはっきりしない断面Ｕ字形をなし、検出面での幅は最大1.5m程度を測り、その深さは比較的浅く、最も深い部分で0.2～0.3mである。墳径は東西方向で計測すると約6.5m、周溝外径では約８mとなる。葺石は周溝が巡らない部分を補うように谷側に積まれ、墳丘全周の約1/3の長さがある。用いられる石材はすべて花崗岩であるが、大きさは不揃いで大きさ0.7m程の大石から0.2m程の小礫まで様々であるが、0.3～0.4mぐらいのものが主体を占めている。積み方は石室前庭部右側で最大３段程度が確認されるが、かなり大ざっぱなもので左右方向に目地が通るような整美な積み上げ方とはいい難い。装飾的な目的よりも、墳丘盛土の谷部側への流出を防ぐ意図が大きいものと推察される。

内部主体（Fig.35）　竪穴系横口式石室であり、西南西に開口、石室主軸はＳ－72°－Ｗである。石室は玄室のみからなり前庭側壁は付設せず、石室全長は約2.0mである。この石室は傾斜角12度のやや急な斜面に構築されているため、石室掘り方の山側（北側）と谷側（南側）ではその上面で約0.45mの比高差があり、結果的に掘り方の平面形では北側長辺が膨らんだ隅丸方形を呈している。また掘り方の規模は長軸2.7m、短軸1.4m、深さは最大約0.7mである。

石室平面形はほぼ長方形で、奥壁幅・前壁幅共に0.5m、右壁長・左壁長共に約1.7mを測る。奥壁には幅0.8m、高さ１mの大きな石を１枚鏡石状に立て、一方前壁は幅0.65m、高さ0.3mの石材を横位に据えて、石材の平坦面を石室内側及び上面に向けている。この前壁を挟んで玄室床面と前庭部床面の比高差が約0.15mあり、この点から竪穴系横口式石室と判断した。また、側壁は左右共最下部に幅0.5mから0.6mになる大きさの整った石材を３つずつ横位に配置して腰石状に立て、その上面は石室床面からの高さ約0.25mから0.3mで揃えられている。上部の壁体はこの石の上に２・３段程度が遺存しており、より小ぶりの平たい石を平坦面が石室内側に向いて面が整

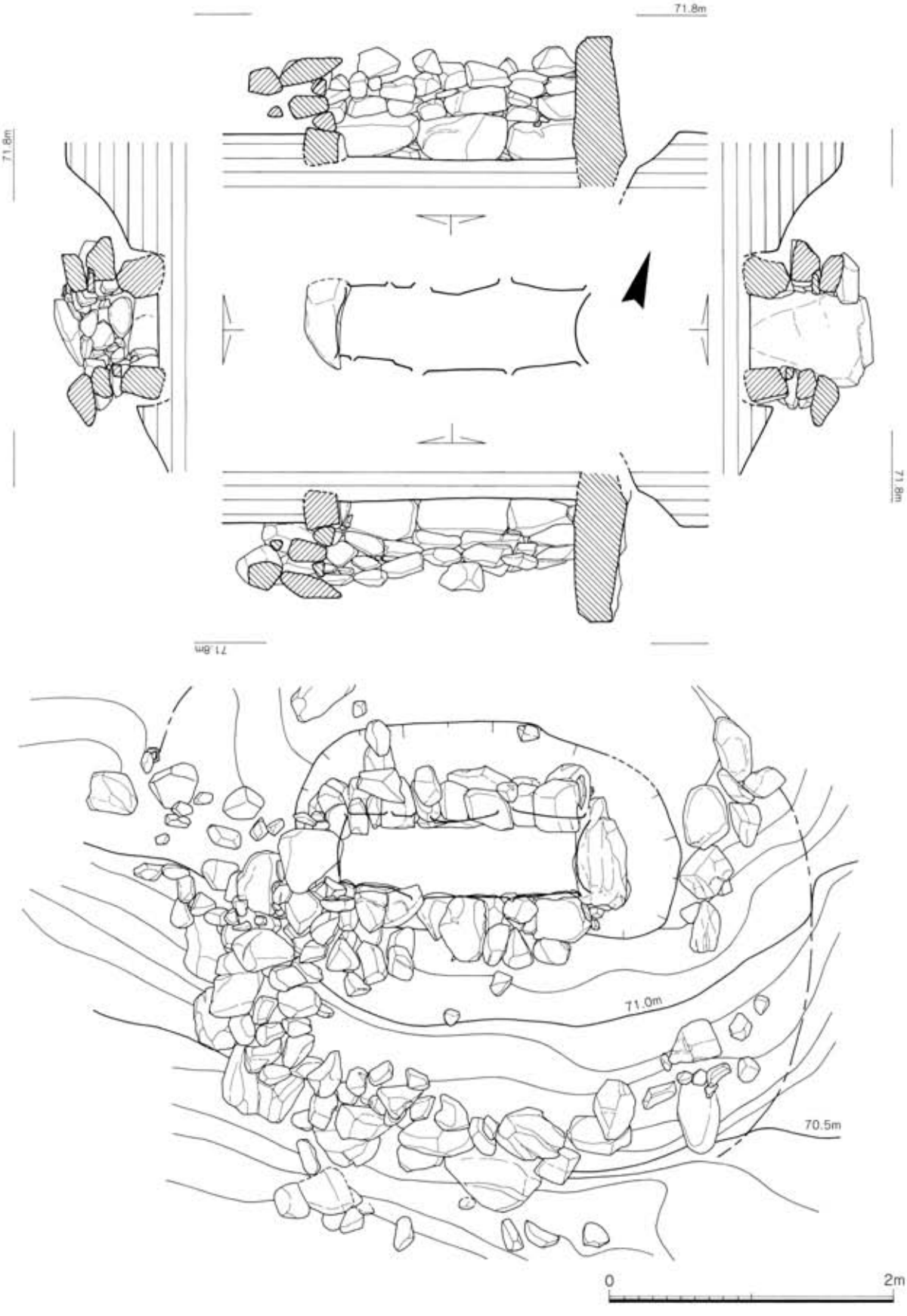


Fig.35　ＳＴ008古墳石室（1：40）

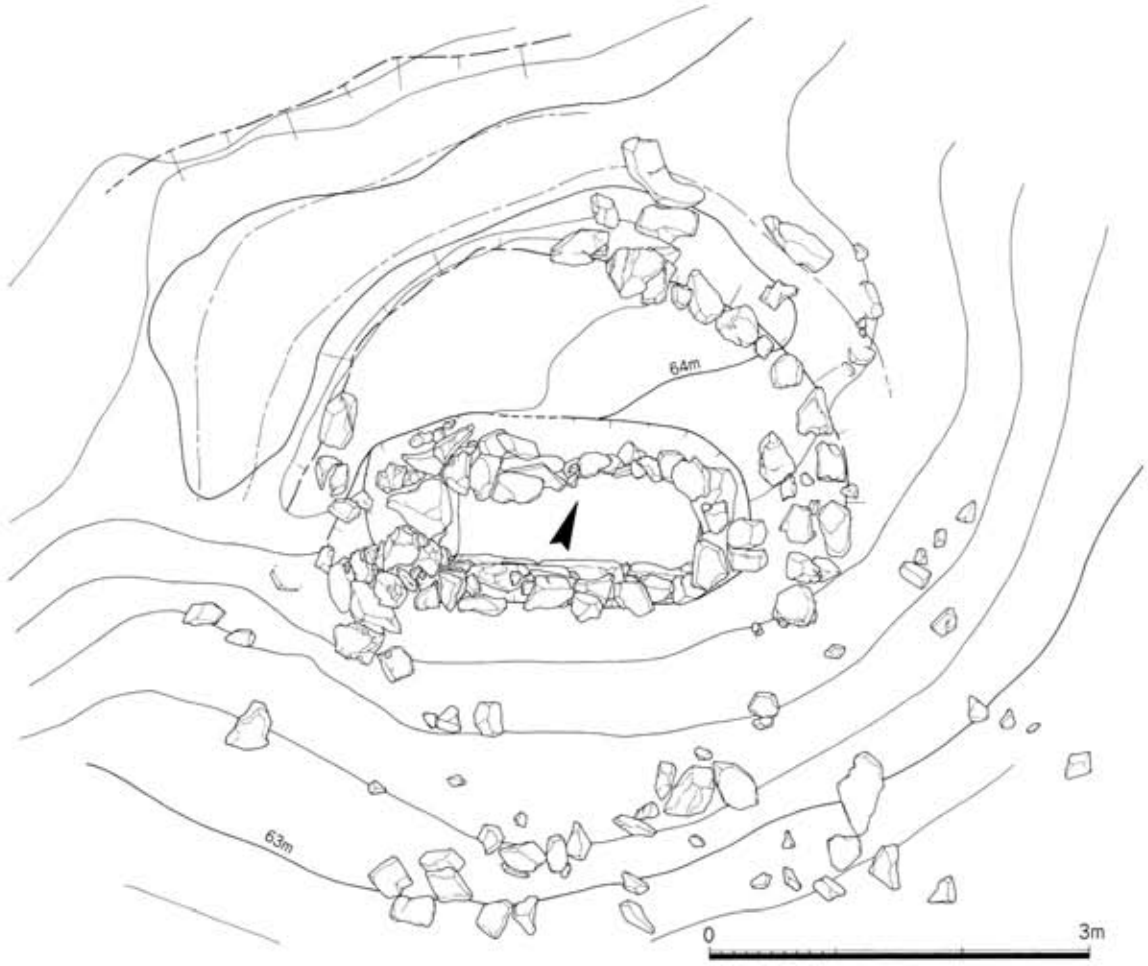


Fig.36　ＳＴ009古墳葺石検出状況（1：60）

うように積み上げている。この上部壁体の石材は、大きさ、厚み共に同程度のものを選んで用いられており、積み上げ方も比較的丁寧で一段毎に目地が水平に通っている。なお、天井石についてはすべて失われているが、奥壁及び左壁奥隅の高さと北側掘り方の上面の高さがほぼ等しいことから、ほぼこの面に天井石の下面が揃うものと仮定して、石室高は概ね0.9m程度と推定される。

石室床面は撹乱を被った様子はないが、敷石及び出土遺物は検出されていない。

前述のとおり、前庭側壁については確認されていないが、特に前庭部南側については葺石と石室上部壁体の崩れたものとが重なって検出されており、２・３石程度を並べた短い列石であったならば、調査段階で識別できなかった可能性も否定できない。

閉塞石は前壁の上から前庭部にかけて遺存していたが、塊石積みで、適当な大きさの礫を開口部に詰め込んだといった印象を受ける。

出土遺物　本墳では古墳に伴うと考えられる遺物は出土していない。

ＳＴ００９古墳（Fig.28・36・37）

墳丘・周溝（Fig.36）　調査区内南側、ＳＴ002古墳の南東側に隣接し、細い谷がＳＴ009古墳の南西側から東側を取り巻くように回って北西方向に伸びており、地形的にはテラス状の緩斜面から谷部へと落ち込む変化点に立地していると言える。古墳は墳丘のほとんどを失っているが、石室北東側では地山整形面と盛土の境に配した列

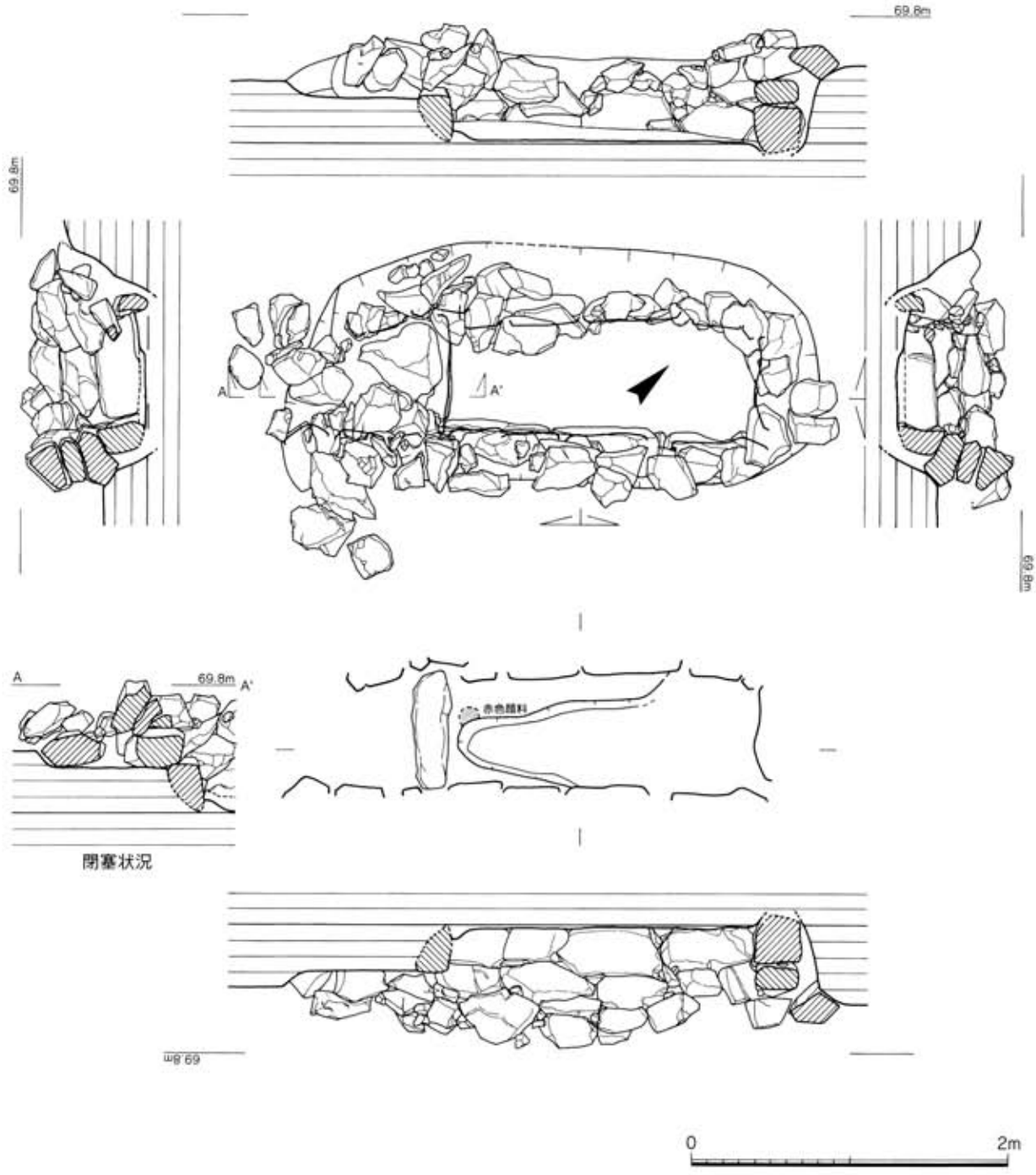


Fig.37　ＳＴ009古墳石室（1：40）

石が遺存していた。周溝は山側にあたる石室北側にのみ半月形に巡り、墳径はおおよそ5.3m程度と考えられる。列石は墳径の約1/4程の長さで、大きさ0.3mから0.4mの礫が一列に並べられており、墳丘盛土の流出を防ぐものと推定されるが、同種の外表施設を必要とするであろう、谷部に面した南側では確認できていない。ただ、石室南側２ｍ程離れた地点では同規模の礫が散在しており、本来は墳丘南側にも巡っていたものと推定され、ＳＴ008古墳と同様に数段に積まれて葺石を形造っていたものと考えられよう。

内部主体（Fig.37）　竪穴系横口式石室で、南々西に開口し、主軸方位はＳ－43°－Ｗである。石室は長方形の玄

室に短い前庭側壁がつき、前庭側壁を含めた石室全長は約3.0mである。

石室掘り方は、石室壁体とぎりぎりの大きさで掘り込まれており、平面形は細長い楕円形で、長軸約3.2m、短軸約1.5m、掘り方上面から底面までの深さは最大約0.6m程度である。

玄室は奥壁幅・前壁幅共に0.7m、側壁は右壁長2.0m、左壁長1.9mを測る。左右及び奥壁の壁体は、最下部にＳＴ008同様、横長の石材を奥壁に1枚、右壁に4枚、左壁に4枚立てて腰石状に組む。前壁についても奥壁と同規模の石材を1枚据え、これら各壁の上面はいずれもほぼ同じ高さに揃えてある。さらに上部の壁体は右壁で3段、奥壁・左壁で2段が残存するが、最下段の石に比べ、より小ぶりの石を用いる点はＳＴ008と同じものの、個々の石材の大きさはバラ付きがあり、特に石の積み方についてＳＴ008においては小口面を内側に向けるものが多く見られたのに対し、本墳の石室では側面を内側に向けるものが多く観察される。

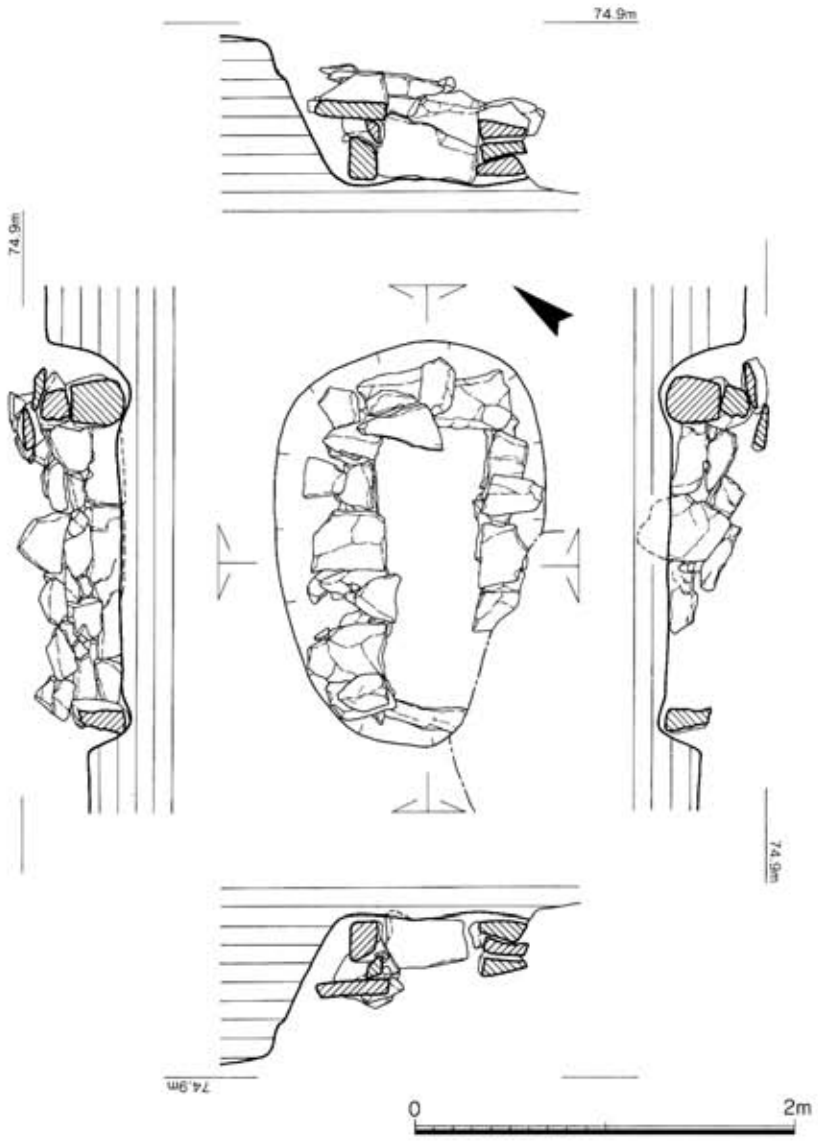


Fig.38　ＳＴ020古墳石室（1：40）

前庭部では側壁が玄室と同じ幅で伸びて前庭側壁となり、前壁の内面からの長さは、右壁で約0.65m、左壁で約1.0mが確認されている。前庭側壁は、玄室壁体の2段目以上の石積みをそのまま延長させることによって構成されており、右壁では2段分が遺存している。よって前庭部と玄室床面は、玄室壁体最下段の高さ分の段差を持っており、その高さはほぼ0.25m程度である。

石室床面では敷石等は確認されていないが、前壁から20cm程度の部分で赤色顔料（丹）が一塊検出されている。

閉塞状況（Fig.37）　前庭部で閉塞石が確認されている。閉塞石は玄室の上部壁体と同程度の大きさの平たい石材を前壁上に二段に積み重ね、さらに隙間を埋めるように前庭側から小礫を詰め込んでいたようである。形態的に板石閉塞とも塊石閉塞とも区分し難く、まるで前壁を築くように積み上げるといった形容が当てはまる。小礫の大きさは0.3～0.4mで、すべて割石からなる。

出土遺物　本墳に伴うと思われる出土遺物は確認されていない。

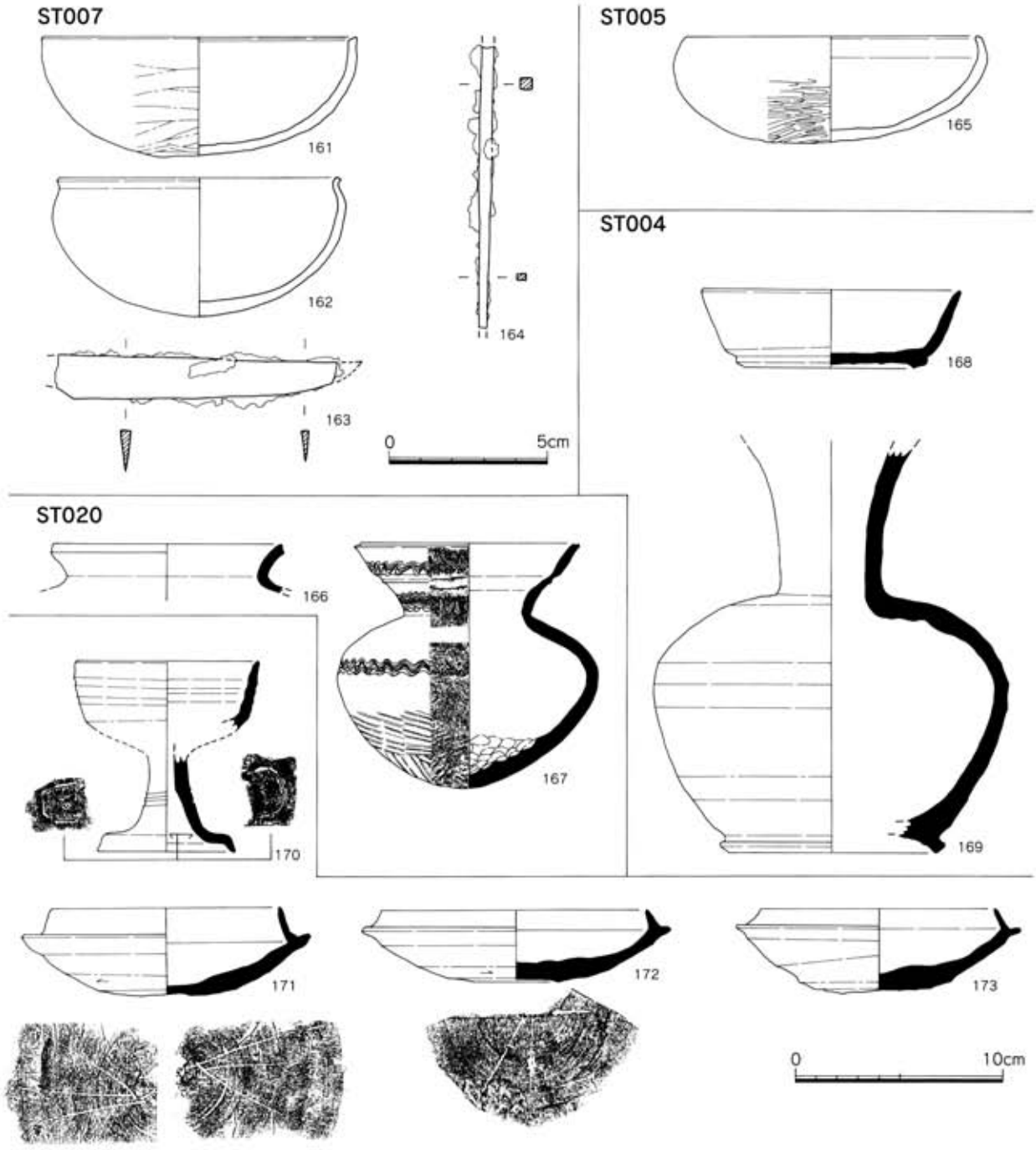


Fig.39　ＳＴ004，005，007，020古墳他出土遺物（163，164は1：2、他は1：3）

ＳＴ０２０古墳（Fig.27・29・38）

墳丘・周溝（Fig.27・29）　ＳＴ005古墳の北側に位置し、それぞれの周溝は１ｍ程の間隔で近接する。本墳は丘陵斜面から尾根鞍部にかけての変化点に立地しており、これより北側については傾斜がよりきつくなるため、古墳の存在は認められないようである。墳丘基底面まで削平を受けており、墳丘盛土は全く遺存していない。また、古墳の北東側は農道によって切られており、周溝は山側にあたる北側から西側に向けて半月形に巡り、ＳＴ005の周溝北側と重複する部分で途切れている。周溝は断面形がＵ字形をなして底面はやや不明瞭であり、広い部分では幅約2.2m、深さは深いところで0.45mから0.5m程度が遺存する。墳丘規模は推定によるが、北東－南西方

向で約13～14m程度に復元される。

内部主体　石棺系竪穴式石室である。天井石を始め上部壁体の多くを失っているほか、石室南西隅部分は蜜柑の植樹壙により破壊されている。開口方向はS—50°—Wである。

石室掘り方は石室の大きさに沿った平面楕円形のもので、長軸2.2m、短軸1.4mの規模を持つ。

石室平面形は、ほぼ長方形をなすが南西側小口部分がやや狭い。規模としては北東小口の幅約0.5m、南西小口幅推定0.4m、北西側壁長約1.5m、南東側壁長約1.5mを測る。四周に石棺状に平らな石材を立て、その上に横位に石材を積み重ねて壁体を構成するという構築技法はＳＴ002石室と同じであるが、特に平面プランやその規模の点では浦田古墳群２区ＳＴ022・023古墳石室と良く似ている。最下段に用いられる石材は、小口部分で１枚、北西側壁で３枚、南東側壁で推定４枚が立てられ、上部の壁体は北西壁で２段が遺存している。上部の壁体の積み上げ方は必ずしも平らな石を選択している訳ではなくいろいろな形の石を用いているが、それでも平坦な面を選んで石室内側に向ける配慮は見られるようである。

石室床面では敷石などは確認されておらず、出土遺物についても皆無である。

ＳＴ０２０古墳出土遺物（Fig.39）　須恵器の短頸壺と甕が周溝部分から検出されている。166は短頸壺の口縁部で短く外反する。７世紀代以降のものと思われ、混入品と考えられる。167は甕で全形の約1/2が遺存する。口縁部と頸部の間に段を有し、胴部は肩部が強く張って底部は僅かに尖りぎみの丸底になる。口縁部・頸部及び胴部肩部に波状文を巡らす。底部外面にはタタキ痕が見られる。

その他の出土遺物（Fig.39－170～173）

その他、検出面等で採集された古墳時代の遺物について紹介する。170～173はいずれも須恵器で、170は無蓋高杯で、杯部外面には二条の凹線を、脚部中央部の外面には二条の沈線を巡らす。脚部内面にはコの字形のヘラ記号を対になるように二つ刻む。171～173は杯身で口縁部の立ち上がりは内傾しつつも長さ1.8cm以上と長いもので、口径10.8cm。172・173は立ち上がりの長さ1.0cm、口径12.3cm。171は杯底部に三叉状のヘラ記号を対に、172のヘラ記号は二又状になるものかと思われるが明らかではない。172・173はⅢＣ期に相当し、171は立ち上がりは長いものの口径は小さく、同じくⅢＣ期に含まれるものと考えられる。

５．奈良～平安時代の遺構と遺物（Fig.40・41）

奈良時代から平安時代の遺構として、火葬墓及び集石遺構が４基確認されている。これらは、調査区のほぼ中央部、ＳＴ004・ＳＴ005・ＳＴ020古墳に近接して位置し、このうちＳＸ006とＳＸ021はＳＴ004の南西側及び北側の周溝から２m程度の距離に隣接し、ＳＸ003はＳＴ005の南西４m程の位置に、またＳＸ026はＳＴ020とＳＴ004のほぼ中間に位置する。地形的にはＳＸ003は尾根鞍部付近の緩斜面にあたるが、ほかの３基は傾斜角15度前後の比較的急な斜面に立地する。

遺構のうち、ＳＸ003とＳＸ006は集石内部に蔵骨器と思われる土師器を埋納しており、かなり散逸しているものの、炭化物が集石内に多く見られることから、本来的には火葬骨を集めて埋納していたものと推定され、火葬墓と考えられる。ＳＸ021、ＳＸ026では集石内に炭化物が多く見られるが、蔵骨器は確認されておらず、遺構名としては集石遺構として扱う。しかし、ＳＸ021では副葬品と思われる刀子が出土するなど、同様に蔵骨器を伴う火葬墓であった可能性が十分考えられる。

これらの遺構はいずれも古墳時代以降の黒色腐食質土層に覆われた上、さらにその上には山側からの流土が厚く堆積していたことから、比較的良好に遺存されていたものと推定される。特に蔵骨器が良好に遺存していたＳ

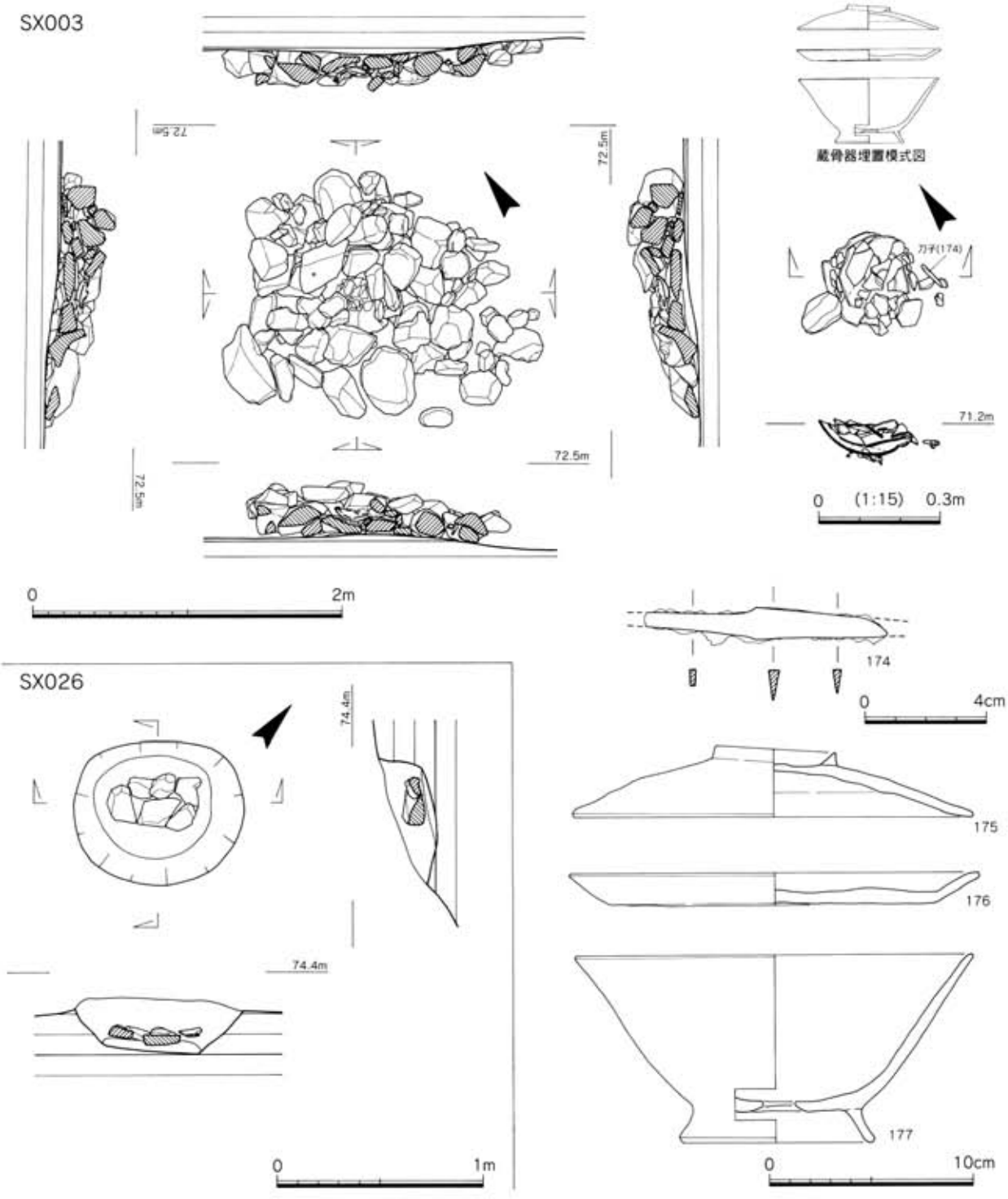


Fig.40　ＳＸ003火葬墓（1：40），026（1：30）集石遺構及び出土遺物（174は1：2、175～177は1：3）

Ｘ003・006については上部の石積みが若干流出したのみで、ほぼ構築当初の状態を残しているものと考えられる。

ＳＸ００３火葬墓（Fig.40）

一辺の長さ約1.6～1.7ｍの規模を持つ平面方形の集石遺構と考えられる。東隅付近の石材が失われたほか、南隅付近の石が原位置を動いているが、西側の集石はほぼプライマリーな状態であると思われる。形態的には大きさ0.3～0.5ｍの不定形の花崗岩礫を方形に集石するもので、２、３段に積む部分もあるが規則性を持たせて積み

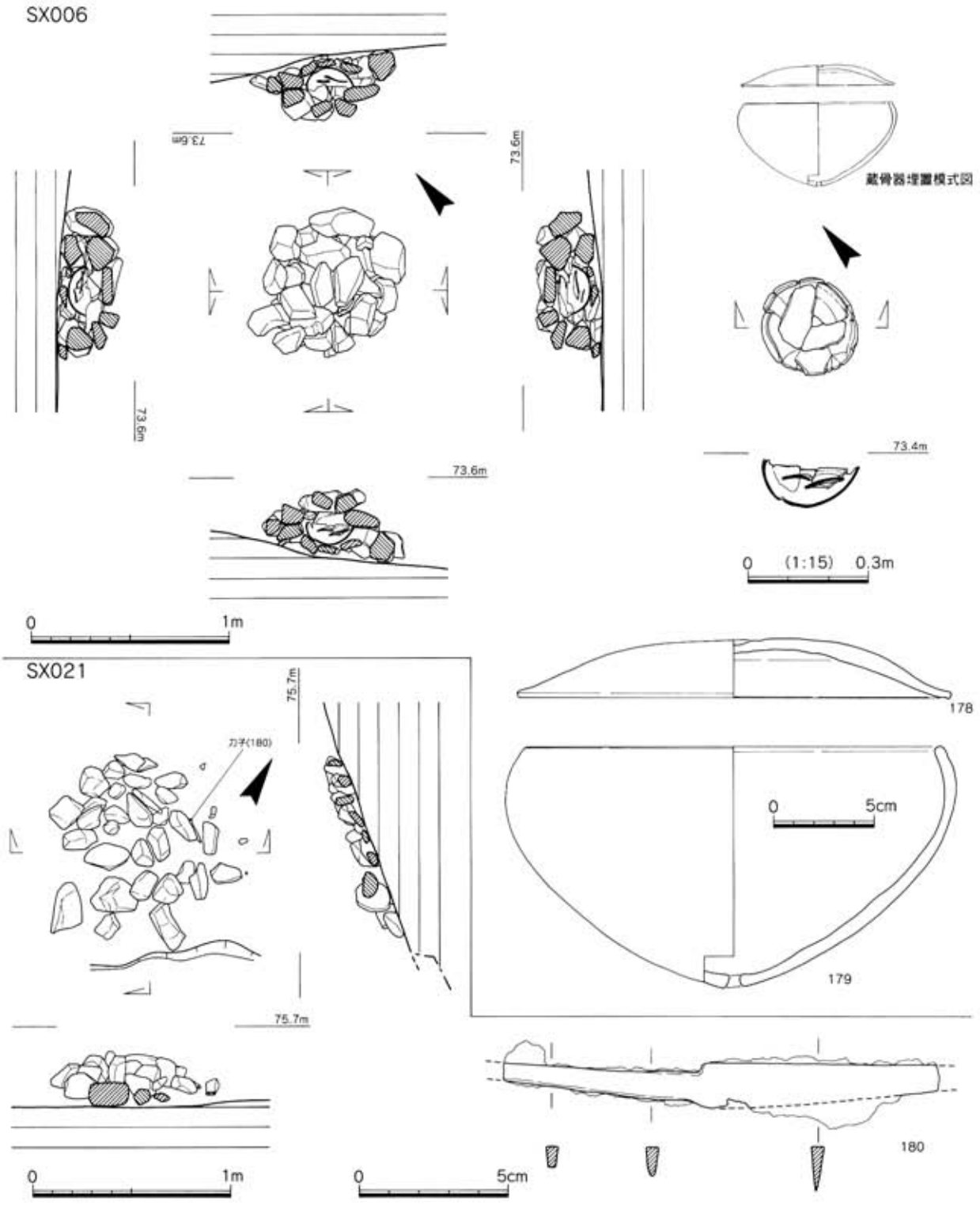


Fig.41　ＳＸ006火葬墓，021集石遺構（1：30）及び出土遺物（178，179は1：3、180は1：2）

重ねたものではなく、礫を大ざっぱに方形に寄せ集めたといった印象を与えるものである。類似の遺構である戦場古墳群６区ＳＸ038では、大きめの礫を方形に立てて配置し、その中に礫を充填する形で集石を形作るものとは、丁寧さの上でかなり異なると言える。また、集石内には軟質の腐食質土以外には土は混入しておらず、遺構は純粋に礫のみで構築されている。また、集石下部には基底面への掘り込み等は見られない。

集石の中心には蔵骨器と思われる土師器の椀、皿、蓋が据えられていたが、これらは平たい石を底にして、下から椀・皿・蓋の順に重ねられていた。据え方としては、椀・皿は口縁部を上に、蓋についてはつまみを上に重ねており、ほぼ器として通常使用する天地で置かれていた。蔵骨器を据えた後にはこれらの土師器を覆うように礫を重ねているが、周辺部に散らばる礫の少なさから推して、集石自体の高さは蔵骨器を被覆する程度のものであったと推定される。なお、蔵骨器の南東側より鉄刀子１点が検出されている。

ＳＸ００３火葬墓出土遺物（Fig.40）　蔵骨器として土師器の杯、皿、蓋が確認された他、鉄製刀子１点が出土している。175～177は土師器、175は蓋で輪高台状のつまみを有する。体部は直線的に開き、調整は内外面共にナデである。176は皿、底部は平坦で体部は直線的に開く。調整は底面がヘラケズリ、その他はナデである。177は高台付きの椀、高台は高く外方に踏ん張りぎみに開き、体部は直線的に開く。底部内面中央部には焼成後に穿孔を施す。調整は内外面共にナデである。174は刀子、刃部端部・茎端部を欠損する。両関であるが、関部は内湾して丸みを持つ。

ＳＸ００６火葬墓（Fig.41）

直径約0.8ｍの規模を持つ平面円形の集石遺構である。集石に用いられる花崗岩礫の大きさは概ね0.2ｍ前後で比較的大きさが整っている。集石下部には基底面への掘り込み等は認められず、平坦面にそのまま石を積み上げたといった印象を受ける。集石内部からは蔵骨器と思われる土師器の鉢と蓋が確認され、構築法としては地面に平たい石を数枚敷いて蔵骨器を据え、さらに蔵骨器の周囲を礫で囲み、上面も礫によって覆っている。蔵骨器はいわゆる鉄鉢型の鉢を正位に据えて蓋を被せるもので、検出時は上部からの圧力により蓋及び鉢の口縁部は鉢の内部に落ち込んでいた。なお、鉢の内部及び集石周辺に炭化物を含んだ黒色土が検出されている。

ＳＸ００６火葬墓出土遺物（Fig.41）　蔵骨器として土師器の鉢と蓋が出土している。178は蓋で天井部と体部の境は不明瞭で緩やかに口縁部に向かって伸び、口縁端部は僅かに外反する。調整は内外面共にナデである。179は「鉄鉢」型の鉢でやや尖底ぎみの底部の中央部に焼成後に穿孔を施す。調整は内外面共にナデである。

ＳＸ０２６集石遺構（Fig.40）

平面楕円形の掘り込みを伴うものである。掘り込みは長軸0.8ｍ、短軸0.7ｍ、深さ0.2ｍの規模を持ち、掘り込み底面より大きさ0.2ｍ前後の花崗岩礫６個が検出されている。これらの礫は比較的平たいもので、掘り込み底面中央部に敷いたように並べられており、その上面に何かを据えた状況が想定される。遺物は確認されていないが、掘り込み埋土及び周辺部より炭化物が検出されており、火葬墓の上部が削平されて失われた可能性が考えられる。出土遺物はない。

ＳＸ０２１集石遺構（Fig.41）

約１ｍの範囲に花崗岩礫30個余りが集中するもので、山側にあたる西側ではそれぞれの礫が接しているが、谷部に向く東側ではやや散らばって見られる。礫の大きさは0.2～0.3ｍ程度の大きさで、本来的にはＳＸ006のように円形に集石されていたものが、斜面の低い方に崩れたものと推定され、集石下部から鉄製刀子が出土していること、集石内に炭化物が見られることなどより、同様に火葬墓であった可能性が考えられる。

ＳＸ０２１集石遺構出土遺物（Fig.41）　鉄製刀子１点が出土している。180は刃部及び茎部の端部を欠損するものであるが、現況でも長さ約14.5cmと比較的大型のものである。片関で棟側が角関となる。

Tab.5　戦場古墳群１区古墳時代、奈良・平安時代の土器一覧表

Fig. 図番号	PL. 番号	県遺物登録番号	出土地点	種別	器種	法量 (cm) 口径	器高	底径	胎土 夾混入物	色調	文様・調整 外器面	内器面
25-137	13-6	96000494	ST001	須恵器	杯蓋	(14.3)	4.4	—	細砂粒少量	灰色	天井部ヘラケズリ、ほかロクロナデ	ロクロナデ
138		96000495	ST001	〃	〃	(13.9)	(3.5)	—	細砂粒少量	灰褐色	天井部ヘラケズリ、ほかロクロナデ	ロクロナデ
139	13-5	95002029	ST001	〃	〃	14.0	3.5	—	砂粒多量	灰色	天井部ヘラケズリ、ほかロクロナデ	ロクロナデ
140		95002027	ST001, №4	〃	〃	(14.6)	3.9	—	小石少量	青灰色	天井部ヘラケズリ、ほかロクロナデ	ロクロナデ
141		96001041	ST001, 石室内	〃	〃	(12.8)	3.6	—	砂粒多量	灰色	天井部ヘラケズリ、ほかロクロナデ	ロクロナデ
142		96001039	ST001, 石室内	〃	杯身	(12.4)	(3.3)	—	砂粒少量	灰色	底部ヘラケズリ、ほかロクロナデ	ロクロナデ
143	13-7	95002028	ST001, 石室内	〃	壺蓋	10.8	3.3	—	小石・砂粒多量	灰白色	天井部ヘラケズリ、ほかロクロナデ	ロクロナデ
144		96001026	ST001, 石室内	〃	𤭯	(10.2)	(3.9)	—	砂粒少量	灰色	ロクロナデ	ロクロナデ
145		96001040	ST001, 西側攪乱	〃	提瓶	8.1	(5.3)	—	砂粒少量	灰色	ロクロナデ	ロクロナデ
146		96001028	ST001, 西側攪乱	〃	短頸壺	(6.1)	7.6	—	砂粒少量	灰白色	ロクロナデ	ロクロナデ
147		96000492	ST001, 石室内	〃	無頸壺	(8.7)	(14.3)	—	砂粒多量	灰色	カキ目、ロクロナデ	ロクロナデ
136		96000499	ST005墳丘	〃	〃	—	(3.0)	8.0	小石、細砂粒多量	橙色	ナデ	ナデ
39-161	13-13	96001035	ST007周溝	土師器	杯	14.8	5.8	—	砂粒少量	暗赤褐色	ヘラケズリ	ヘラミガキ、ナデ
162	13-12	96001038	ST007, №1	〃	〃	13.1	6.6	—	砂粒少量	橙色	磨耗のため調整不明	磨耗のため調整不明
165	14-27	96001036	ST005, №2	〃	〃	13.8	5.0	—	砂粒少量	橙色	ヘラミガキ	磨耗のため調整不明
166		99003333	ST020	須恵器	壺	(10.8)	(2.1)	—	砂粒少量	灰色	灰色	ロクロナデ
167	13-11	96000490	ST020	〃	𤭯	10.0	11.5	—	砂粒少量	暗灰色	ロクロナデ、底部タタキ	ロクロナデ
168	13-10	99003332	ST004	〃	杯身	(12.4)	3.7	(11.0)	砂粒少量	灰色	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ
169	14-37	96001029	ST004	〃	長頸壺		(19.1)	9.8	砂粒少量	暗灰色	ロクロナデ、体下部ヘラケズリ	ロクロナデ
170		96001031	BC53検出面	〃	高杯	8.5	(8.0)	6.4	砂粒少量	暗赤褐色	ロクロナデ	ロクロナデ
171	13-8	95002026	検出面	〃	杯身	10.9	4.2	—	小石・砂粒少量	灰褐色	ロクロナデ	ロクロナデ
172		96000493	ST001, 西側攪乱	〃	杯身	(12.4)	3.4	—	砂粒少量	暗灰色	ロクロナデ	ロクロナデ
173	13-9	96000491	検出面	〃	杯身	(11.2)	4.1	—	小石・砂粒少量	灰白色	ロクロナデ	ロクロナデ
40-175	14-28	95004610	SX003蔵骨器	土師器	蓋	19.5	3.1	—	小石・砂粒少量	橙色	磨耗のため調整不明	ヘラケズリ、ナデ
176	14-30	95004609	SX003蔵骨器	〃	皿	18.5	1.6	16.0	砂粒、細砂粒多量	橙色	ヘラケズリ、ナデ	ヘラケズリ、ナデ
177	14-31	95004611	SX003蔵骨器	〃	杯	19.5	9.1	9.2	砂粒、細砂粒多量	橙色	ナデ	磨耗のため調整不明
41-178	14-29	95004612	SX006蔵骨器	〃	蓋	21.5	3.0	—	砂粒、細砂粒多量	橙色	ナデ	磨耗のため調整不明
179	14-32	97004613	SX006蔵骨器	〃	杯	20.4	12.0	—	砂粒、細砂粒多量	橙色	ヘラケズリ、ナデ	ナデ

Tab.6　戦場古墳群１区鉄製品ほか一覧表

Fig. 図番号	PL. 番号	県遺物登録番号	出土地点	種別	器種	分類・部位	法量 (cm) 長さ	幅	厚さ	備考
25-148	14-37	97002000	ST001 玄室内	小玉	ガラス	淡緑色	1.8	1.3		
149	14-37	97001984	ST001 玄室内	小玉	ガラス	風化により不明	1.1	0.7	0.3	
150	14-37	97001983	ST001 玄室床	小玉	ガラス	淡緑色	2.2	1.5		
26-151	14-35	97001467	ST001	馬具	轡	鏡板	8.6	8.8	—	
152	14-35	97001468	ST001	〃	〃	〃	7.6	(6.8)	—	
153	14-35	97001470	ST001	〃	〃	引手	(13.7)	3.0	—	
154	14-35	97001469	ST001	〃	〃	〃	(13.0)	3.0	—	
155	14-35	97001472	ST001	〃	〃	銜	(4.8)		—	二連式
156	14-35	97001473	ST001羨道	〃	雲珠	飾金具	(3.0)	(1.8)	—	貝製雲珠
157	14-35	97001475	ST001羨道№8	〃	鐙	鐙鞋	(15.3)		—	鋲具と兵庫鎖
158	14-35	97001476	ST001羨道№8	〃	〃	〃	(12.2)		—	〃
159	14-35	97001471	ST001	〃	〃	U字金具	(3.5)	(3.8)	—	
160	14-35	97001472	ST001	〃	〃	〃	(4.8)	(3.5)	—	
39-163	14-33	97001982	ST007周溝	刀子	—	刀身部のみ	(8.9)	1.3	0.3	
164	14-33	97001999	ST007掘り方カクラン	鉄鏃	—	頸部のみ	(8.9)	(0.4)	(0.35)	
40-174	14-34	97001981	SX003, №3	刀子	—		(7.8)	(1.1)	0.4	
41-180	14-34	97001980	SX021, №5	〃	—		(14.4)	1.5	0.4	

6．結　語

今回実施された戦場古墳群１区の調査では、縄文時代早期から前期にかけての遺物包含層・早期の集石遺構、弥生時代前期前半の甕・壺棺墓、５世紀後半～７世紀後半にかけての古墳群、奈良時代から平安時代前期にかけての火葬墓を含む集石遺構が確認されている。

縄文時代の遺構としては、花弁状石組炉を含む集石遺構11基と早期～前期にかけての縄文土器・石器を含む遺物包含層約800㎡が検出されている。集石遺構にはいわゆる花弁状石組炉６基が含まれるほか、不定形のものがみられるが、垂直分布上、これらの集石遺構の層位はほとんど同じであり、それぞれに時期差を見出すことは難しい。形態別には花弁状石組炉の中でも炉壁の石をかなり立てぎみに据えるＳＸ050・028が近接している一方、

ＳＸ011・042・051・031など、より炉壁を寝かせるタイプのものが調査区東側に散在、さらに両者の間に不定形タイプのＳＸ025・029・043が集まるといった、平面分布上の傾向は認められる。このような集石の形態差による分布傾向を時期差と捉えることも可能であるが、それを補完すべき土器の分布状況を見ても形態が判別できる土器の出土量が少ないこともあり、平面上観察される集石遺構のグループを包含層出土土器により時期的に位置付けることは不可能である。したがって、ＳＸ046内部より楕円文横走の胴部片が検出されている点、集石遺構が含まれる遺物包含層出土土器の９割以上が早期の押型文土器・無文土器であり、また前期の轟・曾畑系の土器が包含層中でも上位から出土する傾向が強いことから考えて、当調査区の集石遺構はいずれも早期に位置付けられるという点のみが指摘できる。

早期の押型文土器のバリエーションは多彩で、まず、口縁部が直線的に開き、外面に楕円文横走、口縁部内面に楕円文を横走させるもの（2・4・5・6）が見られ、これらはいわゆる大分編年に沿うところの稲荷山式に類似するものと言える。一方、口縁部内面に原体条痕を伴うものとして10～18が見られ、これらは口縁部が直線的に開き、外面に楕円文を横走させるもの（12・13・15）と、外反するもの（10・11・14・16～18）がある。後者も種々のものがあり、外面楕円文横走のもの（14・16）、斜走のもの（10・11・18）、あるいは口縁部内面と同様の条痕を持つもの（17）がある。また、内面の原体条痕も垂直方向に施すもの（11・15）、斜めのもの（14・16・17）、二段になるもの（18）があり、10のみは原体条痕下に楕円文横走の施文帯を持つ。これらは同タイプのものが一定量を占める状態になく、形態的に安定した一群を抽出することは困難である。少なくとも、10～18のうち、直線的に開く12・13・15を早水台式類似、他のものを下菅生Ｂ式類似と捉えたい。

しかし、稲荷山式・早水台式・下菅生Ｂ式類似としたもの以外でも、にわかには所属を判断し難いものも見られる。例えば口縁部が直線的に開き、外面に紡錘形の細かい楕円文を縦走させる１は、屈曲する胴部片26と同一個体と推定される。屈曲する部分の上位と下位では施文方向を変えており、大分編年で考えれば下菅生Ｂ式から田村式にかけての特徴が見出せるが、１の口縁部内面は無文であり、原体条痕を伴う両者とは異なる点で位置付けを難しくしている。いずれにしても、当調査区だけでなく、今回調査を行った戦場ケ谷遺跡２区を含め、脊振山系南麓で出土する押型文土器全体について整理を行った上で考える必要がある。

その他、特徴的なものとして条痕文円筒土器（40）、手向山式土器（44）が見られる。いずれも１点ずつの出土であるが、当調査区における早期の土器相を考える上で重要な資料である。ただし、Fig.９で見られるように包含層中の手向山式（44）と下菅生Ｂ類似の10のレベルはほとんど同一であり、当調査区の包含層が２次的な堆積によることをより実感させる結果となっている。

古墳時代以降の様相としては、古墳８基と奈良～平安時代初頭にかけての火葬墓を含む集石遺構４基が検出されており、当該地が５世紀後半～８世紀末にかけて埋葬地として位置付けられていたことがわかる。古墳はまず、５世紀後半～末にかけて石棺系竪穴式石室ＳＴ002・020、竪穴系横口式石室ＳＴ008・009・(007)、羨道を付設しない古式の横穴式石室であるＳＴ005へと順次築造される。前述したように、これらは平面分布上、３つの支群（ＳＴ020・005・007、ＳＴ008、ＳＴ002・009）に分かれているが、中でも墳丘規模・石室規模の大きい北側のグループ（ＳＴ020・005・007）により優位性が認められる。６世紀に入ると造墓活動が途絶え、ⅢＣ期、６世紀第４四半期になって、単室両袖型横穴式石室であるＳＴ001が造られる。この時、立地は前代と同じ谷部ではなく、見晴らしの良い丘陵頂部を単独で選地する。これに続くものとしては、ＳＴ001の位置する尾根と西側に対峙する戦場古墳群４区のＳＴ012が想定され、壁体石材を縦位に配置する点、玄門幅・羨道幅が拡大する点等から７世紀前半代に位置付けられる。さらに７世紀後半代には伸展葬が不可能な小型・無羨道石室ＳＴ004が

造られるが、その立地場所はＳＴ005の西側に隣接するもので、６世紀後半から７世紀前半にかけて尾根頂部を志向した造墓の意識が、再び先祖の墓域へと戻ったと言える。

同様の分布状況は戦場古墳群３区においても観察されており、５世紀後半～末に造られたＳＴ016が、それより200年近くのタイムスパンを空けて７世紀後半代のＳＴ014と一群をなし、かつ近接して６世紀代の古墳が見られない点など、１区との類似点が多い。実際、戦場ケ谷遺跡２区・浦田古墳群１区、あるいは調査区外周辺部の状況でも、石室規模が最も大型化する６世紀後半代の両袖型石室は、前代、あるいは後続する古墳とは隔絶した丘陵尾根上に単独で立地する様子が見受けられる。その理由としては、ひとつは石室規模・石材の大型化に伴う地山整形法の変化が考えられる。石室石材の大型化、高天井化は石室掘り方をより深く、広く掘削することを必要とし、地山が平坦な箇所より斜面の方が労力が少なくて済む。実際、石棺系竪穴式石室・竪穴系横口式石室・古式の横穴式石室のいずれもが地山面を平坦にした上で石室掘り方を掘削しているが、両袖型石室は地山面を石室部分に向かって高くなるように傾斜させて整形しており、石室を被覆する盛土量を抑え、地山整形の段階から墳丘を形作っている状況が窺える。もうひとつの理由としては、視覚的な影響であり、周囲から視認できる高所に古墳を配置することで単位集団の長としての立場を誇示することを意図したと考えられる。

このように、ⅢＢ期からⅢＣ期にかけて、つまり６世紀後半代における立地の変化は、新たな石室構造の採用と同時に造墓集団の意識の変化に伴う画期と言えよう。その一方で、一度は尾根頂部に立地を求めたものの、７世紀後半には５世紀後半代と同じ墓域へと戻っており、先祖の墳墓へと寄り沿うように小型墳を造営する。おそらく７世紀後半代をもうひとつの画期として、集団の出自である墓域へと戻るべき理由が生じたのであろう。

その後、８世紀後半～末に至ると同じ墓域内に火葬墓を含む集石遺構４基が造られる。これらはこの支群を強く意識して造られており、特に７世紀後半のＳＴ004の周囲を取り囲むように位置している。蔵骨器が遺存する２基を比較すると、円形小型のＳＸ006から方形大型のＳＸ003へと変化しており、短いタイムスパンの中で連続して造営されたものと推定される。７世紀後半をもって支群の形成を終えたところに、さらに８世紀後半に三度同じ墓域を求めた訳であり、古墳群を形成した集団との血縁的な結びつきを裏付けることは出来ないものの、先祖の墓地を引き継ぐものとしての意識が強く働いた故の選地と言えよう。

[参考文献]

坂本 嘉弘（1998）：「東九州の押型土器研究の現状と課題」『九州の押型文土器』九州縄文研究会

Ⅱ．戦場古墳群２区の遺構と遺物

１．遺跡の概要（Fig.42）

戦場古墳群２区は戦場古墳群１区ＳＴ001古墳の立地する丘陵尾根から南に続く同じ尾根に位置しており、尾根頂部からやや下った、標高63～70mの西側斜面にあたる。戦場古墳群１区の南側に隣接しており、戦場古墳群３区とは約30mの距離であるが、両者の間には深い谷が介在しており、それぞれ別の支群と理解される。調査対象地の現況は蜜柑園となっていたため、かなり削平を受けていた他、多数の蜜柑の植樹に伴う撹乱壙が検出された。調査区の東側は現在農道が走っているが、基盤層である花崗岩の風化層（真砂土）が露出しており、基盤面まで削平を受けているか、あるいはもともと痩せ尾根であったものと推定される。また、平面的にもこの尾根頂部は古墳の立地を考える程には広いものではなく、本来尾根上には古墳が存在していなかった可能性が高い。

調査対象面積は約840㎡であるが、上述のとおり大きく削平を受けていたためか、表土剥ぎの結果確認された遺構は古墳１基（ＳＴ010）のみであった。本古墳についても基底面まで削平を受けており、周溝と石室石材の抜き跡のみを検出したに留まった。

２．古墳時代の遺構と遺物

古墳１基（ＳＴ010）のみを確認している。調査区全体は東から西に下る斜面をなしており、ＳＴ010古墳は調査区中央からやや北よりに位置する。

ＳＴ０１０古墳（Fig.42～45）

墳丘・周溝（Fig.43）　傾斜角14度の斜面上に立地する。基底面まで大きく削平を受けているため、墳丘は全く

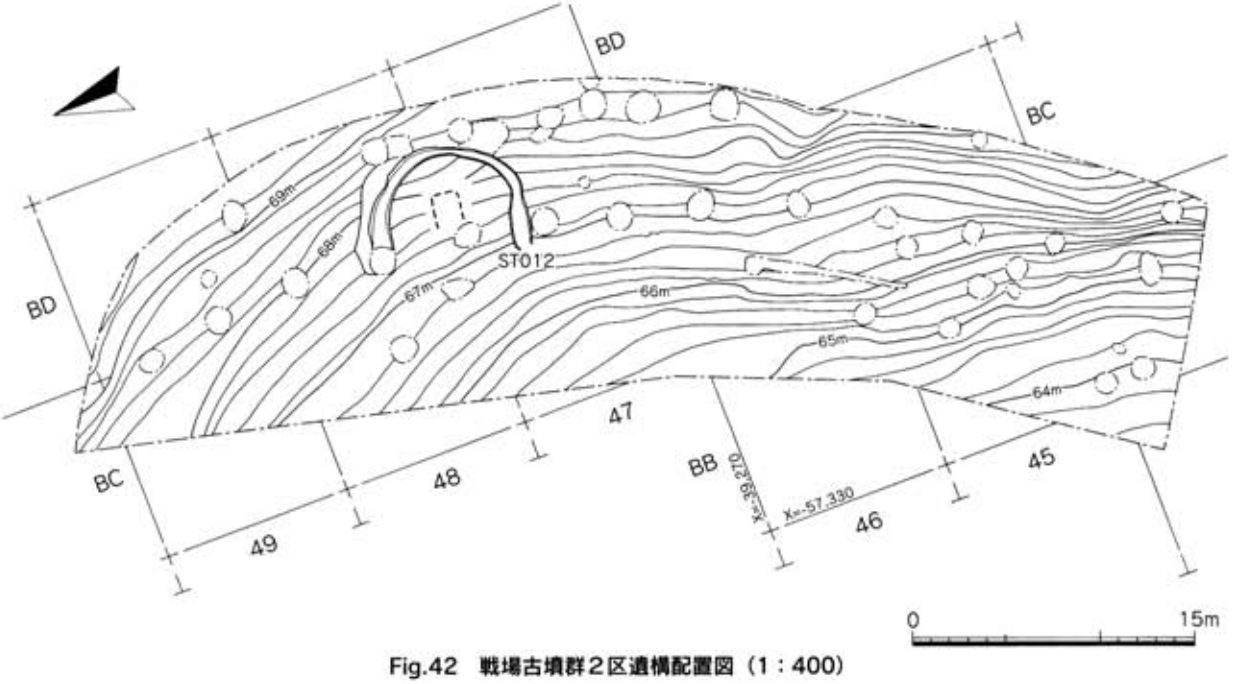


Fig.42　戦場古墳群２区遺構配置図（1：400）

Tab.7　戦場古墳群２区遺構一覧表

遺構番号	種　別	形態及び特徴	規模（長さ×幅×深さ）：m	主軸方位	出土遺物	時代・時期
ＳＴ０１０	古　墳	円墳（横穴式石室）	径　6.5m	Ｎ－83°－Ｗ	土師器（杯）、鉄鏃	古墳中期（5Ｃ後半～6Ｃ初頭）

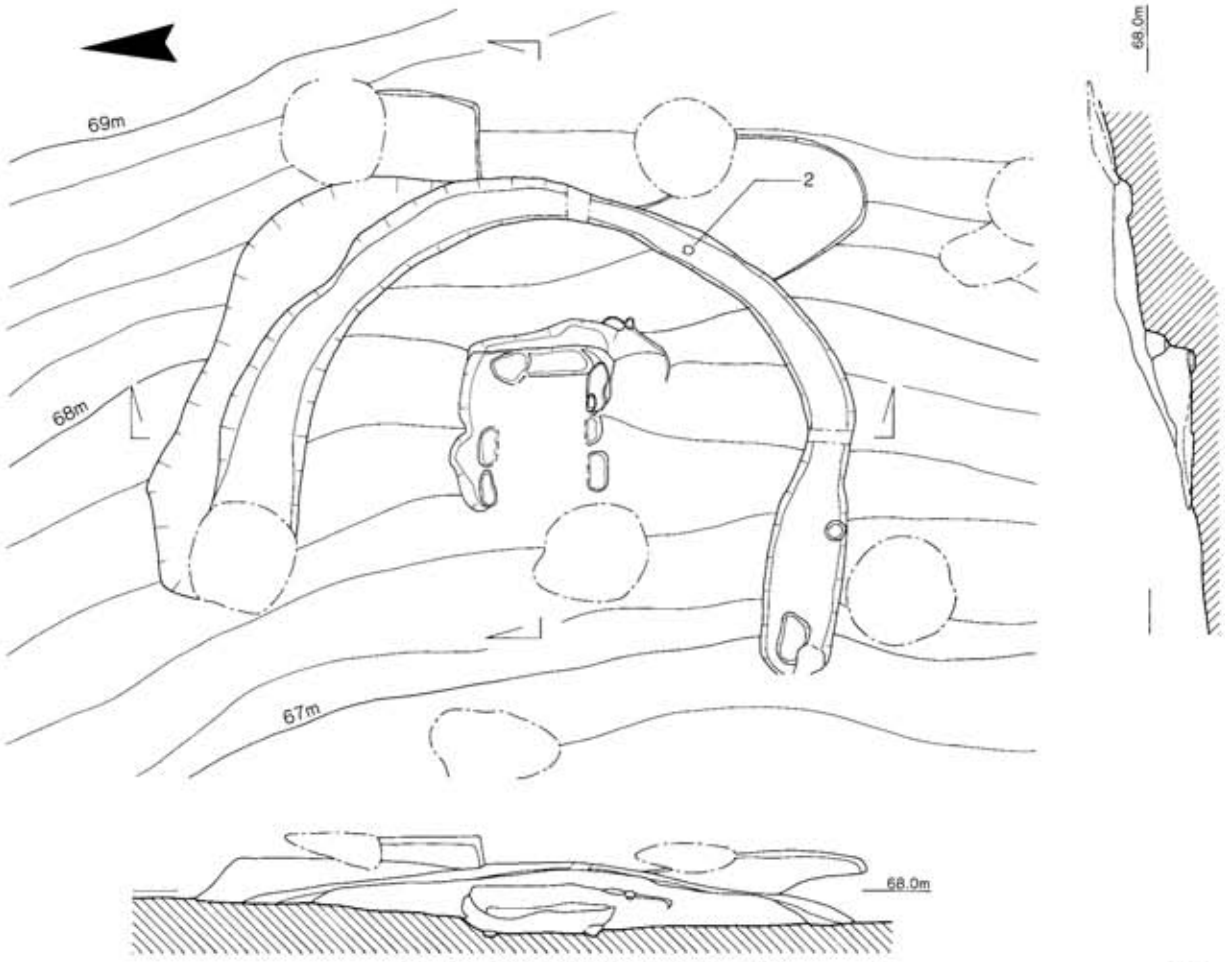


Fig.43　ＳＴ010古墳測量図（1：100）

残存せず、周溝の下部と石室の掘り方のみしか遺存しない。周溝は西側谷部に向かって開く形の馬蹄形をなす。

周溝は谷部側で最も底面が広く、山側になる東側に向かって次第に狭くなりつつも深さ0.1ｍと僅かに遺存している。周溝内側での規模（墳径）は6.5ｍ。出土遺物は背面（東側）の周溝埋土中より土師器杯（2）が出土している程度である。地山整形については詳細不明であるが、石室掘り方は石室壁体に沿った形で概ね長方形に斜面を掘り込んで平坦面を作り出している。

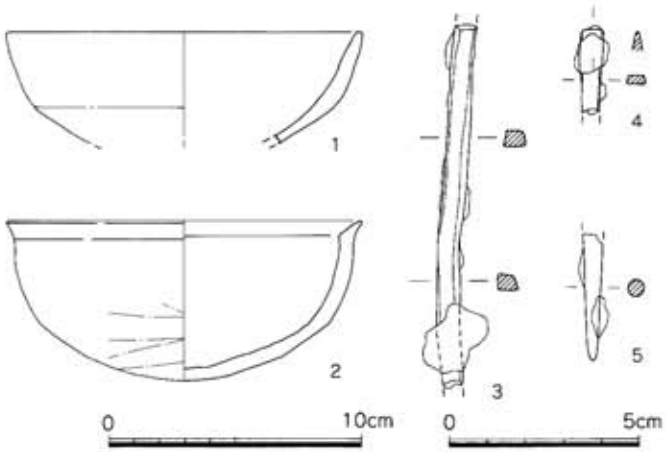


Fig.44　ＳＴ010古墳出土遺物（1，2は1：3、3～5は1：2）

内部主体（Fig.45）　横穴式石室と思われるが、壁体最下段の石材の抜き取り痕と敷石のみが遺存する。現況では抜き取り痕から奥壁に１石、奥壁と左壁が接する部分に１石、左壁に３石程度、右壁に３石が配されていたことが観察される。地山面である斜面の傾斜と石室掘り方との関係から考えると、これ以上谷部側に石室全長が大きく伸びることは考え難く、羨道は付設していなかったものと推定される。この場合想定される石室規模は奥壁幅約1.0ｍ、石室全長1.7ｍ～2.0ｍ前後で、全長に対して、幅の狭い細長い石室プランであったと思われる。石室主

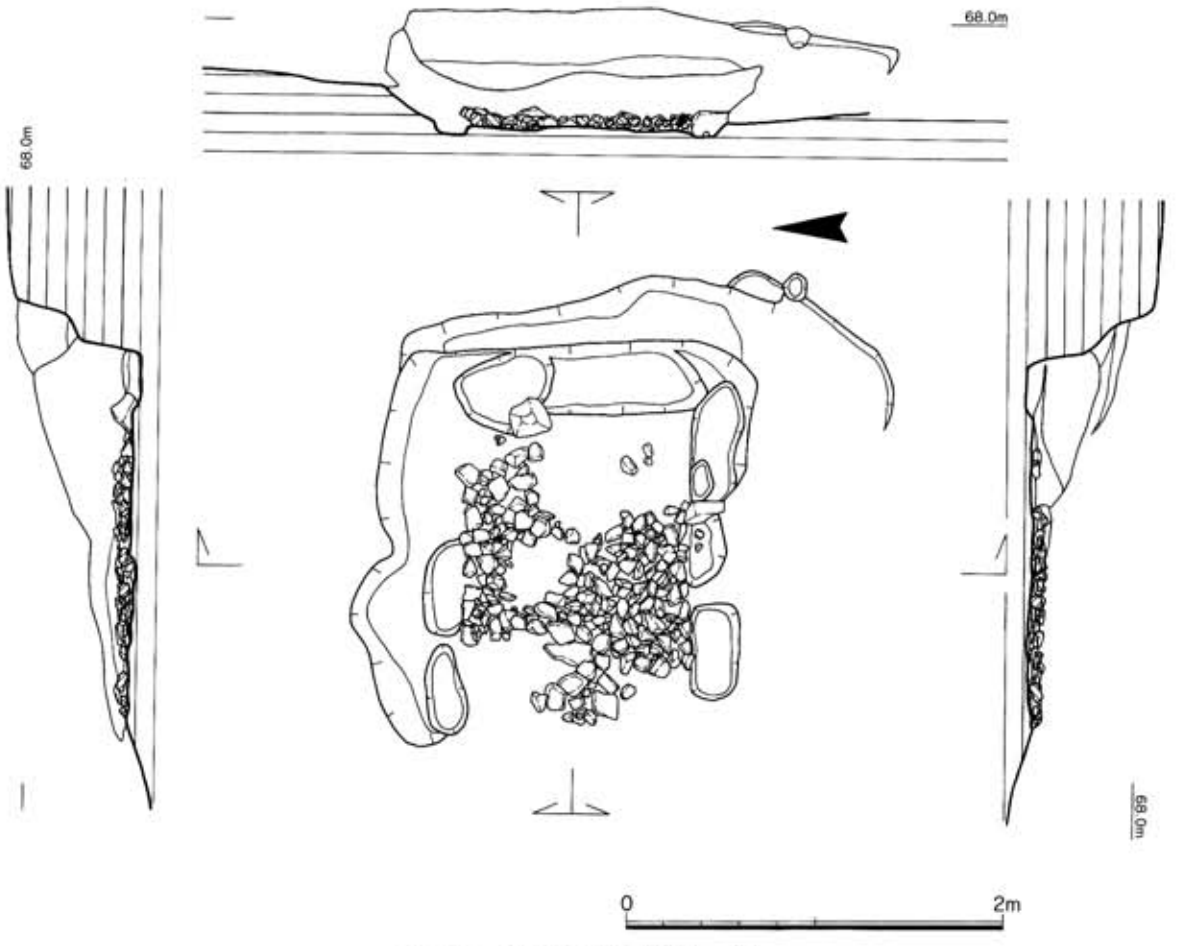


Fig.45　ＳＴ010古墳石室（1：40）

軸はＮ－83°－Ｗとほぼ真西に開口する。

敷石は比較的良好に遺存しており、大きさ0.1～0.2ｍの小礫が石室中央部に広がる。敷石の礫はいずれも角礫であり、敷石の間より鉄鏃が出土している。

出土遺物（Fig.44）　周溝内より土師器杯（1，2）、石室敷石中より鉄鏃３点が出土している。

1は体部から緩やかに内湾して口縁部が開くもので、端部は舌状に丸みを帯びる。体部の下半部から底部にかけて手持ちヘラ削りを施す。2も同様に底部から体部・口縁部にかけて緩やかに内湾しつつ、口縁部付近ではほぼ垂直に立ち上がる。口縁端部は内面に面取りを行い、端面をなしている。内底面から口縁部、体部上半部にかけてはナデ、体部下半部は手持ちヘラ削りを施す。3，4，5は尖根式の鉄鏃で同一個体と思われる。3は篦被部、4は鏃身部で鏨箭形をなす。5は茎部。

３．結　語

ＳＴ010古墳の石室平面形は、幅に対して長さがその２倍前後になる細長い長方形プランをなし、敷石にかなり小さな角礫を用い、丁寧に配置される点、背面に巡る周溝が石室側に向かって比較的急に立ち上がる点は古式の様相を示している。また、周溝内から検出された土師器杯は６世紀初頭から前半に、鏨箭形の尖根式鉄鏃も５世紀後半から６世紀前半の時間幅に位置付けられる。これらの要素を考え合わせ、本古墳については概ね５世紀後半～６世紀前半の所産と推定され、群集墳として画期を考慮すれば、６世紀前半の築造例が極めて少ないことより、５世紀後半～６世紀初頭の築造と考えて大過ないものと思われる。

Ⅲ．戦場古墳群３区の遺構と遺物

１．遺跡の概要（Fig.46）

戦場古墳群３区は２区の西側約30mの谷部に位置する。戦場古墳群５区と６区の間の谷は、３区を境にして左右に分岐し、東側の谷は２区を右手に見つつ谷頭の１区へと続く。３区は１区・２区の立地する丘陵と、この谷を挟んで対峙する丘陵尾根の南側裾部に位置するが、この尾根は頂部からかなり急峻な斜面となって南に下っており、この斜面と谷底部分の変化点の、やや斜面の角度が緩やかになる部分に３基の古墳が立地している。これらの古墳の背面にあたる尾根頂部には、約30m離れて戦場古墳群４区が位置しており、７世紀前半代の古墳１基が確認されている。両者の間の急斜面についても全面の表土を除去したが、大型の自然礫の露頭はみられたものの、古墳等は確認されなかった。全面が蜜柑園となっていたため、既に壊滅した可能性も考えられるが、斜面の傾斜から考えて、もともと存在していなかったものと推定される。

調査区の面積は約2,100㎡で、標高61～75mの比高差をもっており、その62～65mの範囲に５世紀後半から末の古墳２基と７世紀後半の古墳１基、奈良～平安時代初頭の集石遺構２基が分布している。これらの遺構は谷部への流土によって完全に覆われていたもので、調査前には上面に小規模の水田が営まれており、全くその存在が知られていなかったものであるが、平成３年度に行われた確認調査により古墳１基が検出され、本調査対応となった。３基の古墳は周溝を接する程近接して北東－南西に並んでおり、北東側から南西側に向かってＳＴ014、015、016と呼称する。このうち、ＳＴ014古墳は最も高所に位置しており、最も低い場所に立地するＳＴ016古墳とは石室床面のレベル差で約1.8mを測る。３基の古墳は前述のとおり流土に覆われていたので、ＳＴ014、016は墳丘・内部主体共に比較的良好に遺存していたが、ＳＴ015は石室の最下段の石材のみを残して削平を受けている。この他、ＳＴ014の東側５ｍと７ｍの地点で奈良～平安時代初頭の集石遺構２基（ＳＸ019・023）が検出されている。

２．古墳時代の遺構と遺物

ＳＴ０１４古墳（Fig.47～50）

墳丘・周溝（Fig.47，48）　傾斜角25度の斜面に立地する。周溝は斜面に対してほぼ垂直に掘り窪めているが、石室側には立ち上がらずほぼ平坦になっており、石室掘り方と合わせると地山整形は斜面を二段に掘り込むこととなる。周溝は石室背面側に半月形に巡り、深さ最大0.7m程度が遺存する。墳丘盛土は0.25m程が確認されているが、石室の推定高から考えると盛土自体が石室天井部を覆う程度の薄いものであったとであったと思われる。墳径は墳丘裾部の東西幅の計測値から約4.5m。

内部主体（Fig.49，50）　横穴式の小石室である。検出時は上部壁体が石室内に落ち込んでいたものの、その他

Tab.8　戦場古墳群３区遺構一覧表

遺構番号	種別	形態及び特徴	規模（長さ×幅×深さ）：m	主軸方位	出土遺物	時代・時期
ST014	古墳	円墳（横穴式小石室）	径　4.5m	S－0°－E（W）	なし	古墳後期（7世紀後半）
ST015	古墳	円墳（石棺系竪穴式石室？）	径　3.0m	N－90°－E（W）	土師器（鉢）	古墳中期（5C後～6C初頭）？
ST016	古墳	円墳（竪穴系横口式石室）	径　5.6m	S－70°－W	土師器（杯・長頸壺）、鉄刀・鉄鏃	古墳中期（5C後半～末）
SX019	集石遺構	方形の集石？	大きさ0.7～0.8m	—	なし	奈良～平安（8世紀代）
SX023	集石遺構	略円形の集石？	大きさ0.7～0.9m	—	なし	奈良～平安（8世紀代）

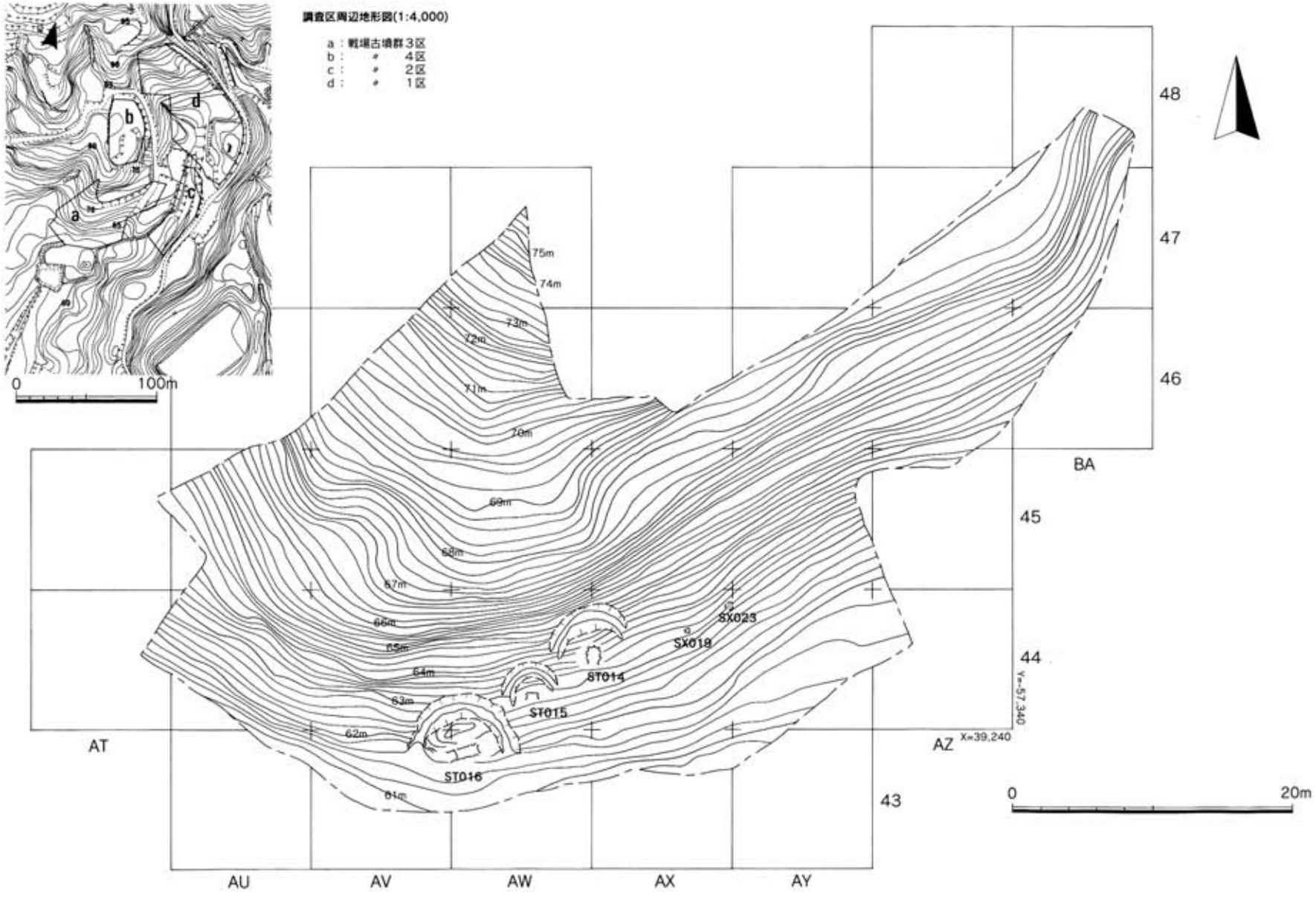


Fig.46　戦場古墳群3区遺構配置図（1：400）

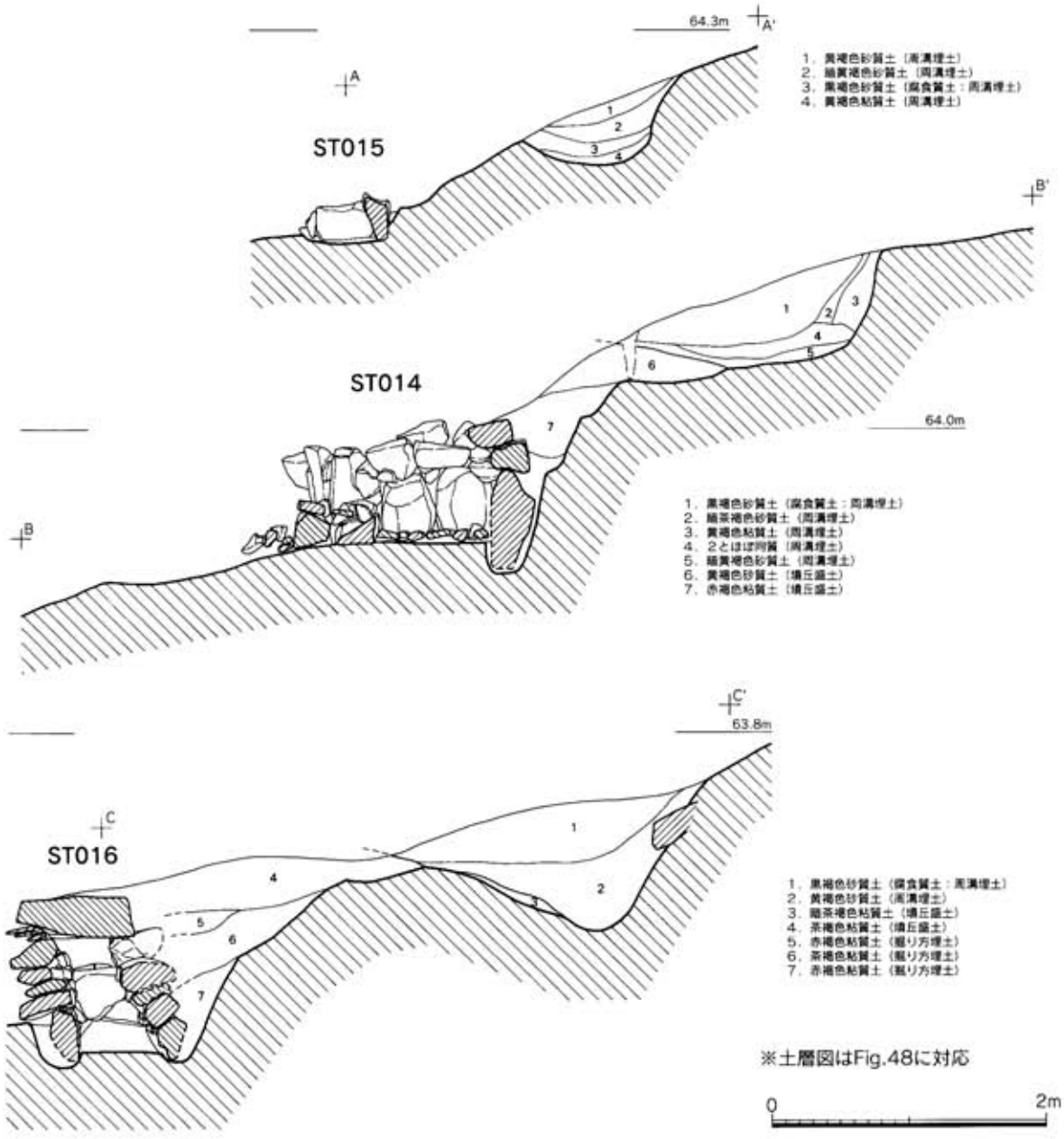


Fig.47　ST014，015，016古墳土層図（1：50）

壁体及び閉塞石共に良好に遺存していたが、天井石については検出されていない。石室掘り方は二段になっており、東西軸3.0m、南北0.8mを測る平面楕円形の掘り込みの中央に東西幅0.8m、南北の長さ1.0mの長方形の掘り方を設けて石室を構築している。

石室平面形は奥壁幅・玄門幅共に0.75m、右壁長1.15m、左壁長1.2mでほぼ長方形をなすが、閉塞施設が玄門から0.3mの位置までを占めており、実際に埋葬空間として利用できるのは一辺0.8m程度の正方形の空間（0.64㎡）のみである。開口方向はほぼ真南、框石は配しない。石室壁体は各壁とも花崗岩の転石を縦位に配置しており、奥壁に2石、左右壁に3石を用いる。腰石はそれぞれ高さ0.4～0.5mで、その上には幅0.3～0.4mの礫を横位に積み、左壁と奥壁の隅周辺で2段が、その他の部分で1段が遺存している。壁体の残存高は約0.8mである。壁体の積み方としては、右奥壁隅などでは奥壁と右壁の両者に架かるように斜めに石材を橋渡しする、いわゆる

力石を用いており、大きさ1.0mに満たない小石室と言えども、大型横穴式石室と同様の石室構築技法を踏襲しているものと言えよう。この点は石室前面の列石の配置についても言え、戦場古墳群6区ＳＴ040・浦田古墳群2区ＳＴ021と同様の、玄門の立柱石から左右に展開する列石を持っている。列石は右壁側においては3石、左壁側では2石が配され、共に玄門側の1石は玄門立柱石と同様に縦位に据えられ、他は横位に置かれる。検出時には列石の前面に数個の小礫が散在していたことが確認されており、列石自体はあと1、2段は積まれていたものと推定される。

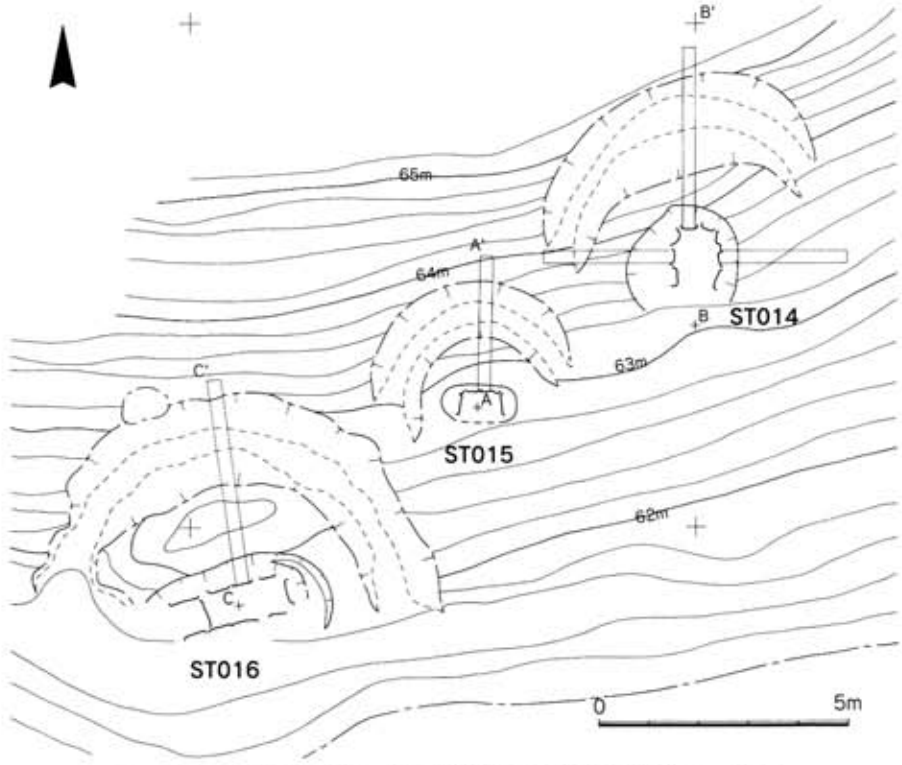


Fig.48　ＳＴ014，015，016古墳測量図（地山整形状況 1：150）

敷石は良好に遺存しており、0.15～0.3m程の平たい花崗岩の小礫を二十数個敷いている。石室内部からの出土遺物は皆無であった。

閉塞状況（Fig.50）　閉塞石は大きさ0.3m程の礫4個を根石として、その上に同じ程度の大きさの礫を積み上げ、隙間には0.05～0.2mの小礫を詰め込んでいる。閉塞石周辺から前庭部にかけては黒色腐食質土の広がりが確認されたが、堆積状況は薄いもので、土層観察からは追葬等の有無については判断できなかった。

出土遺物　本墳からは墳丘・石室・周溝・前庭部のいずれからも遺物は確認されなかった。

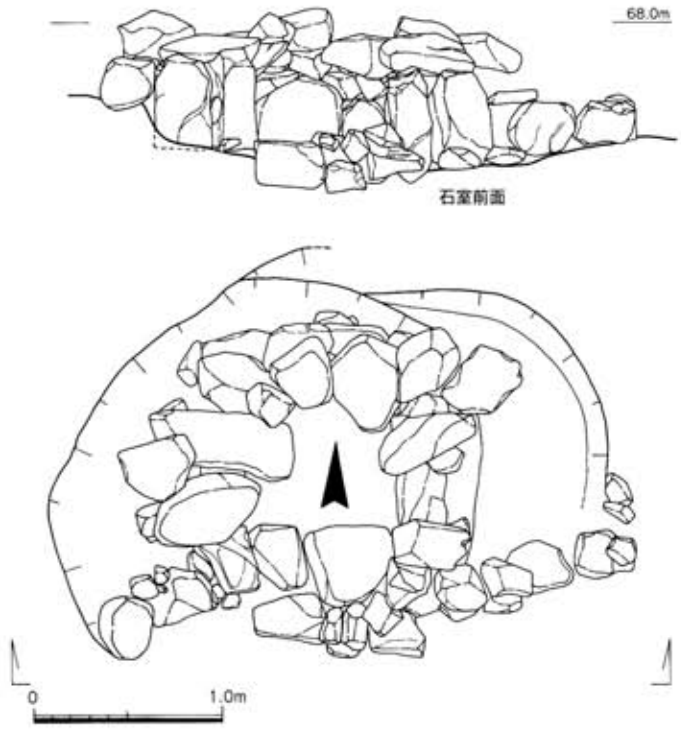


Fig.49　ＳＴ014古墳石室平面（1：40）

ＳＴ０１５古墳（Fig.47，48，51）

墳丘・周溝（Fig.47，48）　ＳＴ014とＳＴ015に挟まれて位置するが、周溝の切り合いは持たない。傾斜角25度の斜面に立地するが、削平を受けて背面に半月形に巡る周溝と石室最下段の石材のみが遺存する。墳丘も全く失

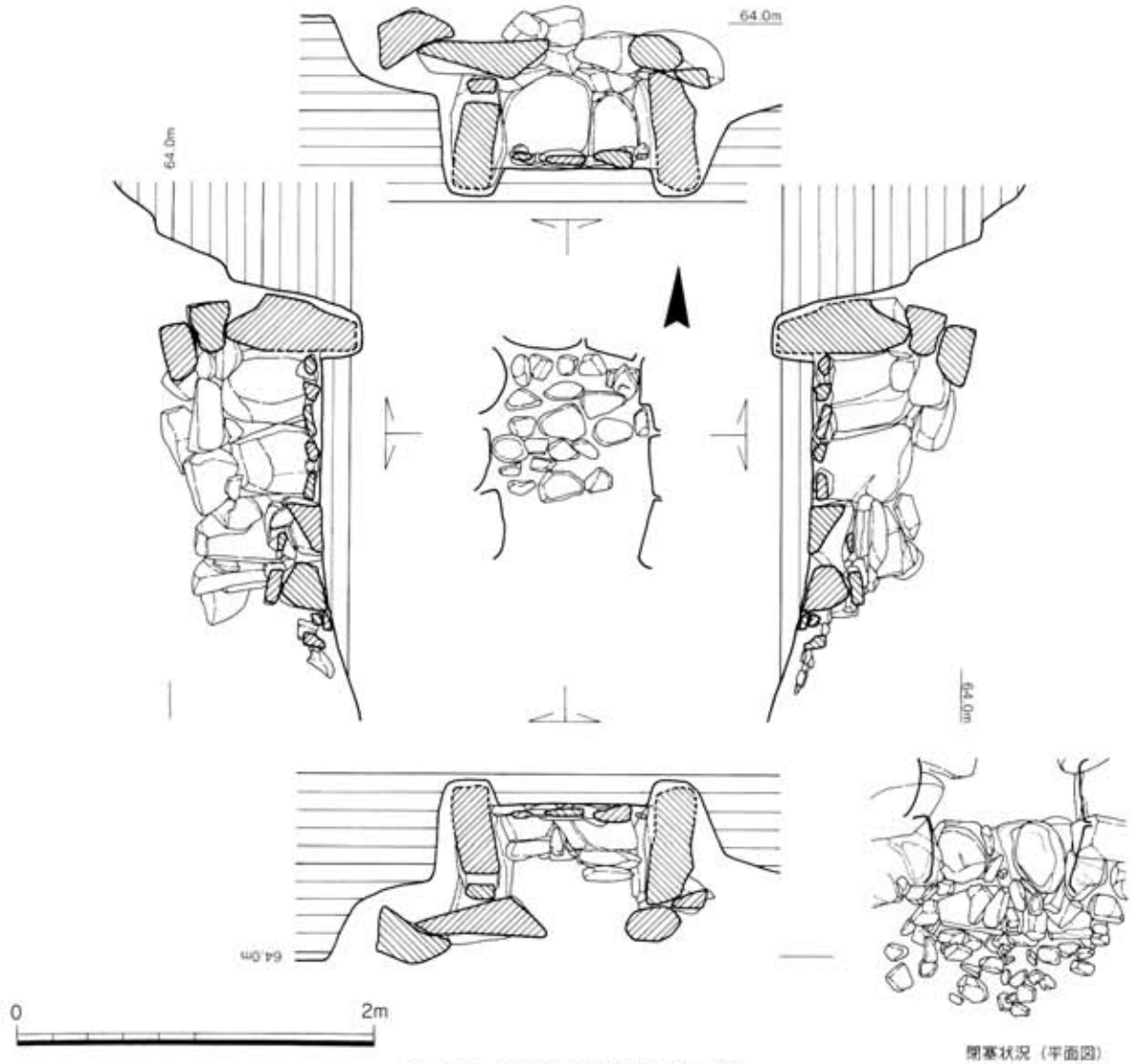


Fig.50　ＳＴ014古墳石室（1：40）

われており、基底面まで削平が及んでいるものと思われるが、ＳＴ014・016に比べて遺存状態が悪い点については、石室規模が小さいことより掘り方が浅かったことに起因するのであろう。周溝は深さ最大0.6m程度を測り、墳径は墳丘裾部の東西幅の計測値から約3.0mである。

内部主体（Fig.51）　東西方向に長軸を持つ小型石室と思われるが、壁体最下段の石材が北側長辺に２石、東西小口側に１石のみが遺存する。谷部側である南側の壁体については不明であるが、おそらくそのまま南側の長辺として２石程度が配されていたものと推定され、内部主体の構造としては、内法で東西長0.8m、南北幅0.4m程の小型の石棺系竪穴式石室、あるいは箱式石棺が想定されるが、石材が長さに比べてかなり厚みのあるものを用いていることから、おそらくは前者であると考えられる。主軸方位はＮ－90°－Ｅ（Ｗ）で、ほぼ長軸が東西を指す。石室掘り方は平面楕円形を呈し、東西1.5m、南北の残存幅0.7m。石室床面には敷石は配置されない。

出土遺物（Fig.55）　周溝内より土師器の壺１点が出土している。1は完形品で高さ7.6cm程度の小型品。丸底の底部から膨らむ体部へと続き、口縁部に向かってすぼまる。口縁端部は僅かに外反しつつ真っすぐ立ち上がる。

ＳＴ０１６古墳（Fig.47，48，52～54）

墳丘・周溝（Fig.47，48，52）　３基の古墳のうち、最も西側に位置し、標高も低い。墳丘は石室南側が水田によって削平を受けているが、周溝・内部主体共に築造当時に近い形で良好に遺存している。周溝は半月形に背面の山側にのみ巡り、断面形はＶ字、最も深い部分で深さ1.0m程度である。前述のとおり、墳丘は石室北側のみに残るが、もともとが石室天井部を若干被覆するぐらいのものと考えられ、厚さにして数十cm程が流出したのみと推定される。盛土の状況としては、断面観察においてはあまり細かく分層できず、壁体を１，２段積む毎に比較的ラフに盛り上げていったものと思われる。墳裾部分での東西方向の墳径は5.6m。なお、墳丘西側の周溝が途切れる部分で土師器の壺と杯が置かれた状態で出土している（Fig.53）。

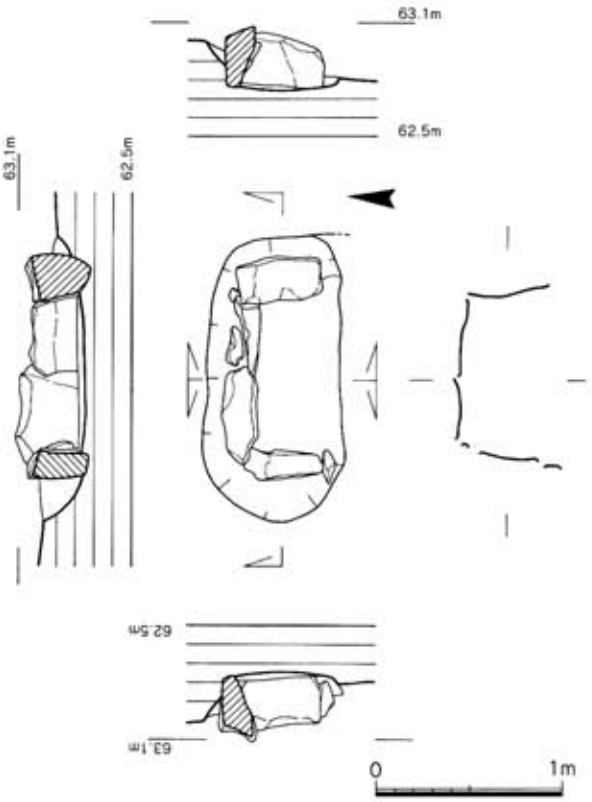


Fig.51　ＳＴ015古墳石室（1：40）

外表施設（Fig.52）　本古墳では墳丘の背面側で葺石が確認されている。葺石は大きさ0.3～0.5m程の自然礫からなるが、原位置から動いて周溝内に落ち込んでい

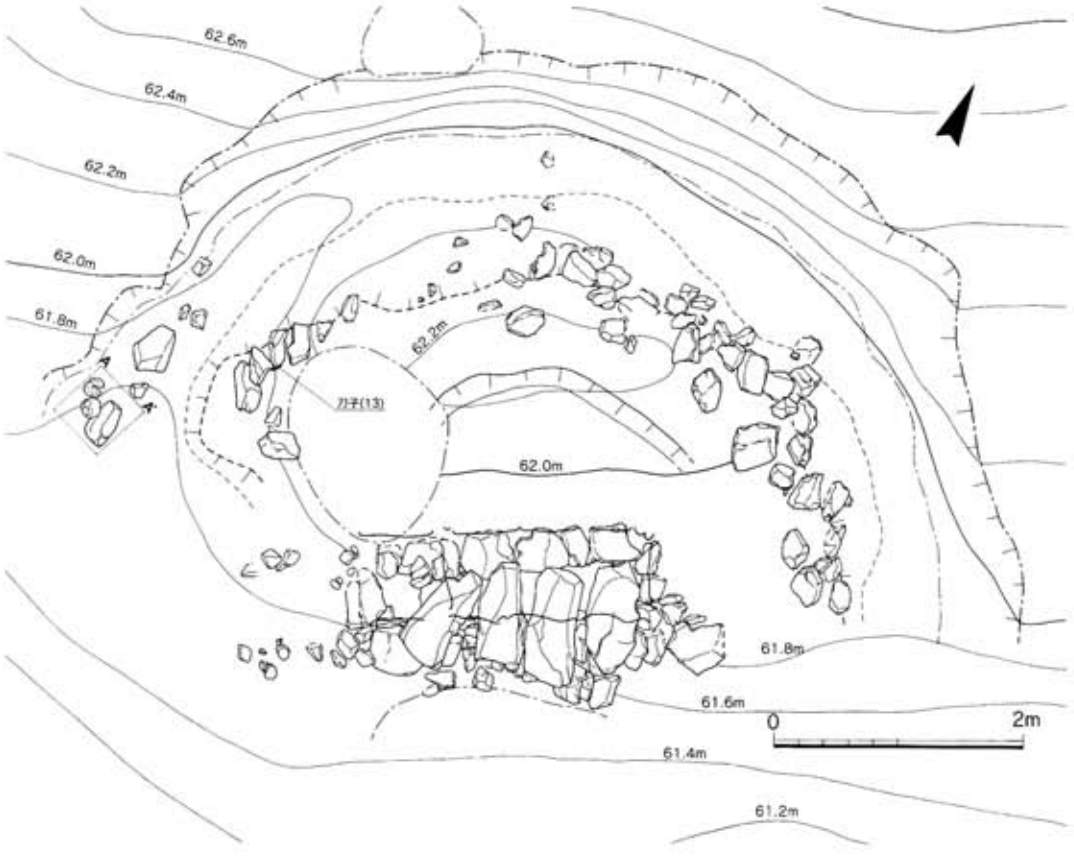


Fig.52　ＳＴ016古墳葺石検出状況（1：60）

るものも多く、本来の状態は一見分かりにくい。おそらくは、基本的には葺石は墳裾までは巡らず、ちょうど地山整形面と墳丘盛土の接点付近に上下３段程度が配されていたようである。墳丘南側が削平されているため明らかではないが、土留めの目的から考えれば葺石は南側まで全周していたものと思われる。なお、石室西側の葺石の下部より鉄製刀子１点が出土している。

内部主体（Fig.54）　竪穴系横口式石室である。奥壁及び左右壁の奥壁と接する部分で壁体最上段の石材が崩落している以外は天井石を含めて旧状を良く留める。石室掘り方は長楕円形で東西の長軸3.5m、南北は2.0mで、奥壁部分で段掘りとなり、その上面は壁体２段目の石材の下面と揃う。石室平面形は奥壁幅0.7m、玄門幅0.64m、左右壁長1.6mの長方形プランで、左右壁とも長さ0.6m程の前庭側壁を付設する。前庭側壁は石室壁体と一体化しており、壁体に沿って直線的に伸びる。主軸方位はＳ－70°－Wで谷部の傾斜の低い方に開口する。石室壁体の最上段は、側壁・奥壁・玄門部各１石を横位に配置しており、石棺系石室の構築技法と極めて類似している。玄門部の１石はそのそのまま石室と前庭側壁との仕切り石となる。２段目以降の壁体も石棺系竪穴式石室と同様、基本的には平たい石材の小口部を石室内面に向けて横位に積み上げて行くが、選択した石材の大きさによっては長辺を内面に向ける場合もある。壁体はさらに側壁・奥壁共にさらに４段を積むが、２段目以降は前庭側壁と一体に積み上げられており、控え積みを行わないためか、土圧のため、谷部側に約20度程傾いて歪んでいる。石室床面から天井石までの高さは0.9m。玄門部に仕切り石状に配置された石の上面はそのまま前庭部の床面となり、石室床面との比高差は0.2m、天井石までの高さは0.5m、仕切り石から0.3mの位置に閉塞施設を設ける。天井石は長さ0.8～1.0m、幅0.4m、厚さ0.25～0.3mの柱状の石材を、現状では４枚横位に架構されるが、閉塞施設との関係から推して、前庭部付近にもう１石が置かれていたものと考えられる。

石室内部からの出土遺物として床面中央の南寄りに鉄刀１本と鉄鏃５本が副葬されていた。

閉塞状況（Fig.54）　閉塞石として幅0.5m、高さ0.5m、厚さ0.2mの三角形の石材を上辺を水平にしてほぼ垂直に立てており、外方からより小さな石を補強するように当てている。埋葬時には閉塞石の外方にさらに土を被せていたものと思われるが、土層観察では追葬の有無は確認できなかった。

出土遺物（Fig.55：2～14）　周溝から土師器４点・須恵器１点が、石室内から鉄刀１本と鉄鏃５本が出土している。土師器のうち、3，4は完形品で周溝内に据えられていた。2，4は長頸壺。2は口縁部から頸部にかけての破片で、口縁部は直線的に伸びて端部は僅かに外方へ折れる。内外面共に横位のミガキを施す。4は同様に直線的に開く口縁部と高さの割に大きく膨らむ偏平な胴部を持つもの。調整は、口縁部は内外面共にミガキ、胴部外面はハケメの後にミガキを施す。3，5は杯で、3は丸底の底部からそのまま緩やかに開くもの。調整は内外面共にナデで、底部外面周辺にはヘラ状工具によるナデ痕が観察される。5は口縁部が3に比べてより立ちぎみに内湾するもので、内外面共にナデ。6は須恵器の短頸壺の口縁部から肩部にかけての破片。口縁部は垂直に立ち上がり、端部は断面三角形に肥厚する。周溝上面からの出土であり、８世紀後半の所産であることから混入品と思われる。7～12は片刃箭型の尖根式鏃で、ひとまとまりに石室内に副葬されていたもの。鏃身部長は約2.5～3.0cm、幅は0.7～1.0cm、篦被部長は8.5cm、茎部の

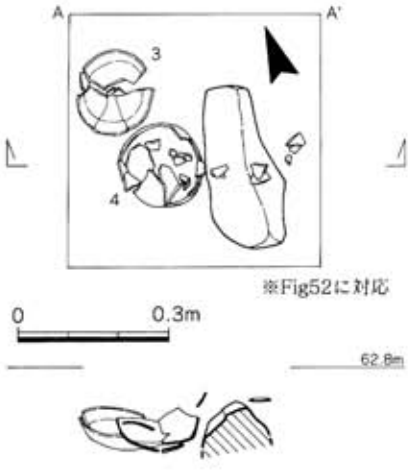


Fig.53　ＳＴ016古墳周溝内土器出土状況
(1：15)

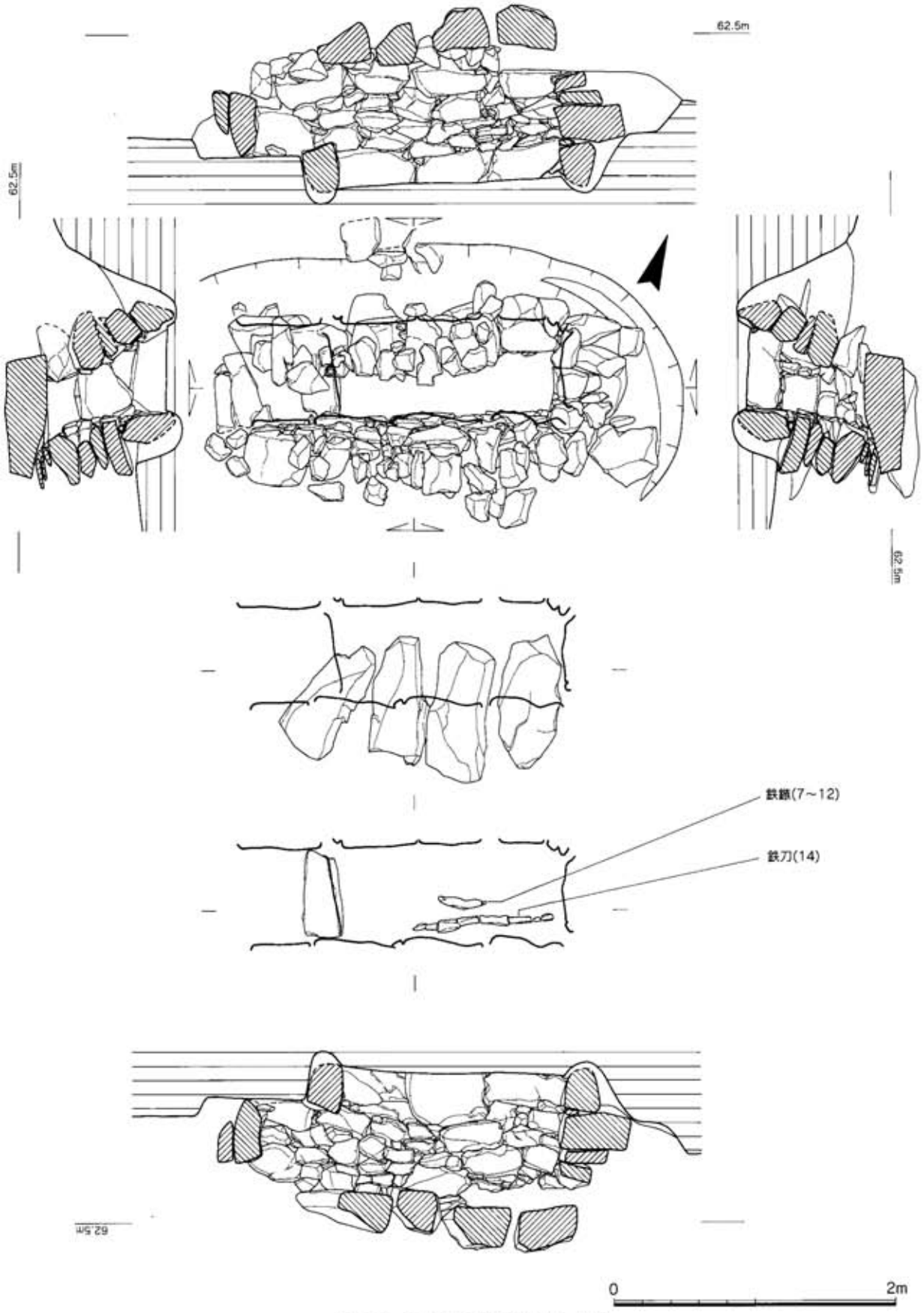


Fig.54　ＳＴ016古墳石室（1：40）

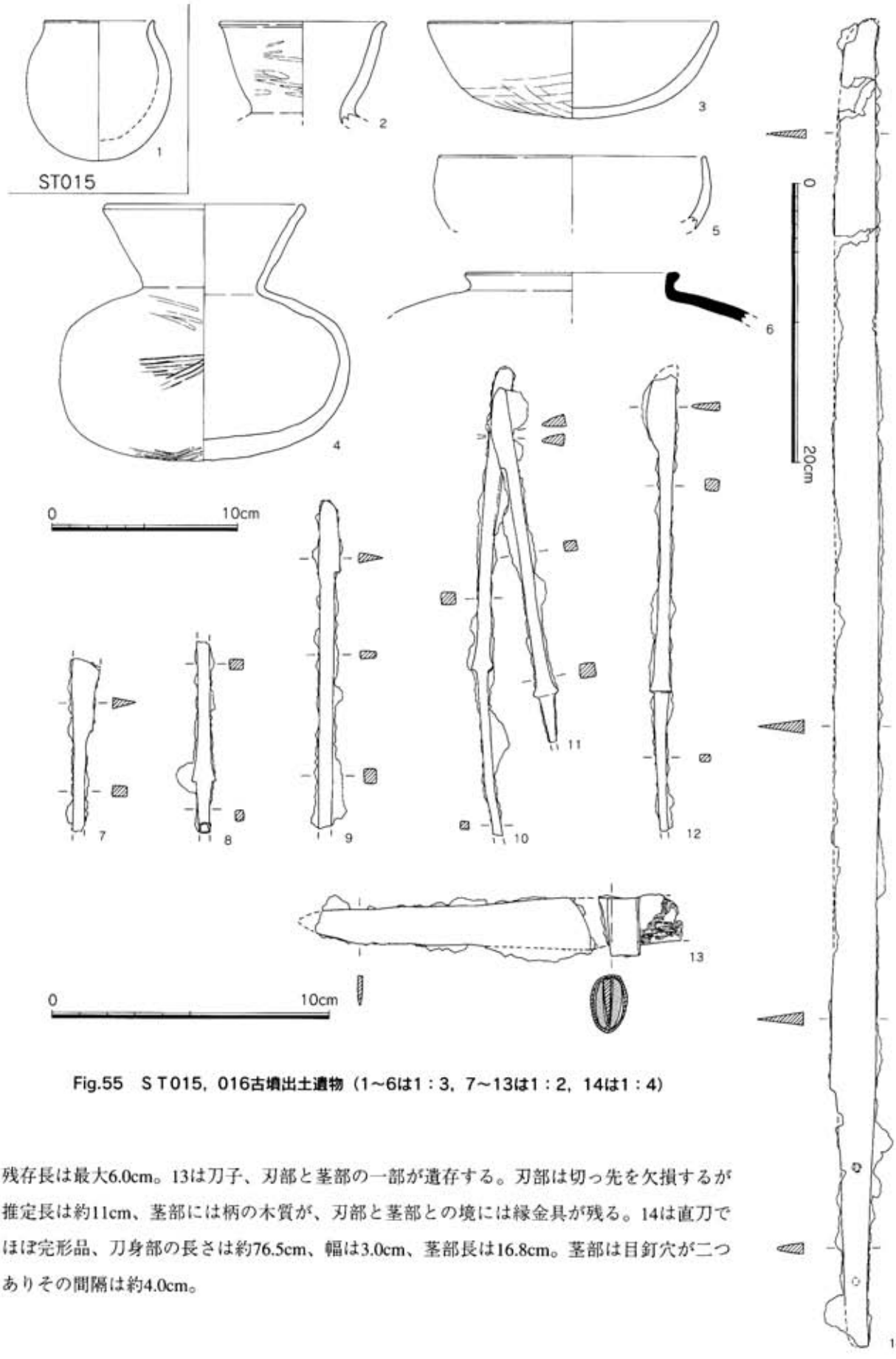


Fig.55　ＳＴ015，016古墳出土遺物（1～6は1：3，7～13は1：2，14は1：4）

残存長は最大6.0cm。13は刀子、刃部と茎部の一部が遺存する。刃部は切っ先を欠損するが推定長は約11cm、茎部には柄の木質が、刃部と茎部との境には縁金具が残る。14は直刀でほぼ完形品、刀身部の長さは約76.5cm、幅は3.0cm、茎部長は16.8cm。茎部は目釘穴が二つありその間隔は約4.0cm。

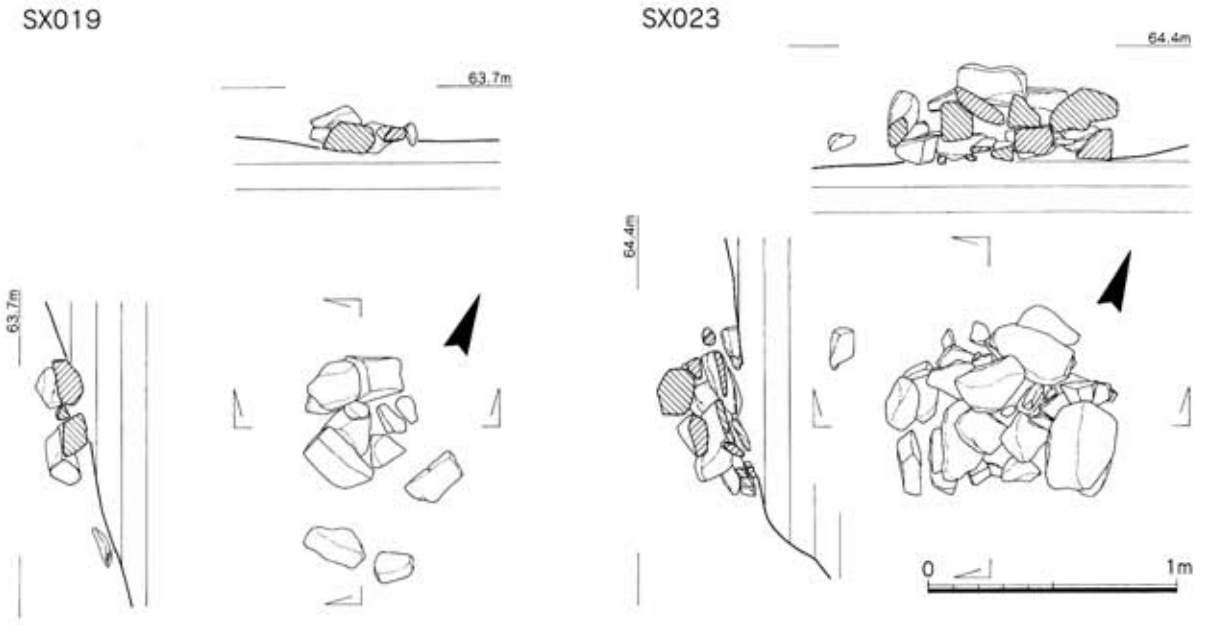


Fig.56　ＳＸ019、023集石遺構（1：30）

３．奈良～平安時代の遺構

奈良～平安時代の遺構として集石遺構が２基が確認されている。これらは伴出遺物は認められなかったが、古墳時代以降に堆積した腐食質土である黒色軟質土上に作られており、同様の遺構が戦場古墳群１区・６区で検出されていることから当該期の遺構と判断した。

ＳＸ０１９集石遺構（Fig.56）

傾斜角20度の斜面上に立地する。大きさ0.3～0.4mの礫３個、0.2m程の礫４個、0.1m以下の礫４個からなる。検出時の姿は石材もかなりの数が流出して本来の形ではなかったが、おそらくは大きな礫で四周を囲って内部に小さな礫を充填していたものと推定される。現状では南北0.8m、東西0.7mの範囲に広がる。

ＳＸ０２３集石遺構（Fig.56）

ＳＸ019の北東3.5m、同様に傾斜角10度の斜面上に立地する。ＳＸ019より遺存状況は良好で、大きさ0.3～0.4m程の礫を略円形に囲み（南及び西側の礫は失われている）、内部の底面付近には0.1～0.15mの小さな礫を敷き、その上に蓋をするように0.2～0.3m程度のより大きな礫を詰めている。現状で南北0.7m、東西0.9m、高さ0.35mの規模を持つ。

Tab.9　戦場古墳群２・３区出土土器一覧表

Fig.図番号	PL.番号	県遺物登録番号	出土地点	種別	器種	法量（cm）			胎土 ※混入物	色調	文様・調整	
						口径	器高	底径			外器面	内器面
44－1		96001044	ＳＴ010周溝	土師器	杯	(13.8)	4.5	—	砂粒少量	橙色	底部ヘラケズリ、ほかナデ、	ナデ
－2	16-6	96001043	ＳＴ010周溝２区	〃	〃	(14.0)	6.4	—	砂粒多量	鈍い橙色	底部ヘラケズリ、ほかナデ、	ナデ
54-1	20-1	96001050	ＳＴ015、周溝	土師器	壺	5.8	7.5	—	細砂粒少量、雲母多量	橙色	ナデ	ナデ
2	20-2	96001049	ＳＴ016、周溝内No5	〃	〃	8.8	(5.5)	—	緻密	明赤褐色	ヘラミガキ	ヘラミガキ
3	20-3	96001048	ＳＴ016、周溝４区	〃	杯	15.4	5.2	—	砂粒少量	橙色	底部ヘラナデ、ほかナデ	ナデ
4	20-4	96001047	ＳＴ016、周溝４区	〃	壺	(10.4)	13.8	—	細砂粒少量	橙色	ハケ目後ヘラミガキ	ナデ
5		96001045	ＳＴ016、周溝	〃	杯	(14.0)	3.9	—	砂粒少量	橙色	ナデ	ナデ
6		96001051	ＳＴ016、周溝３区	須恵器	短頸壺	(11.0)	(2.2)	—	砂粒少量	灰色	ロクロナデ	ロクロナデ

Tab.10　戦場古墳群２・３区鉄製品一覧表

Fig.図番号	PL.番号	県遺物登録番号	出土地点	種別	器種	分類・部位	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	備考
44-3	16-7	97002001	ＳＴ010玄室床面	鉄鏃	—	—	(9.7)	(0.7)	0.4	
4	16-7	98001239	ＳＴ010玄室床面敷石下	〃	—	—	(2.2)	(0.6)	0.2	
5	16-7	98001240	ＳＴ010玄室床面敷石下	〃	—	—	(3.4)	(0.5)	径0.4	
54-7	20-5	97001994	ＳＴ016石室内	鉄鏃	—	—	(6.2)	(0.8)	0.4	片刃箭型の尖根式鏃
8	20-5	97001995	ＳＴ016石室内	〃	—	—	(6.8)	(0.5)	0.4	尖根式鏃
9	20-5	97001992	ＳＴ016石室内	〃	—	—	(11.7)	(0.8)	0.4	片刃箭型の尖根式鏃
10	20-5	97001993	ＳＴ016石室内	〃	—	—	(16.7)	(0.8)	0.4	〃
11	20-5	97001993	ＳＴ016石室内	〃	—	—	(12.6)	(0.8)	0.4	〃
12	20-5	97001991	ＳＴ016石室内	〃	—	—	(16.3)	(1.0)	0.4	〃
13		97001996	ＳＴ016周溝内№4	刀子	—	—	(9.8)	2.3	1.5	縁金具が遺存する
14		99003334	ＳＴ016石室内	鉄刀	—	—	(97.2)	(3.2)	(0.8)	

4．結　語

確認された３基の古墳のうち、ＳＴ014は内部主体にいわゆる小石室を採用する終末期の小円墳である。石室平面形が一辺0.8～0.9mの正方形である点や、石室全面の列石を持つ点などで戦場古墳群１区のＳＴ004の石室と類似する。谷部への流土に覆われていたために石室壁体の残存状況は良好であり、ほぼ築造時の状態を残しているものと思われるが、天井石については確認されていない。検出時には上部壁体を構成していたと思われる小礫が石室内部に落ち込んだ状態であったが、天井石と考えられるような一定の大きさを持つ石材は周辺部においても見られない。このことは戦場古墳群１区のＳＴ004においても観察され、これらの小石室については天井部に石材を架構せず、木蓋等を用いて天井部を構成していた可能性も考慮すべきであろう。なお、本古墳からの出土遺物は皆無であり、石室形態から戦場古墳群１区のＳＴ004と同様、７世紀後半代と推定される。

ＳＴ015は小型の石棺系竪穴式石室を内部主体とする‘超’小型墳であり、石室の規模から小児の埋葬を行ったものと思われる。出土遺物は土師器の壺のみであり時期決定の手掛かりを欠くが、石室形態の他、ＳＴ016と同じく東西方向に石室主軸を持ち、これに付属するような位置関係から考えて、ＳＴ016に近い時期の築造と推定される。

ＳＴ016は戦場古墳群１区ＳＴ008・009・020と同じく石室長指数（幅に対する長さの比率）2.6の細長い石室に、短く直線的に伸びる前庭側壁を付設する竪穴系横口式石室を内部主体とする。石室内部からは副葬品として鉄刀１本と鉄鏃４本が出土しており、三津工業団地関係の調査において石室内の副葬品の配置状況が把握できるものとして唯一の例である。また、西側周溝からは土師器の壺と杯が供献された状態で検出されており、酒飲等の祭祀行為を経て埋置されたものと推測される。築造時期については、土師器のみの出土であるため、いまひとつ明らかにし得ないが、ほぼ５世紀後半～末に位置付けられる。

これら３基の古墳は近接して存在するものの、５世紀後半～末の間にＳＴ016・015が相次いで築造された後、７世紀後半代にＳＴ014が新たに築造されており、150年以上のタイムスパンを経ている。同様の状況は後述する浦田古墳群２区においても見られるが、ここでは調査区内の古墳と時期的に異なる須恵器片が採集されており、小支群からやや離れた調査区外に空白期を埋める時期の古墳の存在が指摘できる。戦場古墳群３区についても、背面の丘陵尾根上に立地する戦場古墳群４区ＳＴ012古墳（７世紀前半）を含めて群形成を考える必要があろう。

なお、集石遺構ＳＸ019・023は蔵骨器等の出土遺物は検出されていないが、戦場古墳群１区・６区で確認された奈良～平安時代初頭の火葬墓と形態的に類似し、同様の遺構と考えられる。特にＳＴ016の周溝からは混入品として８世紀後半の須恵器短頸壺の破片が出土しており、当該期の火葬墓の存在を強く示唆するものである。

Ⅳ．戦場古墳群４区の遺構と遺物

１．遺跡の概要（Fig.57）

戦場古墳群４区は３区の立地する斜面の背面にあたる丘陵頂部、標高80～83mの範囲に位置する。東側の谷部には戦場古墳群１区の６基の古墳が分布し、またこの谷部を挟んで東側にはＳＴ001古墳の立地する尾根と対峙している。戦場古墳群４区は三津工業団地の発掘対象地の中で最も高所に位置するもので、調査前は蜜柑園に造成されていたため、遺構の存在の有無は明らかでなかったが、約820㎡を対象に表土剥ぎを行った結果、古墳１基（ＳＴ012）を検出した。ＳＴ012古墳は尾根端部の最高所に位置するが、さらに北側に続く尾根は大きく段切

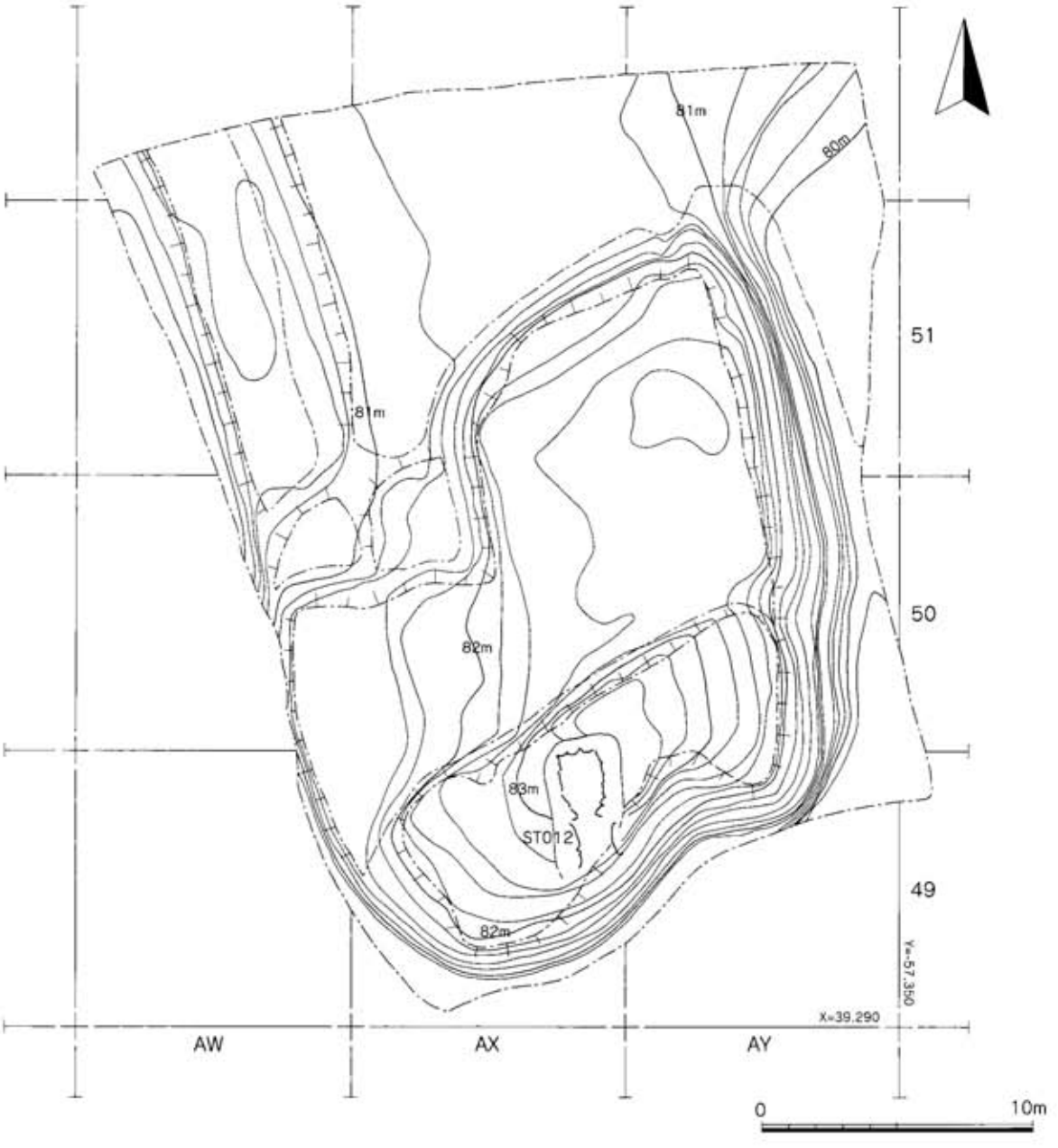


Fig.57　戦場古墳群４区遺構配置図（1：250）

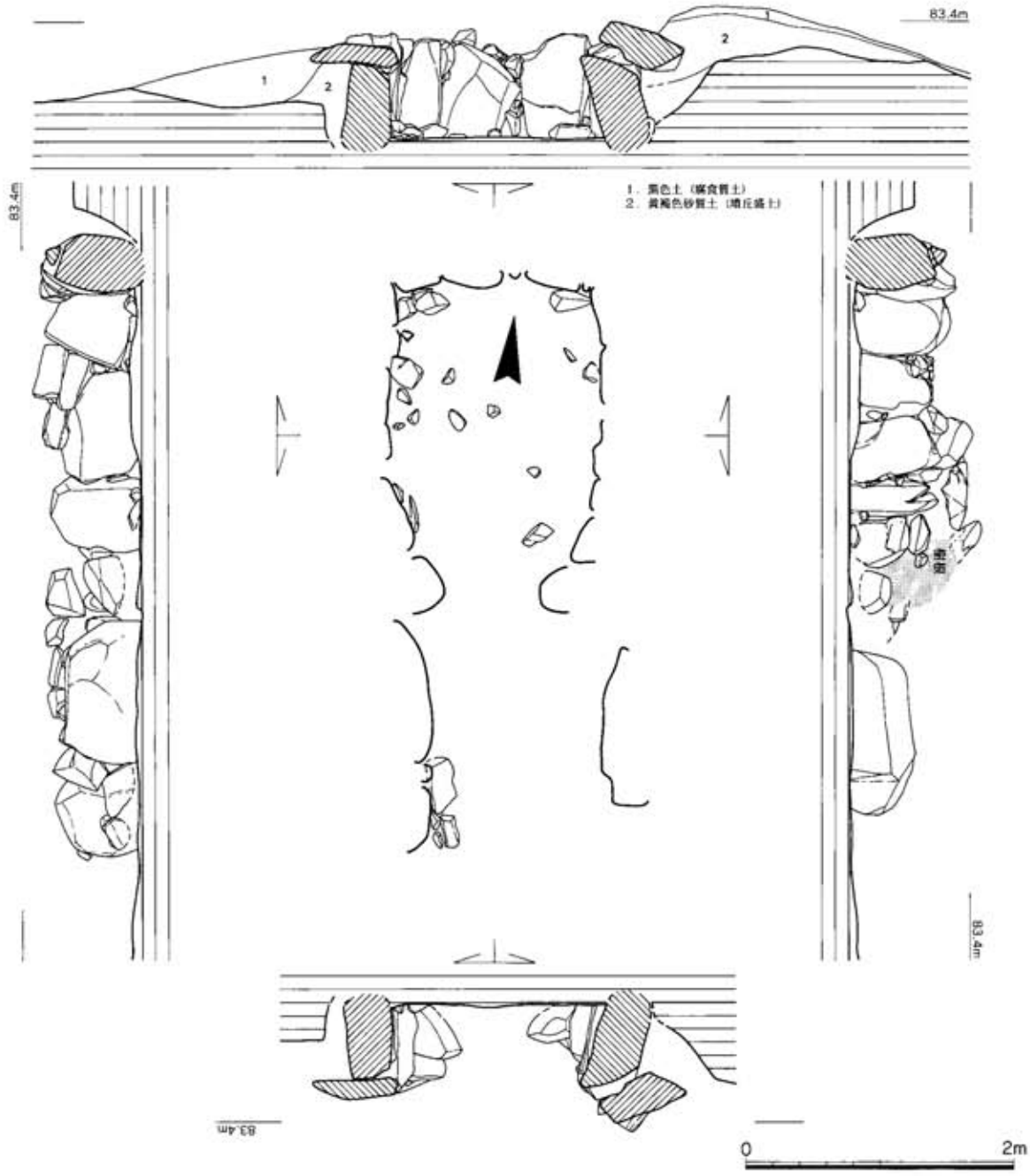


Fig.58　ＳＴ012古墳石室（1：50）

りが行われているため旧地形が大きく損なわれており、他に遺構が存在していたとしても既に失われている可能性が高い。また、ＳＴ012古墳も含めて本調査区における出土遺物は皆無である。

２．古墳時代の遺構と遺物

ＳＴ０１２古墳（Fig.57～60）

墳丘・周溝（Fig.57）　尾根上の平坦面に立地する。古墳の前面は石室羨門部分から急峻な斜面となっており、いくらか谷部へと崩落したものと推定され、背面は石室から２ｍ程度の部分で地山から約1.0m削平されて蜜柑

園となっている。よって比較的旧状を留めているのは東・西側であり、墳丘盛土は東側で0.4m、西側で0.3m程が遺存し、平面的には径６mの範囲に墳丘盛土が残る。ただ周溝につては遺存しておらず、立地場所から推して本来的に持たなかった可能性も高い。墳丘規模については詳細不明であるが、おそらくは径10m前後であったと推定される。

内部主体（Fig.58，59）　単室両袖型横穴式石室である。石室掘り方はほぼ隅丸の長方形をなしており、奥壁側で幅約2.5m、右壁側で長さ約3.5m、左壁側で長さ約5.0m。壁体の石材は玄室・羨道共に腰石のみを残してほとんどが失われている。玄室平面形はほぼ長方形であり、右壁長2.0m、左壁長2.0m及び奥壁幅1.45m、前壁幅1.15mで、奥壁から玄室長の2/3程までは直線的に伸び、そこから玄門に向かってすぼまる。玄室壁体の腰石は奥壁に３石、右壁に５石、左壁に３石を用いており、左壁の真ん中の石を除いて全て石材は縦位に配置され、その上面は床面から0.7m前後の高さに揃えられる。腰石上の壁体は左右壁の一部で確認されているが、幅0.3～0.4m、厚さ0.15～0.2mの平たい石材を横位に積んでいる。玄門部には幅0.4m、高さ0.3mの小型の石材が左右壁から突出して配置されており、いわゆる立柱石は立てられない。石材が小さい点から袖石とするにはやや疑問が残るが、位置関係から考えても玄門部の袖石と考えざるを得ず、数石の石材を横位に積み上げて袖部を形作っていたと推定される。玄門幅0.7m、框石は認められない。玄室床面も撹乱を受けており、敷石等については詳細不明である。

玄門の前面にはさらに羨道が付設され、

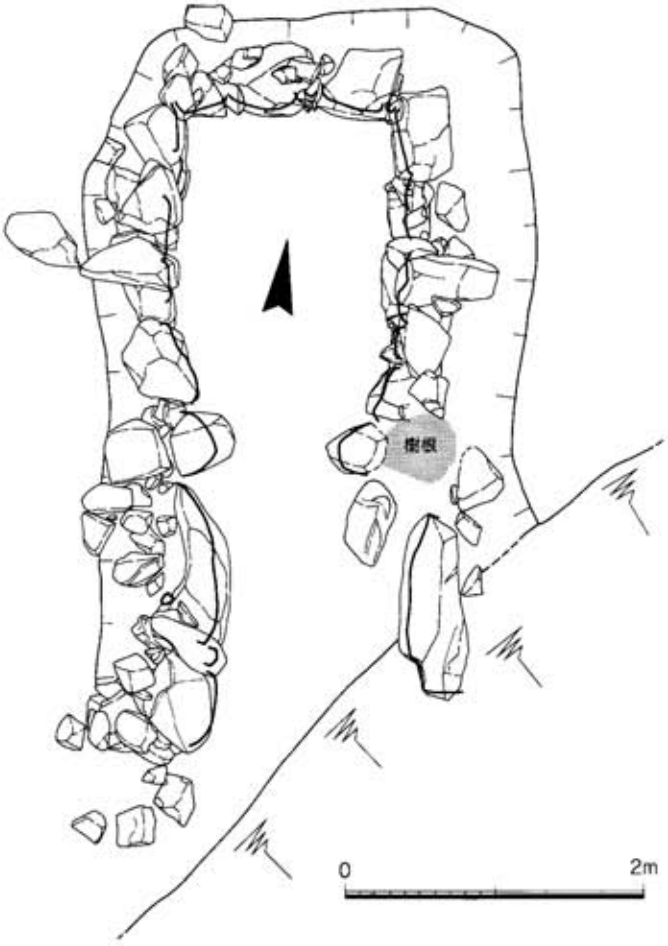


Fig.59　ＳＴ012古墳平面（1：50）

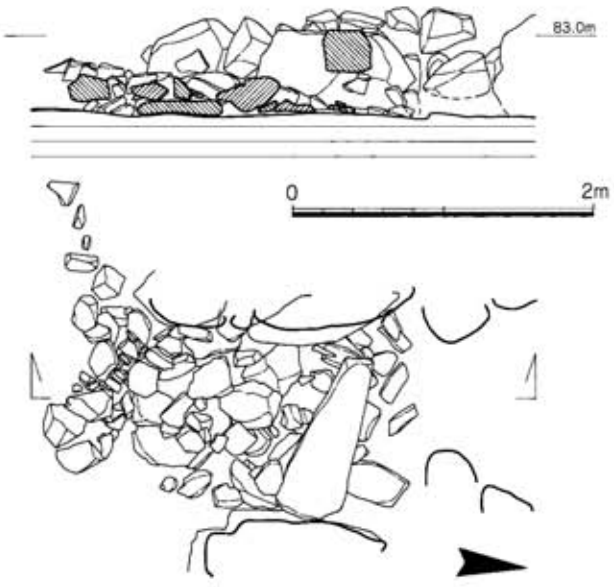


Fig.60　ＳＴ012古墳閉塞状況（1：50）

右壁側に腰石が１石、左壁側に２石が遺存するが、右壁の羨門側の石材については斜面の崩落と共に失われており、残る１石についても外側に倒れている。現況で右壁長は1.4m、左壁長は1.7mであり、玄門から羨門に向かって直線的に伸び、その幅は概ね1.0m程度に復元できる。腰石は玄室と異なり石材を横位に配置しているが、その上面は玄室腰石と揃えているようである。なお、使用された石材はすべて花崗岩である。

閉塞状況（Fig.60）　羨道部で閉塞に用いられたと思われる礫群が確認されている。検出された礫は大きさ0.5～0.8mのものを中心としており、それらを最下段に据え、より小さい礫をその上に積み上げ、玄門のすぐ外側で閉塞を行っていたようである。また、この礫群の上部には長さ1.1m、幅0.2～0.4mの柱状の石材が検出されており、大きさ・位置から玄門上に架構された楣石であった可能性が考えられる。

出土遺物　本古墳からは周辺部も含めて遺物は検出されていない。

３．結　語

本調査区からはＳＴ012古墳１基のみの確認であり、その時期的な位置付けについても出土遺物が認められないことから、直ちには判断できないが、石室形態より若干の考察を行ってみたい。まず、奥壁側が広く玄門部ですぼまる玄室平面形、玄室腰石の縦位の配置は戦場古墳群６区ＳＴ040・浦田古墳群２区ＳＴ021と類似しており、両者ともⅥ期の須恵器を出土している。同様の玄室平面形や腰石の配置の在り方は、中原町から佐賀市にかけて、いわゆる佐賀平野東部域の脊振山南麓における７世紀代の古墳に多くみられるものである。７世紀の前半から後半にかけての終末期横穴式石室は、天井石を持つ羨道の付設→前庭側壁→石垣状の石積みへと変位し、同時に玄門から直線的に伸びていたものが、ハの字形を経て、最終的には石室長軸と直交する形で左右に大きく開く石垣状の石積みへと変化する。このような羨道・前庭側壁の変化は、石室構築技法及び立地場所と密接に関わるものと思われるが、７世紀代における石室の時期決定のひとつの手掛かりとなるものである。本古墳において羨道とした部分の壁体は、直線的に伸び、かつ玄室と同様に腰石状の大きな石材を配置しており、天井石が架構されていた可能性が考えられ、７世紀代でも前述の二者より古い要素を備えている。以上のことより、ＳＴ012については概ねⅤ期並行、７世紀前半でも新しい段階と位置付けたい。

Tab.11　戦場古墳群４区遺構一覧表

遺構番号	種　別	形態及び特徴	規模（長さ×幅×深さ）：m	主軸方位	出土遺物	時代・時期
ST012	古　墳	墳形不明	不　明	S－6°－E	な　し	古墳後期（7世紀前半）

Ⅴ．戦場古墳群６区の遺構と遺物

１．遺跡の概要（Fig.61）

戦場古墳群６区は工業団地調査区の西端に位置し、東脊振村と神埼町との町村境に接している。地形的にはほかうそ溜池から戦場古墳群３区を経て２区・１区へと続く谷部を中心とした地区であり、町村境の走る細長い丘陵尾根の東側斜面も含まれる。調査区の面積は約6,800㎡、南北約200m、東西幅約最大40mと南北に細長く、また標高は47～59mと調査区内での高低差は大きい。調査区内では丘陵尾根斜面にあたる西側が急な斜面となる一方、調査区中央から東寄りは傾斜が緩やかになって東に下って行くが、調査区内の東側は常時湿り気を帯びた水はけの悪い地面であり、旧地形としては、おそらくは調査区のすぐ東側付近、現況農道が走る部分あたりで一段深くなり谷部となっているものと推定される。よって調査区は、微地形的には丘陵急斜面、及び丘陵急斜面から谷部へと続く途中のテラス状の緩斜面にあたると言える。

この戦場古墳群６区を挟んで東側に展開する丘陵全体が戦場古墳群５区であるが、表土剥ぎを実施したところ、ほぼ全面が蜜柑園に改変されているためか、遺構・遺物は確認されていない。また、調査区の西側に接する丘陵も尾根上まで蜜柑園となっており、現況では古墳等の存在について明らかではない。特に神埼町側に当たる丘陵西側斜面はかなり大規模に切り盛りが行われており旧地形は大きく損なわれている。しかし、少なくとも６区の位置する東脊振村側より神埼町側の方が、より斜面の傾斜は緩やかであったものと推定され、本来的には古墳群が存在していた可能性も考えられる。６区についても調査前の状況は西側の丘陵急斜面が蜜柑園、東側の緩斜面は水田となっており、古墳の存在についても全く窺えなかったが、平成３年度の確認調査の結果、水田下より古墳の石室石材・周溝を確認したことから、本調査を要する地区と判断されたものである。

本調査は平成５年度から６年度にかけて実施されたが、当初は確認調査で発見されたＳＴ033・034古墳周辺の

Tab.12　戦場古墳群６区遺構一覧表

遺構番号	種　別	形態及び特徴	規模（長さ×幅×深さ）：m	主軸方位	出土遺物	時代・時期
ＳＴ033	古墳	馬蹄形墳（横穴式石室）	長軸15m、短軸13m	Ｓ－25°－Ｗ	須恵器・土師器・鉄器（銀象嵌刀装具・鏃・刀子・轡・鞍金具・U字金具）・耳環	古墳後期（6世紀3/4四半期）
ＳＴ034	古墳	円墳（横穴式石室）	径　14.5m	Ｓ－20°－Ｗ	須恵器・土師器・鉄器（鏃・刀子・弓付属金具）	古墳後期（6世紀3/4四半期）
ＳＸ035	火葬墓	楕円形土壙	長軸0.8m、短軸0.7m	—	須恵器（短頸壺）・土師器（杯・皿）	奈良（8世紀後半）
ＳＸ036	火葬墓	方形の集石	一辺1.3～1.4m	—	土師器（鉢・皿）	奈良～平安（8世紀末）
ＳＸ037	火葬墓	不定形の集石	—	—	土師器（甕・杯蓋）	奈良（8世紀後半）
ＳＸ038	火葬墓	方形の集石	一辺2.0～2.2m	—	土師器（皿）、須恵器（杯）	奈良～平安（8世紀末）
ＳＴ039	古墳	円墳（横穴式石室）	径　12.5m	Ｓ－22°－Ｗ	須恵器（杯身・高杯）・弥生土器・縄文土器・鉄器（鏃・鉸具）	古墳後期（6世紀後半）
ＳＴ040	古墳	円墳（横穴式石室）	径（推定）　13～14m	Ｓ－15°－Ｅ	土師器・須恵器・耳環、石斧	古墳後期（7世紀3/4四半期）
ＳＴ049	古墳	墳形不明（横穴式石室）	—	Ｓ－18°－Ｅ	須恵器・土師器・鉄器（鏃・鉸具・鞍金具・飾金具）・寛永通宝	古墳後期（6世紀4/4四半期）
ＳＸ050	支石墓	墓壙は楕円形	長軸1.5m、短軸1.2m	Ｎ－75°－Ｅ	なし	弥生時代前期前半？
ＳＴ053	古墳	円墳？	径8～9m	—	なし	不明
ＳＸ054	祭祀遺構	土製品が集中して出土	—	—	土馬、人形・鏡形土製品、棒状土製品、土師器（鉢）	奈良（8世紀）
ＳＸ055	不明遺構	弥生土器甕２個体が潰れた状態で出土	—	—	弥生土器（甕）	弥生時代後期後半
ＳＸ056	青銅製鋤先出土遺構	楕円形土壙	長軸0.42m、短軸0.32m	—	青銅製鋤先	弥生時代後期後半

調査区周辺地形図(1:4,000)

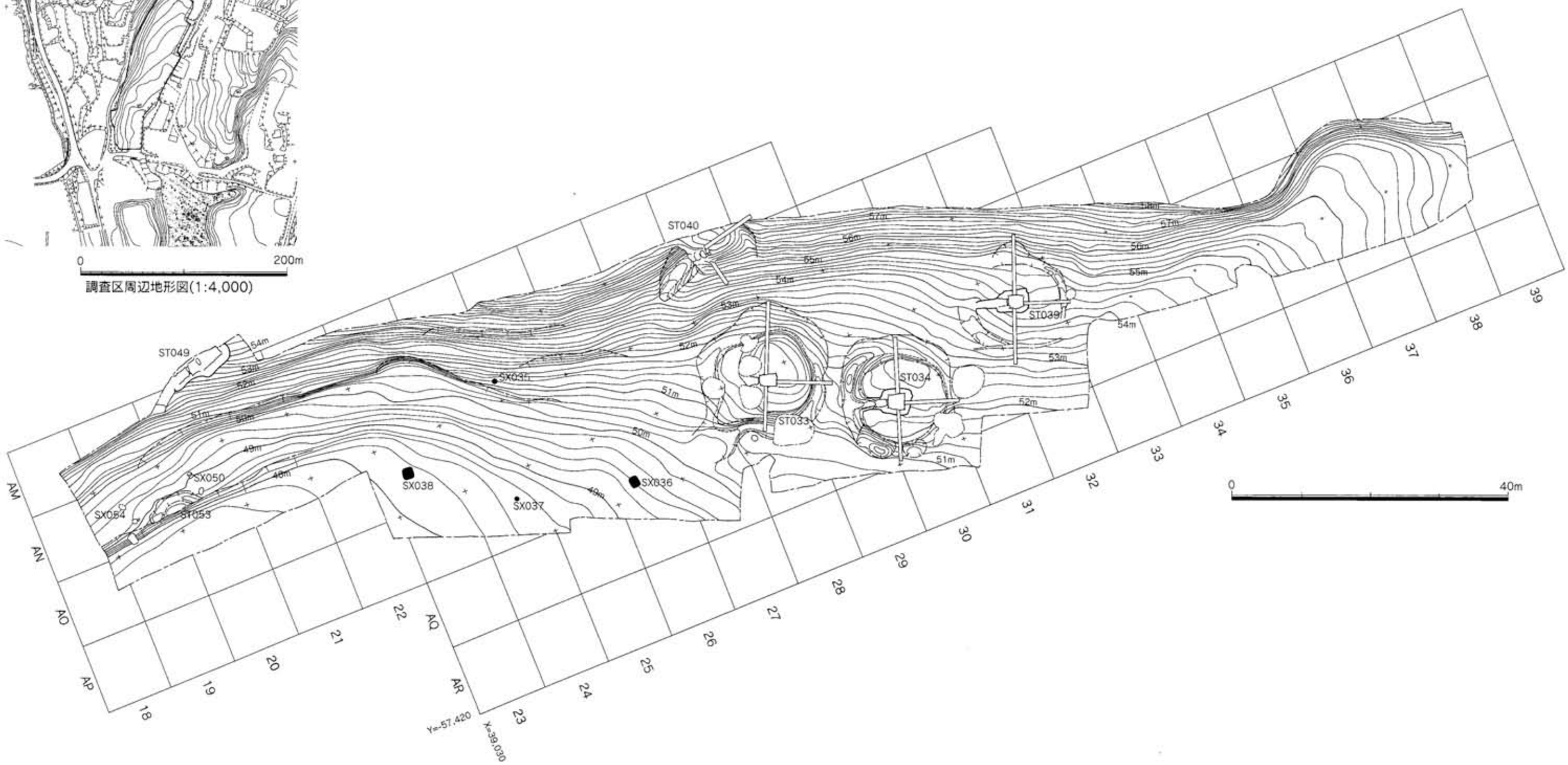


Fig.61　戦場古墳群6区遺構配置図（1：600）

みの表土を除去して調査を行っていたところ、この内、ＳＴ033古墳が谷部上部からの流土によってかなり埋没していたことが明らかとなり（Fig.70）、周辺部に未だ埋没している遺構が存在している可能性が予想された。よって緩斜面部分に沿って南側に拡張していったところ、同様に流土下より埋没していた旧地表面が現れ、奈良・平安期の火葬墓と思われる集石遺構が比較的良好に遺存しているのが確認された。さらに西側の丘陵急斜面についても表土を除去したところ、新たに２基（ＳＴ040・049）の古墳が確認されたが、このうちＳＴ040古墳は流土下に完全に埋没していたことから蜜柑園造成に伴う掘削もほとんど被っておらず、ほぼ築造当時の姿を留めていた貴重な例と言える。（なお、この丘陵急斜面は工業団地の造成計画では緑地保存帯となるほか、尾根上に農道が走るため、調査範囲は古墳築造時期等が判断できる範囲に留めており、ＳＴ040・049両古墳の西側部分については未調査である。）調査区の土層堆積状況についてであるが、耕作土下には前述した流土が厚く堆積しており、その厚さは最大1.5ｍに及ぶ。その土質は粘性の乏しい砂質土であり、花崗岩の風化土壌を主な成因としている。これは北方のより標高の高い丘陵部から谷部に沿って繰り返し流出してきたものと考えられるが、この流土の土層断面観察を行ったところ（Fig.70）、腐食質土化した部分が幾筋も層状に見られ、その堆積が断続的であったことが窺える。この流土下では、特に緩斜面付近において黒色粘質土（Ⅲ層：Fig.65のＳＴ034古墳墳丘下土層の２）が薄く見られる。この黒色粘質土は古墳築造前の旧地表面であり、その上面には古代の集石遺構が造られる一方、層中には弥生時代後期の土器が含まれる。さらにこの黒色粘質土下には明赤褐色粘質土（Ⅳ層：Fig.65のＳＴ034古墳墳丘下土層の３）が厚く堆積しているが、これは戦場古墳群１区、戦場ケ谷遺跡２区の縄文時代早・前期の遺物包含層と同じ風積作用によって形成されたものと思われる。この明赤褐色粘質土については、ＳＴ033・034古墳調査終了後に墳丘下を中心に約300㎡を対象に掘り下げを行ったが、石鏃・石槍・磨石等の石器数点と形態不明の土器小片が僅かに出土したに過ぎず、焼けて赤変化した礫は散見されるものの、集石等の明確な遺構は確認できなかった。

以下に調査の概要を述べるが、確認できた主な遺構として、古墳時代後期の古墳５基、時期不明の古墳１基、奈良・平安時代の火葬墓と思われる集石遺構４基・祭祀遺構１基の他、弥生時代の支石墓１基等が有る。また、弥生～奈良・平安期の遺構面下では縄文時代の遺物包含層が約300㎡の範囲で確認されている。出土遺物の内、特徴的なものとしては、弥生時代後期の青銅製鋤先１点、古墳時代後期の銀象嵌を施す刀装具１点に加えて、奈良・平安時代の祭祀遺構において土馬５個体分を含む、人形や、鏡を模した土製品が多数出土している。特に青銅製鋤先は県下６遺跡目、古墳時代における銀象嵌刀装具は県下初の出土である。

２．縄文時代の遺物（Fig.62・63）

縄文時代の遺物として、少量の土器片及び石器・剥片数十点が出土している。土器には縄文時代早期の条痕文土器・無文土器、中期の凹線文土器があるが、早期のものは細片がほとんどである。また、石器は石鏃・石槍・石匙・削器・石斧・磨石・石核等が見られる。このうち、石器・剥片の多くはＳＴ033・034古墳墳丘下を中心とした範囲のトレンチ調査によってⅣ層中から出土しているが、土器については遺構検出面、あるいは古墳の墳丘盛土内で確認されたものがほとんどである。また、Ⅳ層中における遺物も、その分布密度が非常に薄い上、出土する層位も安定していないことから、すべて二次堆積によって原位置を大きく動いているものと推定される。

①土器（Fig.62）

1は屈曲部を持つ胴部片で、胴上部はやや丸みを持って内傾する。比較的大型の深鉢と推定され、胴部径で40cm程度はあるようである。胴部外面の屈曲部分に横位の凹線を一条巡らし、そこから上位に細くシャープな

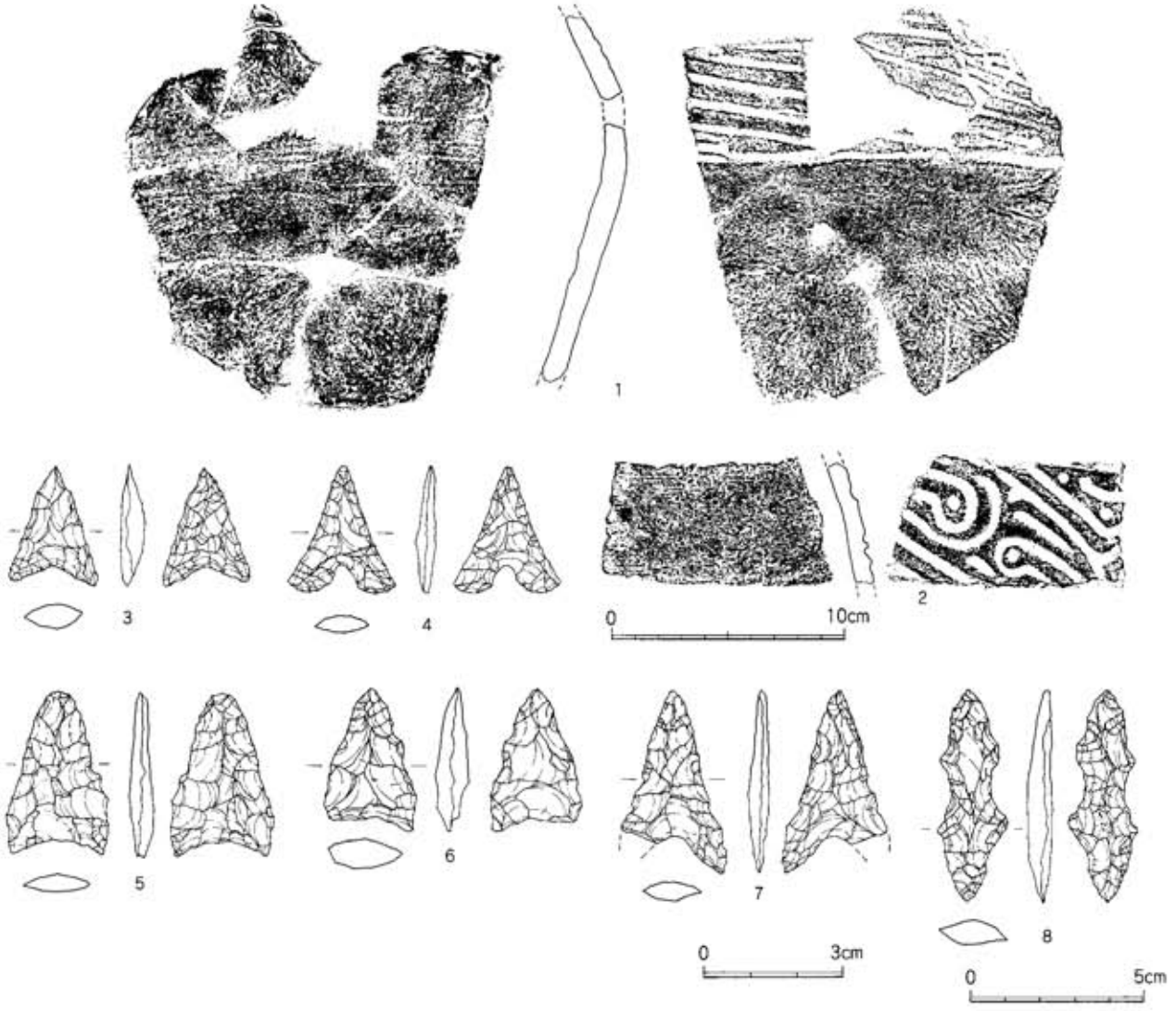


Fig.62　縄文時代の遺物１（1，2は1：3、3～7は2：3、8は1：2）

凹線による文様帯を持つ。凹線は左上から右下方向に施文されるもので、遺存している範囲では６本程度が確認され、端部はやや膨らみを持たせて丸く収められる。屈曲部下の胴下部外面は無文で、横位のヘラミガキが部分的に見られ平滑に仕上げられている。なお、内面はナデである。胎土中には多量の砂粒と雲母を混入している。2も同じく凹線文を持つ深鉢であり、おそらくは胴部の屈曲部より上位にあたる部分と思われる。同様に胴部屈曲部から上は口縁部に向かって内傾する器形をなす。外面には凹線により、渦巻き文を中心として、直線や点を組み合わせて文様帯を作っている。胎土中には砂粒の他、多量の滑石粉末が混入されており、器表面はかなり平滑になっている。1・2はいずれも縄文時代中期の阿高式土器系のものと思われる。

②石器（Fig.62・63）

石器は、石鏃20点・石槍１点・石匙６点・削器８点・石斧２点・磨石８点・石核２点等が挙げられ、その他サヌカイト・黒曜石の剥片が数十点出土している。

3～7は石鏃、いずれも凹基無茎式でサヌカイト製である。3・4は両側辺が直線的となる平面二等辺三角形状になるもので、3は抉りが浅く、4は抉りが深く脚部が丸くなる。5・6は両側辺がやや丸みを持つもので、抉りは浅

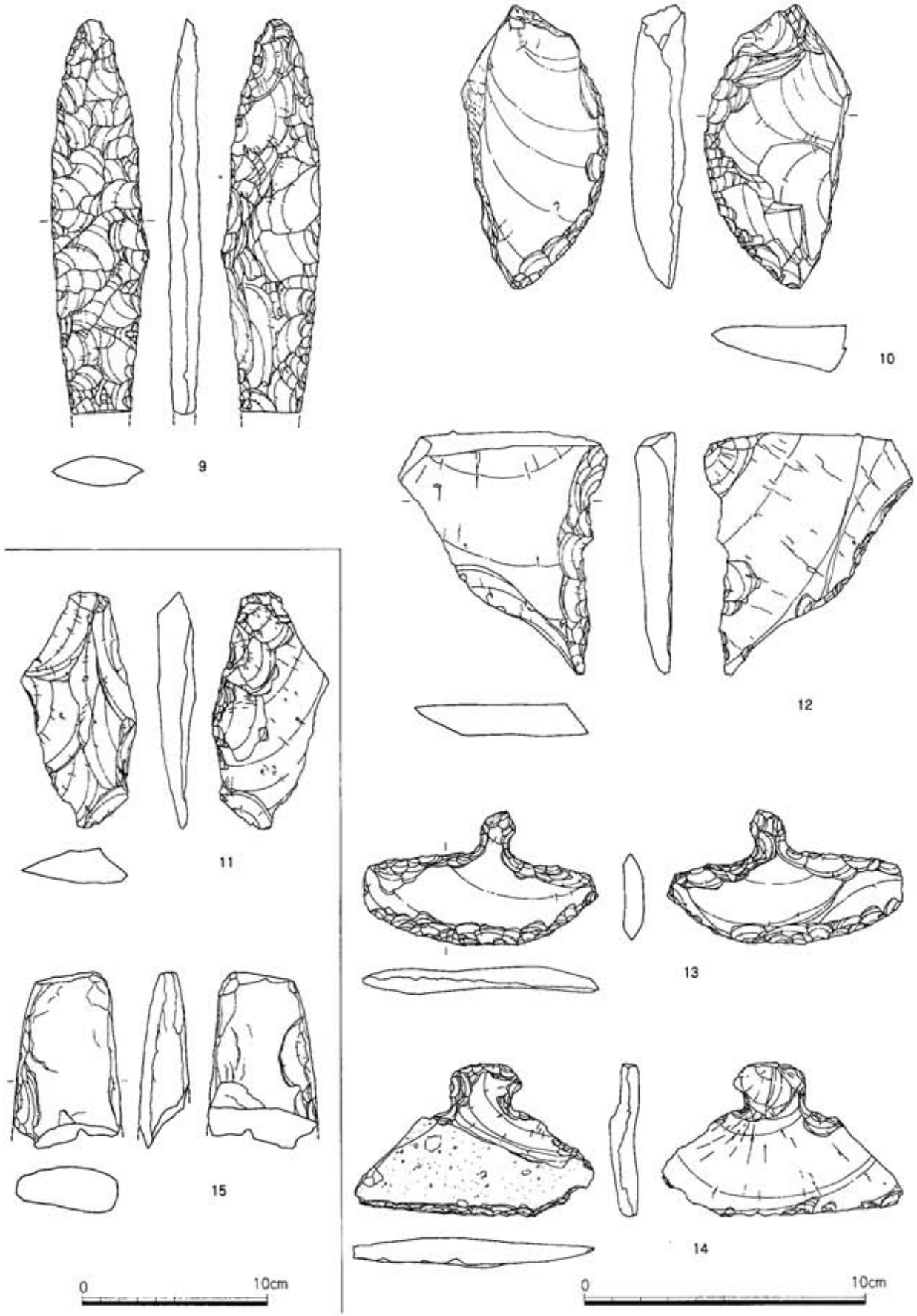


Fig.63　縄文時代の遺物2（11・15は1/3、他は1/2）

い。7は長さ3.9cmとやや大型のもの。両側辺が直線的で抉りが深く脚部は長い。なお、8は不明品で、長軸の両端に先端部を持ち、中央部には両側から抉りが入る。全面に調整剥離が施され、両側辺部は鋭利に仕上げられる。長さ6.1cm。

9はサヌカイト製の石槍である。平面形は木葉形で全面に丁寧に剥離が施される。長さ14.1cm、幅3.5cm。

10・11・12は削器、いずれもサヌカイト製である。10は縦長剥片の一方の側縁部を円弧状に形を整え、さらに表裏面から剥離を施して刃部を作り出している。長さ10.2cm、幅5.0cm。11も同じく縦長剥片を利用するもので、両側縁から大きな剥離を施して縦長の形に整形し、さらに一側縁には裏面からも小さく剥離を行い刃部としている。長さ12.6cm、幅5.8cm。12は平面三角形を呈する剥片の一側辺部に表面から粗い剥離を加えて急角度の刃部を作り出すもの。13・14は石匙で同じくサヌカイト製。いずれも横長剥片を利用するが、13はつまみ状の突起を小さく作り出し、調整剥離も刃部のみならず、側縁全周に施されるが、14は自然面を表面に残し、調整剥離も刃部の片面のみに施される。また、つまみ状の突起も大ぶりで、剥片側辺部から浅く抉りを入れるだけで作り出されている。15は打製石斧で基部のみ遺存する。

3．弥生時代の遺構と遺物（Fig.64～67）

弥生時代の遺構として、弥生時代前期前半に位置付けられる支石墓1基（ＳＸ050）とＳＴ034古墳の墳丘下より青銅製鏃先を埋納したと思われる遺構が確認されている。また、ＳＴ034古墳の墳丘下では他に弥生時代後期後半の土器が集中して確認されており、ＳＴ033古墳においても墳丘盛土中、墳丘下で弥生土器片が多数出土していることから、本来的には弥生時代後期後半に緩斜面を中心に遺跡が形成されていたが、古墳築造時の地山整形によりかなり撹乱を受けたものと推定される。

ＳＸ０５０支石墓（Fig.64）

調査区内南端付近、丘陵東側緩斜面に立地し、西側にあたる尾根上にはＳＴ049古墳が立地する。また南東側約３ｍにはＳＴ053古墳の周溝が近接する。既に上石は失われているが、支石及び埋葬施設である土壙墓の蓋石は良好に遺存する。検出時には遺構は厚さ0.2m程の黒色腐食質土で覆われていたが、この黒色腐食質土中からは奈良時代の土師器が出土していることから、古代には既に上石は失われていたものと考えられ、近接する古墳の石室石材に転用された可能性も想定されよう。支石墓は平面形楕円形の土壙に蓋石を被せるものであり、土壙の長軸は約1.5m、短軸は約1.2m、深さは約0.4m、長軸を主軸とした方位はＮ－74°－Ｅである。ただ、調査段階では土壙内の埋土と地山の区別はかなり困難であったため、特に土壙の平面形についてはやや不確実な部分がある。蓋石は３枚が用いられるが、このうち南西側の１枚は花崗岩、北東側の２枚は板状に剥離した安山岩であり、調査区周辺部では入手できないものである。蓋石を被せた順番としては、真ん中の石が最初に置かれたものと考えられ、他の２枚を被せた後にさらに支石として大きさ0.4m前後の礫を蓋石上に配置していたものと推定される。現況では支石は４石程度が遺存する。確実に支石墓に伴うと思われる遺物は出土していないが、西側約５ｍ程離れた地点より、弥生時代前期の高杯脚部片が採集されている。支石墓が単独で作られる可能性は低いと思われるので、かつては少なくともほかに数基が存在していたものと推定され、そのいずれかに伴う供献土器と考えられる。

ＳＸ０５０支石墓辺部採集土器（Fig.64）　16は弥生土器の高杯脚部片で一部杯部も遺存する。脚部は直線的に伸びて開くもので、裾部端部外面、及びくびれ部に巡らした突帯外面に刺突文を施す。調整は、杯部内外面はミガキ、脚部外面はミガキ、内面はナデである。

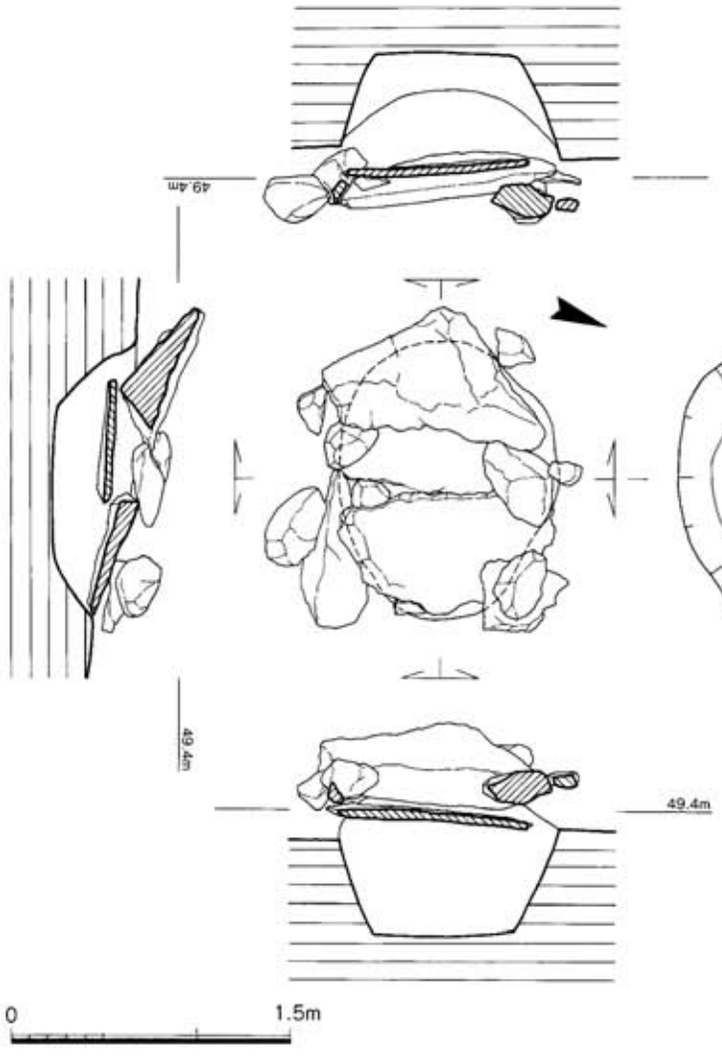
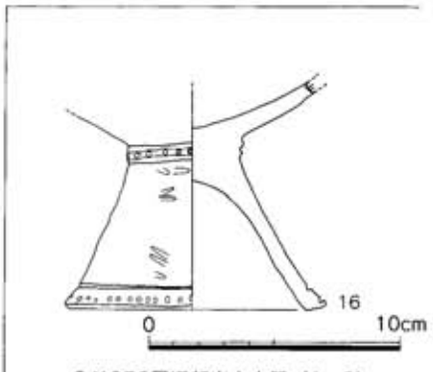


Fig.64　ＳＸ050支石墓（1：40）



ＳＸ050周辺部出土土器（1：3）

ＳＸ０５５不明遺構（Fig.65）

ＳＴ034古墳の墳丘下では、古墳築造時に撹乱を受けたと思われる弥生時代後期の遺構の残欠が確認されている。ＳＴ034古墳の墳丘は、緩斜面であった旧地形を平坦に造成し、さらに周溝部分を１ｍ近く掘り下げ、その掘った土を盛土として墳丘を築いている。ただ、平坦に造成したと言っても、墳丘下には旧表土である黒色腐食質土が厚さ0.1ｍ弱で遺存しており、旧表土から大きく掘り下げるほどの撹乱ではなかったものと推定される。弥生時代の遺物はこの黒色土中から検出されたが、調査を行ったところ、黒色土下の地山では遺構に伴うと思われる掘り込みはほとんど確認されておらず、遺構自体もあまり深いものでなかったか、あるいは掘り込みを持たなかったものである可能性も十分考えられよう。

ＳＸ055不明遺構としたものは、ＳＴ034古墳石室掘り方の北々東で検出されたものであり、甕２個体が接した状態で出土している。この甕は土圧で潰れているのの、周辺へは全く破片が四散していないので、本来は並べて据えられた、あるいは横に並べて置かれた状態であったものと推定される。特に掘り込みは確認されていないので、前述したように地面への掘り込みを行わず、土器をそのまま置いただけの遺構であったと考えられる。また、甕棺墓とするには、甕の口縁部がいずれも同一方向を向くことから、その可能性は極めて低いものと捉えている。

ＳＸ０５５不明遺構出土遺物（Fig.65）　17・18は弥生土器の甕である。17は口径約26cm、器高約42cmを測り、

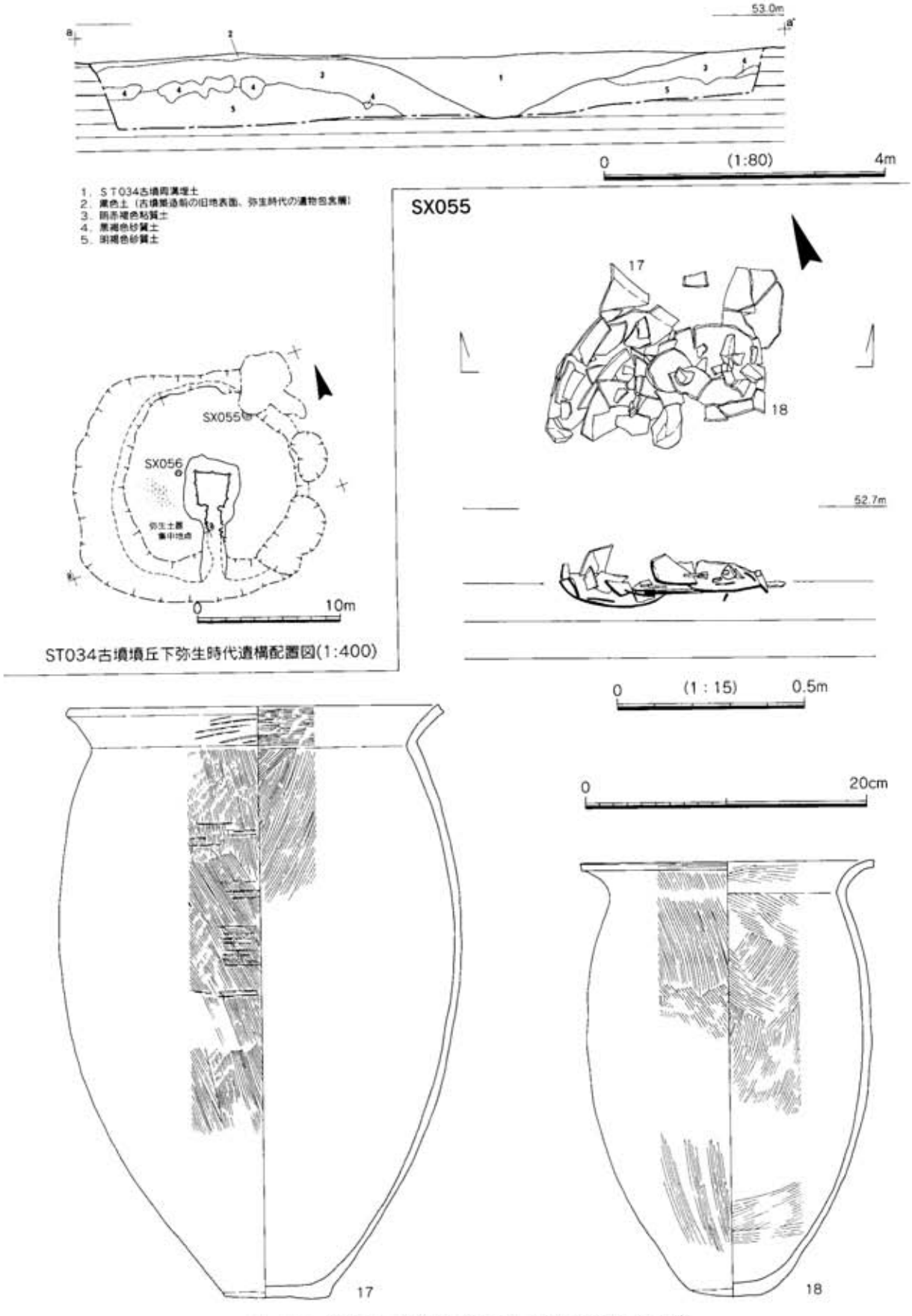


Fig.65　ＳＸ055不明遺構（1：15）及び出土遺物（1：4）

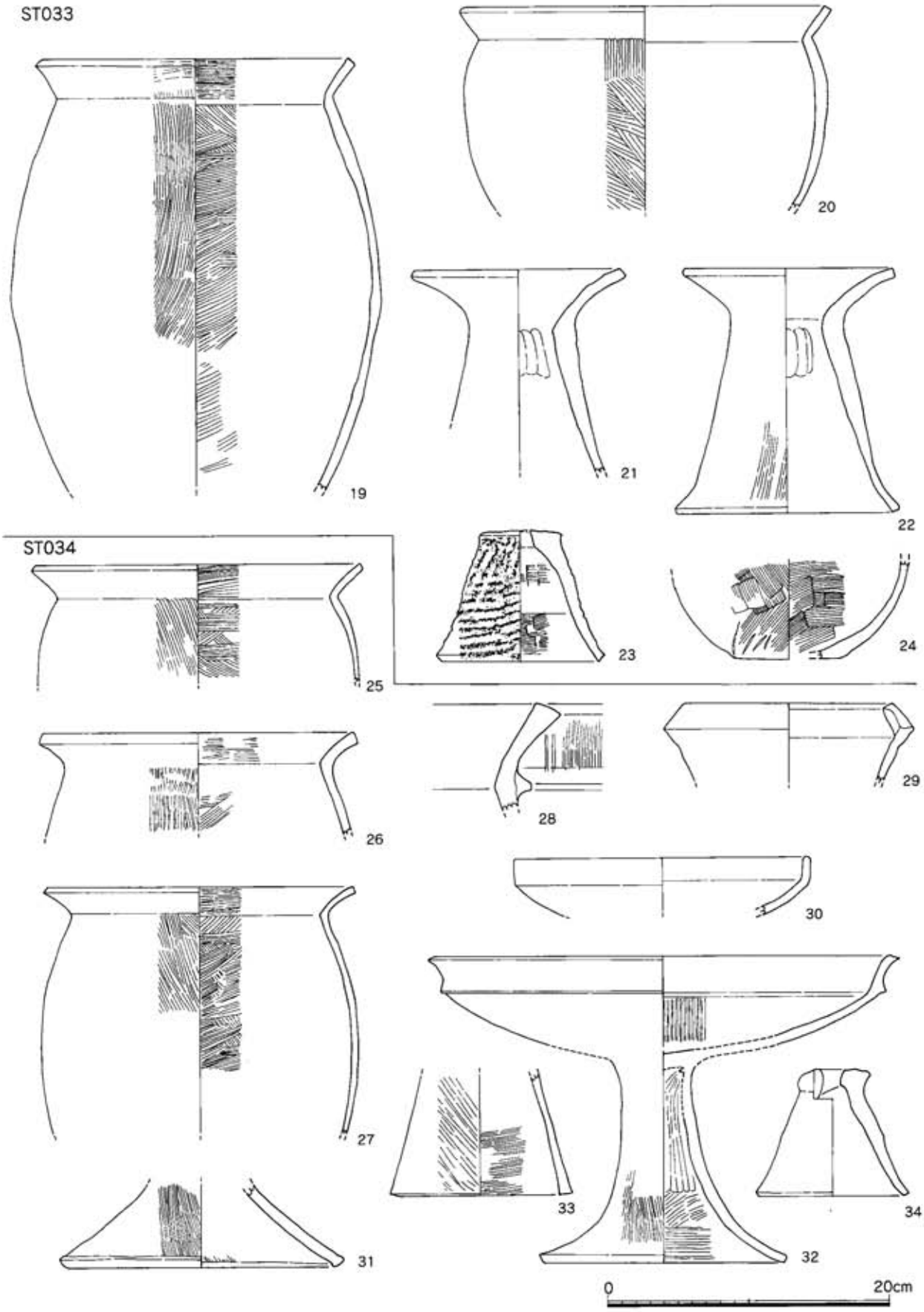


Fig.66　S T033，034墳丘及び墳丘下出土弥生土器（1：4）

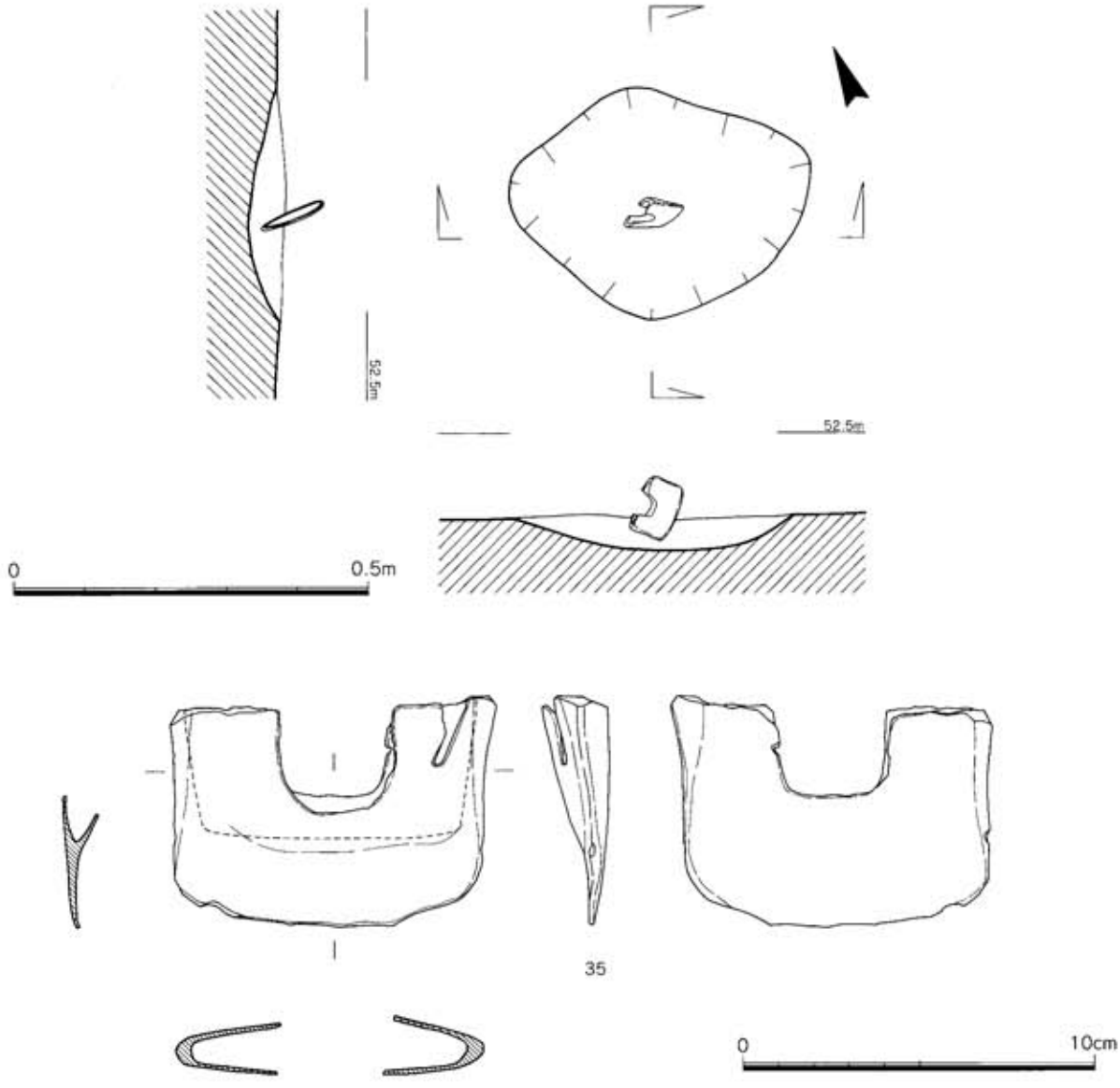


Fig.67　ＳＸ056青銅製鋤先出土遺構（1：10）及び出土青銅製鋤先（1：2）

緩く外反する口縁部と口径とほぼ同径の胴部を持ち、胴部から底部へは緩やかに内湾しつつ続いて底部底面は平底である。調整は内外面共にハケメを施すが、胴部の外面にはハケメ前に施されたタタキが観察される。18は17より小型のもので、口径約21cm、器高約30.5cmである。プロポーションは概ね17と大差ないが、口縁部がより強く外反するほか、底部底面は僅かにレンズ底ぎみになる。調整は内外面共にハケメであるが、タタキは認められない。

ＳＸ０５６青銅製鋤先出土遺構（Fig.67）

ＳＴ034古墳の石室掘り方の北西側に近接する。ＳＴ034墳丘下の黒色腐食質土掘り下げの際、花崗岩の小礫があったため、礫の部分を土柱状に残して掘り下げていたが、調査の最終段階に礫を除去したその下部から青銅製の鋤先（35）が１点確認された（出土位置はFig.65を参照）。鋤先は側縁部の片方を下にして立った状態で検出さ

れ、周囲を丁寧に観察したところ、東西方向に主軸を持つような不整形の浅い掘り込みが確認された。地山は明赤褐色粘質土（レス層）であるが、掘り込み内部の埋土はこれとほぼ同質であるものの、より色調が暗く粘性が強い点で区別できた。掘り込みの規模は、長軸0.42m、短軸0.32m、深さは地山面から約0.04mで、鋤先はほぼその中央部に位置している。なお、図中地山面は黒色腐食質土のみを除去したものであり、鋤先のほぼ半分は黒色土中にあったと言える。また、遺構上部にあった礫については遺構とどのような関係にあったか不明であるが、同様の礫は黒色土中に散在しており、直接的な関連はないものと推定している。

ＳＸ０５６出土青銅製鋤先（Fig.67－35）　ほぼ完形である。表側の右側基部に鋳造時の湯回りの不足による長さ約1.8cm程の細長い欠損部が見られる。刃部は僅かに反りかえっており、また磨耗により短くなっている。全長6.5cm、刃部幅8.7cm、袋基部幅9.1cm、袋基部厚1.9cm、また袋部の内法長は4.1cm、内法幅8.1cmを測る。緑青色を呈し、比較的遺存状態は良好だが、部分的に風化が及んでおり、使用痕についても観察できない。

ＳＴ０３３・０３４墳丘盛土及び墳丘下出土弥生土器（Fig.66）　19～34は古墳の墳丘盛土中及び墳丘下の基底面上より出土した弥生土器である。19～24はＳＴ033出土のもの。このうち、20は墳丘盛土中より、他は墳丘基底面３区でまとまって出土したもので、地山整形・及び基底面造成の際に弥生時代の遺構が撹乱されて遺物のみが検出されたものである。

19は甕、底部のみを欠き、くの字形に屈曲して開く口縁部と口径より大きく膨らむ胴部を持つ。調整は内外面共にハケメである。20は鉢、同様にくの字形に屈曲する口縁部を持つ。調整は内外面共にハケメ。21・22は器台、体部は直線的であるが、裾部は接地面付近で緩やかに外反する。調整は内外面共にナデで、特に外面はハケメの後にナデ消している。23は支脚、調整は外面タタキ、内面ハケメ。24は鉢の胴下半部か。調整は内外面共にハケメ。25から34はＳＴ034基底面の黒色腐食質土中の出土。25～28は甕。いずれも口縁部はくの字を呈しながらもやや外反ぎみになる。25～27はほぼ口径が等しいが、28は甕の中でも大型のものである。調整はいずれも内外面ハケメ。29は二重口縁壺の口縁部、30～32は高杯。32は、杯部は口縁部が立ち上がる二重口縁をなし、脚部は直線的に伸びて裾部で大きく広がる。調整は脚部内面にヘラケズリが見られるが他はハケメである。33は器台の裾部付近の破片で、くびれ部から接地面まで直線的に伸びるようである。外面にはタタキが残り、内面はハケメを横位に施す。34は支脚。

Tab.13　戦場古墳群６区縄文時代・弥生時代の土器一覧表

Fig.図番号	PL.番号	遺物登録番号	出土地点	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土 ※混入物	色調	文様・調整 外器面	内器面
62-1	33-1	99000998	AO29－17，Ⅳ層	縄文土器	深鉢	—	(17.0)	—	砂・雲母多，カクセン石	暗赤褐色	凹線文、ミガキ、ナデ	ナデ
2	33-1	96000496	ＳＴ033 墳丘２区	〃	〃	—	(5.3)	—	砂粒・滑石多量	鈍い橙色	凹線文	ナデ
64-16	33-7	96002663	AN19，黒褐色砂質土	弥生土器	高杯		(9.2)	10.5	砂粒多量	黄橙色	ヘラミガキ、ナデ	ナデ
65-17	33-4	99003335	ＳＸ055　№2	〃	甕	25.8	41.8	7.4	砂粒多量	浅黄橙色	タタキ後ハケメ	ハケメ後ナデ
18		96002656	ＳＸ055　№1	〃	〃	(20.5)	30.8	7.5	砂粒多量	橙色	ハケメ	ハケメ
66-19		96001033	ＳＴ005　3区	〃	壺	(20.8)		5.2	細砂粒多量、雲母	橙色	ナデ	ナデ
20		96000455	ＳＴ033 墓道・周溝１区	〃	鉢	(25.5)	(15.0)		砂粒多量	橙色	ハケメ	ナデ
21		96000430	ＳＴ033	〃	支脚	(14.5)	(14.6)		砂粒多量	暗赤褐色	ナデ	ナデ
22	33-8	96000429	ＳＴ033	〃	〃	15.0	17.5	14.8	砂粒少量	暗赤褐色	ハケメナデ	ナデ
23		96000454	ＳＴ033 墳丘２区	〃	器台	(5.7)※	9.3	(11.0)	砂粒多量	橙色	タタキ	ハケメ
24		96000425	ＳＴ033 周溝１区	〃	鉢		(6.5)		砂粒少量	暗赤褐色	ハケメ	ハケメ
25		96002634	ＳＴ034 ＡＰ30－6,7	〃	甕	(23.3)	8.4		砂粒多量	橙褐色	ハケメ	ハケメ
26		95004577	ＳＴ034 周溝４区	〃	〃	(22.1)	6.9		砂粒多量	橙色	ハケメ	ハケメ
27		96000074	ＳＴ034 ＡＰ30－2,7	〃	〃	(21.7)	(17.5)		砂粒多量	橙色	ハケメ	ハケメ
28		96000343	ＳＴ034 検出面	〃	甕		(7.5)		砂粒多量	橙色	ハケメ	ナデ
29		96000342	ＳＴ034 墓道	〃	壺	(14.6)	(5.5)		砂粒多量	橙色	テデ	ナデ
30		96000315	ＳＴ034 ＡＰ30－6	〃	高杯	(20.6)	(4.1)		砂粒多量	橙色	磨耗により調整不明	磨耗により調整不明
31		96000312	ＳＴ034 周溝３区	〃	〃		(6.0)	(19.0)	砂粒多量	橙色	ハケメ	はけ
32		96000075	ＳＴ034 ＡＰ30－11	〃	〃	(32.0)	(6.3)		砂粒多量	橙色	杯部ミガキ，脚部ハケメ	杯部ミガキ，脚部ハケメ
33		96000313	ＳＴ034 墳丘３区	〃	器台		(8.6)	11.2	砂粒多量	橙色	ハケメ	ハケメ，ナデ
34		96000427	ＳＴ034	〃	支脚	5.0	8.5	10.0	砂粒多量	暗赤褐色	ナデ	ナデ

※は上部径

Tab.14　戦場古墳群６区石器ほか一覧表

Fig.図番号	PL.番号	県遺物登録番号	出土地点	種別	器種	分類	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	備考
62-3	33-2	96001519	AN20−14	石製品	石鏃	凹基無茎鏃	2.6	1.9	0.5	1.6	サヌカイト
4	33-2	96001520	AP27−18, Ⅳ層	〃	〃	〃	2.7	2.3	0.4	1.4	〃
5	33-2	96001518	検出面	〃	〃	〃	3.4	2.2	0.5	3.3	〃
6	33-2	96001521	AN19	〃	〃	〃	3.1	2.0	0.7	2.9	〃
7	33-2	96001517	ST034墓道	〃	〃	〃	3.9	2.2	0.5	2.2	〃
8	33-2	97002891	AP30−5, Ⅳ層	〃	〃	〃	6.1	2.0	0.7	6.3	〃
63-9	33-3	97002883	AP28−18, Ⅳ層	〃	石槍	木葉形	14.1	3.3	1.1	56.8	〃
10	33-3	97002871	ST033, No1391	〃	削器	—	10.2	5.0	2.0	92.1	〃
11	33-3	97002890	AP30−12, Ⅳ層	〃	〃	—	12.6	5.8	2.0		〃
12		97002892	AN19−24, Ⅳ層	〃	〃	—	8.7	7.4	1.4	80.0	〃
13		97002884	ST033墳丘下Ⅳ層	〃	石匙	横型	4.8	8.4	0.9	28.6	〃
14		96001526	ST034	〃	石斧	打製石斧	(9.5)	(5.9)	(2.5)	171.0	
15		97002886	AO26−21	〃	石匙	横型	5.5	8.6	1.1	35.5	サヌカイト
67-35	33-5,6	99003317	SX056	青銅器	鏃先		6.5	9.1	1.9		

４．古墳時代の遺構と遺物（Fig.68～119）

古墳時代の遺構として古墳６基が確認されている。このうち、ＳＴ033・034・039・040の４基は調査区中央部の丘陵尾根斜面上に近接して立地している（Fig.61）。中でも、ＳＴ040は尾根上からやや東に下った傾斜角20度の比較的急な斜面に立地するが、他の３基はこの急な斜面がより緩やかに変わる緩斜面上に立地している。この緩斜面のさらに東側では、現況農道付近に埋没した谷筋があると推定されるが、ほぼこの緩斜面を谷底と見てよいと考えられる。これら４基と別に、調査区の南端付近に古墳２基が位置しており、このうち１基は尾根頂部から僅かに東へ下った付近(ＳＴ049)に、もう１基(ＳＴ053)はＳＴ049の東南東70mにあたる東側緩斜面上に位置するが、蜜柑園造成に伴い周溝の西端のみを残して掘削されて失われている。

調査対象区の現況はほぼ全面が蜜柑園であり、調査区内西端の急斜面に至るまで段々に造成がなされていた。よって確認調査着手前にその存在が視認できたものは皆無で、僅かにＳＴ049のみが地権者の記憶に残っていたという状態である（昭和30年代に蜜柑園造成に伴い破壊したとのこと）。しかしＳＴ033・034・039・040の各古墳は墳丘全体を花崗岩風化砂礫土を中心とする流土によって覆われており、蜜柑園造成に至るまでにかなり埋没してしまっていた可能性が高く、埋没しきらなかった古墳の上部付近が造成によって徹底的に破壊されたものと考えられよう。ただ、ＳＴ033・034・039の３基は石室上部壁体を失っている他、石室内も相当撹乱を受けていることから、流土による埋没は急激なものではなく、徐々に埋まっていく過程で他の古墳の類に漏れず盗掘者による干渉を度々受けていたものと思われる。

周辺部の状況としては、調査区西の丘陵尾根上の踏査を行っている。神埼町側となる丘陵尾根西側斜面も蜜柑園造成が行われており、踏査の範囲内では古墳の存在の可能性は明らかにできなかった。しかし尾根頂部は地形的にかなり狭く痩せており、石材等も見られなかったため、少なくとも尾根頂部に沿って古墳が並んで立地していたという状態ではないようである。これらのことから、特にＳＴ033・034・039・040についてはほぼ一つの支群として完結しているものと考えられる。以下に古墳毎の概要を述べる。

ＳＴ０３３古墳（Fig.68～80）

墳丘・周溝（Fig.68～71）　調査区のほぼ中央部に位置し、北西側にＳＴ034、西側にＳＴ040が隣接する。標高約51mの緩斜面上に立地しており、西側周溝のみが丘陵尾根に向かって傾斜がきつくなる部分にあたる。周溝は、

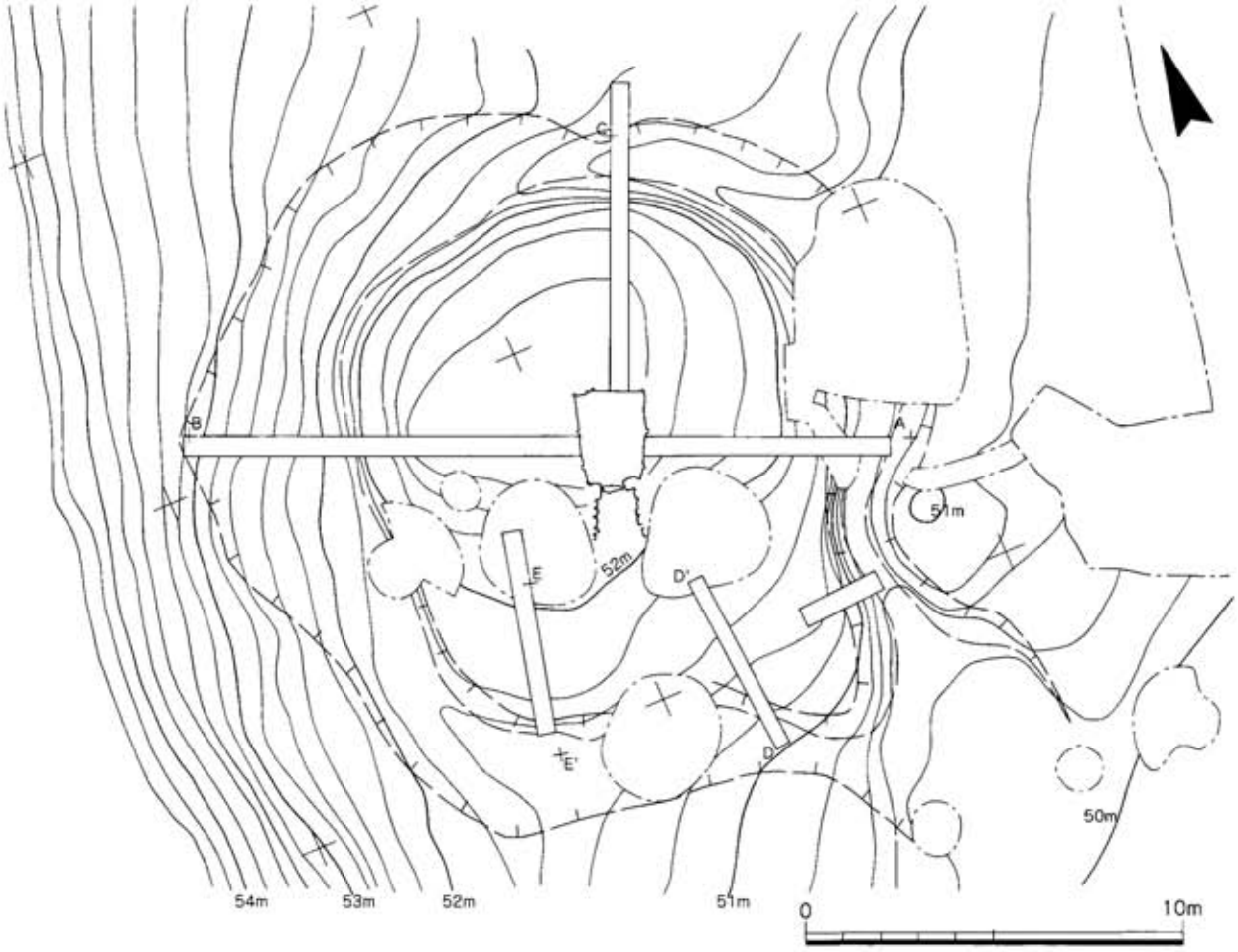


Fig.68　ＳＴ033古墳測量図（墳丘遺存状況、1：200）

北は北東側を一部攪乱壙で切られるが、墳丘を全周する程度遺存しており、平面形では石室背面側が丸く巡り、石室前面側では切り通し状の墓道が伸びる分、両側の墳丘が古墳の前面に伸びており（以下、この前面に伸びた部分を張り出し部と呼ぶ）、いわゆる馬蹄形に近い形態をなしている。馬蹄形周溝と関連して述べておく必要があるのは、地山整形の在り方である（Fig.69）。本墳における地山整形は全体をフラットな一面に整えるのではなく、石室を中心に上端での径約11ｍの範囲で円形に平坦面が作られ、張り出し部分の整形面はこの面から約0.4ｍ低くなっている。盛土は円形部分と張り出し部分の両方に行われるが、土層図で見比べたところ、円形部分が石室を構築しながら細かく積み上げられ版築状の丁寧な積み方をするのに対し、張り出し部分は掘った土をそのまま盛り上げたようなかなりラフな盛土となっている。この点については後述するが、少なくとも張り出し部が石室天井石を覆うような高いマウンドを持っていたとは考え難く、石室を覆った高い円丘に、墓道に沿って低く伸びる張り出し部を備えていた状況が推定される。ここで問題となるのはこの張り出し部が古墳築造当初より作られていたかどうかという点である。このことは周溝自体が築造当初から馬蹄形であったかどうかということに関わるが、この点に関して張り出し部の土層観察から考えてみたい。

Fig.71は墓道の東西両側の張り出し部にトレンチを設定した際の土層図である。この中で興味深いのは基底面（地山面）が円形部分から張り出し部にかけて低くなるところで、いったん深くなって凹面をなしていることである。特に西側トレンチは凹面をなしてからさらに立ち上がって平坦面となっているが、こういった窪みは平面的にも観察され、Fig.69では円形の地山整形面の裾部に沿って長さ７ｍ以上が確認されている。ここではこの窪

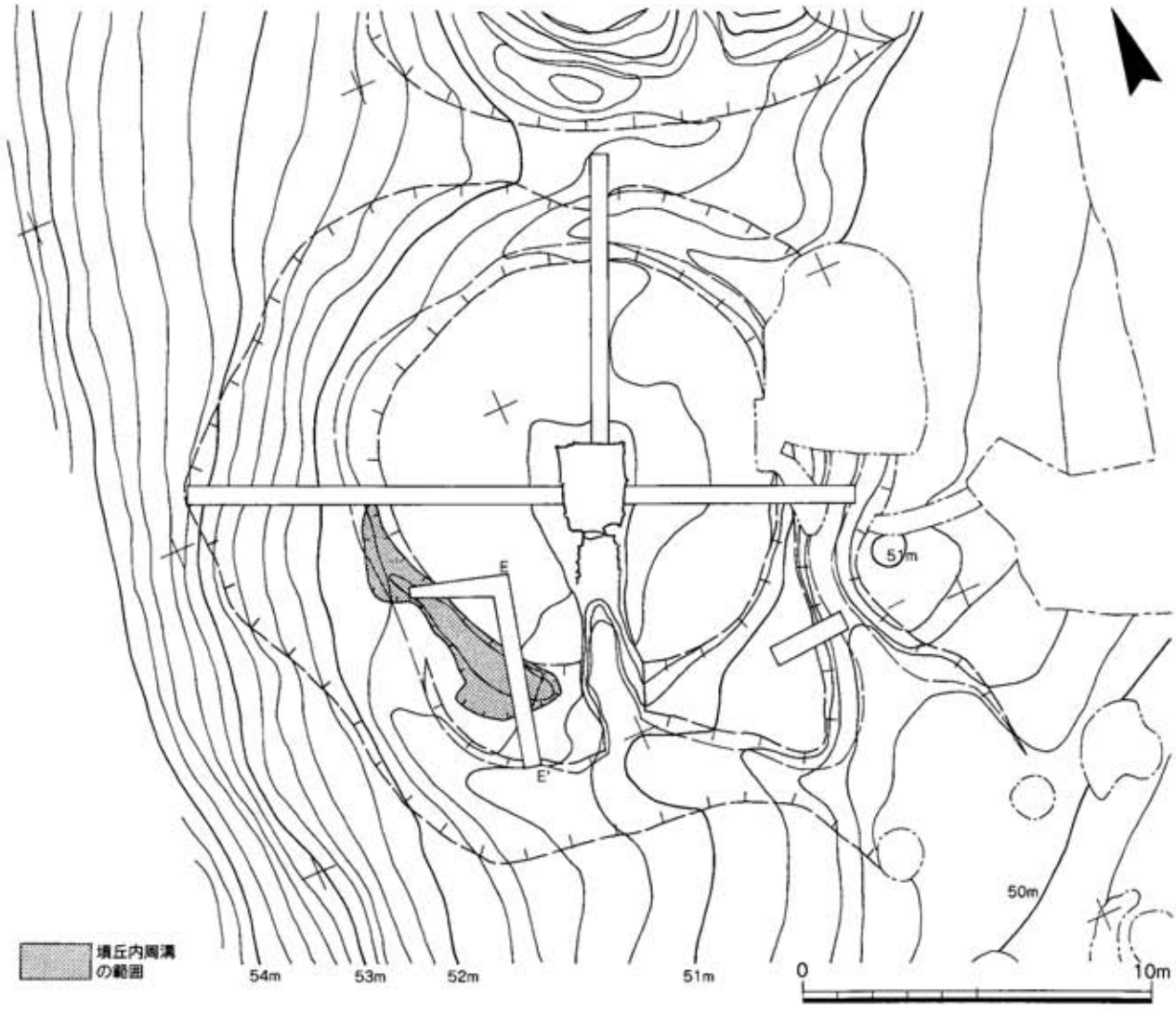


Fig.69　ＳＴ033古墳測量図（地山整形状況、1：200）

みを仮に「墳丘内周溝」と呼ぶ。さらに盛土の状況に目を向けると、円丘に伴う盛土は円形の地山整形面の上端付近から細かく積み上げられるのに対し、張り出し部の盛土はひとつの層が厚く、土の種類も粘質土・砂質土を選択的に用いて積まれたような状況は窺えない。特にこの盛土中からは須恵器・土師器片が多く出土しており、これらの遺物が盛土内埋納といった出土状態ではないことを考え合わせると、少なくとも一回目の埋葬を行った後にこれらの盛土が積まれたものと推定される。そのように考えてくると、古墳築造時には張り出し部上に盛土がなかったことになり、もし馬蹄形の周溝がプライマリーなものと仮定すると、「内周溝」の底面と馬蹄形の周溝底面がほぼ同じ高さとなってしまい、構造的に理解に苦しむ事態が生じる。よって総合的に解釈すると、古墳築造当時には張り出し部はなかったものと考えられ、追葬時のある段階、新たに切り通し状の墓道を掘削すると同時に、東西の周溝を新たに延長して掘削することによって張り出し部が形成され、この際、墓道部分及び周溝を掘削して掘り上げた土を張り出し部上に盛り上げたものと結論付けたい。墳丘規模についてであるが、周溝を馬蹄形と考えるならば、長軸約15m、短軸約13mとなる。また周溝を含む全体規模としては、南北方向で約19m、東西方向で約20mとなる。

墳丘の残存状況は浦田古墳群１区ＳＴ001についで遺存状態が良く、盛土の技法をある程度観察できるもので

※A－B，O－CはFig.68に対応

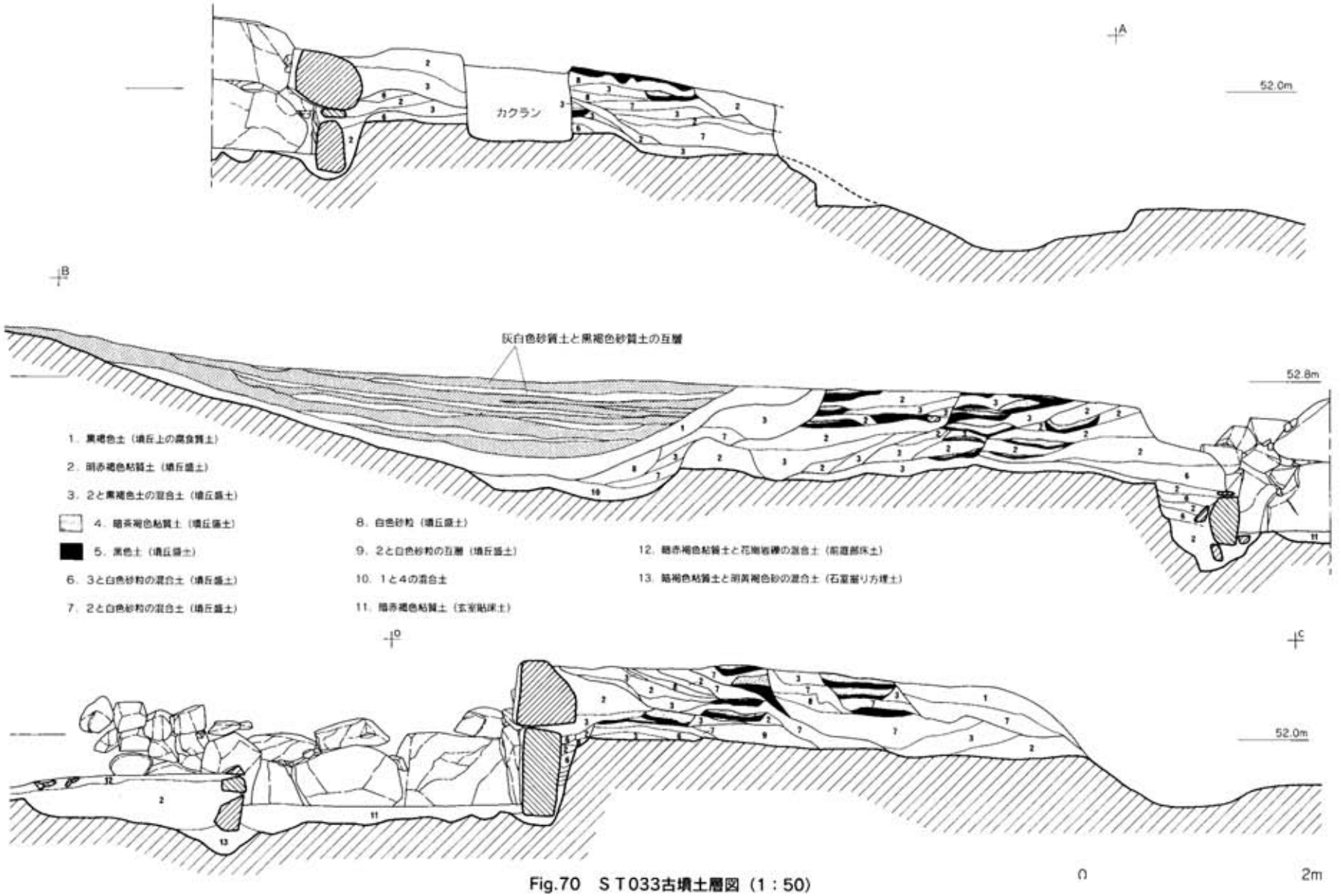


Fig.70　ＳＴ033古墳土層図（1：50）

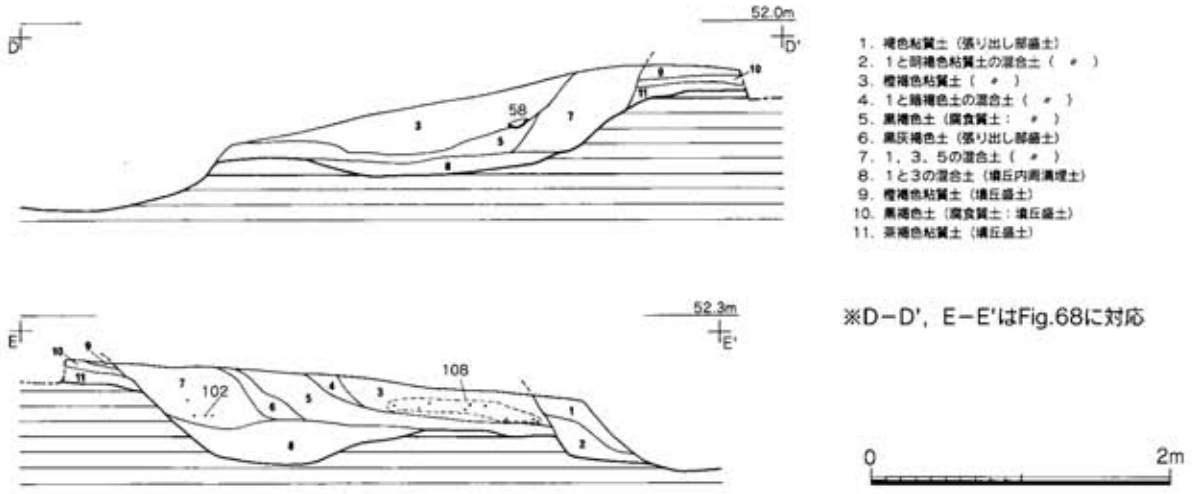


Fig.71　ＳＴ033古墳張り出し部土層図（1：50）

ある（Fig.70）。工程としては、①地山を平坦に削って基底面を造る、この際基底面の高さを揃えるために土を搬入して造成し、基底面の高さを揃える、②造成した基底面を掘り込んで石室掘り方を造る、③石室壁体を積み上げながら盛土を行う（単位としては３工程が観察できる）、④天井石を架構した後にこれを覆うように盛土を行い墳形を整える、の大きく４つの段階に整理される。このうち、①については造成土を掘り込む形で石室掘り方が造られていることから、地山整形にあたっては単に地山を削るだけでなく、別の土を入れて造成しながら面を整えている。また③の盛土は大きく３工程に分けられるが、それぞれが砂質土・粘質土を交互に積む小工程の繰り返しからなっている。特に旧表土の黒色腐食質土と暗茶褐色粘質土（黒色腐食質土から地山である赤褐色粘質土への漸移層）がよく上下に重ねて用いられており、平面的にも石室を中心として円を描くように丁寧に積まれていった様子が観察されている（写真図版編ＰＬ25-7）。④については一つの層の幅・厚みは大きくラフなもので、石室壁体を支えるための盛土である③とは明瞭に区別される。

内部主体（Fig.72～74）　単室両袖型の横穴式石室である。石室平面形は前壁幅が奥壁幅より狭い玄室に、ハの字形に開く前庭側壁を付設する、いわゆる只字形をなしている。天井石を架構する羨道は持たない。遺存状態は上部壁体をすべて失っており、天井石は確認されていないが、前庭側壁を含め下部壁体は比較的良好に残っている。石室は南向きに開口し、主軸方位はＳ－25°－Ｗである。

石室掘り方は造成された基底面を略長方形に掘り込んでおり、南北長約3.4m、東西幅3.1m、基底面からの深さは最大約１ｍを測る。ただし、奥壁側・

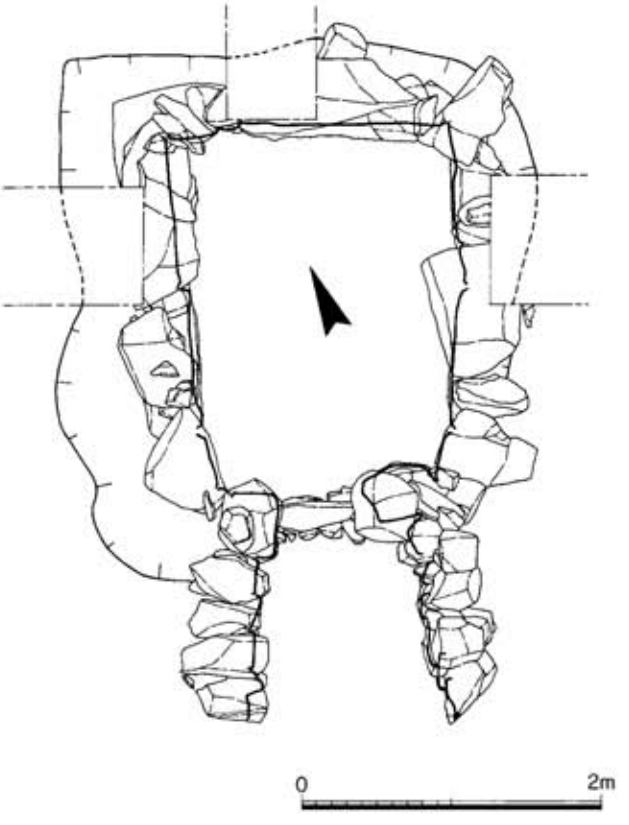


Fig.72　ＳＴ033古墳石室平面（1：50）

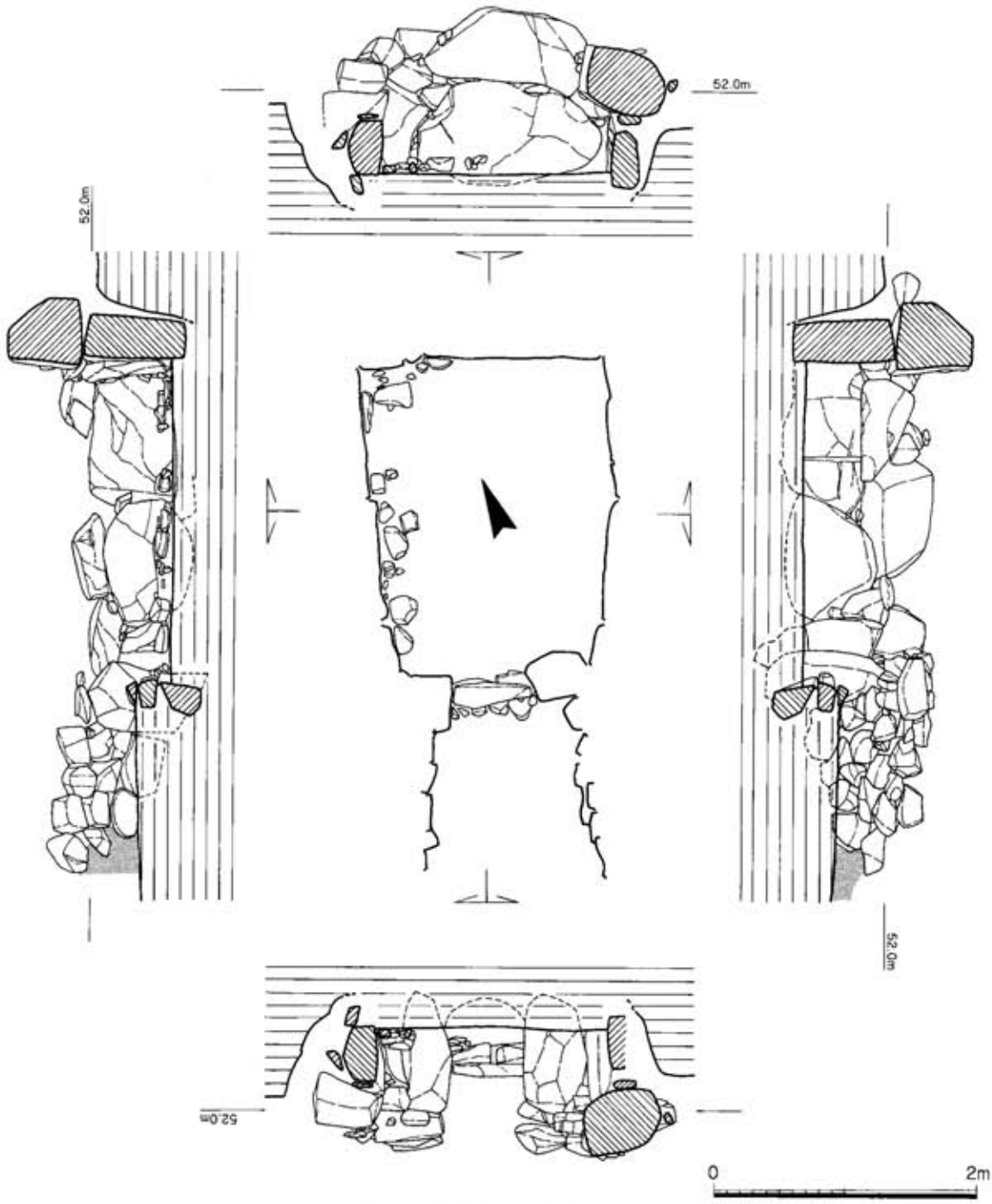


Fig.73　ＳＴ033古墳石室（1：50）

左右壁共に基底面から直に真っすぐ掘り込まれるが、前庭部では墓道側から斜めに傾斜を持って掘り込まれ、この傾斜面上に前庭側壁の最下段の石列を配置している。

石室規模については、石室全長４ｍで、奥壁幅1.85m、前壁幅1.4m、右・左壁長2.3mであり、奥・左右壁には腰石を配置、前壁には左右に立柱石を立てる。腰石は奥壁に幅約1.3m、高さ0.7mの石を横位に据え、その左側に幅0.5mでほぼ高さの石を立てて、奥壁幅を調整している。左右壁の腰石の配置はほぼ同様であり、奥壁側から幅１ｍ前後の石を２石横位に配置して、さらにそれと前壁との間に幅0.3m前後の石を立てている。これら

腰石の上面の高さは袖石の上面とほぼ揃っている。腰石上の壁体の積み方については、奥壁は腰石とほぼ変わらない大きさの石を同様に横位に積み上げ、右壁でも腰石と若干小さい程度の大きめの石を横位に置いており、おそらく腰石上の壁体については、腰石より極端に小さな礫を積み上げていった状態ではないようである。

玄門部には左右共にほぼ同じ大きさの立柱石を立てており、玄門幅は0.55mである。この立柱石の間には框石を配置するが、特徴的なのはこの框石が石を３段に積み上げることによって構築されている点である。この框石の最下段には幅0.6m、高さ0.4m程の石を、石室基底面を掘り下げて据え、その上に平たい礫を２石左右に並べ、またさらに玄門幅いっぱいの平たく細長い石を横位に配置している。前庭部の高さは２石目の上面にほぼ揃い、框石としては３石目のみが用をなしていると言えよう。石室内部から見れば、石室床面と前庭部とは約0.3m程の段差を持っており、この点に着目すれば竪穴系横口式石室と言うこともできよう。

さて、問題はこの３石からなる框石が石室構築当時のものかどうかという点が疑問として挙げられ、それはとりもなおさず、前庭部の床面が初葬時のものかどうかということについて検討を要するということを示す。やはり奇異に思えるのは、一度基底面から積み上げた前庭側壁をさらに再度埋めて前庭部平坦面を造っていることであり、石室掘り方を掘削する段階に前庭部分を掘り下げなければ、当然必要のなかった工程である。通常、前庭側壁の下面は前庭部床面に揃うべきものであり、やはり本墳についても石室築造当時は石室床面からスロープ状に登る前庭部を備えていたものと推定され、追葬時のある段階、前庭部に盛土を行ってスロープを水平な面に造り替え、これに伴って框石を積み上げたものと考えられる。この際、框石の最下段がプライマリーなものかどうかという点についてであるが、この石が石室基底面からかなり浮いて据えられていることなどを考える合わせると、やはり前庭部改修時に配置されたものと考えたい。なお、先に追葬段階に切り通し状の墓道を新たに掘削したと思われる点について触れたが、前庭部床面とこの墓道部分の床面はFig.74のように連続性を持っており、前庭部の床上げによる改修・切り通し状の墓道の掘削は同時に実施されたものと解釈している。

なお、前庭側壁は右壁側で1.4m、左壁側で2.3mが確認されており、長さとしてほぼ完存しているものと思われる。積み方としては大きさ0.3～0.4m程の礫を積み上げるもので特に平たい石を選択的に選んでいる状況は認められない。また、最下段と上部の石積みの石の大きさもほとんど変わらず、やはり天井石を架構するには強度的に無理であろうと推測される。平面的にはハの字形に緩く開くが、玄門部の幅からそのまま開くのではなく、袖石のみが内側にやや突出する。この前庭側壁内には前述のとおりその下部が埋められて新たに前庭部床面が造られるが、その構築法としてはスロープに地山層である暗赤褐色粘質土を搬入して水平面を形造った後に、花崗岩を細かく砕いたものを暗赤褐色粘質土中に多量に混入させて固く締まった床を貼っている点が特徴的と言える。

石室床面についてはほぼ徹底的に撹乱を受けており、敷石等も確認されていない。また、出土遺物についても鉄製品の残欠のみである。

閉塞状況及び墓道（Fig.74）　閉塞は前庭部で行われており、上部を失っているがほぼ良好に遺存していた。閉塞石は基本的に塊石であるが玄門部及び墓道側では板石が立てられており、見かけ上はこの板石間に大きさ0.4m弱の塊石を詰め込んだような状態を示している。閉塞石中には軟質の腐食質土以外に土を含まないために、追葬に伴う積み替え等について見極めるのは困難であるが、最下部の石はその上面が平坦に揃っており（Fig.74中の点線）、上部の石との間に幾らか腐食質土を挟んでいることから、この間に追葬面を考えたい。このことは墓道の土層観察からも裏付けられ、４層とした砂質土は比較的固く締まった土であることからその上面が追葬面として捉らえられ、前述の閉塞石間の追葬面と高さ的に連続する。よって整理すれば、前庭部改修後、６層上面を床面とする追葬が行われた後、前回の埋葬に伴う閉塞石の最下部を残して新たに４層上面を床面とする追葬面が

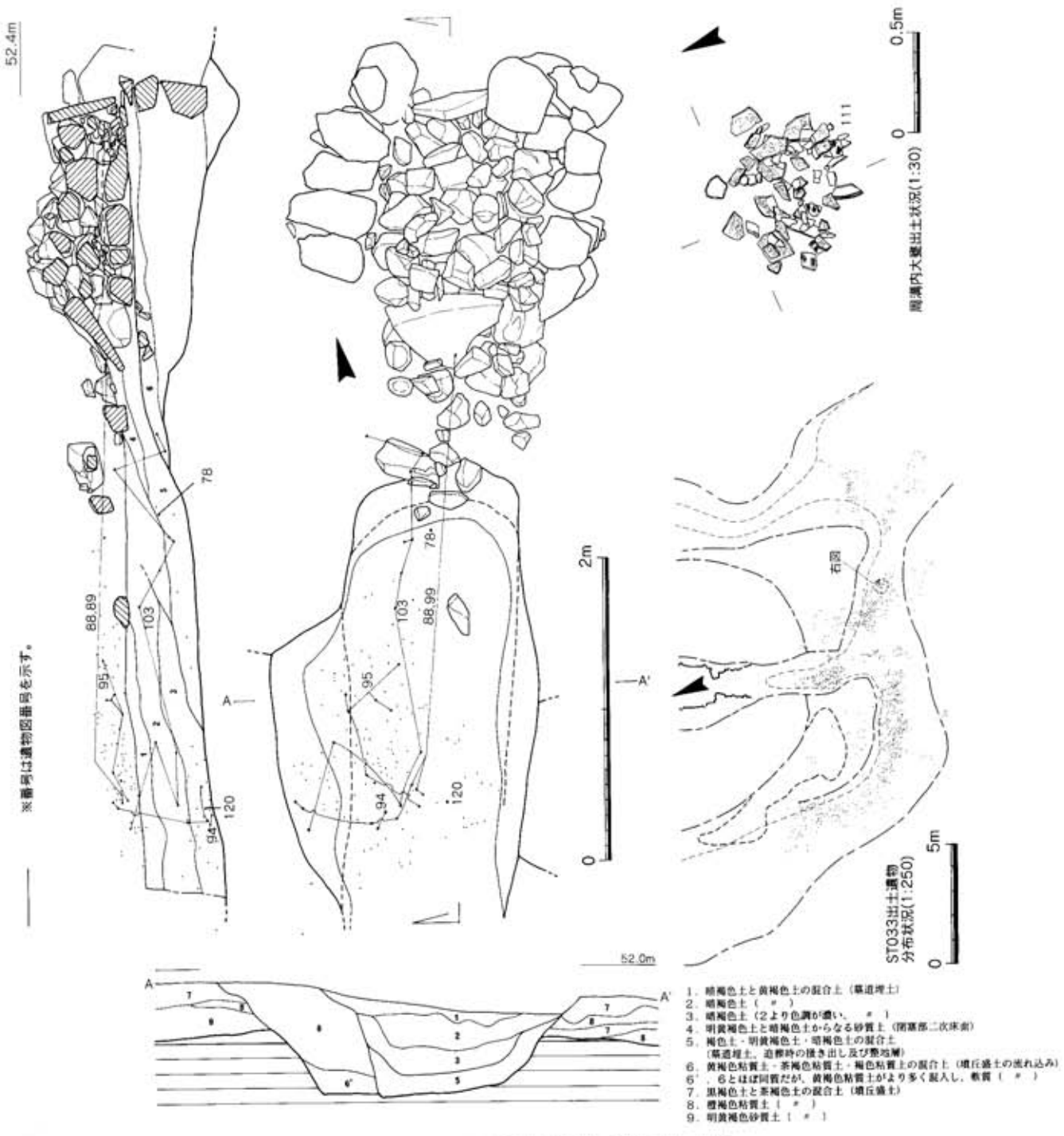


Fig.74　ＳＴ033古墳墓道遺物出土状況（1：40）

造られたと考えられる。ここでは便宜的に前庭部改修前の埋葬を初葬段階、６層上面を床面とする追葬を第１追葬段階、４層上面を床面とする追葬を第２追葬段階とする。ただし前庭部改修前に何回の埋葬が行われたかは不明であるほか、それぞれの追葬段階の具体的な追葬回数は明らかではない。

そこで問題となるのはそれ第２追葬段階以降、追葬が行われたのかどうかという点であるが、閉塞石のうち、墓道側の板石は４層中に食い込んでおり、４層上面に伴う追葬後、除去された様子は見受けられない。この場合、玄門部での楣石までの推定高を考えると、この板石を外さない状態での追葬はほぼ不可能と考えられるので、やはりこれ以降は追葬は行われていないものと理解される。よって、Fig.74における１～３層については追葬に伴

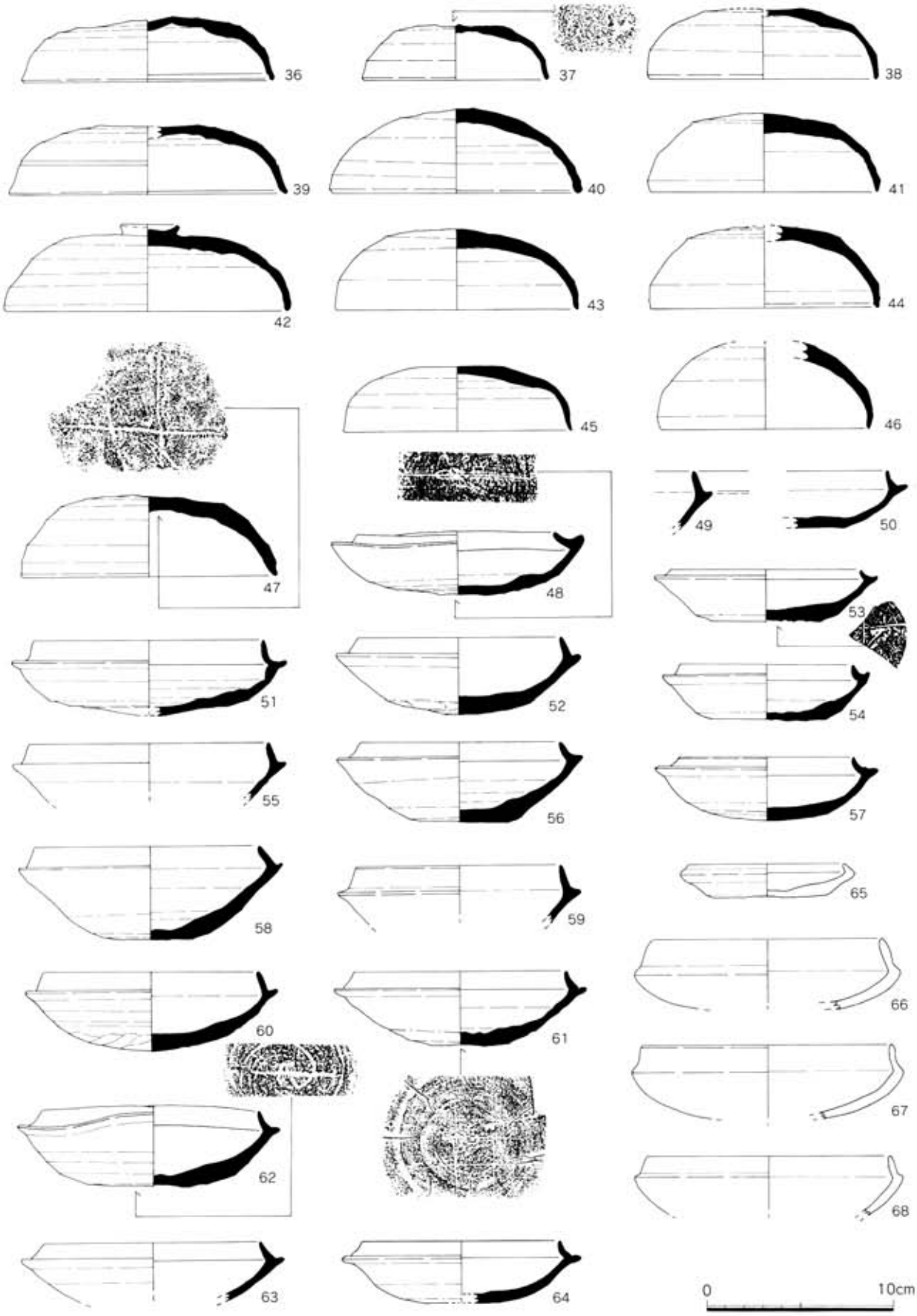


Fig.75　ＳＴ033古墳出土遺物１（１：３）

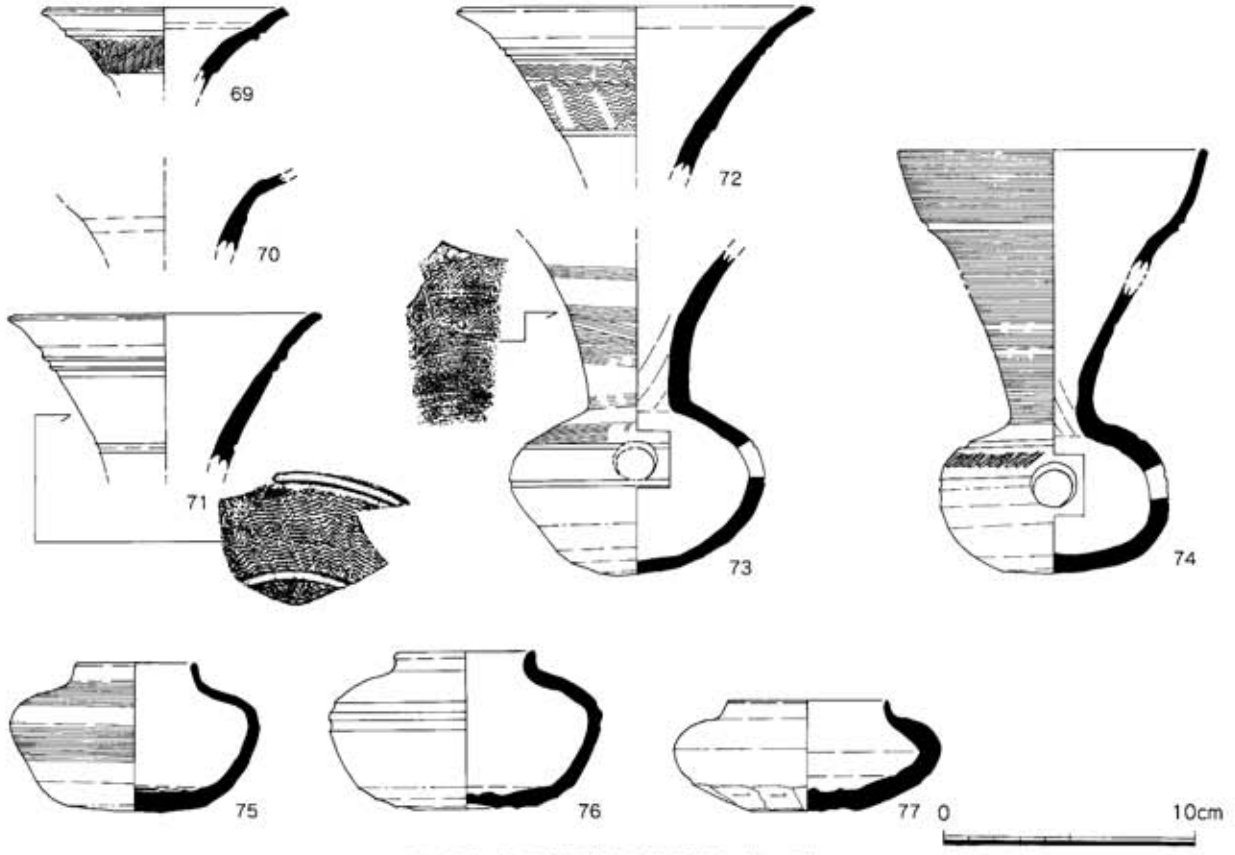


Fig.76　ＳＴ033古墳出土遺物２（1：3）

う掻き出しによる堆積ではなく、墓道両側の墳丘上及び張り出し部上からの流れ込みと考えられよう。

なお、墓道の横断面土層観察では、墳丘盛土を切って新たに掘削された墓道の掘り方が確認されているが、第１追葬段階に墓道を掘削し、それが左右からの流れ込みによりある程度埋没した後、この埋土を切るように第２追葬段階に伴う墓道が掘削されたものと思われる。また、墓道出土遺物の接合関係を見たところ、一つの遺物の破片がそれぞれの追葬に伴う墓道埋土にまたがって、なおかつ、かなりの高低差をもって散らばっているなど、ひとつの土器を取って見ても、堆積・掘り直しの繰り返しによりかなり複雑な分布を示していることが判明している。よって消去法的に考えれば最終追葬時は１～３層の出土土器の下限及びそれ以降と推定され、最後の埋葬についてはほぼⅤ期と考えられる。

なお、本古墳では多量の須恵器・土師器が出土しているが、ほとんどが石室前面の周溝内埋土中からの出土である。これらは供献された状態を残していたのは皆無で、いずれも大小の破片である。おそらくは墳丘上、あるいは張り出し部上に配された土器が周溝内に流れ落ちた、あるいは追葬時に石室内の土を掻き出した際に堆積したもので、さらにこれに自然的な要因も加わって混在したものと推定される。

ＳＴ０３３出土遺物（Fig.77～82）

出土遺物には須恵器・土師器・鉄製品（武具・馬具・工具）がある。土器類のほとんどが墓道から前庭部周溝付近からの出土であり、鉄製品は主に羨道・石室内から検出されている。

36～64・69～89・103～113は須恵器。器種には杯蓋・杯身・𤭯・短頸壺・高杯・椀・提瓶・横瓶・甕があり、点数としては杯蓋・杯身の割合が最も多い。須恵器のうち、原位置を留めているものは皆無であり、すべて追葬時の掻きだしによるものか、墓道両側の墳丘上に供献された土器が墓道あるいは周溝内に落ち込んだものである。

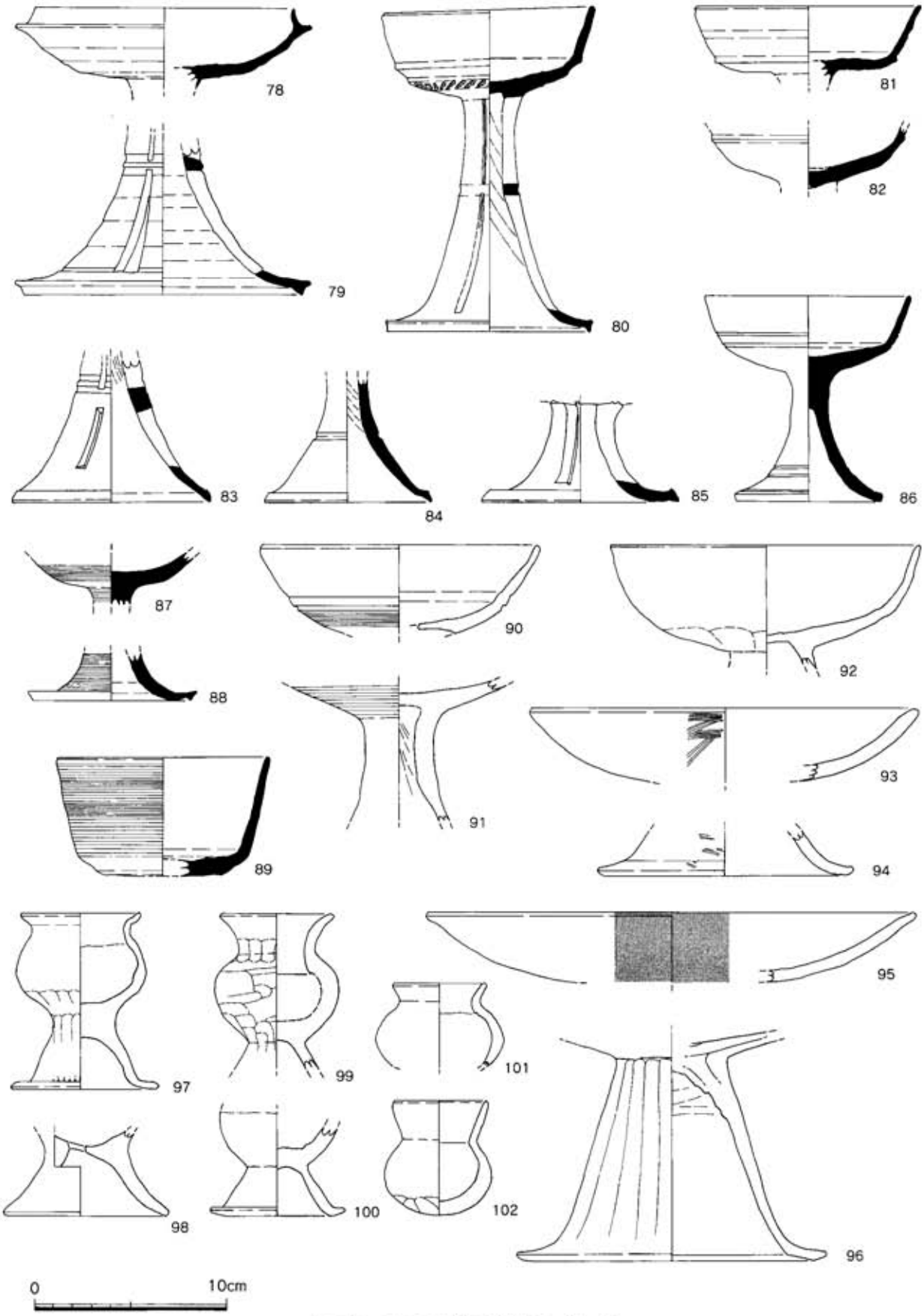
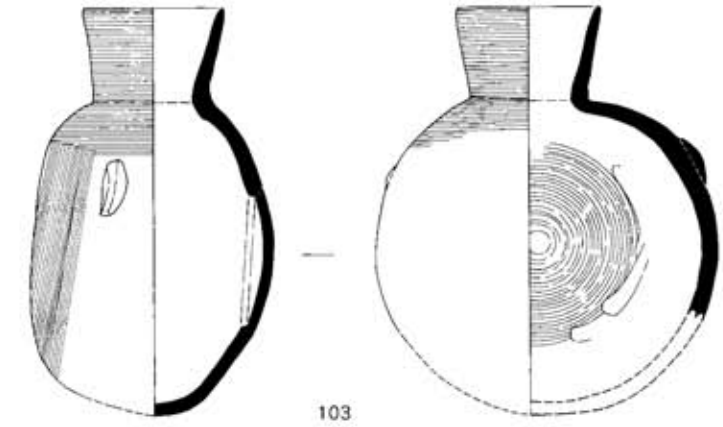
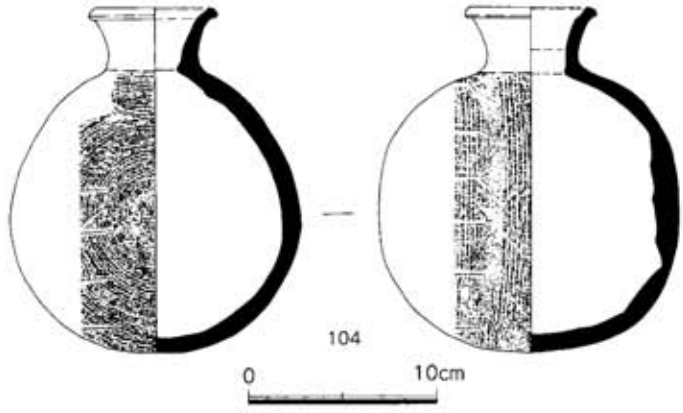
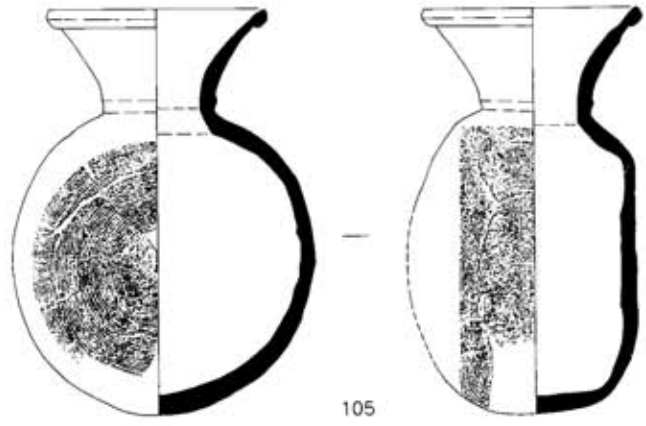
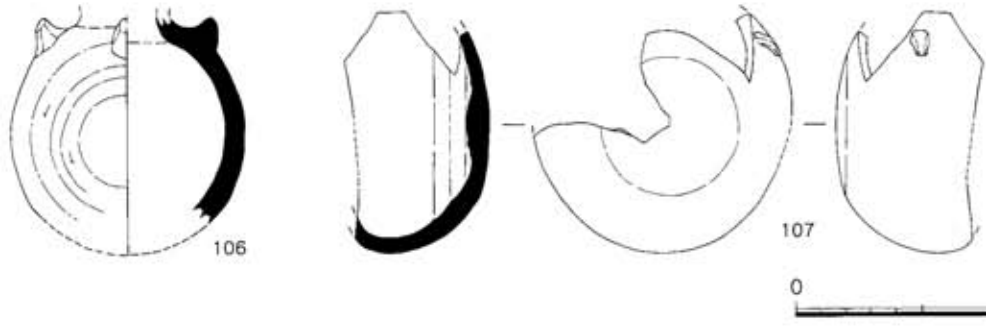


Fig.77　ＳＴ033古墳出土遺物３（１：３）









よってほとんどが小破片に破砕しており、完存していたのは杯58のみである。36～47は杯蓋、形態的には天井部から口縁部にかけて丸みをもって続き、その境が不明瞭なものが主体を占める。その中でも、天井部の形状で三分され、天井部に明瞭に平坦面を持つもの（36・39・42・47）と平坦面が狭く不明瞭なもの（37・41・44・45）、丸みを持つもの（40・43・46）に分かれる。このうち、36は口縁端部に僅かに段を持ち、39は天井部と口縁部の境に沈線を巡らし古相を示す。また42はボタン形のつまみを持つ高杯の蓋である。48～57は杯身、51・55・58は口径12cm前後、52・56・59・60・62・63は口径10.8～11.5cm前後で立ち上がりは直線的で内傾するが、51のみは外反する。底部は回転ヘラケズリであるが、60のみ静止状態のヘラケズリが見られる。53・64は口径10.5cm前後、54・57は口径9.5cm前後で、底部はヘラ切り離し後ナデ調整。

69～74は甕、73の体部は胴部最大

Fig.78　ＳＴ033古墳出土遺物4（103・104は1：4、105～107は1：3）

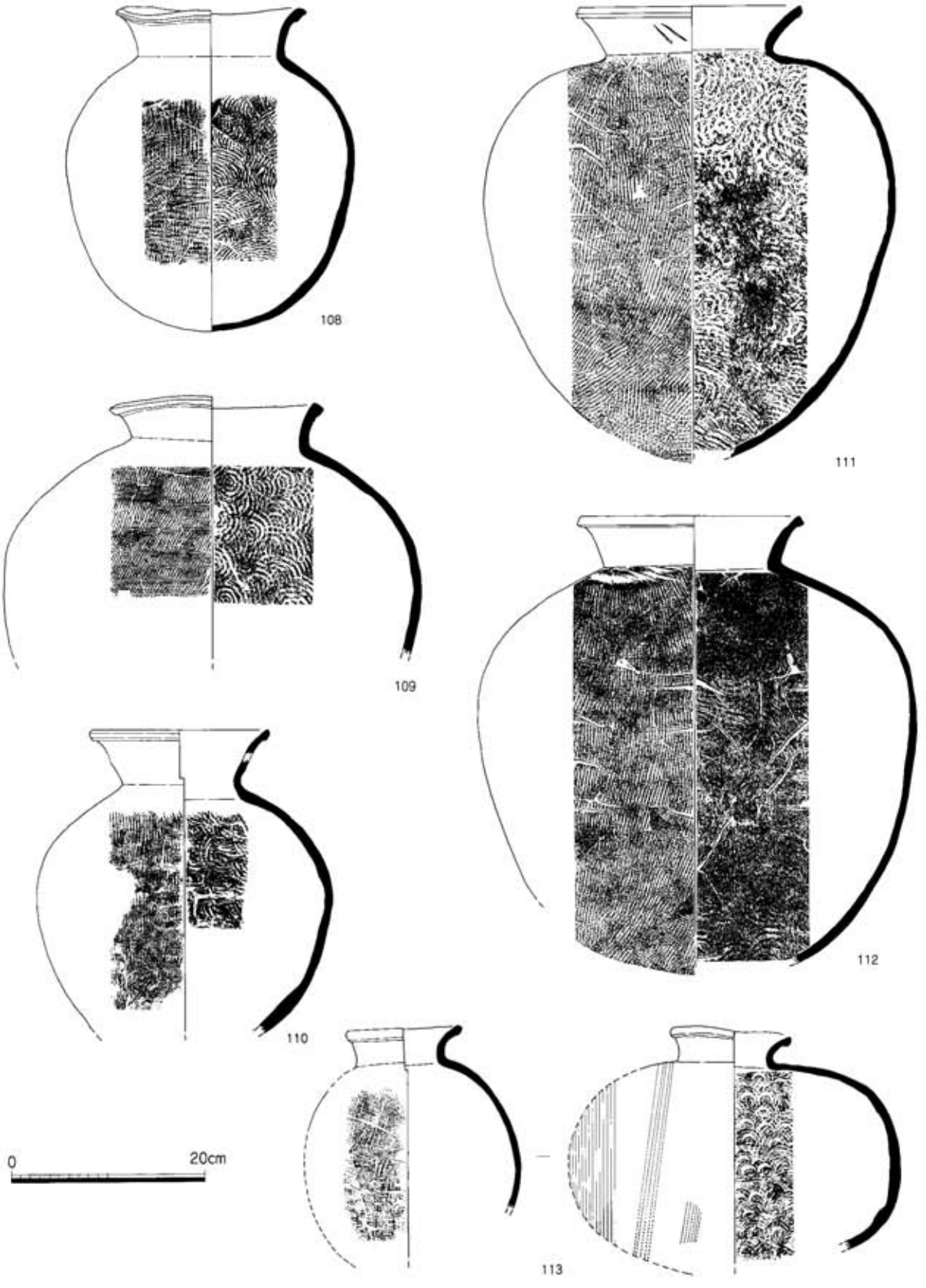
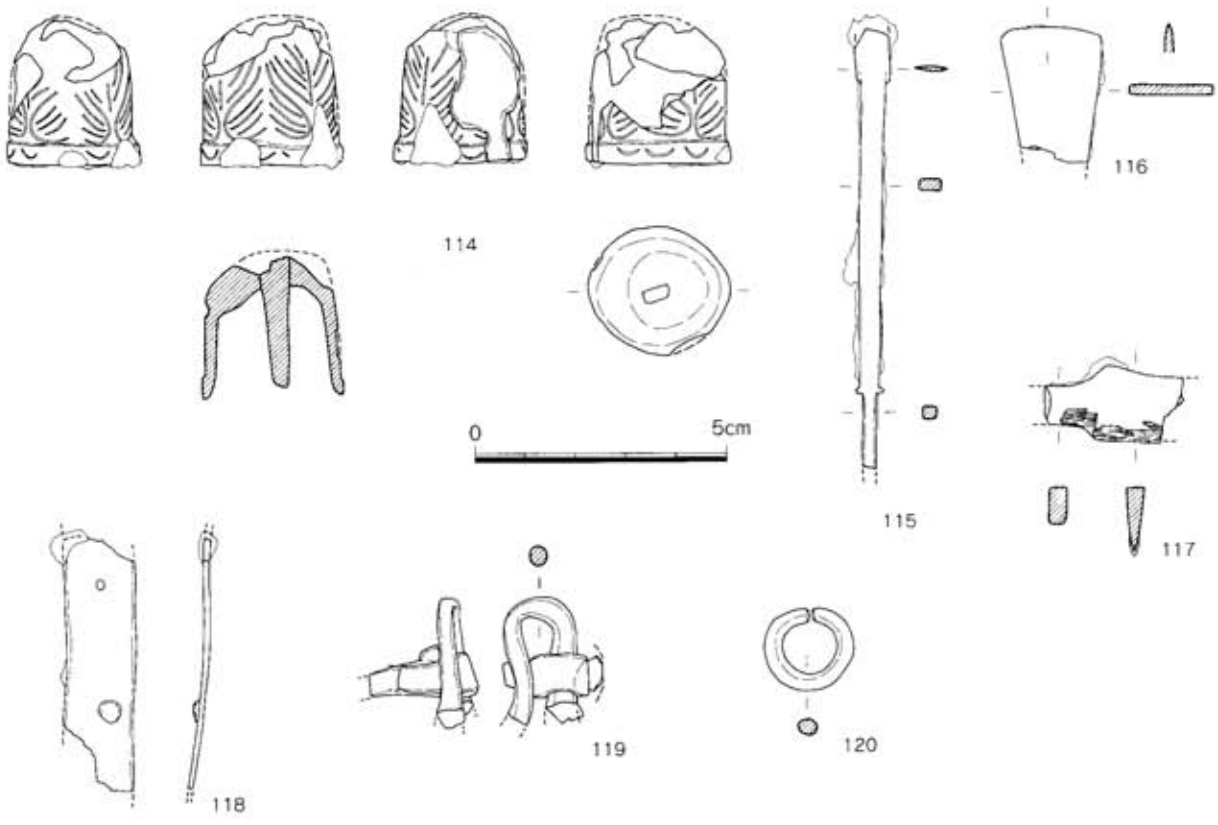


Fig.79　ＳＴ033古墳出土遺物５（１：６）



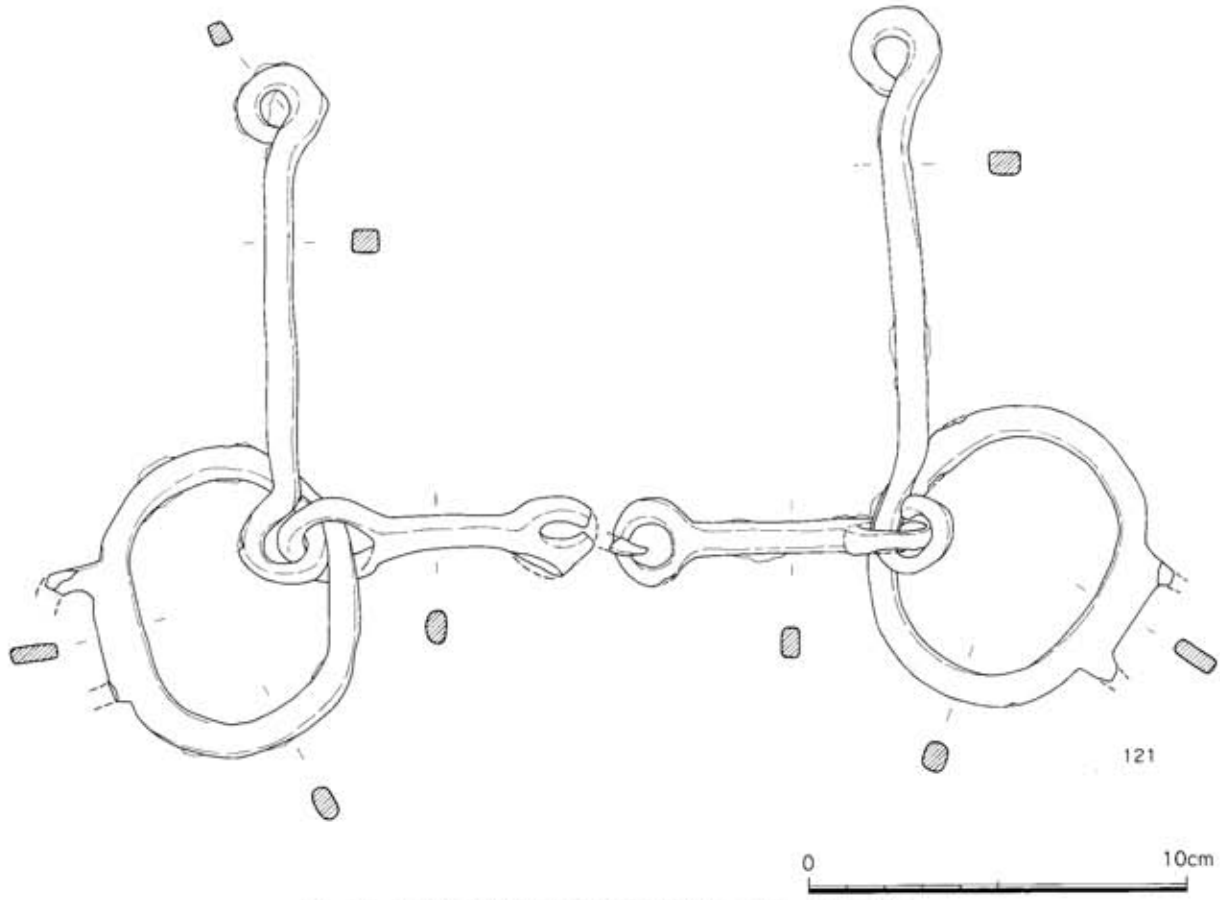


Fig.80　ＳＴ033古墳出土遺物６（114は1：1.5、他は1：2）

径が上位にあり、74は胴部中央部が最もふくらむ。口縁部は69・71・72が直線的に開き、74は屈曲して内湾する。75～77は短頸壺、77の底部は手持ちヘラケズリを行う。78～88は高杯、78は有蓋、80・81・88は無蓋。78は杯部の口径13.4cmで二段スカシを持つ長脚のもの、80は杯部の口径11.0cmで同じく長脚二段スカシで器高17.2cmの大型のもので、いずれも最も古いタイプ。89は椀で直線的に開く体部を持ち、体部外面全体にカキメを巡らす。103～107は提瓶、106は肩部の突起が両側縁だけでなく体部前面にも見られる。113は横瓶、頸部から口縁部は大きく外反し、端部は丸みを持つ。108～112は甕、108・110は器高33cm程度、111・112は器高48cm程度、109も同程度か。108の胴部外面は格子ふうタタキ、他は平行タタキ、内面は同心円タタキをよく残すが、112のみは部分的に擦り消しが施される。

65～68・90～102は土師器。65～68は杯身、90～96は高杯、97～102は小型の壺。65～68は内傾する立ち上がりを持ち、65は径8.3cm、66～68は径12.4～13.0cm前後。高杯は杯部の形態がわかるもの（90・92・93・95）はすべて無蓋で緩やかに内湾しつつ開くものである。90の杯部外面は中央部に２条の沈線を巡らし、その下位には横位のカキメを施す。95は口径25.5cmの大型のもので、内外面に赤色顔料を塗布する。96は95と同一個体と推定される大型の脚部で残存高は約12cm、外面にはヘラ状工具による縦方向のナデが施される。97～100は脚付壺、102は壺部は同様の形態ながら丸底で脚がつかないもの。

114～121は鉄製品で、114は銀象嵌を施す刀装具。墓道の埋土からの出土で、表面全体の約1/3が錆により失われているが、旧状を残す部分には銀による象嵌が良く残る。形態は円筒形で端部はやや厚みをもって段部をなす。頂部から目釘が打たれており、目釘は錆化により折れている（114の断面図は目釘を復元した状態で作図）。象嵌は縦方向の直線と、そこから左右に葉脈状に開く曲線の組み合わせを１単位として、全部で４単位を並べて構成される。また、段部にも弧状の線を連続して描く。鬼塚２号墳（福岡県八女郡広川町）出土例に見られるような、いわゆる火焔状文と呼称されるものと思われる。大きさは高さ2.9cm、幅最大2.55cmで大刀の柄頭としては小さく、用途としては鞘尻の可能性が考えられる。115・116は鉄鏃、115は小形柳葉形で棘篦被を有する。116は斧箭式。117は刀子、一部木質が残る。118は鐙本体、119は鞍金具、121は轡、板状立聞素環式の鏡板を持つ。環径約８cm、立聞幅3.1cmを測る。銜は二連式で全長約17cm。閉塞石除去後、框石上にたたんで置かれた状態で検出されている。120は銅地金張りの耳環。

ＳＴ０３４古墳（Fig.81～95）

墳丘・周溝（Fig.81・82）　ＳＴ033の北側に近接し、双方の周溝の間隔は約1.5ｍとほとんど接している状態である。緩斜面をほぼ平坦に地山整形しているが、平面的にはＳＴ033の馬蹄形と異なり、基底面・周溝共に整美な円形を呈している。墳径は南北方向で約14.5ｍ、東西方向で約14ｍ、周溝外径では南北16ｍ、東西17.5ｍを測る。墳丘は約0.1～0.3ｍ程度しか遺存しておらず、徹底的に削平されたと言えるが、僅かに残った墳丘盛土を除くと旧地表面の黒色腐食質土が見られ、弥生時代の頃で述べたように多くの弥生後期後半の土器の他、青銅製鋤先が出土している。地山整形についてほぼ平坦と述べたが、特に石室東側ではやはり地形に合わせて西から東に向かって傾斜して下っている。

周溝の形態で特徴的なのは墳丘東側で周溝と重複させてさらに深い掘り込みが行われる点である。この掘り込みは狭い間隔（幅約１ｍ）を空けて南北に２つ見られ、いずれも南北方向に長軸を持つ不整形をなす。このうち南側のものは長軸約5.5ｍ、北側のものは長軸約3.5ｍで、短軸はいずれも周溝幅と等しく約2.5～3.0ｍである。どちらも底面のはっきりしない摺鉢状をなしており、南側のもので周溝底面より約0.6ｍ、北側のもので約0.4ｍ深くなっている。掘り込みの埋土についてはどちらも周溝と同じ黒褐色粘質土であり、形態的にも何らかの別遺構

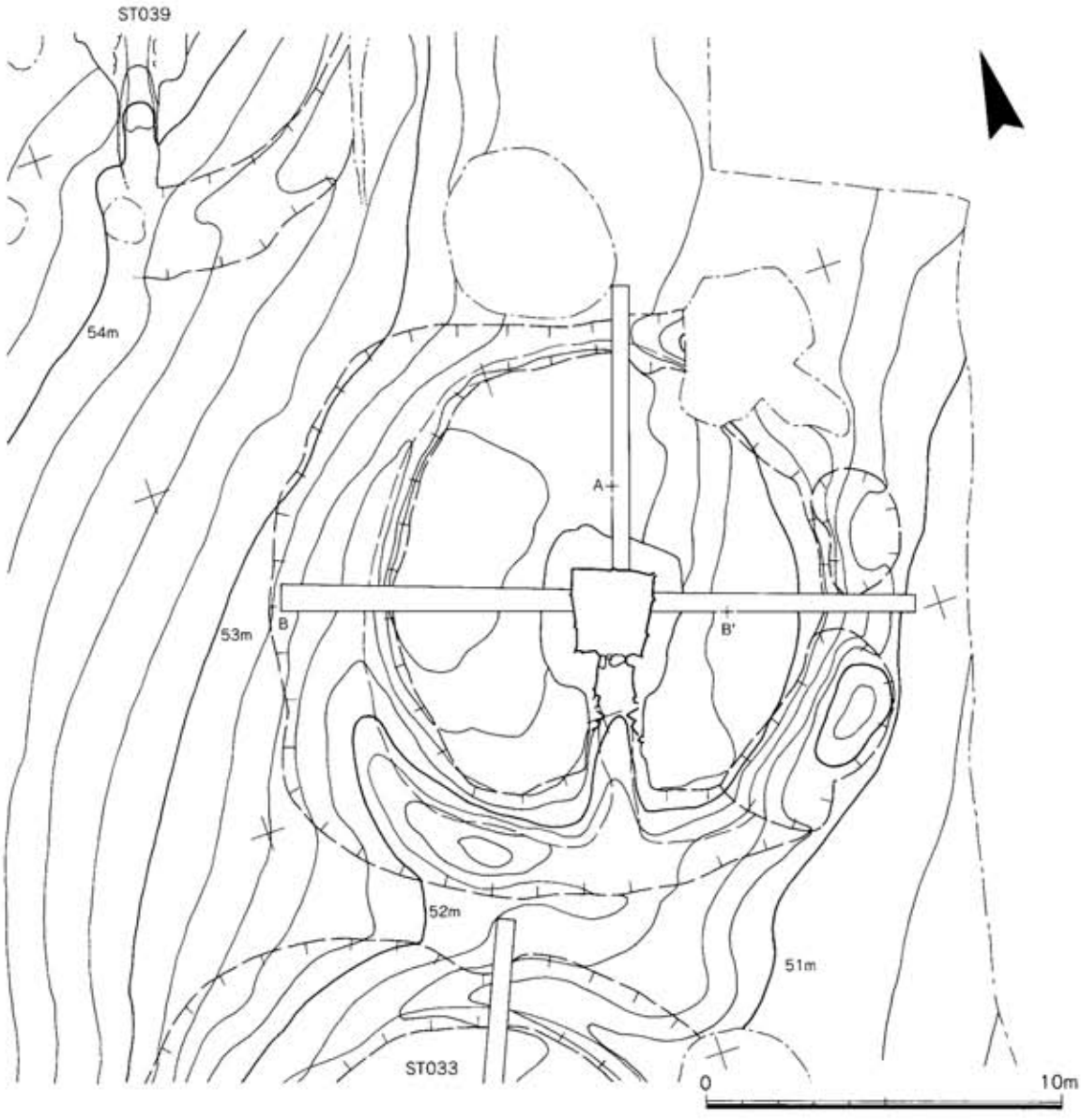


Fig.81　ＳＴ034古墳測量図（1：200）

として明瞭に区別される訳でもない。あくまで周溝に沿った掘り込みであることから周溝と同一のものとして取り扱うが、その意図については今のところ不明と言わざるを得ない。

なお、石室掘り方の北西2.5m付近では、墳丘盛土工程中に並べて埋置されたと思われる土師器杯蓋２点・杯身３点が検出されている（Fig.89）。

内部主体（Fig.83・84）　単室両袖型の横穴式石室である。石室平面形はほぼ正方形に近いが奥壁幅に比べて前壁幅がやや狭い。また、天井石を架構した羨道は持たなかったものと思われ、僅かにハの字形に開きつつ、直線的に伸びる前庭側壁を付設しており、ＳＴ033と同じく只字形の石室平面プランと言える。玄室はほとんど腰石のみが遺存し上部壁体はほとんど失われているが、平面的には前庭側壁も含めて良好に残っている。石室は南に開口し、主軸方位はＳＴ033とほぼ同じＳ－20°－Ｗである。

石室掘り方は石室壁体に沿って平面隅丸長方形をなしており、南北長4.5m、東西幅3.5m、深さ0.6mを測る。石室掘り方から南側には切り通し状に４m程掘り込んで前庭部及び墓道が形造られており、前庭側壁はこの掘り

方の壁に貼り付けるように積まれている。

石室規模は全長約4.5m、玄室は奥壁幅2.3m、前壁幅1.8m、右・左壁長2.3mを測る。奥壁・左右壁にはＳＴ033と同様に腰石を配置し、前壁側には玄門の両側に立柱石を立てている。腰石の据え方については、奥壁には幅1.1mとほぼ同じ幅の石材を２石横位に対称的に立て、それぞれの高さは右側の石で0.7m、左側で0.6m程である。左右壁には腰石を３石ずつ横位に配置するが、いずれも奥壁側の２石に比べ前壁側の１石はより小さな石を用いている。ただ側壁腰石の高さは奥壁・玄門立柱石より低く、さらに１石を重ねて高さを揃える点がＳＴ033と異なっている。なお、腰石上の壁体は一部しか残存しないが、ＳＴ033古墳と同様、腰石と格段に小さな石を用いているようには見受けられない。

玄門部の幅は約0.7mで框石が配されるが、框石は大きく２石で構成され、柱状の石材を右袖石側には横位に、左袖石側には縦位に並べて幅を調整している。前庭側壁は右壁で約２m、左壁で約1.8mを測りＳＴ033古墳のそれよりやや長い。また、壁体の積み上げ方も基底面から上部まで同じ大きさの石を用いるのではなく、まず腰石のように幅0.7～0.8mの横長の石材を袖石外側に接するように横位に置き、その上に大きさ0.4m前後の礫を積み上げている。また特徴的なのは左右の前庭側壁墓道側に近い部分で、石材を縦位に袖石のように立て、なおかつ内側に突出していることから一見羨門を意識しているかのように見受けられる。特に玄門とこの立柱石の間の空間は、平面的には副室のようなスペースをなしており、羨道を伴う複室構造の横穴式石室の影響も考えられよう。

なお、玄室床面は撹乱を受けていたが、前壁側右隅付近で敷石が一部敷かれた状態で遺存している。敷石は大きさ0.2m足らずの花崗岩礫からなるが、比較的平たい石を選択的に用いているようであり、敷石上面はほぼフラットに揃えられているように観察される。この敷石は石室基底面直上に敷かれており、

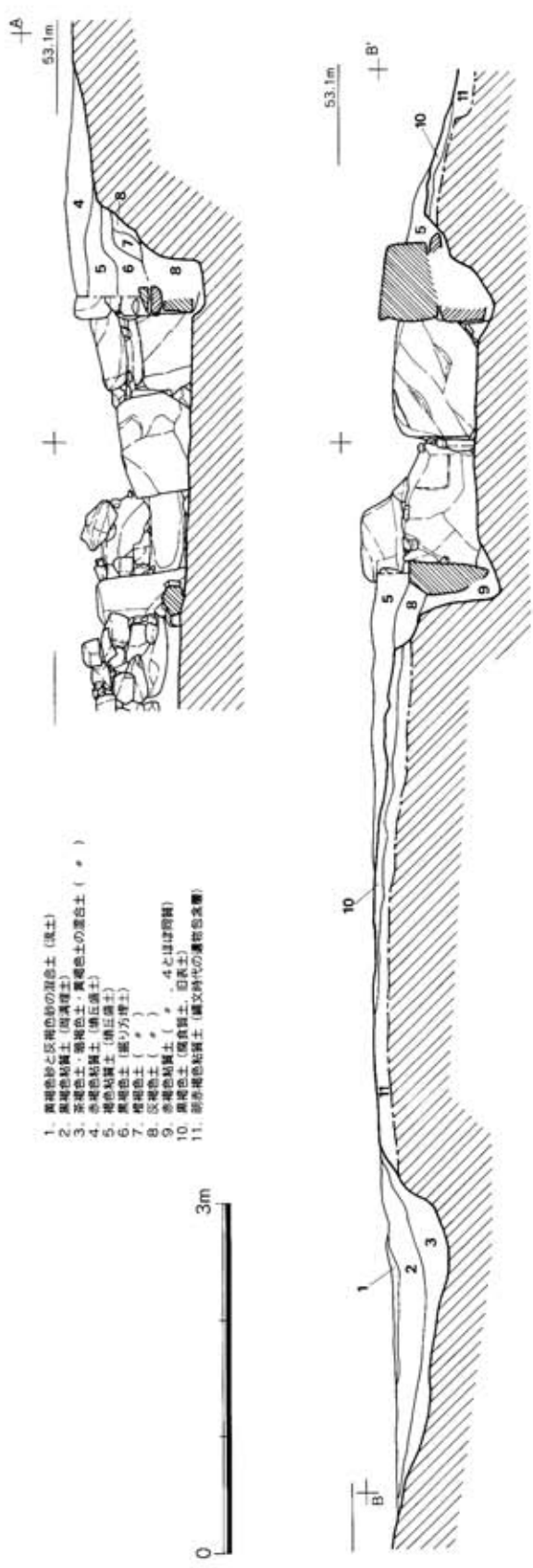


Fig.82　ＳＴ034古墳土層図（1：60）

初葬段階のものと考えられなくはないが、追葬時に基底面からから改修を行った可能性もあり、明らかにはできない。特に玄室内から遺物がほとんど検出されなかったことを考え合わせると、土層観察上は明らかでなかったものの、追葬段階に敷石自体を貼り替えていることも十分想像できよう。

閉塞状況及び墓道（Fig.85）　閉塞石は前庭部で良好に遺存しており、框石から前庭側壁の南端まで、つまりは前庭部全体を占めるように閉塞石が積み上げられていると言える。基本的には塊石積みであるが、墓道寄りにかなり厚みのある板石１石が用いられている。積み方としては玄門側に大きさ0.5m前後の大きな石を据え、次に墓道側から大きさ0.3m未満の小さめの石を積み上げて空間を塞ぎ、さらに墓側から大きめの石材を立て掛けているようである。この閉塞石の間には黒色腐食質土が見られるのみで、土層観察では積み直しを観察することはできない。しかし、閉塞石から約１m離れた墓道埋土中には大きさ0.6m前後の大型の礫８個程度の他、大きさ0.3m以下の小礫が多数集石されているのが確認されており、本来的には閉塞石に用いられていた礫を追葬段階に除去したものと推定される。

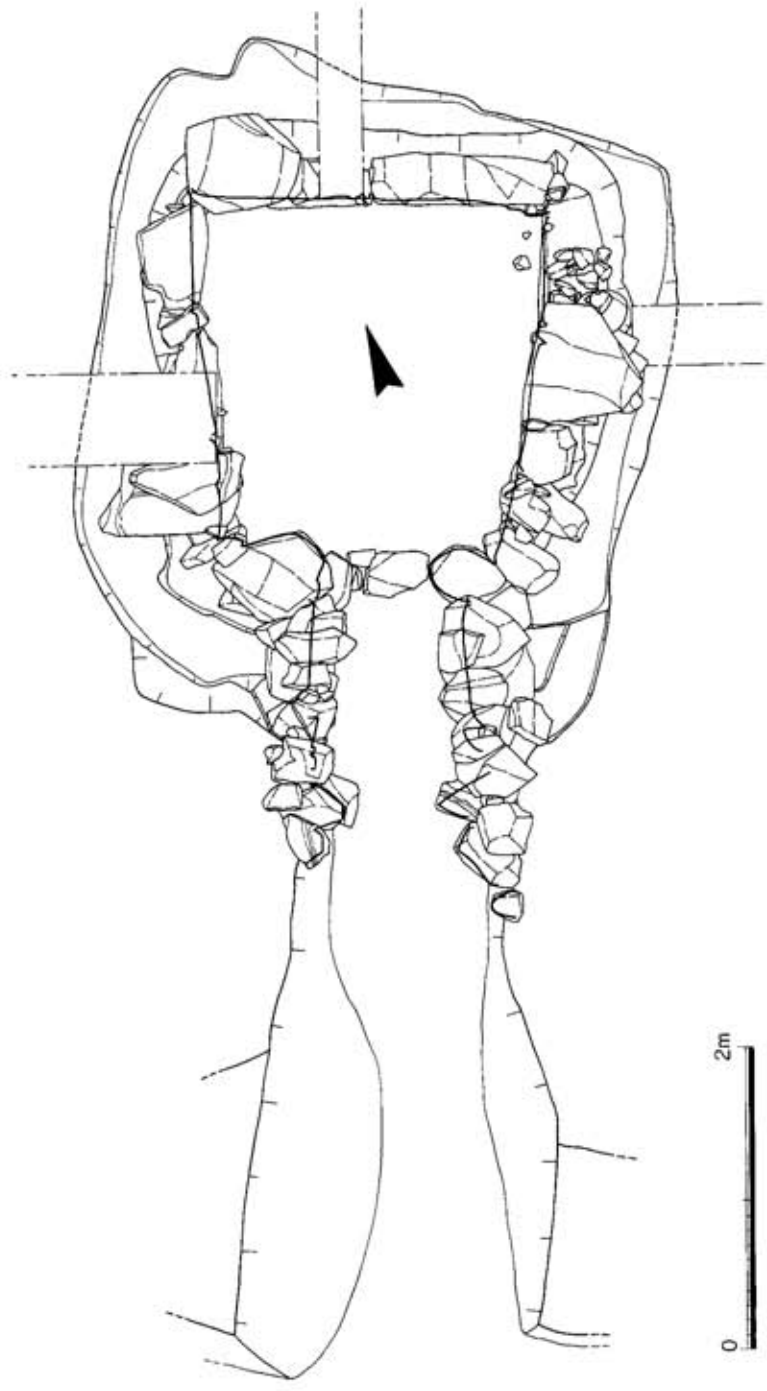


Fig.83　ＳＴ034古墳石室平面（1：50）

追葬の状況については墓道の土層観察によってある程度把握できる。墓道埋土の土層の内、２層あるいは４層としたものはその上面が比較的固く締まっており、追葬時の床面と考えられる。これに加えて墓道基底面を床とする埋葬を初葬段階とすれば、４層上面を床とする追葬を第１追葬段階、２層上面を床とする追葬を第２追葬段階としたい。よってそれぞれの床面の間層は、追葬に伴い石室内より掻き出した、あるいは墓道両側の墳丘上より流れ込んだ土をさらに平坦にならしたものと考えられる。問題は第２追葬段階以降も追葬が行われたかどうか

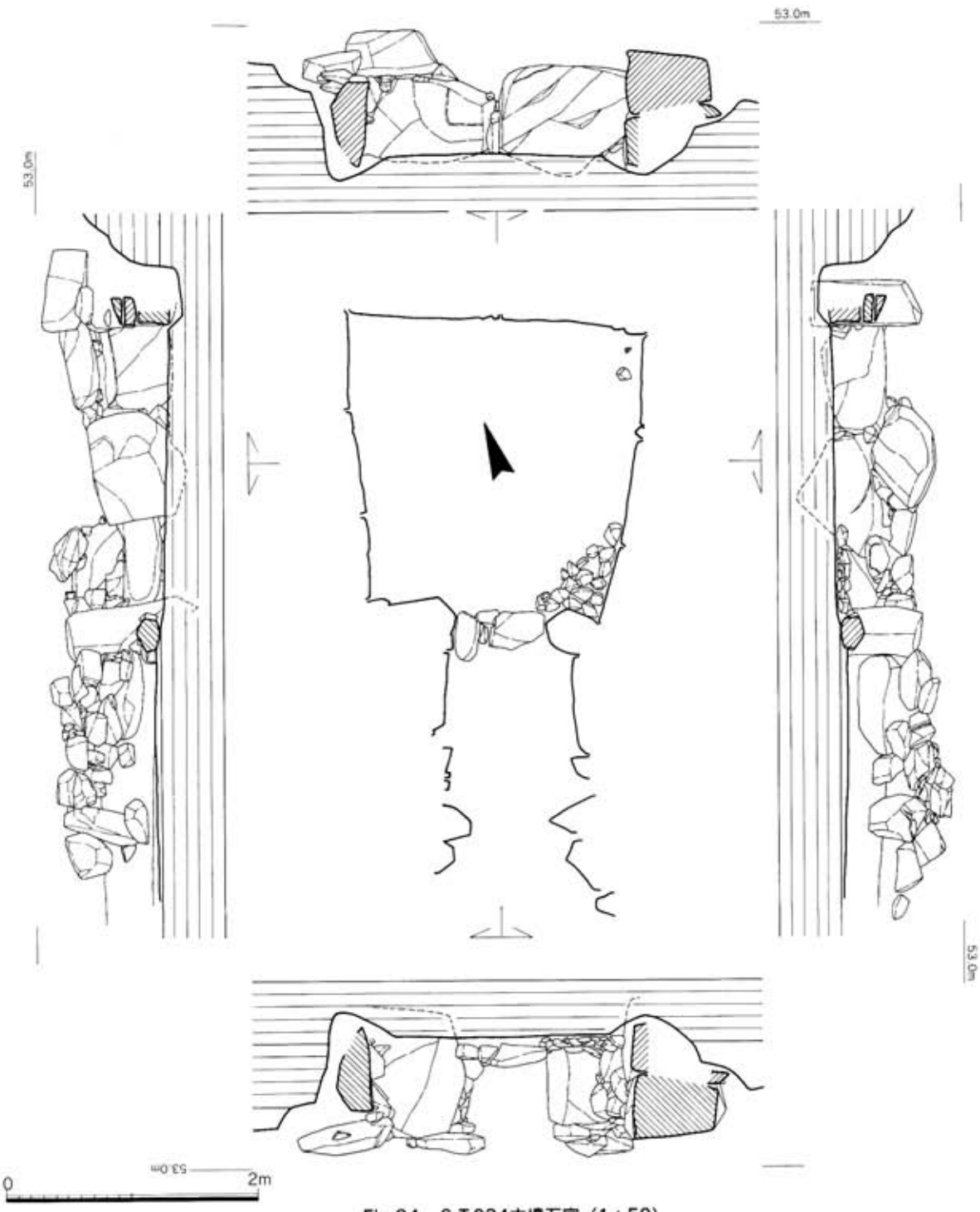


Fig.84　ＳＴ034古墳石室（1：50）

という点であるが、第２追葬段階を経た時点での墓道床面は、墓道基底面から約0.4m程度かさ上げされており、この状態で閉塞石を除去しての埋葬行為はスペース的に非常に困難と予想されることから、やはり第２追葬段階を最終追葬と考えたい。また前述した墓道埋土中の礫群については、その下面が４層上面から３層下面に続く第２追葬面にあたることから、第２追葬段階に既存の閉塞石を除去して集石したものと考えられよう。よって、墓道からの出土遺物の内、２層以下の出土のものは第２追葬段階までに堆積したものと言え、それより上層の遺物について、つまりは１層中及び集石上から周溝上面にかけて多量に出土した須恵器・土師器片については、掻き

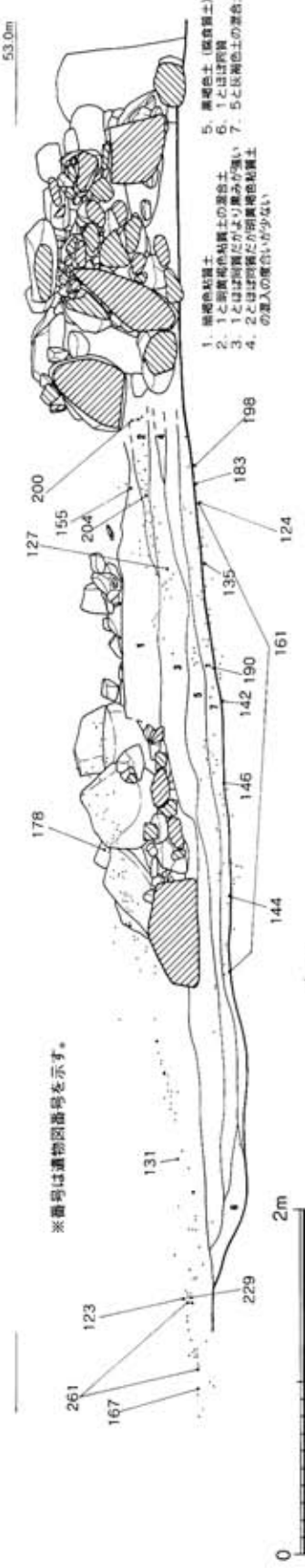
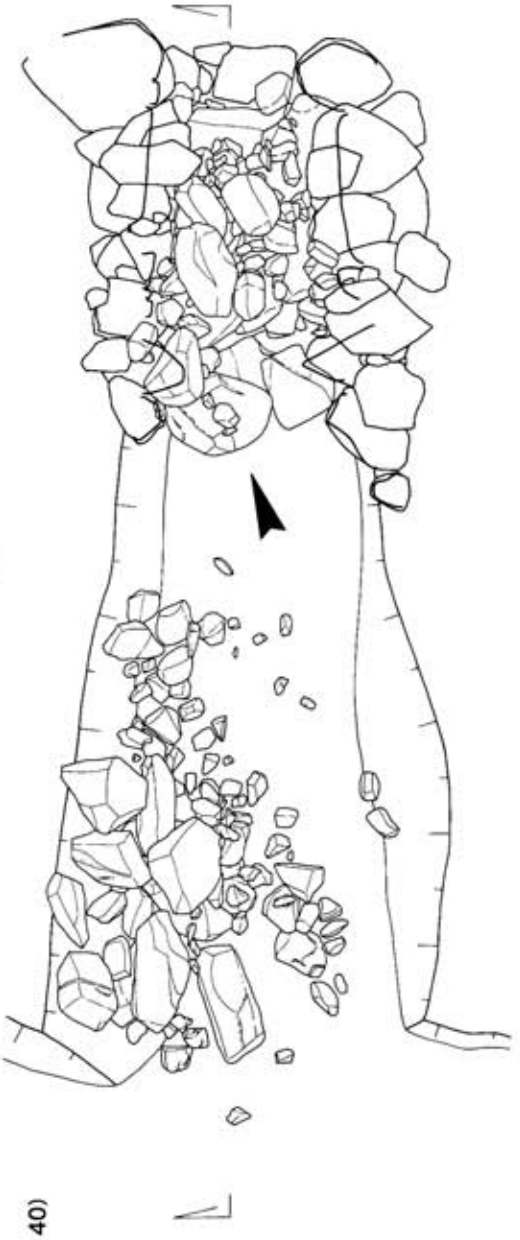


Fig.85　ＳＴ034古墳墓道遺物出土状況（1：40）



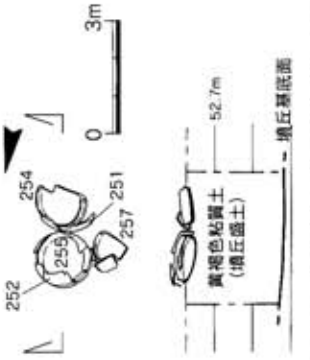


Fig.87　墳丘内土器出土状況（1：20）

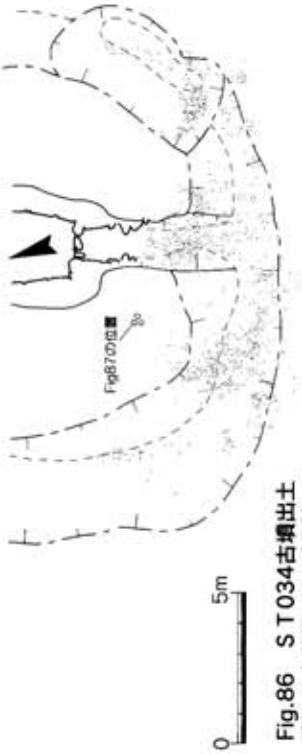


Fig.86　ＳＴ034古墳出土遺物分布状況（1：250）

出し等によって直接堆積したものではなく、墳丘上から二次的に流れ込み、堆積したものと考えたい。

なおＳＴ033においては、前庭部床面の床上げ、切り通し状の墓道の新設・掘り直しなど追葬過程における改修行為について指摘した。しかしＳＴ034については、石室床面から前庭部・墓道基底面に至るまでほぼ高低差なく連続しており、また平面的にも、また土層観察においても、掘り込みが切り合って存在するような状況も窺えないことから大きな改修が行われたとは考え難く、墓道についても古墳築造当初より掘られていたものと考えられる。この点から考えて、石室形態的にはＳＴ034が

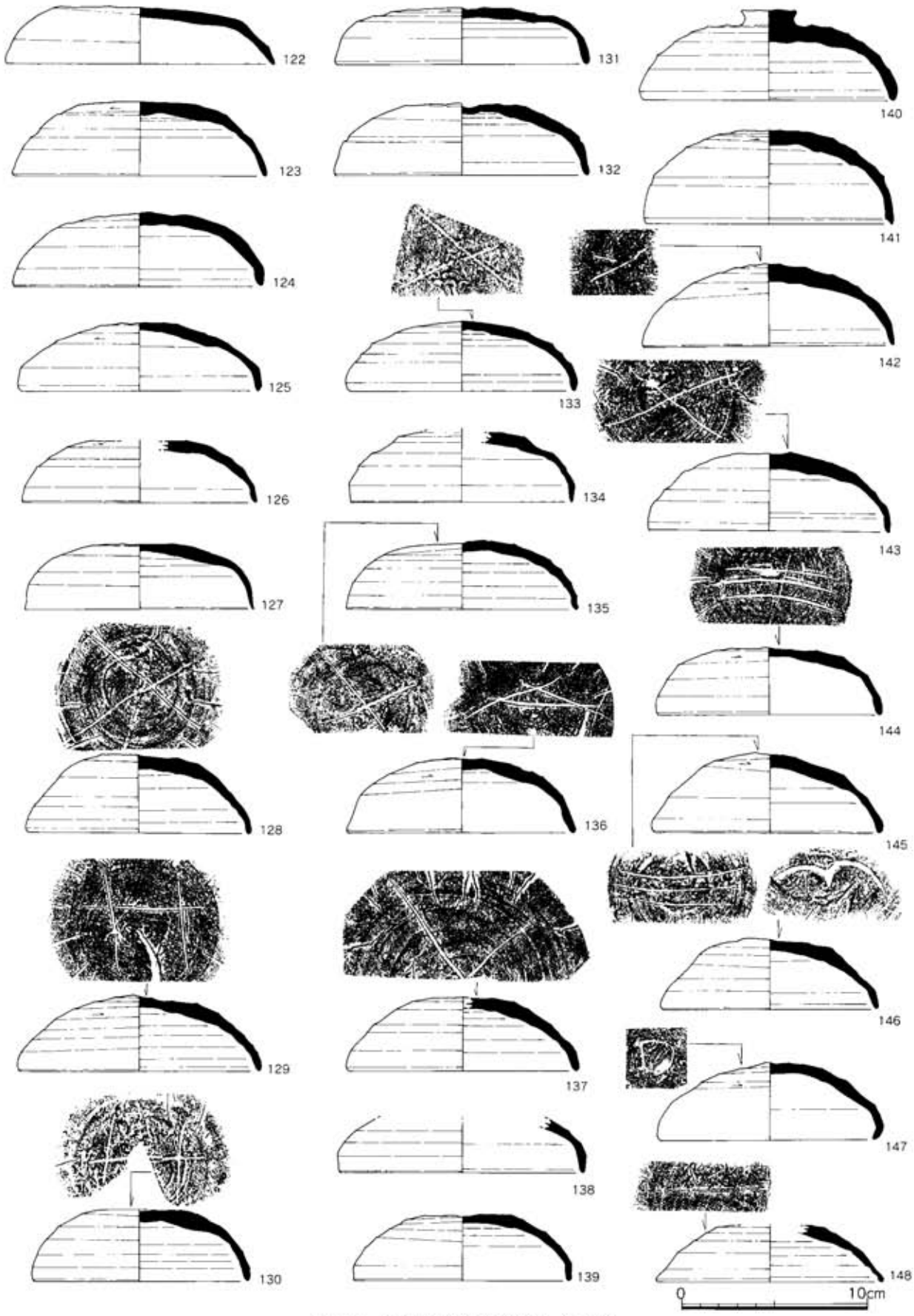


Fig.88　ＳＴ034古墳出土遺物１（１：３）

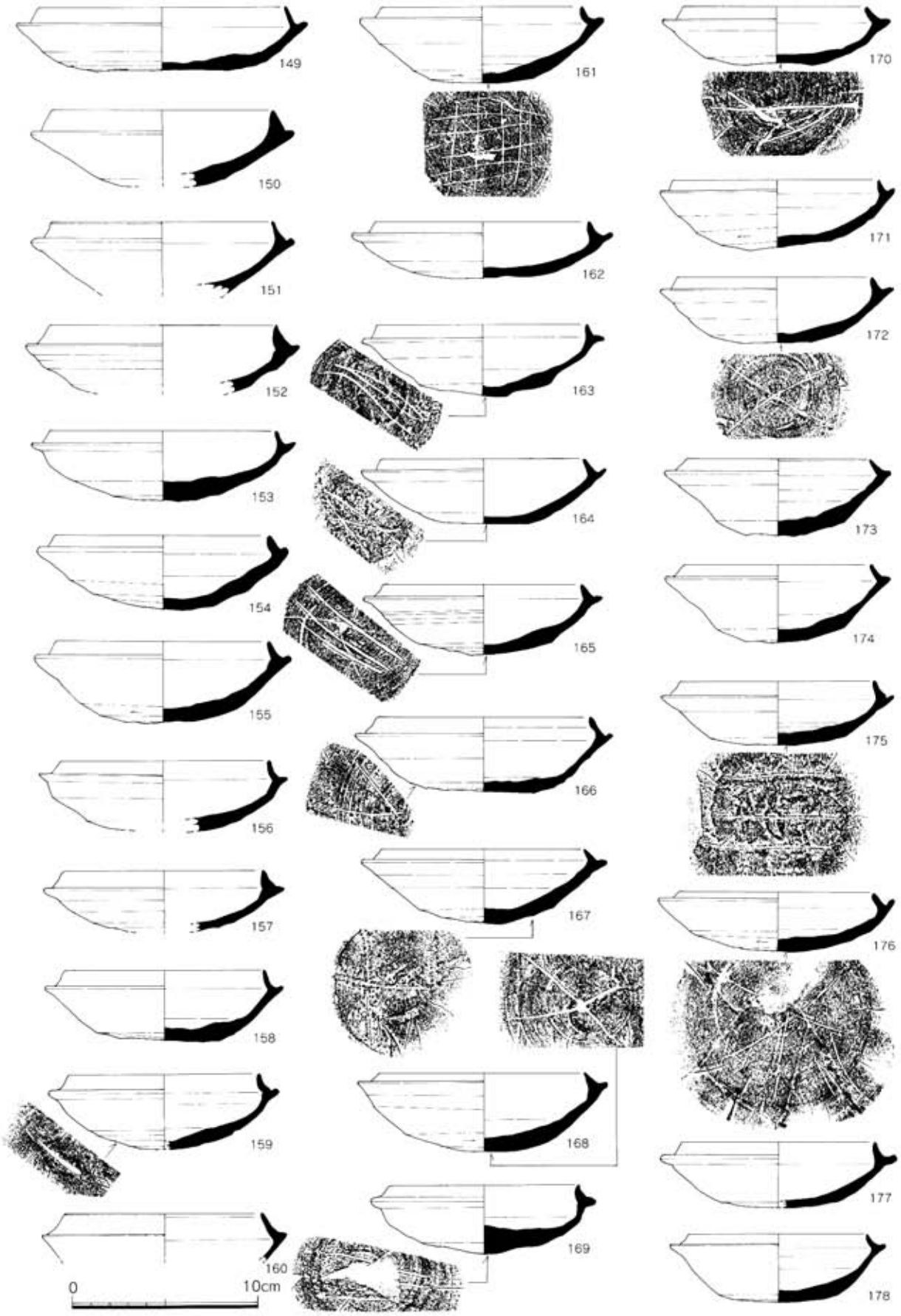


Fig.89　ＳＴ034古墳出土遺物２（１：３）

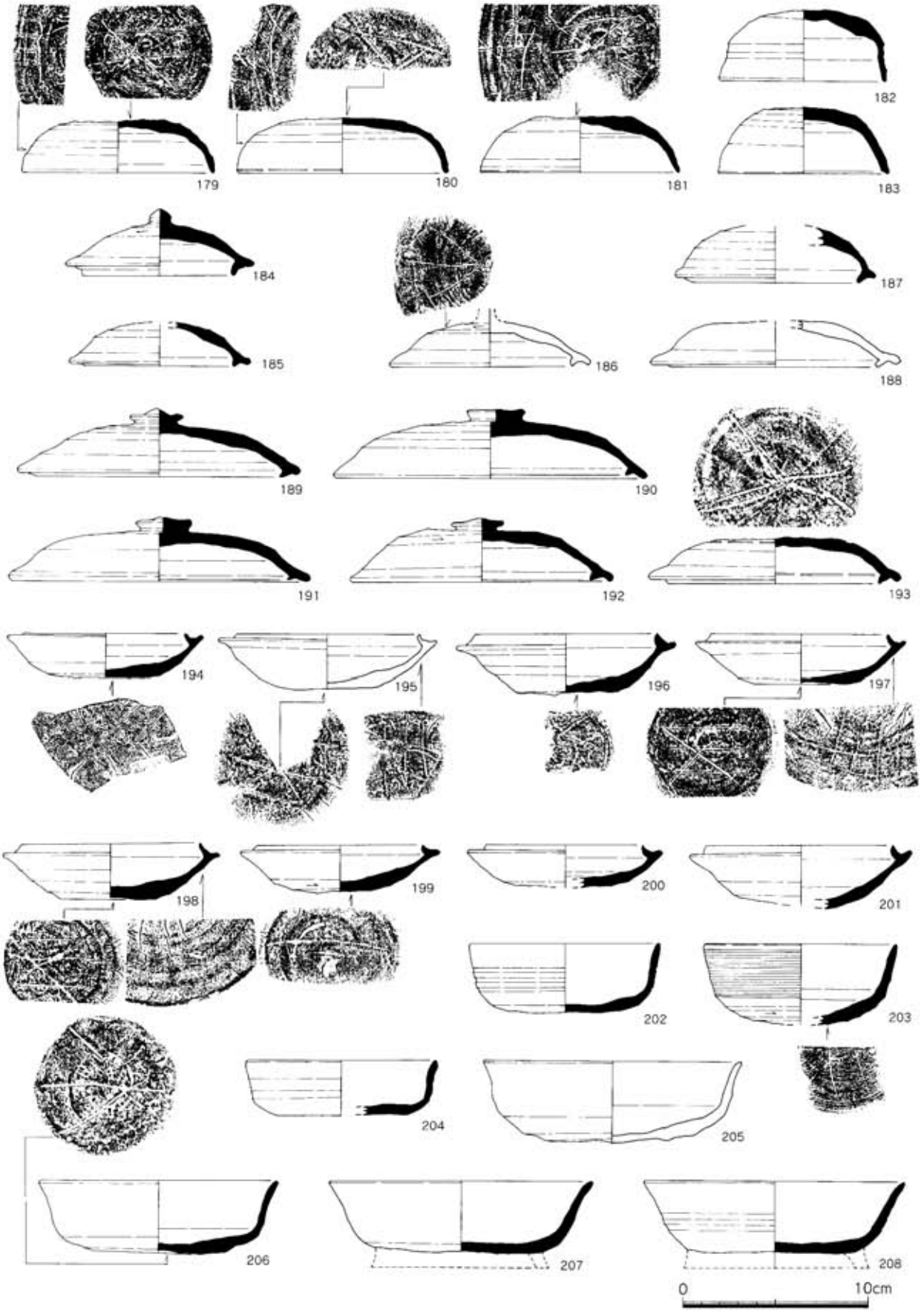


Fig.90　ＳＴ034古墳出土遺物３（1：3）

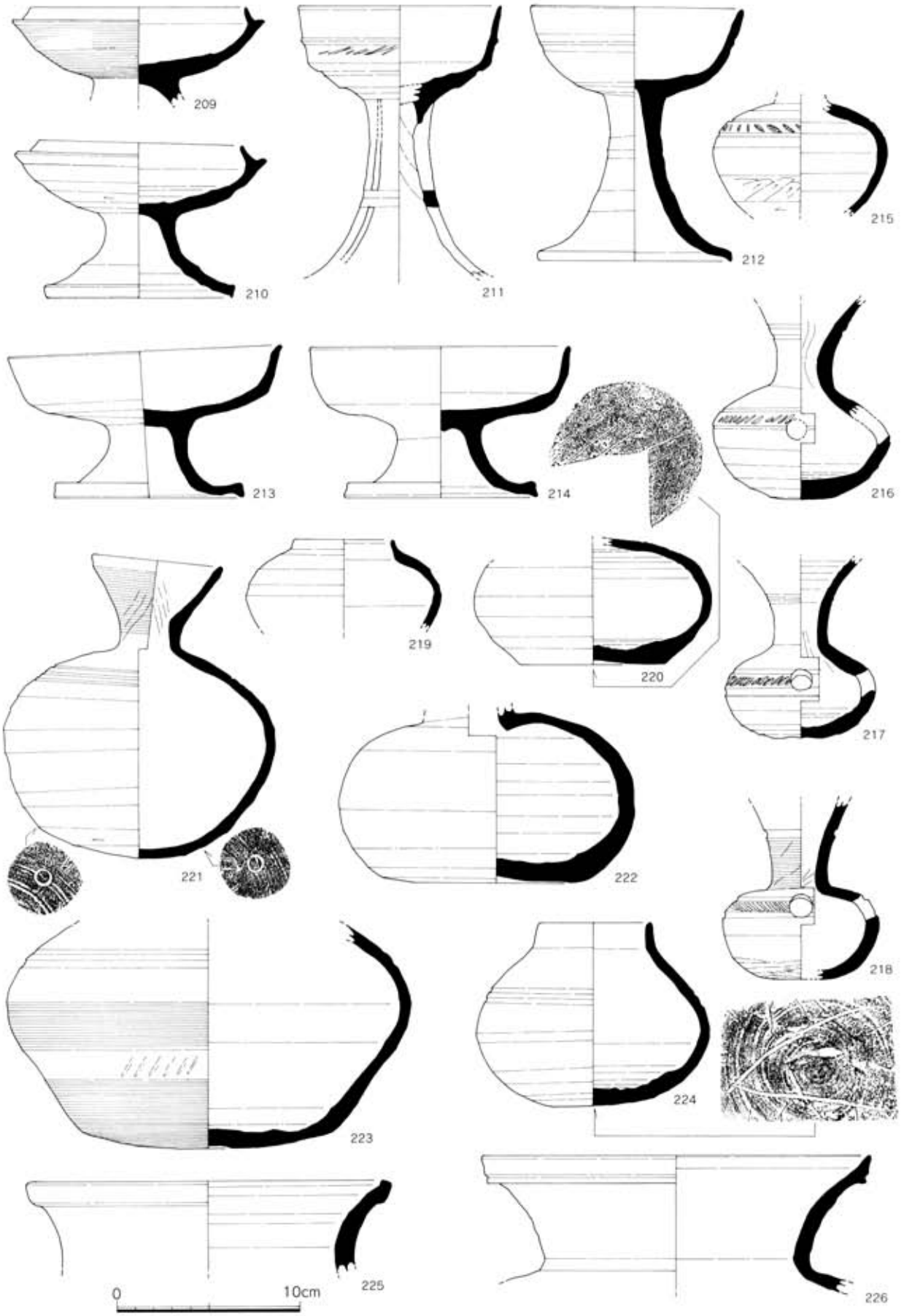


Fig.91　ＳＴ034古墳出土遺物４（１：３）

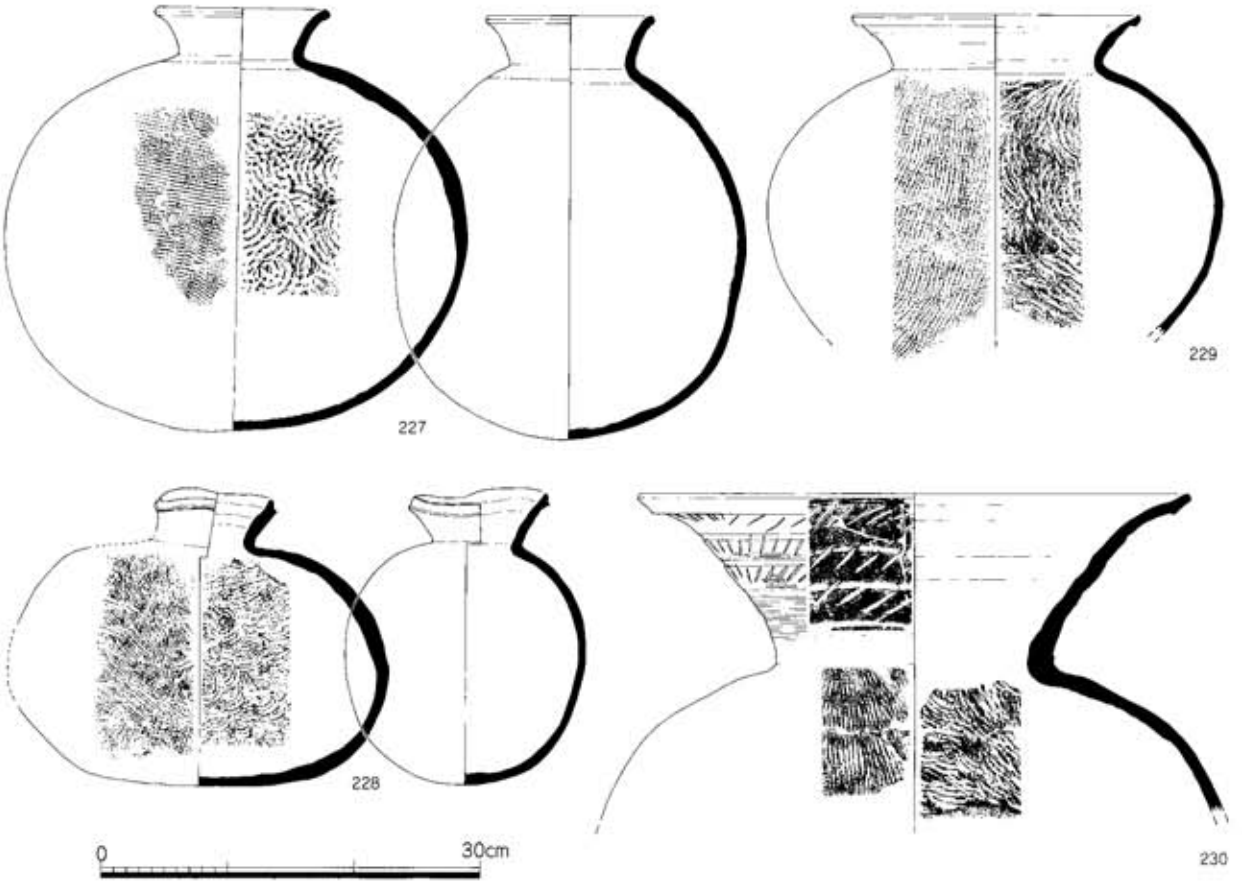


Fig.92　ＳＴ034古墳出土遺物５（１：６）

ＳＴ033に後出するものと推定される。

ＳＴＯ３４出土遺物（Fig.88～95）

出土遺物には、須恵器・土師器・鉄製品（武器・工具）がみられ、特に須恵器・土師器の出土量は今回調査を実施した古墳の中で最も多い。遺物は墓道から前庭部及びそこから続く周溝内に分布し、石室内からの出土は若干量に留まる。なお、原位置を留めるものとしては、墳丘構築時の祭祀に伴い埋置された土師器杯・身がある。

122～185・187・189～194・196～204・206～236は須恵器。122～148・179～187・189～193は杯蓋。つまみ及び端部のかえりを持たないものは、口径14cmを超えるもの（122）、口径12.9～13.4cmのも

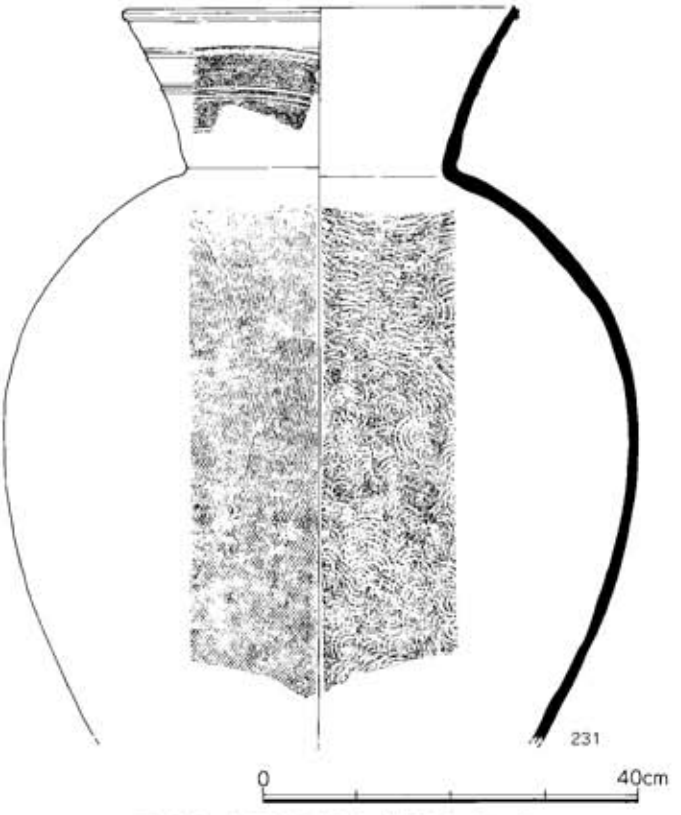


Fig.93　ＳＴ034古墳出土遺物６（１：８）

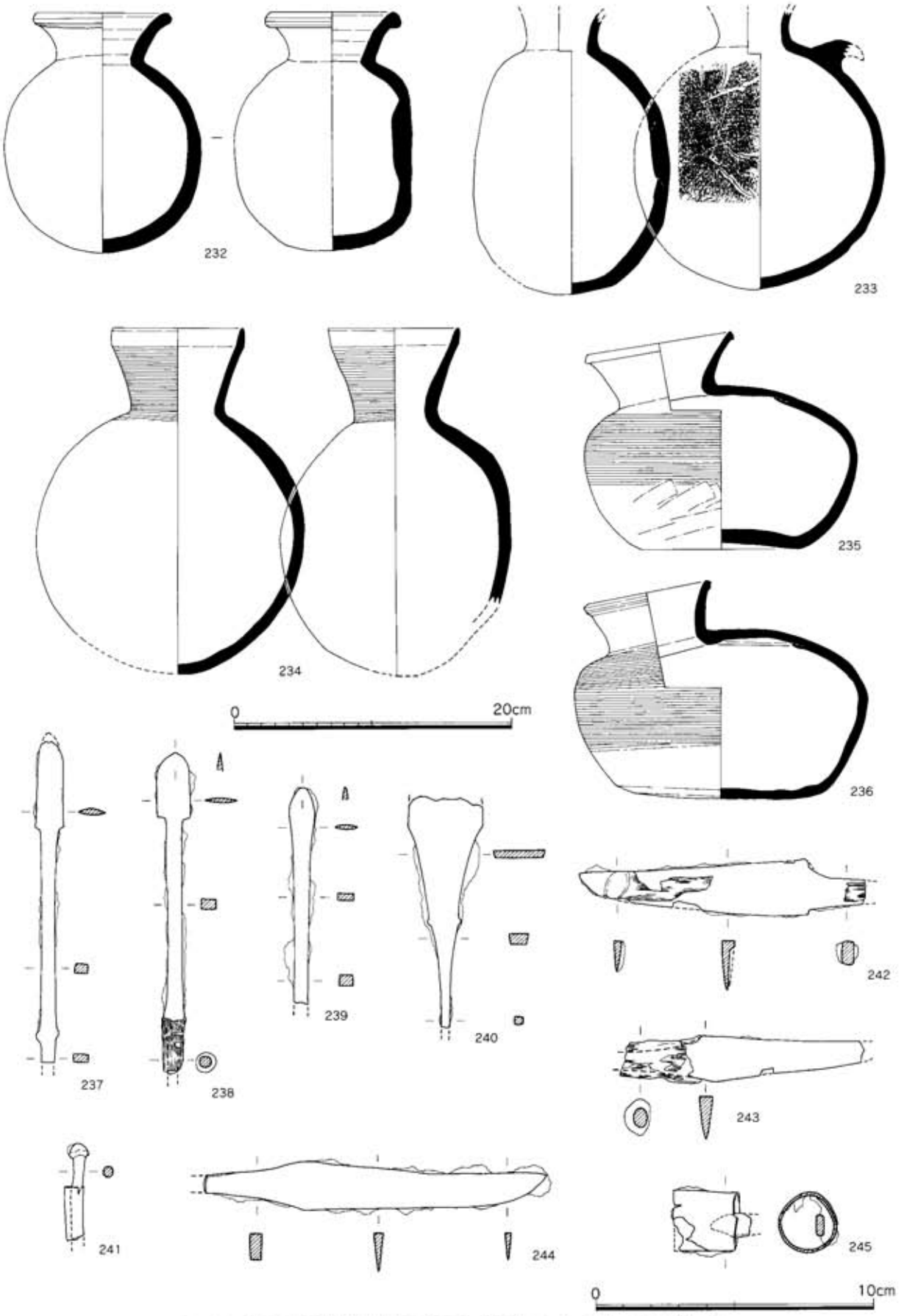


Fig.94　ＳＴ034古墳出土遺物７（229～233は1：4、234～242は1：2）

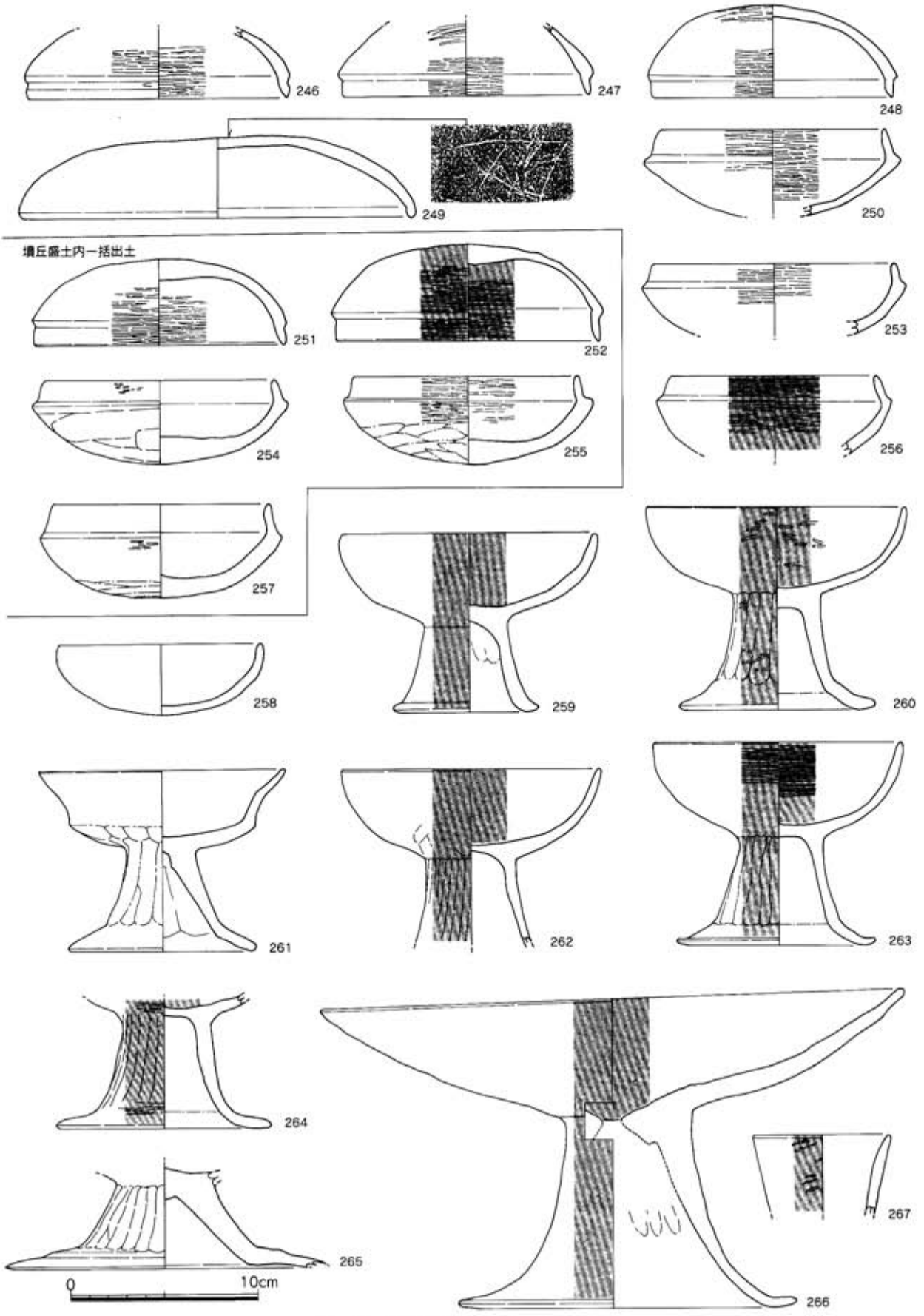


Fig.95　ＳＴ034古墳出土遺物８（1：3）

の（123・124・131・132・138・141・143）、口径12.4～12.7cmのもの（125・126・129）、口径11.8～12.2cmのもの（133・134・136・137・144・145・148）、口径11.5cm前後のもの（130・139・146・147）、口径10.1～11.1cmのもの（179～181）、口径９cm前後のもの（182・183）と口径で７つのグループに分類される。天井部と口縁部の境は明瞭でなく連続するが、132・141は両者の境に不明瞭ながら沈線を巡らす。また141のみ端部は丸みを持たず小さく段を持つ。天井部外面は179～181はヘラ切り後ナデ、他は回転ヘラケズリ。182・183は口径に対して器高が高く、壺蓋の可能性がある。184・185・187・189～193は口縁端部にかえりを持つもの。184・185・187は口径8.0～9.0cmで天井部は丸みをなし、184は宝珠つまみを持つ。189～191は口径12cmを超える大型のもので、天井部は平坦、つまみはボタン状である。192・193は口径11.5cm前後で同様に天井部は平坦、192にはボタン状つまみを貼り付ける。149～178・194・196～204・206～208は杯身で201までは受部を持つもの。口径で６つに分類

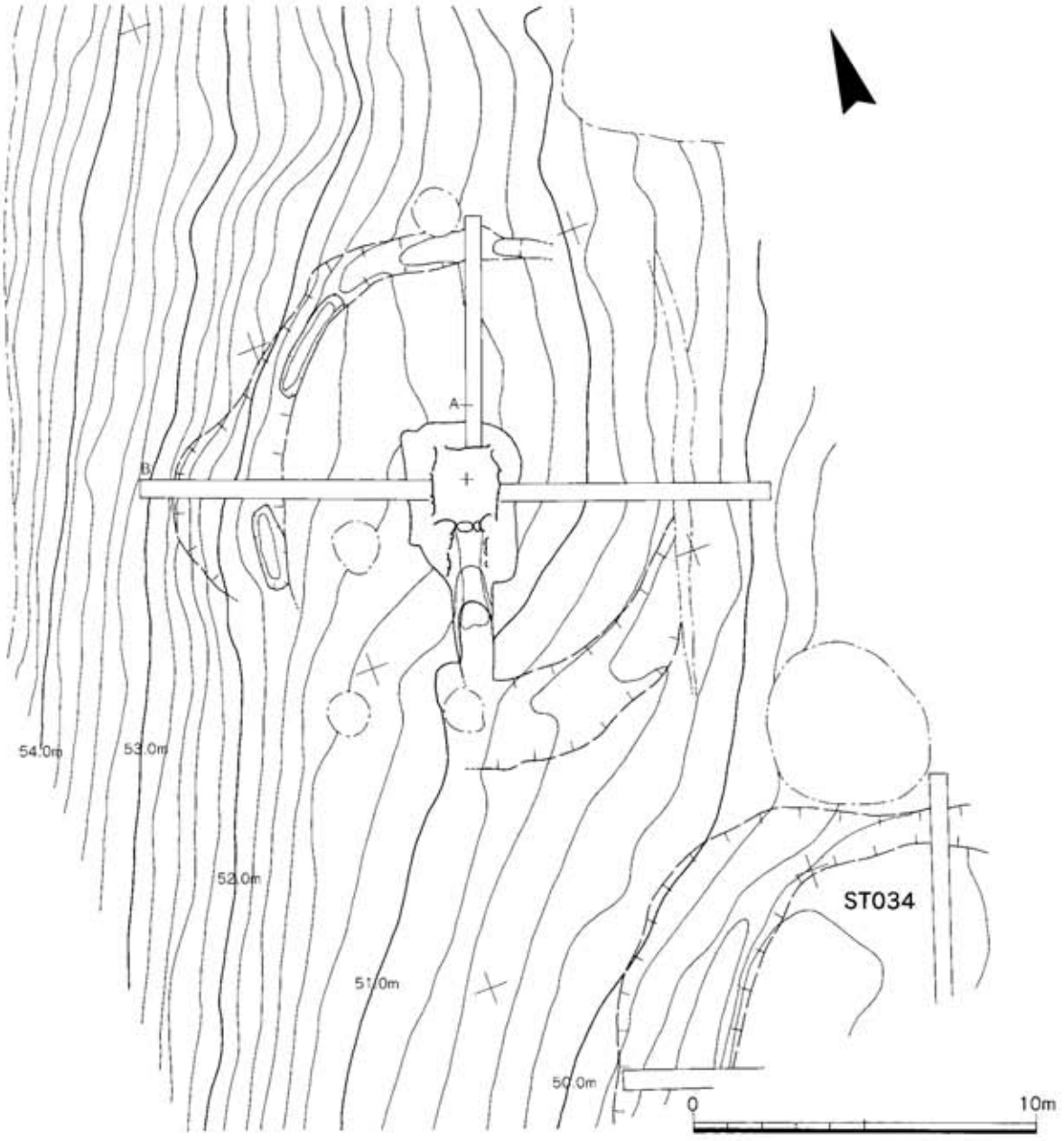


Fig.96　ＳＴ039古墳測量図（1：200）

され、149が最も大きく口径13cmを超え、150～153が口径12cm前後、154～158・160・161・163～168・171は口径10.7～11.6cm、159・162・169・172・174～177・201は口径10～10.5cm、170・173・178・196・197・198は口径9.5cm～11.6cm、159・162・169・172・174～177・201は口径10～10.5cm、170・173・178・196・197・198は口径9.5cm前後、194・199・200は口径8.5cm前後となる。202～204・206～208はかえりを持たないもの。202～204は体部から口縁部にかけて直線的に伸びるが、206～208は外反する。202～204は口径10cm程度、206は口径12.4cm、207・208は口径13.8cm、底部外面に高台の貼り付け痕を残す。209～214は高杯、209・210は有蓋高杯で杯部外面にカキメを巡らす。211は二段スカシを持つ長脚のもので最も古相を示す。215～218は甕、いずれも胴部最大径は胴部上位にある。209・224は短頸壺、221・222は長頸壺で220・223も同様か。227・228は横瓶、232～234は提瓶、235・236は平瓶。225・226・229・230・231は甕で、特に231は残存高78cm程の大型品、また230は口径約44cmと大きく開く。胴部の内面はいずれも同心円の当て具痕を明瞭に残す。

195・205・246～267は土師器。195・205は杯身で須恵器と全く同じ形態をとる。246～248・250～257は模倣杯の蓋・身で、特に251・252・254・255・257は墓道左側の墳丘盛土内に供献されていたもの。251・254、252・255がそれぞれ蓋・身のセットで検出された。249は蓋、あるいは天地逆で皿か。258は丸みをなす体部を持つ杯。259～266は高杯、266は口径31cm、器高17cm程の大型品で内外面に赤色顔料を塗布する。杯部内底面は粘土板が剥離している。267は壺。

237～245は鉄製品、237～280は鉄鏃で237・238は小型柳葉形、240は椿葉形か。239は先端部が丸みをもってあまり尖らず、関部を明瞭に造り出さない。241は弓付属金具、243～245は刀子、243は両角関で刃部長は8.4cm、242・244は両削関で242の刃部長8.7cm、245は縁金具。

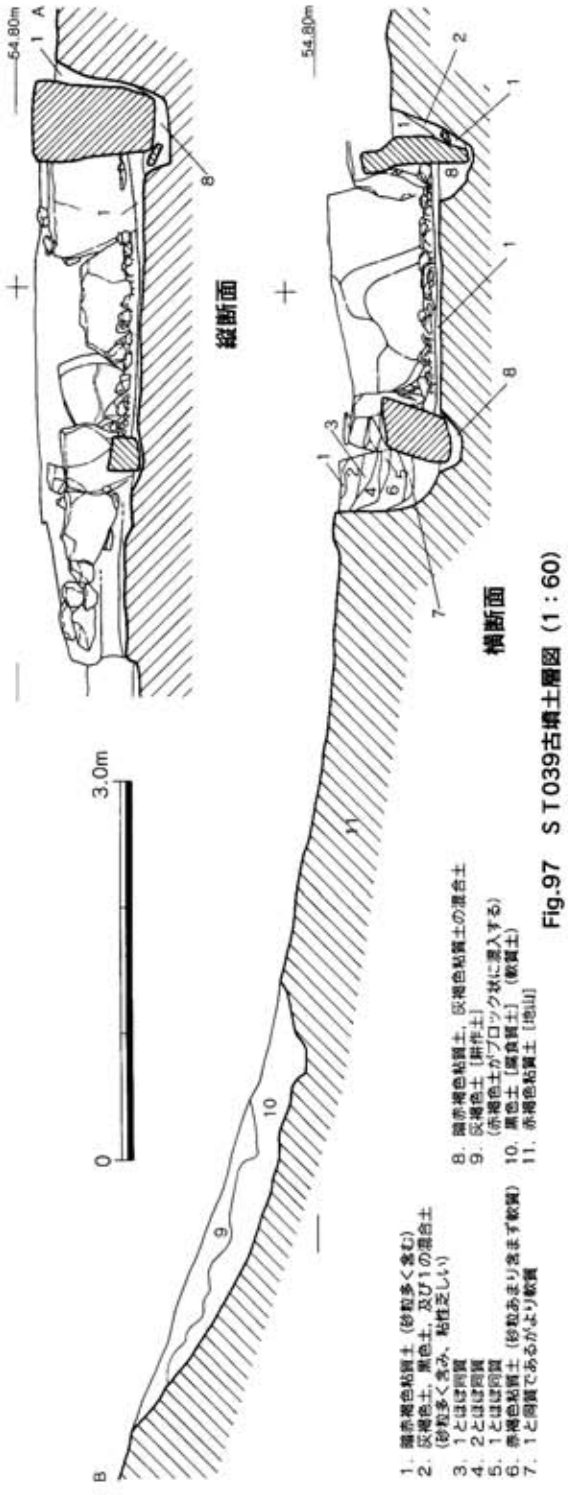


Fig.97　ＳＴ039古墳土層図（1：60）

ＳＴ０３９古墳（Fig.96～101）

墳丘・周溝（Fig.96・97）　ＳＴ034の北西に位置し、相互の周溝同士が約５ｍの間隔を空けて近接している。墳丘基底面に至るまで削平を受けており、周溝も北東及び南東部分では底面まで削られて完全に失われている。立地状況としては基本的に緩斜面上に築造されるが、西側周溝は一部尾根斜面の傾斜がきつくなる部分にあたる。

墳形はほぼ円形であるが、やや南北方向が長軸となる楕円形ぎみになり、長軸は約12.5m、短軸は約11mを測る。周溝は墳形に沿って円形をなしており、周溝外径で南北16m、東西もほぼ16m程度と推定される。特徴的なのは西側周溝において周溝底面からさらに深い掘り込みが二か所確認されていることであり、それぞれ石室北西側及び石室西側で墳裾に沿って溝状に掘られている。このうち、北西側のものは長さ3.5m・幅0.6m、西側のものはより小さく、長さ2.5m・幅0.7m、深さはいずれも約0.4mである。埋土は周溝のものと区別し難く、周溝に伴う掘り込みと考えられるが、その性格は不明である。

なお、周溝内からは須恵器高杯の脚部片の他、弥生土器の甕及び鉢の小片が出土している。

内部主体（Fig.98・99）　単室両袖型の横穴式石室である。ＳＴ033・034と同じく羨道を付設せず、ハの字形に開きつつ伸びる前庭側壁を取り付ける。ただし玄室平面形は奥壁幅と前壁幅が等しい長方形をなす点が前２者と異なる。石室は上部壁体を全て失っているが、最下段の壁体は玄室・前庭側壁共にかろうじて遺存しており、石室構造についてはある程度復元できる。石室は南に開口し、主軸方位はＳＴ033・034と同じＳ－22°－Ｗである。

石室掘り方は玄室に合わせて長方形に掘られ、南北3.7m、東西3.5m、前庭側壁を据える部分では一段高くなっている。

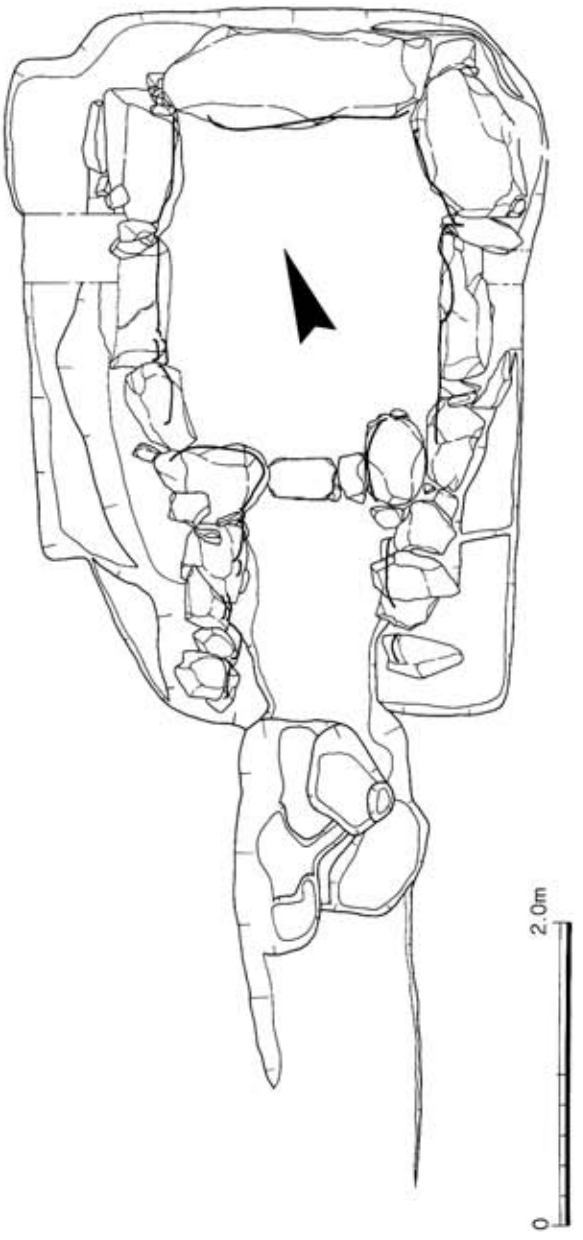


Fig.98　ＳＴ039古墳石室平面（1：50）

石室規模は全長3.8m、玄室は奥壁幅1.5m・前壁幅1.7m・右壁長2.0m・左壁長2.1mを測る。奥壁・左右壁共に腰石を配置し、前壁は玄門を挟んで左右に袖石を１石ずつ立てている。奥壁の腰石には幅1.5mと奥壁幅いっぱいで高さ約0.8mの大石を横位に据えており、右壁の腰石には２石、左壁には３石を用いる。左右壁の腰石の上面はほぼ奥壁の高さと揃っており、これより0.2m程低い左壁中央の腰石についてはさらに１石を重ねて上面の高さを整えていたものと考えられる。玄門部の袖石は、平面的には左壁側のものが奥壁と並行に立てられるのに対し、右壁側のものは側壁と並行に立てられている。袖石の幅としては右側で約0.4m、左側で約0.6mと左右で異なっており、言わば玄門部が右側に寄った状態となっている。

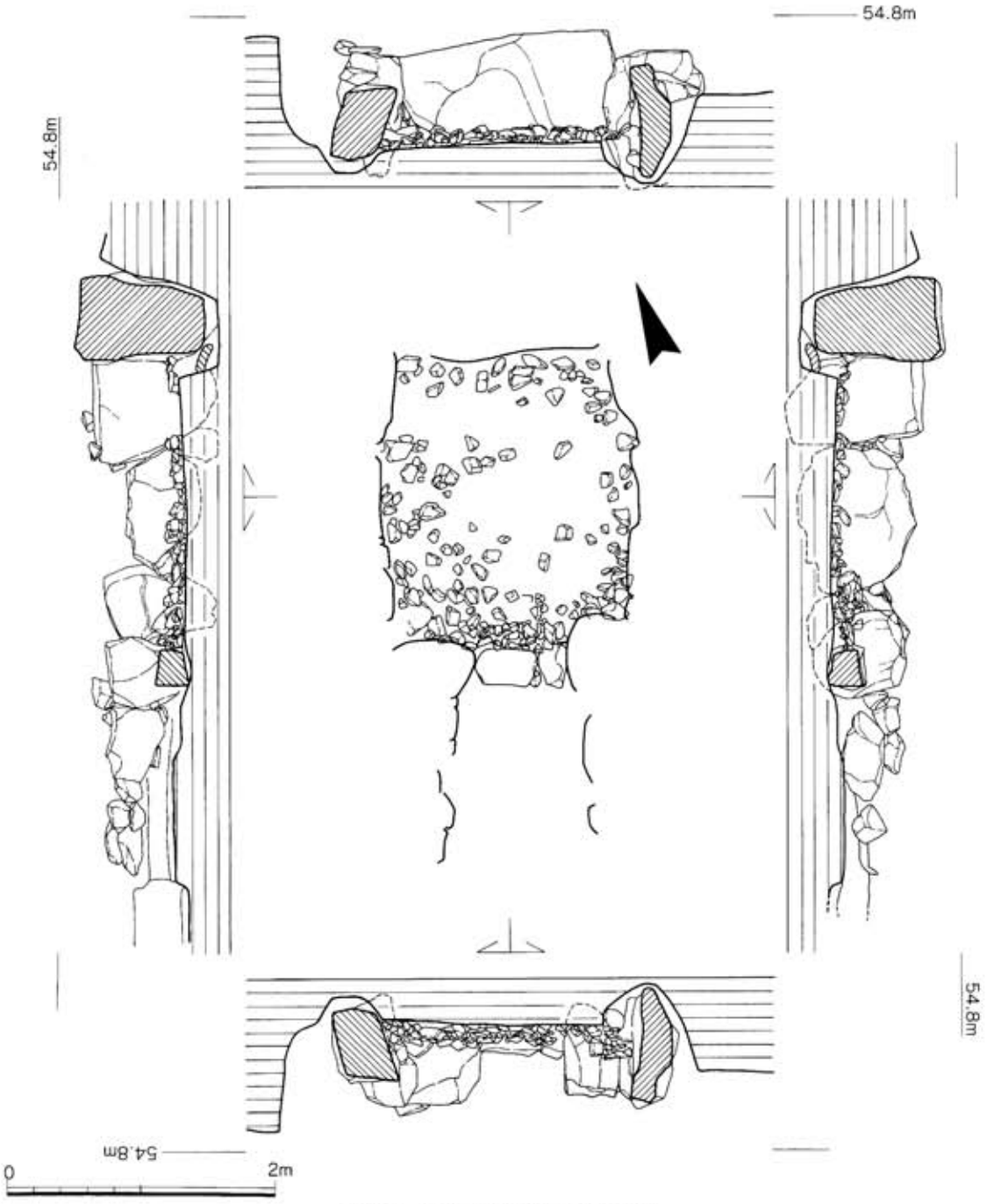


Fig.99　ＳＴ039古墳石室（1：50）

なお玄門部幅は0.65ｍで、框石は２石が配置されるが、左側袖石に寄せて長さ0.45ｍ、幅0.25ｍの石を横位に据え、右袖石との隙間にさらに小型の石を縦位に置いている。

調査時には玄室内に壁体に用いられたと思われる大小の石材が落ち込んでいた上に玄室床面も撹乱を受けていた。床面に相当する部分では敷石に用いられたと思われる小礫が多く確認されたが原位置を留めているものはほとんどない。また、玄室内部からは遺物は出土しなかった。

前庭側壁は右側で約1.0ｍ、左壁で約1.4ｍが遺存し、玄門部から墓道側に向かって僅かに開いてかろうじてハの字形をなしている。最下段の石列のみが残っており、ＳＴ033と同じく、まず大きさ0.6～0.7ｍの石を腰石状１石ずつ据え、その上により小さな石を積み上げて壁体を作っていたものと推定される。

閉塞石・墓道（Fig.100・102）　閉塞石は前庭部で確認されているが、ＳＴ033・034と異なり塊石と板石を併用して閉塞が行われる。板石は厚さ３cm程の非常に薄いもので、幅0.5mの板石１枚を前庭部側から框石に立て掛け、さらにより小さな石を２枚重ねている。塊石はこのさらに外側から板石上に積み上げていくが、比較的規則性を持って積んでおり、大きさのほぼ揃った角錐形の石の底辺を板石側に向けて一様に重ねていっているように観察される。

なお、板石は安山岩であり近隣で産出する石材ではない。同じものはＳＸ050支石墓で蓋石に用いられており、同様に支石墓に用いられていた石材を古墳の閉塞石に転用したものと推定される。

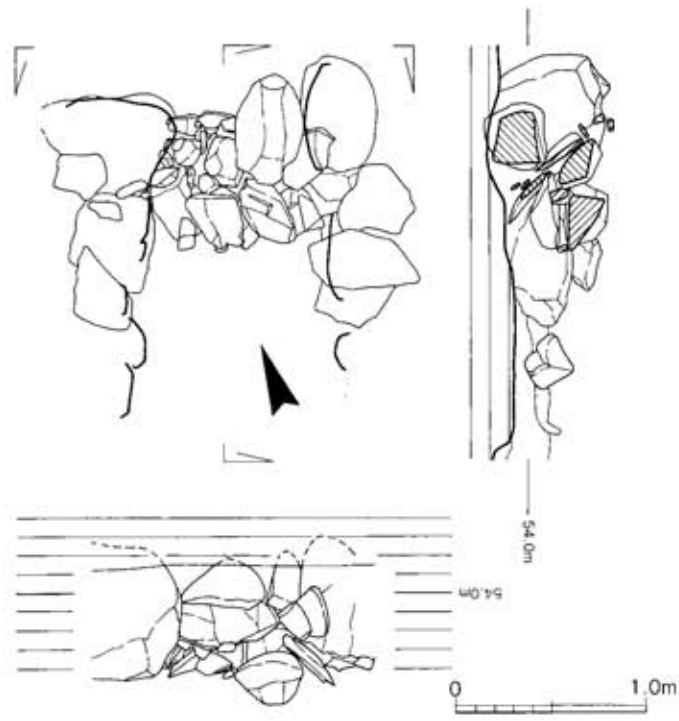


Fig.100　ＳＴ039古墳閉塞状況（1：40）

墓道はＳＴ033・034と同様、切り通し状の墓道が南に伸びるが、削平のため土層観察から追葬等の有無について観察することは出来ず、遺物も鉄製品の小片が検出されたに過ぎない。なお、前庭側壁のすぐ南付近の墓道底面で不定形の浅い掘り込みが確認されており、埋土中より縄文時代中期の深鉢底部片が出土している。当該期の遺構の残欠と思われるがその性格については不明である。

ＳＴ０３９出土遺物（Fig.101）　須恵器及び鉄製品として鎌・馬具の他、弥生土器・縄文土器が検出されている。

268・269は須恵器、268は杯身、口径10.4cmで立ち上がりは内傾し、その長さは0.7cm。269は高杯脚部の裾部。270・272は弥生土器。270は甕の口縁部でくの字形に外反する。調整は内外面共にハケメである。272は素口縁の鉢、調整は外面はハケメ、内面はナデ。271は縄文土器深鉢の底部片、胎土及び色調から中期の阿高式土器のものと推定される。273～275は鉄製品、273は馬具で鉸具の差し金、275は細くカーブする棒状のもので同じく差

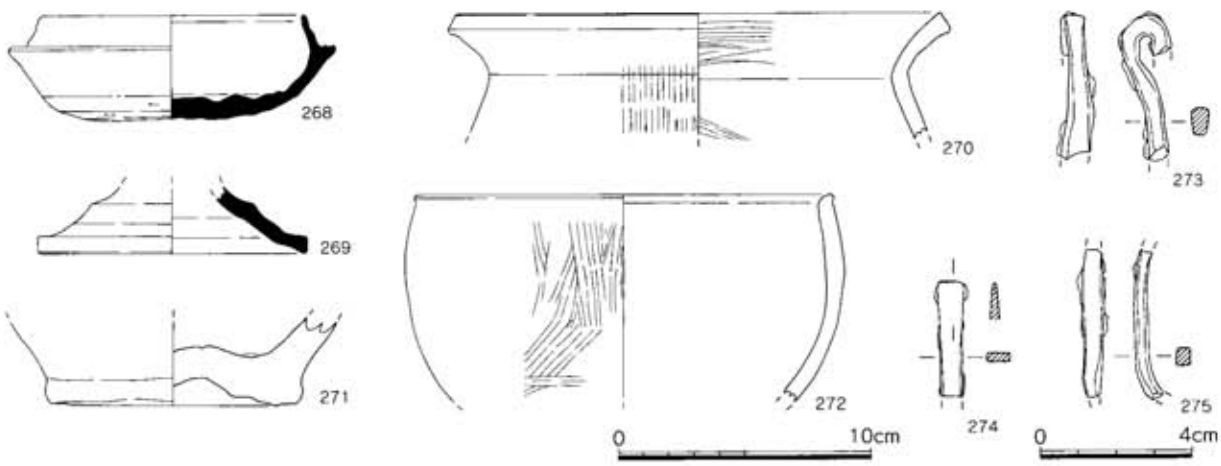


Fig.101　ＳＴ039古墳出土遺物（268～272は1：3、273～275は1：2）

し金の一部と思われる。274は鏨箭式の鏃で鏃身部のみの出土。

ＳＴ０４０古墳（Fig.104～112）

墳丘・周溝（Fig.102・103）　ＳＴ033の西側、傾斜角25～30°の急な斜面上に立地する。調査前は丘陵斜面全体が蜜柑園に段造成されていたため、古墳の存在は全く知られていなかった。特に本古墳は墳丘全体が流土により覆われた後に造成を受けたため、墳丘上部が一部流出している以外は、ほぼ全体が良好に遺存していた。ただ、調査の際は、すぐ上方に農道が走っているため、安全への配慮から墳丘西側については調査を実施していない。

比較的急斜面上に立地することからＳＴ033～039のように緩斜面上を平坦に造成するのと異なり、斜面を有効に利用して最低限のカットで地山整形を行っている。まず、斜面に周溝部分を半月形に掘り下げ、さらにこの内側を半円形にカットして石室掘り方と前庭部を造り出している。石室掘り方及び前庭部の半月形カットは地山面を最大2.5m程掘り下げており、平面的な規模も南北14m、東西６mとかなり大規模なものである。この両者の間は山形に掘り残され、西側墳丘の裾部を形造っている。

墳丘盛土は石室東側においては旧地表面上に約0.2m程の厚さをもって確認され、石室中心からの半径約8.5mの範囲で検出されている。この旧地表面上では土師器の甕１個体、高杯４個体が出土している（Fig.108）。これらは原位置での出土ではなく、斜面上方から流れたものと推定され、墳丘盛土工程にあたっての祭祀行為に伴う供献土器と考えられる。盛土の構築法については、斜面上に立地することから、石室天井石の上面は山側斜面の基底面と高さが変わらないため、石室壁体の積み上げに伴い、裏から壁体を盛土で支えることをあまり要しない。よって盛土は１層々が厚みをもってかなりラフに積まれていると言え、特に山側斜面にあたる石室西側・北側については掘り方裏込めの延長のような積み方と言える。なお特徴的な点として、前庭部については一度平坦にカットして基底面を造った後に、東側にさらに盛土を行い墓道状に凹面を造り出している（Fig.103）。

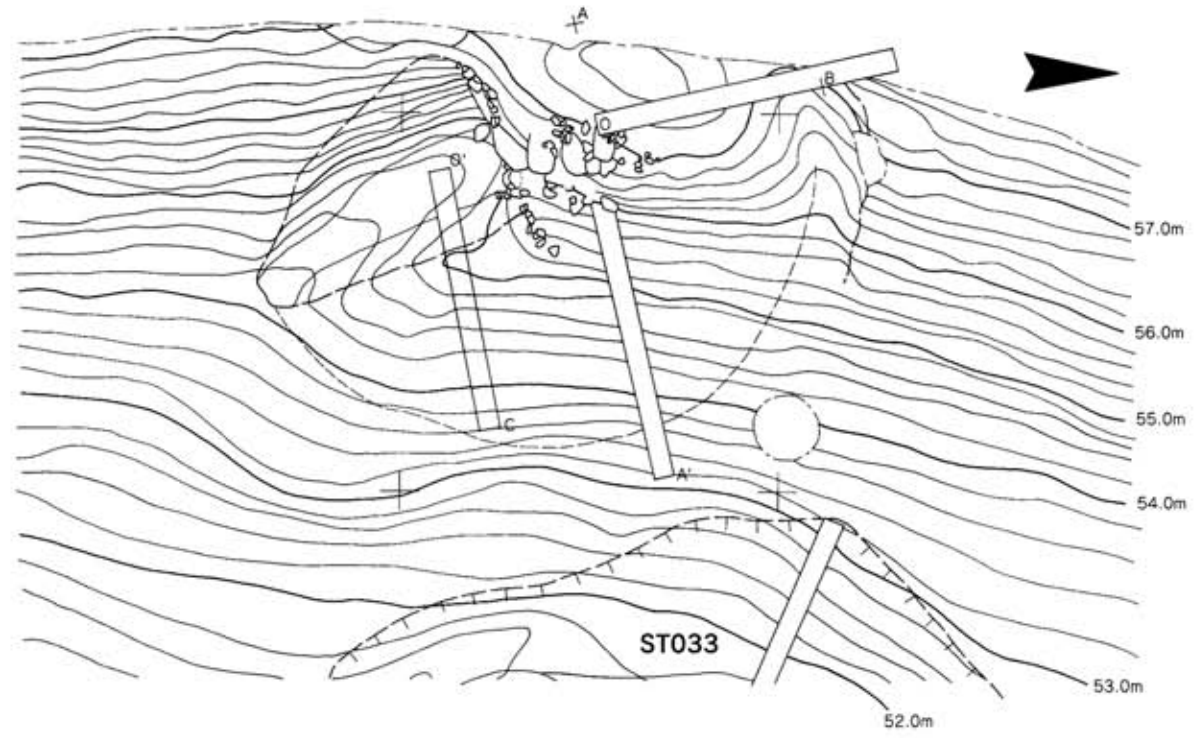
周溝は石室北側にあたる部分を一部調査したのみであるが、石室南西側、調査区外との境付近で周溝と思われる凹面をなす掘り込みを確認している。周溝の断面形は土層図（Fig.103）で見たところ、基底面で一度Ｕ字形に掘り込んだ後に墳丘盛土の最上層である３層が周溝内に堆積し、その上面に黒色腐食質土（２層）が形成されている。よって周溝は地山を掘り込んだだけでなく、新たに土を搬入して溝の形態を整えたものと考えられる。

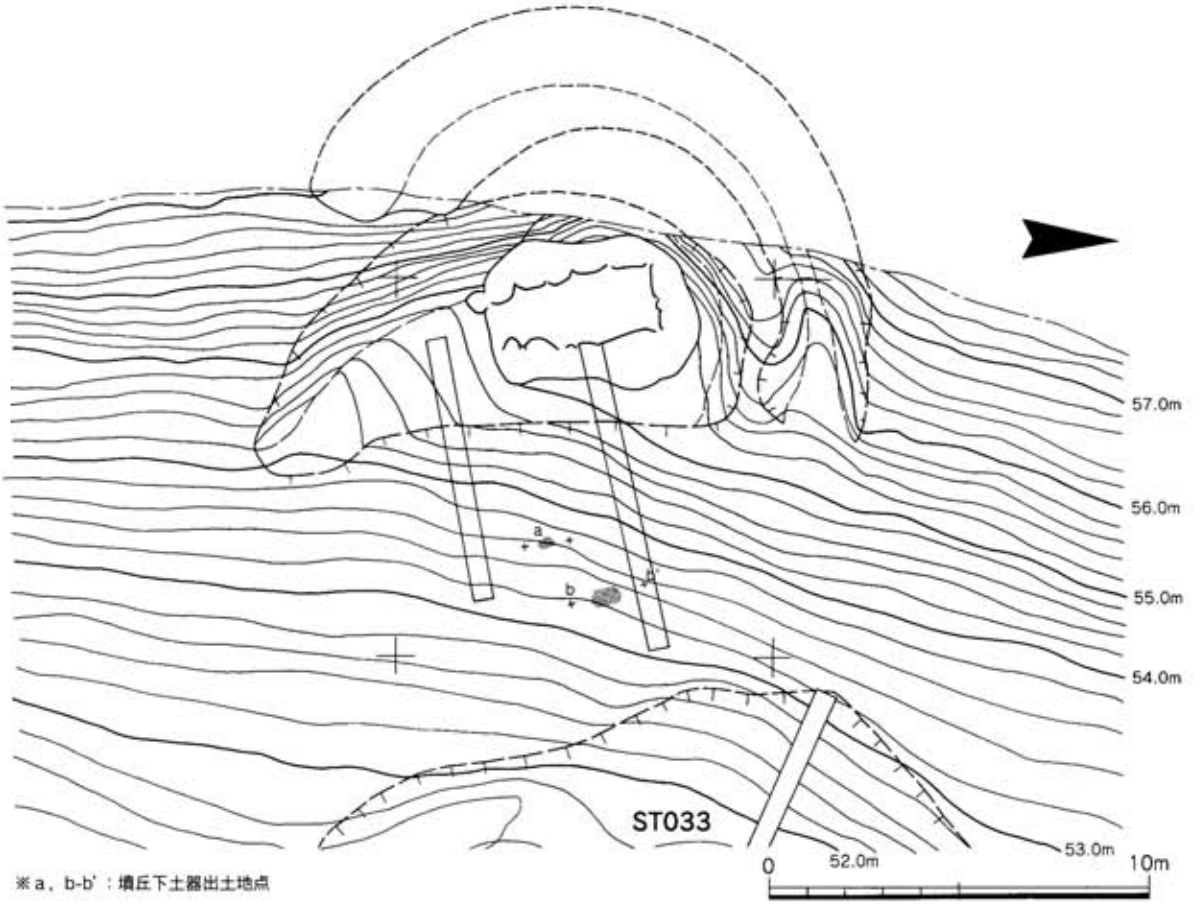
なお、墳丘の大きさは推定の域を出ないが、ほぼ13～14m前後と思われる。

内部主体（Fig.104～106）　単室無袖型横穴式石室である。石室は天井石までほぼ完全に遺存している。開口方向は南で、主軸方位はＳＴ033・034・039とやや異なりやや東に振れてＳ―15°－Ｅである。

石室掘り方は腰石を据える範囲で概ね隅丸長方形をなしているが、山側斜面にあたる北側・西側をさらにテラスを造り出し二段に掘られており、この一段目の上面は腰石に、さらに二段目の上面は石室天井石の下面にほぼ揃うようである（Fig.103）。

石室の平面形は奥壁幅1.6m、右左壁長4.0mと細長いものである。このうち石室左右壁体腰石の前庭部側の１石はやや内側に突出して立てられており、玄門部の立柱石を意識したものと考えられる。これ以外の左右壁体腰石についてはほぼ直線的に揃っており、この玄門部に見立てた腰石より内側の空間を全て玄室と解釈すれば、玄室右壁長3.6m、左壁長3.4mを測る。玄門部より前面に羨道は付設せず前庭部の空間となるが、特徴的な点としてこの玄門部から左右に直角に開いて続く石積みが見られる。この石積みは天井石と同じ高さまで石垣状に積み上げられており、同様のものは横断道寺ヶ里遺跡の報告書中で「両袖外石積み」と呼称されている。腰石は奥壁に２石、右壁に３石、左壁に４石を配置している。このうち、奥壁側のものは左壁寄りに幅約1.1m、高さ約1.4mの隅丸長方形の大型石材を縦位に立て、右壁寄りに幅約0.4m、高さ約0.9mの小型の石材を立てているが、両





※a、b-b'：墳丘下土器出土地点

Fig.102　ＳＴ040古墳墳丘測量図（1：200）

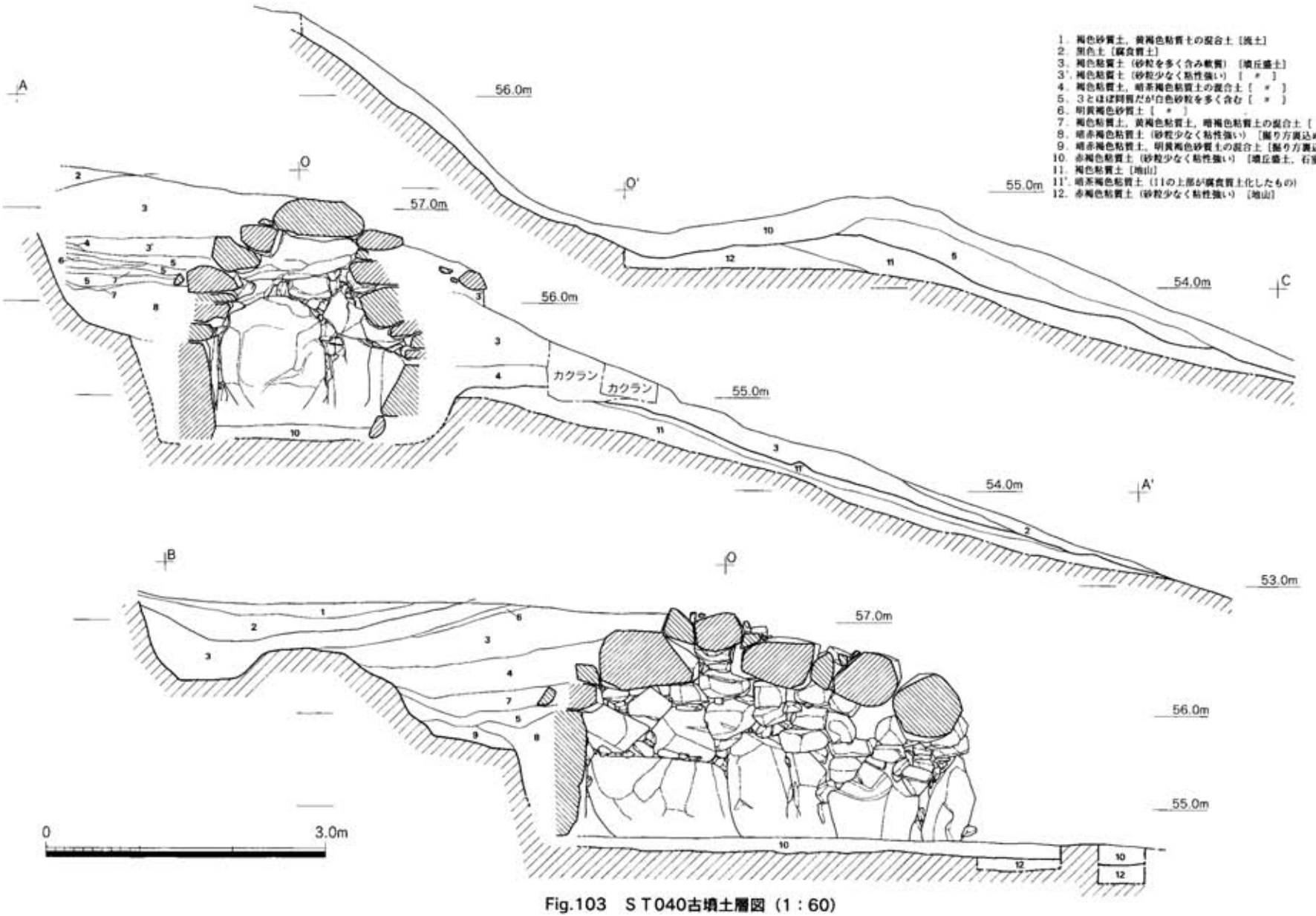


Fig.103　ＳＴ040古墳土層図（1：60）

者の高さの違いは西から東に傾斜して下る石室掘り方上面に揃えたものである。左右壁の内、右壁は奥壁側の１石を横位に立てて奥壁腰石と高さを揃え、玄門側の２石については縦位に立てて据えている。左壁については、玄門部の１石も含めて立てられているが、奥壁側の１石のみは奥壁腰石と上面の高さが揃う大型の石材を用いているのに対し、その他の３石については上面の高さ約0.9ｍに揃えられている。この高さは前述した通り、石室掘り方のテラス面と揃えられており、腰石石材の大きさの選択・立て方については、石室掘り方上面に揃えようとする意図が強く看取される。

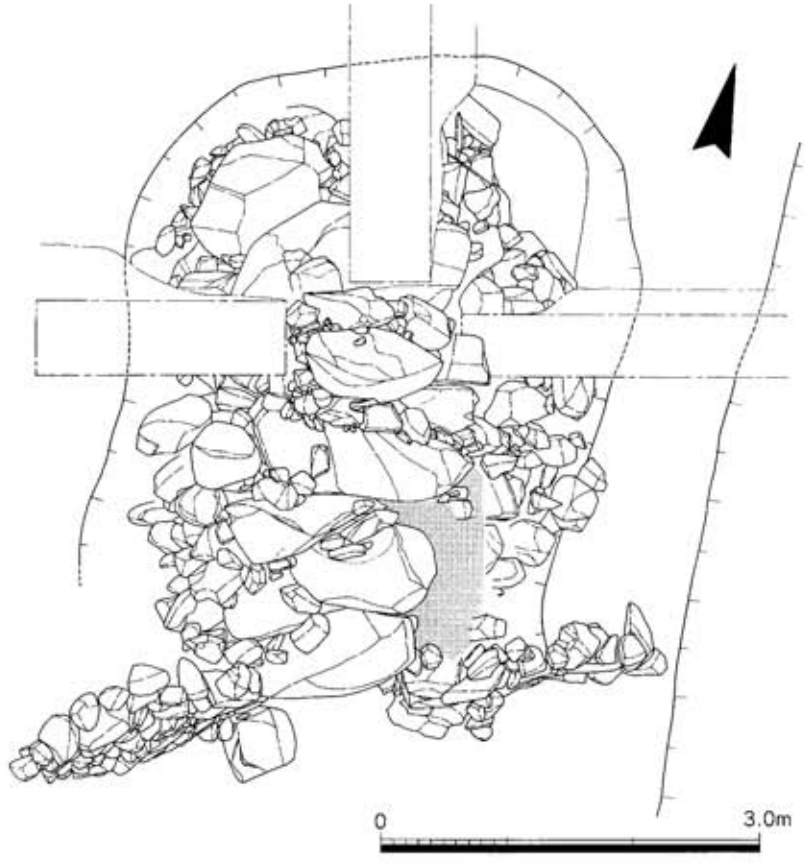


Fig.104　ＳＴ040古墳石室平面（1：60）

腰石上の壁体積み上げについてであるが、石室縦断面を見て特徴的なのは、玄門側・奥壁側のそれぞれから石室中央に向かって天井高が高くなっている点である。特に前壁側からは左右壁の１段毎の積み上げに合わせて天井石を１段ずつ高く持ち送っており、最も石室天井高が高くなるのは石室中央からやや奥壁よりの位置で、床面からの高さは1.9ｍを測る。左右壁からの持ち送りも顕著で、腰石のみを直に立て、そこから石室中心に向かってきつく持ち送っており、結果的に天井石は幅１ｍ程と石室幅に比較して相対的に小型の石を架構している。なお、左右壁体に用いられる石材はその大きさはやや不揃いながら、基本的には平たい石の小口面を石室内部に向けており、左右に目地が通ることから１段ずつ面を整えながら積み上げが行われたようである。

石室内では敷石が良好に遺存していた。これらは全く撹乱を受けた様子は見られず、少なくとも敷石をひっくり返してしまうような盗掘は被っていないものと考えられる。敷石は大きさ0.2ｍ前後、大きなもので0.4ｍ前後の花崗岩角礫を敷き詰めたもので、上下の重なりはなく、平面的にも区画された様子も認められないため、敷き直しはなされていないようである。これらの角礫は谷筋から採集されたようなやや丸みを帯びたものや、より大きな礫を破砕したように角が真新しいものなど様々であるが、相対的には前者の割り合いが多いようである。なお、調査時には石室内部は灰褐色砂質土が天井部まで充満していたが、この砂質土は後述するように前庭部を完全に埋めていた土と同質である。これらは山側斜面からの流土が前庭部に堆積し、さらに閉塞石上部の隙間から石室内部に流入したものと考えられる。玄室床面の土層観察を行ったところ、閉塞石寄りの敷石直上には黒色腐食質土が厚さ0.1～0.2ｍ堆積し、そのさらに直上に間層を挟まず上述の砂質土が堆積している（Fig109）。玄室床面が埋まってしまう大きな理由として、雨水の染み込み等に伴い石室天井部から土が崩落して少しずつ埋まっていくことが考えられるが、本古墳はそれと異なり玄室床面が築造後かなり早い段階で一気に埋まってしまったこ

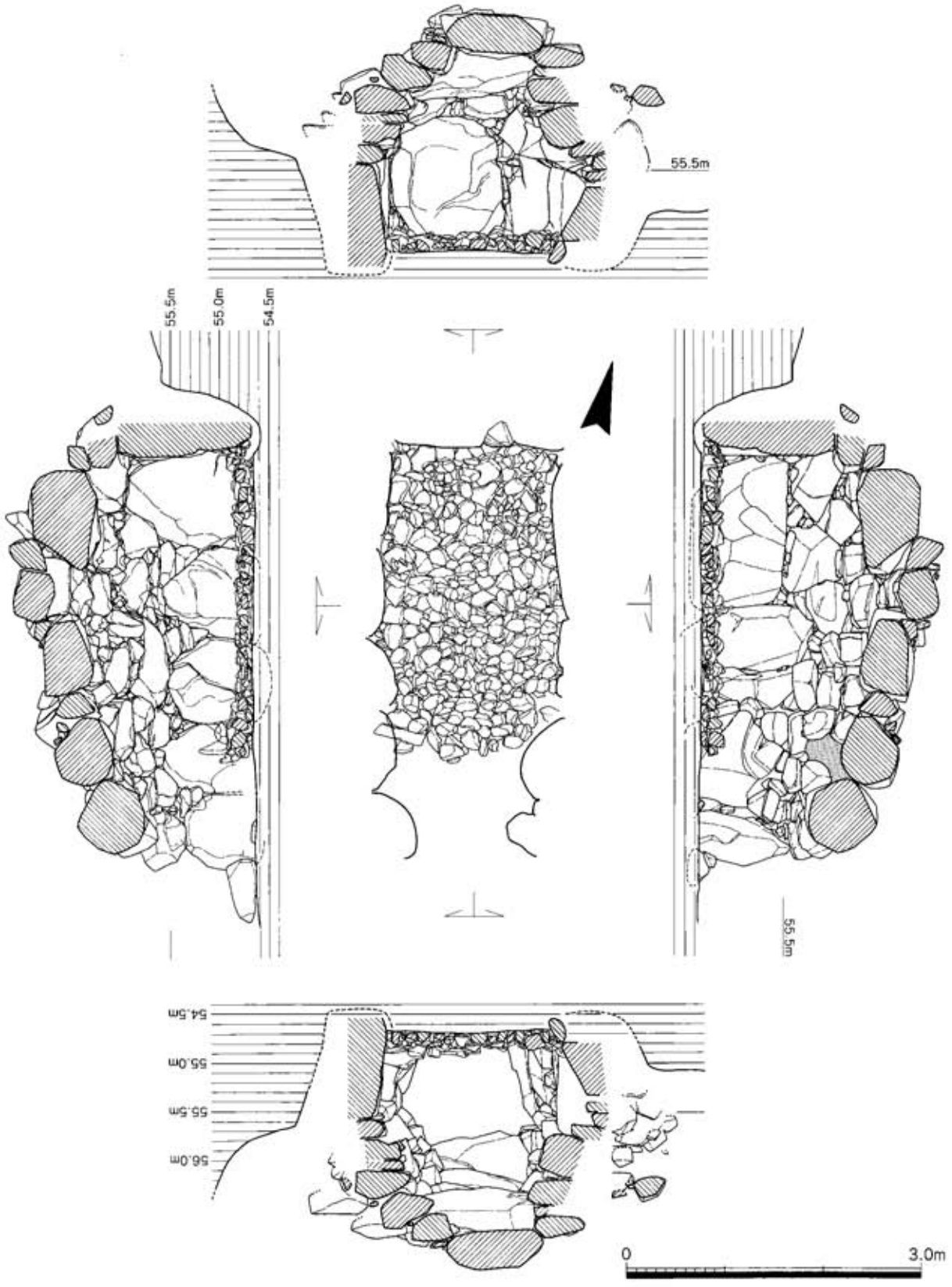


Fig.105　ＳＴ040古墳石室（1：60）

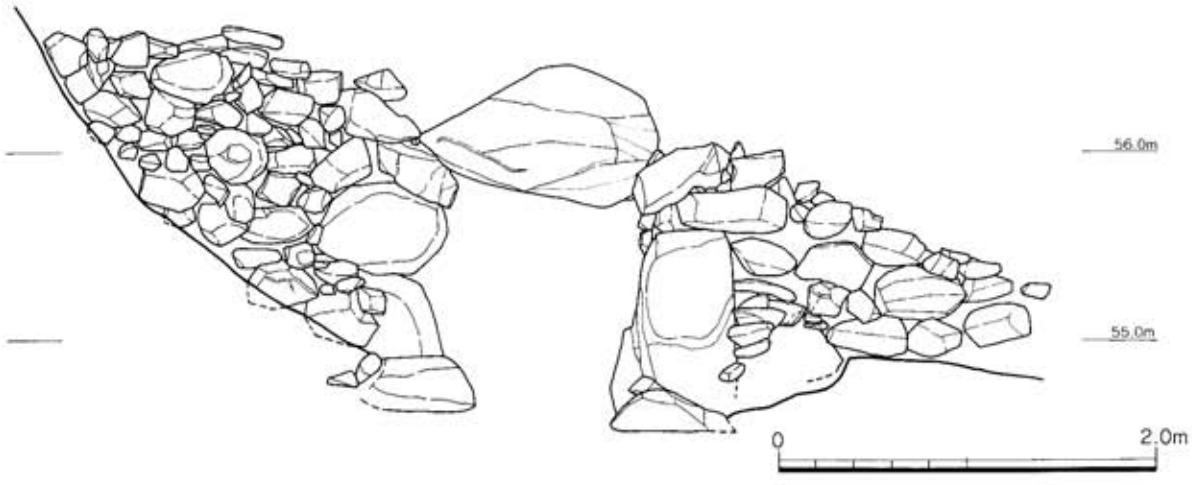


Fig.106　ＳＴ040古墳石室前面石積状況（1：40）

とが想定される。そこで、問題となるのは、石室内に流れ込みがあった際、閉塞石上部の隙間が既にあったかどうかという点である。このことはとりも直さず、最終埋葬後（追葬があったと仮定して）、再び閉塞石が開けられることがなく古墳が埋没したのかどうかということである。もし、前庭部に流れ込んだ土の勢いで閉塞石の隙間が生じたとするならば、石室内部に閉塞石に用いられた礫が相当量、落ち込んでいるはずであるが、調査の結果、石室内部への礫の落ち込みはほとんど確認されず、むしろ閉塞石の前庭部側に多く集石していた。また、玄室床面で検出された黒色腐食質土の堆積は、一定期間植物が繁茂していた状況を示しており、その間、石室が開口していたことを裏付けるものである。よって、石室埋没までの過程を整理すれば、①石室に最後の埋葬が行われ、閉塞がなされる、②閉塞石の上部が外側より外される、以後一定期間そのまま放置される、③山側斜面からの流土により前庭部が埋没、同時に流土は閉塞石上部の隙間より石室内に流入する、と大きく３段階に整理される。なお、この②の段階における閉塞石の除去が盗掘行為によるものか否かという点については、前述したように玄室床面が全く撹乱を受けていないこと、あるいは古墳の埋没自体が、古墳築造後少なくとも中世に下らない短い期間内に起こったと推定されることから、盗掘によるものではないと考えている。

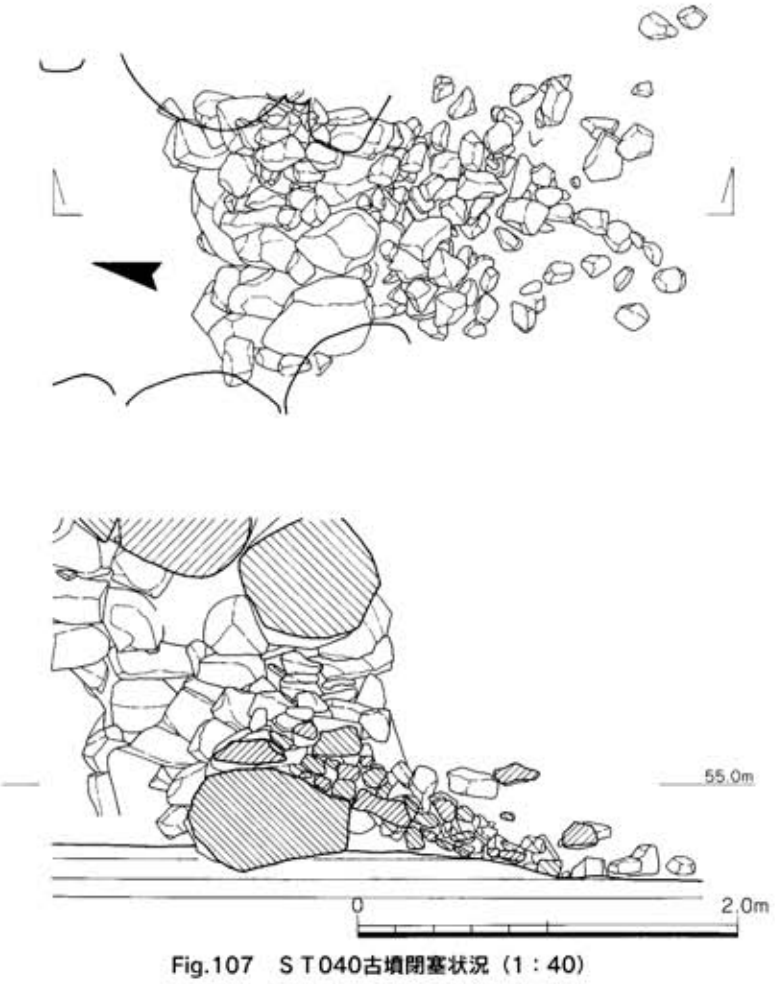


Fig.107　ＳＴ040古墳閉塞状況（1：40）

よって、②については、埋葬に伴う何らかの行為の一環として埋葬後に再び閉塞石が開けられた、つまりは石室内部に入る必要があったものと解釈したい。

石室内部からの出土遺物については右側玄門寄りの敷石の間から耳環1点のみが出土している。

なお、玄門部から左右に続く石垣状の石積みは、右壁側で4段、左壁側で8段が積まれ、その下面は地山整形の横断面に、上面は墳丘盛土に合わせてある。この石積みは石室構築後に貼り付けたものではなく、石室構築の工程と並行して積み上げられていったことが明らかとなっている。おそらくは石室前面へ墳丘が流れないようする土留めを意図したものであるが、前庭部側から見た眺めは壮観なものがあり、装飾的な意図もあったものと想像される。

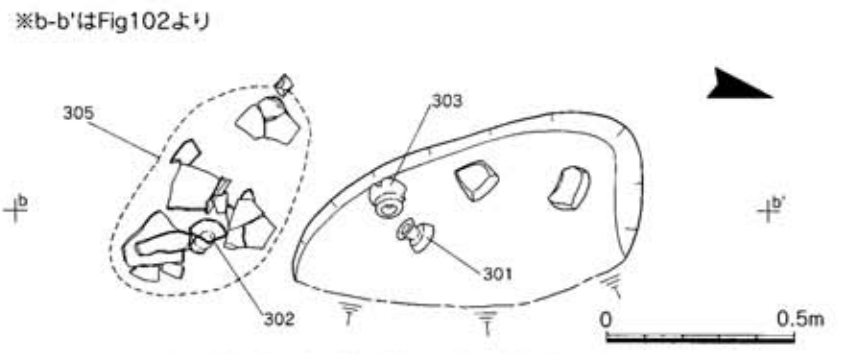


Fig.108　ＳＴ040古墳墳丘下土器出土状況（1：20）

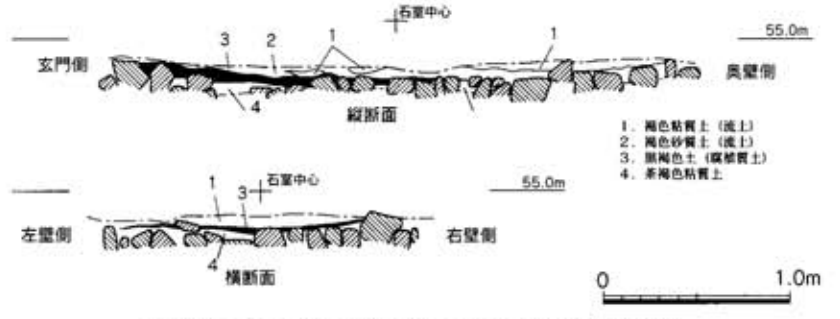


Fig.109　ＳＴ040古墳石室床面埋土堆積状況（1：40）

閉塞状況（Fig.107）　閉塞石は玄門部付近で確認され、玄門部外側から約1.2m内側の空間までを占めていた。閉塞石のすぐ内側には敷石の端部が来るが、両者が重なることはなく、この敷石端部と玄門の間の空間が羨道的な役割を持っているものと解釈される。閉塞石の最下部には大きさ0.8m、厚さ0.5m程のかなり大型の石が2石据えられ、その上に大きさ0.3m前後の礫を積み上げて行くが、これらの礫は長軸を石室方向と揃えてあり、前庭部側から隙間を埋めるように詰め込まれたものと推定される。このさらに上には大きさ0.2m前後の角礫が積まれたものと思われ、前述したように前庭部側に崩れて、検出時には閉塞石と石室の間に上下0.4m、左右1.0mの空間が空いていたのが確認されている。

前庭部（Fig.104）　本古墳では半円形に地山をカットした基底面の北寄りに石室を、南側は前庭部の空間となっている。この前庭部では玄門右側の石垣状石積みの前面付近で須恵器・土師器が集中して検出されている。これらは10個体程の杯蓋・杯身であり、接合関係にある破片が近接して出土している他、セット関係にあるような蓋・身が隣り合って検出されており、ほぼ供献された状態から大きく移動していないものと推定される。

土器群は前庭部床面に接し、厚さ0.05m程の黒色腐食土中から検出されており、その上には前述したとおり流れ込みである灰褐色砂質土が厚く堆積していた。この灰褐色砂質土中では0.1～0.2m程の間隔を持って黒色化した部分が幾層も確認されている。これらは砂質土の堆積の過程でその上面が腐食質土化した部分であり、流れ込みによる前庭部の埋没が一気に起こったのではなく、断続的な繰り返しであったことが分かる。

ＳＴ０４０出土遺物（Fig.110）

須恵器・土師器の他に耳環1点が出土している。土器類は前庭部で集中して出土したが、301～305は墳丘盛土下から検出されている。

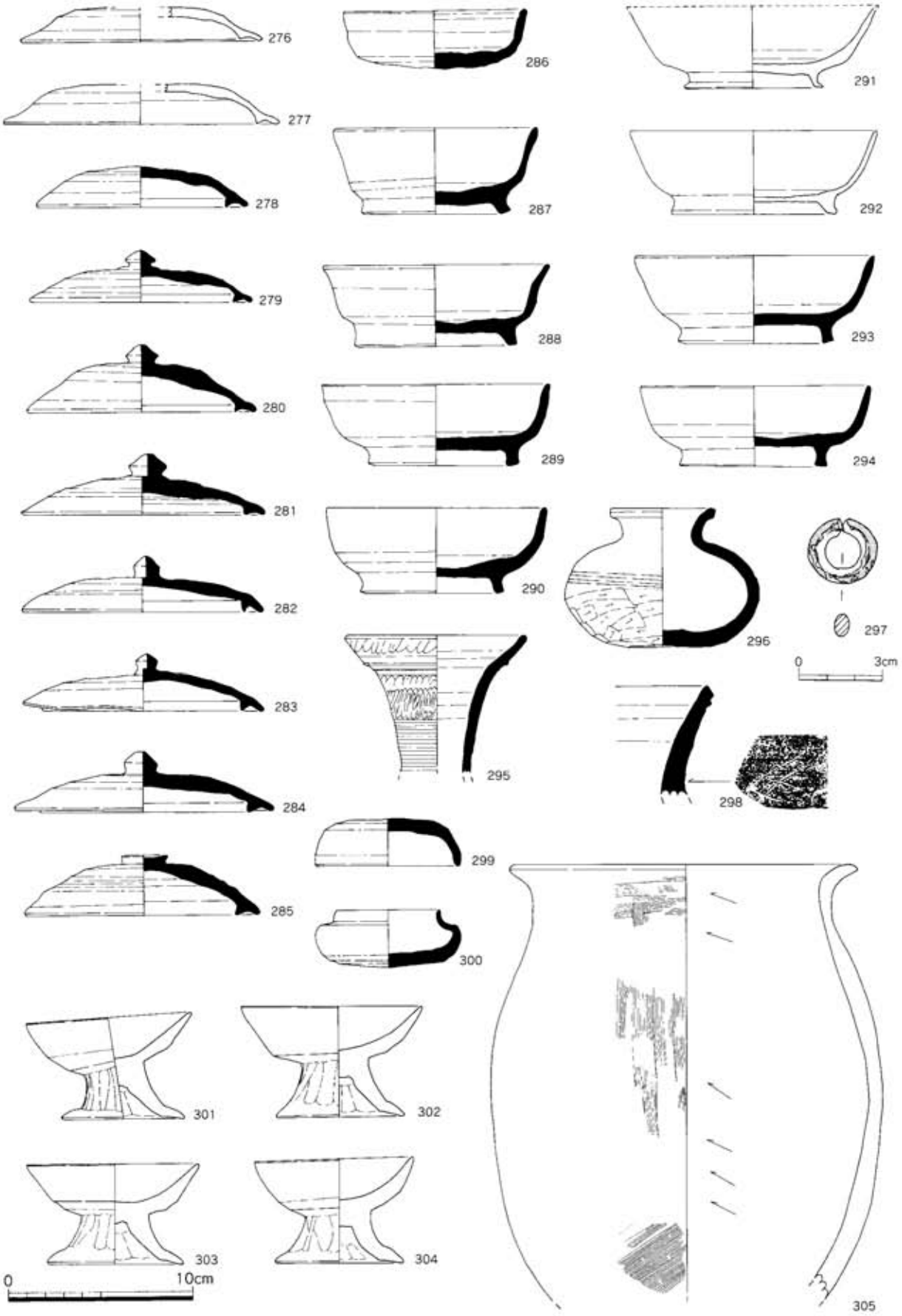


Fig.110　ＳＴ040古墳出土遺物（297は1：2、他は1：3）

278～296・300は須恵器。278～285は杯蓋でいずれも端部にかえりを持つ。全体の器形はやや丸みを持ち、かえりは受部より突出せずほとんど同じ高さとなる。278以外はつまみを持ち、279～284は宝珠様つまみ、285は扁平なボタン形である。286～290・293・294は杯身、286以外は断面台形の高い高台が貼り付けられ、器形はS字形をなして外反するもの（287・288）とわずかに内湾しつつ直線的に伸びるもの（289・290・293・294）に分かれる。296は短頸壺でほぼ完形、体下半部は静止ヘラケズリで整形され、さらにナデを行ったためかケズリの稜線が不明瞭となる。295は甕、298は平瓶の口縁部か。300は口径5.4cmと小型短頸壺で扁平な器形をなす。前庭部石室前面の土器集中箇所からだだ1点離れて、前庭部西側の壁面に張り付いたような形で出土した。299の蓋は前庭部土器集中箇所からの出土であるが、口径7.2cmと300の胴部径とほぼ一致し、合わせると合子状に収まる。色調・焼成具合は酷似し、本来はセットで製作された可能性が考えられる。276・277・291・292・301～305は土師器。276・277（杯蓋）と291・292（杯身）は前庭部土器集中箇所からの出土で、一緒に検出された須恵器杯蓋・身とほぼ同形態であるが、291の高台の形状はやや異なり、薄く接地面で外方に屈曲する。301～305は墳丘直下の旧地表面上から検出されたもので、高杯（301～304）と甕（305）の組み合わせから酒飲等による祭祀的な行為を想定させるものである。高杯は口径9cm前後、器高5.5～6.0cmで4点とも同形態、甕は浦田遺跡等の古墳時代住居跡から多く出土するタイプのもので、外面はハケメ、内面はヘラ状工具によるナデを施す。

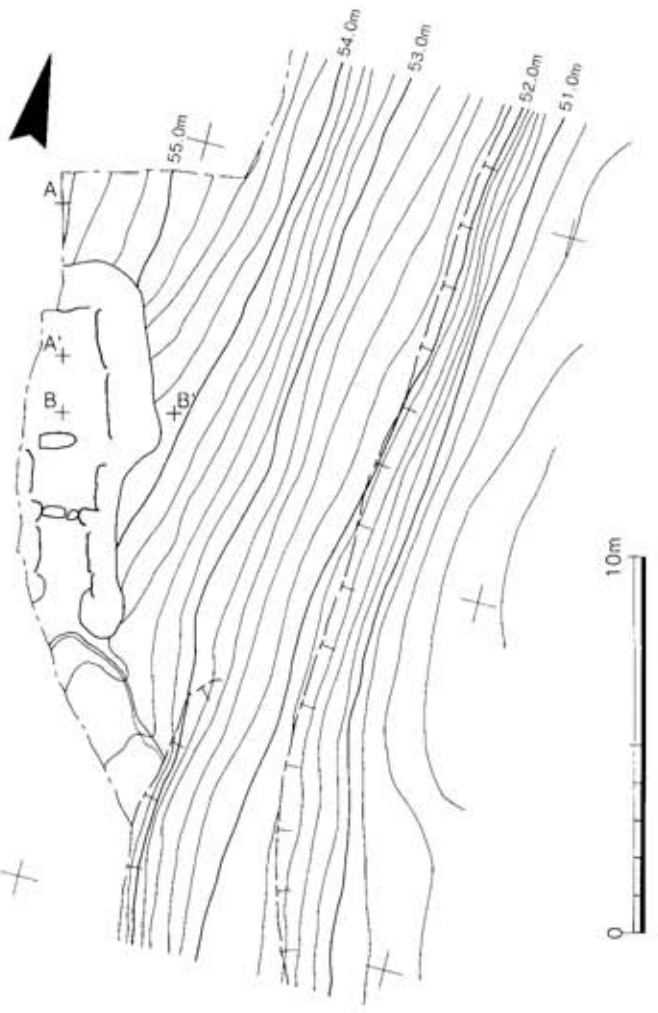


Fig.111　ST049古墳測量図（1/200）

297は石室内の敷石間からの出土した銅地金張りの耳環。直径2.5cmとやや大型のもので、太さも7mmを測る。306は石室床面の敷石に転用されていた局部磨製石斧、刃部は欠損し、さらに全体の半分に割れている。

ST049古墳（Fig.111～118）

墳丘・周溝（Fig.111）　調査区内南端付近、西側丘陵のほぼ尾根上に位置し、石室自体は頂部から僅かに下った東側斜面上に位置する。全体が地山面に至るまで蜜柑園造成により掘削を受けており、墳丘については全く遺存していない。石室についても腰石上の壁体もすべて失われており、調査時には古墳の存在そのものも全く窺えなかったが、地権者が造成の際、古墳を破壊したことを記憶しており、該当すると思われる地点の表土を除去したところ、石室の残欠のみを確認した。古墳の範囲はさらに西側に広がるものと思われるが、ST040と同様、すぐ西側を農道が走ることから、安全面に配慮し、石室プランを確認できる程度までしか調査区を拡張していない。

なお、周溝は全く検出されておらず、墳形・規模については詳細不明である。

内部主体（Fig.112～114）　石室は複室両袖型の横穴式石室である。石室主軸方位はＳ－18°－Ｅで南に開口する。

表土剥ぎを実施する前までは完全に蜜柑畑に埋没しており、石材等も確認されていなかったが、調査の結果、石室の腰石より上の部分が完全に削平され、石室内を埋め立てて畑を作っていたことが明らかとなっている。石室上部のやや西寄りには農道が南北に走っており、かろうじて農道に影響のない部分を掘り下げて石室を検出したが、石室左壁側については直上に農道があたるために掘り下げを行っていない。よって、玄室左壁については完全に農道下になるため未検出であり、特に玄室幅については不明である。

石室掘り方は腰石に沿って巡り、玄室では腰石から0.5m程の空間があるが、前室から墓道にかけては最下段の石とぎりぎりの幅に掘られている。

石室全長は約7.5m、玄室平面形は長方形、前室はほぼ正方形で、開かずに直線的に伸びる羨道を付設する。前述のとおり玄室幅については不明であるが、框石の配置から石室中軸についてはほぼ明らかであり、それから折り返して推定すれば、玄室奥壁でほぼ2.2m程度と考えられる。同様に玄室前壁で折り返すと2.5m前後となってしまうが、おそらくは歪みによるものであり、玄室の平面形としては長方形である。右壁長については、右側玄門袖石が失われていることからはっきりはしないが、抜き取り痕からほぼ３ｍと推定される。玄門袖石は左壁側については抜き取れており、かろうじて大型の石材１石による框石のみが残り、玄門幅については約1.2m前後を測る。腰石は右壁に幅約1.7mとほぼ同じ幅の大石を横位に並べ、前壁側の腰

Fig.112　ＳＴ049古墳石室平面（1：60）

石上にはさらに同程度の大きさの石を同じく横位に積み上げている。奥壁には高さ約１ｍの大石が見られ、幅は未確認であるものの、おそらく鏡石状に奥壁幅いっぱいに立てられているものと推定される。

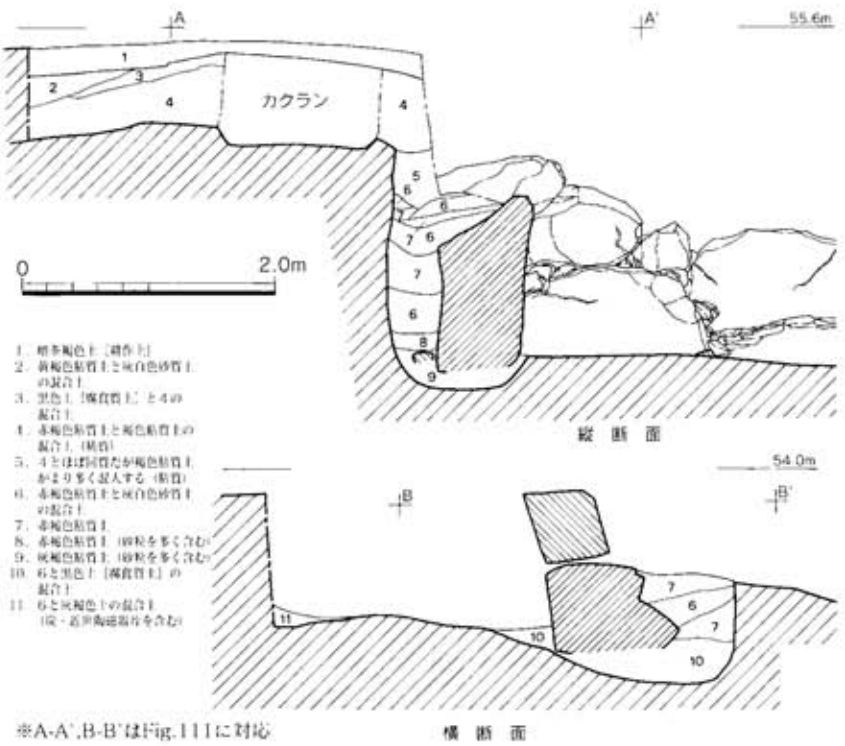


Fig.113　ＳＴ049古墳土層図（1：60）

前室は左右壁の腰石の他、前門部の袖石が左右共に遺存しており、その規模については右壁長1.4ｍ、左壁長1.3ｍ、玄門側の幅2.0ｍ、前門側の幅1.9ｍを測る。左右壁はいずれも１石ずつを横位の据えて腰石とし、二段目としてこれよりやや小さな石をさらに横位に重ねたものが確認されており、玄室も含めて腰石上の壁体は、腰石より極端に小さな石を積み上げたものではないようである。調査区内で類似の積み方が見られるものとしては、浦田古墳群１区ＳＴ001などが上げられ、例えば戦場ヶ谷遺跡２区ＳＴ004のように各壁に大型の石材１枚ずつを縦位に配置し囲むように空間を造り出すものとは大きく異なる。なお、前門部の袖石は左右いずれも１石ずつを立柱石として配置し、その上面は前室左右壁２段目上面と目地が揃えられている。また、框石は玄門部のそれと比べて格段に小さく細い石材を用いており、前門の幅は約１.0ｍである。

この前門部外側には羨道が接続するが、現況では最下段の石のみを確認しており、右壁で２石、左壁で１石分のみが遺存する。このうち、左右壁とも前門に近い１石は玄室・前室と同じく腰石状に石材を横位に据えており、大きさについても前二者と大差ないものが用いられている。右壁についてはさらに墓道側に１石が縦位に据えられるが、抜き跡を観察したところ、右壁側ではさらに１石程度が配置されていたものと推定される。この場合、右羨道長は約3.0ｍと復元できる。

なお、石室床面は例にもれず徹底的に撹乱を受けていたが、須恵器・土師器の小片の他、馬具・鏃など鉄製品の残欠も検出された他、江戸時代の寛永通宝・永楽通宝・陶磁器片も出土している。

閉塞状況及び墓道（Fig.117）　閉塞石は前門部外側、羨道部で下部の石組みが遺存している。塊石積みで高さ0.4ｍ程度しか残っていないため積み直し等については不明であるが、閉塞石中からも鉄製品として鐙（360）、鞍金具（361）、鉸具（362）が検出されている。

墓道は羨道前面で浅い掘り方のみが確認されており、墓道は石室主軸と異なり羨門から谷側にあたる南々東に伸び、５ｍ程続いたところで段造成によりカットされている。墓道には腐食質土を多く含む黒褐色土が堆積しており、この黒褐色土中からは多量の土師器・須恵器片が出土している。

ＳＴ０４９出土遺物（Fig.116～118）

須恵器・土師器・鉄製品（武器・馬具）の他、不明青銅製品、江戸時代の銅銭・鉄銭が出土している。銭貨は

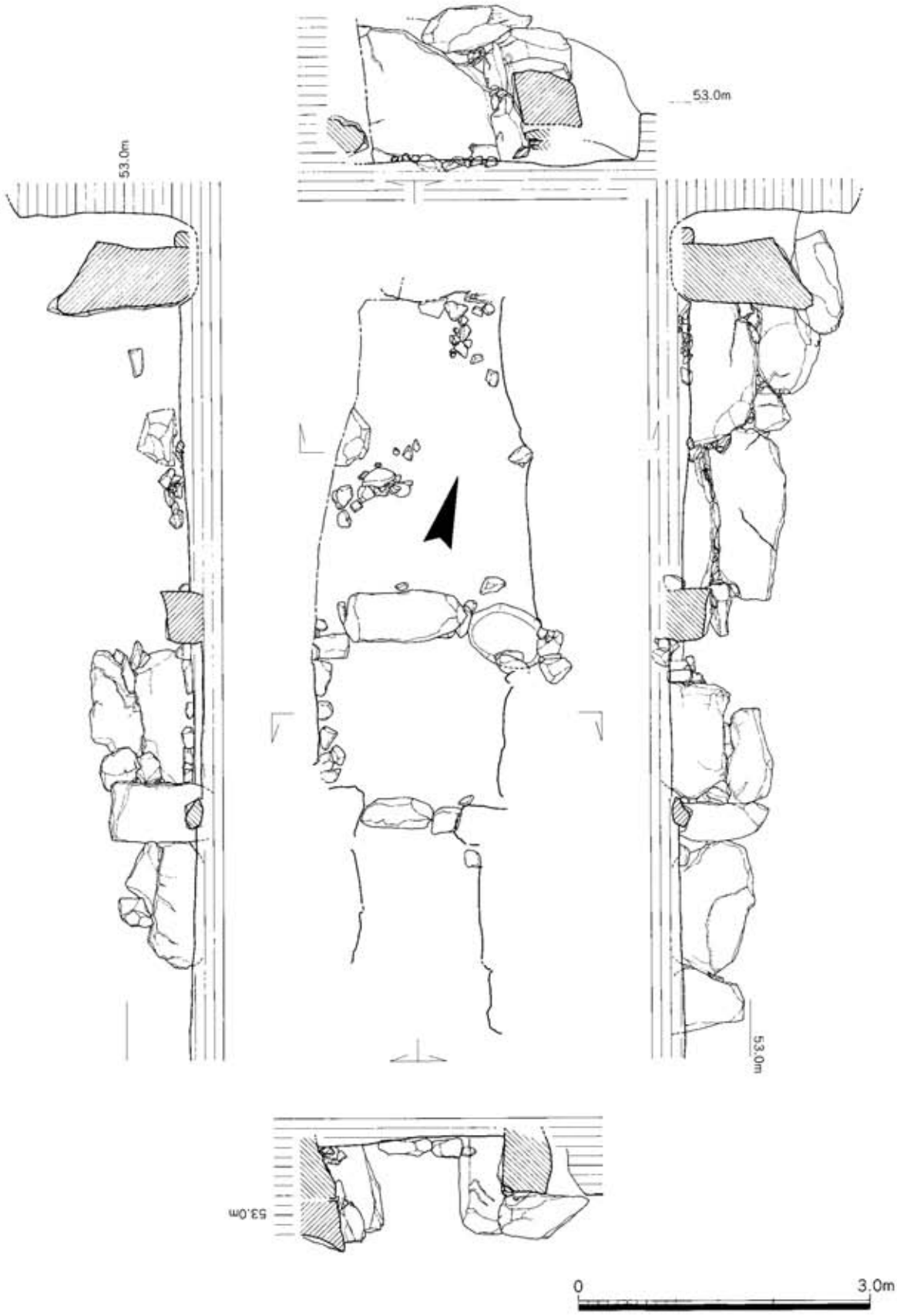


Fig.114　ＳＴ049古墳石室（1：60）

石室内からの出土、他は羨道から前庭部にかけて広く分布して検出された。

須恵器のうち、307～314・317～321は杯蓋、このうち307～309・313・310・314はかえりを持たないもの。口径で4つに分類され、307は口径13cm、308・309は口径12～12.5cm、310・314は口径11～11.5cm、313は口径10.5cm。311・312・317・318は端部にかえりを持つもの、311・312は口径8cm前後、天井部は丸みを持ち、かえりは僅かに下方に伸びる。311はボタン状のつまみを持つ。317は口径11.2cm、天井部は平坦でかえりは口縁端部を結ぶ線より下方へは伸びない。318は口径15cmと大型で体部は丸みを持つ。外面にはカキメを巡らす。319～321は口縁端部を折り曲げて下方へ短く伸ばすもの。319は天井部が丸みを持ち、320は頂部付近のみ平坦に、321は全体が扁平となる。つまみは319が宝珠状、320はボタン状、321は擬宝珠様。322～331・333・334は杯身、322～330はかえりを持ち、口径11～11.5cm前後のもの（322～327・330）、口径10.5cm程度のもの（328）、口径8.2cm程度のもの（329）に分けられる。331はかえりを持たず、底部は平坦、直線的に開く体部を持つ。口径約9cm。333・334は外方に踏ん張りぎみの高台を貼り付けるもので、333は口径9.5cm、口縁部はやや外反し、334は口径15.8cmで口縁部は直線的に開く。336・337は高杯、340は台付鉢。341は長頸壺、345～348は壺の胴部と思われる。343も長頸壺か。342・347は球形の胴部を持つ壺で、347は広口壺となり、胴部外面はタタキの後にカキメを巡らす。344は甑、339は大型甕の口縁部片。

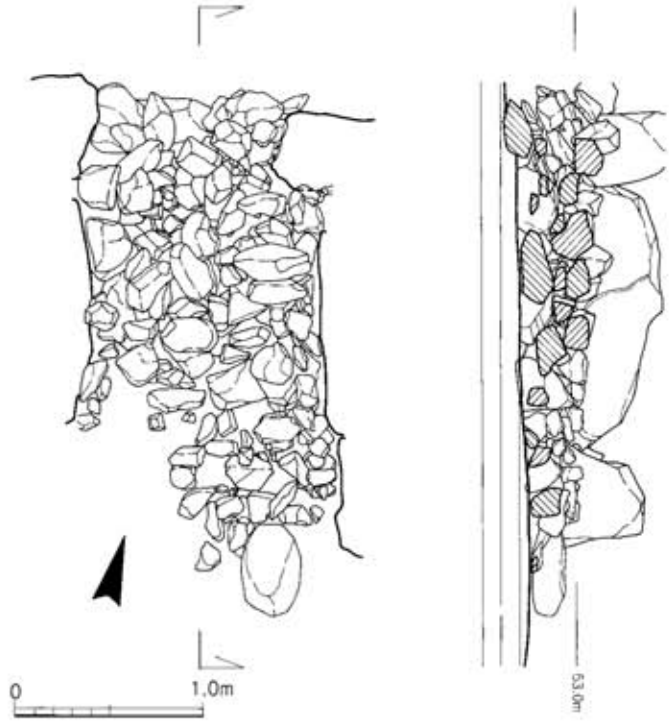


Fig.115　ＳＴ049古墳閉塞状況（1：40）

315・316・332・335・338は土師器。315・316は須恵器杯と同形態のもので口径8.5～9.0cm前後、かえりは口縁端部を結んだ線とほぼ同じ高さ。332はこれに伴う杯身。口径9.3cm。335は丸みを持つ体部の杯、外面下半部はヘラケズリを施す。338は脚付壺。

349～356・358・359は鉄鏃。349は関を持たずに広がって先端部をなすものか。350・351・358・359は斧箭式、359は三角形の透かしを持つ。353は鏃身部が三角形をなすものか。三角形の透かしが入る。352・354は尖根式の頸部、355は小型柳葉形。356は弓付属金具。357は青銅製責金具か。360～363は馬具。このうち360は鐙本体、361は鞍金具、362～364は鉸具で364は差し金。365～369は留金具、つくりは鉄地金銅張りで365・368・369では金箔が残存する。370は平面菱形の飾り金具、四隅に鋲が打たれ、鉄地金銅張りで一部金箔が見られる。371～373は江戸時代の銅銭で、371は「永楽通宝」、372・373は「寛永通宝」でいわゆる古寛永、374～378は同じく江戸期の鉄銭で、銭貨名は不明であるが、374は穴が円形で小さくもの、375は平面隅丸方形で「仙台通宝」か。

ＳＴ０５３古墳（Fig.119）

調査区内南端付近、尾根上に立地するＳＴ049の東側約20mに位置する。この尾根は一度急な傾斜を持って下

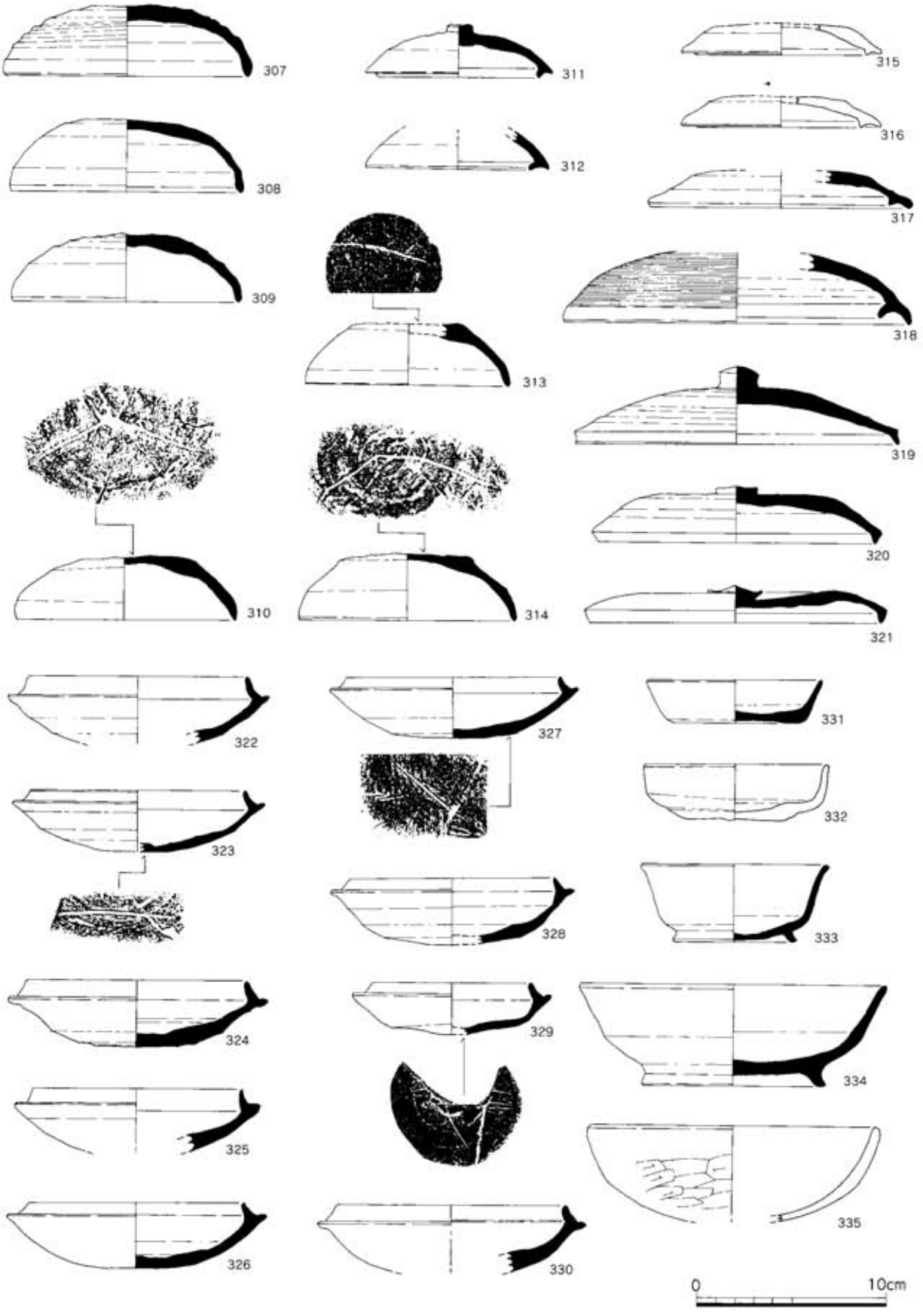


Fig.116　ＳＴ049古墳出土遺物１（１：３）

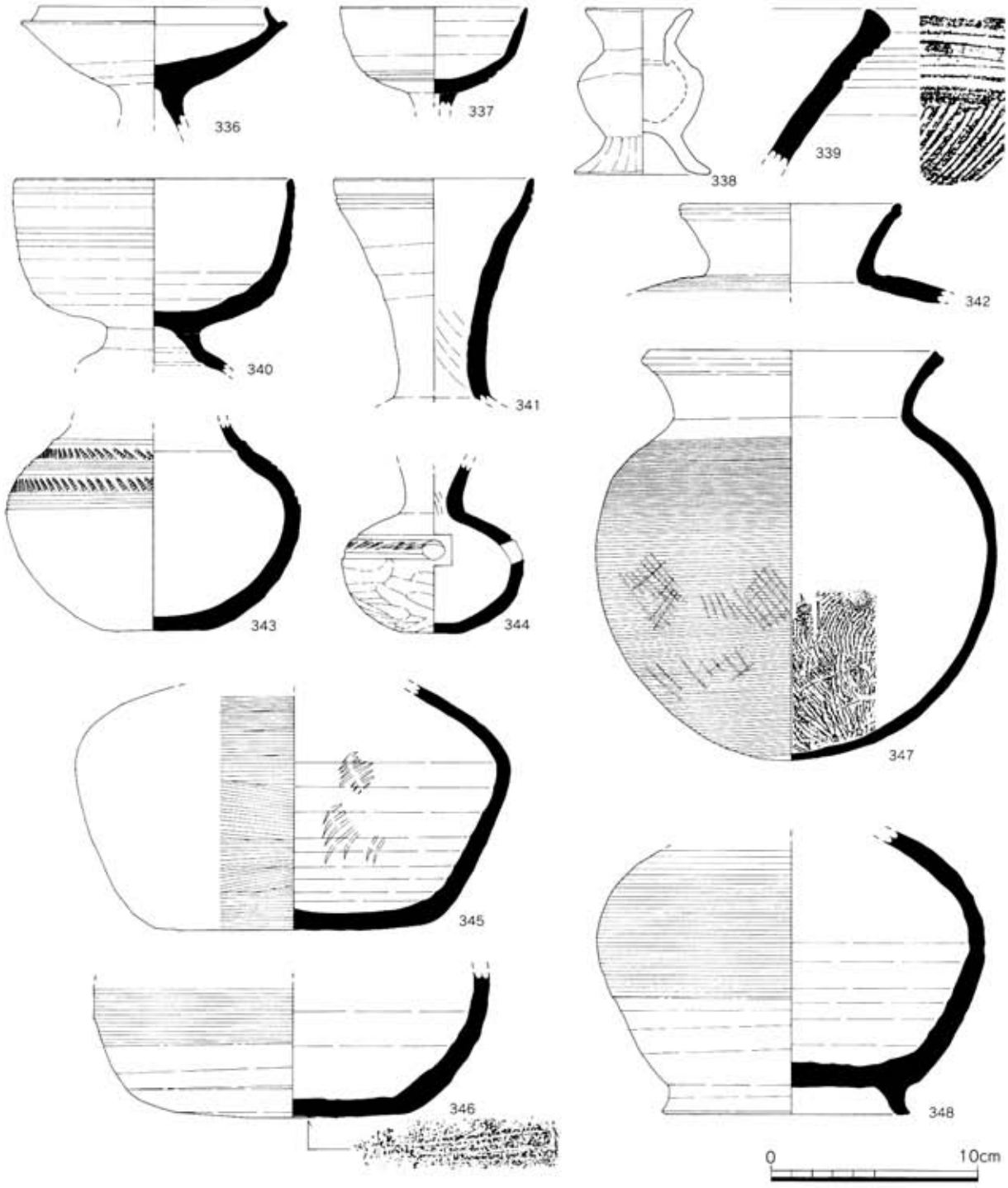


Fig.117　ＳＴ049古墳出土遺物２（1：3）

り緩斜面へと続くが、本墳はほぼこの緩斜面上に立地する。周溝西側一部のみの確認であり、内部主体を含む全体の東側2/3が蜜柑園造成の段下げによって失われている。調査段階では半月形にカーブする溝を確認し、形態・埋土の状況から古墳の周溝と判断した。土層観察では、溝が壁体の崩れなどによる流れ込みによりほとんど埋没した上部に奈良時代以降の遺物包含層と考えられる黒褐色砂質土が堆積しているのが確認され、古代にはほぼ埋まっていたものと考えられる。径復元を試みたところ、墳径８～９ｍ前後の小型墳が想定される。溝埋土中からの遺物の出土は見られず時期については詳細不明であるが、溝の断面形において墳丘側の地山の立ち上がり

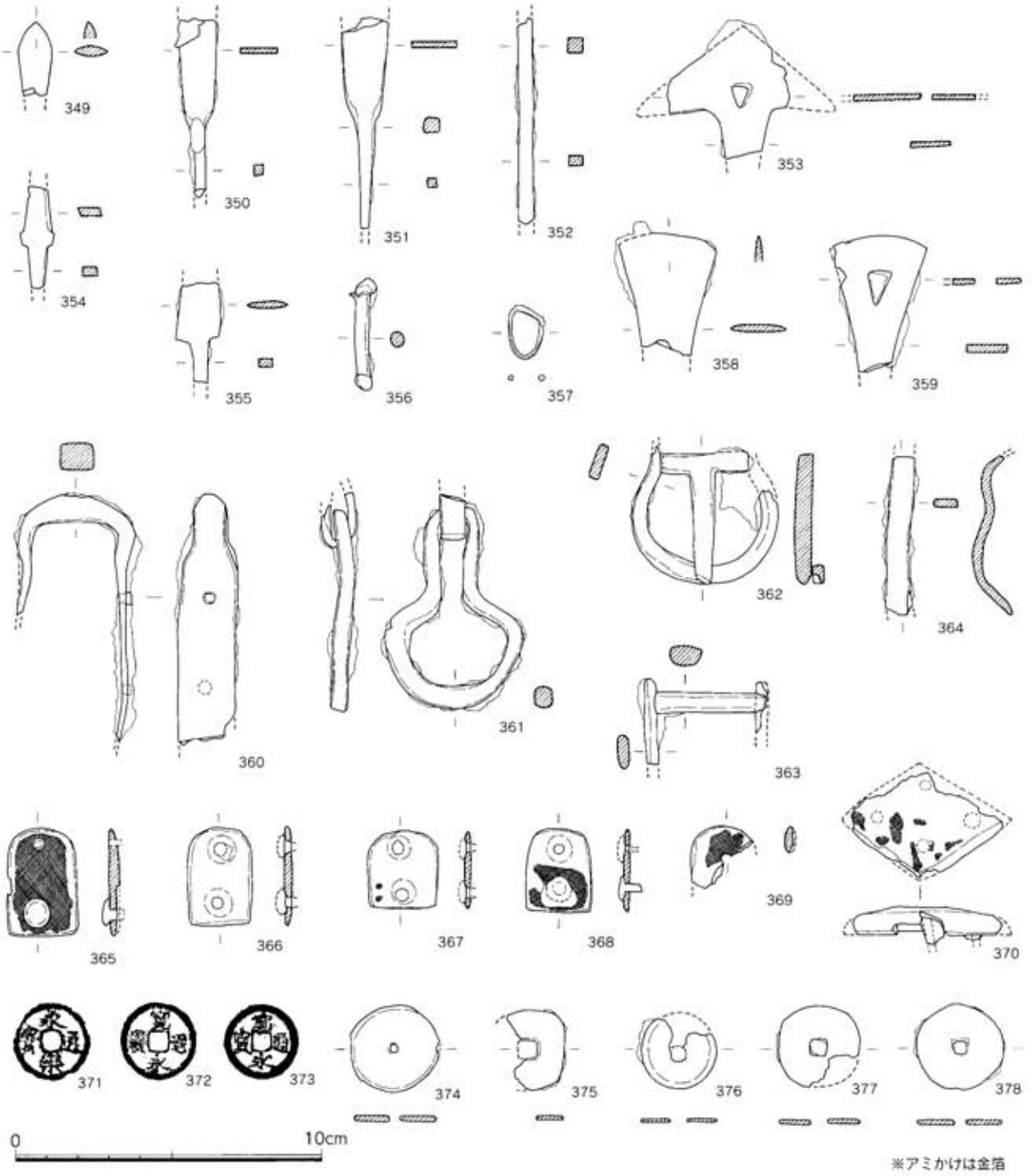


Fig.118　ＳＴ049古墳出土遺物３（1：2）

が緩やかで、墳丘復元径から考えても、終末期の小石室と言うよりは、石棺系石室あるいは竪穴系横口式石室・古式の横穴式石室を内部主体とする５世紀後半代の小円墳の可能性が高いと考えられる。

５．奈良～平安時代の遺構と遺物（Fig.122～126）

奈良時代の遺構として火葬墓と思われる集石遺構４基（ＳＸ035～038）と土馬・人形などの土製品が集中して確認された祭祀遺構ＳＸ054がある。

４基の火葬墓は調査区内やや南寄りで確認され、ＳＴ033ら４基とＳＴ049・053のそれぞれの小グループの間

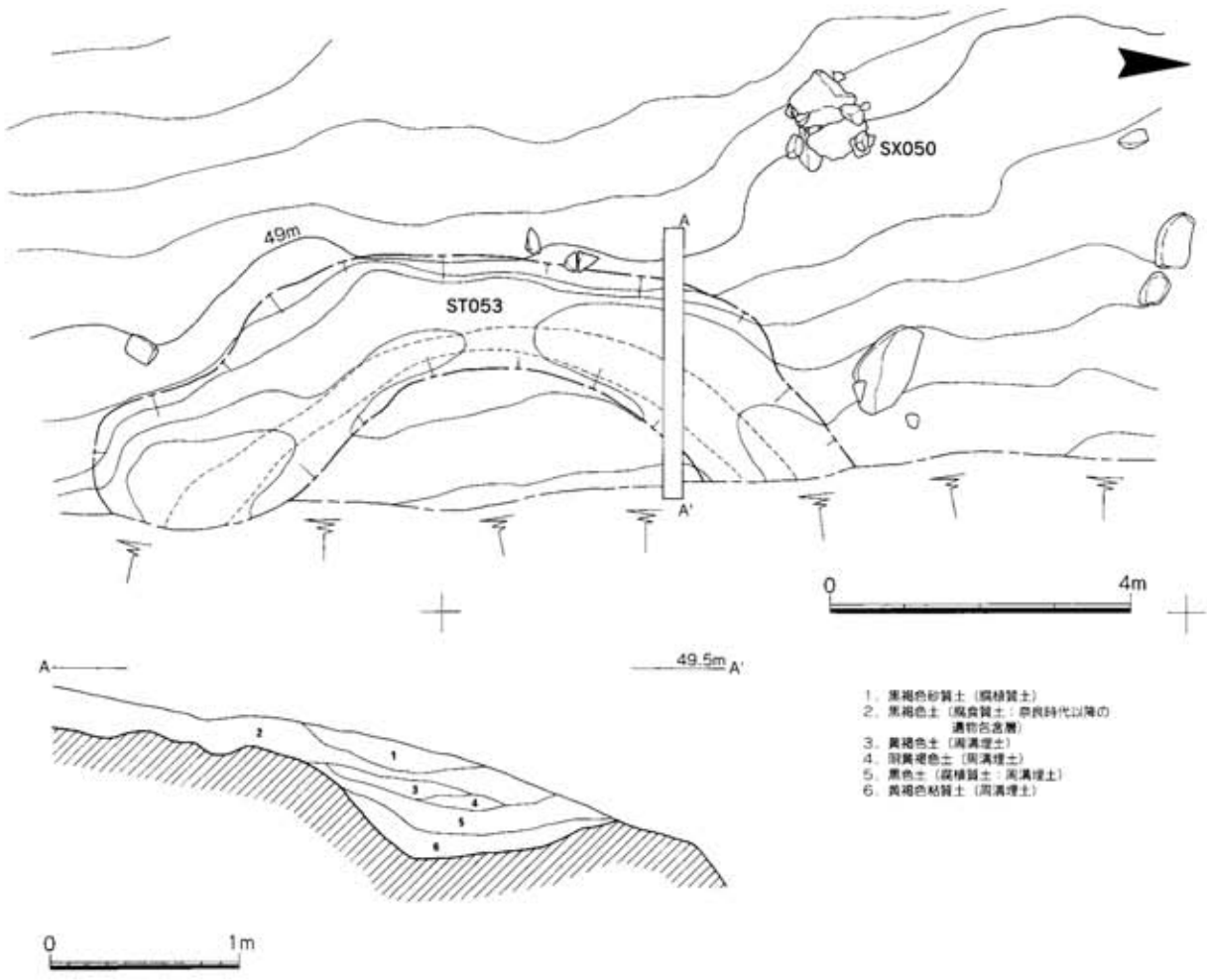


Fig.119　ＳＴ053古墳測量図（1：100）

の空間に、南北40m・東西25mの範囲で散在する。このうち、ＳＸ035は西側尾根上からの斜面が緩斜面へと変わる変換点付近に位置しているが、その他の３基は緩斜面上に立地し、調査区内でも最も標高の低い部分にあたる。火葬墓はそれぞれ一定の間隔を空けて分布しており、相互に15mから17mの間隔を持つ。緩斜面に立地する３基は旧地表面である黒色腐食質土上に築造されているが、この黒色腐食質土上及び遺構上には灰砂褐色砂質土からなる流土が最大1.5m程堆積しており、遺構構築後、あまり時期を置かない内に埋没してしまったものと推定される。よって遺構のうち、ＳＸ036・038などは集石のほとんどがほぼ良好に遺存しており、ＳＸ037についても原位置にあるものは数石であるものの、すぐ近接して集石を構成していたと思われる礫が散在しており、大きな撹乱は被っていないようである。以下に遺構毎に概要を述べる。

ＳＸ０３５火葬墓（Fig.120）

傾斜角20度の比較的急な斜面に立地する。表土剥ぎの際、ほぼ完形の須恵器短頸壺が検出され、内部に骨片と炭化物を含む土が充填されていたことから、蔵骨器を伴う火葬墓と判断した。上部を削平された上、蜜柑の植樹壙と重複するため遺構の残りは悪く、蔵骨器を埋納していたと思われる楕円形の浅い掘り込みを検出したのみである。掘り込みは長軸0.8m、短軸0.7m、深さ約0.1mで、内部には地山の一部である茶褐色粘質土と炭化物の混じった土が見られた。須恵器短頸壺はこのほぼ上面から出土したが、さらに埋土中からは土師器の杯・皿の破片が検出されており、短頸壺の蓋として用いられたもの以外に供献品として用いられたものも含むと思われる。

ＳＸ０３５出土遺物（Fig.120）　土師器の杯・皿、須恵器の短頸壺が出土している。379・380は土師器の杯、平底に直線的に開く体部を持つもの。底部底面はヘラケズリ後ナデ、その他の部位はナデである。381は土師器の皿、底部は回転ヘラケズリにより平らに整形され、体部は直線的に開く。382は須恵器の短頸壺、ほぼ完形である。口縁部は直口し、胴部は肩が貼り、胴下半部はやや内湾しながら底部へと続く。底部には踏ん張りぎみに短く開く高台を貼り付ける。また、調整は胴部肩部より下位は回転ヘラケズリ、その他はナデである。

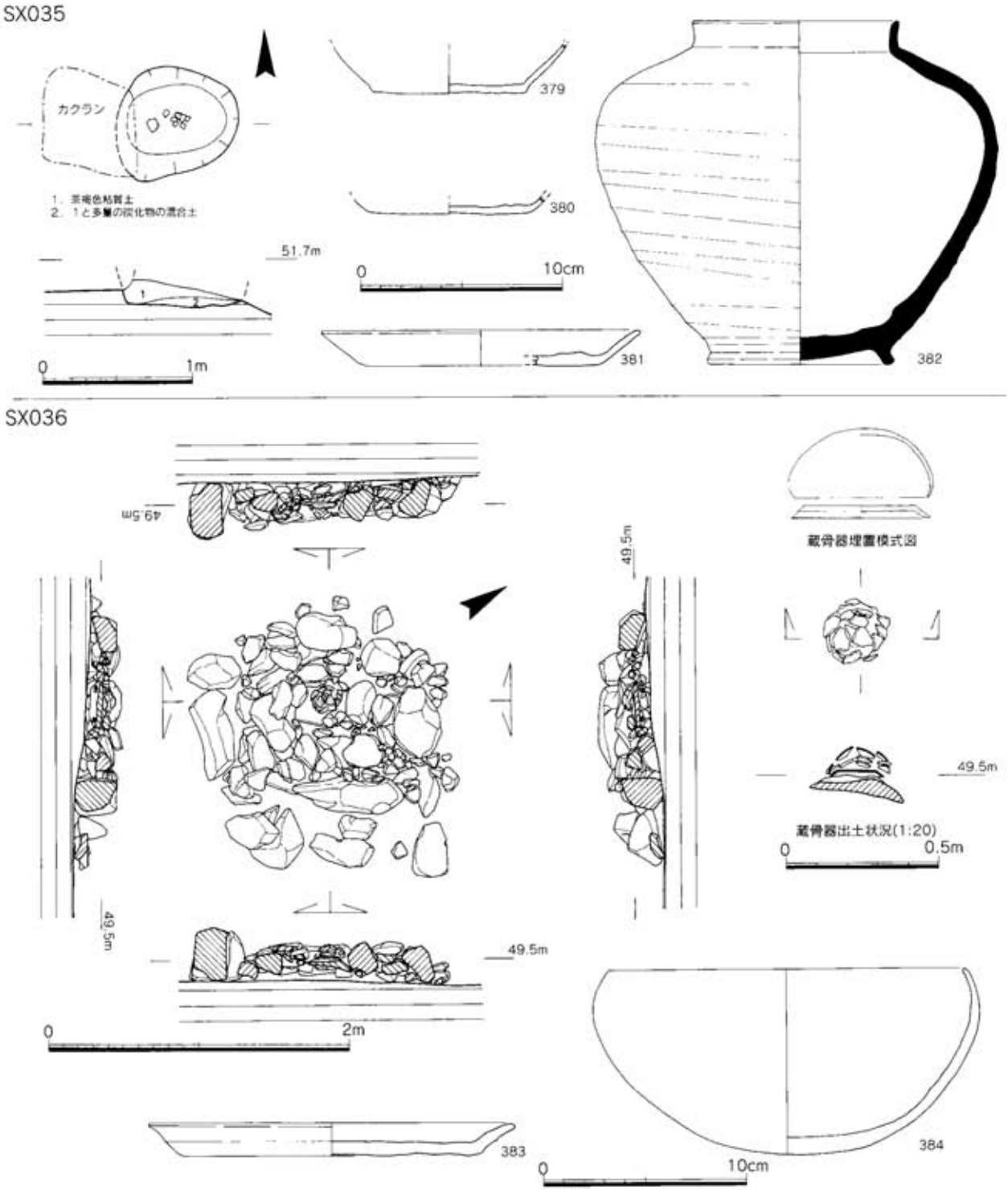


Fig.120　ＳＸ035（1：40），036（1：40）火葬墓及び出土遺物（1：3）

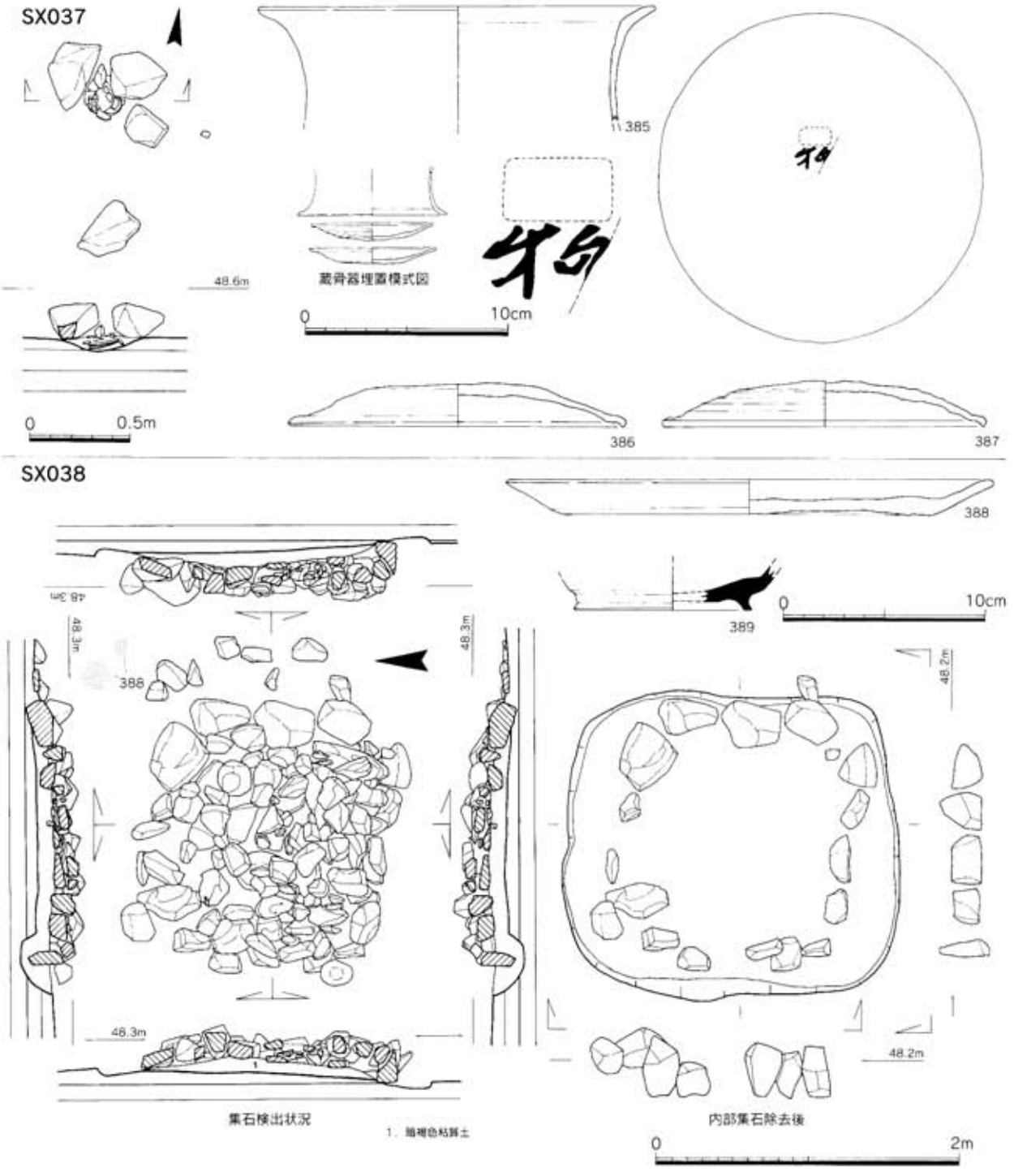


Fig.121　ＳＸ037（1：30），038（1：40）火葬墓及び出土遺物（1：3）

ＳＸ０３６火葬墓（Fig.120）

ＳＴ033の南東約15mの緩斜面上に立地する。平面ほぼ方形の石組みであり、北辺が約1.3m、東辺が約1.1m、南辺と西辺は一部石が外方に動いているものの、南辺は約1.3m、西辺は約1.1mを測る。石組みは旧地表面にそのまま置かれており、下部には掘り込み等は持っていない。石の配置の仕方としては、四周に大きさ0.4～0.5m程度の石を据えて方形の区画を造っており、特に南辺及び西辺には横長の石材を用いて辺としている。この区画の内部にはより小さな礫を詰め、さらに中心に一辺0.3m程の略方形の石を敷いている。この石の上では蔵骨器

と思われる土師器の鉢が検出されているが、その据え方は土師器皿の天地を逆にして石の上に置き、さらにこの皿の底面に鉢を逆さまに被せている。調査段階にはこれらは土圧により押し潰されていたことから、内部に充填されていたと推定される炭化物を含んだ土は集石内に四散してしまっており、骨片等については未確認である。また、蔵骨器の上部にどの程度石積みが行われていたのかという点については、集石周辺に散らばる石が極めて少ないことから、上方に高く積み上げるものではなく、蔵骨器を覆う程度の僅かなものであったと考えられる。なお、石材はすべて花崗岩の転石である。

ＳＸ０３６出土遺物（Fig.120）　蔵骨器として土師器の鉢・皿が出土している。383は皿で底面は平坦、体部は直線的に開く。底部底面は回転ヘラケズリ、その他はナデである。384は鉢で、器形は丸底の底部から内湾する口縁までが一体の球形をなす。調整は内外面共にナデである。

ＳＸ０３７火葬墓（Fig.121）

緩斜面上に立地する。谷部への流土により集石のほとんどが動かされたものと思われ、僅かに４石が確認されているに過ぎない。ただこのうちの３石に囲まれるように蔵骨器と推定される土師器の甕・蓋が検出され、火葬墓と認定した。検出された土師器のうち、二点の蓋は内面を上方に向けて重ねて置かれており、下部の地面を浅く掘り込んでいる。この蓋の上面で甕の口縁部片が出土しており、おそらく口縁部を下にして蓋に被せてあったものと推定される。なお、集石を中心にして炭化物を多く含む黒色土が広がって見られる。

ＳＸ０３７出土遺物（Fig.121）　土師器の鉢と蓋２点が出土している。385は甕、口縁部のほぼ全周が出土しており、強く外反する口縁部からほとんど膨らまない胴部まで屈曲せずに続く。器壁は３mm程度とかなり薄く、調整は胴部外面にヘラケズリの痕跡が一部確認されるのみである。386・387は杯の蓋で、ほぼ平らな天井部から直線的に開く体部へと続き、口縁部は一度段がついて、さらに端部を下方に僅かにつまみ出す。調整は天井部外面をヘラケズリ後ナデを施しており、板状圧痕も観察される。387の天井部外面の中央部では墨書が観察され、字体の判別は困難であるが、「物」と読めるようである。この字の上にはさらに僅かな墨のにじみが見られ、もう１字程度書かれているかと思われるが判別不能である。

ＳＸ０３８火葬墓（Fig.121）

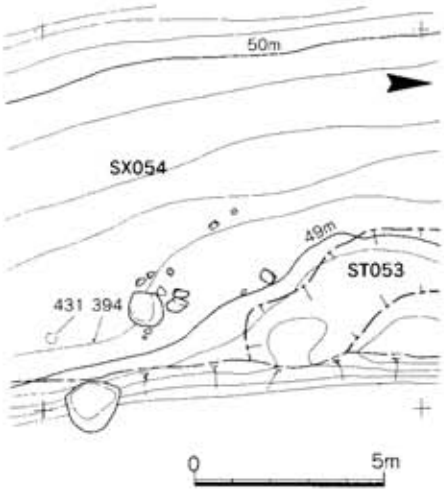
緩斜面上に立地する。平面形は整美な方形を呈し、各辺約1.6mを測る。同じく平面方形をなすＳＸ036と集石の構築法はほぼ同じであるが、旧地表面上にそのまま据えたのではなく、一度地表面を掘り下げて集石を行っている。この掘り方の平面形は集石より一回り大きな隅丸方形を呈し、南北2.2m、東西2.0mの規模を持つ。その深さについては0.05～0.1mと浅いが、一部石の大きさに合わせて深く掘り込む部分も見られる。集石の構築法としては、隅丸方形の掘り方の内部にＳＸ036と同様、石を並べて四周を囲むが、この際、横長の石を配置するのではなく、縦位に立てている点が異なる。この段階で掘り方内に土を搬入してこの立てた石をしっかりと据え、さらにより小さな石を四周に立てた内側に充填している。なお、集石内では蔵骨器と思われる土器は検出されていないが、集石北東隅から約0.5m離れた地点で土師器皿・須恵器杯身が検出されている。なお、ＳＸ036と同様、周辺部からは炭化物を多く含んだ黒色土が確認されている。

ＳＸ０３８出土遺物（Fig.121）　土師器皿、須恵器杯身が出土している。388は土師器皿、口径24cmと大型のもので、調整は底部外面がヘラケズリ、その他はナデである。389は須恵器の高台付き杯身の底部片。

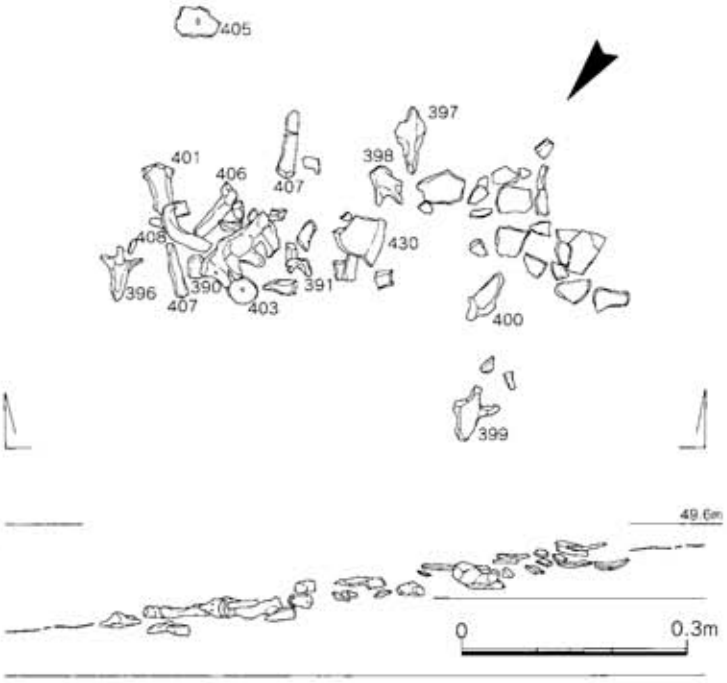
ＳＸ０５４祭祀遺構（Fig.122）

土馬、人形（ひとがた）、鏡を模したと思われる土製品等40点や土師器鉢がまとまって検出されたものである。

調査区南端部付近、ＡＮ19グリッドに位置し、標高約49.5m前後の緩斜面上に立地する。このＡＮ19，20グリッ



SX054 祭祀遺構周辺地形図(1:200)



SX054 祭祀遺構土製品出土状況(1:10)

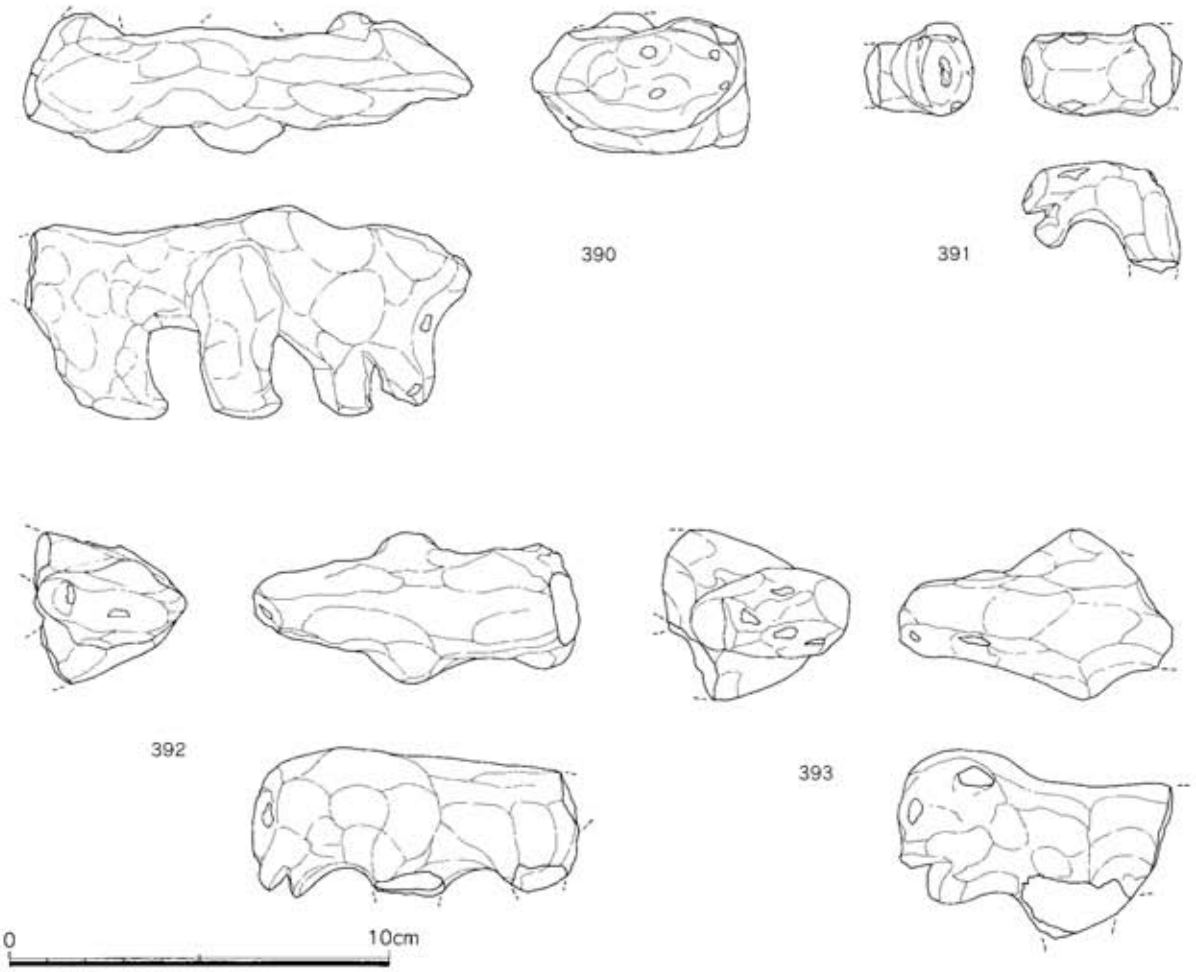


Fig.122　S X054祭祀遺構（1：10）及び出土遺物（1：2）

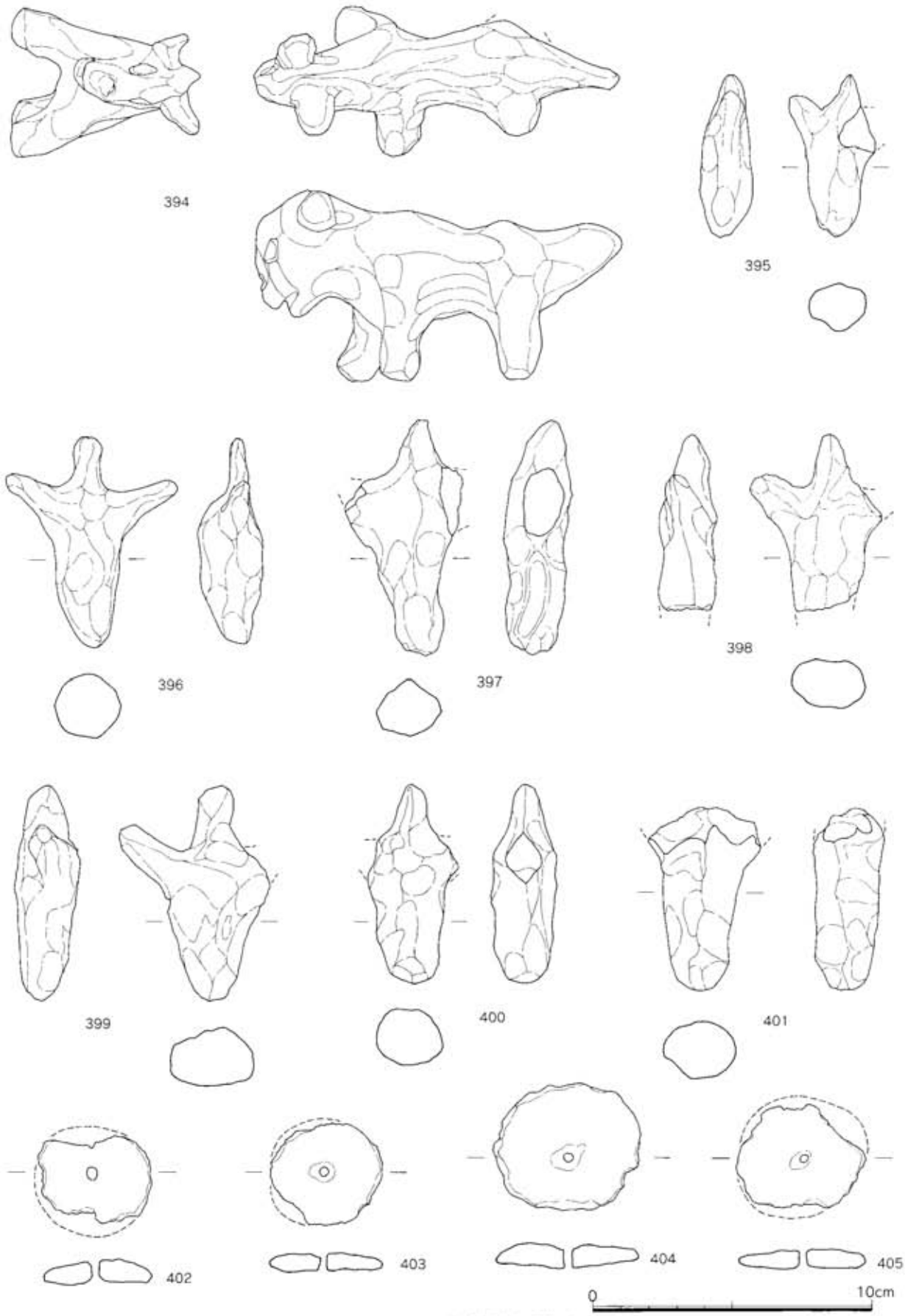


Fig.123　S X054祭祀遺構出土遺物（1：2）

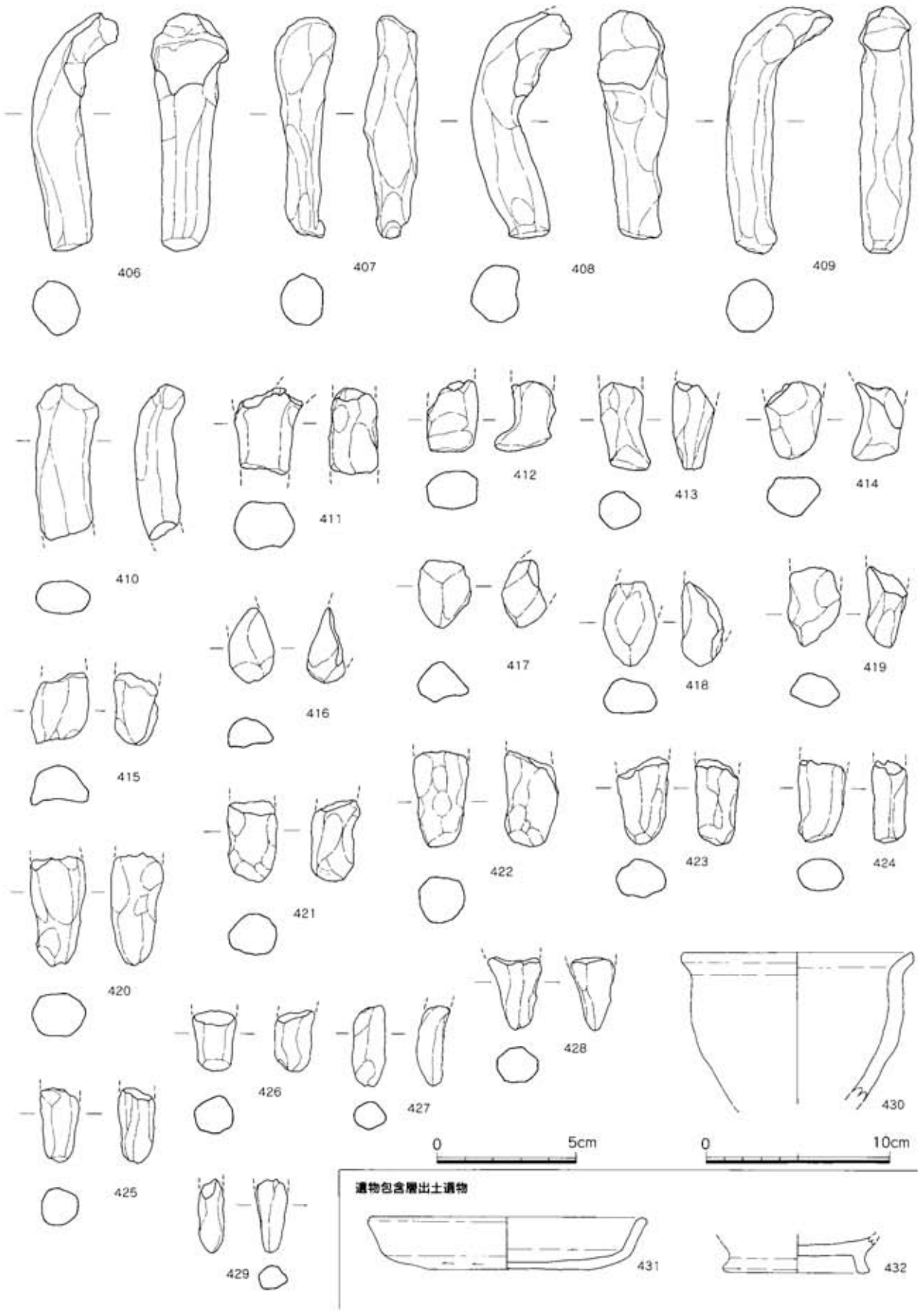


Fig.124　ＳＸ054祭祀遺構ほか出土遺物（430～432は1：3、他は1：2）

ド付近では表土である耕作土の下に黒褐色土からなる旧表土（Fig.119の土層２）が厚さ0.2m程で堆積しているが、掘削機による表土剥ぎの際、この旧表土上面から土馬１点（Fig.123—394）が表採された。その後、この黒褐色土を全面的に掘り下げて行ったところ、この土馬の表採地点より約５m西の地点から、土馬や人形・鏡形の土製品が集中して出土した。これらの土製品は全部で42点が数えられ、南北0.7m、東西0.4mの範囲に散らばるが、上下には余り重なりを持たず平面的に広がっている他、その分布の在り方にも規則性は窺えない。また周囲には掘り込み等も見られない。

土製品には土馬と思われるもの５体分、三叉状を呈する人形と思われるもの７点、鏡の模造品と思われる円盤形のもの４点、棒状土製品５点、不定形の小型土製品19点が見られる他、土製品と一緒に土師質の鉢１点が出土している。これらの土製品のうち、鏡形以外は不完全のものが多く、いずれかの箇所に欠損部を持つものがほとんどであり、相互に接合関係にあるものとしては、唯一、土馬（Fig.124—390）の右前足が見つかったに過ぎない。特に不明棒状土製品としたもの（Fig.124－406～410）は一見土馬の脚部かと考えられるものであり粘土接合痕と思われる面を明瞭に持つが、確認された土製品の中にはこれらと接合するものは全く見られなかった。遺構上部が後世に削平されたことを踏まえたとしてもこれだけ相互の接合関係が見られないことは、土製品をこの場所に置く前に意図的に壊された可能性が高いと考えられよう。なお、遺構の時期としては遺物の内容から８世紀代と推定しているが、その他、土馬（394）の採集地点から1.2m程の地点で、黒褐色土中から完形の土師器皿（Fig.124－431）１点が、地面に置かれたような状態で出土している。８世紀代の所産で遺構の概ねの時期を示す資料と考えて良いと思われる。

ＳＸＯ５４祭祀遺構出土遺物（Fig.122・123・124）　390～394は土馬と思われる。390は胴に比べて頭が大きいもので、前脚・後脚は短く太い。左側の前・後脚が粘土接合部分から剥離して失われており、尻尾の部分は欠損している。頭頂部は指でつまみ出しておりたてがみを、また右前脚・後脚の先端部も同様につまみ出してひづめを模しているようである。また、目・鼻はヘラ状工具の先端部のようなものを刺突することによって施される。全体の調整は指ナデである。残存長11.7cm。391は頭部のみの破片で、390と異なり小振りのものである。目・鼻は刺突によって作られ、後頭部に剥離痕が見られるため耳あるいはたてがみが貼り付けられていたものと思われる。392は頭部から胴部までくびれがなく続く寸胴形の胴部を持つもので、脚部を全て欠く他、尻尾部分も欠損している。頭頂部は僅かにつまみ出されている。393は頭部から肩部にかけての部分で、392と同じく寸胴形の体型をなす。頭頂部のたてがみは表現されていないが、ヘラ状工具の刺突によって耳が表現される。394は表土剥ぎの際、黒褐色土上面で確認されたもの。ＳＸ054からは約５m離れているが、本来的にはＳＸ054に伴うものが表土剥ぎの際、移動させられたものと考えられる。右後脚を表土剥ぎの際欠損してしまったが、その他の部分は良好に遺存する。頭部は390と比べると短く、特に目から鼻にかけての部分がかなり短くなっている。頭頂部は軽くつまみ出してたてがみとし、その両側には丸い粘土を貼り付けて耳としている。尻尾は大きく平たいもので、その大きさは普通の馬のイメージからするとかなり大きなものである。全長13.0cm、全高5.3cm、全幅6.9cm。395～401は太く短い粘土紐の一方に三叉状の突起を貼り付けるもの。両手を広げた人物を模した人形と推定している。ただ、このように上半身の表現だけで下半身を省略するタイプの土製品については類例を見出せていない。396のみ完形で、他は突起部分のみ欠損するものが多い。意図的な破壊も考慮する必要がある。402～405は円盤形のもので中央部に穿孔が施される。鏡を模したものと推定される。直径は4.0～5.4cm。406～410は棒状の長いもので、411もこれに含まれる。406・408・409は図中下端に端面を持ち、上部は湾曲してその内側に粘土の接合面を持つ。形態は動物の脚部を思わせ、粘土接合面で胴部と接合すると考えればその性格について理解しやすい

が、これに接合する部分も出土しておらず、詳細不明である。407も同様に図中上端に接合面を持つが、全体の形状は湾曲せず直線的である。407・409の下端部は僅かにつまみ出され、ひづめの表現か。412～429はより短い棒状の土製品。この内、412～414は図中下端部がつまみ出されるもので動物の脚である可能性が高い。415～429は特に性格不明のものである。415～419は不定形で斜め方向に粘土接合面を持つが、420～429はほぼ円筒状で、体部の横断面方向に接合面が見られる。両者の中には土馬などの動物形土製品の脚・尻尾などを含む可能性が考えられるが、今回出土した土馬に接合するものは見られなかった。430は土師器の小型鉢で、底部付近を欠く。口縁部はくの字形に屈曲し、体部あまり膨らまずに底部に向かってすぼまる。手捏ね風で成形は荒い。なお、390～429の土製品はいずれも土師質で、色調は黄橙色を呈し、胎土中に砂粒・小石を少量含んでいる。

この他、黒褐色土層（Fig.119の土層２）からの出土遺物として431・432を図示している。431は土師器の皿、厚手で胎土中に多量の砂粒・小石を含む荒い作りである。底部外面では、静止状態でヘラ状工具によって不定方向のナデを施す。432は土師器の杯で、外方に踏ん張りぎみの高台を持つ。高台断面は方形である。底部外径は8.0cm。８世紀後半～末の所産。

６．結　語

戦場古墳群６区の調査では、弥生時代前期の支石墓１基、弥生時代後期の青銅製鋤先を埋納した祭祀遺構１基・不明遺構１基、古墳時代後期の古墳５基、時期不明の古墳１基、奈良末～平安時代初頭の火葬墓と思われる集石遺構４基、土馬・土製品からなる奈良時代の祭祀遺構１基が確認された。

弥生時代前期と考えられる支石墓は上石を失っているものの、主体部は遺存しており、石蓋土壙墓と考えられる。蓋石３石のうち２石は周辺部では入手し難い板状安山岩を用いており、少なくとも神埼郡内では見られないことから、遠隔地よりもたらされているようである。同様の板状安山岩はＳＴ039古墳の閉塞石にも用いられており、石蓋土壙墓の蓋石を転用した可能性が考えられる。戦場古墳群１区では弥生時代前期の壺棺墓・甕棺墓が見られ、おそらく周辺丘陵谷部の各所に当該期の墓地が点在していることが予想される。また、ＳＴ034古墳の墳丘下より弥生時代後期後半の土器が集中して検出された他、完形の青銅製鋤先１点を埋納したと思われる祭祀遺構ＳＸ056が確認されている。弥生時代の遺構面はＳＴ034の地山整形時に撹乱を被っており不明な点が多いが、ＳＸ056以外には下層まで掘り込むような遺構は見当たらず、竪穴住居や土壙など明確な地下遺構を伴わない祭祀行為を地表面上で行った様子が想定される。周辺部は弥生時代後期の集落が立地するような場所ではないが、近接する当該期の遺跡としては、この谷部を約800m下った地点に甕棺墓・石棺墓・土壙墓群である三津永田遺跡があり、漢鏡７面・鉄刀・貝釧など豊富な副葬品を伴っている。今回発見された青銅製鋤先も時期的に三津永田の墳墓群を造営した集団に帰属していた可能性が高いが、本来の墓域あるいは生活域から離れた山間部の、さらに見通しのきかない谷部において青銅製鋤先を埋納する祭祀行為を行った点は興味深い。青銅製鋤先については“土の中に全体を突刺して使用する農耕具”とされているが、本例も刃部はかなり磨耗が進み、道具としてはこれ以上使用できないぐらい使い込まれている。おそらく実際に使用される数少ない青銅器として機能し続け、その役割を終えるに至って埋納され祀られたものと推定されよう。

古墳については６基が確認されており、うち１基は周溝のみの検出である。このうち、ＳＴ033・034・039・040は近接して分布しており一つの支群として理解でき、ＳＴ033・034・039はⅢＢ期（Fig.5：６世紀第三四半期）頃に相次いで築造されたものと考えられる。その築造順序としては、玄室床面と前庭部床面に比高差を持ち、前庭側壁が相対的に短いＳＴ033が古く、034・039がこれに続くと思われる。両者の前後関係はＳＴ039でほとんど

土器が確認されていないことから今ひとつはっきりしないが、ＳＴ039はＳＴ033と平面プランや腰石の配置状況がよく似ており、033→039→034の築造順序を想定したい。興味深いのはＳＴ033とＳＴ034で出土する須恵器の時期幅の違いで、ＳＴ033がⅥ期以降の土器が見られないのに対し、ＳＴ034はⅧ期までの時期幅を持ち、つまりは７世紀末まで追葬あるいは墓前祭祀を続けていたことが窺える。また、ＳＴ040はⅥ期の須恵器のみを出土しており、７世紀後半（第３四半期）の築造と考えられる。ＳＴ034ではⅤ期及びⅧ期の須恵器は見られるがⅥ期のものは欠如しており、ＳＴ034で７世紀前半まで追葬を繰り返していた造墓主体が７世紀後半に至って新たにＳＴ040を築造したと解釈することも出来よう。このほか、ＳＴ049は複室で羨道を伴う石室を持ち、ＳＴ033・034・039の石室とは構造上後出するものであり、出土須恵器はⅣ～Ⅷ期に位置付けられ、６世紀末～７世紀初頭頃の築造、８世紀初頭まで墓前祭祀が行われる。平面分布上はＳＴ033・034・039のグループとは約70mの間隔を空けており別の支群と考えられるが、このような羨道を付設し、壁体に巨石を配置する両袖型横穴式石室が、前代、あるいは後出する古墳とは隔絶した尾根上高所に立地する例が、調査区内（戦場古墳群１区・浦田古墳群１区）だけでなく周辺地区でも見られ、ＳＴ033・034・039の造墓主体が当該期に新たに墓域を移し、ＳＴ049を築造した可能性も考慮する必要がある。なお、ＳＴ033では当初円形であった墳形が、追葬の過程で墓道が延長されたことに伴い新たに周溝も前面に延長され、結果的に馬蹄形の平面形へと改変がなされたことが明らかとなった。古墳の追葬段階における「管理」のあり方がわかる資料として重要である。

奈良～平安時代初頭の遺構としては、ＳＴ033南側の緩斜面上に火葬墓と思われる遺構が４基検出されている。これらは蔵骨器あるいは供献土器から８世紀後半～末に位置付けられ、戦場古墳群１区の火葬墓と思われる集石遺構とほぼ同時期と推定される。この地区での古墳への追葬・墓前祭祀は８世紀初めまでに終焉しており、それから約半世紀以上の空白を空けて再び墓地が造営されている点も、戦場古墳群１区の様相と良く似ている。おそらくこれらの火葬墓の造営にあたっては、ＳＴ033古墳をはじめとする先祖の墓地へと回帰する意識が強く働いたものと想像される。そのほか、調査区の南端部付近、ＳＴ049の東側斜面では土馬・土製品が集積された祭祀遺構ＳＸ054が確認されている。県下の古代の土馬については、小杭村中遺跡[1]（佐賀郡諸富町）、松の森遺跡[2]（神埼郡東脊振村）、肥前国府跡[3]（佐賀郡大和町）、向野須恵器窯跡[4]（杵島郡北方町）、肥前国分寺跡[5]（佐賀郡大和町）などで出土例が見られるが、特に４個体分以上の土馬が人形・鏡模造品などの土製品と共に明らかな祭祀行為の痕跡（遺構）として検出された例は初めてである。時期的には土馬・土製品の形態、及び同時に出土した土師器杯、また近接して検出された土師器皿などから奈良時代の所産と推定される。土馬の性格については、河川や井戸などに対する水辺の祭祀や墓前祭祀などが想定されているが、当該地は谷部に面してはいるものの水辺との関連は考えにくく、火葬墓群と一連と捉え、この墓地全体に対する祭祀行為に基づくものと考えたい。

註文献

1）「小杭村中遺跡」『筑後川下流用水事業に係る文化財調査報告２』　佐賀県教育委員会　1998
2）「松の森遺跡」佐賀県文化財調査報告書第70集　佐賀県教育委員会　1983
3）「肥前国府跡Ⅲ」佐賀県文化財調査報告書第78集　佐賀県教育委員会　1985
4）「向野山唐人原古窯跡」『北方町史 上巻』　北方町　1985
5）「肥前国分寺跡」大和町文化財調査報告書第１集　大和町教育委員会　1976

Tab.15　戦場古墳群６区古墳時代、奈良・平安時代の土器一覧表（１）

Fig. 図番号	PL. 番号	県遺物登録番号	出土地点	種別	器種	法量（cm）			胎土	色調	調整	
						口径	器高	底径			外器面	内器面
75-36		96000463	ST033周溝4区	須恵器	杯蓋	(13.2)	3.5		砂粒少量	灰色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-37		96000465	ST033周溝1区	須恵器	杯蓋	(9.7)	3.0		砂粒少量	暗灰色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-38		96000466	ST033張り出し部1区	須恵器	杯蓋	(12.1)	3.8		砂粒少量	暗灰色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-39	34-1	96000440	ST033周溝4区	須恵器	杯蓋	(14.6)	(3.7)		砂粒少量	灰色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-40	34-2	96000468	ST033周溝1区	須恵器	杯蓋	13.1	4.6		砂粒少量	褐灰色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-41		96000441	ST033周溝4区	須恵器	杯蓋	12.2	4.3		砂粒少量	灰色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-42	34-8	96000469	ST033周溝1区	須恵器	杯蓋	14.9	4.7		砂粒少量	灰色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-43	34-3	96000418	ST033周溝1区	須恵器	杯蓋	(12.9)	4.4		砂粒少量	灰色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-44		96000467	ST033周溝4区	須恵器	杯蓋	(12.1)	(4.4)		砂粒少量	灰色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-45		96002644	ST033張り出し部1区	須恵器	杯蓋	(12.2)	3.6		砂粒多量	灰色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-46		96000478	ST033周溝4区	須恵器	杯蓋	(11.1)	(4.7)		砂粒少量	灰色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-47		96000464	ST033周溝4区	須恵器	杯蓋	(13.4)	4.4		砂粒少量	灰色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-48		96000421	ST033	須恵器	杯身	10.3	3.3		砂粒少量	灰色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-49		97002449	ST033周溝１区	須恵器	杯身		(3.2)		砂粒少量	灰色	ロクロナデ	ロクロナデ
-50		97002447	ST033張り出し部1区	須恵器	杯身		(3.0)		砂粒少量	灰白色	ロクロナデ	ロクロナデ
-51		96002638	ST033墳丘4区	須恵器	杯身	(12.1)	(4.0)		砂粒少量	灰色	底部ヘラケズリ後ナデ、ロナデ	ロクロナデ
-52	34-5	96000419	ST033	須恵器	杯身	10.8	4.1		砂粒少量	灰色	底部ヘラケズリ後ナデ、ロナデ	ロクロナデ
-53		97002444	ST033周溝１区	須恵器	杯身	(10.2)	2.8	(5.9)	砂粒少量	暗灰色	底部ヘラ切り離し後ナデ、ロナデ	ロクロナデ
-54	34-6	96000487	ST033	須恵器	杯身	9.2	3.0		砂粒少量	灰色	底部ヘラ切り離し後ナデ、ロナデ	ロクロナデ
-55		96000480	ST033周溝4区	須恵器	杯身	(12.7)	(3.2)		砂粒少量	灰色	ロクロナデ	ロクロナデ
-56		96000420	ST033	須恵器	杯身	10.6	4.2		砂粒少量	灰色	ロクロナデ	ナデ
-57		96000434	ST033周溝4区	須恵器	杯身	(9.3)	3.4		砂粒少量	暗灰色	底部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-58	34-4	96000488	ST033	須恵器	杯身	11.9	5.0		砂粒多量	灰色	底部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-59		97002446	ST033周溝4区	須恵器	杯身	(10.8)	(3.2)		砂粒少量	灰色	ロクロナデ	ロクロナデ
-60		96000449	ST033周溝4区	須恵器	杯身	(11.3)	4.3		砂粒少量	褐灰色	底部不定方向ナデ、ほかナデ	ナデ
-61		96000448	ST033周溝4区	須恵器	杯身	(11.2)	4.0		砂粒少量	暗灰色	底部ヘラ削り後ナデ、ロクロナデ	ロクロナデ
-62		96000422	ST033	須恵器	杯身	11.5	4.0		砂粒少量	暗灰色	底部ヘラ削り後ナデ、ロクロナデ	ロクロナデ
-63		96000481	ST033周溝4区	須恵器	杯身	(11.4)	(3.2)		砂粒少量	灰褐色	ロクロナデ	ロクロナデ
-64		96000439	ST033周溝4区	須恵器	杯身	(10.4)	(3.3)		砂粒少量	灰色	ロクロナデ	ロクロナデ
-65		97002853	ST033墓道	須恵器	杯身	(8.3)	2.8		細砂粒	灰白色	ナデ、磨耗が著しい	ナデ
-66		96000436	ST033周溝4区	須恵器	杯身	(12.2)	(3.4)		砂粒少量	黄橙色	ロクロナデ	ロクロナデ
-67		96000437	ST033周溝4区	須恵器	杯身	(13.3)	(3.9)		砂粒少量	灰褐色	ロクロナデ	ナデ
-68		96002641	ST033墓道	須恵器	杯身	(12.9)	(3.2)		細砂粒少量	灰褐色	口縁部ナデ、体部ケズリ	ナデ
76-69		96000416	ST033周溝4区	須恵器	壺	9.4	(3.5)		砂粒少量	暗灰色	ロクロナデ	ロクロナデ
-70		97002851	ST033墓道	須恵器	壺		(3.1)		細砂粒	灰色	ロクロナデ	ロクロナデ
-71		97002450	ST033墓道	須恵器	壺	(11.8)	(6.3)		砂粒少量	灰褐色	ロクロナデ	ロクロナデ
-72		96002631	ST033周溝4区	須恵器	壺	(13.1)	(6.8)		砂粒少量	灰色	ロクロナデ	ナデ
-73	34-10	96000417	ST033周溝4区	須恵器	甕		(13.2)		砂粒少量	灰色	カキ目、底部ヘラケズリ、ロナデ	ナデ
-74		96000413	ST033周溝4区	須恵器	甕	12.0	16.8		砂粒少量	灰色	カキ目、底部ヘラケズリ、ロナデ	ナデ
-75	34-7	96000446	ST033周溝4区	須恵器	小型短頸壺	(4.7)	6.0	5.4	砂粒少量	灰色	カキ目、底部ヘラケズリ、ロナデ	ナデ
-76		96000414	ST033周溝4区	須恵器	小型短頸壺	(5.6)	6.2	(4.0)	砂粒少量	灰色	カキ目、底部ヘラケズリ、ロナデ	ナデ
-77		97002445	ST033墓道	須恵器	短頸壺	(6.2)	4.4	(4.0)	砂粒多量	灰色	底部ヘラケズリ、ロナデ	ナデ
77-78		97000442	ST033周溝4区	須恵器	高杯	(13.6)	(4.3)		砂粒少量	灰色	底部ヘラケズリ、ロナデ	ナデ
-79		96002633	ST033周溝4区	須恵器	高杯		(8.6)	(14.6)	砂粒少量	灰色	ロクロナデ	ナデ
-80		96000432	ST033周溝4区	須恵器	高杯	(11.0)	17.0	(10.6)	砂粒少量	暗灰色	ロクロナデ	ナデ、シボリ
-81		96000443	ST033周溝4区	須恵器	高杯	11.8	(4.2)		砂粒少量	灰色	ロクロナデ	
-82		97002852	ST033墓道	須恵器	高杯		(3.0)		砂粒多量	灰色	ロクロナデ	
-83		96000479	ST033周溝4区	須恵器	高杯		7.5	(10.3)	砂粒少量	灰色	ロクロナデ	
-84		96000453	ST033周溝4区	須恵器	高杯		(6.5)	(8.7)	砂粒少量	暗灰色	ロクロナデ	ナデ、シボリ
-85		96000415	ST033周溝4区	須恵器	高杯		5.3	10.4	砂粒少量	灰色	ロクロナデ	
-86	34-9	96000411	ST033周溝4区	須恵器	高杯	(10.9)	10.9	7.6	砂粒少量	灰色	ロクロナデ	
-87		97002855	ST033墓道	須恵器	高杯		(2.8)		細砂粒少量	にぶい黄橙色	カキ目、ロクロナデ	
-88		96002637	ST033墓道	須恵器	高杯		(2.5)	(8.2)	細砂粒少量	橙色	カキ目	
-89		96000451	ST033周溝4区	須恵器	椀	(11.0)	(6.3)	(6.0)	砂粒少量	橙色	カキ目、底部ヘラケズリ	
-90		97002854	ST033墓道	土師器	高杯	(14.5)	(4.7)		砂粒少量	橙褐色	カキ目、ロクロナデ	
-91		96000473	ST033周溝1区	土師器	高杯		(7.3)		細砂粒多量	橙色	カキ目、ロクロナデ	ナデ、シボリ
-92		96000423	ST033周溝1区	土師器	高杯	16.4	(6.6)		砂粒少量	橙色	ナデ、底部ヘラミガキ	
-93		96002630	ST033周溝1区	土師器	高杯	(20.6)	(3.9)		細砂粒多量	橙色	ヘラミガキ	ヘラミガキ
-94		96002639	ST033墓道	土師器	高杯		(2.4)	(12.7)	細砂粒多量	橙色	ヘラミガキ	
-95		96000445	ST033墓道	土師器	高杯	(25.6)	(3.8)		砂粒少量	橙色	ナデ	
-96		96002642	ST033張り出し部1区	土師器	高杯	(12.1)	(12.1)	(14.9)	砂粒少量	橙色	ナデ、底部ヘラナデ	
-97		96000459	ST033周溝1区	土師器	壺	(6.2)	(9.3)	7.5	砂粒少量	橙色	ナデ、脚部ヘラケズリ	
-98		96002642	ST033墓道	土師器	高杯		(4.5)	(8.3)	砂粒少量	橙色	ナデ	
-99		96000484	ST033周溝4区	土師器	脚付壺	(5.6)	(8.2)		砂粒少量	橙色	脚部・頸部ヘラケズリ後ナデ	
-100		96000460	ST033周溝1区	土師器	脚付壺		(5.5)	(5.4)	砂粒少量	橙色	脚部ヘラケズリ後ナデ	
-101		96000458	ST033周溝4区	土師器	壺	(4.8)	(4.4)		細砂粒多量	橙色		
-102		97002443	ST033周溝4区	土師器	壺	4.9	6.1		砂粒少量	黄橙色	体部ヘラケズリ後ナデ、底部ナデ	
78-103		96000412	ST033墓道	須恵器	提瓶	7.4	(17.3)		砂粒少量	灰白色	カキ目	
-104	34-11	96000456	ST033周溝1区	須恵器	提瓶	6.2	18.3		砂粒少量	灰色	カキ目、ロクロナデ	

Tab.15　戦場古墳群６区古墳時代、奈良・平安時代の土器一覧表（２）

Fig.図番号	PL.番号	県遺物登録番号	出土地点	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	色調	調整 外器面	内器面
-104		96000456	ST033周溝1区	須恵器	提瓶	6.2	18.3		砂粒少量	灰色	カキ目、ロクロナデ	
-105	34-12	96000447	ST033周溝2区	須恵器	提瓶	(8.6)	(16.1)		砂粒少量	暗灰色	カキ目、ロクロナデ	
-106		96000424	ST033周溝4区	須恵器	提瓶		(8.2)		砂粒多量	灰色	ヘラケズリ、ロクロナデ	
-107		96000457	ST033周溝4区	須恵器	提瓶				砂粒多量	暗灰色		
79-108	35-1	96000485	ST033張り出し部4区	須恵器	広口壺	18.2	34.2		砂粒少量	灰白色	口縁部ナデ、体部タタキ	ナデ・当て具痕
-109		97002895	ST033周溝4区	須恵器	甕	20.5～22	(28.0)		細砂粒・砂粒少量	灰色	口縁部ナデ、体部タタキ・カキメ	ナデ・当て具痕
-110	34-13	96000486	ST033周溝１・4区	須恵器	広口壺	18.0	(32.0)		砂粒少量	にぶい黄橙色	口縁部ナデ、体部タタキ・カキメ	ナデ・当て具痕
-111	35-2	99003314	ST033周溝１区	須恵器	甕	23.3	(47.0)		砂粒多量	暗灰色	口縁部ナデ、体部タタキ	当て具痕ナデ消し
-112		99003315	ST033周溝１区	須恵器	甕	23.8	(47.0)		砂粒多量	褐灰色	口縁部ナデ、体部タタキ・カキメ	ナデ・当て具痕
-113	34-14	96000426	ST033周１・4、前庭部	須恵器	横瓶	11.4	(26.0)		細砂粒・砂粒少量	灰白色	口縁部ナデ、体部タタキ・カキメ	ナデ・当て具痕
88-122		96002647	ST034墓道	須恵器	杯蓋	(14.3)	3.0		砂粒少量	灰色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-123		96000080	ST034墓道・周溝4区	須恵器	杯蓋	(13.4)	(4.0)		砂粒少量	灰色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-124		96000055	ST034周溝1区	須恵器	杯蓋	(13.2)	4.0		砂粒少量	灰褐色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-125		96000309	ST034墳丘1区	須恵器	杯蓋	(12.6)	(3.7)		砂粒少量	暗灰色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-126		95004588	ST034	須恵器	杯蓋	(12.3)	(3.1)		砂粒少量	灰色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-127		96002644	遺物は034	須恵器	杯蓋	(12.2)	(3.6)		砂粒多量	灰色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-128		96000302	ST034墓道・周溝1,4	須恵器	杯蓋	(11.7)	(4.3)		砂粒少量	灰色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-129		95004579	ST034墓道	須恵器	杯蓋	12.7	4.1		砂粒少量	暗灰色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-130		96000386	ST034墓道・周溝1区	須恵器	杯蓋	11.2	3.8		砂粒少量	灰色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-131	36-2	95000301	ST034墓道	須恵器	杯蓋	(13.3)	3.1		砂粒少量	灰色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-132	36-1	95004580	ST034周溝1区	須恵器	杯蓋	13.4	3.9		砂粒少量	暗灰色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-133		96000335	ST034周溝1区	須恵器	杯蓋	(11.9)	(3.7)		砂粒少量	灰白色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-134		96000088	ST034墓道	須恵器	杯蓋	(11.7)	(3.8)		砂粒少量	暗灰色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-135		96000354	ST034周溝1区	須恵器	杯蓋	(12.2)	3.7		砂粒少量	灰色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-136		95004578	ST034周溝4区	須恵器	杯蓋	(12.0)	(4.0)		砂粒少量	暗灰色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-137		96000308	ST034墓道	須恵器	杯蓋	(12.0)	(3.9)		砂粒少量	灰色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-138		96000084	ST034墓道	須恵器	杯蓋	(12.9)	(2.9)		砂粒少量	暗灰色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-139		95004584	ST034周溝1区	須恵器	杯蓋	11.4	3.5		砂粒少量	暗灰色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-140		96002645	ST034周溝4区	須恵器	杯蓋	13.4	4.7		砂粒少量	灰色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-141		96000091	ST034墓道・周溝4区	須恵器	杯蓋	(13.2)	5.1		砂粒少量	暗灰色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-142	36-4	96000058	ST034墓道	須恵器	杯蓋	13.4	4.5		砂粒少量	灰色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-143	36-3	96000081	ST034周溝1区	須恵器	杯蓋	12.8	(4.2)		砂粒少量	灰色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-144		95004582	ST034墓道・周溝1区	須恵器	杯蓋	11.8	3.6		砂粒少量	灰色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-145	36-5	96000059	ST034周溝1区	須恵器	杯蓋	12.1	4.3		砂粒少量	灰色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-146		96000303	ST034周溝1区	須恵器	杯蓋	11.4	3.8		砂粒少量	暗赤褐色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-147		95004585	ST034墓道	須恵器	杯蓋	11.4	4.1		砂粒少量	灰色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-148		96000086	ST034周溝4区	須恵器	杯蓋	(11.9)	(3.0)		砂粒少量	灰色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
89-149		96000355	ST034墓道	須恵器	杯身	(13.3)	(3.4)		砂粒少量	灰色	底部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-150		95004589	ST034	須恵器	杯身	11.9	(4.1)		砂粒少量	灰色	底部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-151		96000332	ST034墓道	須恵器	高杯(杯部)	(11.9)	(3.7)		砂粒少量	灰色	底部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-152		96000403	ST034周溝4区	須恵器	杯身	(12.2)	(3.6)		砂粒少量	にぶい黄橙色	底部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-153		96000318	ST034	須恵器	杯身	12.3	3.8		砂粒少量	灰色	底部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-154		96000052	ST034墓道・周溝1区	須恵器	杯身	11.6	4.0		砂粒少量	灰褐色	底部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-155	36-9	96000053	ST034墓道	須恵器	杯身	11.4	4.4		砂粒少量	黄橙色	底部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-156		96000360	ST034周溝1区	須恵器	杯身	11.2	3.8		砂粒少量	灰色	底部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-157		95004590	ST034墓道・周溝1区	須恵器	杯身	(10.7)	(3.3)		砂粒少量	灰色	底部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-158		96000357	ST034墓道	須恵器	杯身	10.7	3.8		砂粒少量	灰色	底部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-159		96000069	ST034墓道	須恵器	杯身	(10.3)	(4.0)		砂粒少量	灰色	底部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-160		96000396	ST034周溝4区	須恵器	杯身	(10.5)	(2.4)		砂粒少量	灰色	底部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-161		95004583	ST034周溝1区	須恵器	杯身	(12.6)	4.1		砂粒少量	褐灰色	底部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-162		96002652	ST034墓道・周溝4区	須恵器	杯身	(11.3)	(3.0)		砂粒少量	灰色	底部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-163		96000077	ST034墓道	須恵器	杯身	11.2	3.9		砂粒少量	灰色	底部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-164		96000363	ST034墓道・周溝2,4	須恵器	杯身	10.8	3.6		砂粒少量	灰色	底部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-165	36-11	95004586	ST034墓道・周溝1区	須恵器	杯身	10.6	3.9		砂粒少量	灰色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-166		96000317	ST034墓道	須恵器	杯身	11.4	4.1		砂粒少量	灰色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-167		96000353	ST034墓道	須恵器	杯身	10.8	4.0		砂粒少量	灰色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-168		96000382	ST034墓道	須恵器	杯身	10.1	4.2		砂粒少量	灰色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-169		96000385	ST034墓道	須恵器	杯身	10.1	(3.7)		砂粒少量	暗灰色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-170		95004587	ST034墓道・周溝1区	須恵器	杯身	9.7	3.2		砂粒少量	灰色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-171		95004581	ST034墓道・周溝1区	須恵器	杯身	10.9	3.8		砂粒少量	灰色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-172		96000359	ST034墓道	須恵器	杯身	10.3	3.5		砂粒少量	灰色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-173	36-10	96000384	ST034墓道・周溝1区	須恵器	杯身	9.7	4.2		砂粒少量	灰色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-174		96000305	ST034墓道・周溝1区	須恵器	杯身	10.0	4.2		砂粒少量	暗灰色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-175		96000096	ST034墓道	須恵器	杯身	(10.2)	(3.4)		砂粒少量	灰色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-176		96000051	ST034周溝1区	須恵器	杯身	10.3	3.2		砂粒少量	灰色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-177		96000097	ST034墓道	須恵器	杯身	(10.3)	(3.5)		砂粒少量	灰色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-178		96000349	ST034墓道	須恵器	杯身	(9.5)	(3.6)		砂粒少量	灰色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
90-179	36-6	96000100	ST034墓道	須恵器	杯蓋	(10.1)	2.8		砂粒少量	暗灰色	天井部ヘラ切り離し後ナデ	ロクロナデ
-180		96000304	ST034墓道・周溝4区	須恵器	杯蓋	(11.1)	(2.9)		砂粒少量	灰色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ

Tab.15　戦場古墳群6区古墳時代、奈良・平安時代の土器一覧表（3）

Fig. 図番号	PL. 番号	県遺物登録番号	出土地点	種別	器種	法量（cm）			胎土	色調	調整	
						口径	器高	底径			外器面	内器面
90-181		96000060	ST034墓道	須恵器	杯蓋	10.6	3.0		砂粒少量	灰色	天井部ヘラ切り離し後ナデ	ロクロナデ
-182		96000070	ST034周溝1区	須恵器	杯蓋	(8.9)	(3.8)		砂粒少量	暗灰色	天井部ヘラ切り離し後ナデ	ロクロナデ
-183		96000073	ST034墓道・周溝4区	須恵器	杯蓋	9.0	3.6		砂粒少量	灰色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-184	36-7	96000098	ST034周溝1区	須恵器	杯蓋	7.9	3.6		砂粒少量	灰色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-185		96000377	ST034周溝1区	須恵器	杯蓋	7.8	(2.3)		砂粒少量	にぶい黄橙色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-186		96000099	ST034周溝1区	須恵器	杯蓋	8.7	(2.6)		砂粒少量	灰色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-187		96000914	ST034墓道	須恵器	杯身	(8.8)	(3.0)		砂粒少量	灰色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-188		96000319	ST034墓道	須恵器	杯蓋	10.8	(2.5)		砂粒少量	黄橙色	天井部ヘラ切り離し後ナデ	ロクロナデ
-189		96000356	ST034墓道・周溝2区	須恵器	杯蓋	12.8	3.7		砂粒少量	灰色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-190	36-8	95004595	ST034墓道	須恵器	杯蓋	(16.3)	(3.7)		砂粒少量	褐灰色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-191		96000056	ST034墓道	須恵器	杯蓋	15.5	3.4		砂粒少量	灰白色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-192		96000387	ST034墓道	須恵器	杯蓋	13.6	3.4		砂粒若干量含む	灰色	天井部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-193		96000338	ST034墓道	須恵器	杯蓋	11.3	2.5		砂粒少量	にぶい黄橙色	天井部ヘラ切り離し後ナデ	ロクロナデ
-194		96000393	ST034周溝4区	須恵器	杯身	(8.4)	(2.4)		砂粒少量	暗灰色	底部ヘラ切り離し後ナデ	ロクロナデ、ナデ
-195		96000078	ST034墓道	須恵器	杯身	9.7	3.0		砂粒少量	暗灰色	底部ヘラ切り離し後ナデ	ロクロナデ
-196		96000383	ST034	須恵器	杯身	9.5	3.1		砂粒少量	灰色	底部ヘラ切り離し後ナデ	ロクロナデ
-197		96000079	ST034	須恵器	杯身	9.4	2.7		砂粒少量	暗灰色	底部ヘラ切り離し後ナデ	ロクロナデ
-198		96000362	ST034墓道	須恵器	杯身	9.4	3.0		砂粒少量	暗灰色	底部ヘラ切り離し後ナデ	ロクロナデ、ナデ
-199		96000400	ST034墓道	須恵器	杯身	(8.8)	2.6		砂粒多量	暗灰色	底部ヘラ切り離し後ナデ	ロクロナデ
-200		96000407	ST034墓道	須恵器	杯身	(10.4)	2.3		砂粒少量	灰色	底部ヘラ切り離し後ナデ	ロクロナデ
-201		96000062	ST034墓道・周溝1区	須恵器	杯身	(10.0)	3.4		砂粒少量	暗赤褐色	底部ヘラ切り離し後ナデ	ロクロナデ
-202		96000388	ST034周溝1区	須恵器	杯身	(10.2)	(3.8)		砂粒少量	灰褐色	底部ヘラ切り離し後ナデ	ロクロナデ
-203		96000347	ST034墓道	須恵器	杯身	(10.2)	(4.4)		砂粒少量	灰色	底部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-204		96000409	ST034周溝1区	須恵器	杯身	(5.0)	(3.0)		砂粒少量	灰褐色	底部ヘラ切り離し後ナデ	ロクロナデ
-205		96000489	ST034墓道	須恵器	杯身	(13.7)	(4.4)		砂粒少量	黄橙色	底部ヘラ切り離し後ナデ	ロクロナデ
-206	36-12	96000068	ST034	須恵器	杯身	(12.5)	(3.9)		砂粒少量	灰色	底部ヘラ切り離し後ナデ	ロクロナデ
-207		96000358	ST034墓道・周溝4区	須恵器	杯身	13.8	3.6		砂粒少量	灰色	底部ヘラ切り離し後ナデ	ロクロナデ
-208		96000402	ST034墓道	須恵器	杯身	(14.0)	3.8	(8.1)	砂粒少量	褐灰色		
91-209		96000404	ST034墓道・周溝1区	須恵器	高杯	11.7	(5.3)		砂粒少量	暗灰色	体部カキ目、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-210	36-18	96000306	ST034墓道・周2・4区	須恵器	高杯	(11.0)	(8.4)		砂粒少量	暗灰色	杯底部ヘラケズリ、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-211		96000331	ST034墓道	須恵器	高杯	(10.9)	(14.6)		砂粒少量	暗灰色	杯底部ヘラケズリ、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-212	36-19	95004592	ST034墓道・周1・4区	須恵器	高杯	(11.3)	(13.9)	(10.3)	砂粒少量	灰色	ロクロナデ	ロクロナデ
-213	36-20	96000063	ST034墓道	須恵器	高杯	14.3	8.3	10.2	砂粒少量	灰褐色	杯底部ヘラケズリ、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-214	36-21	96000072	ST034墓道	須恵器	高杯	13.9	8.2	10.2	砂粒少量	灰色	ロクロナデ	ロクロナデ
-215		96002655	ST034墓道	須恵器	壺	—	(6.3)		砂粒多量	灰色	底部手持ちヘラケズリ、ほかロナデ	ロクロナデ
-216		96002648	ST034周溝1区	須恵器	壺	—	(10.9)		砂粒少量	暗灰色	底部手持ちヘラケズリ、ほかロナデ	ロクロナデ
-217	37-4	96002646	ST034墓道	須恵器	壺	(5.2)	(4.9)		砂粒少量	灰色	底部手持ちヘラケズリ、ほかロナデ	ロクロナデ
-218		96002650	ST034墓道・周溝1区	須恵器	壺	—	(6.9)	(7.9)	砂粒少量	灰色	※　カキメ、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-219		96002646	ST034墓道	須恵器	短頸壺	(5.2)	(4.9)		砂粒少量	灰色	ロクロナデ	ロクロナデ
-220		96002650	ST034墓道・周溝1区	須恵器	平瓶	—	(6.9)	(7.9)	砂粒少量	灰色	底部ヘラケズリ、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-221	37-7	96000365	ST034墓道	須恵器	長頸壺	(7.0)	16.5		砂粒少量	灰色	底部ヘラケズリ、頸部カキメ	ロクロナデ
-222		96002654	ST034玄室	須恵器	平瓶		(9.5)	8.6	砂粒少量	灰白色	底部ヘラケズリ、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-223		96000330	ST034墓道・周溝4区	須恵器	長頸壺	(12.1)	(12.1)		砂粒少量	暗灰色	カキメ、ロクロナデ	ロクロナデ
-224	37-6	96000333	ST034	須恵器	短頸壺	5.9	10.0		砂粒少量	灰色	底部ヘラケズリ、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-225		97002927	ST034墓道	須恵器	甕	(18.9)	(5.2)		砂粒少量	灰色	ロクロナデ	ロクロナデ
-226		96000329	ST034周溝4区	須恵器	甕	(20.9)	(7.4)		砂粒少量	暗灰色	ロクロナデ	ロクロナデ
92-227	37-14	96000067	ST034墓道・周溝1区	須恵器	横瓶	(12.6)	(33.5)		砂粒少量	灰褐色	体部タタキ、ほかロクロナデ	当て具痕
-228	37-12	96000368	ST034墓道	須恵器	横瓶	10.4	23.1		砂粒少量	灰白色	体部タタキ、ほかロクロナデ	当て具痕
-229		96000067	ST034墓道	須恵器	横瓶	(12.9)	—		砂粒少量	灰褐色	体部タタキ、ほかロクロナデ	当て具痕
-230	37-13	96000336	ST034墓道・周溝4区	須恵器	大甕	(43.3)	(25.1)		砂粒少量	灰褐色	体部タタキ、ほかロクロナデ	当て具痕
-231		99003317	ST034周溝4区	須恵器	甕	(42.0)	(78.2)		砂粒少量	灰白色	体部タタキ、ほかロクロナデ	当て具痕
94-232	37-10	96000366	ST034	須恵器	提瓶	(9.0)	(17.3)		砂粒少量	暗灰色	ナデ、ロクロナデ	ロクロナデ
-233	37-5	96000367	ST034墓道	須恵器	提瓶	(5.2)	(20.0)		砂粒少量	暗灰色	カキ目、ロクロナデ	ロクロナデ
-234	37-11	96000364	ST034墓道・周1・4区	須恵器		(9.3)	(22.4)		砂粒少量	灰色	カキ目、ロクロナデ	ロクロナデ
-235	37-8	95004598	ST034墓道・周4・玄室	須恵器	平瓶	(10.4)		(11.3)	砂粒少量	暗灰色	ヘラケズリ、カキ目、ロクロナデ	ロクロナデ
-236		96000065	ST034墓道・周2・4区	須恵器	平瓶	(8.6)	(15.6)	13.5	砂粒少量	暗灰色	ヘラケズリ、カキ目、ロクロナデ	ロクロナデ
95-246		96000375	ST034墳丘4区	土師器	杯蓋	(13.7)	(3.7)		砂粒少量	橙色	ヘラミガキ	ヘラミガキ
-247		96000398	ST034墳丘4区	土師器	杯蓋	(13.0)	(3.7)		砂粒少量	橙色	ヘラミガキ	ヘラミガキ
-248		96000054	ST034墓道	土師器	杯蓋	(12.8)	(4.9)		砂粒少量	橙色	ヘラミガキ	ヘラミガキ
-249		96000328	ST034墳丘4区	土師器	壺	(20.8)	(7.4)		砂粒少量	暗灰色	ヘラミガキ	ヘラミガキ
-250		96000376	ST034墳丘	土師器	杯身	(12.0)	(4.7)		砂粒少量	橙色	ヘラミガキ	ヘラミガキ
-251	36-15	96000370	ST034墳丘	土師器	杯蓋	13.2	4.6		砂粒少量	橙色	ヘラミガキ	ヘラミガキ
-252	36-14	96000372	ST034墳丘4区	土師器	杯蓋	14.4	5.2		砂粒少量	橙色	ヘラミガキ	ヘラミガキ
-253		96000399	ST034墳丘	土師器	杯身	(12.9)	(3.8)		砂粒少量	橙色	ヘラミガキ	ヘラミガキ
-254	36-16	95004593	ST034墳丘	土師器	杯身	12.1	4.5		砂粒少量	橙色	底部ヘラケズリ、ヘラミガキ	ヘラミガキ
-255	36-17	96000314	ST034墳丘	土師器	杯身	(11.8)	(4.8)		砂粒少量	橙色	底部ヘラケズリ、ヘラミガキ	ヘラミガキ
-256		96000371	ST034墓道	土師器	杯身	(10.9)	(4.2)		砂粒少量	橙色（丹塗）	ヘラミガキ	ヘラミガキ
-257	36-13	96000322	ST034墳丘4区	土師器	杯身	(11.4)	(5.0)		砂粒少量	橙色	底部ヘラケズリ、ヘラミガキ	ヘラミガキ
-258		96000057	ST034墓道	土師器	杯身	(10.7)	3.8		砂粒少量	橙色	底部ヘラケズリ、ナデ	ヘラミガキ

Tab.15　戦場古墳群６区古墳時代、奈良・平安時代の土器一覧表（４）

Fig. 図番号	PL. 番号	県遺物登録番号	出土地点	種別	器種	法量（cm）			胎土	色調	調整	
						口径	器高	底径			外器面	内器面
95-257		96000322	ST034墳丘4区	土師器	杯身	(11.4)	(5.0)		砂粒少量	橙色	底部ヘラケズリ、ヘラミガキ	ヘラミガキ
-258		96000057	ST034墓道	土師器	杯身	(10.7)	3.8		砂粒少量	橙色	底部ヘラケズリ、ナデ	ヘラミガキ
-259		96000374	ST034	土師器	高杯	13.4	9.6	7.9	砂粒少量	橙色	磨耗のため不明	不明
-260	37-1	96000337	ST034墓道・周溝4区	土師器	高杯	13.6	11.0	9.3	砂粒少量	橙色	ヘラミガキ、脚部ケズリ後ミガキ	ヘラミガキ、ケズリ
-261	37-2	96000339	ST034墓道	土師器	高杯	13.0	(9.8)	(9.4)	砂粒少量	橙色	ナデ、脚部ヘラケズリ	ナデ、ケズリ
-262		96000324	ST034周溝1区	土師器	高杯	(13.6)	(9.3)		砂粒少量	橙色（丹塗）	ヘラミガキ、脚部ケズリ後ミガキ	ヘラミガキ、ケズリ
-263		96000064	ST034墓道・周溝1区	土師器	高杯	(13.2)	10.9	(9.2)	砂粒少量	橙色（丹塗）	ヘラミガキ、脚部ケズリ後ミガキ	ヘラミガキ、ケズリ
-264		96000381	ST034墓道	土師器	高杯	—	(7.2)	(11.0)	砂粒少量	橙色	ヘラミガキ、脚部ケズリ後ミガキ	ヘラミガキ、ケズリ
-265		96000326	ST034周溝1区	土師器	高杯	—	(5.9)	(14.9)	砂粒少量	橙色	ナデ、脚部ヘラケズリ	ナデ、ケズリ
-266	37-3	96000410	ST034周溝1区	土師器	高杯	30.9	17.0	(18.0)	砂粒少量	橙色	ナデ	ナデ
-267	38-1	96004596	ST034周溝1・4区	土師器	平瓶	(7.2)	(4.1)		砂粒少量	橙色	ヘラミガキ	ナデ
101-268		95002112	ST039基底面4区	須恵器	杯身	10.4	4.2	—	砂粒少量	灰色	底部ヘラケズリ、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-269		95002111	ST039	須恵器	高杯		(2.7)	10.6	砂粒少量	灰色	ロクロナデ	ロクロナデ
-270		95002110	ST039石室据り方	弥生土器	甕	(19.0)	(4.7)		砂粒・小石少量	橙色	ハケメ	ハケメ
-271		95002114	ST039墓道	縄文土器	深鉢		(3.5)	10.0	砂粒・小石多量	橙色	底部底面に粗いナデ圧痕	ナデ
-272		95002109	ST039東トレンチ	弥生土器	鉢	(16.4)	(8.2)		砂粒・小石少量	褐色	ハケメ	ナデ
110-276		95004563	ＳＴ040前庭部	土師器	杯蓋	(10.8)	(1.9)		砂粒少量	橙褐色	天井部ヘラ切り離し後ナデ	ロクロナデ
-277		95004565	ＳＴ040前庭部	土師器	杯蓋	(12.4)	(2.1)		砂粒少量	橙褐色	天井部ヘラ切り離し後ナデ	ロクロナデ
-278		95002123	ＳＴ040前庭部	須恵器	杯蓋	9.1	2.3		砂粒少量	褐灰色	天井部ヘラ切り離し後ナデ	ロクロナデ
-279		95004555	ＳＴ040前庭部	須恵器	杯蓋	9.8	2.5		砂粒少量	灰色	天井部ヘラ切り離し後ナデ	ロクロナデ
-280		95004557	ＳＴ040前庭部	須恵器	杯蓋	10.0	3.6		砂粒少量	灰色	天井部ヘラ切り離し後ナデ	ロクロナデ
-281	38-4	95002124	ＳＴ040前庭部	須恵器	杯蓋	11.6	3.3		砂粒少量	褐灰色	天井部ヘラ切り離し後ナデ	ロクロナデ
-282		95002121	ＳＴ040前庭部	須恵器	杯蓋	11.0	3.0		砂粒少量	灰色	天井部ヘラ切り離し後ナデ	ロクロナデ
-283		95004551	ＳＴ040前庭部	須恵器	杯蓋	10.8	3.0		砂粒少量	灰褐色	天井部ヘラ切り離し後ナデ	ロクロナデ
-284	38-3	95004567	ＳＴ040前庭部	須恵器	杯蓋	11.2	3.2		砂粒少量	灰褐色	天井部ヘラ切り離し後ナデ	ロクロナデ
-285	38-6	95004559	ＳＴ040前庭部	須恵器	杯蓋	19.8	3.2		砂粒少量	褐灰色	天井部ヘラ切り離し後ナデ	ロクロナデ
-286	38-9	95002120	ＳＴ040前庭部	須恵器	杯身	10.0	3.2		砂粒少量	灰色	底部ヘラ切り離し後ナデ、ロナデ	ロクロナデ
-287		95002125	ＳＴ040前庭部	須恵器	杯身	11.0	4.7	7.9	砂粒少量	灰色	底部ヘラ切り離し後ナデ、ロナデ	ロクロナデ
-288		95004556	ＳＴ040前庭部	須恵器	杯身	12.0	7.8	4.3	砂粒少量	灰色	底部ヘラ切り離し後ナデ、ロナデ	ロクロナデ
-289		95004558	ＳＴ040前庭部	須恵器	杯身	12.4	4.4	8.1	砂粒少量	灰色	底部ヘラ切り離し後ナデ、ロナデ	ロクロナデ
-290	38-8	95004560	ＳＴ040前庭部	須恵器	杯身	11.8	4.6	7.8	砂粒少量	褐灰色	底部ヘラ切り離し後ナデ、ロナデ	ロクロナデ
-291		95004564	ＳＴ040前庭部	土師器	杯身		(4.3)	6.4	砂粒少量	褐灰色	底部ヘラ切り離し後ナデ、ロナデ	ロクロナデ
-292		95004552	ＳＴ040前庭部	土師器	杯身	13.2	4.5	8.7	砂粒少量	橙褐色	底部ヘラ切り離し後ナデ、ロナデ	ロクロナデ
-293		95004568	ＳＴ040前庭部	須恵器	杯身	12.4	4.7	7.3	砂粒少量	灰褐色	底部ヘラ切り離し後ナデ、ロナデ	ロクロナデ
-294	38-7	95002122	ＳＴ040前庭部	須恵器	杯身	12.4	4.3	7.9	砂粒少量	灰色	底部ヘラ切り離し後ナデ、ロナデ	ロクロナデ
-295		95004562	ＳＴ040前庭部	須恵器	鉢	(9.8)	(7.4)		砂粒少量	灰色	カキメ、ロクロナデ	ロクロナデ
-296	38-11	95004566	ＳＴ040前庭部	須恵器	壺	5.6	7.4		砂粒少量	暗灰色	体下半部手持ちヘラケズリ	ロクロナデ
-298		95004561	ＳＴ040前庭部	須恵器	平瓶？		(5.9)		砂粒少量	灰色	ロクロナデ	ロクロナデ
-299	38-10	95004553	ＳＴ040前庭部	須恵器	蓋	7.8	2.6		砂粒少量	暗灰色	天井部ヘラ切り離し後ナデ、ロナデ	ロクロナデ
-300	38-10	95004554	ＳＴ040前庭部	須恵器	短頸壺	5.4	3.1		砂粒少量	暗灰色	底部ヘラケズリ、ロクロナデ	ロクロナデ
-301	38-12	95002119	ＳＴ040基底面1区	土師器	高杯	8.9	5.7	6.4	精良	橙色	脚部ヘラケズリ、杯部ナデ	ヘラケズリ、ナデ
-302	38-12	95002116	ＳＴ040基底面1区	土師器	高杯	9.6	6.8	5.9	精良	橙色	脚部ヘラケズリ、杯部ナデ	ヘラケズリ、ナデ
-303	38-12	95002117	ＳＴ040基底面1区	土師器	高杯	9.2	7.2	5.3	精良	橙色	脚部ヘラケズリ、杯部ナデ	ヘラケズリ、ナデ
-304	38-12	95002118	ＳＴ040基底面1区	土師器	高杯	(8.5)	5.6	6.8	精良	橙色	脚部ヘラケズリ、杯部ナデ	ヘラケズリ、ナデ
-305	38-12	95002115	ＳＴ040基底面1区	土師器	甕	17.7	(23.4)		砂粒・小石多量	橙色	ハケメ	ヘラケズリ
116-307		95004647	ＳＴ049玄室	須恵器	杯蓋	(12.8)	3.7		砂粒少量	灰色	天井部ヘラケズリ、ロクロナデ	ロクロナデ
-308	39-1	97002005	ＳＴ049墓道	須恵器	杯蓋	(12.3)	3.8		砂粒少量	灰色	天井部ヘラケズリ、ロクロナデ	ロクロナデ
-309		95004622	ＳＴ049墓道	須恵器	杯蓋	(11.8)	3.6		砂粒少量	灰色	天井部ヘラケズリ、ロクロナデ	ロクロナデ
-310		95004638	ＳＴ049墓道	須恵器	杯蓋	11.5	3.3		砂粒少量	灰色	天井部ヘラ切り離し後ナデ、ロナデ	ロクロナデ
-311		95004630	ＳＴ049玄室	須恵器	杯蓋	(8.4)	(2.8)		砂粒少量	灰白色	天井部ヘラ切り離し後ナデ、ロナデ	ロクロナデ
-312		95554604	ＳＴ049墓道	須恵器	杯蓋	(7.6)	(2.0)		砂粒少量	灰色	天井部ヘラ切り離し後ナデ、ロナデ	ロクロナデ
-313		95004615	ＳＴ049墓道	須恵器	杯蓋	(10.7)	(3.2)		砂粒少量	にぶい黄橙色	天井部ヘラ切り離し後ナデ、ロナデ	ロクロナデ
-314		95004646	ＳＴ049墓道	須恵器	杯蓋	11.3	3.5		砂粒少量	灰色	天井部ヘラ切り離し後ナデ、ロナデ	ロクロナデ
-315		95004632	ＳＴ049墓道	土師器	杯蓋	(9.0)	(1.6)		砂粒少量	橙色	天井部ヘラ切り離し後ナデ、ロナデ	ロクロナデ
-316		95004644	ＳＴ049墓道	土師器	杯蓋	(10.5)	(1.7)		砂粒少量	橙色	天井部ヘラ切り離し後ナデ、ロナデ	ロクロナデ
-317		95004620	ＳＴ049玄室	須恵器	杯蓋	(13.4)	(1.9)		砂粒少量	橙色	天井部ヘラ切り離し後ナデ、ロナデ	ロクロナデ
-318		95004614	ＳＴ049	須恵器	杯蓋	(18.0)	(3.7)		砂粒少量	灰色	カキメ、ロクロナデ	ロクロナデ
-319		95004636	ＳＴ049墓道	須恵器	杯蓋	16.7	4.1		砂粒少量	灰色	天井部ヘラ切り離し後ナデ、ロナデ	ロクロナデ
-320	39-2	97002008	ＳＴ049墓道	須恵器	杯蓋	(14.4)	3.0		砂粒少量	灰色	天井部ヘラ切り離し後ナデ、ロナデ	ロクロナデ
-321	39-3	95004637	ＳＴ049墓道	須恵器	杯蓋	(15.7)	1.9		砂粒少量	灰色	天井部ヘラ切り離し後ナデ、ロナデ	ロクロナデ
-322		95004648	ＳＴ049墓道	須恵器	杯身	(11.5)	(3.5)		砂粒少量	灰色	底部ヘラケズリ、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-323		95004645	ＳＴ049墓道	須恵器	杯身	(11.3)	(3.2)		砂粒少量	灰褐色	底部ヘラケズリ、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-324		95004649	ＳＴ049墓道	須恵器	杯身	(11.6)	3.5		砂粒少量	灰色	底部ヘラケズリ、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-325		97002010	ＳＴ049墓道	須恵器	杯身	(11.0)	(3.3)		砂粒少量	灰色	底部ヘラケズリ、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-326		95004618	ＳＴ049墓道	須恵器	杯身	(11.4)	3.5		砂粒少量	灰白色	底部ヘラケズリ、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-327		95004600	ＳＴ049墓道	須恵器	杯身	(11.1)	3.2		砂粒少量	灰褐色	底部ヘラケズリ、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-328		95004624	ＳＴ049墓道	須恵器	杯身	(10.8)	(3.5)		砂粒少量	灰色	底部ヘラケズリ、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-329	39-4	95002006	ＳＴ049墓道	須恵器	杯身	8.2	(2.8)		砂粒少量	灰色	天井部ヘラ切り離し後ナデ、ロナデ	ロクロナデ
-330		95004616	ＳＴ049墓道	須恵器	杯身	(12.0)	(3.6)		砂粒少量	灰白色	底部ヘラケズリ、ほかロクロナデ	ロクロナデ

Tab.15　戦場古墳群６区古墳時代、奈良・平安時代の土器一覧表（５）

Fig.図番号	PL.番号	県遺物登録番号	出土地点	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	色調	調整 外器面	内器面
116-331		95004640	ＳＴ049墓道	須恵器	杯身	9.1	2.3	6.5	砂粒少量	灰色	天井部ヘラ切り離し後ナデ,ロナデ	ロクロナデ
-332		95004628	ＳＴ049墓道	土師器	杯身	(9.5)	3.0	5.2	砂粒少量	橙色	天井部ヘラ切り離し後ナデ,ロナデ	ロクロナデ
-333		95004639	ＳＴ049墓道	須恵器	杯身	(9.6)	4.2	(6.4)	砂粒少量	灰色	天井部ヘラ切り離し後ナデ,ロナデ	ロクロナデ
-334		97002009	ＳＴ049墓道	須恵器	杯身	(16.0)	5.4	(9.4)	砂粒少量	灰色	天井部ヘラ切り離し後ナデ,ロナデ	ロクロナデ
-335		95004642	ＳＴ049墓道	土師器	杯	(14.8)	(5.0)		砂粒少量	橙色	底部ヘラケズリ、ほかナデ	ナデ
117-336		95004623	ＳＴ049墓道	須恵器	高杯	(10.8)	(5.2)		砂粒少量	灰色	底部ヘラケズリ,ほかロクロナデ	ロクロナデ
-337		95004603	ＳＴ049墓道	須恵器	高杯	9.0	(4.8)		砂粒少量	暗灰色	ロクロナデ	ロクロナデ
-338	39-6	95004599	ＳＴ049墓道	土師器	脚付壺	(4.7)	8.0		砂粒少量	褐色	脚部ヘラケズリ、ほかナデ	ナデ
-339		95004606	ＳＴ049玄室	須恵器	甕		(8.1)		砂粒少量	灰色	ロクロナデ	ロクロナデ
-340		95004629	ＳＴ049玄室	須恵器	台付鉢	(13.2)	(9.0)		砂粒少量	灰色	杯底部ヘラケズリ、ほかロナデ	ロクロナデ
-341		95004625	ＳＴ049玄室	須恵器	長頸壺	9.6	(10.7)		砂粒少量	灰色	ロクロナデ	ロクロナデ
-342		95004635	ＳＴ049墓道	須恵器	壺	10.5	(4.2)		砂粒少量	灰色	体部カキメ、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-343	39-7	95004608	ＳＴ049墓道・玄室	須恵器	長頸壺		(11.1)	5.2	砂粒少量	暗赤褐色	ロクロナデ、刻み目	ナデ
-344	39-5	95004626	ＳＴ049墓道	須恵器	瓶		(8.0)		砂粒少量	灰色	底部手持ちヘラケズリ,ほかロナデ	ロクロナデ
-345	39-8	95004602	ＳＴ049墓道	須恵器	壺		(11.8)	13.6	砂粒少量	褐色	天井部ヘラ切り離し後ナデ,カキメ	ロクロナデ
-346		95004643	ＳＴ049墓道	須恵器	壺？		(7.0)	(11.2)	砂粒少量	灰色	底部ヘラケズリ、ほかロクロナデ	ロクロナデ
-347	39-10	97002007	ＳＴ049墓道	須恵器	広口壺	13.8	19.7		砂粒少量	灰色	タタキ後カキメ、ほかロナデ	ロクロナデ
-348	39-9	95004634	ＳＴ049	須恵器	短頸壺？		(13.6)	11.8	砂粒少量	灰色	底部ヘラケズリ、ほかカキメ	ロクロナデ
120-379		95004574	ＳＸ035	土師器	杯	(11.5)	(2.4)	7.8	砂粒微量	橙色	底部ヘラ切り後ナデ	ナデ
-380		99003313	ＳＸ035	土師器	杯		(0.8)	(7.7)	砂粒微量	橙色	底部ヘラ切り後ナデ	ナデ
-381	40-2	95004575	ＳＸ035	土師器	皿	(7.8)	1.7	(11.0)	小石・砂粒少量	橙色	ナデ	ナデ
-382	40-1	95004573	ＳＸ035	須恵器	短頸壺	(10.0)	16.9	(8.8)	小石・砂粒少量	灰色	体下半部回転ヘラケズリ,他ロクロナデ	ロクロナデ,ナデ
-383		95004572	ＳＸ036	土師器	皿	18.2	1.5	14.7	砂粒微量	橙色	底部ヘラ切り後、回転ナデ	ナデ
-384		95004571	ＳＸ036	土師器	鉢	17.4	9.1		砂粒・雲母少量	橙色	ナデ	ナデ
121-385	40-7	95004576	ＳＸ038	土師器	甕	19.3	(5.8)		砂粒少量	橙色	不明	胴部ヘラケズリ
-386	40-3	95004570	ＳＸ038	土師器	蓋	16.2	2.2		砂粒少量	橙色	天井部ヘラ切り	ナデ
-387	40-4	95004569	ＳＸ038	土師器	蓋	15.7	2.3		砂粒少量	橙色	ナデ、墨書あり	ナデ
-388		97002897	ＳＸ037	土師器	皿	23.9	1.7	17.8	砂粒少量	橙色	底部ヘラ切り離し後ヘラケズリ	ナデ
-389		97002898	ＳＸ037	須恵器	杯身		(2.0)	(8.5)	砂粒少量	赤褐色	底部ヘラ切り離し後ロクロナデ	
-430	40-12	96002662	ＳＸ037	土師器	鉢	(12.0)	(8.2)		小石・砂粒少量	橙色		
-431	40-13	97002438	ＡＮ20黒褐色包含層	土師器	皿	14.4	2.8	8.5	小石・砂粒多量	橙色	底部ヘラナデ、ナデ	ナデ
-432		96002644	ＡＮ20黒褐色包含層	土師器	杯		(1.9)	8.0	砂粒少量	橙色	ナデ	不明

Tab.16　戦場古墳群６区鉄製品ほか一覧表（１）

Fig. 図番号	PL. 番号	県遺物登録番号	出土地点	種別	器種	分類・部位	法量 (cm) 長さ	幅	厚さ	備考
80-114	35-6~8	99003318	ＳＴ033墓道	鉄製品	騎馬金具	—	高(2.9)	長径2.55	短径2.3	銀象嵌
115	35-3	99001100	ＳＴ033	〃	鏃	鏃身部～茎部	(11.7)	(0.9)	(0.4)	有茎尖根鏃、小型柳葉式
116	35-3	97001521	ＳＴ033玄室	〃	〃	鏃身部のみ	(3.7)	(2.4)	(0.3)	有茎平根鏃、斧箭式
117	35-3	97001520	ＳＴ033	〃	刀子	関部のみ	(3.7)	(2.0)	(0.5)	一部木質残存
118	35-3	99003319	ＳＴ033 3区	〃	鐙	U字金具	(6.7)	(1.8)		〃
119	35-5	99003320	ＳＴ033羨道	〃	轡金具		(3.4)	(2.5)		座金具が一部残存
120	35-5	97000579	ＳＴ033	青銅製品	耳環		径2.3		(0.45)	
121	35-4	97001466	ＳＴ033玄門部	鉄製品	轡		環幅8.0、立聞幅3.1			
94-237	37-15	97000575	ＳＴ034	〃	鏃	鏃身部～茎部	(11.7)	1.0	0.4	有茎尖根鏃、小型柳葉式
238	37-15	97000576	ＳＴ034	〃	Jun-35	鏃身部～茎部	(11.6)	1.2	0.4	〃 、茎部に木質残存
239	37-15	97001089	ＳＴ034墓道	〃	〃	鏃身部～頸部	(7.8)	0.9	0.4	有茎尖根鏃、小型柳葉式
240	37-15	97001090	ＳＴ034玄室	〃	〃	鏃身部～頸部	(8.4)	(2.6)	0.40	有茎平根鏃、柳葉式
241	37-15	97001093	ＳＴ034墓道	鉄製品	弓付金具	—	(3.5)	(0.4)		
242	37-15	97000577	ＳＴ034羨道	〃	刀子	茎部一部欠	(12.3)	1.8	0.45	
243		97001095	ＳＴ034	〃	〃	茎部一部欠	(10.2)	2.1	0.5	
244	37-15	97001091	ＳＴ034玄室	〃	〃	茎，刃部欠	(5.7)	1.7	0.60	
245	37-15	97001096	ＳＴ034	〃	〃	縁金具	(2.8)	(2.2)		
101-273	38-2	98001567	ＳＴ039羨道	〃	鉸具	差し金	(3.8)	(0.8)		
274	38-2	98001569	ＳＴ039羨道	〃	鏃	鏃身部	(3.1)	0.7		
275	38-2	98001568	ＳＴ039羨道	〃	鉸具	差し金	(4.0)	(0.6)		
110-297	38-13	97001519	ＳＴ040玄室	青銅製品	耳環		径2.45		0.55	
118-349	39-12	97000558	ＳＴ049羨道	鉄製品	鏃	鏃身部	(2.4)	(1.1)	(0.4)	有茎尖根鏃、柳葉式
350	39-12	97000552	ＳＴ049羨道	〃	〃	鏃身部～頸部	(5.6)	(1.2)	(0.40)	有茎平根鏃、斧箭式
351	39-12	97000553	ＳＴ049墓道	〃	〃	鏃身部～頸部	(6.6)	(1.45)	(0.5)	有茎平根鏃、斧箭式
352	39-12	97000560	ＳＴ049羨道	〃	〃	頸部	(6.5)	(0.5)		
353	39-12	97000555	ＳＴ049墓道	〃	〃	鏃身部	(3.6)	(3.7)		有茎平根鏃、三角形式
354	39-12	97000557	ＳＴ049墓道	〃	〃	関部	(3.3)	(1.1)	(0.30)	
355	39-12	97000567	ＳＴ049羨道	〃	〃	鏃身部～頸部	(3.1)	(1.4)	0.25	有茎尖根鏃、小型柳葉式
356	39-12	97000559	ＳＴ049羨道	〃	弓付金具	—	3.6	0.45		
357	39-12	97001515	ＳＴ049玄室床面	青銅製品	責金具	—	(1.7)	(1.2)	0.1	
358		97000554	ＳＴ049墓道	鉄製品	鏃	鏃身部	(4.1)	3.0	(0.2)	有茎平根鏃、斧箭式
359	39-12	97000556	ＳＴ049羨道	〃	〃	鏃身部	(4.35)	2.95	(0.2)	有茎平根鏃、斧箭式
360	39-11	97000564	ＳＴ049閉塞部	〃	鐙	U字金具	(8.0)	(3.9)		
361		97000568	ＳＴ049閉塞部	〃	轡金具		(6.8)	(4.4)		
362	39-11	97000563	ＳＴ049閉塞部	〃	鉸具		(4.5)	(4.5)		
363	39-11	97000562	ＳＴ049羨道	〃	〃		(2.7)	(3.9)		
364	39-11	97000561	ＳＴ049羨道	〃	〃	差し金	(5.1)	(0.7)		
365	39-11	97000569	ＳＴ049	〃	辻金具	留金具	3.4	2.2		鉄地金銅張り、金箔残存
366	39-11	97000573	ＳＴ049羨道	〃	〃	〃	3.15	2.1		鉄地金銅張り
367	39-11	97000574	ＳＴ049羨道	〃	〃	〃	2.55	2.2		鉄地金銅張り、金箔残存
368	39-11	97000572	ＳＴ049羨道	〃	〃	〃	2.65	2.1		鉄地金銅張り、金箔残存
369		97000571	ＳＴ049	〃	〃	〃	(2.0)	(2.0)		鉄地金銅張り、金箔残存
370	39-11	97000570	ＳＴ049羨道	〃	飾金具		(8.3)	(4.7)		鉄地金銅張り、金箔残存
371	39-13	97002002	ＳＴ049玄室	銅銭	永楽通宝		径2.4			
372		97002003	ＳＴ049玄室	〃	寛永通宝		径2.4			
373		97002004	ＳＴ049玄室	〃	〃		径2.4			
374	39-13	97001517	ＳＴ049玄室	鉄銭			径2.8			
375	39-13	97001513	ＳＴ049玄室	〃			2.1	(0.9)		
376		97001514	ＳＴ049玄室	〃			径2.4			
377	39-13	97001518	ＳＴ049玄室	〃			径2.5			
378	39-13	97001516	ＳＴ049玄室	〃			径2.7			
122-390	40-9	99001651	ＳＸ054	土製品	土馬		(11.7)	(3.6)	高5.7	
391	40-9	99001652	ＳＸ054	〃	〃		(4.25)	(2.4)	高(2.8)	
392	40-9	97001654	ＳＸ054	〃	〃		(8.6)	(4.0)	高(3.9)	
393	40-9	99001653	ＳＸ054	〃	〃		(7.2)	(4.5)	高(4.8)	
123-394	40-8	99001000	ＡＮ19検出面(ＳＸ054)	土製品	土馬		13.0	6.9	高5.3	
395	40-10	97002415	ＳＸ054	〃	人形？		5.7	(3.1)	1.75	
396	40-10	97002402	ＳＸ054	〃	〃	—	7.5	6.2	2.40	
397	40-10	97002408	ＳＸ054	〃	〃	—	8.5	(4.2)	2.30	
398	40-10	97002410	ＳＸ054	〃	〃	—	(6.3)	(4.7)	2.60	
399	40-10	97002409	ＳＸ054	〃	〃	—	7.7	(5.5)	3.0	
400	40-10	97002411	ＳＸ054	〃	〃	—	7.2	(3.2)	2.3	
401	40-10	97002414	ＳＸ054	〃	〃	—	(6.6)	(4.0)	(2.0)	
402	40-11	97002418	ＳＸ054	〃	〃	—	径4.1		0.8	
403	40-11	97002416	ＳＸ054	〃	〃	—	径4.0		0.65	
404	40-11	97002404	ＳＸ054	〃	〃	—	径5.2		0.8	
405	40-11	97002417	ＳＸ054	〃	〃	—	径4.6		0.7	
124-406	40-11	97002407	ＳＸ054	〃	動物脚？	—	(8.5)	(2.7)	(1.95)	
407	40-11	97002403	ＳＸ054	〃	〃	—	(7.9)	(2.1)	(1.8)	

Tab.16　戦場古墳群６区鉄製品ほか一覧表（２）

Fig. 図番号	PL. 番号	県遺物登録番号	出土地点	種別	器種	分類・部位	法量（cm） 長さ	幅	厚さ	備考
408	40-11	97002405	SX054	土製品	動物脚？	—	(8.1)	(2.5)	(2.0)	
409	40-11	97002406	SX054	〃	〃	—	(8.8)	(3.8)	(1.9)	
410	40-11	97002412	SX054	〃	〃	—	(5.6)	(2.2)	(1.2)	
411		97002426	SX054	〃	〃	—	(3.2)	(2.5)	(1.7)	
412		97002424	SX054	〃	〃	—	(2.6)	(1.8)	(1.4)	
413		97002423	SX054	〃	〃	—	(3.2)	(1.5)	(1.3)	
414		97002425	SX054	〃	〃	—	(2.8)	(2.0)	(1.4)	
415		97002429	SX054	〃	不明	—	(2.6)	(2.0)	(1.2)	
416		97002435	SX054	〃	〃	—	(2.7)	(1.6)	(1.1)	
417		97002434	SX054	〃	〃	—	(2.4)	(1.9)	(1.5)	
418		97002427	SX054	〃	〃	—	(3.0)	(1.9)	(1.3)	
419		97002437	SX054	〃	〃	—	(3.0)	(1.9)	(1.2)	
420		97002419	SX054	〃	〃	—	(3.9)	(2.0)	(1.5)	
421		97002422	SX054	〃	〃	—	(3.0)	(1.8)	(1.5)	
422		97002420	SX054	〃	〃	—	(3.5)	(2.0)	(1.6)	
423		97002421	SX054	〃	〃	—	(3.2)	(1.9)	(1.4)	
424		97002433	SX054	〃	〃	—	(2.9)	(1.7)	(1.2)	
425		97002430	SX054	〃	〃	—	(2.7)	(1.4)	(1.3)	
426		97002436	SX054	〃	〃	—	(2.2)	(1.5)	(1.4)	
427		97002432	SX054	〃	〃	—	(2.9)	(1.1)	(1.0)	
428		97002428	SX054	〃	〃	—	(2.6)	(1.9)	(1.2)	
429		97002431	SX054	〃	〃	—	(2.6)	(1.2)	(0.9)	

Ⅵ．戦場ヶ谷遺跡２区の遺構と遺物

１．遺跡の概要（Fig.125）

戦場ヶ谷遺跡２区はほかうそ溜池東側丘陵から北に続く尾根上の標高51～56mに立地しており、この丘陵からさらに北へ150mの地点には戦場古墳群２区が位置する。この尾根の西傍には狭い谷部を挟んで戦場古墳群５区の位置する丘陵が伸び、一方の東側は現況水田となっている広い谷部が広がる。

戦場ヶ谷遺跡は、1934年に七田忠志氏によって表採押型文土器片が紹介されて[1]以来、縄文土器研究史の上で、早期の押型文土器が採集される遺跡として著名である。七田氏の採集地点は主にほかうそ溜池東岸の丘陵上を中心としていると思われるが、採集資料中には「戦場北」の註記もあり、これについては、ほぼこの戦場ヶ谷遺跡２区を指すものと推定され、戦前まではこの一帯の各所で押型文土器が表採されたのであろう。しかし、昭和20～30年代には蜜柑園造成により一帯は大きく地形の改変がなされたものと思われ、調査区内で確認された３基の古墳も封土をすべて失っている上、基底面まで削平を受けており、現況ではにわかには旧地形を窺い知ることは難しい状況である。

戦場ヶ谷遺跡２区については、当初計画では県文化財課と県土地開発公社との協議により、ほかうそ溜池東岸の丘陵上を含めて保存地帯（緑地帯）とされていた。しかし、工業団地計画が二期に別れたことから、一期工事分の工場用地を補うために工事対象範囲に取り込まれ、本発掘調査対象地区に含まれることとなった。戦場ヶ谷遺跡２区の調査にあたっては、平成５，６，７，９年度の４期に分けて調査を行い、それぞれA区（540㎡），B区（1,500㎡），C区（2,800㎡），D区（4,200㎡）に区分され、総調査面積は9,040㎡である。なお、調査は丘陵上を中心とするが、戦場古墳群５区との間の狭い谷部について掘削機によりトレンチ調査を実施したところ、深さ３m以上に青灰色粘土が厚く堆積しているのが確認されており、本来はより深く急峻な谷状地形をなしていたも

Tab.17　戦場ケ谷遺跡２区遺構一覧表

遺構番号	種　別	形態及び特徴	規模（長さ×幅×深さ）：m	主軸方位	出土遺物	時代・時期
SP002	土壙墓	長方形	長さ1.9、幅0.7m	N－4°－E	なし	奈良～平安（8C後半～末）
SK003	土壙	長楕円形？	長さ（1.2）、幅0.8m	N－4°－E	土師器(高杯)	奈良～平安（8C後～末）？
ST004	古墳	円墳（横穴式石室）	不明		須恵器・土師器・鉄器（鏃・弓付属金具・釘・鐙・鉸具・飾り金具）・鉄銭・ガラス小玉	古墳後期（６世紀末～７世紀初頭）
SK005	土壙	不定形、二段掘り	1.6×1.1m	N－18°－E	縄文早期・晩期の土器	縄文時代晩期
SK006	土壙	不定形	2.45×0.75m	N－12°－E	縄文晩期の土器、黒曜石フレイク	縄文時代晩期
SX009	不明遺構	半弧状	長さ5.2、幅1.8m	—	須恵器（甕）	古墳後期？
ST010	古墳	円墳（横穴式石室）	径　11～12m	S－8°－W	土師器（杯）・須恵器（甕）	古墳後期（６世紀中頃）
ST011	古墳	円墳	径　約10m	不明	なし	古墳後期？
SX012	集石遺構	不定形の集石	径　0.6～0.8m	—	なし	縄文時代早期
SK013	土壙	楕円形	長軸2.4、短軸0.6m	N－60°－W	縄文早期の押型文土器	縄文時代早期？
SP014	木棺墓	長方形	長さ2.2、幅1.8m	N－16°－E	鉄製刀子、鉄釘	奈良～平安（8C後半～末）
SP017	土壙墓	略長方形	長軸1.7、短軸0.7m	N－10°－W	土師器（杯）	平安初頭（8C末～9C前半）
SX018	不明遺構	楕円形	長軸0.5、短軸0.45m	—	弥生土器（壺）	弥生前期前半
SX020	集石遺構	花弁状石組炉	1.0×0.7m	—	なし	縄文時代早期
SX023	集石遺構	花弁状石組炉	径　0.7m	—	なし	縄文時代早期
SX024	集石遺構	花弁状石組炉	掘り方長軸0.8、短軸0.65	—	なし	縄文時代早期
SX025	集石遺構	不定形の集石	径　0.4m	—	なし	縄文時代早期
SX026	集石遺構	花弁状石組炉	径　1.1m	—	なし	縄文時代早期
SX028	集石遺構	円形の集石	径　0.5m	—	縄文早期の無文土器	縄文時代早期
SX031	集石遺構	不定形の集石	径　0.6m	—	なし	縄文時代早期
SX032	集石遺構	不定形の集石	径　0.9m	—	なし	縄文時代早期

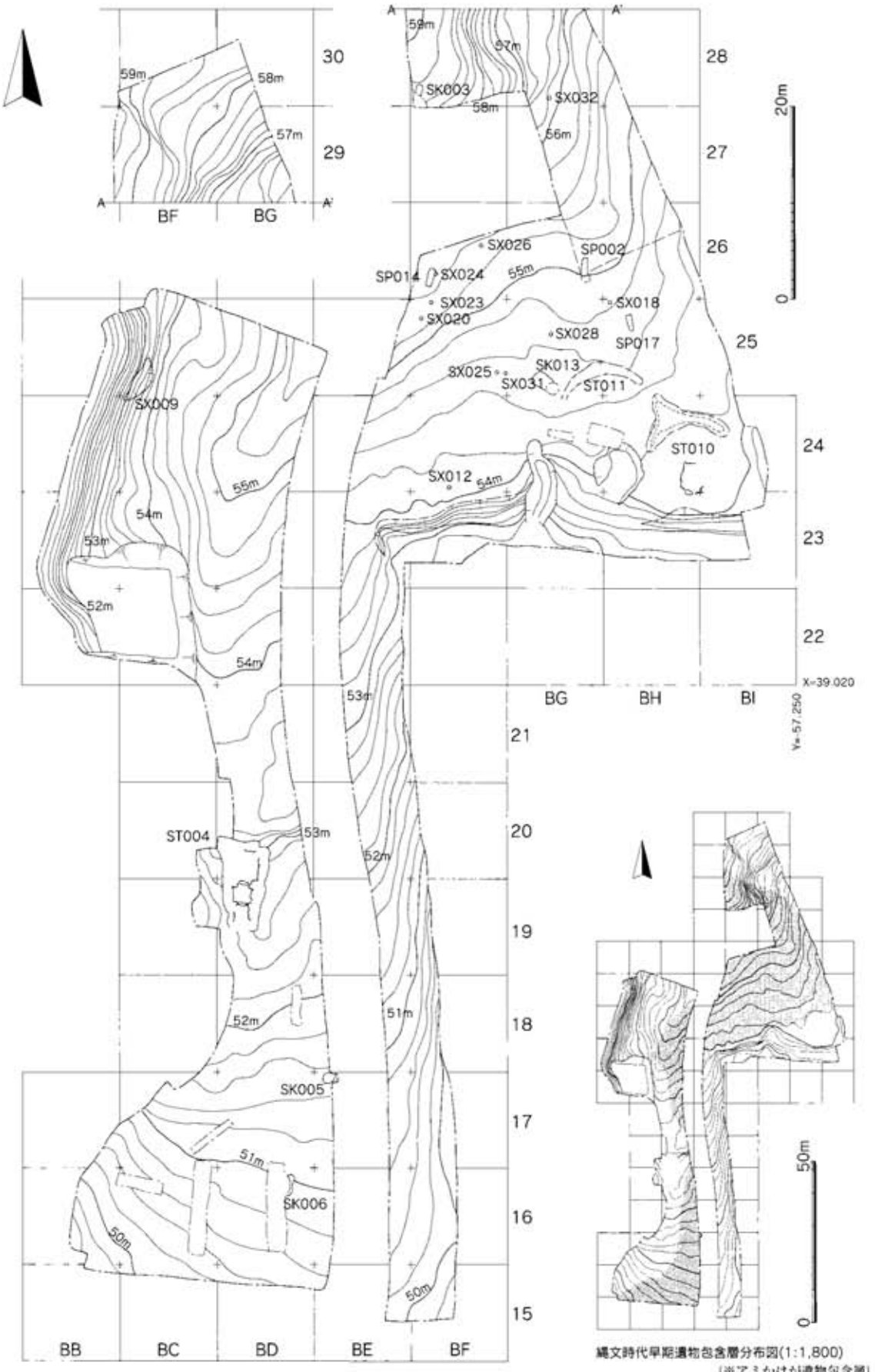


Fig.125　戦場ケ谷遺跡２区遺構配置図（1：600）

のと推定される。

発掘調査の結果、対象地は予想されたように蜜柑園造成により大きく削平を受けていたが、それでも約1,600㎡にわたって縄文時代早期の遺物包含層が確認され、2,000点余りの縄文早期の土器・石器が出土した他、花弁状石組炉を含む9基の集石遺構を検出した。またその他の時代の遺構として縄文時代晩期の土壙2基に加え、古墳3基、平安時代前期の土壙墓2基・木棺墓1基、弥生時代前期の不明遺構1基等が確認されている。

註1）七田忠志（1934）：「佐賀縣戰場ケ谷出土彌生式有紋土器に就いて」史前学雑誌六巻二号
七田忠志（1934）：「其の後佐賀縣戰場ケ谷遺蹟と吉野ヶ里遺蹟に就いて」史前学雑誌六巻四号

2．縄文時代の遺構と遺物

（1）縄文時代早期遺物包含層の調査

①土層堆積（Fig.128～130）

戦場ケ谷遺跡2区においては、約1,600㎡に広がる縄文時代早期の遺物包含層が確認されている。この遺物包含層は戦場古墳群1区における縄文時代早・前期の遺物包含層（Ⅲ層：黄褐色粘質土）とほぼ同質の黄褐色粘質土（Ⅱb層）を中心としており、その他、より赤みの強い明赤褐色粘質土（Ⅱc層）が部分的にⅡb層下で見られる。このⅡb層・Ⅱc層も戦場古墳群1区のⅢ層と同じく花崗岩風化土壌と黄砂等の風積土壌を主な成因としている。この遺物包含層の内、その中心となるⅡb層はA区の南部及びD区の中央から北部にかけての部分で最も良好に堆積しており、B区・C区については調査区東寄りの現況農道付近のみに見られ、さらにB区南側の保存地区である蜜柑畑まで続いている。この黄褐色粘質土からなる遺物包含層は、前述の分布範囲全域で縄文時代早期の遺物を包含しているが、その分布密度は戦場古墳群1区より低く、A区の南部からD区の北西部付近（BF25・BF26・BG26・BG27）、及びB区の南端付近（BD15）にのみ集中箇所が見られる。また、前者ではこのⅡb層中より9基の集石遺構が確認されたが、その他のA区・B区・C区においては、火熱を受けて赤変化した小礫が散在する状況が見られるものの、集石遺構については検出されていない。

このⅡb層より下位の状況についてはA区～D区の中でやや様相が異なる。まず調査区全体でこの丘陵の基盤層である花崗岩風化層を確認したのはA区の北方とC区の西側であり、特にC区においては土層観察によって西から東に向かって傾斜して下って行く花崗岩風化基盤層（Fig.130のⅨ層）が確認されている。ここではⅨ層と遺物包含層であるⅡb層との間に、粘性に乏しく花崗岩風化砂粒を多く混入する、Ⅲa層、Ⅲb層、Ⅳ層、Va層が見られる。これらの層はⅡb層と同様に水平に安定した堆積を示しており、この内、Ⅲa層、Ⅲb層、Va層は色・質の異なる複数の土が混在する漸移層的な特徴を持つが、Ⅳ層は不純物もなく、黒色砂質土のみからなる。このⅣ層は厚さ0.4～0.6mと一定の厚さでベルト状に水平に堆積する非常に安定した層で、同様の黒色砂質土によるベルト状の堆積はB区・D区においても観察される。なお、土層観察では部分的にⅡb層がⅣ層付近まで抉れるように落ち込んでいるのが確認されているが、このことはⅡb層の下位の土層が脆い砂質土であることから、降雨等による水道（みずみち）への流れ込み、あるいは風倒木等に起因しているものと考えられる。

次にB区における土層堆積の状況であるが、ここでも遺物包含層であるⅡb層の下位に黒色砂質土によるベルト状の堆積（Ⅳ層）が見られ、その間層として褐灰色砂質土層（Ⅲb層）が堆積するが、C区と異なるのはこの間層が薄く、中でもBD16・BE16、BD17・BE18付近ではこの間層を挟まずⅡb層と黒色砂質土層が接している部分が見られることである。このことはⅡb層が風積土として堆積する前にⅢb層が流出したものと推定され、C区と同様、Ⅱb層の落ち込みが数箇所で見られるなど、粗い砂粒からなるⅢb層・Ⅳ層が降雨等による影

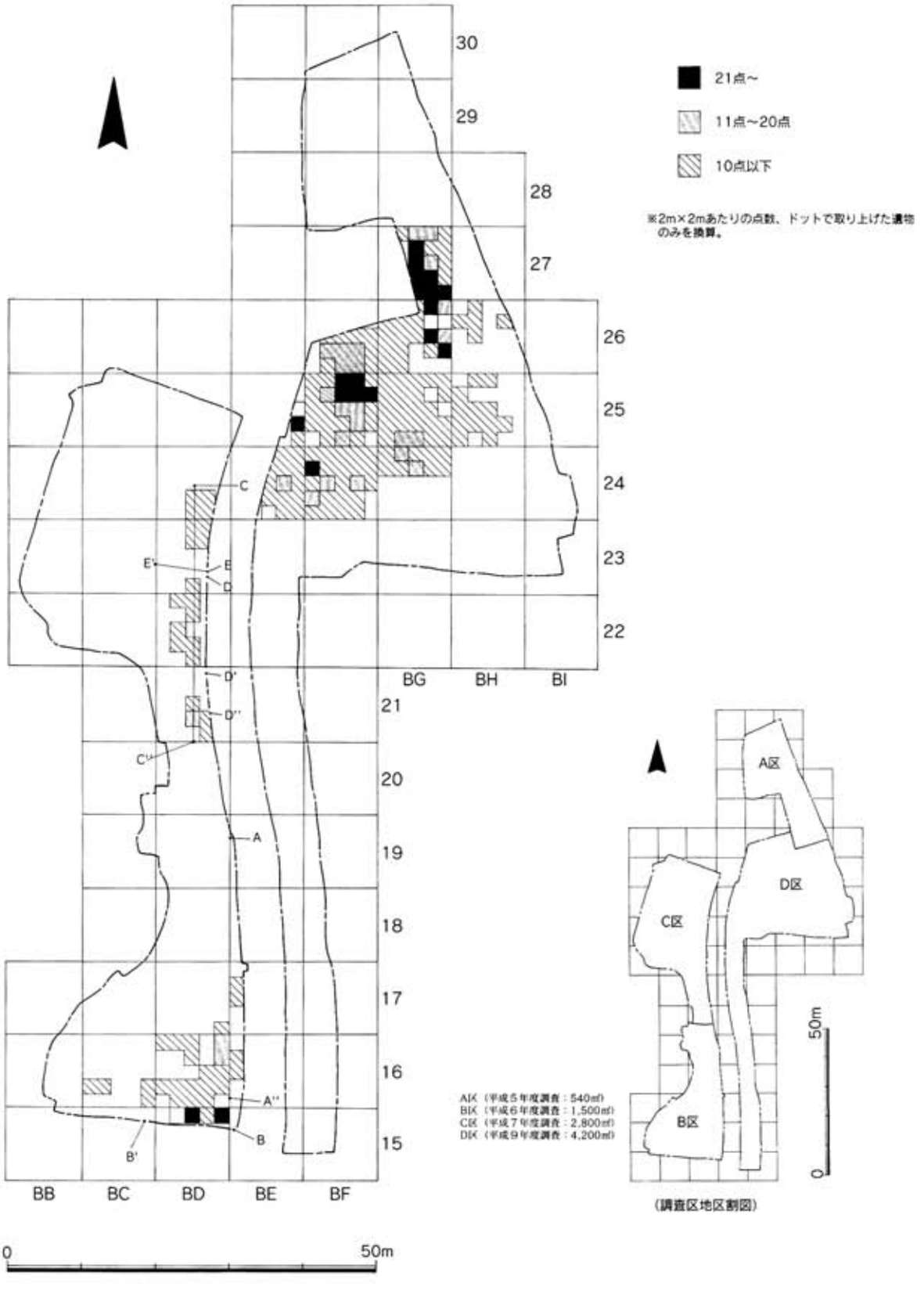


Fig.126　縄文時代早期の土器，石器出土分布状況（1：800）

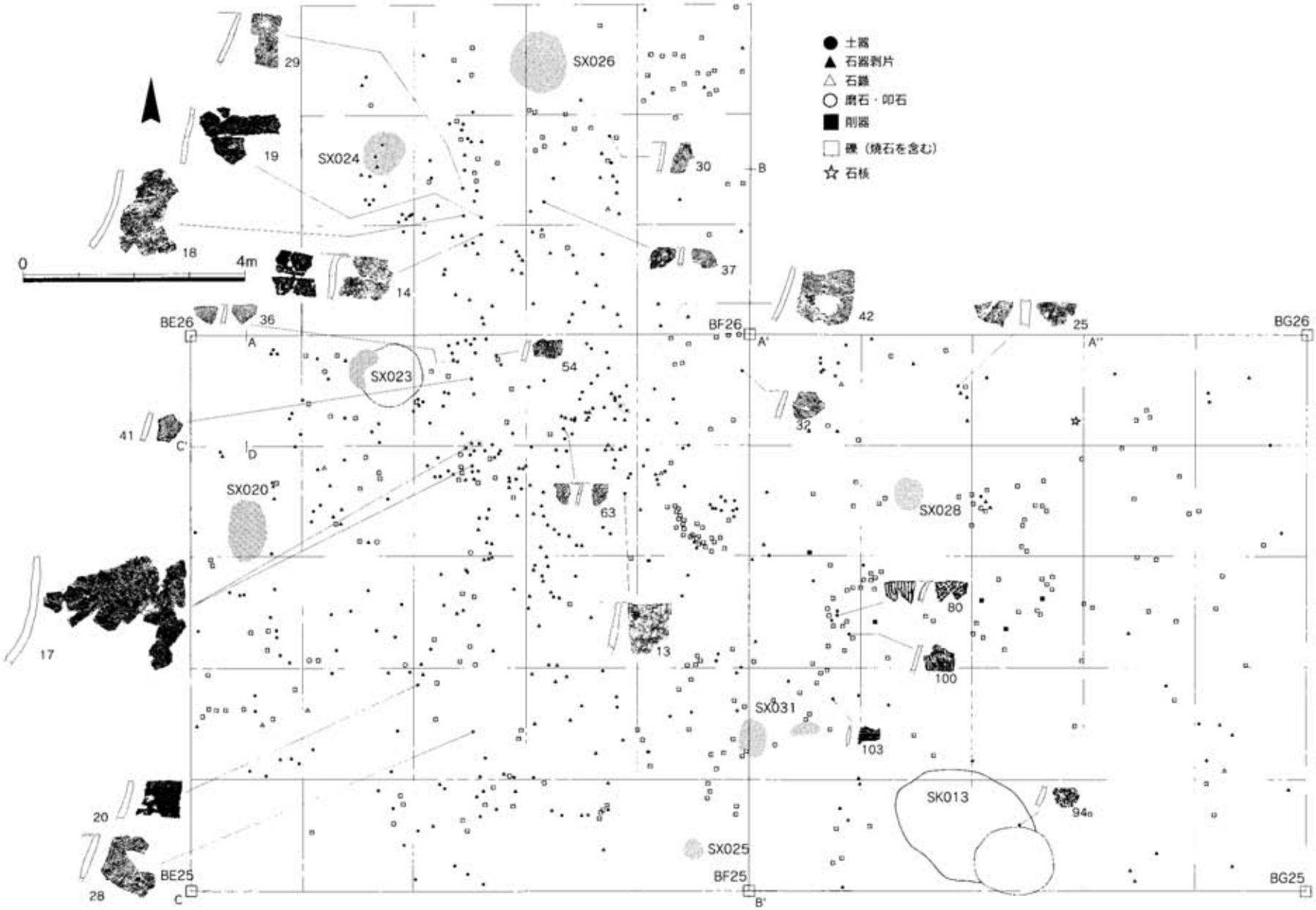


Fig.127　ＢＦ25，26、ＢＧ25Gr遺物出土状況（1：100）

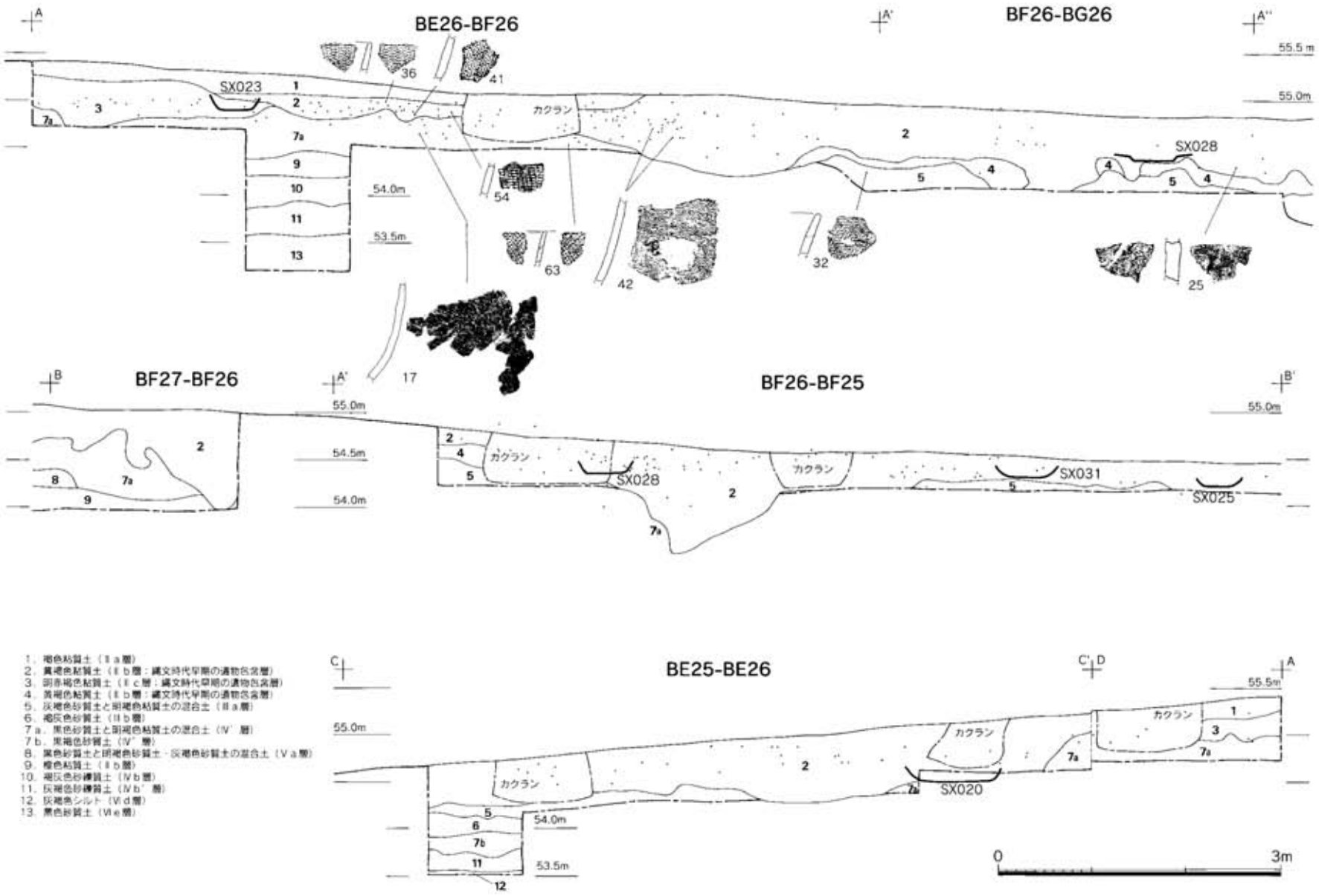


Fig.128　ＢＦ25，26、ＢＧ25Gr出土遺物垂直分布状況（1：60）

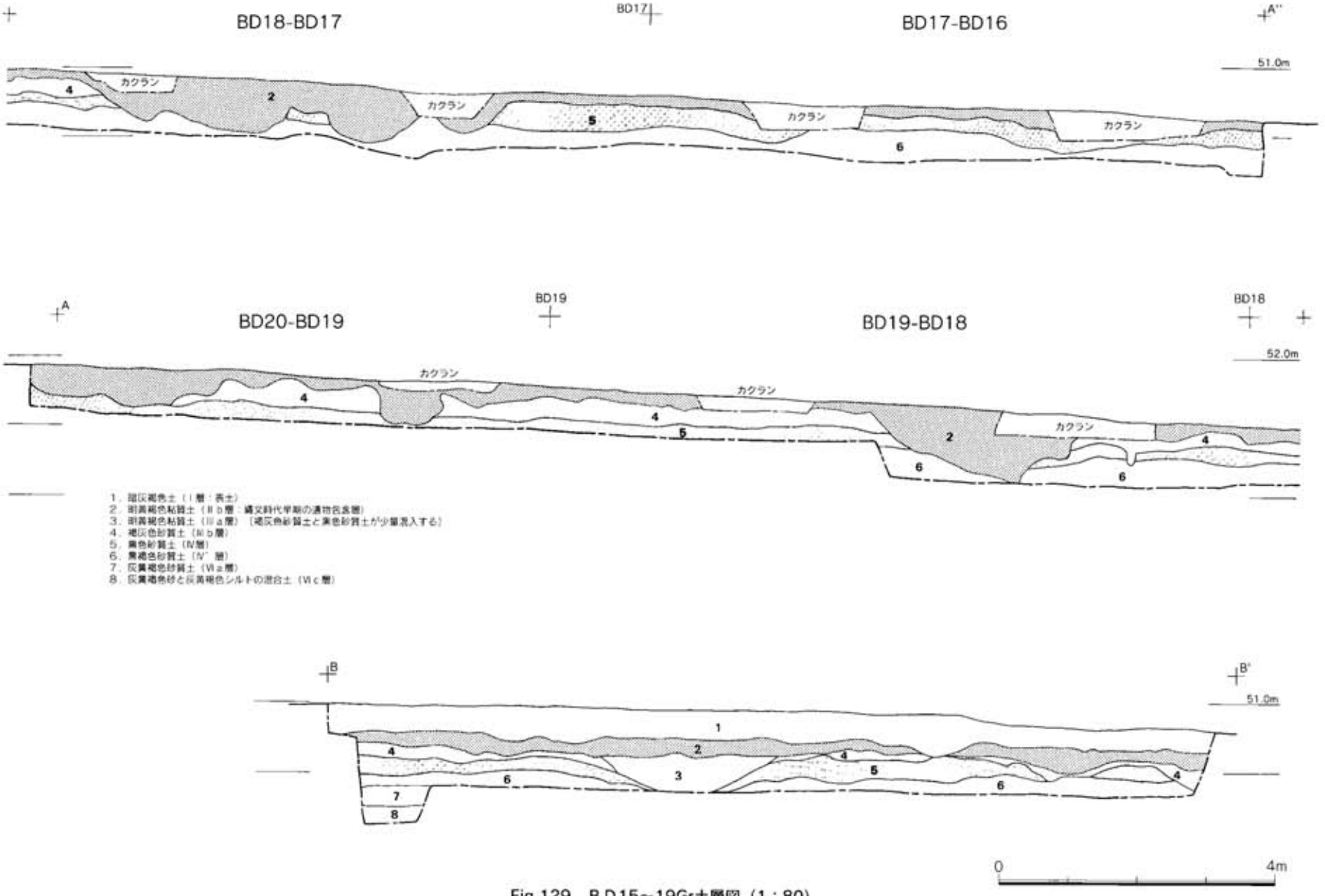


Fig.129　ＢＤ15～19Gr土層図（1：80）

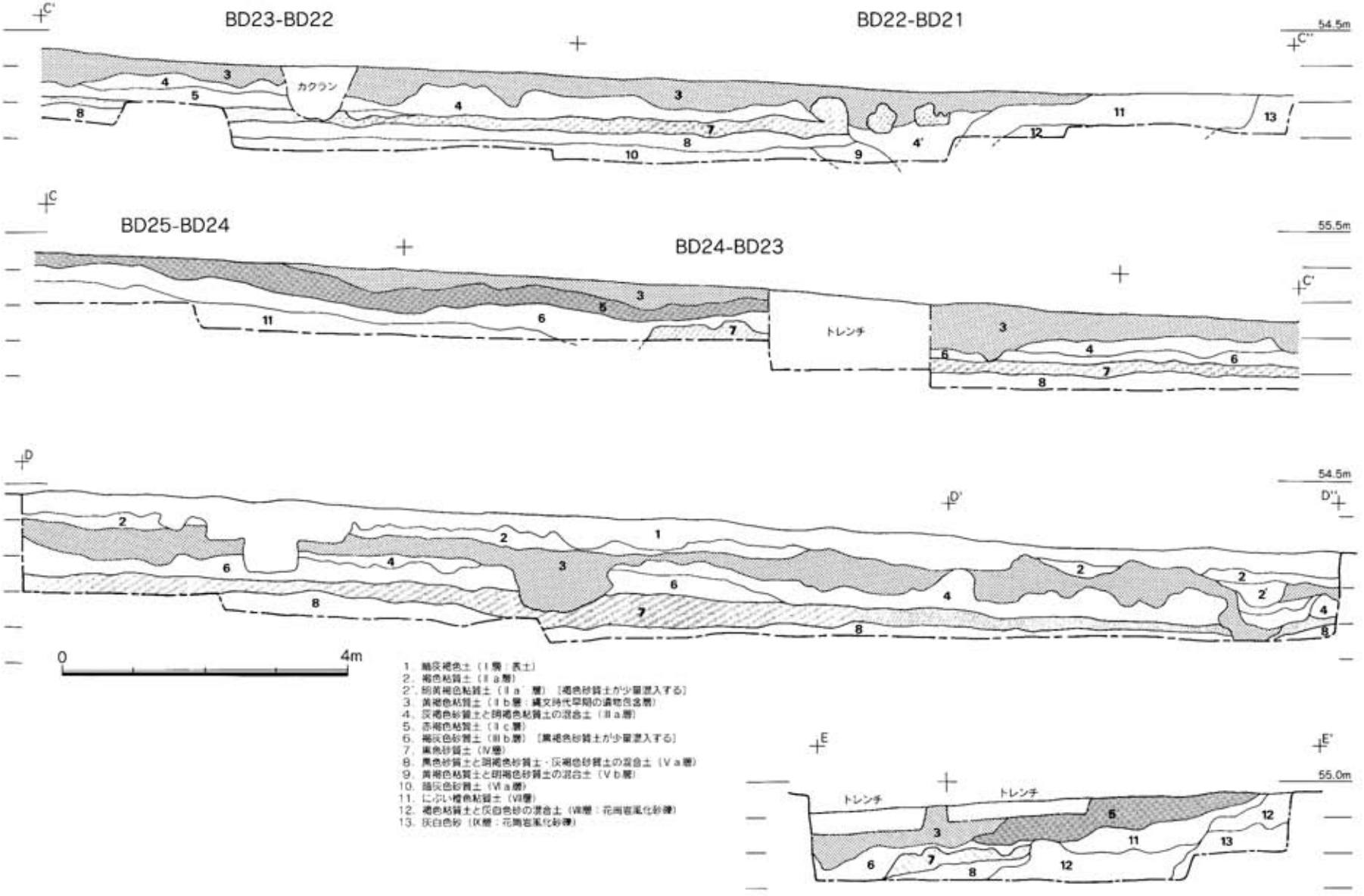


Fig.130　ＢＤ21～24Gr土層図（1：80）

響をより受けやすかったものと想像される。なおB区における遺物出土状況については、縄文時代早期の遺物を包含するのはⅡb層のみであり、中でも検出面に近い上層に集中するが、部分的にはⅡb層の落ち込み部分の下層からも出土している。

一方D区における土層堆積状況はB・C区とやや異なる。D区ではBF25グリッドの北西部付近で遺物包含層であるⅡb層のすぐ下位でⅣ′層が見られるが、このⅣ′層は黒色砂質土をベースとしながらも明褐色粘質土が多く混入するもので、前述のB区・C区における黒色砂質土によるベルト状の堆積とは土質が異なる。Ⅳ′層の土質・色調は戦場古墳群1区の縄文包含層の下位に見られるⅣ層と良く似ており、この両調査区における遺物包含層と下位のⅣ′層（戦場ケ谷遺跡2区）・Ⅳ層（戦場古墳群1区）との間係はほぼ同じものと考えてよいと思われる。さて、このBF25グリッドの北西部付近から南・東方向へ現況地形は緩やかに下って行くが、Ⅳ′層も同様にBF25グリッドの中程付近から南・東方向に傾斜を持って落ち込み、替わって包含層の下位ではⅢa層（灰褐色砂質土と明褐色粘質土の混合土）、Ⅲb層（褐灰色砂質土）など粗い砂粒からなる砂質土ベースの土層が見られる。これらの砂質土ベースの土層はⅡb層の下位でD区の南側・東側に向かって広がっているが、部分的にⅡb層の落ち込みが見られ、前述したB・C区と同様、砂質層の侵食された部分への流れ込みと考えられる。なお、B区・C区における黒色砂質土によるベルト状の堆積に相当するものとしてⅣ″層が考えられる。このⅣ″層はB区・C区における状況と同様、包含層との間に漸移層的なⅢa層（灰褐色砂質土と明褐色粘質土の混合土）、Ⅲb層（褐灰色砂質土）を挟んでほぼ水平な安定した堆積状況を示すなど良く似ているが、その色調は黒褐色を帯びやや明るい点が相違点として挙げられる。

なお、D区では縄文包含層の調査終了後にBF25・24グリッドを中心に掘削機を用いて部分的に掘り下げ、確認を行った。その結果、Ⅳ′層・Ⅳ″層の下位では砂礫質土（Ⅵb層・Ⅵb′層）、シルト層（Ⅵd層）、砂質土（Ⅵe層）などがほぼ水平な堆積を示しているのが見られ、いずれも無遺物層で混入物も見られない安定した層である。これらは花崗岩基盤層の上に載る段丘堆積物と考えられ、この戦場ケ谷遺跡2区より標高の高い区域では確認されていないことから、当該地付近に花崗岩基盤層と高位段丘堆積層との不整合面が存在しているものと推定される。

②遺物の分布状況（Fig.126・127・131）

戦場ケ谷遺跡2区のうち、一定量の遺物の集中が見られるのは主にD区の北西部を中心とした区域である。その他の区域における包含層中では、2m×2mの小グリッドからの土器・石器の出土が10点未満とかなり少なく、特に密集しているような状況も示していない。これらの区域では前述したように集石遺構を構成していたと思われる焼石などが散在していることからも、本来の生活面は失われ、遺物や集石の礫は二次的に大きく移動しているのと推定される。一方、D区においては土器・石器の出土が20点以上になる小グリッドも見られる他、花弁状石組炉を含む集石遺構も9基が遺存するなど、当時の生活面はある程度押さえられるものと考えられる。

Fig.127はD区の内、最も遺物の集中するBF25・26、BG25グリッドにおける出土遺物の平面分布状況を示したものである。この内、土器・石器・石器剥片が最も集中するのはBF25グリッドの北寄りからBF26グリッドの南寄りにかけて、つまりは花弁状石組炉SX023の東側からSX026の南側の付近にかけてである。この付近では山形文を施す押型文土器が集中して見られる他、石鏃・磨石が散在し、サヌカイト・黒曜石剥片も多く見られる。特に押型文土器は口縁部が直口し、口縁部内面に原体条痕を持たないものが主体を占める（29・30・36・37・63）。次にFig.128はBF26グリッドにおける出土遺物の垂直分布状況と土層・集石遺構の間係を図示したものである。遺物包含層であるⅡb層中の出土遺物は、遺構検出面であるⅡb層上面から下位に至るまで特定の高さ

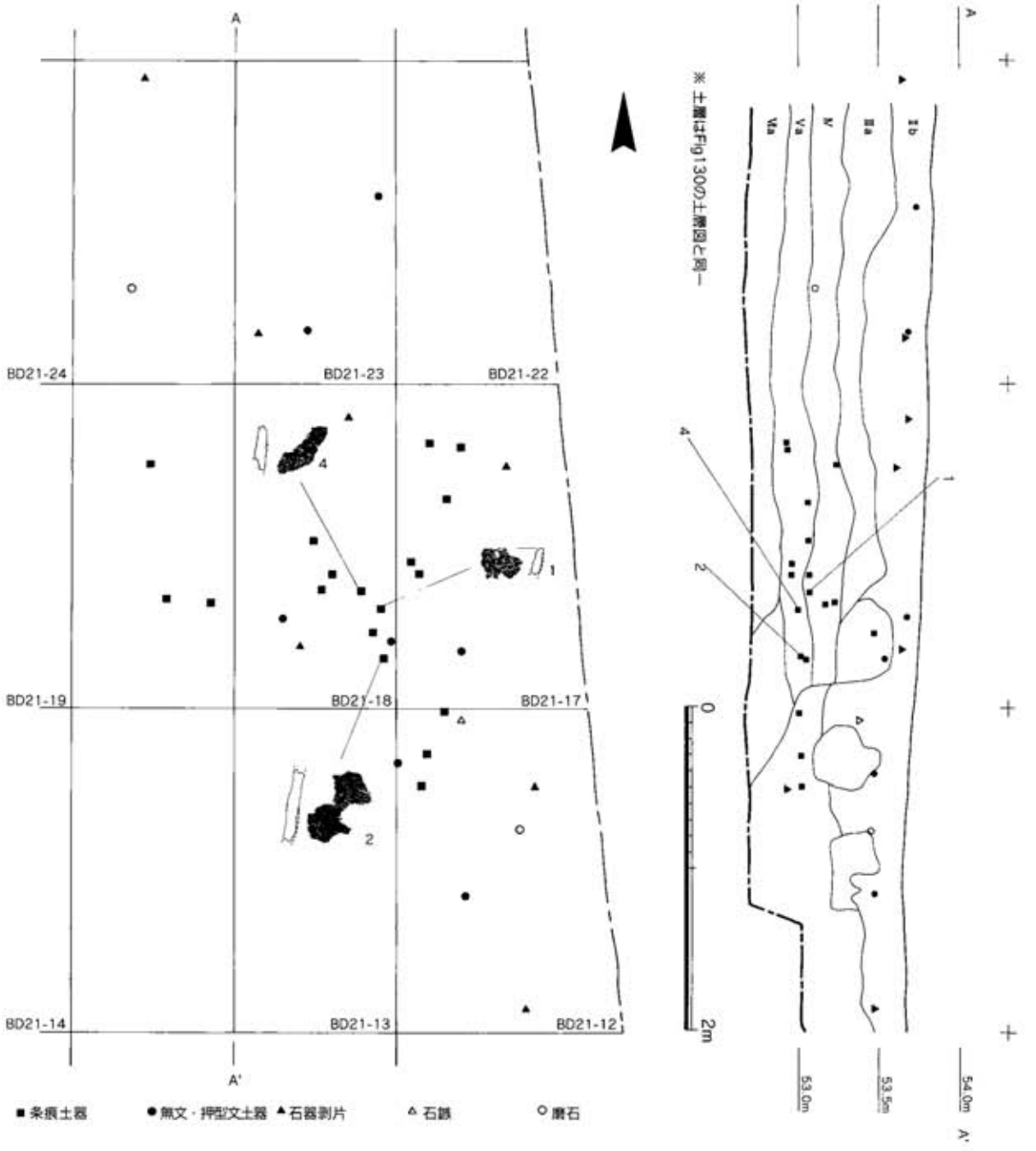


Fig.131　ＢＤ21Gr遺物出土状況（1：40）

で集中するような分布は見られないが、その下面はほぼ一定の高さで揃っており、全体的には地形の傾きに沿って東あるいは南方向にやや傾斜していることが分かる。また、この遺物分布の下面は集石遺構の高さとほぼ揃っており、集石遺構の下位からの遺物の出土はほとんど見られないことからも、包含層中の土器・石器がこれらの集石遺構が構築された時期に概ね伴うものと考えられる。ただし、戦場古墳群１区の状況と同様、土層観察によって遺物包含層中の生活面を層位的に押さえることは出来なかった。

なお、戦場ケ谷遺跡２区における縄文時代早期の土器・石器は、ほとんどすべてがⅡb層とした黄褐色粘質土に包含されていたが、ＢＤ21グリッド（Ｃ区）の一部でその下層から条痕土器数点が確認されている（Fig.131）。条痕土器が確認されたのは小グリッドＢＤ21－12，17，18付近にあたり、Ⅱb層とⅢa層（灰褐色粘質土と明褐色

粘質土の混合土層）を挟んで安定した堆積を示すⅣ層（黒色砂質土）から約60点（細片がほとんどであり、一定の大きさのものは十数点）が出土している（PL.41-4, 5）。Fig.131では条痕土器がⅣ層からⅤa層（黒色砂質土と明褐色粘質土・灰褐色砂質土）にかけて分布しているように見えるが、当該図は出土地点を土層図に投影したものであり、地形的には西から東に向かって緩やかに傾斜して下っていることから、出土層位は厳密に見ればⅣ層の下位にあたる。この条痕土器（Fig.134－1～4）は二個体程度の破片と思われるが、厚手で直口する口縁部を持ち、Ⅱb層中の押型文土器・無文土器とは異質で、特に胎土がかなり異なる。Ⅱb層中の押型文土器・無文土器とⅣ層中の条痕土器は、安定した堆積を示す土層中で間層を挟んで上下に分かれて分布しており、層位的資料として有効である。

③集石遺構（Fig.132・133）

集石遺構は９基が確認されており、ＳＸ032のみＡ区に、他はＤ区に位置し、いずれも縄文包含層であるⅡb層中に含まれる。このうち、いわゆる花弁状石組炉は４基（ＳＸ020・023・024・026・028）が見られる。集石遺構については戦場古墳群１区でＡ～Ｃ類に分類を行っているが、これに順じて分類すれば、花弁状石組炉のうちＳＸ023がＡ－Ⅱ類（炉壁の石が立ちぎみで炉の中心に石を敷くもの）に含まれるものの、その他のものについては遺存状態が良好でないため詳細は不明である。あえて言えば、ＳＸ020・026は炉壁が立ちぎみでＡ－Ⅰ類に、ＳＸ024は炉壁が寝かせぎみでＡ－Ⅱ類に含まれかと思われるが、ＳＸ023に見られるような炉の中心に敷いた石の有無については明らかではない。また、ＳＸ032は立てられたような石が見られ花弁状石組炉の可能性がある。この他、ＳＸ028・031がＢ－Ⅱ類（不定形で小型のもの）、ＳＸ012がＣ類（上下に層状に重なるもの）に当てはめられる。

平面的な分布状況については、花弁状石組炉のＳＸ020・023・024・026の４基がそれぞれ約３ｍの間隔を空けてＢＦ25からＢＦ26にかけて位置しており、これら４基は北東－南西の方向にほぼ等高線と並行に直線的に並ぶ。このうち、ＳＸ024・26とＳＸ020・023はそれぞれ方向が揃っていることからグループと捉えているが、ＳＸ024とＳＸ026が遺構面で約0.3ｍ、ＳＸ020とＳＸ023が約0.1ｍの比高差が見られる。このことは東あるいは南方向に地形的に傾斜していることに起因しているものとも推定され、それだけで炉を伴う生活面が複数面存在するとは言えない。前述したように、このＳＸ020・023・024・026周辺では、直口する口縁部をなし、口縁部内面に原体条痕を施さない押型文土器が多く検出されており、これらの集石遺構の時期を概ね示すものと思われる。

一方、不定形の集石であるＳＸ025・028・031は上述のグループより約10ｍの距離を空け、ＢＧ25の中程からＢＦ25の南端付近にかけてに位置し、同じく等高線に沿って、北東－南西方向に並ぶ。このＳＸ028とＳＸ031の間では礫が集中して見られると共に、削器・磨石等の石器が多く検出され、この一帯が集石遺構に伴う作業空間であったものと推定される。なお、礫の集中部分より、口縁部内面に原体条痕を施す楕円押型文土器（80）が出土している他、外面に原体条痕を施すもの（100）が見られる。以下に遺構毎に個別に述べる。

ＳＸ０１２集石遺構（Fig.132）　約0.5ｍの厚さで層状に重なる集石遺構である（Ｃ類）。平面的には約0.6～0.8ｍの範囲に大きさ0.2ｍの礫５個程度、大きさ0.1ｍ以下の小礫30個程度からなる。礫は平面楕円形の掘り込み内に投棄されたように集石されており、赤変化しているものも幾らか認められるが、火熱によるものかは不明である。掘り込みの検出面での平面規模は長軸1.0ｍ、短軸0.9ｍを測るが、掘り込みの埋土と掘り込み面であるⅡｂ層との区別は難しく、掘り込みの本来の形状はやや異なる可能性もある。

ＳＸ０２０集石遺構（Fig.132）　花弁状石組炉Ａ－Ⅰ類かと思われるが、炉壁の北側半分が崩れており詳細不明である。炉壁は南側の２枚のみが原位置で遺存し、さらに西側に炉壁に用いられたと思われる長く平たい石が倒

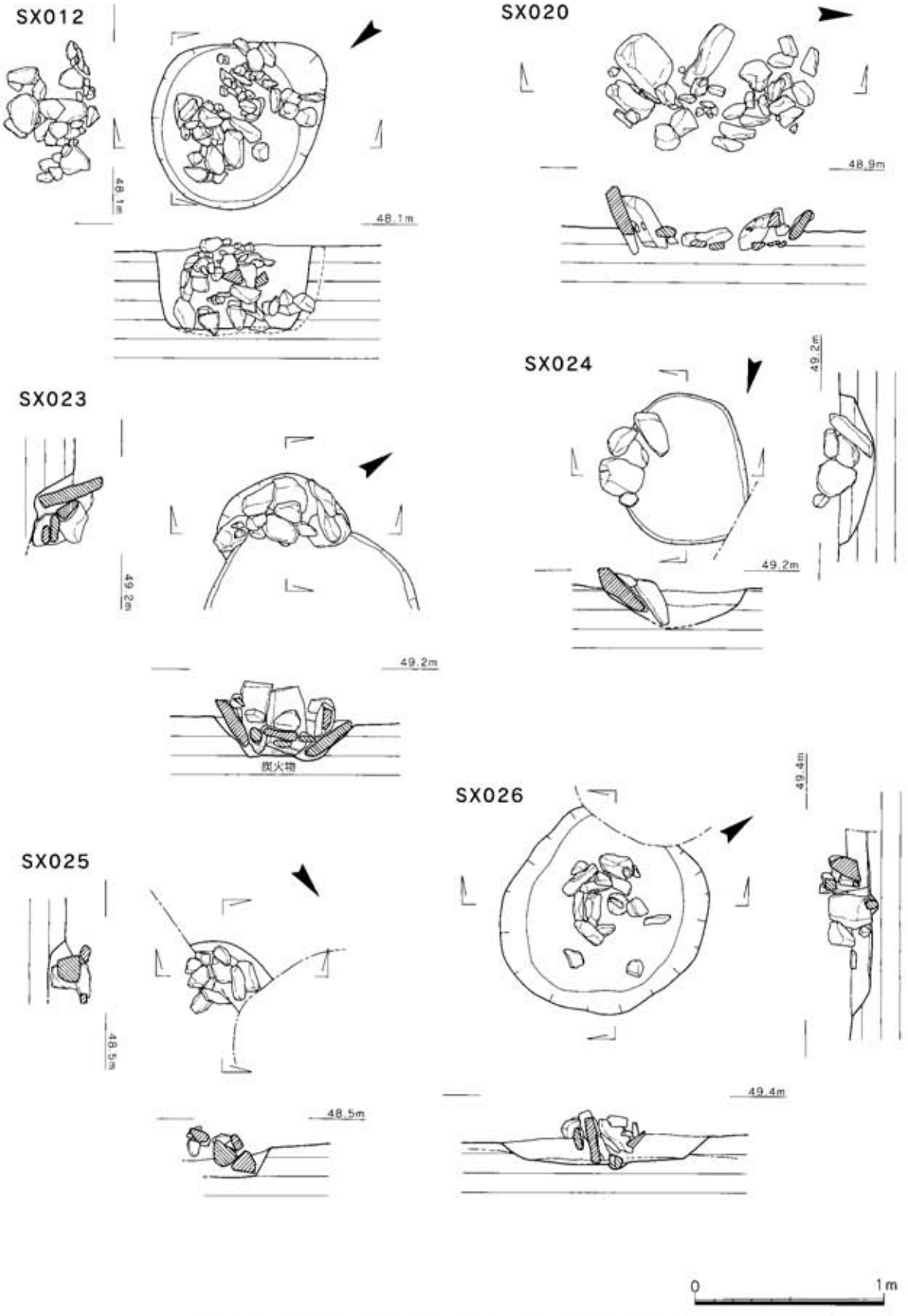


Fig.132　S X012，020，023，024，025，026集石遺構（1：30）

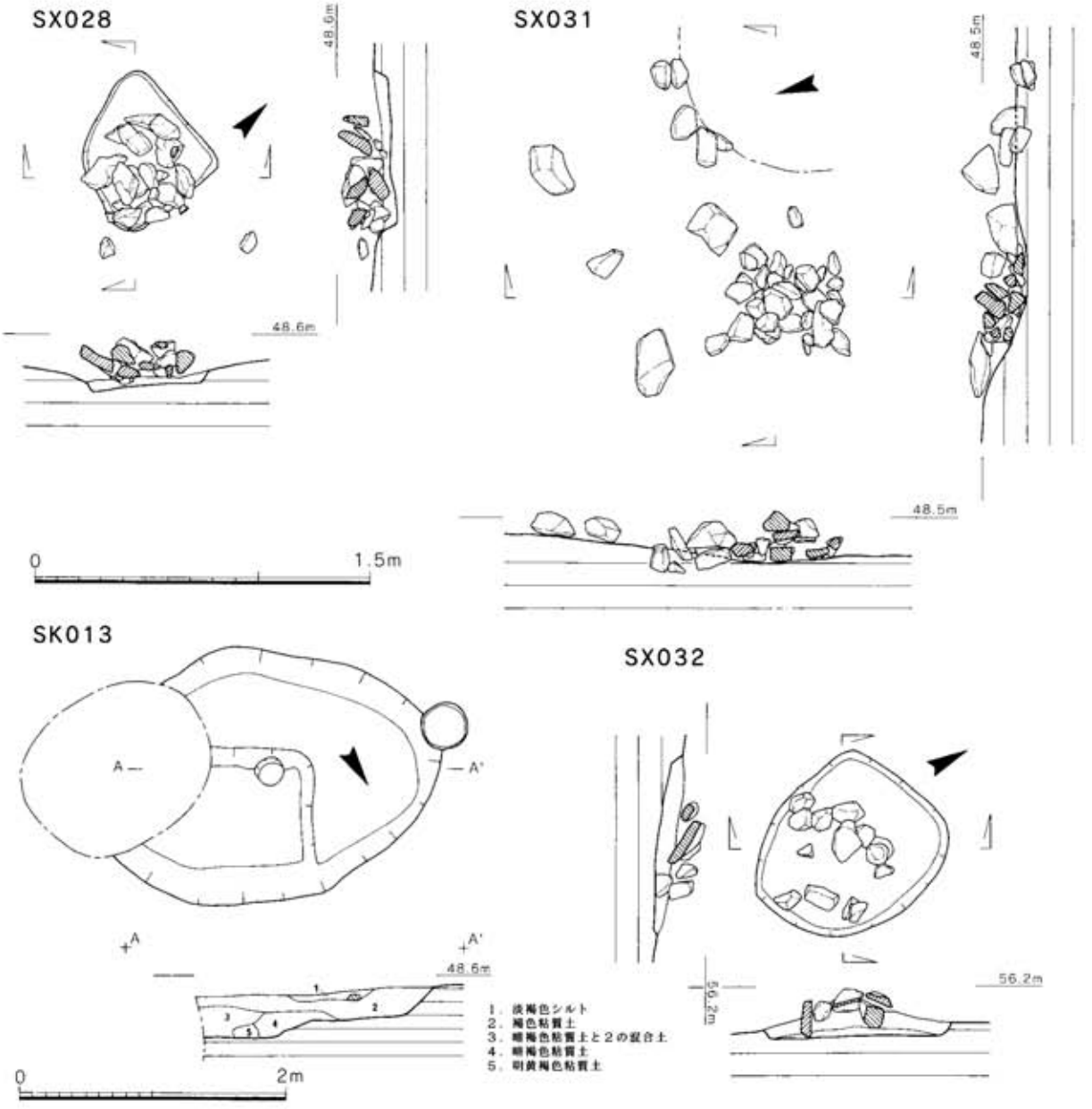


Fig.133　ＳＸ028，031，032集石遺構（1：30）、ＳＫ013土壙（1：50）

れている。炉壁と思われる石は大きさ0.3～0.4m程度。遺構の西半分には大きさ0.2m前後の小礫が十数個見られ、本来は炉内に充填されていた可能性が考えられる。現況の集石は南北１ｍ、東西0.7m程度の規模を持つ。なお、掘り方については確認できなかった。

ＳＸ０２３集石遺構（Fig.132）　花弁状石組炉Ａ－Ⅰ類である。遺構の東側約1/2は蜜柑の植樹壙により失われているが、西側部分の遺存状態は良好である。炉壁として４枚の石がかなり立ちぎみに据えられ、炉壁に囲まれた中央部に平たい石を敷かれるが、この石は火を受けて赤変化している。掘り方は壁体に沿うような平面円形のもので、その直径は約0.7mである。なお炉の掘り方底面で炭化物が厚さ0.5mでまとまって検出されており、この炭化物について放射性炭素（^{14}C）年代測定を行ったところ、8860±50年ＢＰの年代が算出されている。

ＳＸ０２４集石遺構（Fig.132）　花弁状石組炉Ａ－Ⅱ類かと思われるが、東側の炉壁の３枚のみが遺存するもの

で、詳細については不明である。壁体の石はいずれも長さ0.3m程の平たい石で、かなり寝かせぎみに据えられ、赤変化の様子は顕著には認められない。掘り方は平面楕円形で南北方向に長軸を持ち、長軸0.8m、短軸0.65mで、西側隅を古代の木棺墓ＳＰ014に切られる。掘り方埋土中より山形文を横走させる押型文土器胴部小片が出土している。

ＳＸ０２５集石遺構（Fig.132）　不定形の集石で攪乱壙に切られるため、形態の詳細は不明である。現況では大きさ0.2m程の礫10個が平面0.4mの範囲に集石されており、集石に沿った形で掘り方が検出されている。掘り方は平面ではやや不明瞭であったが、その底面はⅡｂ層と明瞭に区別できた。

ＳＸ０２６集石遺構（Fig.132）　花弁状石組炉Ａ－Ⅰ類かと思われる。かなり立ちぎみに据えられた炉壁は西側の４枚が遺存し、東側の炉壁は全く失われている。使用されている礫の多くが赤変化しているが、焼土・炭化物等は検出されていない。炉自体の大きさは径0.5m程であるが、掘り方は炉の規模に比べて大きく、平面形は径1.1mのほぼ円形で、掘り方の北西部分を一部攪乱壙で切られる。

ＳＸ０２８集石遺構（Fig.133）　径0.5mの範囲に円形に集石されているもので、使用されている礫は大きさ0.2mに満たない小振りのものである。遺存状態は比較的良好で、ほぼ使用された最終段階の姿を残しているものと思われる。使用された礫の半分程は赤変化していたが、その度合いは小さく、部分的に赤くなっている程度ものが多い。また中には黒色に変化したものも有り、それらはいずれも脆くなっている。掘り方は不定形で、南側は集石に沿っているが、北・西側はやや広がってコーナーを持つ。集石中より無文土器の胴部小片が出土している。

ＳＸ０３１集石遺構（Fig.133）　不定形の集石で、大きさ0.1～0.3mの礫が平面約0.6mの範囲に30個程度集石されている。遺構底面の土はやや凹面をなすが明確な掘り方は見られない。

ＳＸ０３２集石遺構（Fig.133）　大きさ0.2～0.3mの礫十数個からなる。礫は約0.5mの範囲に集まるが、現況では不定形で、失われた礫も多いと思われる。寝かせぎみの平たい礫や垂直に立った礫も見られ、花弁状の石組炉であった可能性も考えられる。掘り方は集石の範囲よりやや大きめの略円形で、径約0.9m。

④土壙

ＳＫ０１３土壙（Fig.133）

集石遺構以外に縄文時代早期の位置付けられる可能性があるものとして、ＳＫ013が挙げられる。ＳＫ013はＢＧ25グリッド南端付近に位置しており、ＳＸ025・031の東約３～４mの距離にある。平面形は東西方向に長軸を持つ楕円形と思われるが、東側は蜜柑植樹の攪乱壙と重複する。平面規模は長軸2.4m、短軸1.9mを測るが、土壙は二段掘りの形状をなしており、一段目の底面までは検出面から深さ0.2～0.25m、底面の北寄りがさらに15cm程低くなっている。二段目の平面形も攪乱により詳細不明であるが、遺存している掘り方は北西辺・南西辺が直線的で、それぞれが直角のコーナーを介して繋がっている。一段目・二段目共に底面はかなりフラットである。埋土は褐色粘質土・暗褐色粘質土を中心としており、掘り込み面であるⅡｂ層と土質が良く似ているが、色調がより暗めな点で区別され、埋土の性質は弥生時代遺構のそれと比較して明らかに異質である。また、土層堆積の項で述べたようなⅡｂ層の下層への落ち込みと比較しても、埋土も異なり、遺構壁面もある程度しっかりしていることから、当該期の土壙であると考えている。ただ、出土遺物は攪乱壙と隣接した部分で検出された楕円押型文の胴部片１点（Fig.136－94）のみで、時期決定の根拠はやや弱いものがある。

⑤遺物包含層出土遺物

【土器（Fig.134～136）】　戦場ケ谷遺跡２区では約950点余りの縄文土器片が出土しているが、ほとんどが大きさ５cmにも満たない小破片であり、土器の口縁部から底部にかけての全形が窺えるような資料は皆無である。

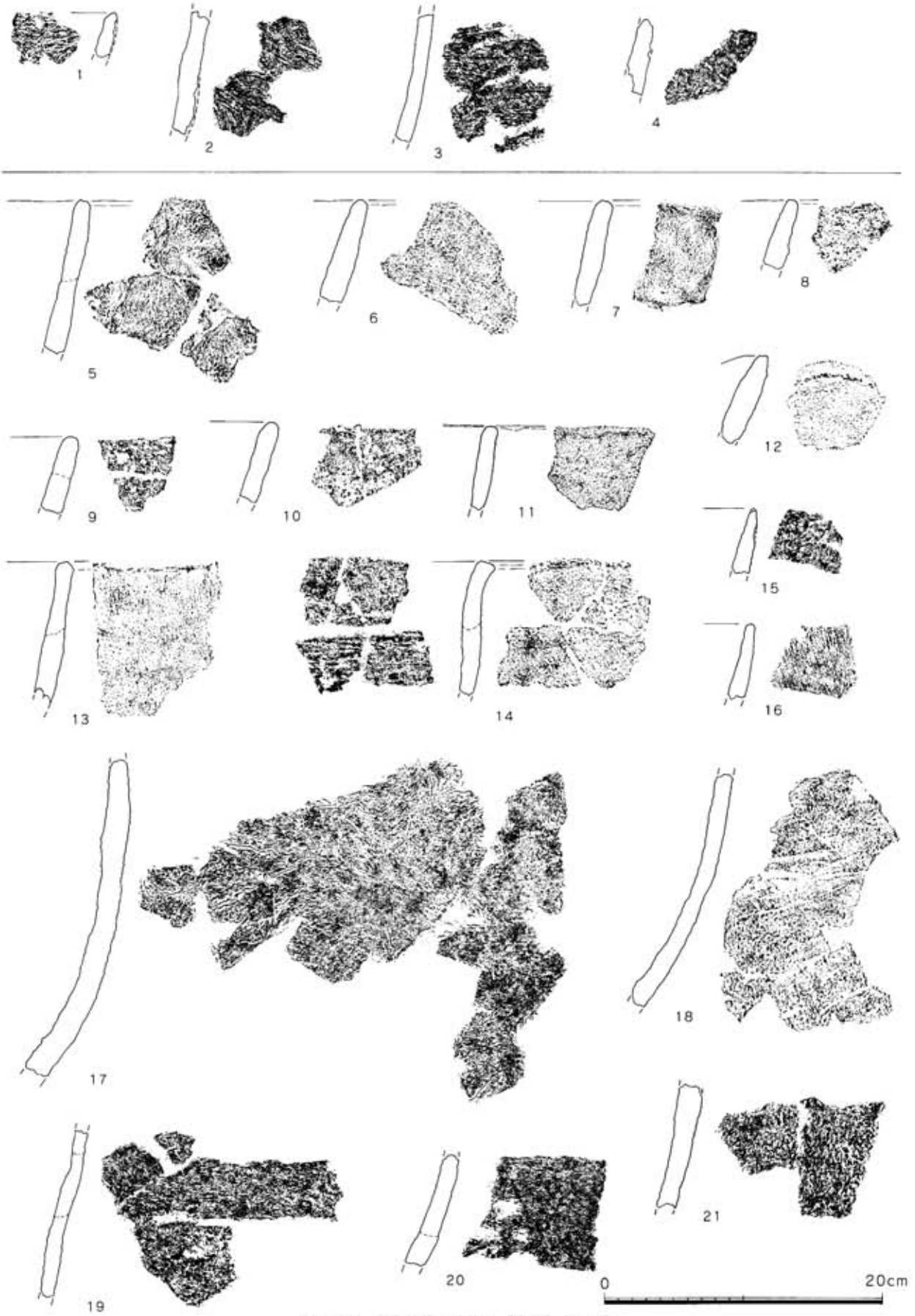


Fig.134　縄文時代の遺物1［土器］(1：4)

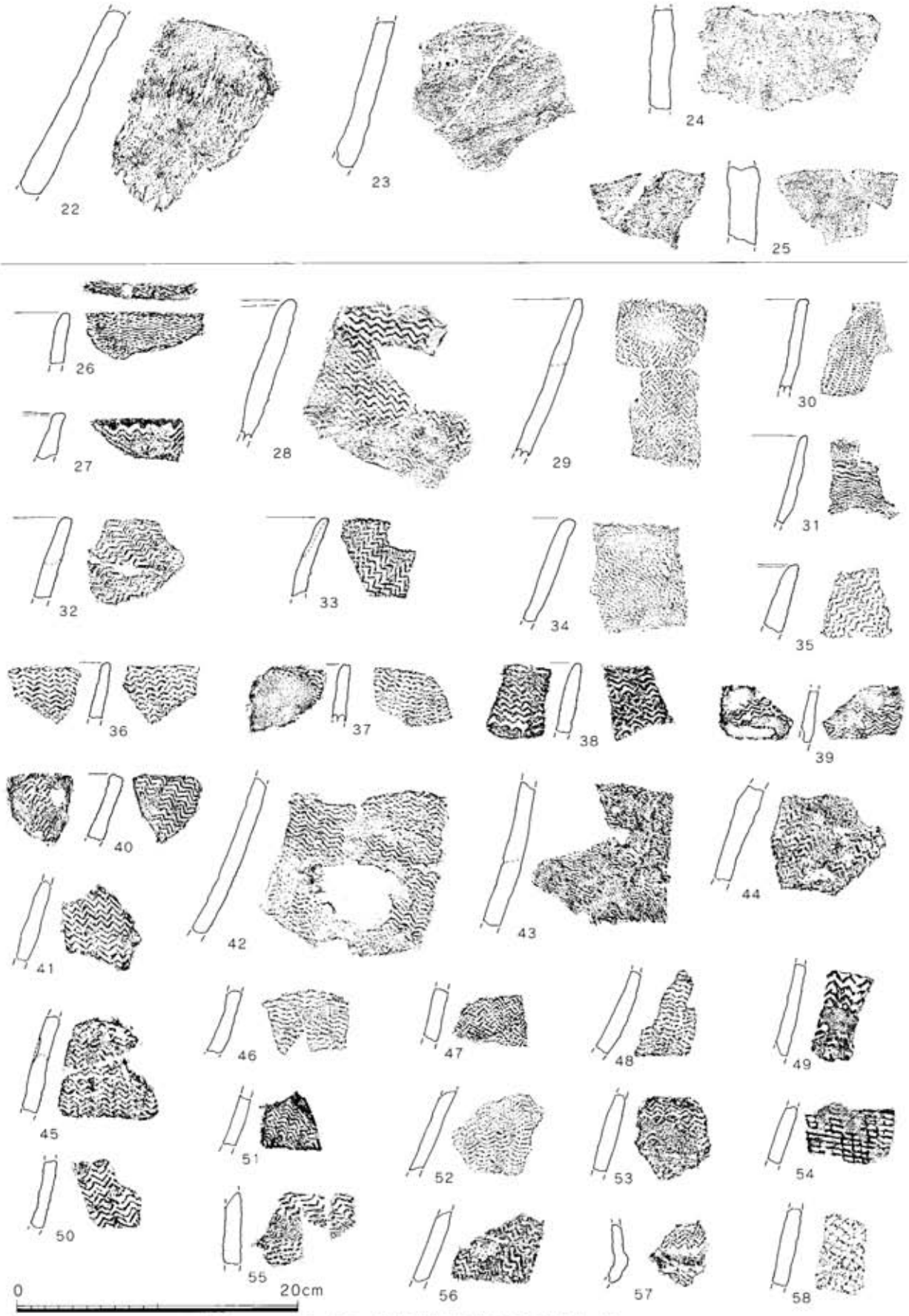


Fig.135　縄文時代の遺物2［土器］(1：4)

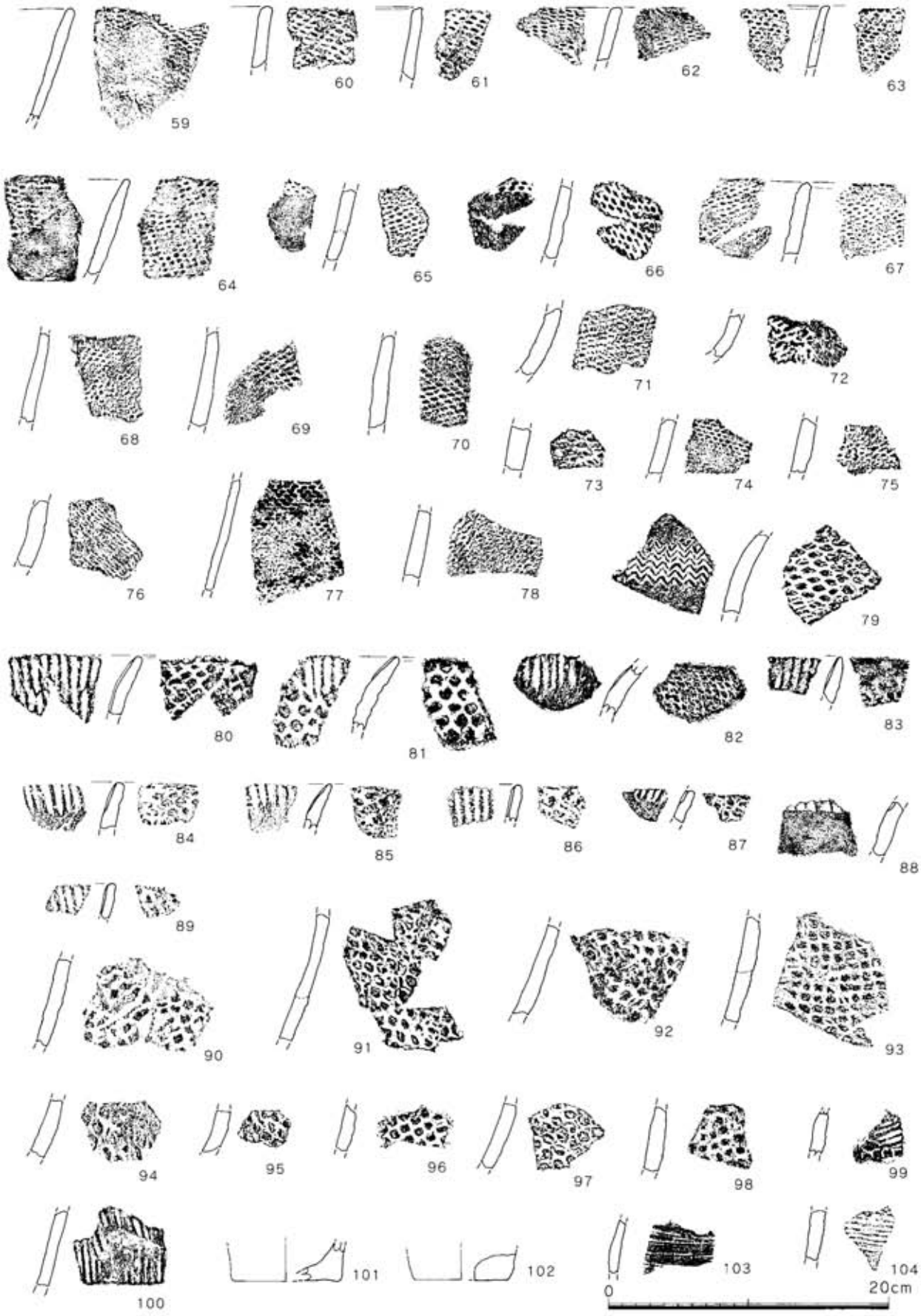


Fig.136　縄文時代の遺物3［土器］（1：4）

そこで器表面の文様・調整をもとに分類を試みたところ、楕円押型文を施すもの136点、山形押型文を施すもの71点を数え、表面をナデ調整する無文土器と思われるもの460点が最も多く、表面が荒れて文様・調整が確認できないものも240点余り見られる。

また、その他格子目押型文を施すもの、撚糸文を施すもの、沈線文を施すもの等が数点在る。時期的には90%以上が早期に位置付けられるもので、前期に下るものは曽畑式系統のものが数点見られるのみであり、前期の土器が相当数含まれる戦場古墳群1区とは様相が異なると言える。

条痕土器（Fig.134－1～4）　1～4はBD21グリッドⅣ層から出土した土器で、Ⅱb層から出土する押型文土器・無文土器等からなる一連の土器群とは、層位的に区別されるものである。約60点程度が出土しているが、小片・細片がほとんどで、概ね2個体程度が見られるようである。図中の1・2・4は厚み・色調等から同一個体と考えられ、出土量全体の9割以上を占める。3はこれと別個体と思われるが、量的には僅かである。器壁は厚めで胎土中に大きさ3mmを越えるような小石が多量に含まれており、重量感がある。1は直口する口縁部片で端部は内面が丸みを帯び、外面は明瞭に稜を持つ。調整は、外面は器表面が剥離しているが、内面は横位の条痕をナデ消している。胎土は前述の小石・砂粒以外には目立った鉱物等は見られない。2～4は胴部片。2は外面に横位あるいは斜位の条痕が認められるが、施文具については詳細不明である。胎土中には小石・砂粒の他、植物の繊維が観察される。4も外面に条痕が見られるが、後にナデを行ったためか不明瞭になっている。3は器壁が1・2・4と比較してより薄く、別個体と思われるもの。色調も1・2・4が鈍い橙色を呈するのに対し、鈍い赤褐色を帯びる。胎土は同じく小石を多量に含む。

無文土器（Fig.134－5～21、135－22～25）　出土土器の全体量のほぼ半分を占めるものである。口縁部の形態で大きく2種に分けられ、口縁部が直口するものが主体を占める他、14のように端部が外反するものが見られる。器壁の厚さでもやや異なり、後者がより薄いようである。5～16は口縁部片、このうち、5～11・13は内外面共にナデが施されるもので、特に外面はミガキとも呼べるような丁寧なナデによって平滑に仕上げられている。14は内面に横位の条痕を施した後にナデを行う。15・16も無文土器と考えられるが、外面に調整具による擦痕が縦位のハケメ状に観察される。12は口縁端部が直線ではなく弧状にカーブするもので、外面の端部直下に微隆起帯が見られる。5～7・9は同一個体の可能性がある。17～25は胴部片。17は本調査区で最も大きな破片に接合できたもので、胴下半部の部分と思われるが、復元される胴径はかなり大きく、大型品であったと思われる。一方、21は復元される胴径は小さく、底部に近い部位と推定される。19のみ器壁が薄手のもので、14と同一個体の可能性があり、内面では横位の条痕後ナデを施す。25は最も器壁が厚いもので2cm前後を測る。なお、無文土器の胎土は、砂粒及び径2mmを越えるような小石を多く含んでいるが、条痕土器に比べると小石の混入の度合いはやや少ない。また、カクセン石・雲母等、鉱物の混入もほとんど認められない。

押型文土器（Fig.135－26～99）　26～53・55～57は山形押型文を施すもの。この内、26～38・40は口縁部片で直口するものがほとんどである。口縁部片の中で26～35は外面に山形文、内面は無文となるもの。この内、26～31は山形文を横位に施文するもので、28・29のように山形の振幅が大きいものや、26・31のように振幅が小さく波形になるものがある。32～35は山形文を斜位に施すもの。山形押型文を持つものの中で、26・27・28は口唇部にも山形文を施す。36～40は口縁部内外に山形文を持つもので、いずれも横位に施文される。41～53・50～57は胴部片、いずれも外面のみに山形文を施し、内面はナデである。この内、44と口縁部片の28は同一個体と推定され、44は復元径の小ささから底部付近の破片と思われる。57は屈曲部を持つもので、屈曲部の上下共に山形文を横走させる。なお、山形押型文を持つものの内、26～28・31・32・34・35・37・41・42・44・52・55・57は、胎土中

に砂粒の他、カクセン石を多く混入している。54・58は格子目の押型文を施すもので、54は格子目が長方形で横位の施文、58は菱形を呈し、斜位に施文される。54・58中にもカクセン石が含まれる。

59～98は外面に楕円押型文を施文するもの。この内、59～67は口縁部が直口するもので、59～61は外面にのみ楕円文を、62～67は外面及び口縁部内面に楕円文を施す。楕円文はいずれも大きさ５～７mmと小型で紡錘形のものが多く、66の外面は斜位に、他は全て横位に施文される。68～78は胴部片で同様に小型・紡錘形の楕円文を持つもの。76のみ斜位、他は全て横位に施される。72は内湾するもので底部付近の破片と思われる。

79は外反する口縁部付近の破片で、外面にやや大きめで紡錘形をなす楕円文を横位に、内面にはシャープな山形文を横位に走らせるが、上部付近は無文帯となる。

80～89は外面に楕円文、内面に原体条痕を縦位に施す口縁部片。この内、80・81・82・84・85は外反するもの、83・89は直口するものと思われる。楕円文はバリエーションに富み、82は小型・紡錘形で斜位に施される。80・84・85・89は紡錘形で大きさ0.8mm程度と粗大化しており、施文方向は80・84が横位に、85・86が斜位に、89は縦位である。81は楕円文が最も粗大化するもので、楕円の大きさ1.0～1.1cmで、潰れた円形に近い楕円である。原体条痕は、その長さが分かるものでは、81が2.5cm、82が4.0cm、84が2.0cm、85が1.5cmを測る。また、80は原体条痕を二段に施し、81は内面の原体条痕下にも外面と同じ施文具による楕円文が縦位に見られる。

90～98は粗大化した楕円文を持つ胴部片の一群。96・98は円形に近い楕円で大きさ0.6～0.7cm、他は紡錘形で大きさ0.8～0.9cmである。

99は外面に横位の原体条痕、その下位に楕円文が見られる。なお、59～99までの楕円文を持つ土器は、砂粒・カクセン石を含む石が多いほか、67・74・75では雲母がみられる。

その他の土器（Fig.136－100～104）　100は外面に縦位の原体条痕が施され、内面はナデ。外面に縦位の原体条痕を持つものは中原町香田遺跡[1]で見られ、香田遺跡例では原体条痕下に粗大化した楕円文が横位に見られる。101・102は平底の底部片で、胎土・色調等から早期の土器に伴うものと思われる。いずれも外面の荒れのため、文様等は明らかでないが、101は外面・底面共に丁寧なナデ調整が見られ、体部と底部の境は明瞭である。また102は器面に凹凸が見られ、体部と底部の境は101に比べやや曖昧である。底径は101が8.0cm、102は6.8cm、102の胎土中にはカクセン石が多量に含まれる。

103・104は前期のものと思われる。103は薄手で外面に横位の沈線、104では条痕がみられる。

【石器（Fig.137～139)】　石器は90点余りが出土しており、石器と認定したものでは、石鏃42点、石槍２点、石匙２点、削器７点、磨石・叩石31点、砥石３点、石核７点が数えられる。出土位置はほとんどがＤ区であり、特にＢＦ25・26、ＢＧ25など遺物の集中度が高く、集石遺構が分布する地点で多くみられる。

105～122は石鏃で、105～119は凹基無茎式鏃。このうち、105・106は平面形が正三角形を呈するもので、両側辺は直線的、抉りは浅く入る。107～113・117は長さが幅を上周り、両側辺が丸みを持ち、抉りが深いもの。中でも107・108・110・111は長さと幅の差がそれほど大きくないもので、特に107・108はいわゆる鍬形鏃に含まれる。また、109・112・113・117はより縦長になるものである。115・114・116・119は両側辺が直線的で、平面形が二等辺三角形を呈するもので抉りが深いもの。この内、119は異質で長さが幅の三倍近くになる縦長の平面形をなす。120～122は平基無茎式鏃。このうち、120・122は側辺が直線的で平面形が三角形を呈するもので、122は長さ6.2cm、幅4.0cmを測り、鏃と言うより石鋸とも呼べるような大型のものである。いずれも剥離は荒いが、特に120は厚みもあるため未製品の可能性も考えられる。121は両側辺が丸みを持つものであるが、120と同様、厚みを持ち、剥離も荒く、未製品の可能性がある。なお、石鏃の石材は112・114・115・117が黒曜石で他は全て

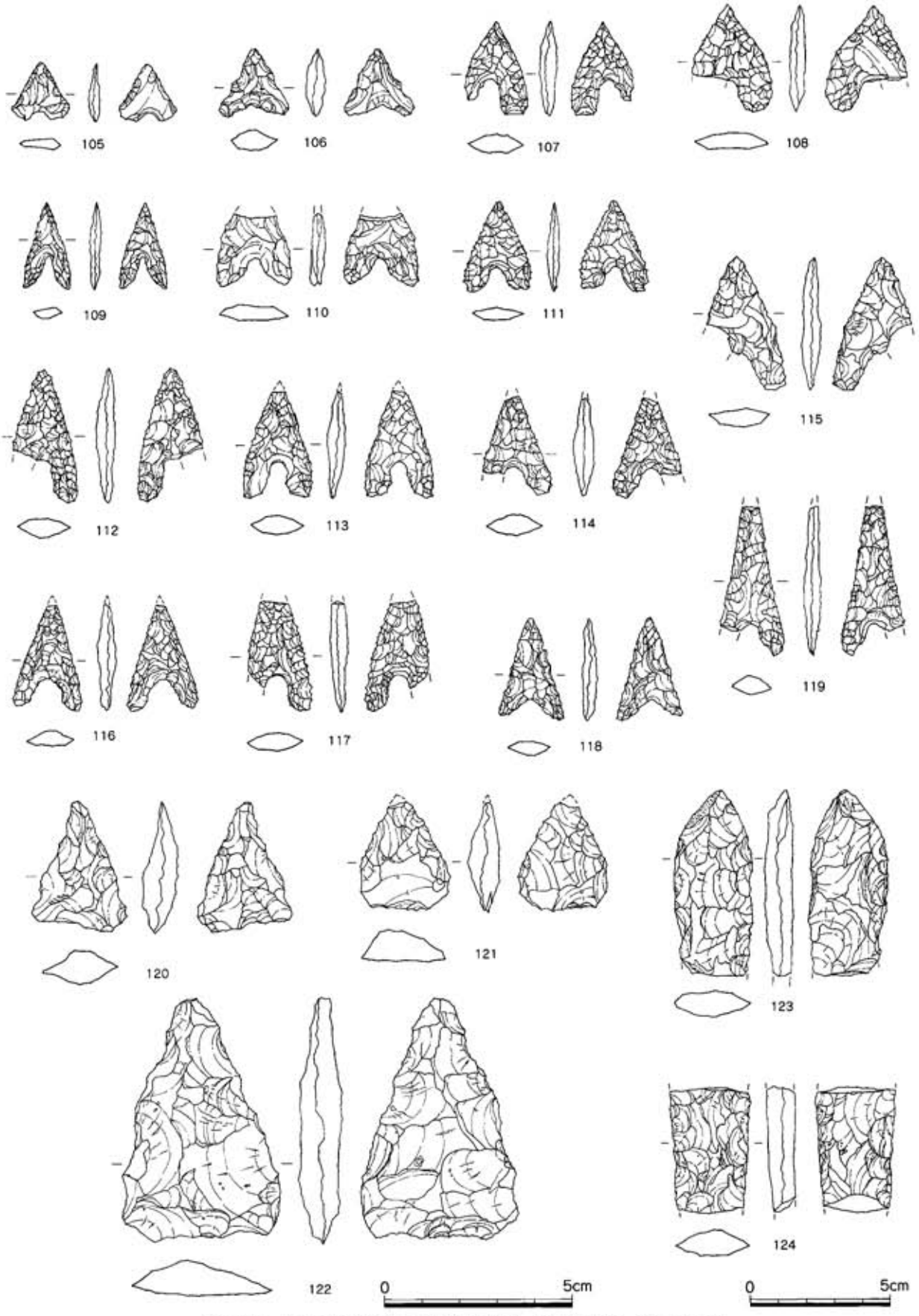


Fig.137　縄文時代の遺物4［石器］（123，124は1：2、ほかは2：3）

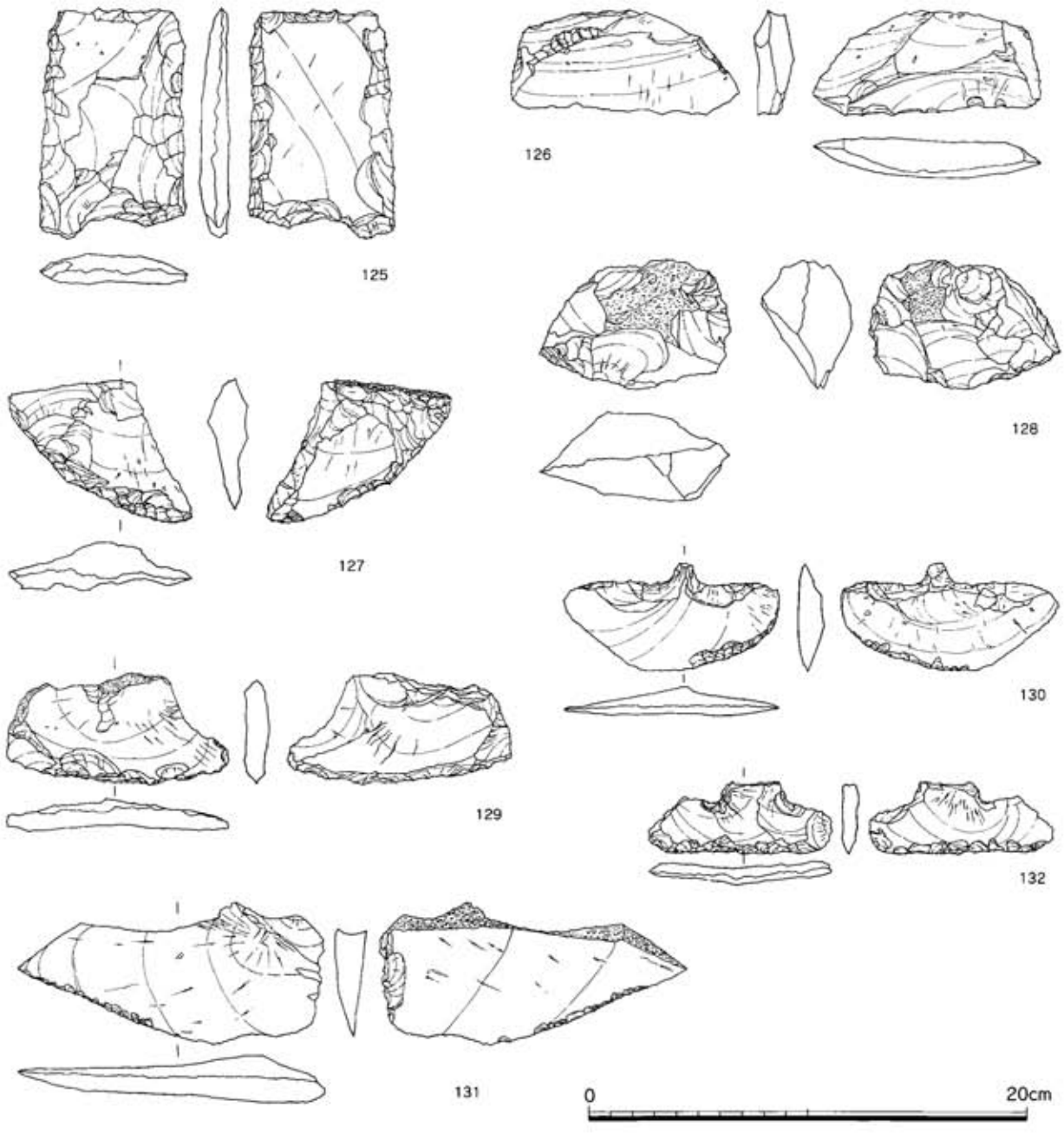


Fig.138　縄文時代の遺物5［石器］(1：3)

サヌカイトである。また、黒曜石の中でも112・114・117は漆黒を呈し伊万里腰岳産と推定されるが、115のみはやや灰色がかった色調である。

123・124は石槍と思われ、いずれもサヌカイト製である。ただし、123は一見、体部中程で折れているように見受けられるが、図中基部付近では側辺からの剥離が基部の下面まで回り込んでおり、折れた後にも剥離を施しているようである。また、切っ先部分の片面は未調整であり、このままでは槍先としては機能しない形状をなしている。製作途中に廃棄されたものとも考えられよう。

130・132は石匙でいずれもサヌカイト製。130は横長剥片を素材とし、鋭い縁辺をそのまま刃部として利用し、一部に両面から細かい剥離を施す。つまみ状突起は横長剥片の打点付近に両側縁から剥離を加え小さく形作られ

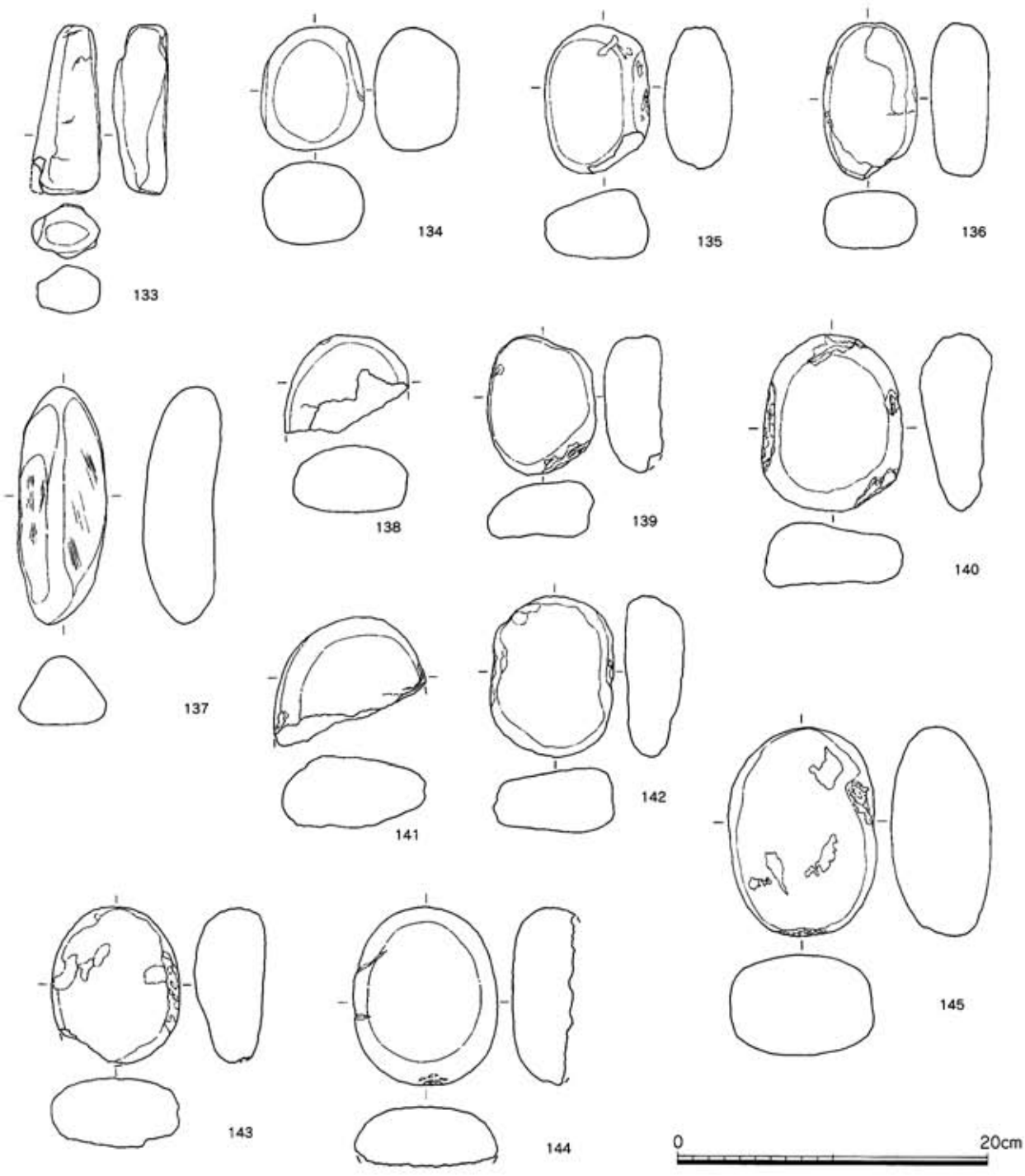


Fig.139　縄文時代の遺物6［石器］（1：4）

る。132も同じく横長剥片を素材とするが、縁辺部に厚みがあったためか、両面から急角度の剥離調整を施し鋭い刃部を作っている。つまみ状突起は130と対照的で幅広のものである。

125～127・129・131は削器でいずれもサヌカイト製。125は縦長剥片を利用したもので、平面形は整った長方形を呈し、両側縁と図中上端に両面からの調整を施し刃部を作り出す。図中下端には浅い抉りが入る。126は横長剥片の鋭い縁辺部の一つに一方から細かい剥離を加えている。127も横長剥片を利用するもので、ほぼ1/3程度を欠損する。縁辺部には両面から細かい剥離を加えて刃部となす。129も横長剥片を利用するもので、側縁部の

一方から急角度に粗い剥離を加えている。131は大型の横長剥片の鋭い側縁部を利用し、両面から細かい剥離を加えて鋭利な刃部を作り出している。

128は各面から剥離が加えられており、刃部がないことから石核か。サヌカイト製。

133～145は礫石器。133は細長い石材の一方広い端面に敲打による凹面が見られる。片手で握るにはちょうど具合の良い大きさで、叩石として用いられたものと思われる。137も細長い棒状のもので同様に叩石風に用いられたと考えられるが、端面には明瞭な使用痕は認められない。134～136・138～140・141～145は磨石。平面形は概ね楕円形であるが、長軸方向の一側縁、あるいは両側縁が使用により平坦面をなしているものが多い。しかし、144のみは平坦面を持たず、全体が丸みを持ち、表面は非常に平滑である。また、磨石類は側縁部には使用痕が観察されるが、両面には明瞭な使用痕は認められない。石材は136・138が安山岩、他は未分析。

註1）堤 安信「香出遺跡」『香出遺跡』　九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書(2)　佐賀県教育委員会　1982

（2）縄文時代晩期の遺構と遺物（Fig.140）

縄文時代晩期の遺構として土壙２基（ＳＫ005、006）が確認されており、いずれもＢ区に位置する。

ＳＫ００５土壙（Fig.140）

Ｂ区中央部の調査区東辺寄り、ＢＥ17グリッドに位置する。耕作土除去後、Ⅲｂ層上面で検出されたもので、平面形は南北に長軸を持ち、この長軸の主軸方位はＮ―18°―Ｅ、北側が広く、南側が狭い不定形である。規模は長軸1.6m、北側での幅約1.1m、南側での幅約0.6m、東西両辺と北辺は直線的で、各コーナーは丸みを帯びる。断面形は二段掘りを呈し、二段目の掘り込みは一段目よりひとまわり小さい。二段目も平面形は不定形だが、その長軸はより東に振れる。一段目の底面は中央に向かって傾斜ぎみであるが、二段目底面はほぼ平坦で、検出面

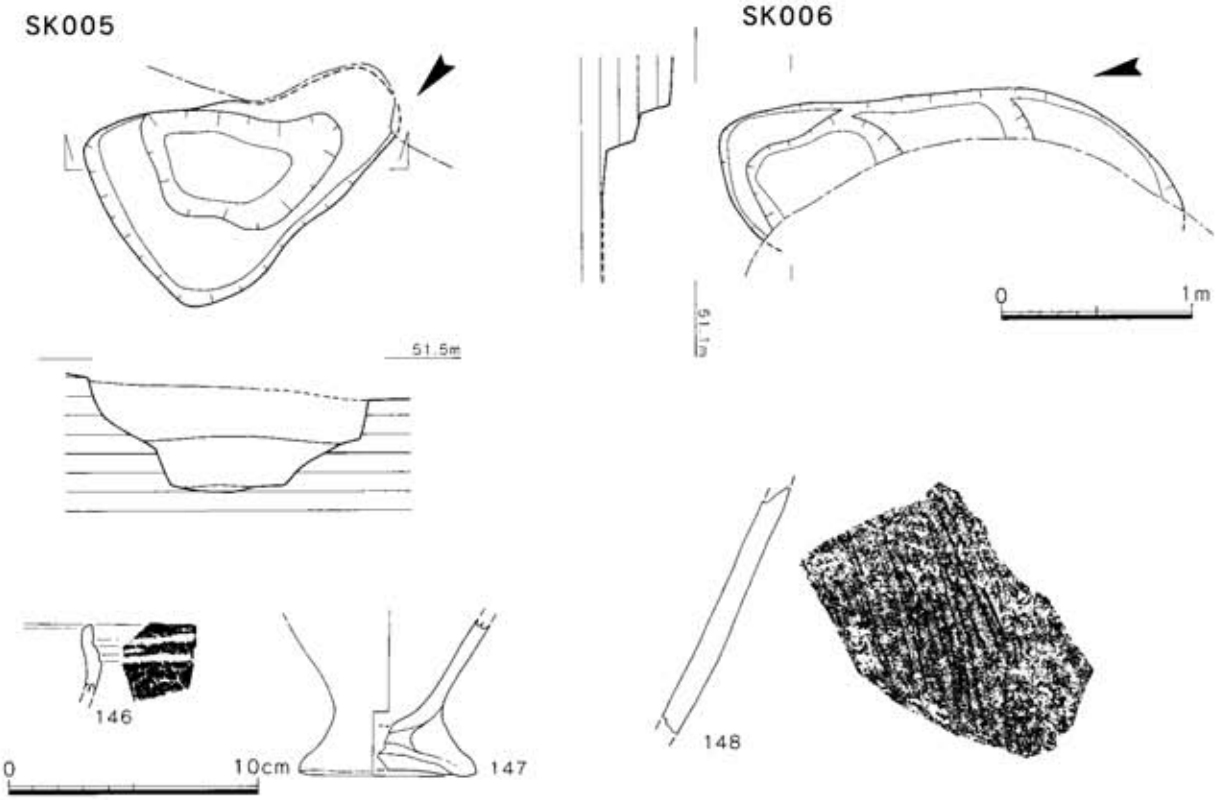


Fig.140　ＳＫ005，006土壙（1：40）及び出土遺物（1：3）

から一段目までの深さ0.2～0.35m、二段目までの深さ0.6m。埋土は茶褐色粘質土で炭化物を混入する。埋土中からは縄文土器片・黒曜石フレイク等が40点余り出土しているが、出土層位は上面から下位までまんべんなく平面的にも散在しており、一箇所に集中するような様子は見られない。土器はいずれも小片・細片で、晩期に相当すると思われる、薄手・粗製の土器片が大勢を占め、楕円押型文を施文する早期のものが２点見られる。他に磨石の可能性のある、小型の円礫が１点ある。

ＳＫＯＯ５土壙出土遺物（Fig.140）　図示に耐えうる２点のみを挙げている。146は深鉢の口縁部付近と思われ、口縁部は屈曲して内傾する。口縁部外面には二条の沈線が巡らされる。胎土中に砂粒を多く含み、雲母片微量に見られる。147は深鉢の底部でくびれ底を呈する。底面は円盤状の粘土板を貼り付けて、僅かに上げ底ぎみに作られる。調整は内外面共にナデで、胎土中に砂粒を多量に含み、雲母も多く見られる。

ＳＫＯＯ６土壙（Fig.140）

Ｂ区の西寄り、ＳＫ005の南約10mの位置にある。遺構の西半分以上に蜜柑植樹の撹乱壙と重複するため平面形は明らかでないが、南北に長軸を取るものと思われ、主軸方位は概ねＮ―12°―Ｅが想定される。現状では長軸での長さ2.45m、幅は最大0.75m程度が残存する。断面形では遺構北側が一段低くなっている模様で、検出面から一段目までの深さ0.15m、二段目底面までの深さ0.3mを測る。埋土はＳＫ005と同様に茶褐色粘質土で、埋土中から縄文時代晩期のものと思われる土器小片・細片及び黒曜石フレイクが30点余り出土している。出土状況もＳＫ005と同じく、埋土中の各所に散在する状態で見られる。

ＳＫＯＯ６土壙出土遺物（Fig.140）　出土土器の内、形態等が窺えるのは皆無であり、深鉢の胴部片と認識できる大きめの破片（148）のみ図示している。148は器壁の厚さ0.7～0.8cmで、調整は外面に縦位のヘラミガキが観察され、内面はナデである。色調・胎土は146・147と類似し、多量の砂粒と雲母を胎土中に混入する。

３．弥生時代の遺構と遺物

ＳＸＯ１８不明遺構（Fig.141）

Ｄ区のＳＰ017土壙墓北側に２m離れて位置する。平面形は南北方向が僅かに長い楕円形をなし、長軸0.5m、短軸0.45m、断面形はほぼ摺鉢状で、深さは0.19mである。埋土中からは弥生土器の壺の破片が出土しているが、胴部の破片の上に口縁部を真下に向けて頸部以上の部位が重なっており、状況からみて甕棺が破砕したものではなく、割れた壺の破片を小穴内に埋納したものと推定される。しかし、その性格については周囲に同時代の遺構

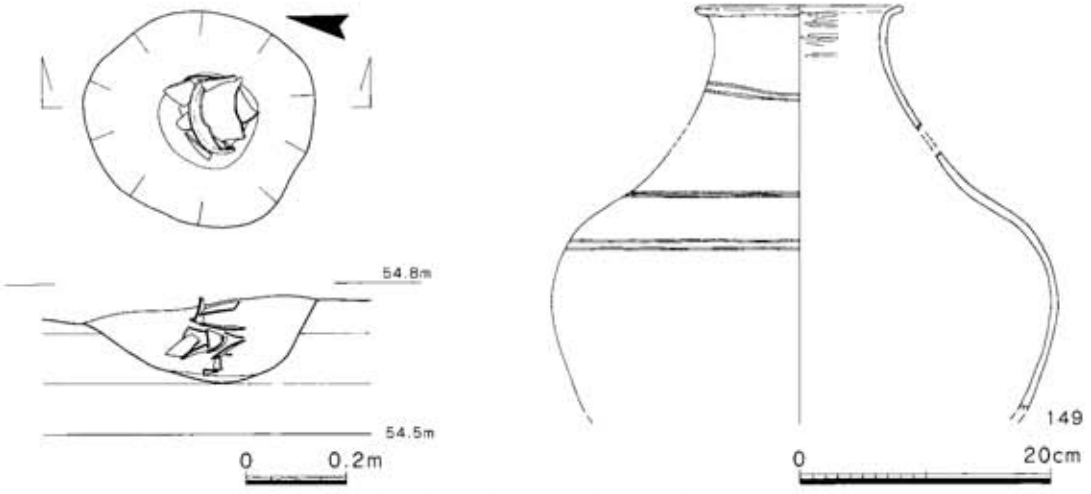


Fig.141　ＳＸ018不明遺構（1：15）及び出土遺物（1：6）

Tab.18　戦場ケ谷遺跡２区縄文・弥生時代の土器一覧表（１）

Fig.図番号	PL.番号	県遺物登録番号	出土地点	種別	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	法量(cm) 底径	胎土 ※混入物	色調	文様・調整 外器面	文様・調整 内器面
134-1	47-1	97001455	B D21－18, №32	縄文土器	深鉢	—	(3.2)	—	砂粒・小石多量	鈍い橙色	表面剥離のため不明	条痕
2	47-1	97001450	B D21－18, №33･34	〃	〃	—	(8.9)	—	砂粒・小石多量	鈍い橙色	条痕	ナデ
3	47-1	97001449	B D21－18, Ⅳ層	〃	〃	—	(9.3)	—	砂粒・小石多量	鈍い赤褐	条痕	ナデ
4	47-1	97001451	B D21－18, №22	〃	〃	—	(5.5)	—	砂粒・小石多量	鈍い橙色	条痕	ナデ
5	47-1	98001499	B G24－18, №26	〃	〃	—	(12.1)	—	砂粒・小石多量	鈍い黄橙	ナデ	ナデ
6	47-1	98001501	B G24－18, №21	〃	〃	—	(7.3)	—	砂粒・小石多量	鈍い黄橙	ナデ	ナデ
7	47-1	98001500	B G24－24, №15	〃	〃	—	(7.6)	—	砂粒・小石多量	鈍い黄橙	ナデ	ナデ
8		98001503	B G24－23, №50	〃	〃	—	(5.1)	—	砂粒・小石多量	鈍い橙色	ナデ	ナデ
9	47-1	98001473	B F24－17, №15	〃	〃	—	(5.4)	—	砂粒・小石多量	鈍い橙色	ナデ	ナデ
10		98001482	B F24－4, №4	〃	〃	—	(5.9)	—	砂粒・小石多量	鈍い黄橙	ナデ	ナデ
11		99003337	B F25－12, №352	〃	〃	—	(6.0)	—	砂粒・小石多量	橙色	ナデ	ナデ
12		98001243	B D18－16, №2	〃	〃	—	(6.2)	—	砂粒・小石多量	鈍い褐色	ナデ	ナデ
13		99001676	B F25－17, №240･358	〃	〃	—	(10.1)	—	砂粒・小石多量	橙色	ナデ	ナデ
14		98001471	B F26－3, №57	〃	〃	—	(9.5)	—	砂粒・小石多量	橙色	ナデ	ナデ・条痕
15		98001491	B E24－7, №4	〃	〃	—	(4.6)	—	細砂粒少量	鈍い橙色	ナデ	ナデ
16		98001475	B F24－10, №120	〃	〃	—	(5.2)	—	砂粒多量･小石少量	明黄橙色	ナデ	ナデ
17	48-6	98001489	B F24－17, №350ほか	〃	〃	—	(23.0)	—	砂粒・小石多量	鈍い黄橙	ナデ	ナデ
18		98001470	B F26－8, №55	〃	〃	—	(16.5)	—	砂粒･小石多量, 金雲母	鈍い橙色	ナデ	ナデ
19		98001472	B F26－8, №56	〃	〃	—	(16.5)	—	砂粒多量	鈍い橙色	ナデ	ナデ・条痕
20	48-6	98001488	B F25－8, №168	〃	〃	—	(7.5)	—	砂粒多量	鈍い黄橙	ナデ	ナデ
21		98001486	B F24－10, №103	〃	〃	—	(8.4)	—	砂粒・小石多量	鈍い黄橙	ナデ	ナデ
135-22		98001494	B F25－23, №105	〃	〃	—	(12.2)	—	砂粒・小石多量	鈍い黄橙	ナデ	ナデ
23		97002931	D区検出面	〃	〃	—	(10.4)	—	砂粒・小石多量	鈍い黄橙	ナデ	ナデ
24		98001483	B F24－12, №73	〃	〃	—	(6.9)	—	砂粒・小石多量	淡黄色	ナデ	ナデ
25		98001463	B G25－24, №41	〃	〃	—	(5.3)	—	砂粒・小石多量	鈍い褐色	ナデ	ナデ
26	47-2	97001464	B区Ⅱb層	〃	〃	—	(3.6)	—	砂粒多量･カクセン石	黄橙色	山形押型文横走	ナデ
27	47-2	98001479	B F24－13, №84	〃	〃	—	(3.3)	—	砂粒･カクセン石多量	鈍い黄橙	山形押型文横走	ナデ
28	47-2	99001663	B F25－8, №166	〃	〃	—	(8.9)	—	砂粒･カクセン石多量	鈍い黄橙	山形押型文横走	ナデ
29	47-2	99001655	B F26－8, №64	〃	〃	—	(11.1)	—	砂粒多量	鈍い赤褐	山形押型文横走	ナデ
-30	47-2	99001657	B F26－7, №73	〃	〃	—	(6.5)	—	砂粒多量	黄橙色	山形押型文横走	ナデ
31	47-2	97001459	B D22－8, №20	〃	〃	—	(6.2)	—	砂粒多量･カクセン石	鈍い褐色	山形押型文横走	ナデ
32	47-2	99001678	B F25－21, №367	〃	〃	—	(5.7)	—	砂粒多量･カクセン石	鈍い褐色	山形押型文横走	ナデ
33	47-2	97001460	B D22－13, №24	〃	〃	—	(5.6)	—	砂粒多量	鈍い赤褐	山形押型文横走	ナデ
34	47-2	98001246	D区ＳＴ010周辺検出面	〃	〃	—	(7.3)	—	砂粒･カクセン石多量	橙色	山形押型文横走	ナデ
35	47-2	98001476	B F24－20, №38	〃	〃	—	(4.8)	—	砂粒多量･カクセン石	鈍い褐色	山形押型文横走	ナデ
36	48-7,8	99001677	B F25－23, №29	〃	〃	—	(4.9)	—	砂粒多量	鈍い褐色	山形押型文横走	口縁部山形押型文横走
37	48-7	99001656	B F26－7, №63	〃	〃	—	(4.1)	—	砂粒･カクセン石	鈍い橙色	山形押型文横走	口縁部山形押型文横走
38	48-7	97001462	B D23－17, №20	〃	〃	—	(5.0)	—	砂粒多量	明赤褐色	山形押型文横走	口縁部山形押型文横走
39	48-7	98001245	B G26－4, №17	〃	〃	—	(3.6)	—	砂粒多量･小石少量	橙色	山形押型文横走	山形押型文横走
40	48-7	98001467	B E25－6, №15	〃	〃	—	(4.7)	—	砂粒少量	鈍い黄橙	山形押型文横走	山形押型文横走
41	49-1	98001496	B F25－23, №108	〃	〃	—	(5.5)	—	砂粒多量･カクセン石	橙色	山形押型文横走	口縁部山形押型文横走
42	49-1	98001495	B F25－22, №342ほか	〃	〃	—	(10.8)	—	砂粒･カクセン石多量	鈍い黄橙	山形押型文横走	ナデ
43	49-1	98001454	B D17－1, №2	〃	〃	—	(8.6)	—	砂粒多量	明赤褐色	山形押型文横走	ナデ
44	49-1	99001679	B F26－1, №370	〃	〃	—	(6.9)	—	砂粒多量･カクセン石	鈍い黄橙	山形押型文横走	ナデ
45	49-1	97002863	B G26－5, №2・3	〃	〃	—	(6.8)	—	砂粒多量	黄橙色	山形押型文横走	ナデ
46	49-1	98001474	B F24－12, №10	〃	〃	—	(4.3)	—	砂粒多量	明赤褐色	山形押型文横走	ナデ
47	49-2	98001247	B D18－11, №9	〃	〃	—	(3.4)	—	砂粒・雲母多量	鈍い橙色	山形押型文横走	ナデ
48		98001250	B D15－21, №26	〃	〃	—	(5.5)	—	砂粒多量	鈍い黄橙	山形押型文横走	ナデ
49	49-2	99000984	B D16－7, №52	〃	〃	—	(7.3)	—	砂粒少量	鈍い黄橙	山形押型文横走	ナデ
50	49-2	98001456	B D18－16, №1	〃	〃	—	(4.7)	—	砂粒・小石少量	橙色	山形押型文横走	ナデ
51		97001512	B D16－21, №3	〃	〃	—	(4.2)	—	砂粒多量	黄橙色	山形押型文横走	ナデ
52	49-2	98001455	B D16－21, №26	〃	〃	—	(6.4)	—	砂粒･カクセン石多量	鈍い黄橙	山形押型文横走	ナデ
53		97002868	B G26－8	〃	〃	—	(5.7)	—	砂粒･小石多量, 雲母	黄橙色	山形押型文横走	ナデ
54	49-2	98001487	B F25－23, №25	〃	〃	—	(3.9)	—	砂粒･カクセン石多量	橙色	格子目文横走	ナデ
55	49-2	98001492	B E24－6, №5	〃	〃	—	(5.2)	—	砂粒･カクセン石多量	鈍い黄橙	山形押型文斜走	ナデ
56		97002870	B G26－2, №8	〃	〃	—	(5.5)	—	砂粒多量	鈍い黄橙	山形押型文横走	ナデ
57	49-2	98001468	B E25	〃	〃	—	(4.2)	—	砂粒･カクセン石少量	橙色	山形押型文横走	横位の条痕
58	49-2	98001478	B F24－14, №129	〃	〃	—	(5.5)	—	砂粒･カクセン石多量	橙色	格子目文斜走	ナデ
136-59	47-3	99001662	B G25－15, №21	〃	〃	—	(8.1)	—	砂粒・小石多量	橙色	楕円押型文横走	ナデ
60	47-3	97002861	B G26－13, №28･29	〃	〃	—	(4.3)	—	砂粒多量	褐色	楕円押型文横走	ナデ
61	47-3	97002860	B G27－8, №7	〃	〃	—	(5.1)	—	砂粒多量	橙色	楕円押型文横走	ナデ
62		98001477	B F24－9, №30	〃	〃	—	(4.3)	—	砂粒多量	橙色		
63	47-3	99001680	B F25－22, №331	〃	〃	—	(4.3)	—	砂粒・小石多量	鈍い黄橙	楕円押型文横走	口縁部楕円押型文横走
64	47-3	98001469	B E25－11, №24	〃	〃	—	(6.9)	—	砂粒多量	鈍い黄橙	楕円押型文横走	口縁部楕円押型文横走
65	47-3	98001508	B G27－13, №37	〃	〃	—	(5.0)	—	砂粒少量	鈍い黄橙	楕円押型文横走	口縁部楕円押型文横走
66	47-3	97002865	B G26－12, №9･10	〃	〃	—	(4.8)	—	砂粒・小石多量	明赤褐色	楕円押型文横走	口縁部楕円押型文横走
67	47-3	97002931	B G27－19, №32	〃	〃	—	(5.1)	—	砂粒・雲母	鈍い橙色	楕円押型文横走	口縁部楕円押型文横走
68	47-3	97001453	B D22検出面	〃	〃	—	(6.4)	—	砂粒少量	橙色	楕円押型文横走	ナデ
69	47-3	97001454	B D21－23, №11	縄文土器	深鉢	—	(6.8)	—	砂粒多量	鈍い橙色	楕円押型文横走	ナデ
70	47-3	97001456	B D22－8, №3	〃	〃	—	(6.7)	—	砂粒･小石多量, カクセン	鈍い橙色	楕円押型文横走	ナデ
71	47-3	98001241	B D15－21, №27	〃	〃	—	(5.0)	—	砂粒・小石多量	褐灰色	楕円押型文横走	ナデ
72	47-3	98001485	B F24－8, №89	〃	〃	—	(3.6)	—	砂粒多量	鈍い黄橙	楕円押型文斜走	ナデ

Tab.18　戦場ケ谷遺跡２区縄文・弥生時代の土器一覧表（２）

Fig. 図番号	PL. 番号	県遺物登録番号	出土地点	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土 ※混入物	色調	文様・調整 外器面	内器面
73	47-3	98001451	BD15−16, №14	縄文土器	深鉢	—	(2.8)	—	砂粒少量	鈍い黄橙	楕円押型文横走	ナデ
74	47-3	97002869	BG26−3, №24	〃	〃	—	(3.9)	—	砂粒・雲母少量	鈍い橙色	楕円押型文横走	ナデ
75	47-3	97001457	BD22−24, №11	〃	〃	—	(3.8)	—	砂粒・雲母少量	橙色	楕円押型文横走	ナデ
76	47-3	98001457	BD18−16, №1	〃	〃	—	(4.4)	—	砂粒・小石多量	明赤褐色	楕円押型文斜走？	ナデ
77	47-3	99003338	BF25−16, №362	〃	〃		(8.8)		砂粒・小石多量	鈍い橙色	楕円押型文横走	ナデ
78	47-3	97001452	BD21−2, №2	〃	〃		(5.0)		砂粒多量	橙色	楕円押型文斜走	ナデ
79		97001463	BD16−12, №74	〃	〃		(6.6)		砂粒・小石少量	橙色	楕円押型文横走	口縁部山形押型文横走
80	48-12	97002859	BG25−15, №20	〃	〃		(4.3)		砂粒多量・カクセン石	橙色	楕円押型文横走	原体条痕を二段に施す
81	48-12	97001506	BE16−15, №4	〃	〃		(5.4)		砂粒多量	橙色	楕円押型文横走	楕円文横走、原体条痕
82		97001505	BE17−15, №3	〃	〃		(3.9)		砂粒多量	橙色	楕円押型文斜走	原体条痕
83	48-1,2	98001242	BD15	〃	〃		(3.3)		砂粒・カクセン石多量	橙色	楕円押型文横走	原体条痕
84	48-1,2	98001480	BF24−15, №114	〃	〃		(3.2)		砂粒多量	鈍い黄橙	楕円押型文横走	原体条痕
85	48-1,2	99001661	A区検出面	〃	〃		(3.6)		砂粒・カクセン石多量	鈍い黄橙	楕円押型文斜走	原体条痕
86	48-1,2	99001658	BF26−9, №47	〃	〃		(2.7)		砂粒・カクセン石多量	橙色	楕円押型文斜走	原体条痕
87	48-1,2	98001452	B区	〃	〃		(1.9)		砂粒多量	赤褐色	楕円押型文斜走	原体条痕
88		99000982	BD17−7, №48	〃	〃		(3.1)		砂粒多量	鈍い黄橙	楕円押型文(不明瞭)	原体条痕
89	48-1,2	98001481	BF24−9, №31	〃	〃		(2.4)		砂粒多量	暗褐色	楕円押型文斜走	原体条痕
90	48-3	98001504	BG24−23, №36	〃	〃		(6.2)		砂粒多量・カクセン石	赤褐色	楕円押型文斜走	ナデ
91	48-3	97002857	BG26−1, №17ほか	〃	〃		(10.7)		砂粒多量・カクセン石	赤褐色	楕円押型文斜走	ナデ
92	48-3	97002862	BG26−2, №11	〃	〃		(6.5)		砂粒多量・カクセン石	赤褐色	楕円押型文斜走	ナデ
93	48-3	98001505	BG26−19, №33	〃	〃		(7.5)		砂粒・カクセン石多量	鈍い橙	楕円押型文斜走	ナデ
94		98001464	BG25−3, №55	〃	〃		(5.6)		砂粒多量	鈍い黄橙	楕円押型文斜走	ナデ
95	48-3	98001453	BD15−21, №39	〃	〃		(2.2)		砂粒・カクセン石	赤褐色	楕円押型文斜走	ナデ
96	48-3	97001465	B地区Ⅱb層	〃	〃		(3.3)		砂粒	赤褐色	楕円押型文斜走	ナデ
97	48-3	98001249	BD15−16, №13	〃	〃		(4.4)		砂粒多量	鈍い黄橙	楕円押型文横走	ナデ
98	48-3	98001507	BG26−14, №30	〃	〃		(4.6)		砂粒多量・カクセン石	鈍い黄橙	楕円押型文斜走	ナデ
99		97001507	BD16−7, №72	〃	〃		(3.0)		砂粒多量・雲母	黄橙色	横位原体条痕、楕円文	ナデ
100	48-4	97002858	BG25−11, №18	〃	〃		(5.4)		砂粒多量	鈍い黄橙	原体条痕	ナデ
101	48-4	99001660	BF26−2, №91	〃	〃		(2.4)	(8.0)	砂粒・小石多量	橙色	ナデ	ナデ
102	48-4	98001502	BG24−25, №1	〃	〃		(1.8)	(6.8)	砂粒多量・カクセン石	鈍い黄橙	ナデ	不明
103	48-4	98001461	BG25−10, №38	〃	〃		(3.6)		砂粒少量	褐色	横位の沈線文	ナデ
104	48-4	98001244	A区検出面	〃	〃		(3.4)		砂粒・小石多量	鈍い赤褐	横位の沈線文	ナデ
146		99001665	SK005	〃	〃		(3.0)		砂粒多量に含む、雲母	橙色	横位の沈線	ナデ
147		99001664	SK005	〃	〃		(6.5)	(7.0)	砂粒・小石多量	橙色	ナデ	ナデ
148		99001666	SK006	〃	〃		(11.5)		砂粒多量に含む、雲母	橙色	ヘラミガキ	ナデ
149		97001979	SX015	弥生土器	壺	(15.4)	(約32)		細砂粒少量	黄橙色	ヘラミガキ	ヘラミガキ

Tab.19　戦場ケ谷遺跡２区縄文時代の石器一覧表

Fig. 図番号	PL. 番号	県遺物登録番号	出土地点	器種	分類	石材	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	備考
137-105	49-3	99000960	BF26,Ⅱb層	石鏃	凹基無茎鏃	サヌカイト	1.5	1.5	0.3	
106	49-3	99000964	BF26,Ⅱb層,№225	〃	〃	〃	1.75	1.85	0.5	
107	49-3	99000943	BE26,Ⅱb層,№10	〃	〃	〃	2.5	(1.7)	0.5	
108	49-3	99000957	BF26,Ⅱb層	〃	〃	黒曜石	2.8	(2.2)	0.4	
109	49-3	99000959	BF26,Ⅱb層	〃	〃	サヌカイト	2.3	1.2	0.25	
110	49-3	99000937	BF26,Ⅱb層,№362	〃	〃	〃	(1.9)	2.0	0.4	
111	49-3	99000945	BG26,Ⅱb層,№8	〃	〃	〃	2.4	1.8	0.35	
112	49-3	99000956	BF26,Ⅱb層	〃	〃	黒曜石	(3.7)	(1.8)	0.5	
113	49-3	99000958	BF26,Ⅱb層	〃	〃	サヌカイト	(2.9)	1.8	0.5	
114	49-3	99000965	BF27,Ⅱb層,№4	〃	〃	黒曜石	(2.6)	(1.8)	0.55	
115	49-3	99000961	BF26,Ⅱb層,№125	〃	〃	〃	3.5	1.9	0.5	
116	49-3	99000971	BF25,Ⅱb層,№119	〃	〃	サヌカイト	(3.8)	1.8	0.45	
117	49-3	99000954	BF26,Ⅱb層,№351	〃	〃	黒曜石	(2.9)	(1.8)	0.5	
118	49-3	99000970	BF25,Ⅱb層,№12	〃	〃	サヌカイト	2.7	1.8	0.4	
119	49-3	99000964	BE25,Ⅱb層,№32	〃	〃	〃	4.0	1.7	0.5	
120	49-3	99000962	BG26,Ⅱb層,№11	〃	平基無茎鏃	〃	3.5	2.5	0.90	未製品
121	49-3	99000936	BF26,Ⅱb層,№298	〃	〃	〃	3.0	2.4	0.8	
122	49-3	99000977	BF25,Ⅱb層,№42	〃	〃	〃	6.5	3.8	0.95	
123	49-3	99000976	BF26,Ⅱb層,№55	石槍		〃	6.6	2.8	0.95	
124	49-3	99000968	BE25,Ⅱb層,№57	〃		〃	(4.5)	(2.85)	0.9	
138-125	49-4	99000938	BG26,Ⅱb層,№33	削器		〃	7.0	4.5	0.9	
126	49-4	99000928	BG27-3,Ⅱb層,№6	〃		〃	(3.3)	(6.9)	(1.2)	
127	49-4	99000969	BE25, №45	〃		〃	(4.35)	(4.1)	1.20	
128		99000935	BH26, №5	石核		サヌカイト	(5.7)	(8.9)	(4.1)	
129	49-4	99000972	BG26, №27	削器		〃	5.0	10.3	1.10	
130	49-4	99000973	BE25, №11	石匙		〃	4.7	9.8	1.2	
131	49-4	99000974	BG26, №24	削器		〃	6.5	14.1	1.40	
132	49-4	99000975	BF26, №43	石匙		〃	3.3	8.3	0.7	
139-133		99000932	BF26, №214	叩石			10.3	(4.3)	3.5	
134		99000940	BE26, №29	磨石			8.0	6.6	5.3	
135		99000944	BG26, №77	〃			9.4	6.7	4.3	
136		99000926	BG27, №12	〃		安山岩	(10.0)	6.0	3.70	
137		99000978	BD23, №12	〃			15.3	5.5	4.4	
138		99000933	BE26, №9	〃		安山岩	(6.2)	(7.9)	(4.3)	
139		99000953	BG25, №45	〃			8.9	6.9	3.5	
140		99000952	BG25, №32	〃			11.3	9.1	4.6	
141		99000947	BG25, №34	〃			(8.2)	(9.7)	(4.6)	
142		99000934	BF26, №372	〃			10.3	7.9	4.1	
143		99000927	BH26, カクラン	〃			10.0	8.1	4.4	
144		99000950	BG25, №2	〃			11.6	9.1	3.9	
145		99000929	BF26, №131	〃			13.4	9.3	6.4	

が認められないことから現段階では明らかにし難く、とりあえず不明遺構として報告する。

ＳＸ０１８不明遺構出土遺物（Fig.141）　弥生土器の大型壺（149）が出土している。概ね全形の1/2程度の破片である。口縁部はやや屈曲して外反し、プロポーションでは口縁部から胴部にかけて明瞭に境を持たずに緩やかに続いて肩が張る。頸部中程に一か所、肩部に二か所、それぞれ二条の沈線が巡る。調整は内外共に横方向のミガキを施す。プロポーション等から弥生時代前期前半の所産と考えられる。

４．古墳時代の遺構と遺物

ＳＴ００４古墳（Fig.142～147）

墳丘・周溝（Fig.142）　Ｃ区の南端に位置し、旧地形で考えればほぼ丘陵尾根上にあたる。本墳については平成３年度の確認調査の際にその存在は把握されていた。現況では墳丘盛土はすべて失われており、石室壁体が露出して一部残るのみであった。特に石室の東西方向は基底面下まで削平が及んでおり、周溝についても全く検出できなかった。石室石材もそのほとんどが搬出されて失われており、壁体で遺存しているのは、前室の両壁と羨門の立柱石、及び玄門の右側立柱石・玄室右壁のみで、いずれも花崗岩の大石１石のみを縦位に立てている。また天井石については前室部分に一石のみがかろうじて残っている。

内部主体（Fig.143・144）　複室両袖型横穴式石室である。開口方向はほぼ真南で、玄室壁体の右側壁腰石と玄門右側の袖石のみが遺存する。現況では右側壁の石は高さ２m、幅1.5mの巨石１枚とその他の３石に分かれているが、接合面が見られることから、もともとは１枚の石であったと考えられ、巨石１枚を横位に据えていたものと推定される。また、奥壁・左壁については石材抜き跡と根固め石が残ることからおおよその平面プランは復元でき、平面形は長さ約3.0m、幅約2.7mの長方形であろう。玄門部の袖石は右側のみ遺存し、高さ1.7m、幅1.0mの石を立柱石としている。玄門左側の袖石は引き抜かれているが、根固め石は良好に遺存している他、仕切り石は玄門部・羨門部共に残っている。玄門幅は推定1.2mである。前室は左右壁体及び羨門袖石が残り、いずれも１石のみで構成される。また、天井石が１石架構されており、前室壁体は高さ1.3m、幅1.5mの石材を立て天井石との間には幅0.5m程の石を咬ませてあるが、基本

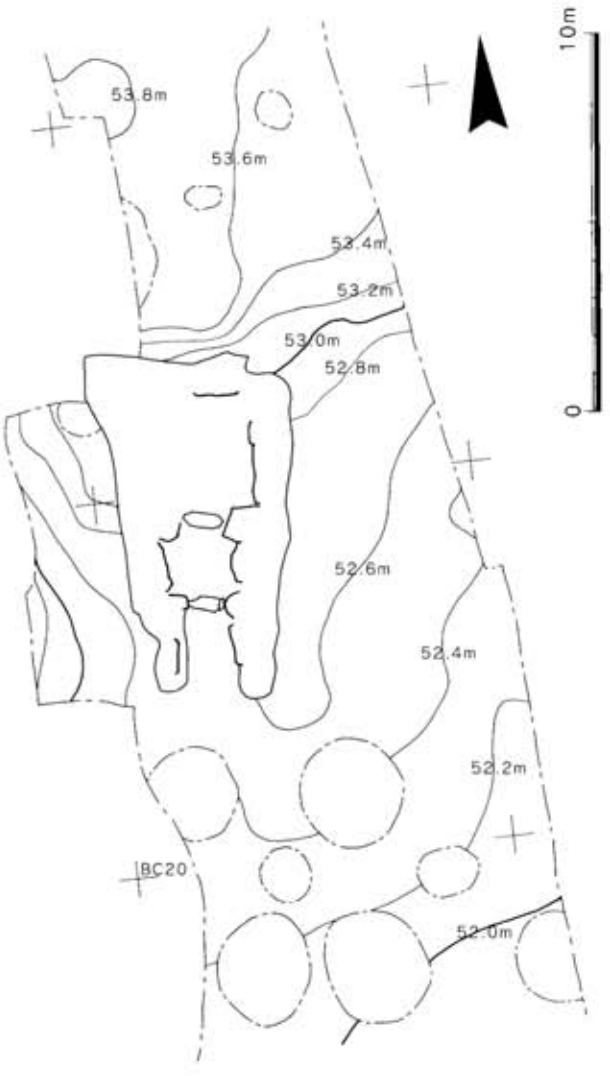


Fig.142　ＳＴ004古墳測量図（1：200）

的には羨門・副室共に壁体は1石で構成されていると見てよい。副室床面については右壁で石材の根固め石が検出され、また左壁においては0.1～0.2m程度の小礫が須恵器・土師器片と共に集積されていたが、埋土の状況から後世の撹乱と思われる。前室の規模は右壁側で1.3m、左壁側で1.5m、幅は玄門側で1.9m、羨門側で1.7m、天井石までの高さは約1.5mである。羨道部は基部に左右2石ずつが配されていたものと思われるが、右壁側については羨門側の1石のみが、また左壁側についても羨門側の1石のみが残っており、それぞれ墓道側の1石については掘り方及び根固め石のみが確認されている。また、残存している2石についても基底面とほぼ同じ高さで割られており、調査前にはこの部分を横切るように古墳西側の作業小屋への道があったことから、道を作る際に割られたものと思われる。羨道長は羨門袖石の手前から、概ね1.9～2.0m程と推定される。

閉塞状況（Fig.144）　閉塞石は羨道部の羨門仕切り石部分で遺存しているが、前述したようにこの部分が道になっていたため、閉塞石もほとんどが除去されており、最下部の石しか残っていない。概ね0.2～0.3m程の礫を仕切り石から1.8mの範囲に隙間なく敷いてあり、さらに羨門部分

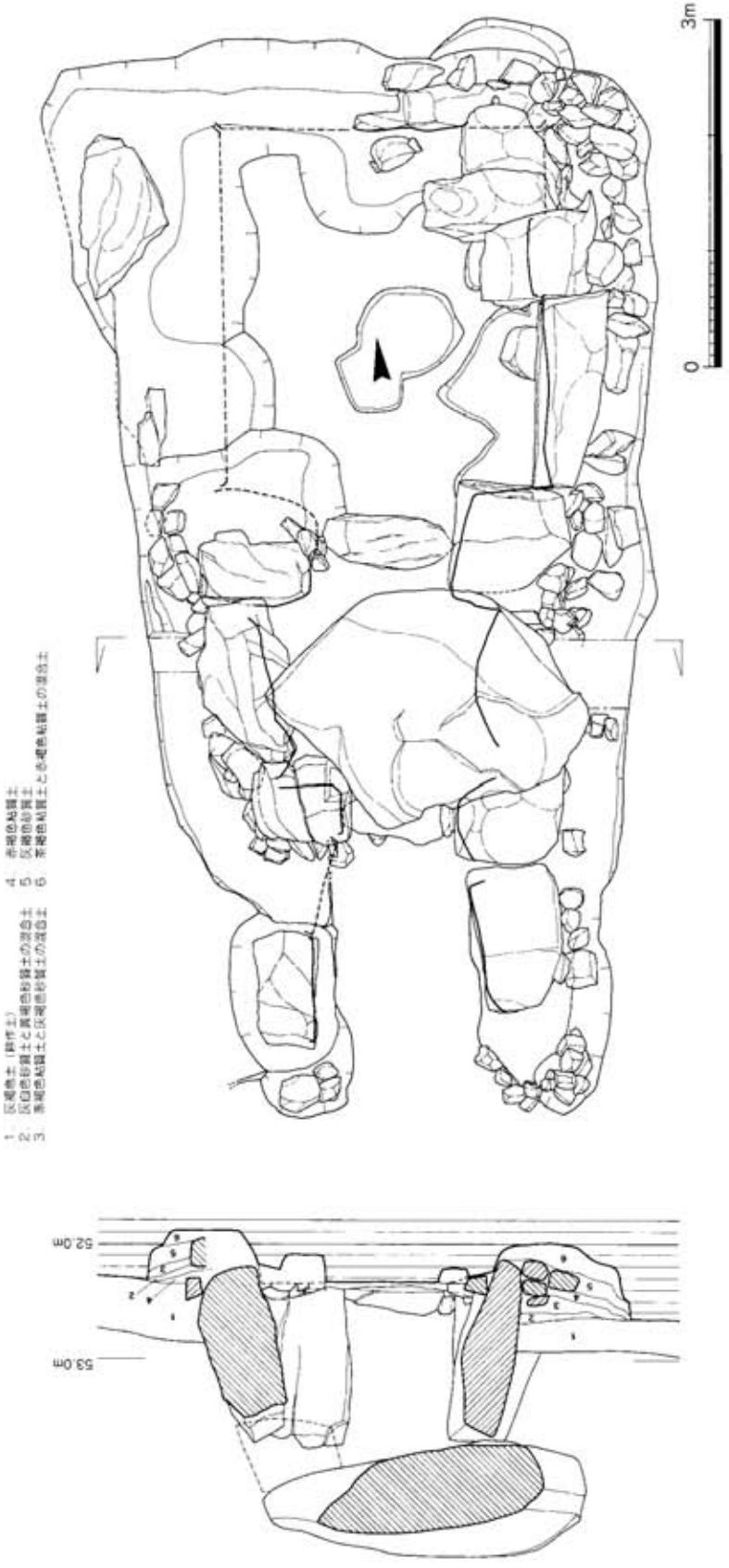


Fig.143　ST004古墳石室平面（1：60）

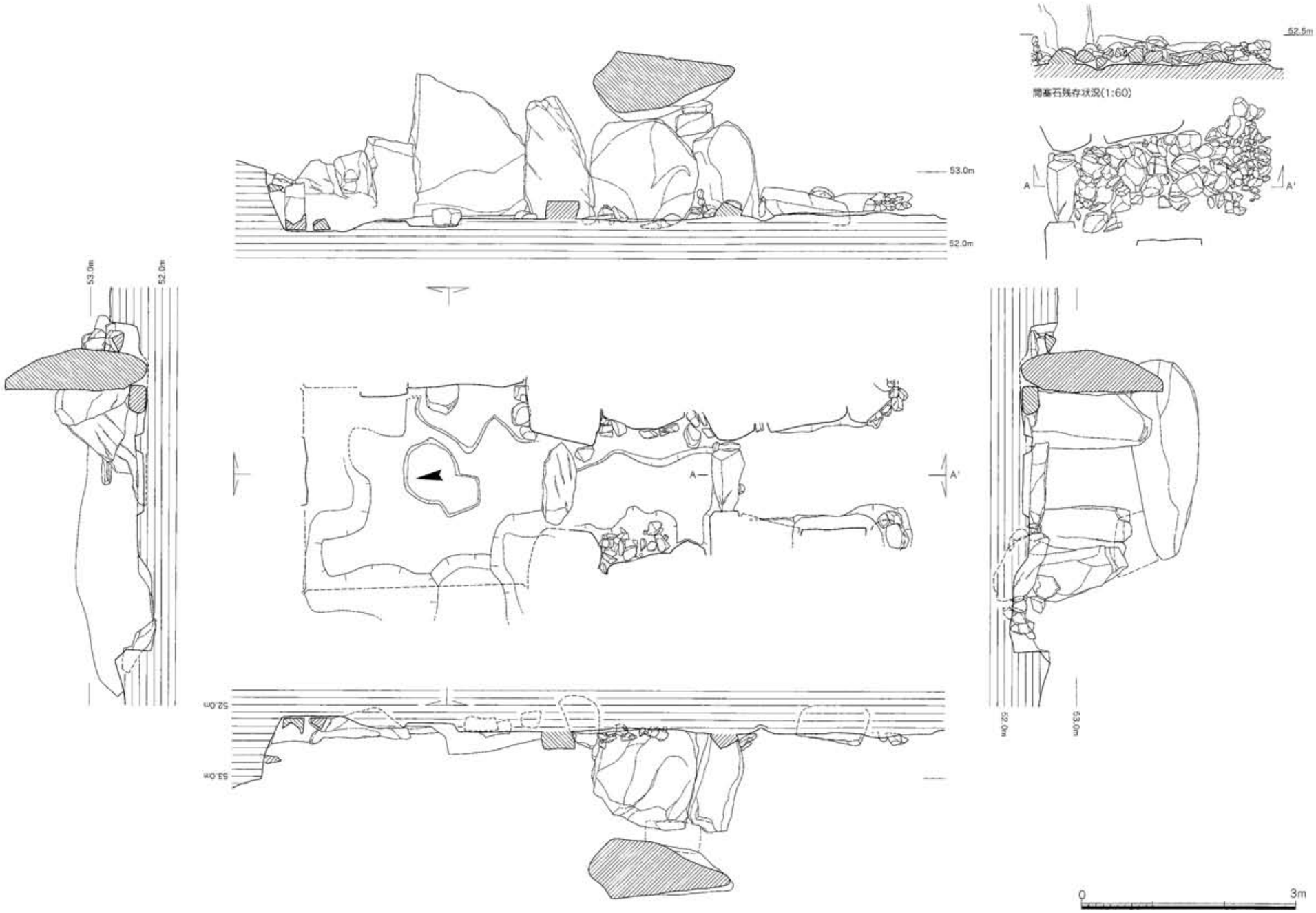


Fig.144　ＳＴ004古墳石室（1：60）

には0.1m程度の小礫が集中している。閉塞石内の埋土は黒色腐食質土であり、埋土中からガラス小玉が出土している。

ＳＴＯＯ４古墳出土遺物（Fig.145～147）　出土遺物として須恵器・土師器・鉄製品・ガラス製品がある。遺物は玄室・前室内及び羨道部のいずれでも検出されているが、原位置で出土したものは皆無である。また石室東側の壁体外側において、近現代の陶磁器類、礫とともに壁体に寄せて集積された状態で出土しており、石室東側撹乱土中出土として取り上げている。

150～172は蓋、156は有蓋高杯の蓋、他は杯蓋である。また170のみ土師器で他はすべて須恵器である。150～161は口縁部にかえりを持たないもの。150～156，158のように体部と口縁部に明瞭に境を持たずに緩やかに湾曲するものと、157，159～161のように体部はあまり湾曲せず、口縁部は体部との境でやや屈曲して直線的に下方へ伸びるものがある。また前者には口径13～14cm程のもの（150，151，156）、12cm前後のもの（152～154）、10～11cm前後のもの（155，158）に分かれ、後者は12cm前後のもの（157，159）、11cm前後のもの（160，161）に

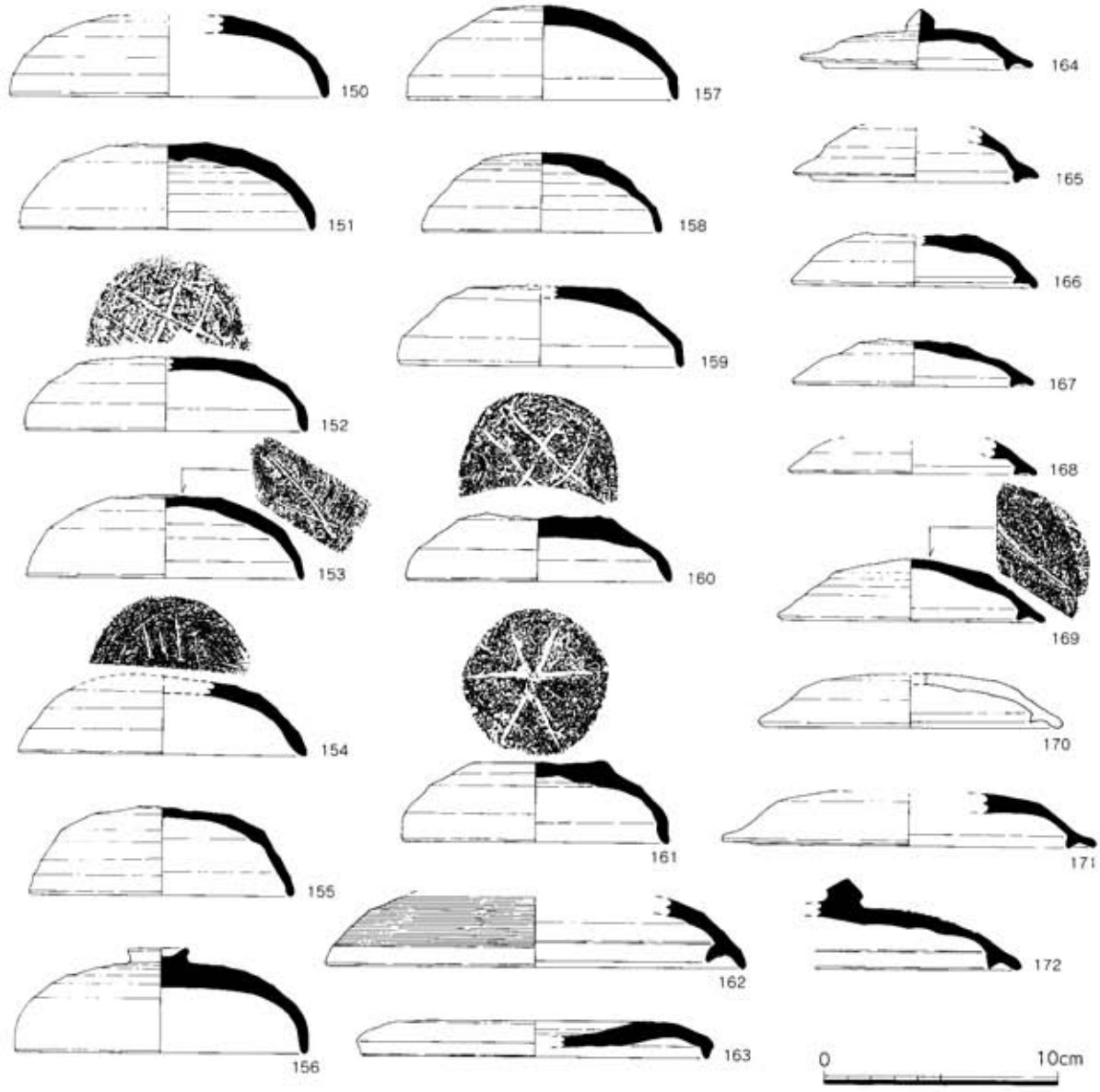


Fig.145　ＳＴ004古墳出土遺物１（1：3）

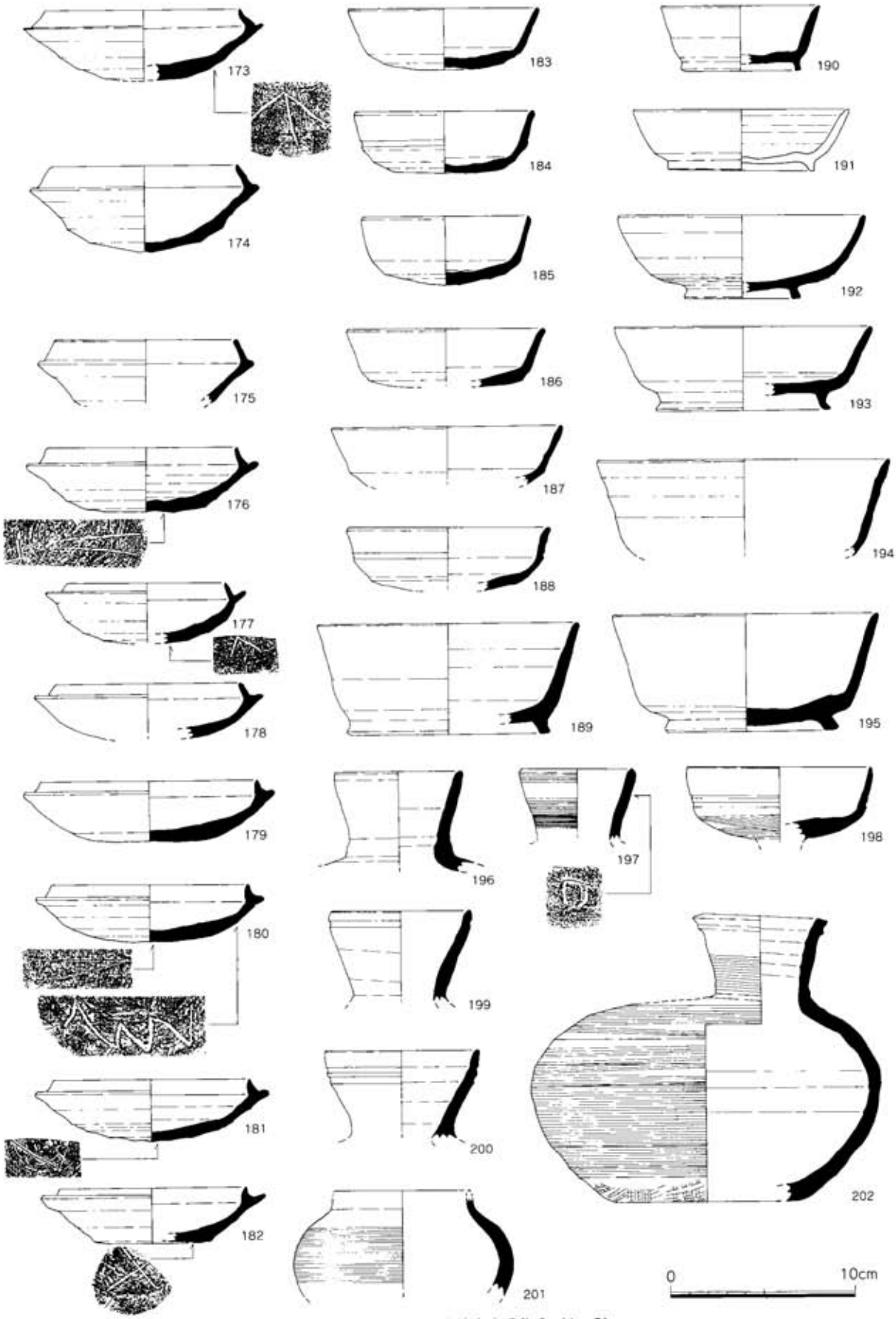


Fig.146　ＳＴ004古墳出土遺物２（1：3）

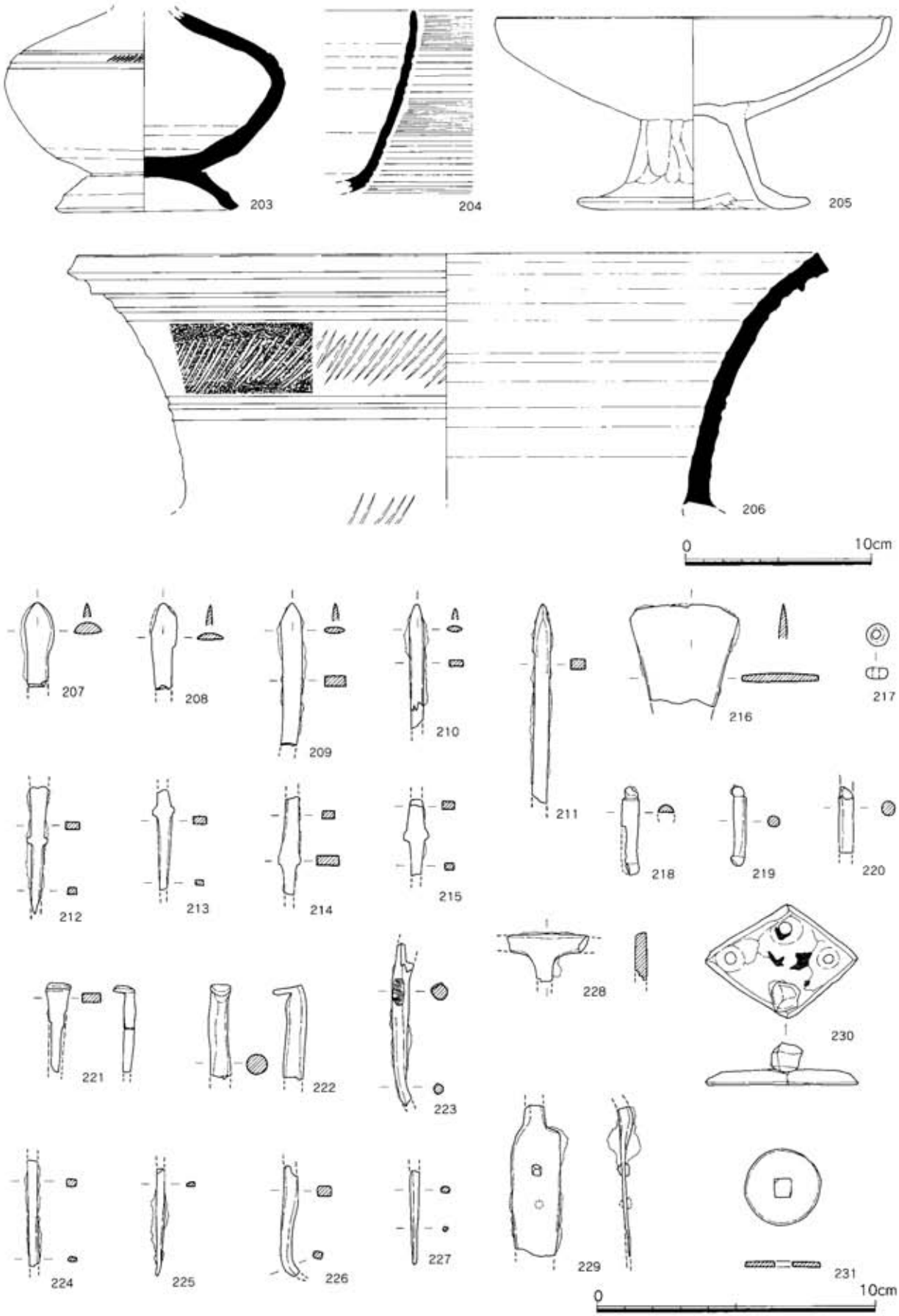


Fig.147　ＳＴ004古墳出土遺物３（203～206は1：3、ほかは1：2）

分類できる。163は体部が平坦で口縁端部が直角に折れて下方につまみ出されるもの。162，164～172は端部にかえりを持つもの。162は口径13cm程の大きなもので、かえりは長く、体部にはカキメを施す。164～169は口径9cm前後のもの、170は13.5cm前後になるもの、171は13.5cm前後のもの。164，165はかえりが口縁端部より下方に伸びるもの、166は口縁端部より短いもの、168～169はほぼ同じ高さになるもの。164，172は擬宝珠様のつまみを持つ。

173～195は杯身、191のみ土師器で他は須恵器である。173～182は口縁部にかえりを持つもの。173～178は立ち上がりが直線的に伸びて内傾するもの、179～182は短く外反するもの。183～188はやや丸みのある底部から直線的に伸びる口縁部を持つもの。189～195は高台を持つもの。189，195は口径14cm前後になるもの、高台は断面方形で踏ん張りぎみに外方に開く。196～200，197は提瓶の口縁部、いずれも直線的に開く。201は短頸壺、口縁部は直立し、丸みを帯びた胴部にはカキメを施す。202は平瓶、口縁部は僅かに外反しつつ直立し、端部端面は平坦で口縁部外面に断面三角形の突帯を張り付ける。底部は平底で口縁部から胴部外面にカキメを施し、底部付近には格子目タタキが残る。198は高杯の杯部、丸みを持つ体部から直立する口縁部を持つ。体部外面には二条の沈線を持ち、底部外面にはカキメが残る。

203・204・206は須恵器。203は脚付き長頸壺である。ソロバン形に大きく膨らむ胴部に内湾して大きく広がる脚を持つ。肩部に二条の沈線を巡らし、沈線間には刻み目を施す。204は鉢か。体部から口縁部は緩やかに内湾

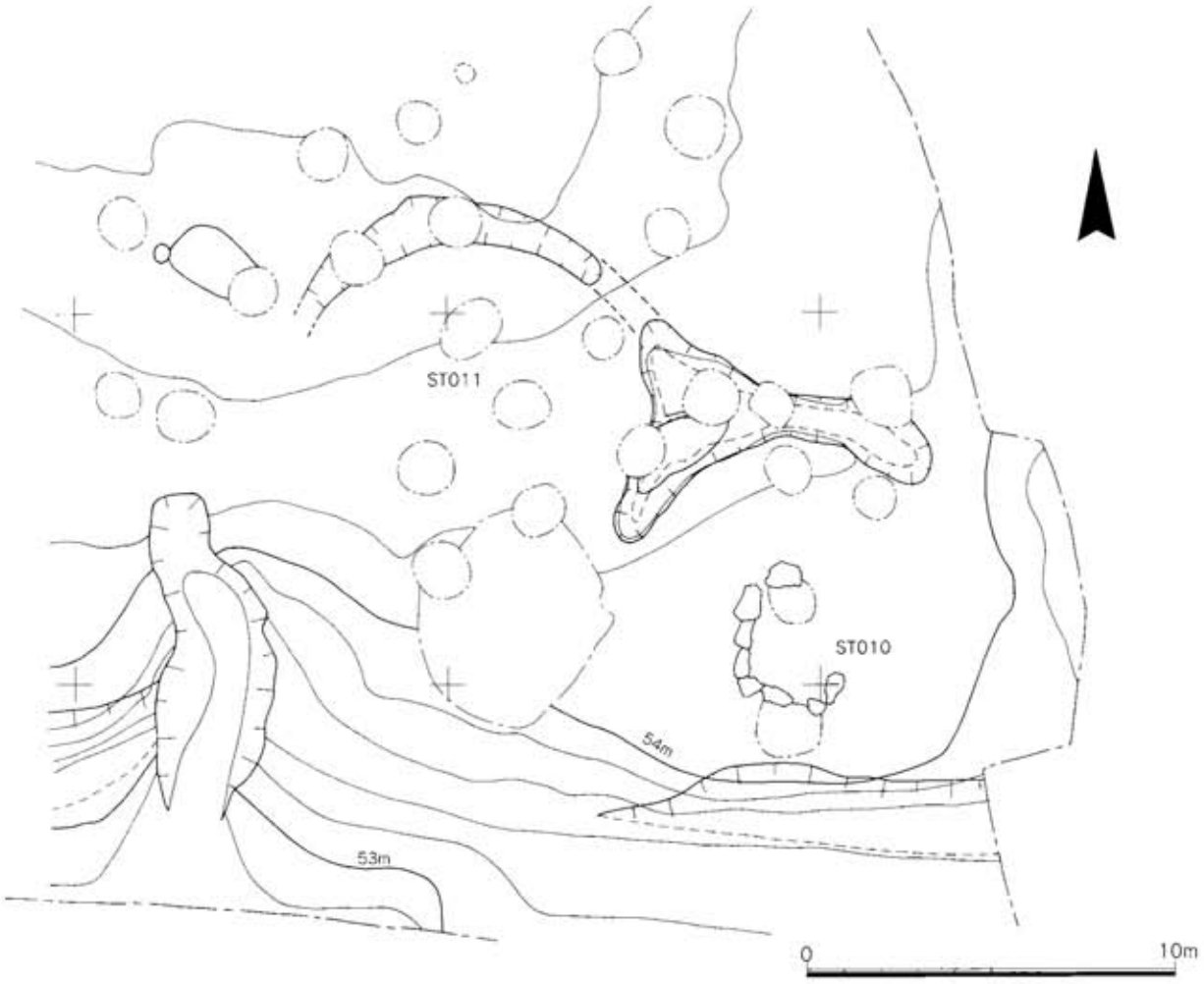


Fig.148　ST010，011古墳測量図（1：200）

しつつ立ち上がり、外面には全面にカキメを施す。206は大甕の口縁部で、口径も大きく器壁も厚いため、かなりの大型品になるものと思われる。端部は断面方形で、口縁部外面には断面三角形の突帯を貼り付ける。頸部の沈線間にはヘラにより斜め方向に刻み目が施される。205は土師器の高杯で、杯部は直線的に大きく開いて口縁部付近でほぼ真っすぐに立ち上がる。脚部は裾部でくびれて大きく開き、脚体部外面及び裾部内面にはヘラによる整形痕がみられ、杯部は内外面共にミガキが施される。

207～216・218～231は鉄製品。207～216は鉄鏃の鏃身部、207～211は小形柳葉式で、207・208の鏃身断面は片丸、209・210は両丸である。212～215は鉄鏃の茎部でいずれも篦被が見られる。216は斧箭式で鏃身部のみ遺存する。218～220は弓付属金具、218・219で見れば片方の端部は球状、もう片方は半球状である。221～227は鉄釘、221・222で見ると、一方の端部を叩いて平坦にし、L字形に折り曲げて頭としている。228～231は馬具、228は鉸具の差し金、229は鐙のU字金具。230は飾金具で、平面形は菱形、四隅に飾り鋲が打たれていたようであるが、1個のみが遺存し、鋲頭は頂部及び側面の四方に面を持つ。鉄地金銅張りで、表面に一部金箔が残存する。231は近世の鉄銭。217はガラス製小玉で閉塞石中の黒色腐食質土中の出土。この黒色土については全量取り上げ後に水洗を行ったが、検出されたのはこの1点のみであった。

ＳＴ０１０古墳（Fig.148・149）

墳丘・周溝（Fig.148）　D区の東端、ＢＨ23・24、ＢＩ23・24グリッドに跨って位置する。地形的には丘陵尾根上の緩斜面（標高54～55m）にあたり、その南側・東側は急峻な斜面となって谷部へと下る。古墳は墳丘基底面に至るまで蜜柑園造成等に伴い削平を被っており、石室最下段の石材の一部と周溝の一部のみが遺存する。周溝は石室背面にあたる北側にのみ弧状に残っており、残存長は約10m、幅は最大３m、深さは最大0.25mを測る。この残存する周溝から復元される墳径は約11～12mであろう。周溝の埋土は黒褐色土で出土遺物として土師器の杯２点が検出されている。なお、周溝の西寄り付近から北西方向に伸びる掘り方が確認されており、ＳＴ011古墳の周溝へと連続するようである。

内部主体（Fig.149）　単室両袖式横穴式石室と思われる。ほぼ真南に開口し、主軸方位はＳ－８°－Wである。石室石材は最下段の壁体の一部のみが遺存し、現存するのは玄門部左側の袖石、石室左壁、奥壁左壁寄りの１石、右壁前壁寄りの１石とこれと接する右側前壁の１石、玄門部の框石の１石で、石材はすべて花崗岩である。石室前面及び奥壁前面付近に蜜柑植樹の撹乱壙がある他、奥壁・右壁では石材の抜き跡が見られる。残存する石材、掘り方等から復元される石室規模は玄室長約2.0m、玄室幅は前壁・奥壁共に変わらず約1.8～1.9mで、平面形は長方形である。玄門部の框石として長さ0.75m、幅0.35m程の上面が平たい石が据えられ、その左側に高さ約0.8mの石を立てて玄門袖石としているが、右側では約0.3m程の空間を空けて高さ0.25m程の小振りの石が据えられているのみである。この空間については掘り方が確認されていることから、本来は袖石が立てられていたものと推定されるが、玄門左側の立柱石よりは小型の石が用いられていたものと思われる。以上のことから、玄門部付近の計測値としては玄門幅が0.75m、左壁袖部幅が0.45m、右壁袖部幅0.7mと、玄門部が左壁寄りに造られているものと言える。壁体の構築法についてであるが、左壁に長さ・高さ共にほぼ大差ない３石を最下段に据えており、いずれも高さ0.3～0.4m程と小振りで大型の石材を腰石として据えるものではない。また、右壁についても１石しか遺存しないものの、その大きさや抜き跡などから推測して左壁と同様３石程度の石を配置していたようである。奥壁については、１石のみが左壁寄りに遺存しているが、蜜柑植樹の際に撹乱を受け、後方に倒れ込んでいる。調査着手段階には奥壁右壁側にこれと同程度の大きさの石が石室内部に倒れていたため、調査の工程上不都合が生じたため除去したが、おそらく同程度の大きさの石を２石立て並べて奥壁を構築していたものと考え

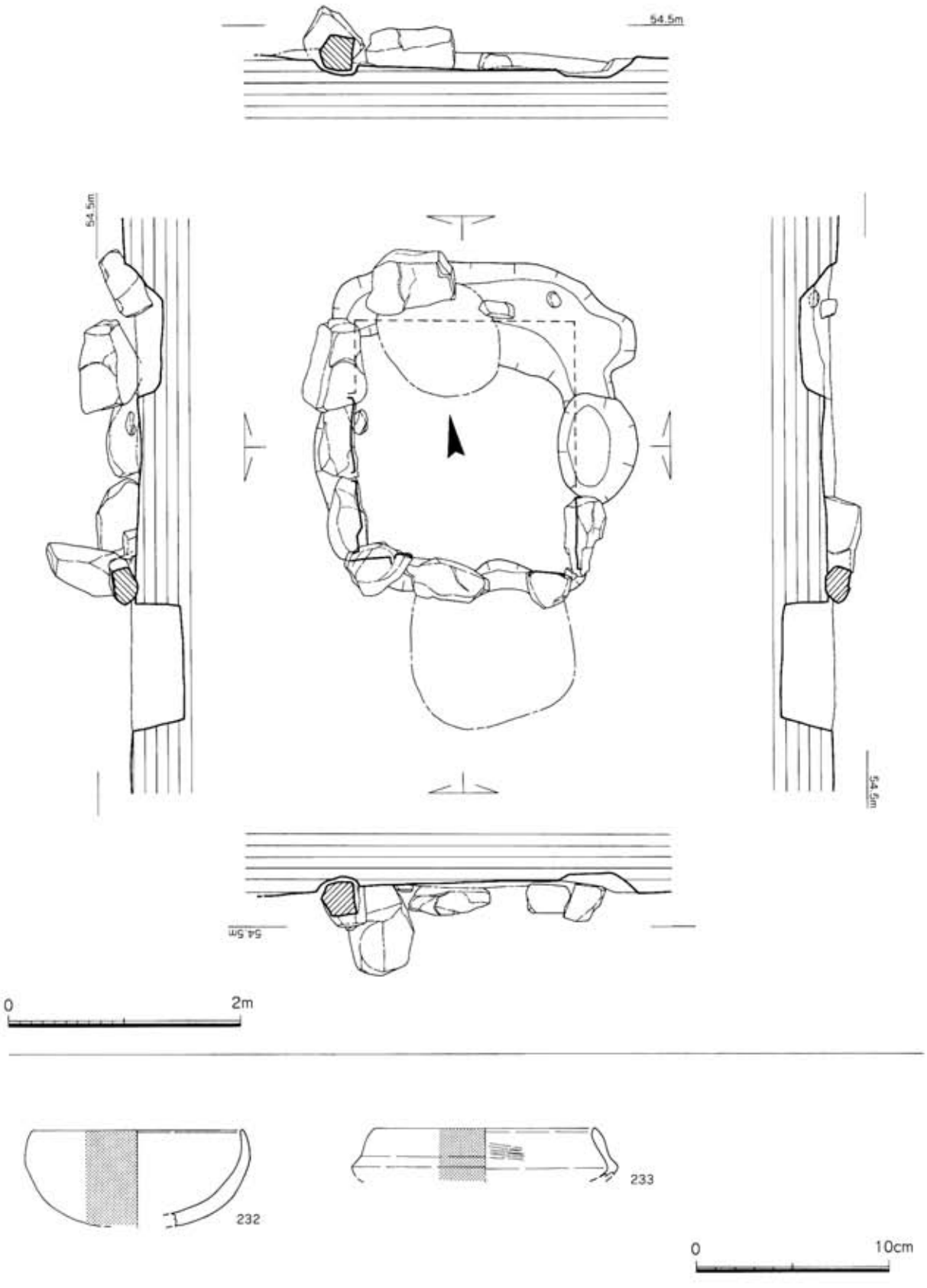


Fig.149　ＳＴ010古墳石室（1：50）及び出土遺物（1：3）

られる。

なお、玄門部より前面の構造については撹乱壙と重複するため明らかではないが、左壁側の袖石前面（南側）で見たところ、石材の抜き跡は確認出来ず、前庭側壁のような小規模な石列が付設されていたものと思われる。また閉塞石は全く遺存しない。

ＳＴ０１０古墳出土遺物（Fig.149－232・233）　周溝埋土から土師器の杯２点が出土している。232は口縁部から底部にかけて丸みのある体部を持つもので、復元口径10.7cm、調整は外面がヘラミガキ、内面はナデ、外面には黒色顔料が塗布される。233はいわゆる模倣杯で体部と口縁部の境は段を有し、口縁部は内傾する。復原口径11.2cm。調整は内外面共にミガキで、外面には黒色顔料が塗布される。

ＳＴ０１１古墳（Fig.148）

周溝の一部のみを確認している。周溝は東側をＳＴ010のそれと共有しており、ＳＴ010の周溝と合わせると墳径の1/2程度が残存しているようである。残存する周溝から復元される墳径は概ね10mである。最大幅は約2.5m、深さは最大でも0.1m程度である。溝内からの出土遺物はない。

ＳＸ００９不明遺構（Fig.150）

Ｂ区西側、戦場古墳群５区との間に走る狭い谷部へ続く急峻な斜面上に位置する。尾根上に向かって弧状に黒色腐食質土が堆積するもので、谷部側は削平を受けて法面をなしている。現状では長さ5.2m、幅1.8mが遺存し、断面形は斜面に対して緩やかな凹面をなしている。その形状・埋土の状況は古墳の周溝に類似しており、小型墳の周溝の一部である可能性が考えられる。古墳の周溝と考えた場合、石室に相当する部分は地山に至るまで大規模な削平を被っていることになり、調査区の本来の地形は、より緩やかな斜面となって西側谷部へと続いていた

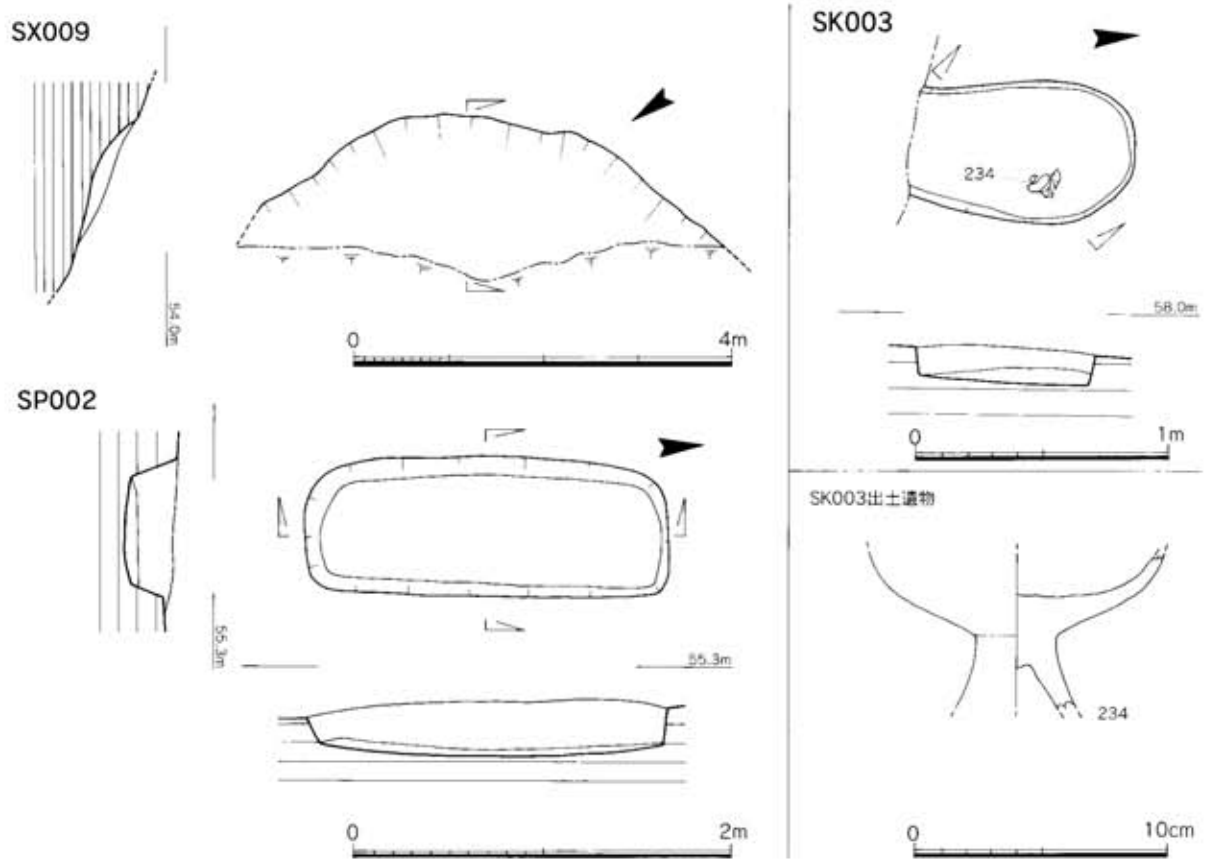


Fig.150　ＳＰ002（1：40）、003土壙墓（1：30）、ＳＸ009不明遺構（1：80）及び出土遺物（1：3）

ものと推測されるが、現状では詳細不明である。黒色土中より須恵器甕の胴部小片が1点出土している。

5．奈良～平安時代以降の遺構と遺物（Fig.150・151）

奈良～平安時代の遺構として、土壙墓2基（ＳＰ002・017）・木棺墓1基（ＳＰ014）の他、土壙墓の可能性がある土壙1基（ＳＫ003）が確認されている。これらはいずれもＡ区とＤ区の境付近に集中しており、丘陵尾根に近い緩斜面上に立地しており、いずれも南北方向に主軸方位を取っている。このうち、時期を示す遺物が出土したのはＳＰ017土壙墓のみであるが、類似例等からほぼ当該期の遺構と判断している。

ＳＰ００２土壙墓（Fig.150）

平成5年度のＡ区の調査で確認されたもので、Ａ区とＤ区の境付近、ＢＧ26グリッドに位置する。南東6ｍにＳＰ017土壙墓がほぼ同じ主軸方位で近接する。南北に長軸を持つ平面長方形の土壙で、東西辺約1.9m、南北辺約0.7mと比較的整った平面形をなす。底面は平坦で検出面からの深さは最大0.2mを測る。主軸方位はＮ－4°－Ｅ。形態から土壙墓と考えられる。埋土中からの出土遺物はない。

ＳＫ００３土壙（Fig.150）

同じくＡ区の調査で確認されたもので、丘陵尾根頂部に近い現況農道沿いに立地している。南北に長軸を持つ、長楕円形をなすものと推定されるが、遺構の南部分は撹乱壙と重複する。主軸方位はＮ－4°－Ｅ、現状の規模は南北長1.2m、東西幅は北寄りが幅広で約0.8m、南側に向かってすぼまりぎみになる。深さは約0.1m。ＳＰ017と形態が似ており、土壙墓の可能性がある。埋土中から土師器高杯の破片1点（234）が出土しているが、7世紀前半代の所産であり、遺構内への混入品と考えられる。

ＳＫ００３土壙出土遺物（Fig.150－234）　234は土師器高杯、杯部の口縁部と脚部裾部を欠く。杯部の形態は口縁部と体部の境がない、丸みを持つ体部である。器表面の磨耗が著しく、調整は不明である。

ＳＰ０１４木棺墓（Fig.151）

Ｄ区の北西隅、ＢＦ26グリッド中の農道沿いに位置する。平面形は整った長方形で、長さ約2.2m、幅約0.6m、南東隅に撹乱壙が重複する。断面形は箱型に近く、底面は平坦、深さは最大0.55mを測る。南北方向に主軸を持ち、主軸方位はＮ－16°－Ｅである。内部からは北壁寄りの底面近くで刀子1点（235）が検出された他、各壁寄りの底面に近い位置で釘の破片4点が出土しており、木棺墓であったと考えられる。埋土の横断面観察では上面から落ち込んだような堆積状況を示しており、この埋土中に腐食質の黒色土が多く見られることから、木蓋が腐朽した後、表土が棺内に流れ込んだものと推定される。

ＳＰ０１４木棺墓出土遺物（Fig.151）　235～239は鉄製品。235は刀子で、刃部の切っ先と茎部の端部をそれぞれ欠損する。関部は不明瞭で茎部に木質が残存する。236～239は釘で、237のみ頭が残っており、平たく叩いた後にＬ字形に折り曲げられる。いずれも木質が残り、ほとんどが釘と直交して繊維が見られるが、238では釘の頭側で直交、先側では平行して繊維が見られ、二枚の板を貼り合わせていたような様子が見受けられる。

ＳＰ０１７土壙墓（Fig.151）

Ｄ区の東側、ＢＨ25グリッドに位置し、ＳＰ003土壙墓とほぼ主軸を同じくして南北に並んでいる。平面形は南北に長軸をとる略長方形で、主軸方位はＮ－10°－Ｗ、短辺のうち、北辺が広く、南辺が狭い上、各コーナーは丸みを持つ。規模は長軸1.7m、幅は北側で約0.7m、南側で約0.4m、深さは検出面から約0.3mを測る。中央部付近の東壁よりで、土師器の杯3個体が出土している。杯は遺構底面直上でそれぞれが接するように、南北に並んでおり、南寄りの1点（242）が口縁部を上に向けて、他の2点（240・241）は口縁部を下に向け、天地を逆

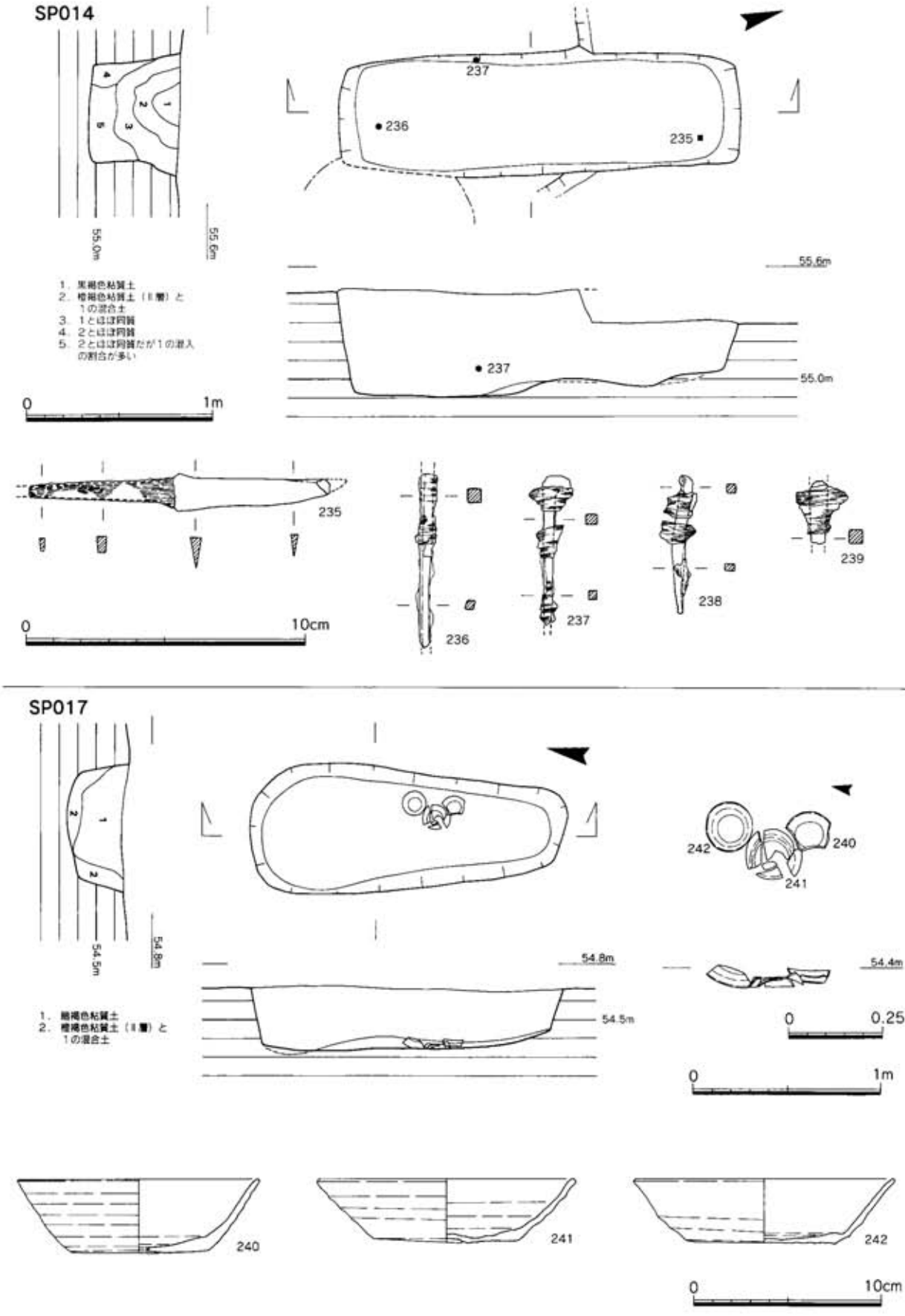


Fig.151　ＳＰ014木棺墓、ＳＰ017土壙墓（1：30）及び出土遺物（235～239は1：2、240～242は1：3）

転させた状態で検出されている。241・242は完形であるが、240は口縁部から体部にかけて、全形の約1/3が欠損しており、埋土中からも出土していない。形態から土壙墓と考えられる。

ＳＰＯ１７土壙墓出土遺物（Fig.151）　240～242は土師器の杯。いずれも法量・形態・調整等が極めて類似する。平底の底部から直線的に開く体部を持つもので、法量は口径13～13.5cm、器高3.5～3.9cm、底径7.5～7.9cmを測る。器壁は概ね3mm程度と薄い。調整は底部底面をヘラ切り離し後、ナデを行っており、体部全体もヨコナデ・ナデが施される。８世紀末～９世紀初頭の所産である。

６．戦場ヶ谷遺跡の放射性炭素（14C）年代測定結果について

ＳＸ023花弁状石組炉の内部底面からは、比較的まとまった量の炭化物が検出された。この炭化物の年代測定について（株）古環境研究所に分析委託を行った。以下に分析結果を記す。

①試料と方法

試料採取地点	種類	前処理・調整	測定法
２区SX023石組炉	炭	酸－アルカリ－酸洗浄 石墨調整	ＡＭＳ法

②測定結果

14C年代 （年BP）	δ13C （‰）	補正14C年代 （年BP）	暦年代	測定No. （Beta-）
8860±50	-28.0	8810±50	交点：BC 7920	119782
			2σ：BC 7975 TO 7695	
			1σ：BC 7950 TO 7885	
			BC 7795 TO 7730	

（2σ：95% probability，1σ：68% probability）

備　考

1）14C年代測定値

試料の14C/12C比から、単純に現在（1950年AD）から何年前（BP）かを計算した値。14Cの半減期は5,568年を用いた。

2）δ13C測定値

試料の測定14C/12C比を補正するための炭素安定同位体比（13C/12C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

3）補正14C年代値

δ13C測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、14C/12Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

7．結　語

縄文時代の遺構としては、集石遺構９基が確認されており、いずれも早期に位置付けられるものである。また、遺物包含層より検出された縄文土器は早期（押型文土器・無文土器・条痕土器）のものを中心とし、前期のもの（曽畑系）は若干量であることから、ほぼ早期に限定されるキャンプサイトと言ってよい。

押型文土器のバリエーションとしては、まず口縁部が直線的に開き、外面に山形文・楕円文を横走（一部斜走）、口縁部内面が無文、あるいは押型文の文様帯を持つタイプが見られる。これには、外面にのみ山形文を横走（26～31）、斜走（32・34・35）させるもの、外面に山形文を横走、内面に山形文を横走（36・37・38・39）、外面に山形文を斜走、内面に山形文を斜走（40）させるもの、外面にのみ楕円文を横走（59～61）、外面に楕円文を横走、内面に楕円文を横走（62～67）させるものなど、幾つかの種類に分けられる。また、79のように外面に楕円文横走、内面に山形文横走させるが、その上部が無文帯となるものもこれに含まれる。これらのうちの多くは、大分編年に照らせば稲荷山式に類似する土器群と考えられるが、楕円文を持つ59～67が厚さ１cm前後となるのと比べ、外面に山形文を持つものの中で28・32・35などは器壁1.3～1.5cm程の厚い器壁をなしており、この28・32・35などについてはいわゆる「円筒形押型文土器」に相当する一群と思われる。

次に口縁部が直線的に開き、あるいは僅かに外反し、外面に押型文を横走、内面に原体条痕を持つ早水台式類似のものがある。このうち、口縁部が直線的に開き、外面に楕円文横走、内面に原体条痕を施すもの（83・86・89）、僅かに外反し、外面に楕円文横走、内面に原体条痕を施すもの（80・81・84・85）、といったタイプが見られる。また、82のように外面楕円文が斜走となるものも含まれる。それから、口縁部内面に原体条痕、外面が無文となる88は、口縁部外面上部に無文帯を持つものと思われ、同時期に含まれるものと考えている。なお、外面に楕円文横走、内面に山形文を横走させ、その上部が無文帯となる79についても、原体条痕を欠くものの、やや外反する口縁部形態から早水台式相当に位置付けられる。

押型文と並行すると思われる無文土器には２種があり、口縁部が直線的に開く厚手のもの（5～13）と、端部が外反し、より薄手のもの（14）の２種がみられる。

以上のことから、押型文土器には稲荷山式類似、早水台式類似の大きく２者が観察されるが、本調査区において両者の区分は主に原体条痕の有無の他、楕円文の粒子の大きさの差違に拠っている。また、早水台式類似とした土器群をこれに続く下菅生Ｂ式と区分したのは、口縁部の外反の度合いが小さく、直線的に開くものも見られる点、外面楕円文が横位を中心とし、縦位のものが相対的に少ない点に拠る。また口縁部内面の原体条痕が押型文の文様帯を伴わずに単独で施文されるものが多い点（82・84・85など）も早水台式に近い要素と言える。しかし中でも、内面に短い原体条痕を有し、内外面の楕円文が大型化・粗雑化する81は、田村式まで下る特徴を持つと言える。いずれにしても、大分編年を直接的に当てはめることには当然ながら問題点も多く、ここでは押型文土器に大きく２段階の土器相が見られる点のみを指摘するに留めたい。

出土遺物の垂直分布状況と集石遺構のレベルからは複数の生活面を押さえることは不可能であったため、集石遺構が早期のどの段階に位置付けられるのか、あるいは複数時期に区分できるのか、検証は極めて難しい。しかし、前述したようにＤ区における集石遺構は平面分布上、北西グループ（ＳＸ020・023・024・026）と南東グループ（ＳＸ025・028・031）に分けられ、北西グループの周辺では稲荷山式類似のものがある程度集中して出土し、さらにＳＸ024では稲荷山式類似の、山形文を横走させる土器片が埋土中より検出されている。一方、南東グループ周辺の遺物集中箇所では原体条痕を伴う早水台式類似の土器が見られるなど、両者が時期的に異なる可能性が指摘できる。

その他、特筆すべきものとして一連の押型文・無文土器群とは層位的に区分されて出土した条痕土器（1～4）がある。下層の調査のうち、当該土器を検出できたのはＢＤ21グリッドの一角のみであったが、脊振山南麓地帯においては押型文土器の最古相に位置付けられる稲荷山式並行段階より、さらに先行する土器の存在を確認できた点は非常に重要である。

古墳時代の遺構としては、ＳＴ004・010・011の３基の存在が確認されているが、いずれも蜜柑園造成のために破壊が著しい。このうち、ＳＴ004は複室構造のもので、同じく複室構造をとる浦田古墳群１区ＳＴ001に比べ、玄門幅・前門幅共により広い。また、壁体を構成する石材もより大型で、玄室・前室の各壁は大石をおそらく１石ずつ配置することで構成し、玄室天井石をその上に直接架構していた可能性が高い。玄室平面積も８㎡を超え、脊振山南麓の群集墳の中でも最も巨室・巨石化が進んだ段階の所産である。撹乱が著しいものの、出土須恵器はⅢＣ期からⅧ期までそれぞれの時期のものが含まれ、６世紀末に築造され、８世紀初頭まで追葬・墓前祭祀が行われたものと考えられる。ＳＴ010は長方形玄室に前庭側壁を付設するタイプで、出土遺物は僅かであるが、平面プランは戦場古墳群６区ＳＴ033・032・039に極めて類似し、６世紀後半でも古い段階（３／４四半世紀）に位置付けられよう。今回の調査では南北約160m、東西幅約80mの範囲で尾根上全体の表土を除去し、この尾根上の支群について全体の把握に努めたが、検出された古墳は上記の２基のほか、南側の農道を挟んで調査区外にあたる蜜柑園内で確認調査により古墳の周溝が一部検出されているに過ぎない。また築造順序としてはＳＴ010→ＳＴ004となるが、両者は60mの距離を空けており、平面分布上では同一支群とする根拠は薄い。しかし戦場古墳群６区では、６世紀後半代のＳＴ033・034・039とこれに続く６世紀末のＳＴ049が約70m離れて尾根上に立地するなど、ⅢＢ期とⅢＣ期の間を境として立地が変化している可能性が考えられ、ＳＴ010とＳＴ004の関連についても同一支群内での移動と捉えるべきであろう。特にＳＴ010からＳＴ004への推移は、戦場古墳群６区と同様、石室規模・石材の大型化・羨道の付設といった石室構造における大きな画期であり、地山整形方法の違いが立地場所の選定に強く影響しているものと思われる。

奈良時代末～平安時代前期と思われる遺構として、土壙墓２基（ＳＰ002・017）、木棺墓１基（ＳＰ014）、及び土壙墓の可能性があるものとしてＳＫ003が検出されている。いずれもＳＴ010・011古墳の背面にあたる緩斜面上にほぼ南北方向を主軸として分布している。当該期の土壙墓・木棺墓群は脊振山南麓において大和町礫石Ａ遺跡[1]、久池井一本松遺跡[2]、久池井Ｂ・Ｃ遺跡[3]で確認されており、佐賀市金立開拓遺跡[4]では７世紀前半～８世紀前半のより古い一群が見られ、いずれも古墳群に隣接して群を形成している。本調査区内で検出された遺構のうち、土師器杯が供献されていたＳＰ017は８世紀末～９世紀初頭に位置付けられる。また、刀子が副葬されていたＳＰ014木棺墓については時期が明確でないが、掘り方の形状、鉄釘の配置状況等が類似する久池井一本松遺跡ＳＰ15・25の例から推定すると、ほぼ９世紀代の所産と考えられる。その他、遺物を伴わないＳＰ002についてもほぼ同時期である８世紀末～９世紀代と考えたい。なお、ＳＫ003の出土土器は６世紀後半代のもので、破片でもあることから埋土への混入品とみられ、同様に８世紀末～９世紀代の土壙墓の可能性が高い。

[参考文献]

坂本 嘉弘（1998）：「東九州の押型土器研究の現状と課題」『九州の押型文土器』　九州縄文研究会

註１）田平 徳栄　『礫石Ａ遺跡』『礫石遺跡』　九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書(9)　1989

２）田平 徳栄　『久池井一本松遺跡』『礫石遺跡』　九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書(9)　1989

３）田平 徳栄　『久池井Ｂ・Ｃ遺跡』『礫石遺跡』　九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書(9)　1989

４）蒲原 宏行　『金立開拓遺跡』　九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書(2)　1989

Tab.20　戦場ケ谷遺跡２区古墳時代、奈良・平安時代の土器一覧表

Fig. 図番号	PL. 番号	県遺物登録番号	出土地点	種別	器種	法量 (cm)			胎土 ※混入物	色調	文様・調整	
						口径	器高	底径			外器面	内器面
145-150		95002092	ＳＴ004１区カクラン	須恵器	杯蓋	(13.5)	3.6	—	砂粒少量	灰色	天井部ヘラ削り、ロクロナデ	ロクロナデ
151	50-1	95002046	ＳＴ004副室、玄室	須恵器	杯蓋	(12.6)	3.7	—	砂粒少量	黒灰色	天井部ヘラ削り、ロクロナデ	ロクロナデ
152		95002105	ＳＴ004副室	須恵器	杯蓋	(12.0)	(3.2)	—	砂粒少量	灰色	天井部ヘラ切り後ナデ	ロクロナデ
153		95002070	ＳＴ004	須恵器	杯蓋	(11.8)	(3.6)	—	砂粒少量	灰色	天井部ヘラ削り、ロクロナデ	ロクロナデ
154	50-2	95002031	ＳＴ004副室、玄室	〃	杯蓋	12.4	(3.0)	—	砂粒少量	灰色	天井部ヘラ削り、ロクロナデ	ロクロナデ
155		95002088	ＳＴ004副室	須恵器	杯蓋	(11.2)	(3.9)	—	砂粒少量	暗灰色	天井部ヘラ削り、ロクロナデ	ロクロナデ
156		95002056	ＳＴ004副室床面	須恵器	蓋	(12.4)	4.5	—	砂粒少量	灰色	天井部ヘラ削り、ロクロナデ	ロクロナデ
157		95002090	ＳＴ004副室	須恵器	杯蓋	(11.4)	4.0		砂粒少量	暗灰色	天井部ヘラ削り、ロクロナデ	ロクロナデ
158		95002064	ＳＴ004１区カクラン	須恵器	杯蓋	(10.0)	3.4		砂粒少量	灰色	天井部ヘラ切り後ナデ	ロクロナデ
159	50-3	95002089	ＳＴ004副室	須恵器	杯蓋	12.0	3.5		砂粒少量	暗灰色	天井部ヘラケズリ	ロクロナデ
160		95002043	ＳＴ004副室	須恵器	杯蓋	(11.2)	2.8	—	砂粒少量	灰色	天井部ヘラ切り後ナデ	ロクロナデ
161	50-4	95002063	ＳＴ004	須恵器	杯蓋	(11.2)	3.6		砂粒少量	鈍い黄橙	天井部ヘラ切り後ナデ	ロクロナデ
162		95002039	ＳＴ004	須恵器	杯蓋	(14.8)	(3.0)	—	砂粒少量	灰白色	天井部ヘラ削り、ロクロナデ	ロクロナデ
163		95002034	ＳＴ004副室	須恵器	杯蓋	(14.8)	(1.5)		砂粒少量	灰色	天井部ヘラ削り、ロクロナデ	ロクロナデ
164	50-5	95002033	ＳＴ004副室	須恵器	杯蓋	(7.8)	(2.6)		砂粒少量	灰白色	天井部ヘラ切り後ナデ	ロクロナデ
165		95002084	ＳＴ004玄室	須恵器	杯蓋	(8.6)	(2.3)		砂粒少量	暗灰色	ロクロナデ	ロクロナデ
166		95002059	ＳＴ004副室	須恵器	杯蓋	(10.4)	2.3	—	砂粒少量	暗灰色	天井部ヘラ削り、ロクロナデ	ロクロナデ
167		95002048	ＳＴ004副室床面	須恵器	杯蓋	(8.4)	2.0		砂粒少量	黒灰色	天井部ヘラ切り後ナデ	ロクロナデ
168		95002077	ＳＴ004副室	須恵器	杯蓋	(8.7)	(1.4)		砂粒少量	暗灰色	ロクロナデ	ロクロナデ
169		95002037	ＳＴ004副室	須恵器	杯蓋	(9.0)	2.7		砂粒少量	灰白色	天井部ヘラ切り後ナデ	ロクロナデ
170		95002065	ＳＴ004１区カクラン	土師器	杯蓋	(12.4)	(2.3)		砂粒少量	橙色	天井部ヘラ切り後ナデ	ロクロナデ
171		95002101	ＳＴ004	須恵器	杯蓋	(13.6)	(2.3)		砂粒少量	灰色	天井部ヘラ切り後ナデ	ロクロナデ
172		95002060	ＳＴ004玄室カクラン	須恵器	杯蓋		3.9		砂粒少量	灰色	天井部カキメ、ほかロクロナデ	ロクロナデ
146-173		95002095	ＳＴ004副室	須恵器	杯蓋	10.5	3.8		砂粒少量	灰色	底部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
174	50-6	95002032	ＳＴ004副室	須恵器	杯身	(9.9)	(4.7)		砂粒少量	灰色	底部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
175		95002094	ＳＴ004副室	須恵器	杯身	(9.6)	(3.4)		砂粒少量	灰色	底部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
176	50-7	95002045	ＳＴ004玄室カクラン	須恵器	杯身	(10.1)	3.5	—	砂粒少量	灰色	底部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
177		95002040	ＳＴ004副室、玄室	須恵器	杯身	(8.4)	3.2	—	砂粒少量	灰色	底部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
178		95002072	ＳＴ004副室	須恵器	杯身	(9.8)	(3.0)		砂粒少量	灰、暗赤褐	天井部ヘラ切り後ナデ	ロクロナデ
179		95002035	ＳＴ004１区カクラン	須恵器	杯身	(11.6)	3.2		砂粒少量	灰色	底部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
180		95002096	ＳＴ004副室	須恵器	杯身	(10.5)	3.1		砂粒少量	灰色	底部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
181		95002055	ＳＴ004玄室カクラン	須恵器	杯身	(10.4)	3.3	—	砂粒少量	暗灰色	底部ヘラ削り、ほかロクロナデ	ロクロナデ
182		95002097	ＳＴ004副室	須恵器	杯身	(10.0)	2.9		砂粒少量	暗灰色	底部ヘラ削り後ナデ	ロクロナデ
183		95002106	ＳＴ004副室	須恵器	杯身	(10.0)	3.4		砂粒少量	灰色	底部ヘラ切り後ナデ	ロクロナデ
184		95002091	ＳＴ004１区カクラン	須恵器	杯身	9.4	3.3		砂粒少量	茶褐色	底部ヘラ切り後ナデ	ロクロナデ
185		95002075	ＳＴ004１区カクラン	須恵器	杯身	(8.8)	(3.6)		砂粒少量	灰色	底部不定方向ヘラケズリ、ナデ	ロクロナデ
186		95002082	ＳＴ004副室	須恵器	杯身	(10.4)	(3.1)		砂粒少量	暗灰色	底部ヘラ切り後ナデ、	ロクロナデ
187		95002103	ＳＴ004４区カクラン	須恵器	杯身	(12.3)	(3.2)		砂粒少量	灰色	ロクロナデ	ロクロナデ
188		95002068	ＳＴ004１区カクラン	須恵器	杯身	(10.8)	(3.4)		砂粒少量	灰色	底部ヘラ切り後ナデ	ロクロナデ
189		95002057	ＳＴ004副室、玄室	須恵器	杯身	(13.9)	5.9	(10.2)	砂粒少量	灰色	ロクロナデ	ロクロナデ
190		95002053	ＳＴ004副室床面	須恵器	杯身	(8.4)	3.5	(5.9)	砂粒少量	灰色	ロクロナデ	ロクロナデ
191		95002094	ＳＴ004副室	土師器	杯身	11.6	3.4	7.5	砂粒少量	橙色	ロクロナデ	ロクロナデ
192		95002054	ＳＴ004玄室	須恵器	杯身	(13.2)	4.2	(6.2)	砂粒少量	灰色	ロクロナデ	ロクロナデ
193		95002042	ＳＴ004羨道	須恵器	杯身	(13.9)	4.5	(9.2)	砂粒少量	灰色	ロクロナデ	ロクロナデ
194		95002081	ＳＴ004副室	須恵器	杯身	(15.6)	(5.2)		砂粒少量	灰色	ロクロナデ	ロクロナデ
195		95002047	ＳＴ004副室、前庭部	須恵器	杯身	(14.2)	6.3	8.0	砂粒少量	鈍い黄橙	底部ヘラ切り後ナデ	ロクロナデ
196		95002058	ＳＴ004副室床面	須恵器	提瓶	(6.7)	(5.4)		砂粒少量	暗灰色	ロクロナデ	ロクロナデ
197		95002100	ＳＴ004副室	須恵器	提瓶	5.9	(4.2)		砂粒少量	暗灰色	ロクロナデ	ロクロナデ
198		95002038	ＳＴ004１区カクラン	須恵器	高杯	(9.8)	(4.0)		砂粒少量	灰色	ロクロナデ、カキメ	ロクロナデ
199		95002036	ＳＴ004	須恵器	提瓶	7.4	(4.9)		砂粒少量	灰白色	ロクロナデ	ロクロナデ
200		95002107	ＳＴ004副室、玄室	須恵器	提瓶	(8.1)	(4.7)		砂粒少量	褐灰色	ロクロナデ	ロクロナデ
201		95002061	ＳＴ004玄室	須恵器	小型短頸壺		(5.3)		砂粒少量	灰色	ロクロナデ、カキメ	ロクロナデ
202		95002051	ＳＴ004	須恵器	平瓶	(6.1)	15.3	(9.8)	砂粒少量	黒灰色	底部タタキ、胴部カキメ	ロクロナデ
147-203	50-8	95002099	ＳＴ004１区カクラン	須恵器	脚付長頸壺		(10.9)	(9.1)	砂粒少量	灰色	体底部ヘラ切り後ナデ	ロクロナデ
204		95002085	ＳＴ004１区カクラン	須恵器	脚付鉢		(9.8)		砂粒少量	暗赤褐色	カキメ	ロクロナデ
205		95002050	ＳＴ004副室、玄室	土師器	高杯	(20.9)	10.4	(9.8)	砂粒少量	橙色	脚部ヘラケズリ、ほかヘラミガキ	ナデ
206	50-9	95002052	ＳＴ004副室	須恵器	甕	(39.8)	(13.6)		砂粒少量	灰色	刻み目文、ロクロナデ	ロクロナデ
149-232		99003310	ＳＴ010周溝３区	土師器	杯	(10.7)	(5.0)		砂粒少量	黄橙色	ミガキ、黒色顔料塗布	黒色顔料塗布
233		99003311	ＳＴ010周溝３区	土師器	杯	(12.2)	(2.5)		砂粒少量	黄橙色	ミガキ、黒色顔料塗布	ミガキ、黒色顔料
150-234		97002896	ＳＫ002	土師器	高杯		(5.2)		砂粒少量	橙色	不明	不明
151-240		97001976	ＳＰ017	土師器	杯	(17.8)	3.9	7.3	砂、金雲母	橙色	底部ヘラ切り離し、ナデ	ナデ
241		97001979	ＳＰ017	土師器	杯	13.4	3.4	7.7	砂粒少量	黄橙色	底部ヘラ切り離し、ナデ	ナデ
242		97001977	ＳＰ017	土師器	杯	13.7	3.5	7.9	砂粒少量	橙色	底部ヘラ切り離し、ナデ	ナデ

Tab.21　戦場ケ谷遺跡２区鉄製品ほか一覧表

Fig.図番号	PL.番号	県遺物登録番号	出土地点	種別	器種	分類・部位	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	備考
147-207	51-1	97000533	ＳＴ004副室	鉄製品	鏃	鏃身部	(3.0)	1.1	0.3	有茎尖根鏃、柳葉式
208	51-1	97000532	〃	〃	〃	〃	(2.6)	(0.9)	0.2	〃
209	51-1	97000534	〃	〃	〃	〃	(5.1)	(0.8)	0.4	〃
210		97000535	〃	〃	〃	〃	(4.5)	(0.7)	0.3	〃
211	51-1	97000536	〃	〃	〃	〃	(7.25)	0.6	0.4	〃
212	51-1	97000540	〃	〃	〃	茎　部	(4.6)	(0.7)	0.3	
213		97000537	〃	〃	〃	〃	(3.8)	(0.9)	0.4	
214	51-1	97000539	〃	〃	〃	〃	(3.6)	0.8	0.4	
215	51-1	97000538	〃	〃	〃	〃	(2.4)	0.9	0.3	
216	51-1	97000531	〃	〃	〃	〃	(3.7)	3.9	0.2	有茎平根鏃、笹葉式
217		97001985	ＳＴ004閉塞石中	ガラス製品	小　玉		径0.4	0.2		青緑色
218	51-2	97001079	ＳＴ004玄室	鉄製品	弓付金具		(3.2)	0.5		
219	51-2	97000548	〃	〃	〃		2.8	0.45		
220	51-2	97000550	〃	〃	〃		(2.0)	(0.5)		
221	51-3	97000544	ＳＴ004副室	〃	釘		(3.3)	0.6	(0.3)	
222	51-3	97000543	〃	〃	〃		(3.3)	0.7	(0.50)	
223	51-3	97000541	〃	〃	〃		(5.9)	(0.6)	(0.45)	木質残存
224	51-3	97000546	〃	〃	〃		(3.9)	(0.4)	(0.2)	
225	51-3	97000545	〃	〃	〃		(3.9)	(0.4)	(0.3)	
226	51-3	97000542	〃	〃	〃		(4.0)	(0.5)	(0.4)	
227	51-3	97000547	〃	〃	〃		(4.3)	(0.3)	(0.3)	
228	51-2	97000528	〃	〃	鉸　具	差し金	(1.7)	(2.9)	(0.45)	
229	51-2	97000529	〃	〃	鐶	U字金具	(5.4)	(1.8)		
230	51-2	97000526	〃	〃	飾金具		5.5	4.1	(1.15)	鉄地金銅張り、一部金箔残存
231	51-2	97000551	〃	鉄　銭			径2.8	(1.7)	0.20	
154-235		97001989	ＳＰ014	鉄製品	刀　子		(10.8)	1.4	0.4	柄の木質が一部残存
236		97001986	〃	〃	釘		(6.2)	(0.5)	(0.5)	木質残存、木目は並行
237		97001987	〃	〃	〃		(5.2)	(0.4)	(0.4)	木質残存、木目は直交と並行あり
238		97001988	〃	〃	〃		(4.9)	(0.4)	(0.3)	木質残存、木目は直交と並行あり
239		99003312	〃	〃	〃		(2.3)	(0.6)	(0.5)	木質残存、木目は直交

Ⅶ．浦田古墳群１区の遺構と遺物

１．遺跡の概要（Fig.152）

浦田古墳群１区は戦場ヶ谷遺跡の立地する丘陵と谷部を挟んだ東側の丘陵尾根頂部に位置している。この尾根頂部にはＳＴ001古墳が位置しているが、さらに墳丘頂部が尾根の最高位となっており、その標高は75.26mである。尾根は東西にかなり急峻な斜面を持っており、一方南北方向も、それ程でないにしてもやや急な傾きをなして下って行く。特に北側は比高差25mぐらいまで一度低くなって、再び浦田古墳群２区の立地する丘陵部へと続いており、全体として独立丘陵状をなしている。南側尾根を下った標高50mの位置には、現在、九州横断自動車道が走っているが、自動車道建設に伴って寺ヶ里遺跡（１区）[1]の調査が行われており、７世紀後半の古墳１基の他、縄文時代前期の土壙などが検出されている。また、南東側丘陵裾部の白京溜池に面した緩斜面上には後述する寺ヶ里遺跡２区が立地し、縄文時代晩期末～弥生時代前期初頭の土壙と平安時代前期の住居跡、鎌倉時代の掘立柱建物等が確認されている。この他、丘陵頂部から東側は大規模な土砂採取が行われており、平成元年度には東脊振村教育委員会による確認調査の際、古墳１基の存在が確認され、緊急に調査が行われている。

浦田古墳群１区については平成３年度の確認調査の折から丘陵頂部に古墳１基の存在が把握されており、本調査では丘陵頂部全体を対象として表土剥ぎを行った他、古墳等の存在が予想される寺ヶ里遺跡との間の尾根上についてもトレンチ調査を行った。その結果、頂部付近の約1,200㎡に古墳２基・縄文時代早期の土壙等の存在す

Tab.22　浦田古墳群１区遺構一覧表

遺構番号	種　別	形態及び特徴	規模（長さ×幅×深さ）：m	主軸方位	出土遺物	時代・時期
ST001	古墳	円墳（横穴式石室）	径　15m	S－0°－N	須恵器（杯・蓋・高杯・短頸壺・甕・平瓶・特殊備壺）、土師器（高杯）、鉄製品（鏃・鉾・弓付金具・胡録金具・刀子・轡・飾り金具）、ガラス小玉・切子玉、銅銭	古墳後期（6世紀後半）［６Ｃ３／４世紀］
ST002	古墳	墳径不明（横穴式石室）	不明	S－8°－E	なし	古墳後期（7世紀後半）
SX003	集石遺構	ＳＴ001祭祀遺構	1.3×1.1×0.4	－	須恵器（平瓶）	古墳後期
SK004	土壙	楕円形	1.3×1.1×0.13	N－45.5°－E	なし	縄文時代早期
SK005	土壙	楕円形、二段掘り	1.5×0.95×0.1	N－80°－E	なし	縄文時代早期
SK007	土壙	不定形、二段掘り	1.5×0.8×0.35	N－76°－W	黒曜石・サヌカイトチップ	縄文時代早期
SK008	土壙	楕円形、二段掘り	2.1×1.2×0.8	N－50°－E	黒曜石・サヌカイトチップ	縄文時代早期
SK009	土壙	略方形、集石を伴う	1.7×1.6×0.3	－	黒曜石・サヌカイトチップ	縄文時代早期
SK010	土壙	略方形、二段掘り	1.1×0.95×0.1	N－76°－W	なし	縄文時代早期
SK011	土壙	不定形、二段掘り	0.9×0.85×0.56	S－90°－W	なし	縄文時代早期
SK012	土壙	不定形、二段掘り、落し穴	1.3×0.7×0.44	N－80°－W	なし	縄文時代早期
SK013	土壙	楕円形、二段掘り	1.45×0.8×0.4	N－49°－W	なし	縄文時代早期
SK014	土壙	楕円形	1.15×0.8×0.1	N－80°－E	なし	縄文時代早期
SK015	土壙	不定形、複雑な段構造	(2.2)×(2.2)×0.65	－	無文土器、黒曜石・サヌカイトチップ	縄文時代早期
SK016	土壙	不定形、複雑な段構造	(5.0)×(4.4)×0.1	－	なし	縄文時代早期
ST017	方形周溝墓	北東辺、北西辺の溝のみ	1.0m	N－70°－W	土師器（壺・高杯・器台・杯）	古墳前期（4世紀後半）
ST018	方形周溝墓	北西辺の溝のみ	1.0×0.55×0.15	N－56°－E	土師器（壺・高杯）	古墳前期（4世紀後半）
SP019	土壙墓	隅丸長方形、二段掘り	1.65×0.85×0.8	N－37°－W	人骨頭部片	不明
SX020	不明遺構	不定形	4.0×(1.6)×0.3	N－15°－E	土師器（甕）	古墳前期（4世紀後半）
SX021	不明遺構	円形の小穴状	径0.45、深さ0.5	－	なし	不明
SX022	不明遺構	円形の小穴状	径0.65、深さ0.5	－	なし	不明

ることが明らかとなった。この他にも大型の石材が露頭する地点があり、古墳等の存在も推定されたが、丘陵全体が蜜柑園となっていることもあり、既に破壊されている可能性が高い。

調査区内で確認された遺構は6世紀後半の古墳1基（ＳＴ001）、7世紀後半の古墳1基（ＳＴ002）の他、ＳＴ001の北西側の遺物包含層中から縄文時代早期と思われる土壙10基（ＳＫ007・008・009・010・011・012・013・014・015・016）が検出されている。また、ＳＴ001古墳の墳丘を除去した結果、その下面から古墳時代前期の方形周溝墓2基（ＳＴ017・018）・土壙状の不明遺構1基（ＳＸ020）、縄文時代早期の土壙2基、時期不明の土壙2基（ＳＸ021・022）が新たに確認された。またＳＴ001古墳の南西墳裾部より時期不明の土壙墓1基が検出されている。以下に時代毎に概要について述べる。

註1）堤安信（1981）：「寺ケ里遺跡」「西原遺跡」　九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(2)

2．縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構として土壙12基が確認されている。このうち、ＳＫ004・005はＳＴ001古墳の墳丘下から確認され、ほかは調査区内北西側の橙褐色粘質土からなる遺物包含層を掘り下げる際に検出されており、出土遺物は少ないが包含層中の遺物が縄文時代早期にあたることから当該期の所産と考えられる。遺物包含層は戦場古墳群1区・戦場ヶ谷遺跡2区で確認されたものと同様の橙褐色粘質土からなるレス層で形成されており、調査区北端付近の約200㎡の範囲に分布し、このうち約130㎡の掘り下げを行ったものの、出土遺物の量は土器数点、石器数十点と遺物密度は薄いものであった。

（1）縄文時代の遺構

ＳＫ００４土壙（Fig.153）　平面楕円形で、長軸約1.3m、短軸1.1m、立ち上がりの傾斜は緩く、深さ約0.13m。長軸の方位はＮ－45.5°－Ｅ。

ＳＫ００５土壙（Fig.153）　平面楕円形、内面のやや西寄りで二段掘りを行う。長軸1.5m、短軸0.95m、段掘り部分も平面は楕円形、長軸0.73m、短軸0.55m。底面までの深さは0.1mで、段掘り部の深さは底面より0.05m。長軸の方位はＮ－80°－Ｅ

ＳＫ００７土壙（Fig.153）　概ね平面隅丸方形で二段掘りをなすが、段掘り部が東辺部分から続いて外方に0.65m程伸びる。北・東辺の幅0.9m、南辺は0.7m、西辺は0.8m、上段部までの深さは0.15m、上段部から段掘り部の底面までの深さは0.2m。長軸の方位はＮ－76°－Ｗ。埋土中より黒曜石・サヌカイト製のチップがそれぞれ1点出土している。

ＳＫ００８土壙（Fig.153）　長軸2.1m、短軸1.2mの不整形をなし、さらに長軸1.3m、短軸1.0mの歪な隅丸長方形の段掘りを施す。段掘り部の中央には長楕円形の小穴を伴う。深さは北東部で上段部まで0.45m、上段部から底部までは0.3m、南西部では上段部まで0.2m、上段部から底面は0.6m。長軸の方位はＮ－50°－Ｅ。埋土中よりサヌカイト製の剥片・チップがそれぞれ1点出土している。

ＳＫ００９土壙（Fig.154）　ほぼ長方形をなすが、西側の辺は丸みを帯び、その他の辺は直線的である。また土壙内の西側には集石が検出されている。集石は大きさ0.1～0.15m程の板石を5、6個を円形に囲むように立ててあり、石が赤く焼けていることから石組み炉と考えられる。ただ、集石の底面は土壙床面から0.1m程浮いており、集石が土壙に直接伴うものかは明らかでない。土壙の規模は北辺で1.4m、南辺で1.7m、西辺で1.6m、東辺で1.4m、深さは最大0.3m。埋土中よりサヌカイト製のチップが1点出土している。

ＳＫ０１０土壙（Fig.153）　南西隅がやや外方に伸びるが、ほぼ平面方形をなす。またほぼ中央部には二段掘り

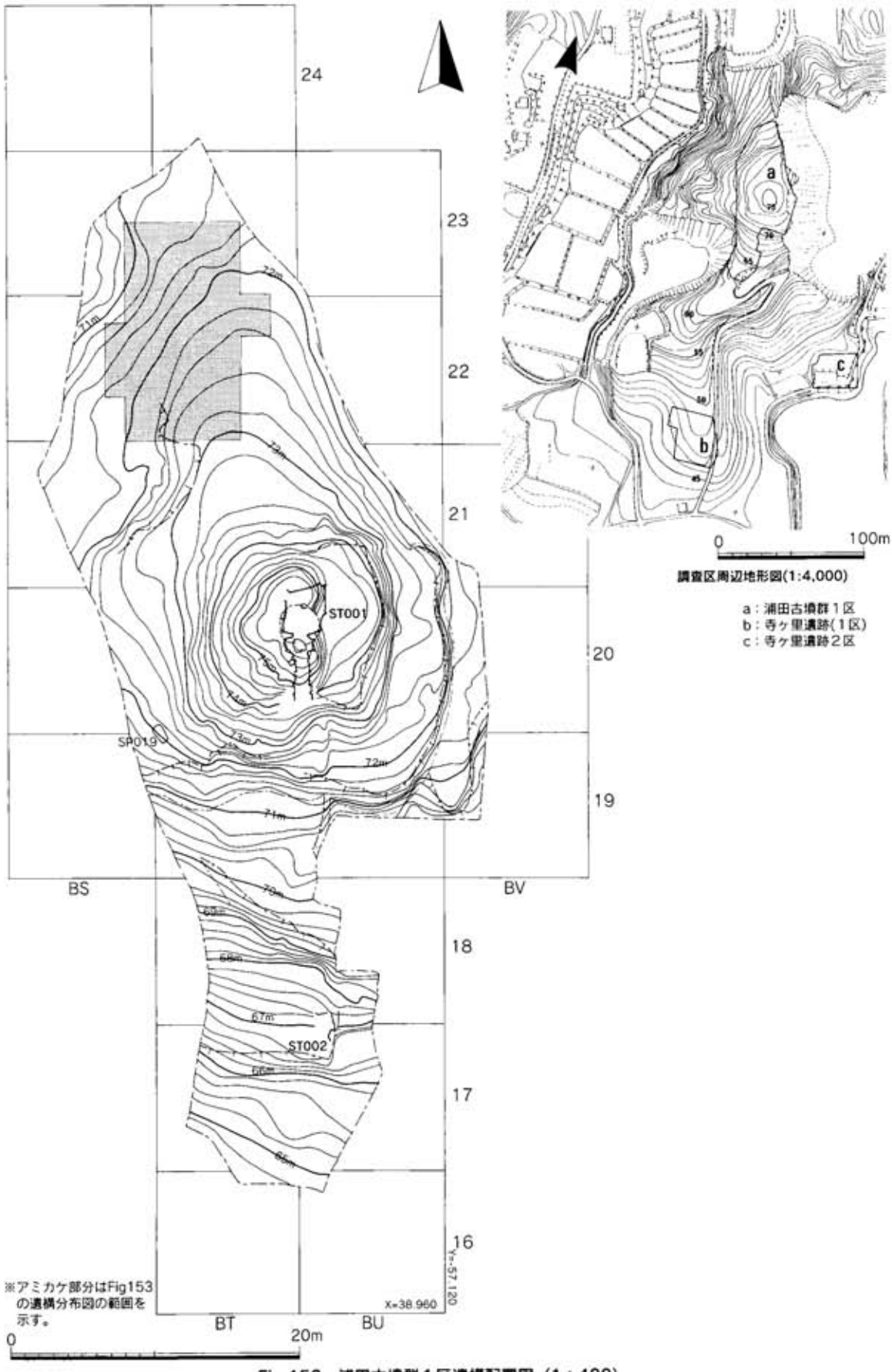


Fig.152　浦田古墳群1区遺構配置図（1：400）

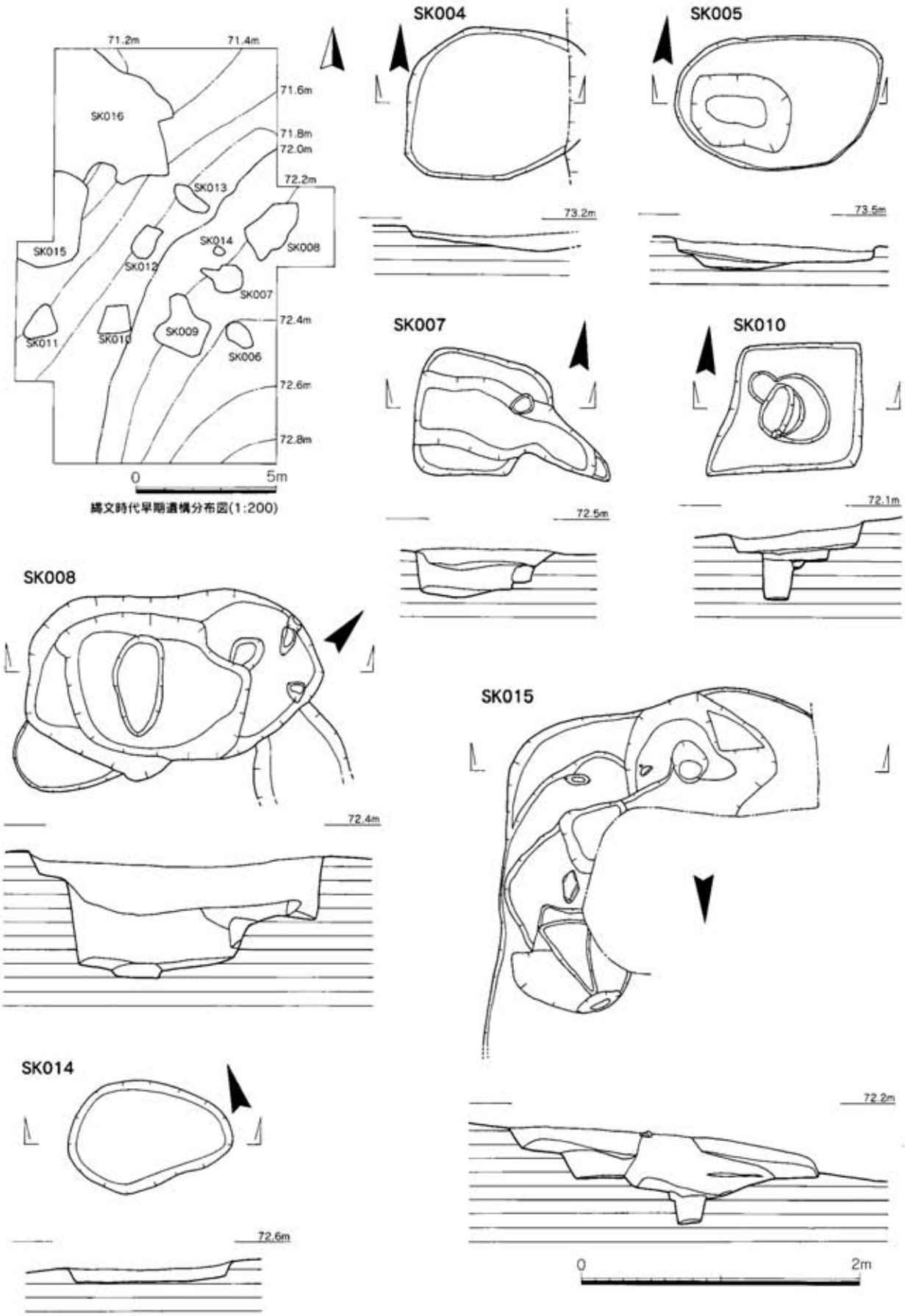


Fig.153 SK004, 005, 007, 008, 010, 014, 015土壙 (1 : 40)

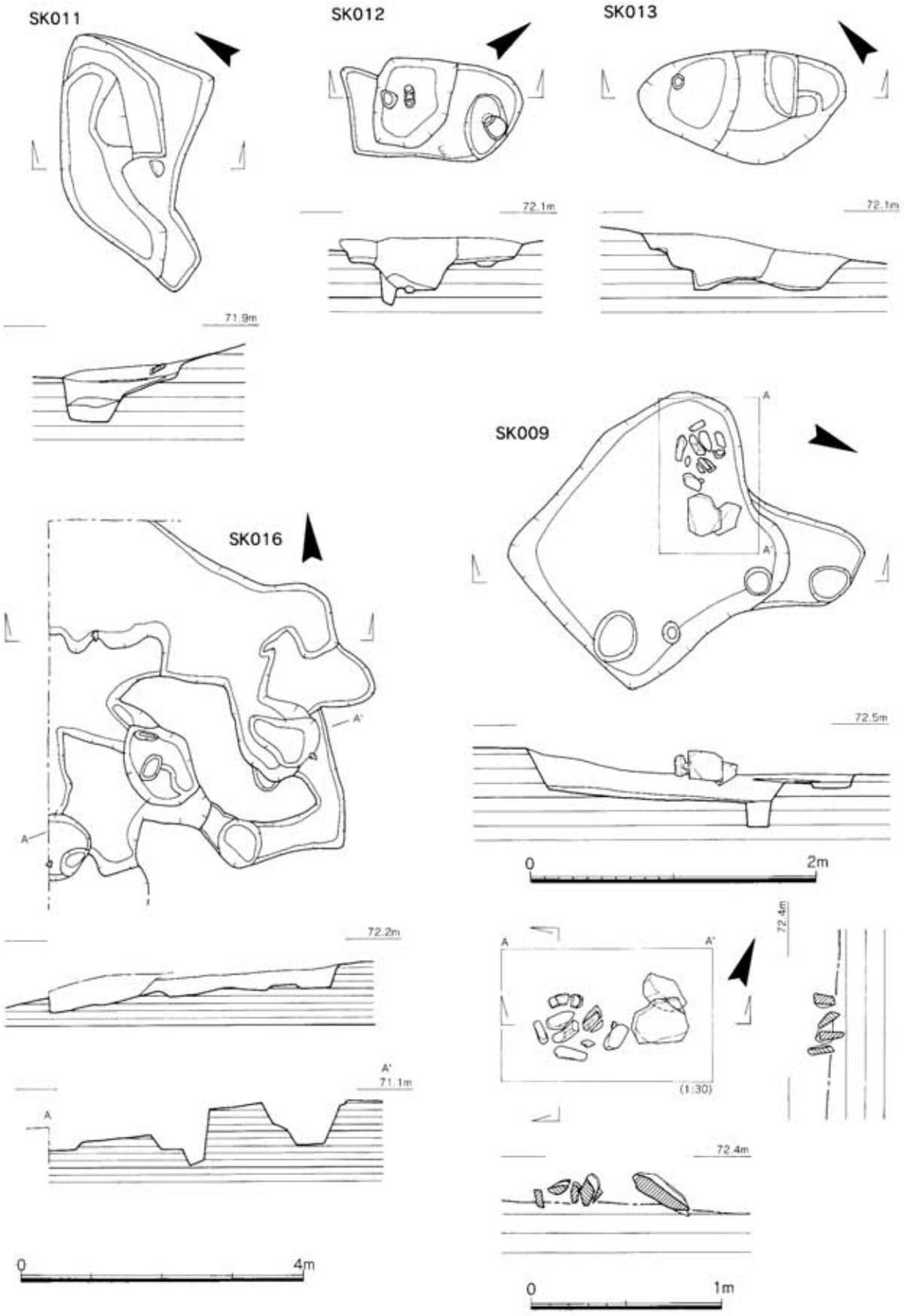


Fig.154　SK009，011～013土壙（1：40），016土壙（1：80）

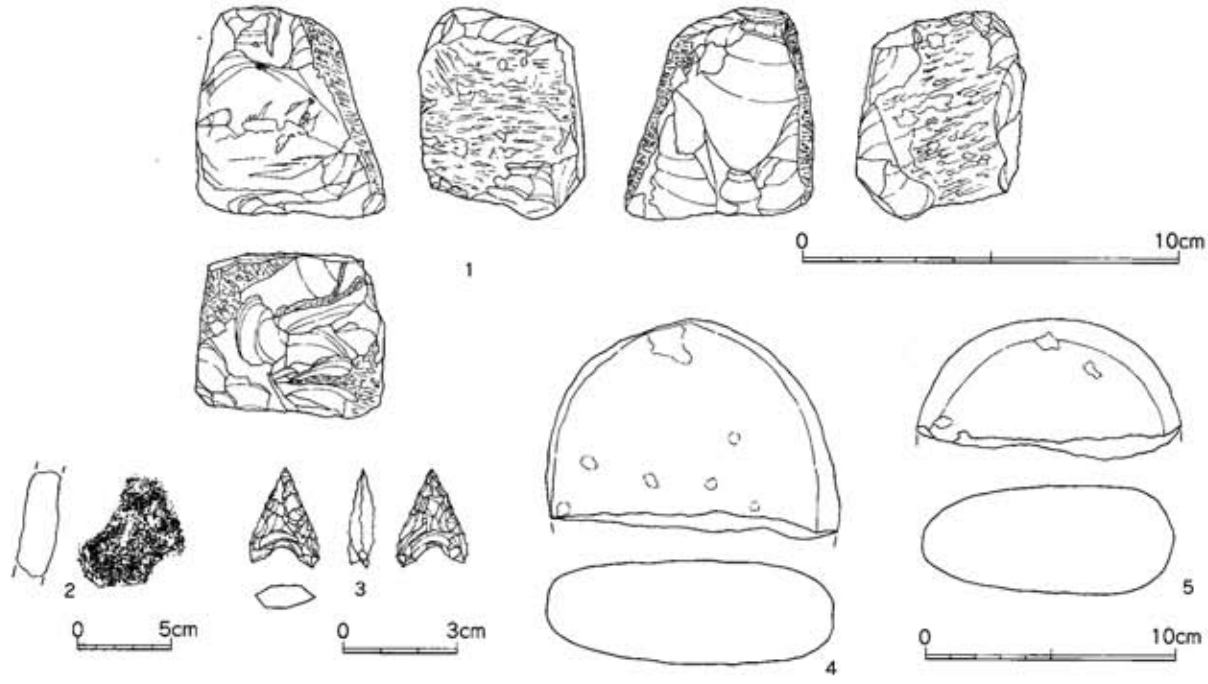


Fig.155　縄文時代の遺物（1・3は1：2、2は1：4、4・5は1：3）

を行う小穴を伴う。北辺の長さは0.85m、東辺は0.9m、南辺の長さは1.1m、西辺は0.95m。小穴の上段部で径0.5m、下段部径0.4m。深さは小穴の上面まで0.2m、小穴部では上面から上段底面まで0.08m、下段部まで0.28m。

ＳＫ０１１土壙（Fig.154）　南北に長軸を持つ、不整形をなし、東側の壁に沿って二段掘りを行う。規模は南北1.9m、東西1.25m、検出面から上段までの深さは0.1m、底面までは0.3m。長軸の方位はＮ－90°－Ｗ。

ＳＫ０１２土壙（Fig.154）　北々西－南々西の長軸を持ち、北々西側は丸みを帯び、南々西側は角をなす不整形である。土壙の中央やや南々西寄りにほぼ長方形の掘り方を持ち、その底面には３個の小穴を伴うが、このうちの二つは径0.07m程の極小さなものであり、長方形掘り方の南々西の辺と並行に並ぶ。土壙全体の長軸は1.3m、短軸は0.7m、長方形掘り方の長辺は0.6m、短辺は0.5m。深さは検出面から上段まで0.09m、長方形掘り方の底面までは検出面から0.35m。長軸の方位はＮ－30°－Ｅ。

ＳＫ０１３土壙（Fig.154）　南東－北西方向に長軸を持つ楕円形をなし、長軸は1.45m、短軸は0.8m。内部には不定形な掘り込みを伴い、検出面から底面までの深さは0.4m。長軸の方位はＮ－49°－Ｗ。

ＳＫ０１４土壙（Fig.153）　平面楕円形で長軸1.15m、短軸0.8m、深さは0.1m。長軸の方位はＮ－80°－Ｅ。

ＳＫ０１５土壙（Fig.153）　南北2.2m、東西2.2m以上の規模をなすが、一部未掘であり平面形は不明である。内部には幾つかの掘り方が重複するが、特に南部分の掘り方は平面略方形で中央部に小穴を伴い、ＳＫ010と形態が類似する。深さはこの小穴の底面までが最も深く、検出面から0.65m。埋土中より縄文時代早期の無文土器片１点、黒曜石製のチップ２点、サヌカイト製のチップ２点が出土している。

ＳＫ０１６土壙（Fig.154）　土壙としているが不定形な掘り込みが切り合った集まりである。西側は未調査であるが、確認された規模は南北５m、東西4.4m、検出面からの深さは最も深い部分で0.9m。

（２）縄文時代の遺物（Fig.155）

1～5のうち、2はＳＫ015の埋土中から、他は縄文時代早期の遺物包含層からの出土である。

1は黒曜石製の石核。ほぼ立方体をなし、側面のうち、２面に自然面を残している。2は無文土器。器壁の厚さは1.3～1.5cmと厚手である。3は凹基式の無茎鏃。黒曜石で完形である。4・5は磨石。

３．古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構としてはＳＴ001、002の２基の古墳が確認されており、このうちＳＴ001は調査区の立地する丘陵の頂部（標高72～75m）に位置している。またＳＴ002はそこから尾根筋を真北に下った標高67m付近に立地し、ＳＴ001から約20mの距離がある。

ＳＴＯＯ１古墳（Fig.156～168）

墳丘・周溝（Fig.156・158）　墳丘裾部付近の南東側から南側にかけて蜜柑園造成に伴い削平を受けているが、それ以外については旧状を良く残している。墳丘は裾部をやや改変されていることから、平面形は、見かけ上、角の丸い方形をなしているものの、本来は円墳と思われる。現状で径15.0m、墳丘高は裾部からの比高差で2.5mである。周溝については検出されておらず、丘陵頂部といった立地状況から考えて、もともと周溝を持たなかったものと推定される。地山整形は基底面を平坦に造成するのではなく、周囲から石室掘り方の位置する中央部に向かって緩やかに傾斜を持たせており、中央部に平面長方形で、長さ8.8m、幅5.5m、深さ1.5mの掘り方を掘削する。石室掘り方からほぼ真南に向かって切り通し状の墓道が伸びるが、掘り方から５m程で造成により削平を受けている。墓道の幅は羨門部分で2.8m、南側の削平部分で2.2m、深さは最大1.4mである。この墓道は後述する方形周溝墓ＳＴ017・018の北辺を切っている。

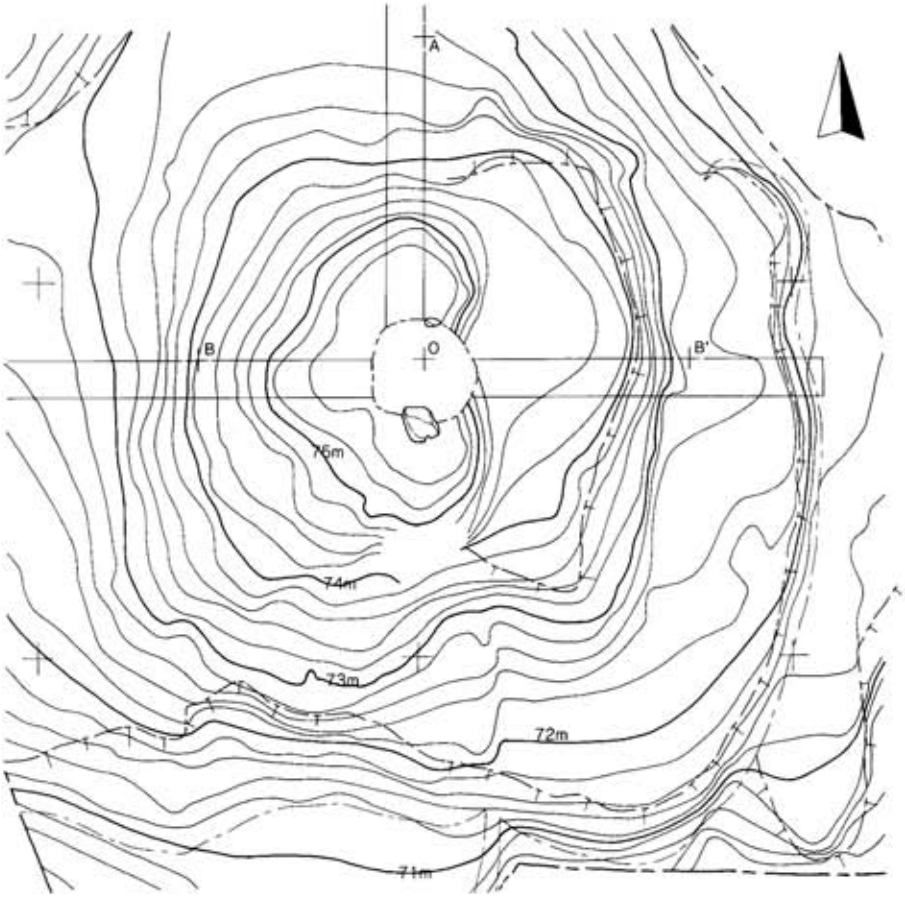
墳丘構築技法についてであるが、地山整形は墳丘東側・北側においては前述のとおり、墳裾部分から石室に向かって緩やかに斜面となっているが、西側においてはほぼ水平に造成された面が確認され、盛土構築前の旧地表面が認められる。この旧地表面上にはさらに山形に高さ0.4m程の盛土が施され、さらにこの盛土を切って石室掘り方が掘削されている。

この盛土の性格については、その上面が墳丘東側の地山整形面とほぼ高さを同じくしているので、本来的に東西で比高差のあった旧地形の高さを整えるために盛られた造成土と考えられる。墳丘の構築は上部壁体の構築に伴う裏込め土を盛り上げるように積み上げた後（一次墳丘）、天井石を被覆するために、橙褐色粘質土（花崗岩バイラン土）と灰白色砂質土（花崗岩の風化した砂礫土）の間に旧地表面の黒褐色腐食質土を挟みながら、水平に細かく互層に盛り上げる（二次墳丘）。盛土工程において特徴的なのは、墳丘基底面北側の一次墳丘裾部に長さ1.0m、幅0.6m程、深さ0.5mの溝状遺構（ＳＤ028）を伴う点である。土層観察の結果、この溝の上面北側の縁は一次墳丘の裾部と接しており、墳丘構築に直接伴う遺構であると判断される。おそらくは一次墳丘盛土に際しての目安となるような設計線的な性格が考えられる。なお、墳丘東側の基底面下部からは基盤面との間に厚さ0.4～0.5m程のＳＴ001構築前の盛土が確認され、盛土の下部には基盤面に掘り込む形でＳＸ020不明遺構が検出されている。このＳＸ020からは古墳時代前期の布留式甕が出土しており、この盛土についても当該期の方形周溝墓の墳丘、あるいはそれが流出したものと推定される。

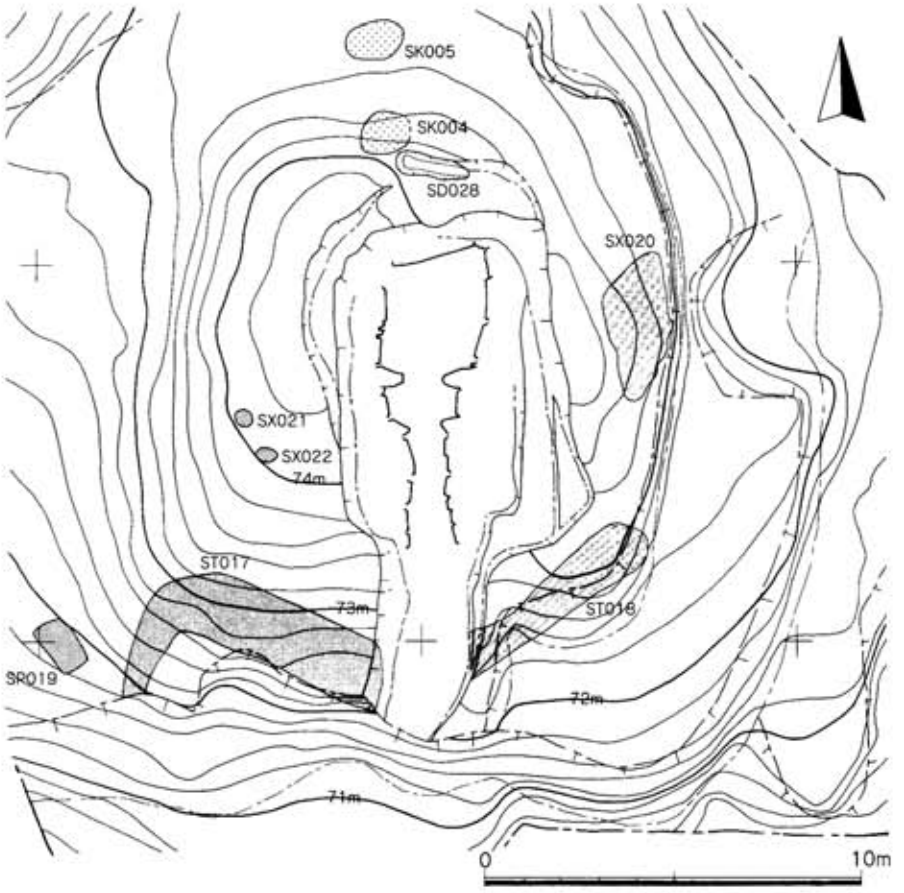
外表施設　本墳においては墳丘の遺存状況が良好であったにかかわらず、葺石あるいは列石等は確認されていない。また裾部周辺にも礫が散らばる様子は窺えず、もともと存在していなかった可能性が高い。

内部主体（Fig.157・159）　複室の両袖型横穴式石室である。玄室平面形は右壁長が左に比べて長く、石室北東隅がやや歪むものの、ほぼ長方形であり、奥壁幅2.6m、前壁幅2.5m、右壁長3.3m、左壁長2.7mである。玄室天井石・前壁側を除く上部壁体は失われており、床面から前壁遺存部分の上端までの高さは3.2mで、墳丘の盛り

墳丘遺存状況



地山整形状況



縄文時代の遺構

古墳時代前期の遺構

時期不明の遺構

Fig.156　ＳＴ001古墳測量図（1：200）

上げ方から推すとこの上に天井石を架構していたと考えられる。前室は長さが右壁で0.9m、左壁で0.85m、幅は玄門側で1.9m、前門側1.8mと横長の長方形をなす。前室天井部は楣石と羨道天井石より一段高く積まれ、床面からの高さは2.0mである。玄門幅は1.0m、前門幅は0.8m。羨道は前室幅でそのままほぼ直線的に伸び、壁体の石積みは欠くものの、最下段の石は良好に遺存しており、羨道長は右壁で3.4m、左壁で3.3m。天井石は前門上の楣石に加えて一石が残るが、石室掘り方の壁の状態から考えても、あと２石は架構されていたものと推定される。

玄室壁体の構成については、左壁に幅1.7m、高さ1.2mの長方形の、及び幅1.0m、高さ1.1mの正方形の石を腰石として用いる。右壁・奥壁は左壁の腰石より高さは低く、右壁で幅1.3m、高さ0.8mの長方形の石２個を横位に、また奥壁寄りには幅0.5m、高さ0.9mの石１個を縦位に用いている。この１石については、奥壁と前壁との長さの差を調整するために配置されたものと考えられ、石室プランが羽子板形ではなく、あ

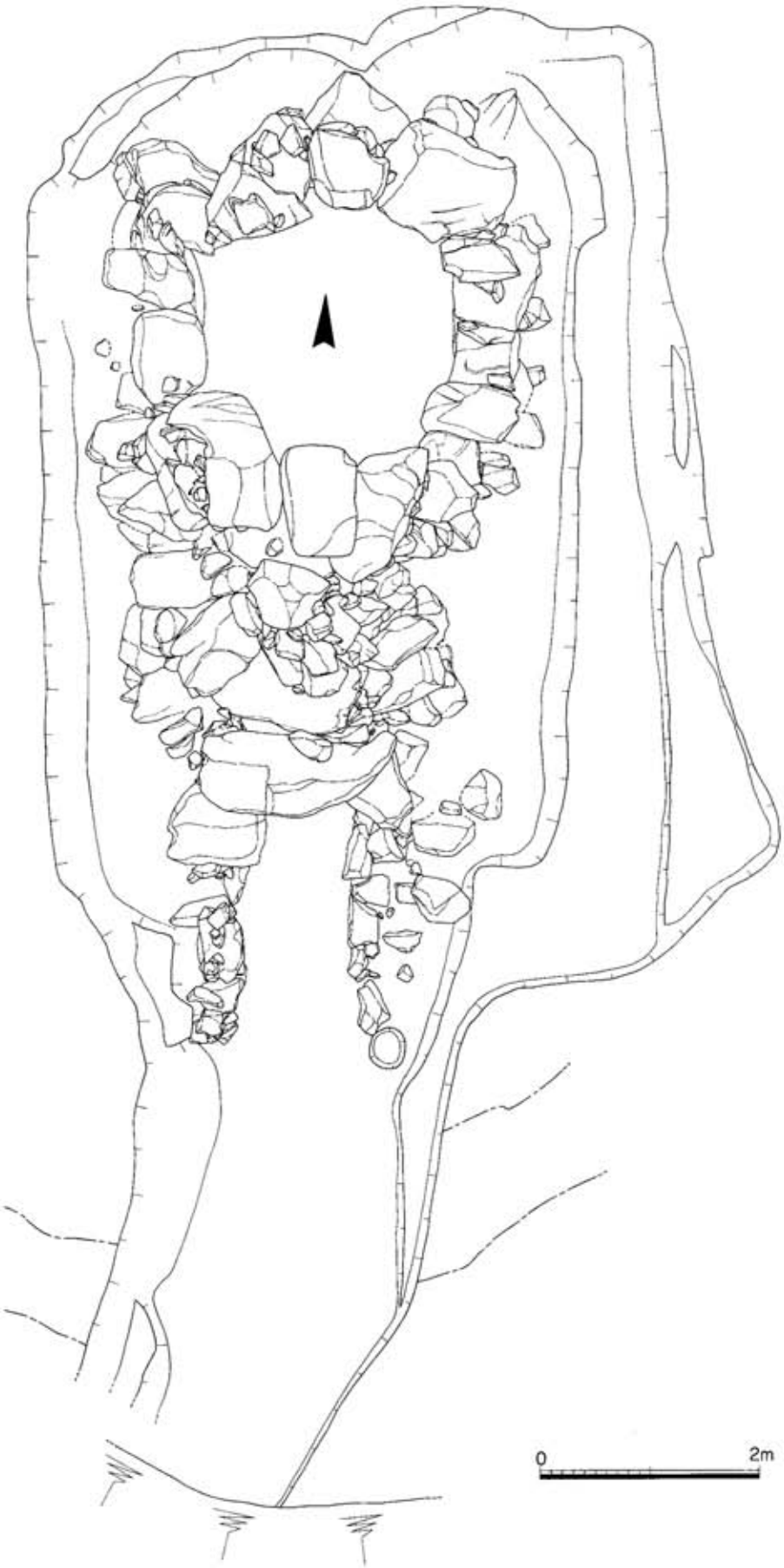


Fig.157　ＳＴ001古墳平面（1：60）

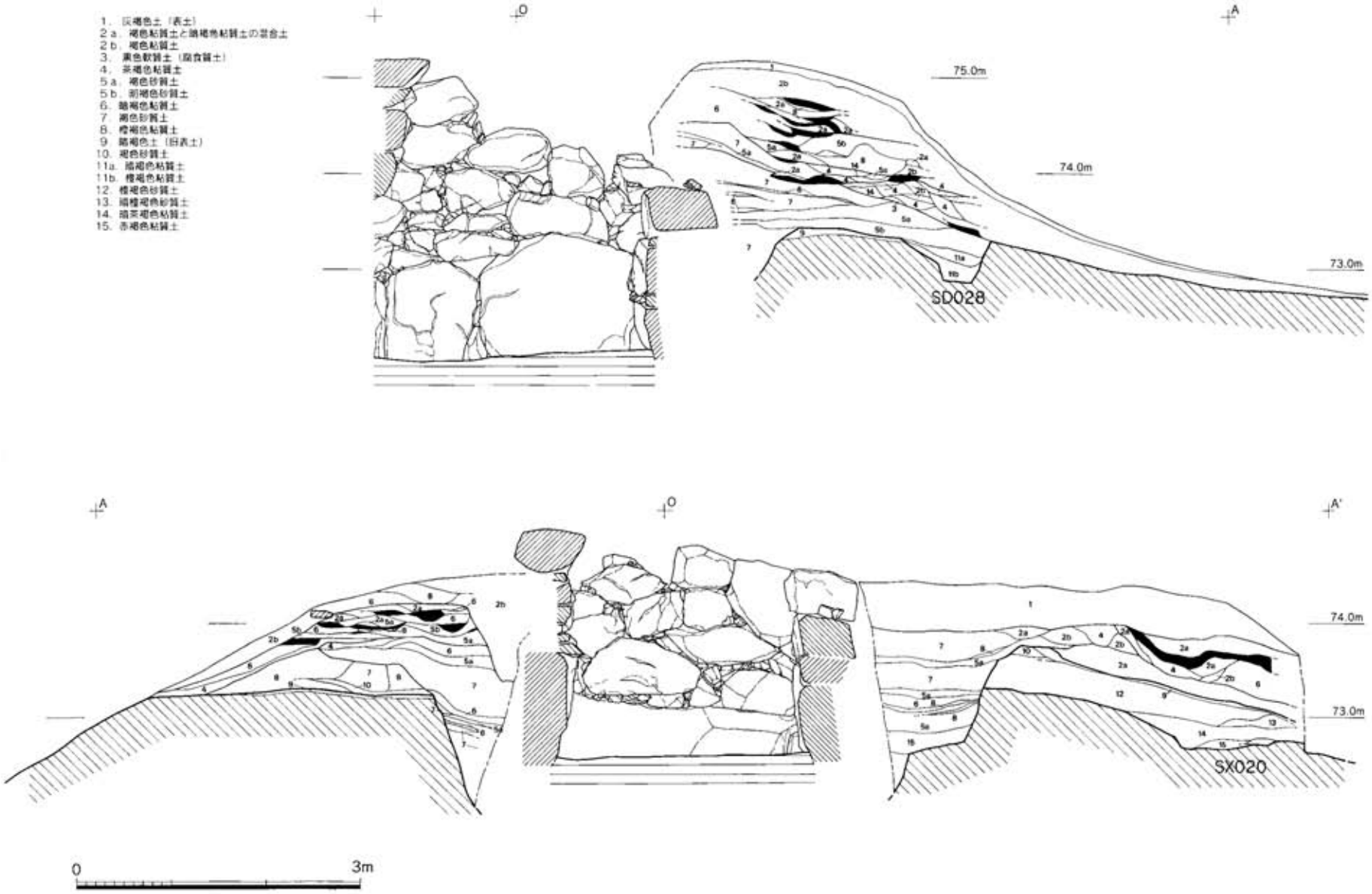


Fig.158　ＳＴ001古墳土層図（1：60）

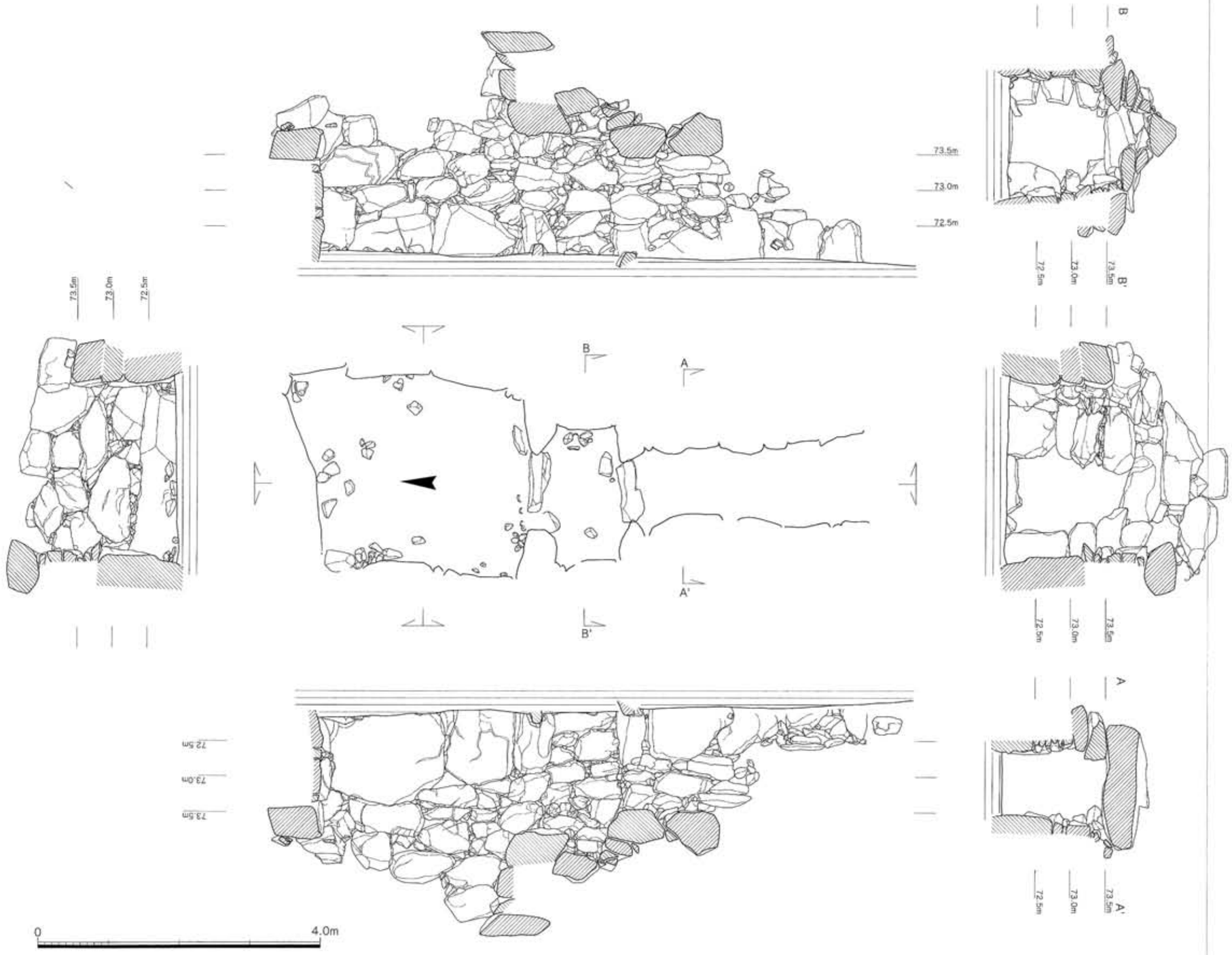


Fig.159　ＳＴ001古墳石室（1：60）

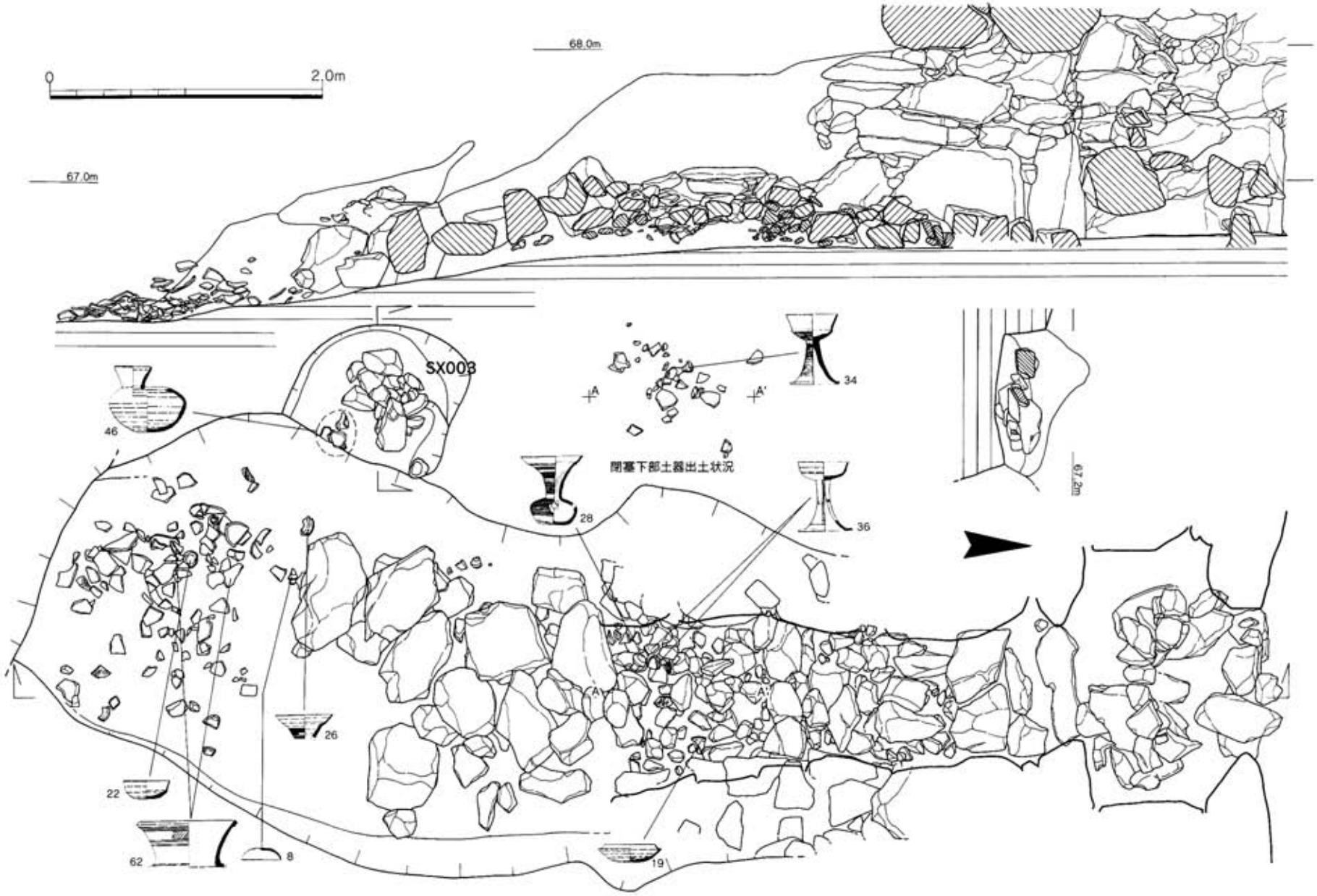


Fig.160　ＳＴ001古墳閉塞状況（1：40）

くまで長方形を指向していたことの証左と言えよう。奥壁は奥壁幅いっぱいの幅約2.4m、高さ0.7mの石を横位に据える。壁体は幅0.6～1.0m程度で高さを揃えた石材を横位に積んで行くことで構成され、玄室から羨道まで工程を同じくして同時に積み上げており、ほぼ水平に目地が通る。玄室袖石・前室袖石は、それぞれ立柱石の上に二段あるいは三段に石材を横位に積んでおり、工程的には玄室・前室の壁体の構築と同時に積み上げられている。

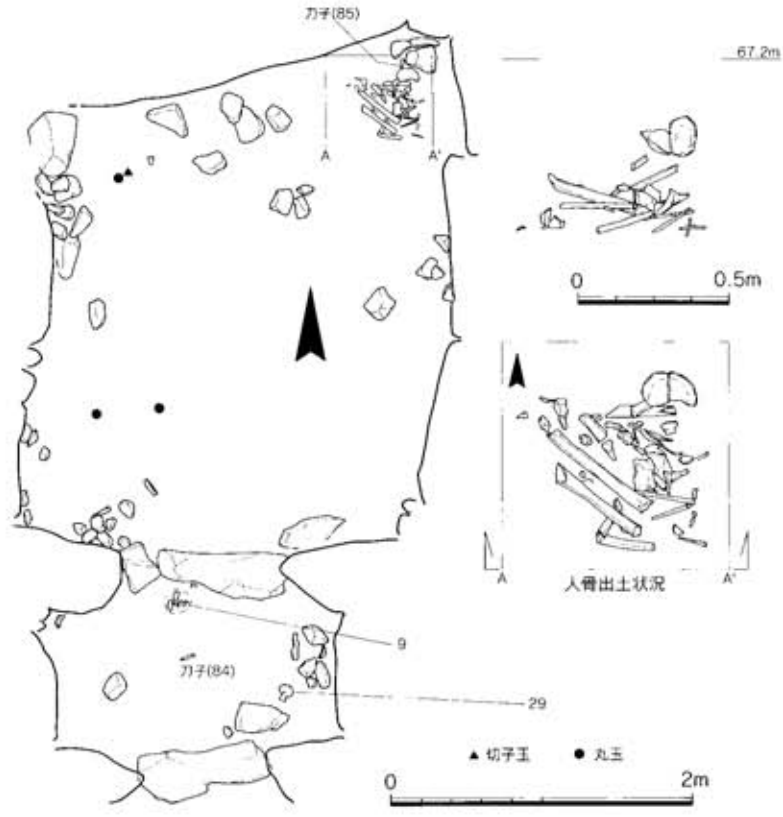


Fig.161　ＳＴ001古墳石室遺物出土状況（1：50）

床面の状況としては（Fig.164）、玄門部・前門部共に仕切り石を据えている。しかし、敷石については床面上に多数の小礫を検出したものの、盗掘時にひどく撹乱を受けたため原位置のものは皆無であった。石室内の出土遺物としては、玄室内撹乱土中から鉾・鏃等の武具、馬具などの鉄製品と多くのガラス玉が出土した他、奥壁右隅にほぼ１体分の人骨が検出されている。人骨は隅に寄せられた状態で出土しており、二次的に移動させられたものと思われる。遺存状態が比較的良いことから時期的に新しいものと推定され、玄室内から近世の土師器小皿が出土していることからも当該期に埋葬されたものが、後の盗掘時に片付けられたのかもしれない。この他、前室右壁で須恵器甕が出土しているが、頸部より上部を欠損しており、供献時のプライマリーな状態ではなく、前室床面についてもかなり撹乱を受けているものと推定される。

なお、石室に使用された石材はすべて花崗岩である。

閉塞状況・墓道（Fig.160）　閉塞は前室仕切り石の手前で行われていたものと思われるが、最下部以外はほとんど旧状を留めていない。閉塞には転石が用いられ、下部には大きさ40～50cmの礫を数段積み、その上に10～30cmの小礫を天井部との間に積め込んでいくものと思われるが、現状では前室内あるいは羨道の墓道側に崩れて広がっており、特に羨道から墓道にかけては羨道壁体が崩れた石材と混在している。中でも50～60cmの大型の礫10個余りが集積されているものは、羨道壁体の崩れたものであろう。この他、墓道左側の肩には円形の掘り方を伴う集石遺構（ＳＸ003）がある。集石は20～30cm程度の礫二つと15cmの小礫十数個からなり、掘り方は一見、東側を墓道で切られているように見えるが、掘り方自体は墳丘上から掘られている他、集石に近接して同レベルで７世紀後半代の須恵器平瓶が出土していることから、墳丘上祭祀遺構と考えられる。

ＳＴＯＯ１古墳出土遺物（Fig.162～168）　6～62は土器。古墳時代の須恵器・土師器のほか、平安時代の瓦器が１点出土している。出土地点としては、羨道から墓道・前庭部にかけての出土がほとんどであり、玄室・前室からも少量出土しているが、その多くが小破片である。

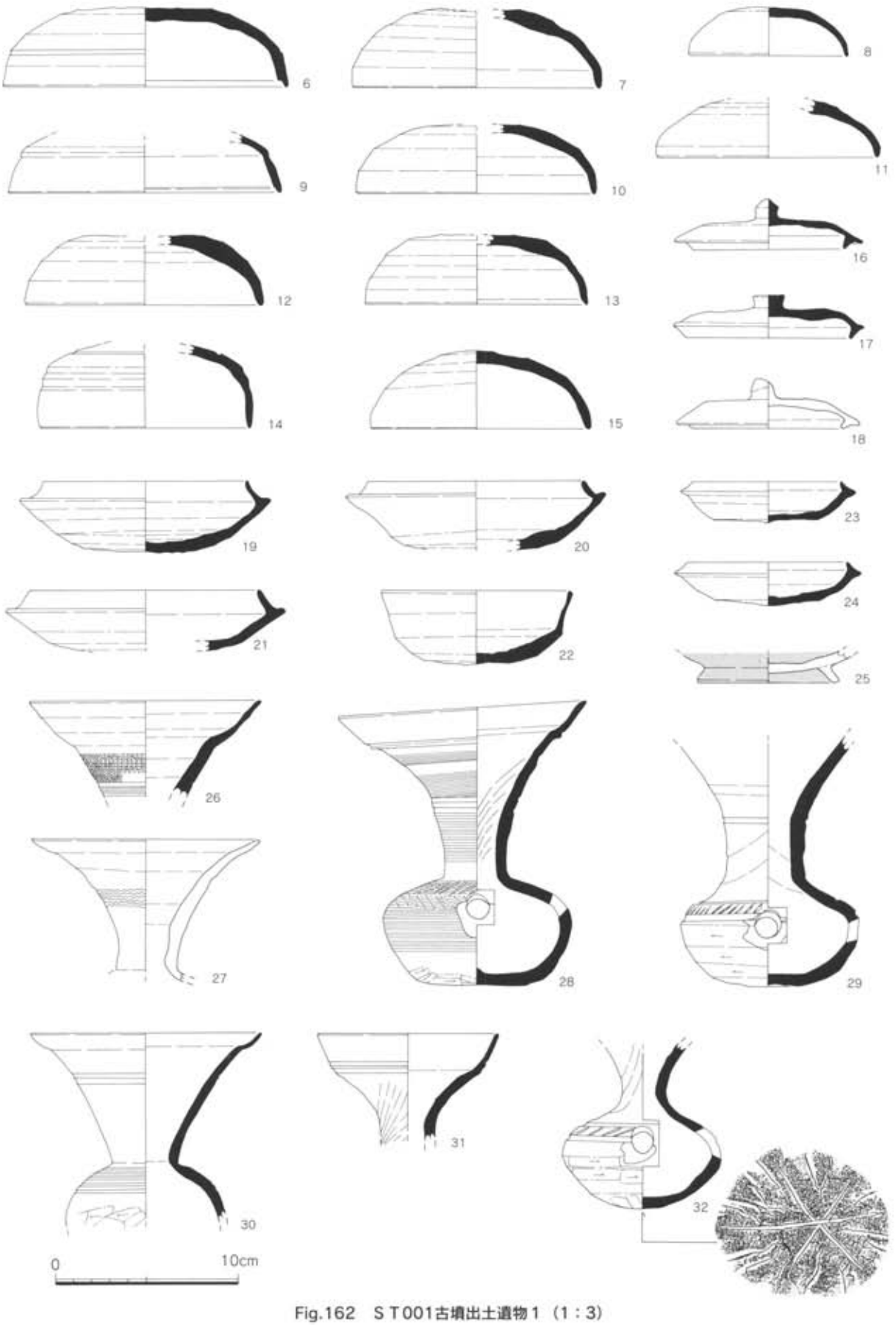


Fig.162　ＳＴ001古墳出土遺物１（1：3）

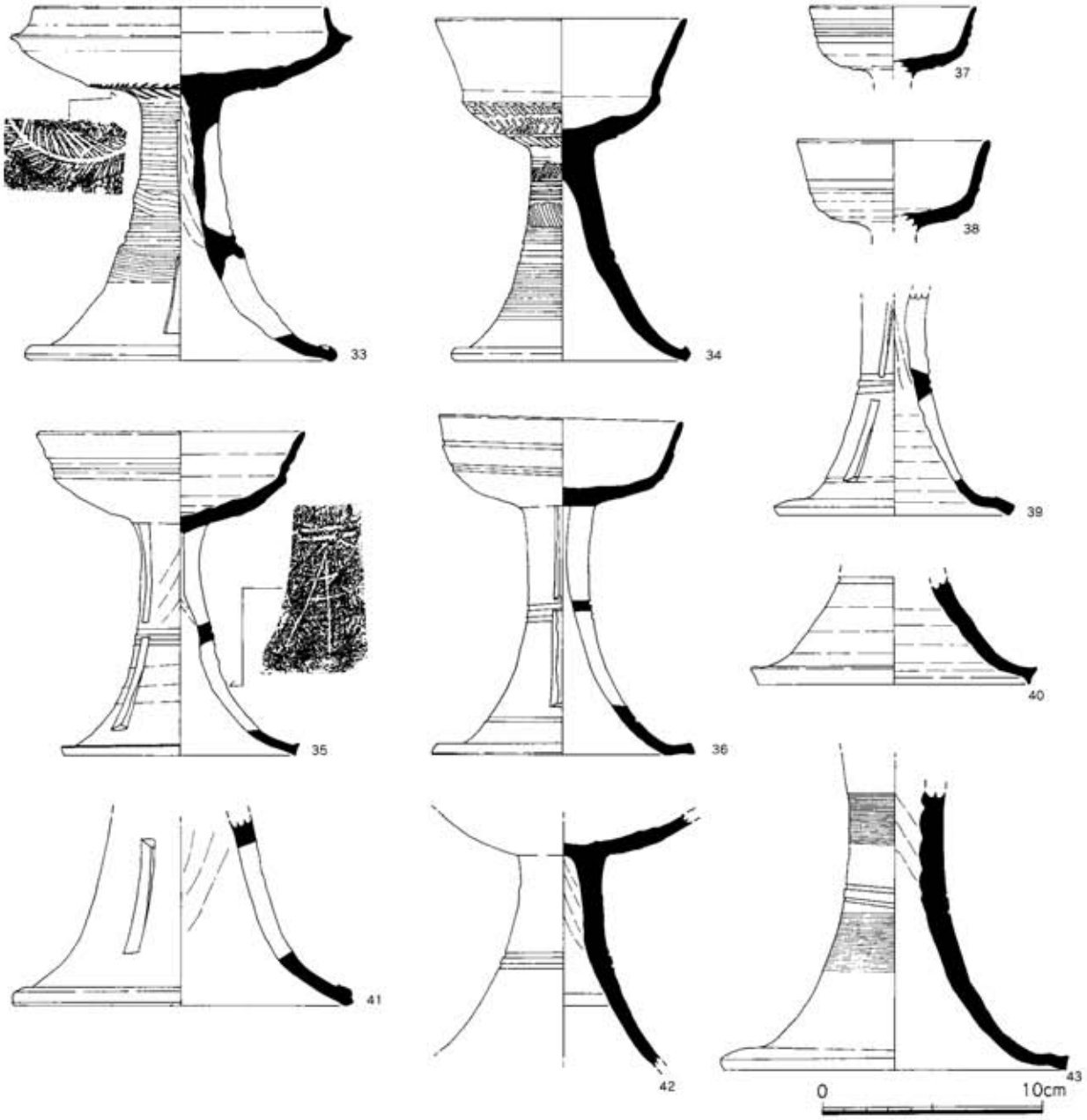


Fig.163　ＳＴ001古墳出土遺物２（1：3）

6～13・15～17は杯蓋。18・25を除く他はすべて須恵器である。6・9は口縁部と体部の境に沈線を持ち、口縁端部内面は6が明瞭に段部を持つのに対し、9は僅かに変化点を持つのみである。16～18はかえりを持つもので、18は土師器である。16・18は擬宝珠つまみを、17は断面逆台形のつまみを貼り付ける。14は口径に比べて器高が高く短頸壺の蓋。19～24は杯身。24以外は受部を持つもので、調整は19・20・23が底部ヘラケズリ後回転ナデ、21・22・24はヘラ切り離し後ナデ消し。26～32は鉢。形態も種々有り、26・28・30・31は口縁部が途中で緩やかにくびれて内湾あるいは直線的に開くものであるが、30のみは端部付近のみがくびれる。27はくびれずに大きく外反し、土師質ではあるが形態は須恵器である、いわゆる赤焼き土器である。体部の形態では28が肩が張って直線的な底部から平底の底部へと続くのに対し、29は胴下半部から底部が丸みを帯び、32に至っては胴部最大径がより下方に下がり、底部は丸底となる。25は瓦器椀の底部片であり、鎌倉時代の所産。

33～43はいずれも須恵器の高杯である。33・34・35・36は全形が復元できるもの。33は有蓋高杯で口径13.0cm

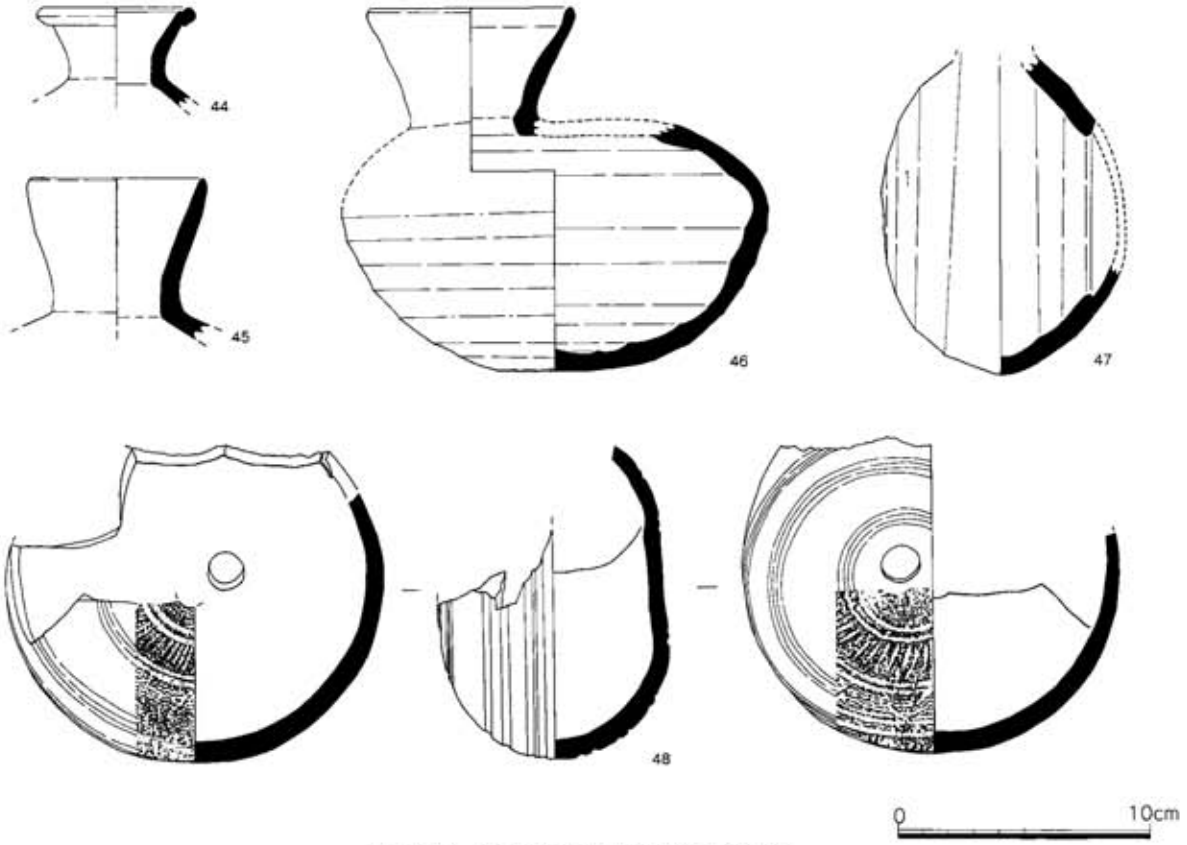


Fig.164　ＳＴ001古墳出土遺物３（1：3）

と大きな杯部に四方向二段の長方形透かしを持つ脚部がつく。脚部裾端部は僅かに内側へ折り曲げる。脚部の上半部にはカキメを施し、杯部底面には綾杉文が巡る。34・35・36は無蓋高杯。34は杯部の口縁部と体部の境に段を有するもので、脚部に透かしは持たないが、端部を僅かに内側に折り曲げる点、杯部底面には綾杉文を施す点などは1と類似する。35は杯部の口縁部と体部の境に二条の沈線を施すことによって僅かにくびれたようなプロポーションとなる。脚部には三方向二段の長方形透かしを施す。裾部端部は僅かに上下に肥厚させ、端面は凹面をなして上下端は鋭く稜をなす。35の脚部外面にはヘラ記号を刻む。36は四方向二段透かしを持つもので、裾端部は平坦に伸びて接地面が広く、接地部分は僅かに凹面をなす。37・38は小型化したもので37は口径15.0cm、38は17.0cm。39～43は脚部片。このうち、39は脚部径が大きく復元され、裾部端部は段をなして肥厚している。

49～58は土師器及び須恵器模倣の赤焼き土器の高杯。このうち、50・54は赤焼き土器である。49は口縁部が内傾する、いわゆる模倣杯に脚部がつくもの。杯部内外面及び脚部外面に丁寧なヘラミガキを施す。53は脚部裾部付近で段を有するもので、ハソウの口縁部かとも思われたが、接地面は平坦面をなすことから脚部と判断した。55・56は浅く大きく開く杯部を持つもので、脚部はそれぞれ57・58で、直線的に伸びて裾部の形状は、57が外方に折れるのに対し、58は大きく外反する。脚部内面はヘラケズリ、他はヘラミガキ。

46は平瓶で、墓道西側肩部の集石遺構に近接して出土したもの。口縁部は直線的に開き、肩は張るが底部はかなり丸底化している。44・45・47は提瓶。44・45は口縁部であり、44は外反して端部付近でやや外方に屈曲するのに対し、45は直線的に伸びる。48はいわゆる特殊偏壺か。胴部に二箇所の穿孔を持ち、表裏に二条ずつ一列の沈線が三列巡り、中央から一列目と二列目の間には刻み目を、二列目と三列目の間には波状文が施される。

59～61・63は須恵器で、59は短頸壺。胴部外面全体にカキメを施し、体部下方に十字形のヘラ記号がみられる。60は脚付き壺の脚部、脚体部と裾部の境には段部を持つ。61・63は甕の口縁部。61は口径20cm、63は33.5cmで、

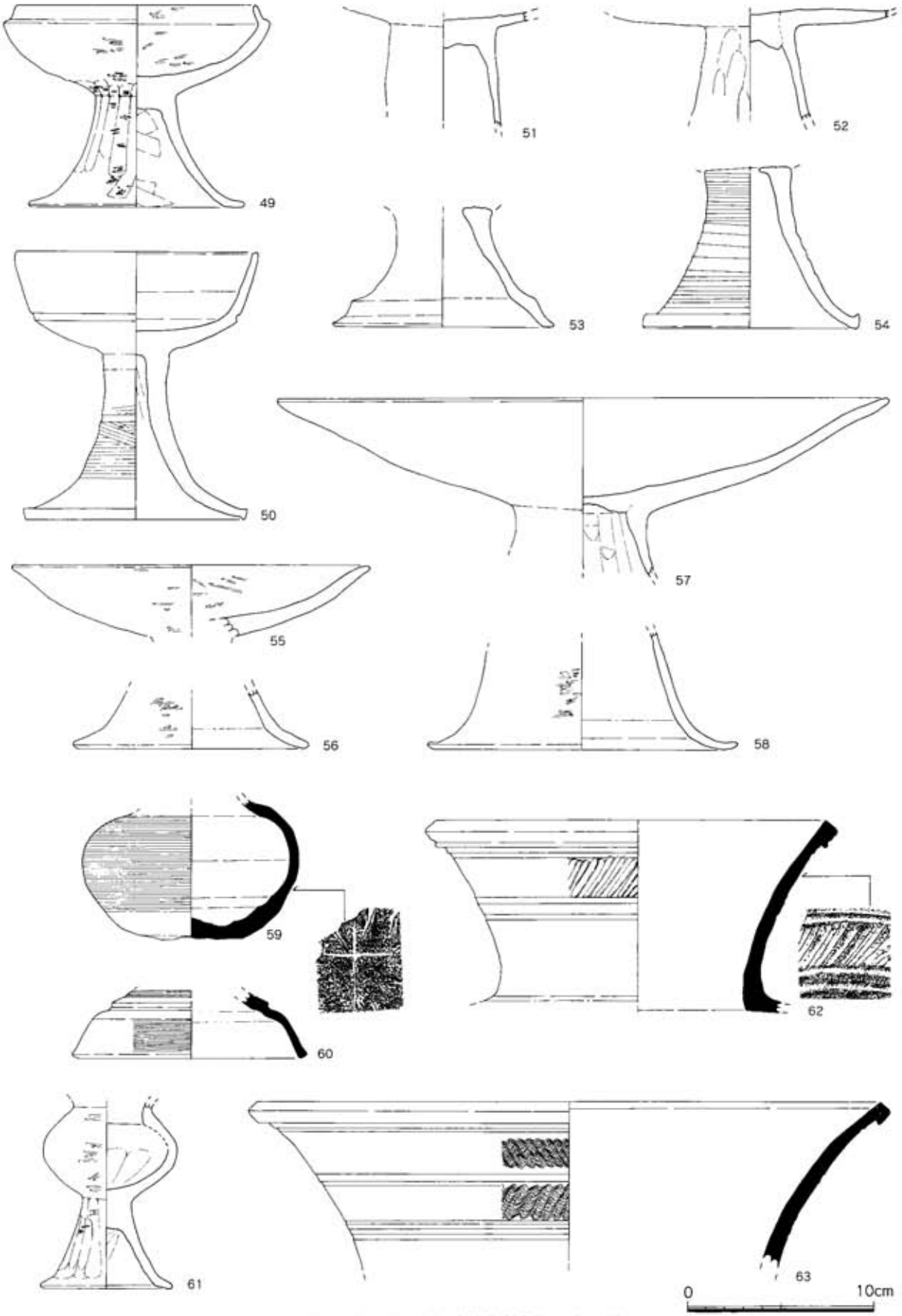


Fig.165　ＳＴ001古墳出土遺物４（１：３）

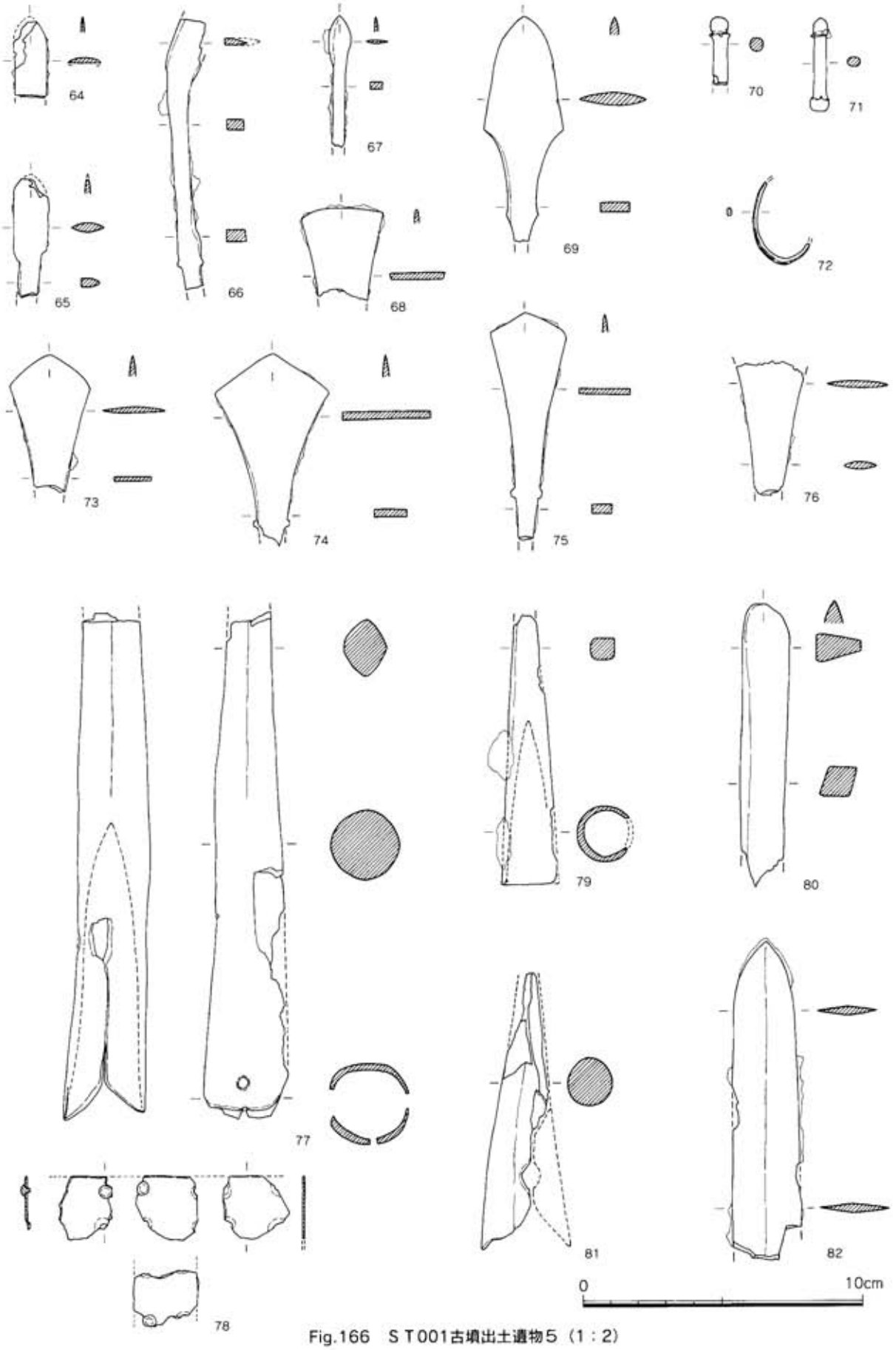


Fig.166　ＳＴ001古墳出土遺物５（1：2）

いずれも外反して端部は断面方形に肥厚する。61の外面には中央部に二条の凹線が巡り、凹線に区画された上部にはヘラ状工具の小口部分で斜め方向に連続させて文様を刻む。また63は凹線の上下に櫛描き波状文をそれぞれに施文方向を違えて刻む。

61は土師器のミニチュア土器。器形は脚付き壺で、外面にはヘラミガキを施した後に黒色顔料を塗布する。

64～71・73～98は鉄製品。鉄製品は武具・工具・馬具があり、武具としては剣・鏃・鉾の他、弓付属金具・胡録金具、工具としては刀子、馬具には轡・鐙・辻金具の他、鉸具・飾金具が見られる。

64～69・73～76は鏃、64～66は鏨箭式、67は柳葉式の有茎尖根鏃、68・69・73～76は有茎平根鏃で、68は斧箭式、69は椿葉式、73～75は圭頭式である。70・71は弓付属金具、72は青銅製の刀装具で責金具と思われ、若干の金箔が残存する。77～80・81は鉾、３個体以上が確認されており、77と80は同一個体の可能性がある。77は鉾が

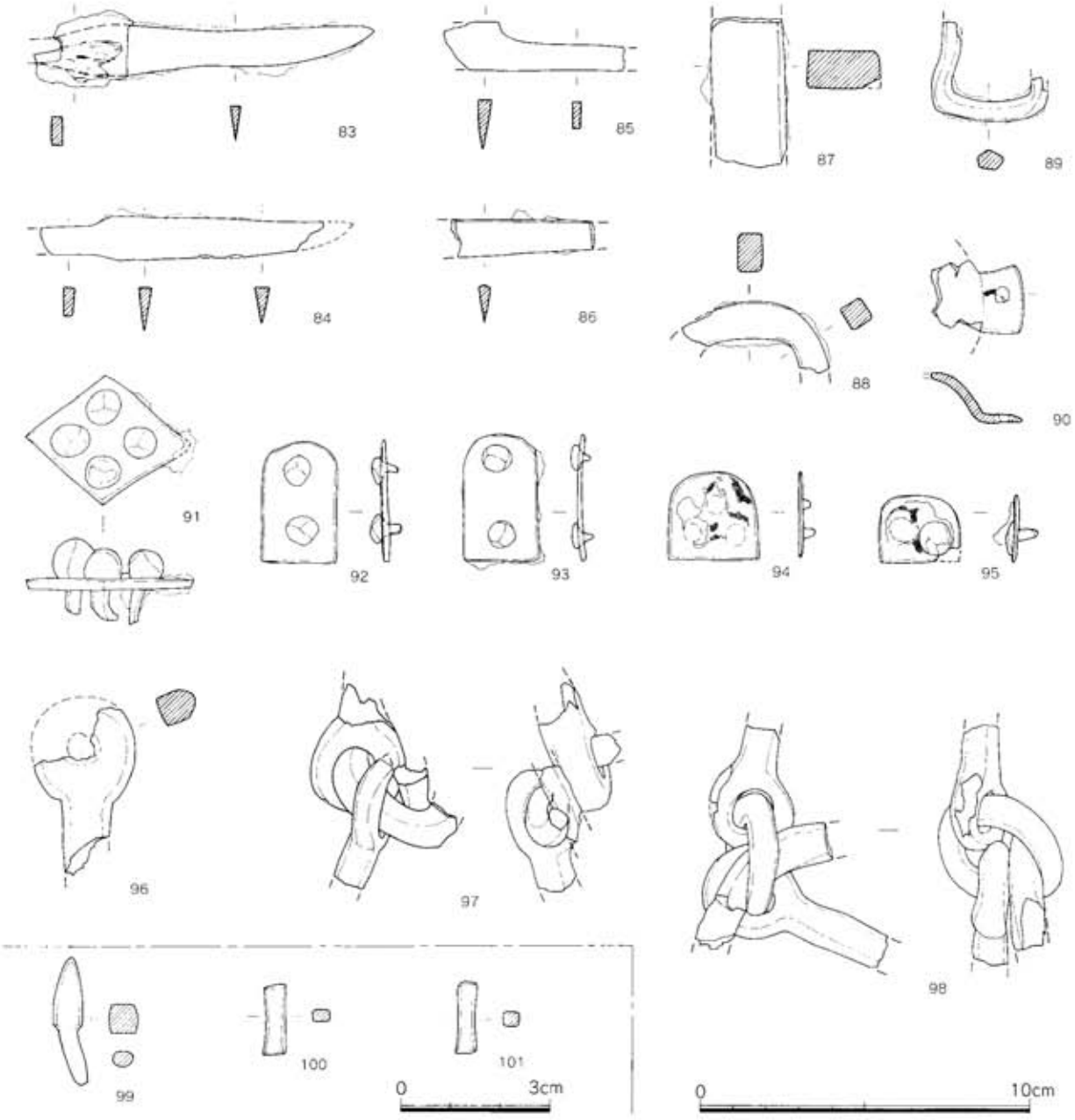


Fig.167　ＳＴ001古墳出土遺物６（83～98は1：2、99～101は3：4）

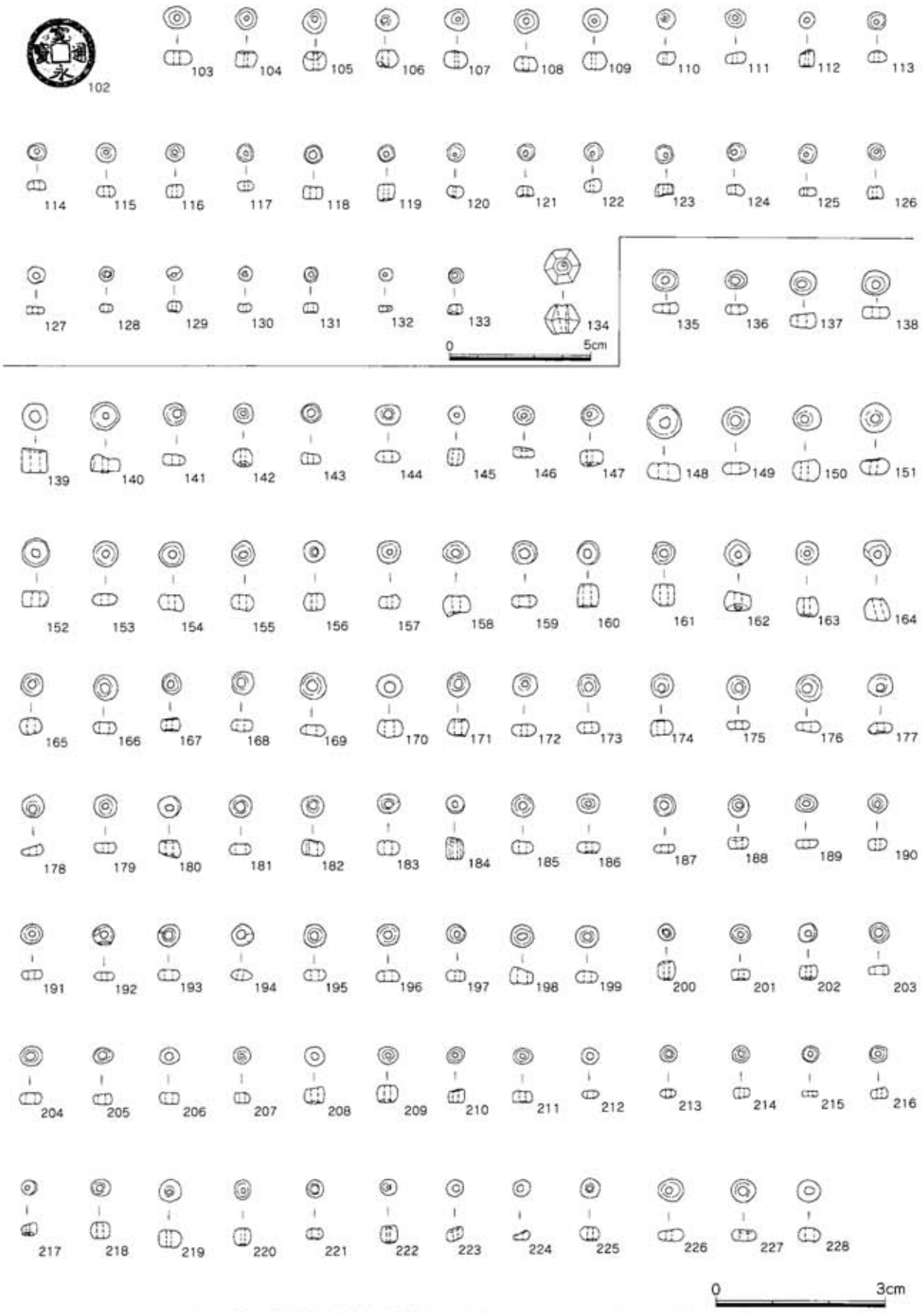


Fig.168　ＳＴ001古墳出土遺物７（102～134は1：2、135～228は1：1）

欠損するが大型のもので袋部にはＶ字形の切り込みを持つ。79・81はより小型であるが、同様に鋒が欠損し、79の袋部は切り込みを持たず、81は77と同様のＶ字形の切り込みを持たないが、袋部から鋒にかけてすぼまっている。80は鋒の部分であるが、袋部側は断面菱形で、切っ先に向かっては片刃になる。82は剣、刃部のみの出土であり、墳丘１区の盛土を除去する段階で検出されたもので、出土状態から考えてＳＴ001に伴うものではなく、ＳＴ001墳丘下の方形周溝墓の副葬品であったものがＳＴ001築造時に主体部が破壊され混入したものと推定される。78は胡録金具の一部分で同様の図化不能の破片が十数点ある。確認された破片では全て鋲は２個である。

83～86は刀子。83は両関を作るもので茎部に鹿角製の刀装具の残欠が見られる。84は片関・85は両関のもの。87は厚さ1.2mm程で断面長方形をなす鉄製品の部分で、用途不明である。

88～98は馬具。89は鉸具、88は鐙のＵ字金具、90は辻金具の破片、鉄地金銅張りで金箔が僅かに残る。91～95は鉄地金銅張り金具、91は菱形をなし、飾り鋲を四つ持つ。96～98は轡で、96は引手の端部、97・98はいずれも引手と銜、及び素環鏡板の連結部分である。

99～100は青銅製の不明製品。いずれも完形品で、単独で機能したものではなく、何らかの製品に付属する飾り金具と推定されるが詳細不明である。

103～228は装身具。103から228のうち、134のみが水晶製の切子玉で１点のみの出土、ほかはすべてガラス製小玉である。ガラス小玉は計132点が出土しており、ここではこのうち124点を図化している。圧倒的に量が多いのは濃青色であり、淡青色が相当数含まれるほか、淡緑色、濃赤色のものが若干量認められる。104は寛永通宝でいわゆる「新寛永」である。

ＳＴ００２古墳（Fig.170）

ＳＴ001古墳から続く南側尾根の斜面上に位置し、ＳＴ001とは約30m離れて立地する。石室奥壁と右壁の腰石のみを残して石材は失われているが、床面の敷石はほぼ良好に遺存する。墳丘はすべて失われており、地山に至るまで削平を受けているが、石室の規模から考えると径５～６ｍの小型墳であると推定される。石室は横穴式の小石室であり、袖石はないものと考えられる。壁体は奥壁に腰石１個を横位に据え、右壁は奥壁側から２石を縦位に立てており、玄門側の１石は数石を横位に積み上げるものと思われるが最下段の石しか残っていない。玄門部には框石状に右側に幅0.5m、長さ0.6mの、また左側には幅0.4m、長さ0.5mの石を並べて据えてある。左壁の腰石は失われているが、腰石外側の根固め石が残っており、平面プランはほぼ推測できる。石室内法は奥壁幅で約0.7m、右壁で約0.9m。敷石は0.1～0.2m程のやや平たい礫を用いる。石室内及び周辺部からは古墳に伴うと思われる遺物は検出されなかった。

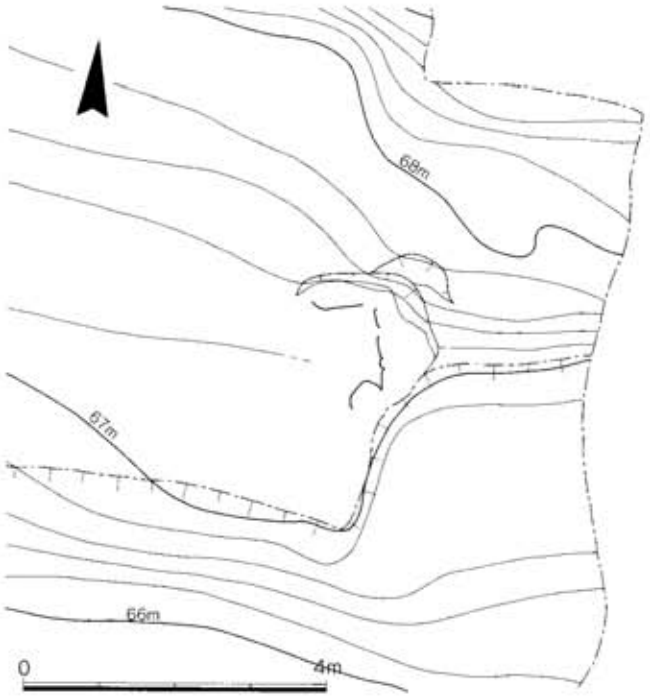


Fig.169　ＳＴ002古墳測量図（1：100）

ＳＴ０１７・０１８方形周溝墓・ＳＸ０２０不明遺構（Fig.171）

ＳＴ017・018方形周溝墓、ＳＸ020不明遺構はＳＴ001古墳の墳丘除去後に確認されたものであり、いずれも古墳時代前期の土師器を出土している。ＳＴ017・018方形周溝墓は墓道両側の墳丘下にあり、周溝のうち、ＳＴ017は北辺及び西辺の一部、ＳＴ018は北辺のみが確認されたが、その他の部分については内部主体も含めてすべて削平されて失われている。削平の要因については後世の蜜柑園造成も考えられるが、ＳＴ001古墳築造に伴い墳丘盛土に用いる土を周囲から採取したことも想定できよう。

遺存状況は、ＳＴ017は北辺5.5m、西辺の一部3.0m、ＳＴ018は北辺の残存長が7.0m及び東辺0.3mで、周溝の断面形は逆台形、深さはＳＴ017が最大0.7m、ＳＴ018が最大0.8mである。遺構の方位はＳＴ017が北辺でＮ－70°－Ｗ、ＳＴ018はＮ－56°－Ｅ。

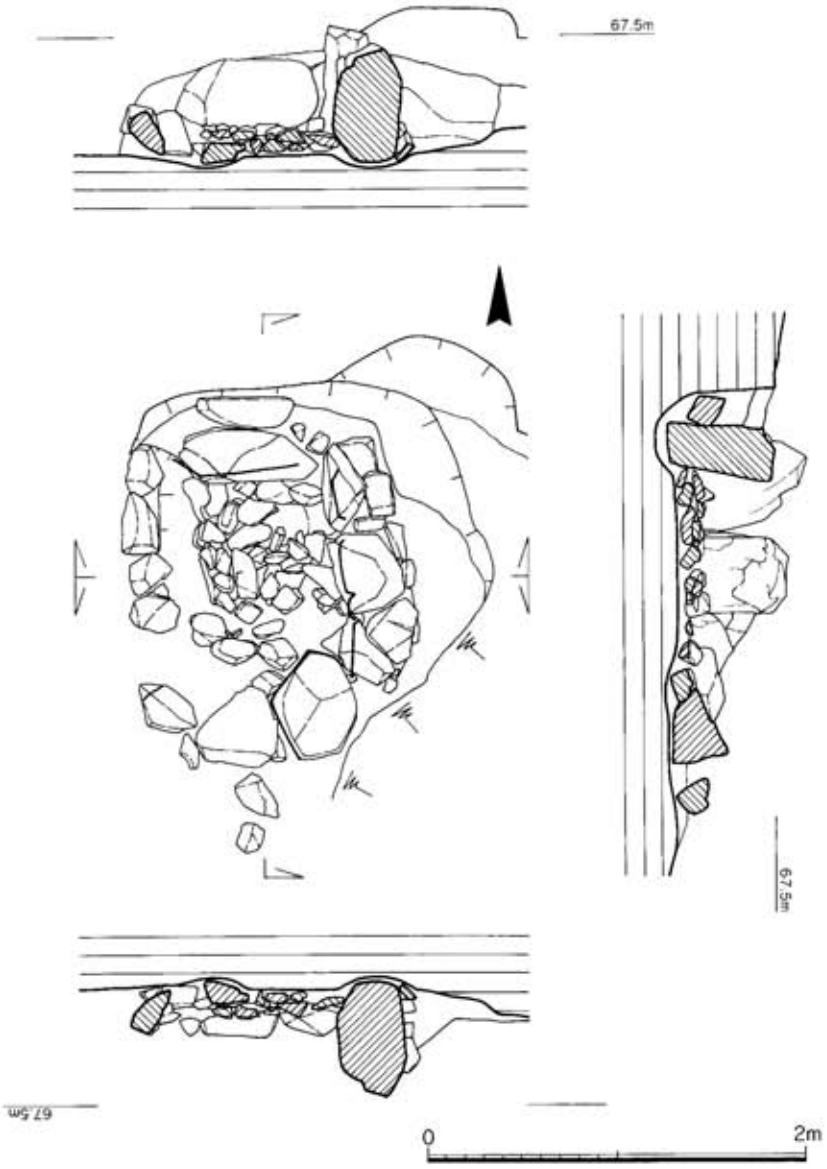


Fig.170　ＳＴ002古墳石室（1：40）

ＳＸ020はＳＴ001東側基底面よりさらに0.5m掘り下げた地点で確認された。南北方向に長軸を持つ不整形をなし、遺構の東側は一部蜜柑園造成により削平されている。現況では南北4.0m、東西1.6mの規模を持ち、底面はほぼ平坦で基盤から0.3mの深さである。遺構の南端からは大きさ0.4m程の礫と共に、布留式甕１個体が破砕した状態で出土している。遺構の方位は長軸でＮ－15°－Ｅ。

ＳＴ０１７・０１８方形周溝墓・ＳＸ０２０不明遺構出土遺物（Fig.172）　229～238は土師器。229・231は広口壺、229は中程まで直線的に伸びて、さらに外傾する口縁部をなし、胴部は肩が大きく張る。231は胴部のみの出土で胴部中央に最大径を持ち、底部は丸底である。230は布留式甕でくびれ部から直線的に伸びる口縁部と中央部やや下寄りに最大径を持つ胴部をなすもの。調整は胴部外面の肩部まではハケメ、中央部にはタタキが残り、下部はヘラナデ、内面は胴部中央までハケメ、下部はヘラケズリである。232は長頸壺。口縁部は直線的に開き、胴部はソロバン型に大きく膨らんで底部は丸底、底部底面には焼成後に穿孔を施す。233は器台、受部はほぼ平坦に開いて端部をやや上方につまみ上げる。脚部は直線的に伸びて接地し、四方向に穿孔される。234・235は高

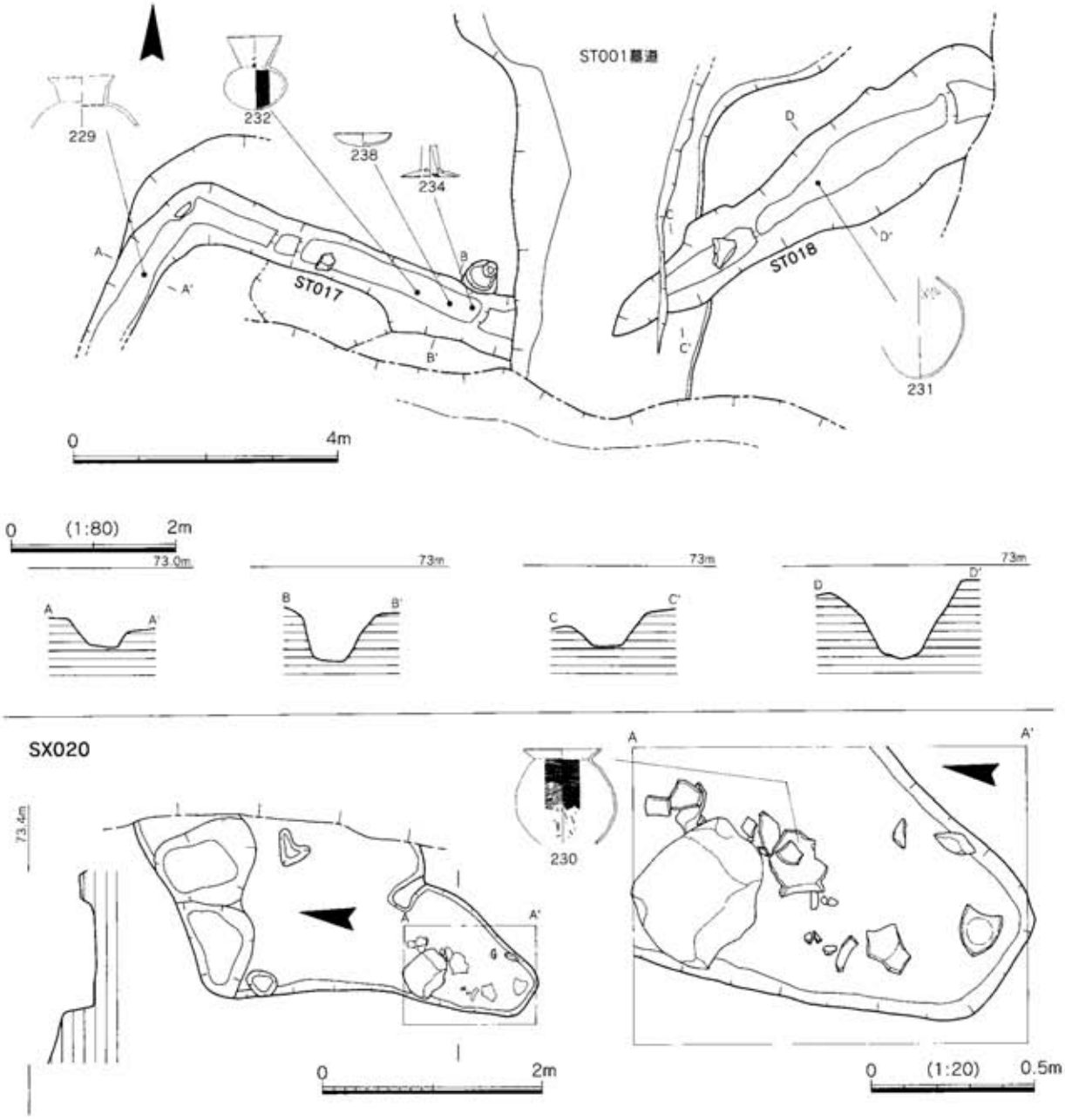


Fig.171　ＳＴ017，018古墳（1：100）、ＳＸ020不明遺構（1：60）

杯の脚部で柱状に長く伸びて、底部は大きく開いて端部のみ接地する。穿孔が四方向に施される。236～238は単口縁の鉢、調整はいずれもナデである。

4．その他の遺構（Fig.173）

ＳＰ０１９土壙墓（Fig.173）

ＳＴ001の南西墳裾付近に位置する。平面形はほぼ整った長方形であり、各隅は丸みを帯びる。長軸の方位は北々西－南々東にとり、Ｎ－37°－Ｗ、長軸の長さは1.65m、短軸は0.85mである。各壁の立ち上がりはかなり急で深さは0.4～0.8m、北々西、南々東側に段を残し中央部がさらに0.1m程一段窪む。北々西側の段部のほぼ中央部より人の頭骨の一部が検出されており、土壙の形態とも合わせて土壙墓と判断した。出土遺物は確認されてい

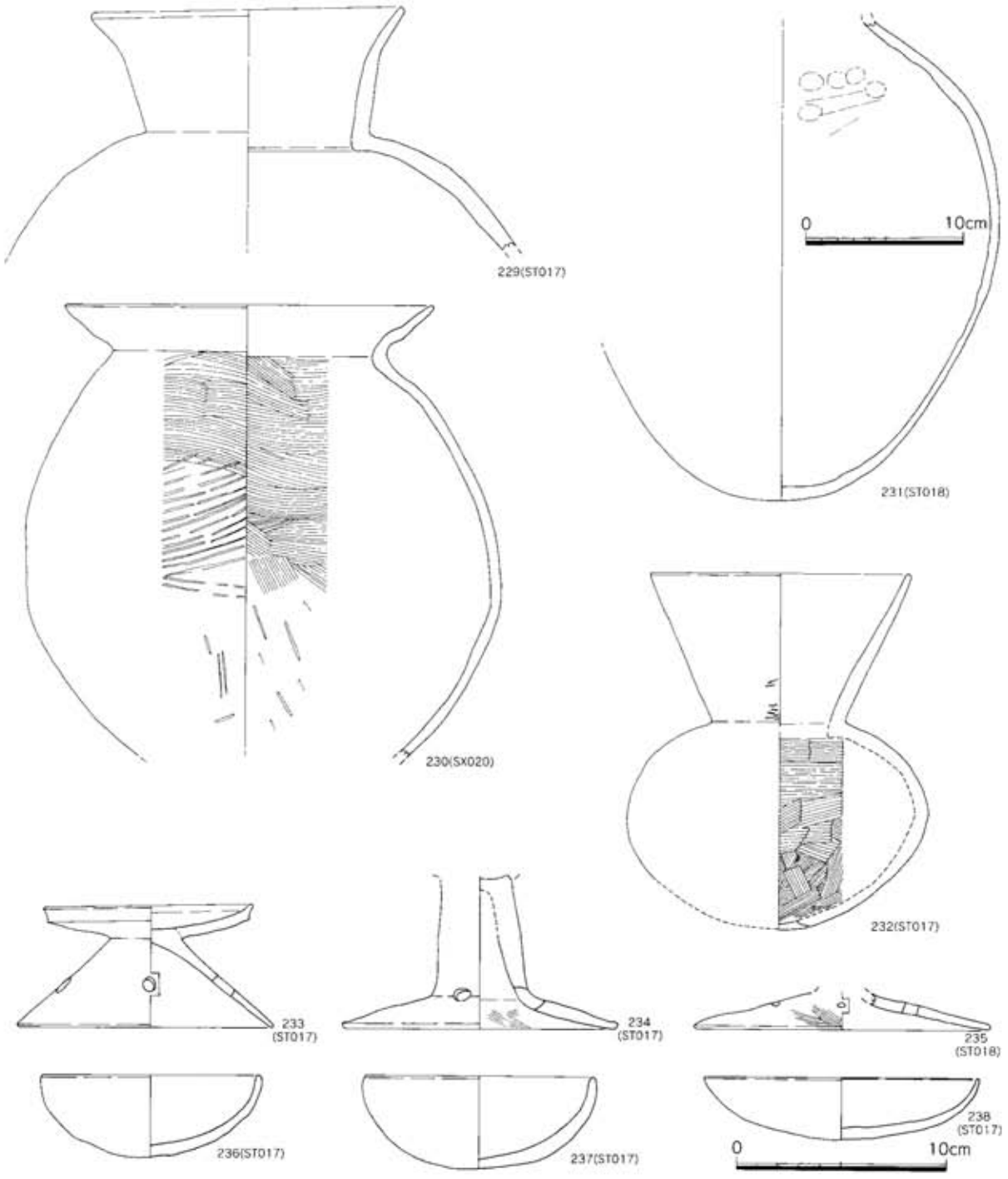


Fig.172　ＳＴ017，018古墳、ＳＸ020不明遺構出土遺物（231は1：4、他は1：3）

ないが、埋土の状態から中世～近世の所産と推定される。

ＳＸ０２１不明遺構（Fig.173）

ＳＴ001の西側墳丘下より検出され、ＳＸ022と1.4m程の距離を開けて近接する。平面形は整った円形で断面形は立ち上がりの急な摺鉢形をなす。平面形での径は0.45m、深さは0.5m。内部では、ほぼ水平に据えられた大きさ約0.25mの平たい花崗岩礫をさらに0.1m前後の小礫４個が支えるような状態が確認された。出土遺物はなく、性格については不明である。

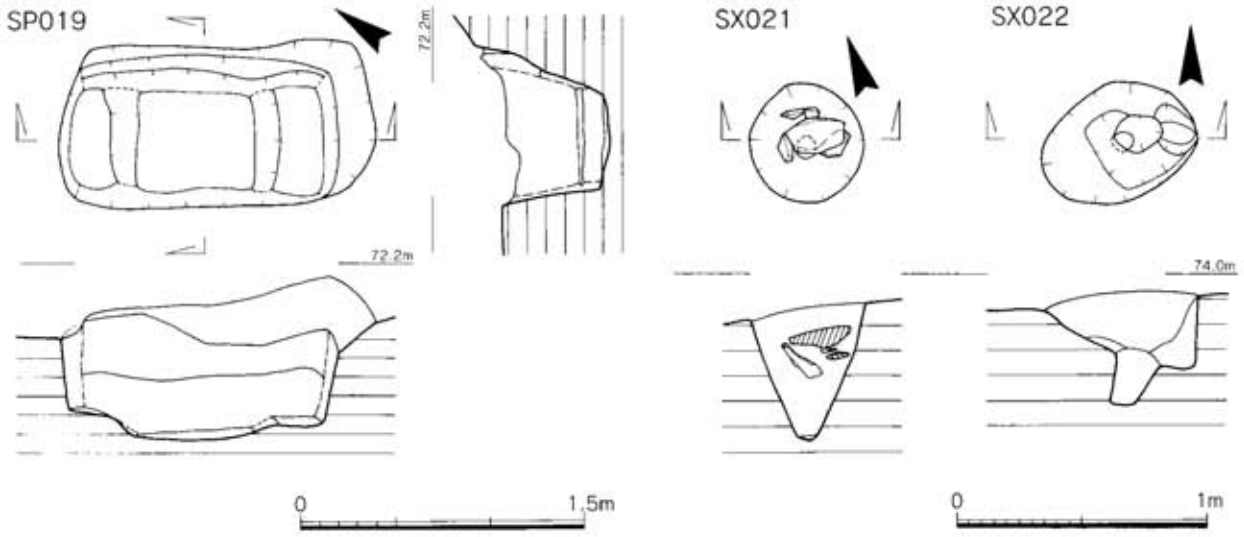


Fig.173　ＳＰ019土壙墓（1：40）、ＳＸ021・022不明遺構（1：30）

ＳＸ０２２不明遺構（Fig.173）

同じくＳＴ001の西側墳丘下より検出された。平面形は東西に長軸を持つ楕円形を呈し、長軸0.65m、短軸0.45m。断面形は深さ約0.25m程の上半部までは摺鉢状をなし、中央部やや東寄りに小穴を持つ。小穴はやや斜めに掘り込まれており、上部での径は0.2m、深さは0.25m。形態から柱穴の可能性が考えられるが、出土遺物はなく、性格については不明である。

5．結　語

浦田古墳群１区を以下にまとめる。

縄文時代早期の遺構として土壙12基が検出されている。このうち、ＳＫ004・005を除く10基は、いずれも縄文早期の遺物包含層である黄褐色粘質土を掘り下げる段階で検出されたものである。しかし、埋土と遺物包含層の区別が難しいことから、形態については不明瞭な点が多く、遺構の性格についてはいまひとつはっきりしない。この中で、ＳＫ012は底面に杭を据えていたと思われる２基の小穴が並んでおり、落とし穴と推定される。またＳＫ009は平面方形の土壙の中に炉跡と思われる石組みを持つもので、住居跡の可能性がある。その他、ＳＫ004・005・007・008・010など、楕円形あるいは略方形の土壙については貯蔵穴と考えられる。縄文早期の出土遺物のうち、土器は小片が数点検出されたのみであるが、２は厚手の無文土器で、胎土から押型文土器に伴うものと推定される。本遺跡の性格としては、戦場古墳群１区、戦場ヶ谷遺跡のようなある程度の期間居住したベースキャンプ的なものに対して、単発的に使用されるだけの一次的のキャンプ地であろう。

古墳は２基が確認されており、このうち、ＳＴ001古墳の出土須恵器は杯蓋・身がⅢＢ期～Ⅴ期に位置付けられ、６世紀第３四半期に築造、７世紀第２四半期まで追葬あるいは墓前祭祀が行われる。石室構造は狭長な羨道を持つ複室両袖型横穴式石室で、複室墳としては群集墳中に採用される石室の中では最も古いタイプと言える。特に壁体の石材は腰石を横位に据え、その上に横長の石材を目地が左右に通るように横位に丁寧に積み上げるもので、石材大型化に至る前段階の様相を示す。ただ壁体石材が小ぶりな点については、本古墳がかなり急峻な丘陵を登り詰めた頂上に位置することから、大型の石材を運搬することが困難であった点も指摘できる。いずれにしても、本古墳は周辺部の最高所に単独で立地する点に加え、墳径15mという周辺の群集墳から一まわり大きな

規模、また出土遺物でも鉄鉾３個体分の武器類や、轡・鐙、鉄地金銅張りの辻金具・飾り金具などの豊富の馬具類から推し量れるように、群集墳中でもより卓越した盟主墳的性格が想定できる。

ＳＴ002古墳は伸展葬の不可能な横穴式の小石室を持つ小墳で、形態から７世紀後半と考えられ、戦場古墳群１区のＳＴ007、３区のＳＴ015と類似の石室形態をなす。

ＳＴ017・019はＳＴ001古墳下から確認された方形周溝墓であり、主体部は不明であるが、溝内からの出土土器のうち甕・器台の形態は、蒲原宏行氏による佐賀平野の古墳時代初頭前後の土器編年[1]に照らした場合、土師本村２式並行期に位置付けられ、４世紀後半の所産と考えられる。周辺部では吉野ヶ里遺跡、五本谷遺跡、西一本杉遺跡、朝日遺跡のそれぞれで古墳時代前期の低墳丘墓が確認されており、本例も加えると僅か数ｋｍの狭い範囲に墳墓が集中していることとなり、当該期の城原川・田手川流域における優位性をさらに強調する重要な資料と言える。

註１）蒲原 宏行（1991）：『古墳時代初頭前後の土器編年』『佐賀県立博物館・美術館調査研究書第16集』　佐賀県立博物館・美術館

Tab.23　浦田古墳群１区土器一覧表（１）

Fig.図番号	PL.番号	県遺物登録番号	出土地点	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土 ※混入物	色調	文様・調整 外器面	内器面
155-2		98001554	ＳＫ015	縄文土器	深鉢		(5.2)		砂粒多量	鈍い橙色	ナデ	ナデ
162-6	56-1	96001054	ＳＴ001１区表土	須恵器	杯蓋	(15.4)	4.3	—	砂粒少量	灰色	天井部ヘラケズリ、ほかロクロナデ	ロクロナデ
7	56-2	96001098	ＳＴ001墳丘４区表土	〃	〃	(13.2)	4.2	—	砂粒少量	灰色	天井部ヘラケズリ、ほかロクロナデ	ロクロナデ
8	56-4	96001117	ＳＴ001墓道	〃	〃	(8.4)	(2.7)	—	砂粒少量	灰色	天井部ヘラ切り後ナデ	ロクロナデ
9		96001100	ＳＴ001副室	〃	〃	(14.8)	(2.1)	—	砂粒少量	灰色	天井部ヘラケズリ、ほかロクロナデ	ロクロナデ
10		96001079	ＳＴ001	〃	〃	(13.0)	(3.2)	—	砂粒少量	灰色	ロクロナデ	ナデ
11		96001118	ＳＴ001前庭部	〃	〃	(11.8)	(3.1)	—	砂粒少量	灰色	天井部ヘラケズリ、ほかロクロナデ	ロクロナデ
12		96001055	ＳＴ001墳丘４・３区	〃	〃	(12.8)	(3.8)	—	砂粒少量	灰白色	天井部ヘラケズリ、ほかロクロナデ	ロクロナデ
13		96001088	ＳＴ001墳丘４区	〃	〃	(11.9)	(3.8)	—	砂粒少量	橙（赤焼）	天井部ヘラケズリ、ほかロクロナデ	ロクロナデ
14		96001053	ＳＴ001	〃	〃	(11.4)	(4.6)	—	砂粒少量	暗灰色	天井部ヘラケズリ、ほかロクロナデ	ロクロナデ
15	56-3	96001071	ＳＴ001墓道	〃	〃	(11.7)	(4.2)	—	砂粒少量	灰色	天井部ヘラケズリ、ほかロクロナデ	ロクロナデ
16	56-6	96001115	ＳＴ001 4区,墓道	〃	〃	8.1	2.7	—	砂粒少量	暗灰色	天井部ヘラケズリ、ほかロクロナデ	ロクロナデ
17		96001116	ＳＴ001墳丘４区表土	〃	〃	(8.9)	(2.3)	—	砂粒少量	暗灰色	天井部不定方向ナデ	ロクロナデ
18		96001062	ＳＴ001墳丘４区	〃	杯身	(8.0)	(2.7)	—	砂粒少量	黄橙色	ナデ	ナデ
19	56-7	96001099	ＳＴ001墳丘４区	〃	〃	(10.9)	(11.0)	—	砂粒少量	鈍い橙色	ナデ	ナデ・条痕
20		96001111	ＳＴ001墳丘４区	〃	杯蓋	(11.6)	(3.7)	—	砂粒少量	灰色	ロクロナデ	ナデ
21		96001112	ＳＴ001墳丘４区	〃	〃	(12.4)	(3.3)	—	砂粒少量	灰色	ロクロナデ	ナデ
22		96001070	ＳＴ001墓道	〃	〃	4.0	(10.1)	—	砂粒少量	灰色	底部ヘラ切り離し後ナデ	ロクロナデ
23	56-5	96001113	ＳＴ001	〃	〃	(7.9)	(2.2)	—	砂粒少量	灰色	底部ヘラ切り離し後ナデ	ロクロナデ
24		96001114	ＳＴ001墳丘４区	〃	〃	(8.5)	(2.3)	—	砂粒少量	灰色	底部ヘラ切り離し後ナデ	ロクロナデ
25		96001086	ＳＴ001墳丘４区	黒色土器	碗	—	(1.8)	(7.4)	砂粒少量	暗灰色	底部ヘラ切り、ナデ	ナデ
26		96001095	ＳＴ001墳丘１区	須恵器	鉢	(12.0)	(5.3)	—	砂粒少量	暗灰色	カキメ、波状文	ロクロナデ
27		96001078	ＳＴ001	土師器	〃	(12.4)	(7.7)	—	砂粒少量	黄橙色	カキメ、波状文	ロクロナデ
28	56-13	96001056	ＳＴ001墓道	須恵器	〃	(10.2)	(15.5)	—	砂粒少量	灰白色	カキメ後刻み目、底部ヘラケズリ	シボリ痕
29	56-14	96001125	ＳＴ001墳丘３区	〃	〃	—	(13.6)	—	砂粒少量	暗灰色	底部ヘラケズリ後ナデ、刻み目文	シボリ痕
30		96001120	ＳＴ001前庭部	〃	〃	(12.4)	(10.5)	—	砂粒少量	黄橙色	ロクロナデ	ロクロナデ
31		96001083	ＳＴ001前庭部	〃	〃	(9.6)	(5.8)	—	砂粒少量	暗灰色	ロクロナデ、シボリ	ナデ
32	56-15	96001074	ＳＴ001副室	〃	〃	—	(8.9)	—	砂粒多量	灰色	底部ヘラケズリ、刻み目	ロクロナデ
163-33		96001075	ＳＴ001墓道・前庭部	〃	高杯	(13.0)	16.0	(6.8)	砂粒少量	暗灰色	カキメ、刻み目、ロクロナデ	ナデ
34	56-11	96001059	ＳＴ001墳丘４区	〃	〃	(11.2)	15.5	(10.8)	砂粒少量	暗灰色	カキメ、刻み目、ロクロナデ	ナデ
35	56-12	96001121	ＳＴ001墳丘４区	〃	〃	11.8	14.6	10.3	砂粒少量	暗灰色	ロクロナデ	ロクロナデ
36	56-10	96001057	ＳＴ001墓道	〃	〃	—	(15.3)	(11.8)	砂粒少量	灰色	ロクロナデ	ロクロナデ
37		96001093	ＳＴ001墓道	〃	〃	(7.4)	(3.3)	—	砂粒少量	灰白色	ロクロナデ	ロクロナデ
38		96001092	ＳＴ001前庭部	〃	〃	(8.6)	(4.2)	—	砂粒少量	灰褐色	底部ヘラケズリ後ナデ	ロクロナデ
39		96001091	ＳＴ001墳丘４区	〃	〃	—	(10.0)	(10.4)	砂粒少量	灰色	ロクロナデ	ロクロナデ
40		96001094	ＳＴ001墳丘４区	〃	〃	—	(4.8)	(12.2)	砂粒少量	灰色	ロクロナデ	ロクロナデ
41		96001058	ＳＴ001墳丘４区	〃	〃	—	(8.5)	(14.7)	砂粒少量	灰白色	ロクロナデ	ロクロナデ
42		96001122	ＳＴ001墓道	〃	〃	—	(11.6)	—	砂粒少量	暗灰色	ロクロナデ	ロクロナデ
43		96001119	ＳＴ001墓道	〃	〃	—	(14.3)	(15.5)	砂粒少量	暗灰色	カキメ、ロクロナデ	シボリ痕
164-44		96001081	ＳＴ001墳丘１区	〃	提瓶	(5.8)	(2.0)	—	砂粒少量	灰色	ロクロナデ	ロクロナデ
45		96001080	ＳＴ001	〃	〃	(6.9)	(2.9)	—	砂粒少量	灰色	ロクロナデ	ロクロナデ
46		96001103	ＳＴ001墓道・前庭部	〃	平瓶	(8.0)	胴(16.9)	—	砂粒少量	灰色	底部ヘラケズリ後、ナデ	ナデ
47		96001082	ＳＴ001墳丘４区,副室	須恵器	提瓶	—	(13.0)	—	砂粒微量	灰色	ロクロナデ	ロクロナデ
48	56-16	96001067	ＳＴ001	須恵器	特殊器台	—	(12.0)	—	砂粒多量	暗灰色	刻み目、波状文	ナデ
165-49		96001097	ＳＴ001墓道	土師器	高杯	(12.6)	(10.8)	(11.5)	砂粒少量	橙色	ヘラケズリ、ハケメ後ミガキ	ケズリ、ミガキ
50		＊1063,96	ＳＴ001墓道	〃	〃	(12.8)	(19.0)	(11.6)	砂粒少量	橙色	脚部カキメ、ロクロナデ	ロクロナデ
51		96001076	ＳＴ001	〃	〃	—	(6.2)	—	砂粒少量	黄橙色	不明	不明

Tab.23　浦田古墳群１区土器一覧表（２）

Fig. 図番号	PL. 番号	県遺物登録番号	出土地点	種別	器種	法量 (cm) 口径	器高	底径	胎土 ※混入物	色調	文様・調整 外器面	内器面
52		96001065	ST001 墳丘４区	土師器	高杯	—	(5.9)	—	砂粒少量	黄橙色	ケズリ	ナデ
53	56-9	96001061	ST001	〃	〃	—	(6.5)	(10.8)	砂粒少量	橙色	ナデ	ナデ
54	56-8	96001060	ST001 墳丘３区	〃	〃	—	(8.7)	(11.6)	砂粒少量	黄橙色	カキメ、ロクロナデ	ナデ
55		96001087	ST001 前庭部	〃	〃	(18.8)	(3.8)	—	砂粒少量	橙色	ヘラミガキ	ヘラミガキ
56		96001110	ST001 墓道	〃	〃	—	(3.2)	(12.0)	砂粒少量	赤褐色	ヘラミガキ、丹塗り	ケズリ、ナデ
57		96001124	ST001 墓道	〃	〃	(32.5)	(9.6)	—	砂粒少量	橙色	ヘラミガキ	ヘラミガキ
58		96001108	ST001 墓道	〃	〃	—	(6.3)	(16.5)	砂粒少量	橙色	ヘラミガキ、丹塗り	ケズリ、ナデ
59		96001073	ST001 墓道	須恵器	短頸壺	—	(7.4)	—	砂粒少量	灰色	底部ヘラケズリ、カキメ	ロクロナデ
60		96002627	ST001 墓道	〃	長頸壺	—	(3.6)	(11.9)	砂粒少量	赤褐色	カキメ	ナデ
61	56-17	96001085	ST001 墳丘４区	土師器	台付壺	—	(10.1)	6.6	砂粒多量	黄橙色	ミガキ、黒斑	ナデ
62		96001123	ST001	須恵器	甕	(28.0)	(13.8)	—	砂粒少量	暗灰色	ヘラ描き斜行文	ロクロナデ
63		96001052	ST001 墳丘４区	〃	〃	(44.6)	(12.1)	—	砂粒少量	暗灰色	ヘラ描き波状文	ロクロナデ
172-229	57-2	96002626	ST017 周溝内	土師器	壺		(30.7)		砂粒少量	橙色	ナデ	ナデ
230	57-4	96001084	SX020	〃	甕	(17.3)	(21.4)		砂粒少量	橙色	タタキ、ハケメ、黒斑あり	
231	57-5	96001104	ST018	〃	壺		(30.7)		砂粒少量	橙色	ナデ	ナデ
232	57-6	96001109	ST017	〃	長頸壺	12.2	(17.0)		砂粒少量	橙色	ヘラミガキ	ハケメ
233	56-18	96001105	ST017	〃	器台	9.8	6.0	(12.1)	砂粒少量	橙色	不明	不明
234	57-3	96001106	ST017	〃	高杯		(7.3)	12.9	砂粒少量	橙色	ナデ	ナデ
235		96001066	ST018	〃	器台		(1.8)	14.1	砂粒少量	橙色	ハケメ	不明
236	57-1	96001089	ST017	〃	杯	(10.3)	(3.9)		砂粒少量	橙色	ナデ	ナデ
237		96001090	ST017	〃	〃	(10.8)	4.5		砂粒少量	橙色	ナデ	ナデ
238		96001090	ST017	〃	〃	(10.8)	4.5		砂粒少量	橙色	ナデ	ナデ

Tab.24　浦田古墳群１区鉄製品ほか一覧表（１）

Fig. 図番号	PL. 番号	県遺物登録番号	出土地点	種別	器種	分類・部位	法量 (cm) 長さ	幅	厚さ	備考
155-1	59-2	98001556	縄文時代早期包含層	石製品	石核	—	4.9	4.5	4.2	黒曜石
3	59-2	98001555	〃	〃	石鏃	—	7.6	(6.8)	—	〃
4	59-2	98001553	〃	〃	磨石	—	(8.6)	(1.6)	(4.0)	
5	59-2	98001552	〃	〃	磨石	—	(5.6)	(10.4)	(4.2)	
166-64	58-1	97001073	ST001	鉄製品	鏃	刃部	(2.7)	(1.2)	0.2	鏃箭式
65	58-1	97001077	ST001	〃	〃	〃	(4.2)	(1.3)	0.4	〃
66	58-1	97001082	ST001 羨道	〃	〃	刃部～茎部	(9.7)	(1.1)	0.4	〃
67	58-1	97001072	ST001	〃	〃	〃	(4.8)	(0.8)	0.3	有茎尖根鏃、柳葉式
68	58-1	97001069	ST001	〃	〃	刃部	(3.8)	3.0	0.3	有茎平根鏃、鏑箭式
69	58-1	97001083	ST001 羨道	〃	〃	〃	(8.0)	4.1	0.4	有茎平根鏃、柳葉式
70		99003307	ST001 玄室	〃	弓付金具	—	(2.4)	0.8	—	
71	58-1	97001071	ST001	〃	〃	—	(3.4)	0.7		
72	59-5	97002399	ST001 副室	青銅製品	責金具	—	(3.0)	(2.0)		
73	58-1	97001079	ST001 玄室	鉄製品	鏃	—	(5.0)	2.9	0.2	有茎平根鏃、圭頭式
74	58-1	97001067	ST001	〃	〃	—	(6.9)	4.0	0.3	〃
75	58-1	97001068	ST001	〃	〃	—	(8.1)	2.6	0.3	〃
76	58-1	97001084	ST001	〃	〃	—	(4.8)	(2.2)	0.25	
77	58-2	97001085	ST001	〃	鉾	—	(18.3)	(2.5)		
78		99003308	ST001	〃	胡録金具	—				裏面に布痕あり
79		97001523	ST001 墳丘３区	〃	鉾	—	(9.7)	(1.9)		
80	58-2	97001524	ST001 玄室	〃	〃	—	(10.2)	(1.5)	0.8	
81	58-2	97001086	ST001	〃	〃	—	(9.8)	(1.9)		
82	57-7,8	99003309	ST001 墳丘２区	〃	剣	刃部	(11.3)	(2.5)		
167-83	57-9	97000578	ST001 玄室	〃	刀子	刃部～茎部	(10.3)	(2.0)	0.35	茎部に木質残存
84	57-9	97001997	ST001 副室	〃	〃	〃	(8.5)	(1.6)	0.4	
85	57-9	97001081	ST001 玄室	〃	〃	関部～茎部	(5.5)	(1.7)	0.45	
86		99000918	ST001 玄室	〃	〃	刃部	(4.4)	(1.2)	0.4	
87	58-2	97002400	ST001 墳丘４区	〃	不明	—	(4.5)	(2.3)	(1.15)	
88	58-4	97001080	ST001 羨道	〃	鐙	U字金具	(1.8)	(4.1)	(1.1)	
89		99003308	ST001 玄室	〃	鉸具	—	(3.0)	(3.6)	(5.5)	
90	58-3	97001076	ST001	〃	辻金具	—	(2.8)	(2.2)	(1.5)	鉄地金銅張り
91	58-3	97001078	ST001 副室	〃	鋲金具	—	(5.0)	(3.9)		〃
92	58-3	97001998	ST001 副室	〃	辻金具	—	3.7	2.3	0.25	〃
93	58-3	97001070	ST001	〃	〃	—	4.0	2.2		〃
94	58-3	97001075	ST001	〃	〃	—				〃
95	58-3	97001074	ST001	〃	〃	—	2.0	2.5		〃
96	59-1	97001525	ST001 玄室	〃	轡	引手	(5.0)	(3.0)		
97	59-1	97001088	ST001 玄室	〃	〃	〃	(6.3)			
98	59-1	97001087	ST001 玄室	〃	〃	〃	(8.3)			
99	59-6	99000915	ST001 副室	青銅製品	不明	—	(2.55)	(0.6)	(0.3)	

Tab.24　浦田古墳群１区鉄製品ほか一覧表（２）

Fig. 図番号	PL. 番号	県遺物登録番号	出土地点	種別	器種	分類・部位	法量（cm） 長さ	幅	厚さ	備考
100	59-6	99000916	ST001副室	青銅製品	不明	—	(1.45)	(0.4)	(0.3)	
101	59-6	99000917	ST001副室	青銅製品	〃	—	(1.4)	(0.45)	(0.35)	
168-102	59-4	97002398	ST001表土	鉄製	寛永通宝	—	径2.5			
103		97002386	ST001玄室	ガラス製品	小玉	—	0.95		0.5	藍色
104	59-3	97002387	ST001玄室	〃	〃	—	0.75		0.6	藍色
105	59-3	97002388	ST001玄室	〃	〃	—	0.9		0.7	群青色
106	59-3	97002393	ST001玄室	〃	〃	—	0.8		0.65	暗褐色
107		97002026	ST001玄室	〃	〃	—	0.85		0.6	暗灰色
108	59-3	97002027	ST001玄室	〃	〃	—	0.85		0.6	群青色
109		99000904	ST001玄室	〃	〃	—	0.85		0.6	青色
110		97002389	ST001玄室	〃	〃	—	0.7		0.5	藍色
111		97002390	ST001玄室	〃	〃	—	0.75		0.4	藍色
112		97002391	ST001玄室	〃	〃	—	0.6		0.6	群青色
113		97002012	ST001墓道	〃	〃	—	0.65		0.4	藍色
114		97002013	ST001羨道	〃	〃	—	0.7		0.35	藍色
115		97002021	ST001墓道	〃	〃	—	0.6		0.3	藍色
116		97002022	ST001墓道	〃	〃	—	0.6		0.45	青色
117		97002023	ST001墓道	〃	〃	—	0.6		0.35	藍色
118	59-9	97002028	ST001玄室	〃	〃	—	0.65		0.45	群青色
119	59-9	97002029	ST001玄室	〃	〃	—	0.6		0.55	青色
120		97002030	ST001玄室	〃	〃	—	0.6		0.45	藍色
121		97002031	ST001玄室	〃	〃	—	0.6		0.4	藍色
122		97002032	ST001玄室	〃	〃	—	0.65		0.45	藍色
123		99000901	ST001玄室	〃	〃	—	0.6		0.45	群青色
124		99000902	ST001羨道	〃	〃	—	0.65		0.4	群青色
125		99000903	ST001前庭部	〃	〃	—	0.6		0.3	群青色
126		99000913	ST001玄室	〃	〃	—	0.6		0.6	群青色
127		99000906	ST001副室	〃	〃	—	0.6		0.6	水色
128		99000907	ST001副室	〃	〃	—	0.5		0.3	水色
129		99000908	ST001副室	〃	〃	—	0.55		0.4	水色
130		99002385	ST001玄室	ガラス製品	小玉	—	0.35		0.25	淡緑色
131		97002392	ST001玄室	〃	〃	—	0.55		0.35	群青色
132	59-3	97002394	ST001玄室	〃	〃	—	0.45		0.2	水色
133		97002011	ST001羨道	〃	〃	—	0.5		0.35	群青色
134	59-3	99000914	ST001玄室	水晶	切子玉	—	1.3		1.0	透明
135		99000912	ST001副室	ガラス製品	小玉	—	0.45		0.2	藍色
136		99000911	ST001副室	〃	〃	—	0.4		0.2	藍色
137		99000909	ST001副室	〃	〃	—	0.45		0.3	藍色
138		99000910	ST001副室	〃	〃	—	0.5		0.2	藍色
139		97002014	ST001羨道	〃	〃	—	0.9		0.45	群青色
140		97002015	ST001羨道	〃	〃	—	0.55		0.3	藍色
141		97002016	ST001羨道	〃	〃	—	0.4		0.2	藍色
142		97002017	ST001羨道	〃	〃	—	0.7		0.3	藍色
143		97002018	ST001羨道	〃	〃	—	0.35		0.2	群青色
144		97002019	ST001羨道	〃	〃	—	0.45		0.2	エメラルド・ブルー
145		97002020	ST001羨道	〃	〃	—	0.3		0.3	エメラルド・グリーン
146		97002024	ST001墓道	〃	〃	—	0.4		0.2	群青色
147		97002025	ST001墓道	〃	〃	—	0.4		0.25	群青色
148	59-3	97002033	ST001玄室	〃	〃	—	0.6		0.3	群青色
149		97002034	ST001玄室	〃	〃	—	0.5		0.2	青色
150		97002035	ST001玄室	〃	〃	—	0.5		0.4	藍色
151		97002036	ST001玄室	〃	〃	—	0.5		0.3	藍色
152		97002037	ST001玄室	〃	〃	—	0.5		0.25	群青色
153		97002038	ST001玄室	〃	〃	—	0.45		0.2	藍色
154		97002039	ST001玄室	〃	〃	—	0.4		0.3	青色
155		97002040	ST001玄室	〃	〃	—	0.4		0.3	藍色
156		97002041	ST001玄室	〃	〃	—	0.4		0.3	群青色
157		97002042	ST001玄室	〃	〃	—	0.4		0.25	藍色
158		97002043	ST001玄室	〃	〃	—	0.5		0.4	エメラルド・ブルー
159		97002044	ST001玄室	〃	〃	—	0.45		0.2	青色
160		97002045	ST001玄室	〃	〃	—	0.4		0.4	藍色
161		97002046	ST001玄室	〃	〃	—	0.4		0.35	群青色
162		97002047	ST001玄室	〃	〃	—	0.45		0.35	茶色
163		97002048	ST001玄室	〃	〃	—	0.45		0.35	群青色
164		97002049	ST001玄室	〃	〃	—	0.45		0.4	水色
165		97002050	ST001玄室	〃	〃	—	0.4		0.3	エメラルド・ブルー
166		97002051	ST001玄室	〃	〃	—	0.45		0.2	淡緑色
167		97002052	ST001玄室	〃	〃	—	0.35		0.25	藍色
168		97002053	ST001玄室	〃	〃	—	0.4		0.2	エメラルド・ブルー

Tab.24　浦田古墳群１区鉄製品ほか一覧表（３）

Fig.図番号	PL.番号	県遺物登録番号	出土地点	種別	器種	分類・部位	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	備考
169		97002054	ST001玄室	ガラス製品	小玉	—	0.45		0.2	エメラルド・ブルー
170		97002055	ST001玄室	〃	〃	—	0.45		0.3	エメラルド・ブルー
171		97002056	ST001玄室	〃	〃	—	0.4		0.3	群青色
172		97002058	ST001玄室	〃	〃	—	0.45		0.25	エメラルド・ブルー
173		97002057	ST001玄室	〃	〃	—	0.4		0.2	エメラルド・ブルー
174		97002054	ST001玄室	〃	〃	—	0.45		0.2	エメラルド・ブルー
175		97002060	ST001玄室	〃	〃	—	0.45		0.15	藍色
176		97002061	ST001玄室	〃	〃	—	0.45		0.2	藍色
177		97002062	ST001玄室	〃	〃	—	0.45		0.2	エメラルド・ブルー
178		97002063	ST001玄室	〃	〃	—	0.4		0.2	青色
179		97002064	ST001玄室	〃	〃	—	0.4		0.2	群青色
180		97002065	ST001玄室	〃	〃	—	0.4		0.3	エメラルド・グリーン
181		97002066	ST001玄室	〃	〃	—	0.4		0.2	淡緑色
182		97002067	ST001玄室	〃	〃	—	0.4		0.25	淡緑色
183		97002068	ST001玄室	〃	〃	—	0.4		0.25	エメラルド・ブルー
184		97002069	ST001玄室	〃	〃	—	0.3		0.4	エメラルド・ブルー
185		97002070	ST001玄室	〃	〃	—	0.4		0.2	エメラルド・ブルー
186		97002071	ST001玄室	〃	〃	—	0.4		0.2	青色
187	59-3	97002072	ST001玄室	〃	〃	—	0.4		0.15	エメラルド・ブルー
188		97002073	ST001玄室	〃	〃	—	0.4		0.2	青色
189		97002074	ST001玄室	〃	〃	—	0.4		0.15	群青色
190		97002075	ST001玄室	〃	〃	—	0.35		0.2	淡緑色
191		97002351	ST001玄室	〃	〃	—	0.4		0.15	藍色
192		97002352	ST001玄室	〃	〃	—	0.4		0.15	エメラルド・ブルー
193		97002353	ST001玄室	〃	〃	—	0.4		0.2	群青色
194		97002354	ST001玄室	〃	〃	—	0.4		0.2	エメラルド・グリーン
195		97002355	ST001玄室	〃	〃	—	0.4		0.2	群青色
196		97002356	ST001玄室	〃	〃	—	0.4		0.2	エメラルド・ブルー
197		97002357	ST001玄室	〃	〃	—	0.35		0.2	青色
198		97002358	ST001玄室	〃	〃	—	0.4		0.3	群青色
199		97002359	ST001玄室	ガラス製品	小玉	—	0.4		0.2	藍色
200		97002360	ST001玄室	〃	〃	—	0.3		0.35	藍色
201		97002361	ST001玄室	〃	〃	—	0.35		0.2	青色
202		97002362	ST001玄室	〃	〃	—	0.3		0.25	青色
203		97002363	ST001玄室	〃	〃	—	0.35		0.17	青色
204		97002364	ST001玄室	〃	〃	—	0.4		0.2	藍色
205		97002365	ST001玄室	〃	〃	—	0.35		0.2	青色
206		97002366	ST001玄室	〃	〃	—	0.35		0.2	青色
207		97002367	ST001玄室	〃	〃	—	0.3		0.2	群青色
208		97002368	ST001玄室	〃	〃	—	0.35		0.25	群青色
209		97002369	ST001玄室	〃	〃	—	0.35		0.3	淡藍色
210		97002370	ST001玄室	〃	〃	—	0.3		0.25	青色
211		97002371	ST001玄室	〃	〃	—	0.35		0.2	群青色
212		97002372	ST001玄室	〃	〃	—	0.3		0.15	青色
213		97002373	ST001玄室	〃	〃	—	0.3		0.15	青色
214		97002374	ST001玄室	〃	〃	—	0.3		0.15	藍色
215		97002375	ST001玄室	〃	〃	—	0.3		0.1	青色
216		97002376	ST001玄室	〃	〃	—	0.3		0.15	青色
217		97002377	ST001玄室	〃	〃	—	0.3		0.15	藍色
218		97002378	ST001玄室	〃	〃	—	0.35		0.3	淡藍色
219		97002379	ST001玄室	〃	〃	—	0.4		0.3	淡空色
220		97002380	ST001玄室	〃	〃	—	0.35		0.2	淡空色
221		97002381	ST001玄室	〃	〃	—	0.3		0.2	淡空色
222		97002382	ST001玄室	〃	〃	—	0.3		0.3	淡空色
223		97002383	ST001玄室	〃	〃	—	0.3		0.2	エメラルド・ブルー
224		97002384	ST001玄室	〃	〃	—	0.3		0.2	エメラルド・ブルー
225		97002385	ST001玄室	〃	〃	—	0.35		0.25	淡緑色
226		97002396	ST001玄室閉塞石	〃	〃	—	0.4		0.2	群青色
227		97002397	ST001玄室閉塞石	〃	〃	—	0.4		0.15	エメラルド・ブルー
228		99000905	ST001玄室	〃	〃	—	0.4		0.25	淡緑色

Ⅷ．浦田古墳群２区の遺構と遺物

１．遺跡の概要（Fig.174・175）

浦田古墳群２区は戦場古墳群１区ＳＴ001古墳の立地する尾根と、谷部を挟んで東側100mに伸びる尾根の南向き斜面に立地する。対象地の現況は蜜柑畑であり、工事の全体計画変更後に第１期工事分とした範囲の東端部にあたり、白京溜池東岸から伸びる団地内道路の延長上に位置する。対象地については平成９年度に第１期工事範囲が確定したのに伴い確認調査を実施した際、古墳１基（ＳＴ021）を確認したことにより本調査を行うこととした。本調査に際し表土剥ぎを行ったところ新たに古墳２基と縄文時代中期の集石遺構、縄文時代早期から中期の遺物包含層を確認した。

調査区は地形的には北から南に下っていく標高63～70mの丘陵中腹斜面から裾部にあたり、斜面上に７世紀中頃の古墳１基（ＳＴ021）が、斜面から裾部への変換点に５世紀後半の古墳２基（ＳＴ022・023）が北西から南東方向を主軸として並ぶ。基本土層としては谷部にあたる調査区内南側にレス層（Ⅳ・Ⅵ層）が約70㎡、厚さ最大0.5mで堆積しており、縄文時代早期から中期にかけての遺物を若干量出土している。古墳はⅤ層上面を基底面として構築されているが、後世の流土（Ⅱ・Ⅲ層）が厚さ1.0m近く流れ込んできており、特にＳＴ024古墳は墳丘全体が埋没していた。縄文時代の集石遺構（ＳＸ024・025）はＳＴ023の南西緩斜面のⅣ層中で検出されている。

調査区を含む対象地は谷頭にあたる丘陵斜面であり調査前から古墳の存在が予想されたため、本調査対象地区以外にも、より古墳の存在の可能性が高いと考えられる北側尾根頂部（開発対象地区外を含む）周辺に数本のトレンチを設定したが、花崗岩礫が散在する状況は窺えたものの、古墳等は確認できなかった。丘陵全体が蜜柑園となっているため、地形はかなり改変を受けているものと思われ、流土に覆われた斜面上の古墳のみが遺存したものと考えられる。旧地形からみても、また、３基の古墳の存続時期とは時期的に異なる須恵器片を採集していることからも、他に数基の古墳が存在していたものと推定される。以下に遺構毎の概要を述べる。

２．縄文時代の遺構（Fig.176）

ＳＸ０２４集石遺構・ＳＸ０２５集石遺構（Fig.176）

大きさ10～20cm程度の花崗岩礫20個程からなる。平面形はほぼ円形に集石していること以外は明確に炉跡等の形はなしてはおらず、掘り方も確認できなかった。火熱を受けたためか赤変して脆くなった礫も半数程度見受けられる。確実にこれに伴う遺物はないが、ＳＸ024と40cm程度で近接して阿高式と思われる口縁部に凹線を施す縄文土器片が出土しており、縄文時代中期の所産と考えられる。規模はＳＸ024が南北1.2m、東西1.4m、ＳＸ

Tab.25　浦田古墳群２区遺構一覧表

遺構番号	種　別	形　態　（特徴）	規模（長さ×幅×深さ）：m	主軸方位	出土遺物	時代・時期
ST021	古墳	馬蹄形墳［横穴式石室］	南北 6.6、東西 9.6	S－4°－E	須恵器、土師器、鉄器(釘)、ガラス小玉	古墳後期（7C3/4）
ST022	古墳	円墳［石棺系竪穴式石室］	径 4.5	N－58°－W	須恵器、土師器、縄文土器	古墳中期（5C3/4）
ST023	古墳	円墳［石棺系竪穴式石室］	径 4.5	N－58°－W	なし	古墳中期（5C3/4）
SX024	集石遺構	不定形	南北 1.2、東西 1.4	—	なし	縄文中期
SX025	集石遺構	不定形	南北 1.0、東西 1.2	—	なし	縄文中期

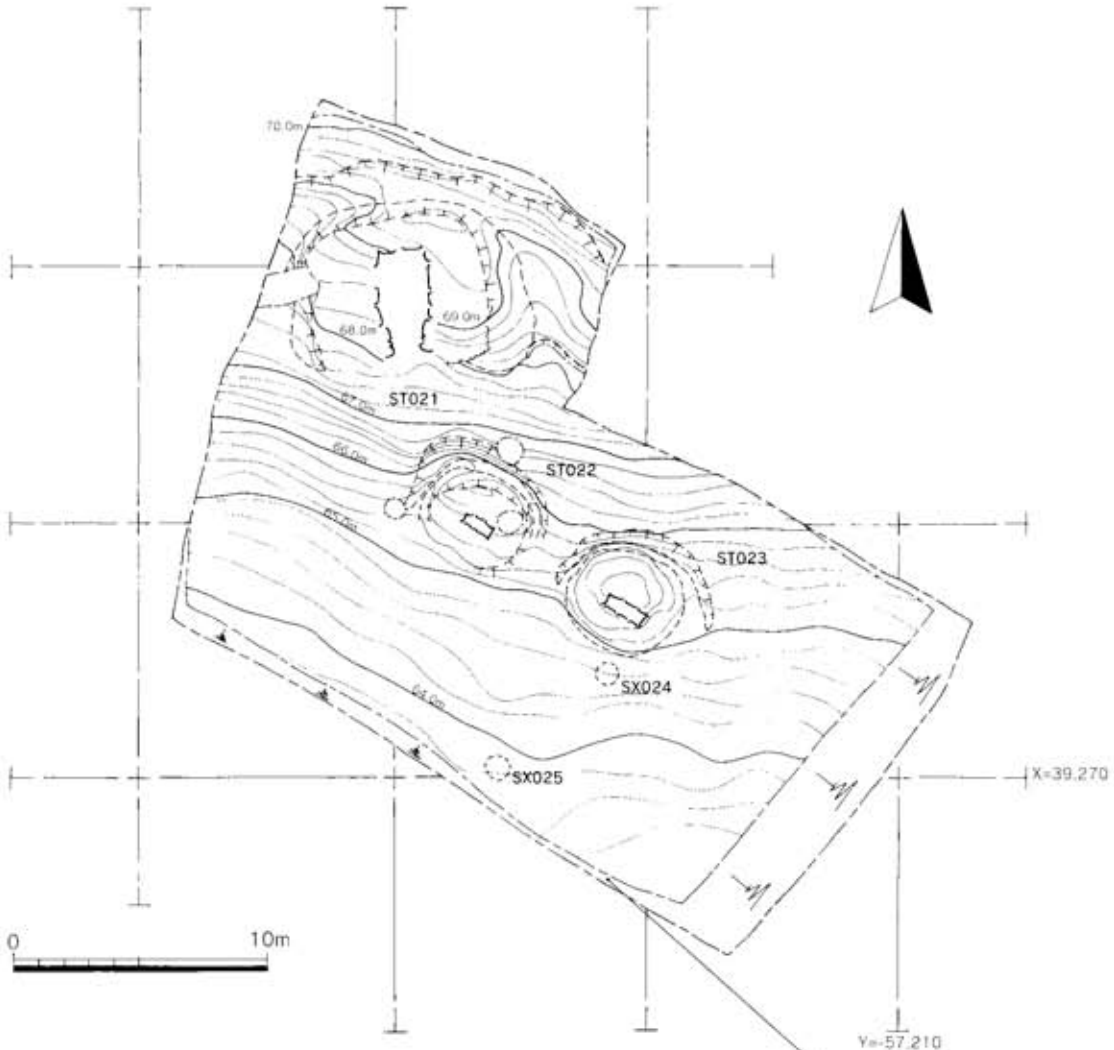


Fig.174　浦田古墳群２区遺構配置図（1：300）

０２５は南北1.0m、東西1.2m。

３．古墳時代の遺構と遺物（Fig.177～190）

ＳＴ０２１古墳（Fig.177～182）

墳丘・周溝（Fig.177・178）　傾斜角15度と、古墳の立地としては比較的急な斜面に作られている。周溝は前面には巡らず、平面馬蹄形をなす。現存する墳丘の墳頂部の平面形で見ると、両側面・背面ともに直線的に伸び、一見隅丸の方墳のようにも見受けられるが、墳丘自体がほぼ半分の高さまで蜜柑園造成により削平されており、墳裾は緩やかに丸みをもって巡るものと考えている。具体的には、前面は玄門部から東西に直線的に石列が伸び、側面から背面にかけては円形に周溝が巡る馬蹄形墳になるものと思われる。急な斜面上に立地することから南北方向に墳丘規模をあまりとれなかったものと

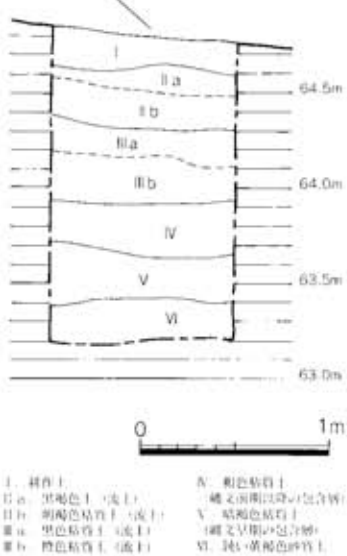


Fig.175　調査区基本土層図（1：40）

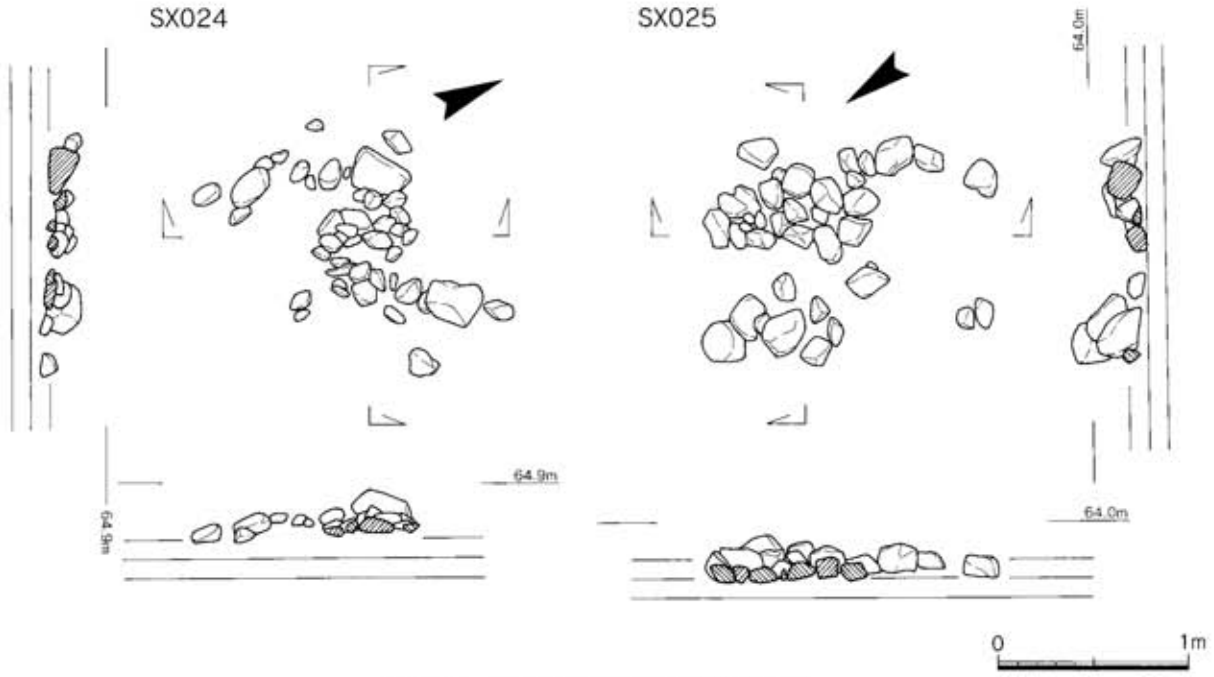


Fig.176　S X024・025集石遺構（1/40）

考えられ、墳丘の南北方向より東西方向の方が規模の大きい、幅広の墳形をなす。周溝については墳丘基底面に沿った形で東側から西側に向かって底面が低くなる。特に背面については表土直下で岩盤の露頭があったため、あまり深くは掘れなかったものと推定され、現況で深さ約25cm程度と浅い。墳丘構築技法の特徴として、地山整形段階に盛土を行い、石室基底面を平坦に造り出している点が挙げられる。おそらく急な斜面という立地上、あるいは岩盤に掘削を阻まれたためか石室全長を十分に取れなかったことにより、腰石を据える際に石室玄門部から古墳の前面に向かって厚さ最大50cm程度の盛土を行っている。そのため、腰石の基部を強化するためか、

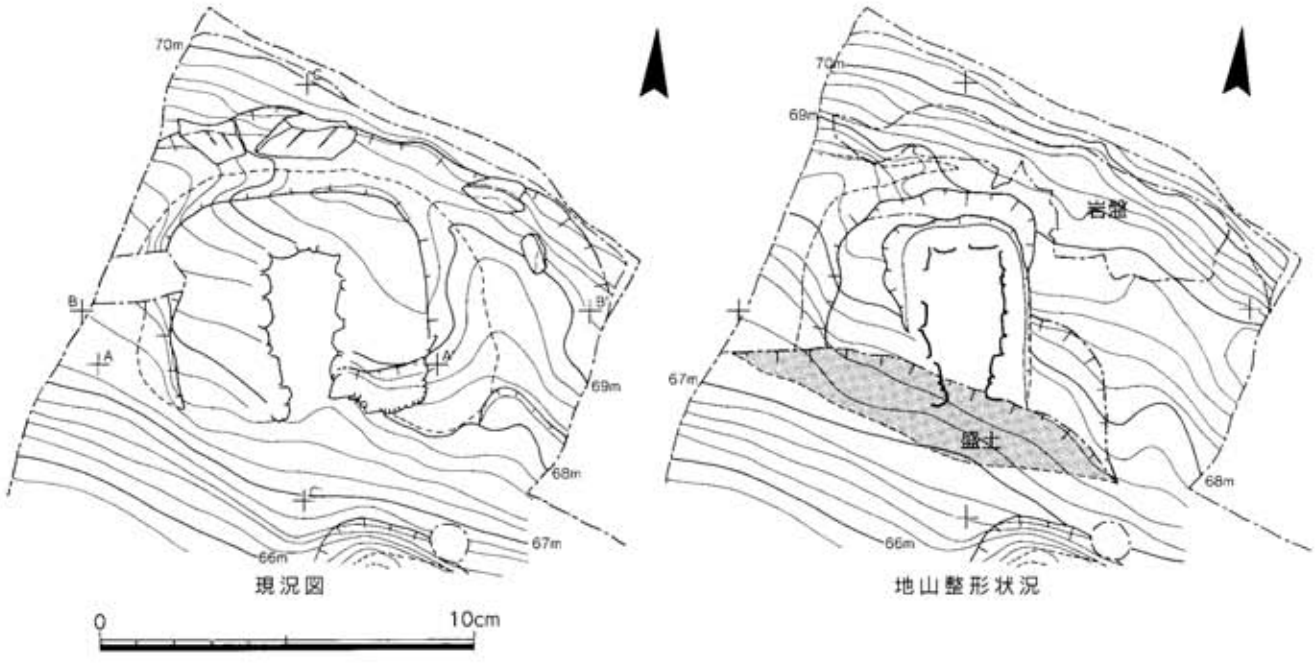
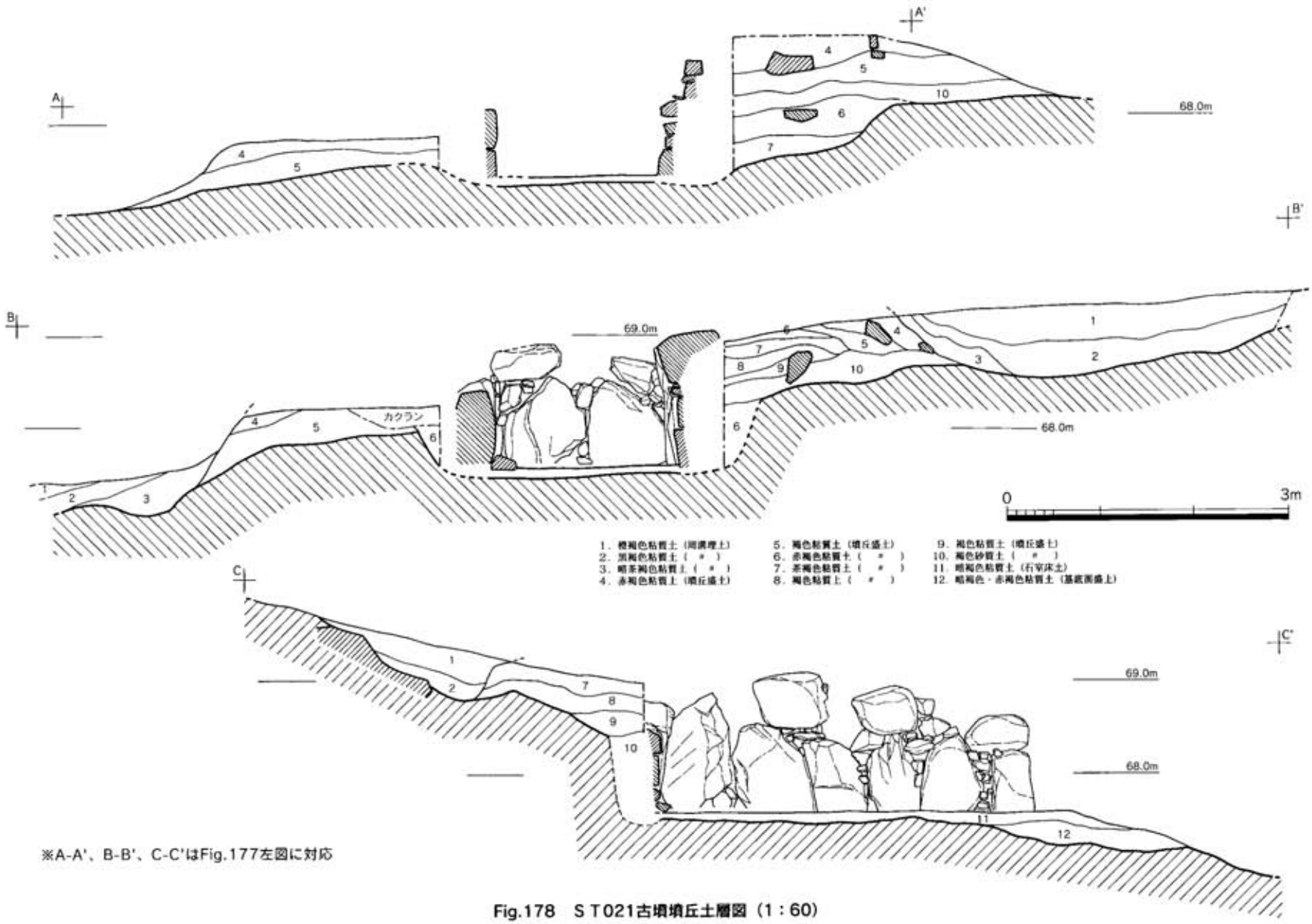


Fig.177　S T021古墳測量図（1：200）



※A-A'、B-B'、C-C'はFig.177左図に対応

Fig.178　ＳＴ021古墳墳丘土層図（1：60）

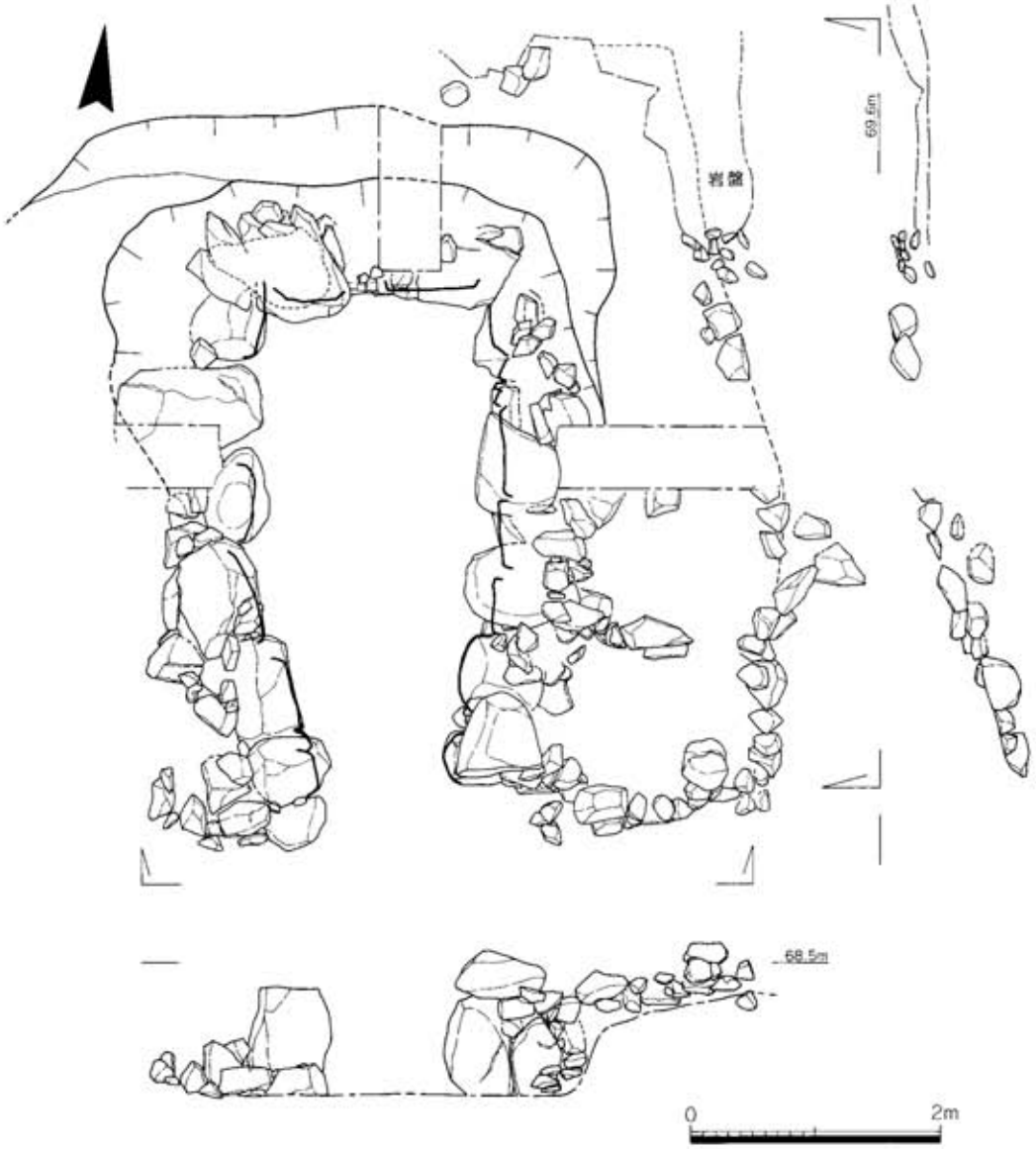


Fig.179　ＳＴ021古墳石室平面（1：60）

石室内部の左壁側では右壁側に比べてしっかりと根石が配置されている。興味深いのは斜面の方向性が北々東から南々西方向にあるのに係らず石室主軸は真南を指す点である。墳丘盛土の量は斜面の方向に直口あるいは並行にした場合が最も少なくすむと考えられ、実際に墳丘基底面の高さも東側から西側に傾斜しており、西側により多く盛土を行っている。構築技法の簡略化とは別の理由で真南への開口を指向しているのかも知れない。墳丘盛土については褐色粘質土と茶褐色粘質土・赤褐色粘質土を用いて盛土を行うが、層毎の厚さはかなり厚く水平に盛っており、石室石材が大きいこともあいまってかなりラフに盛土される。

墳丘規模の内、墳径は南北6.6m、東西9.6m、全体規模は南北8.4m、東西推定14.0m。

外表施設（Fig.179）　墳丘上部が削平されているため詳細は不明であるが、石室前面には右側玄門部から大きさ20cm～40cm程度の礫からなる石列が直線的に伸び、玄門から約2.7mの付近から直角に折れて北側に続く。北側に続く石列はコーナーから2.5m程は直線となるがそこからは内側に傾いて墳丘背面へと続いている。背面部分については、列石らしい礫は認められないが、列石から続く岩盤部分は人為的に削られて稜をなしており、これ

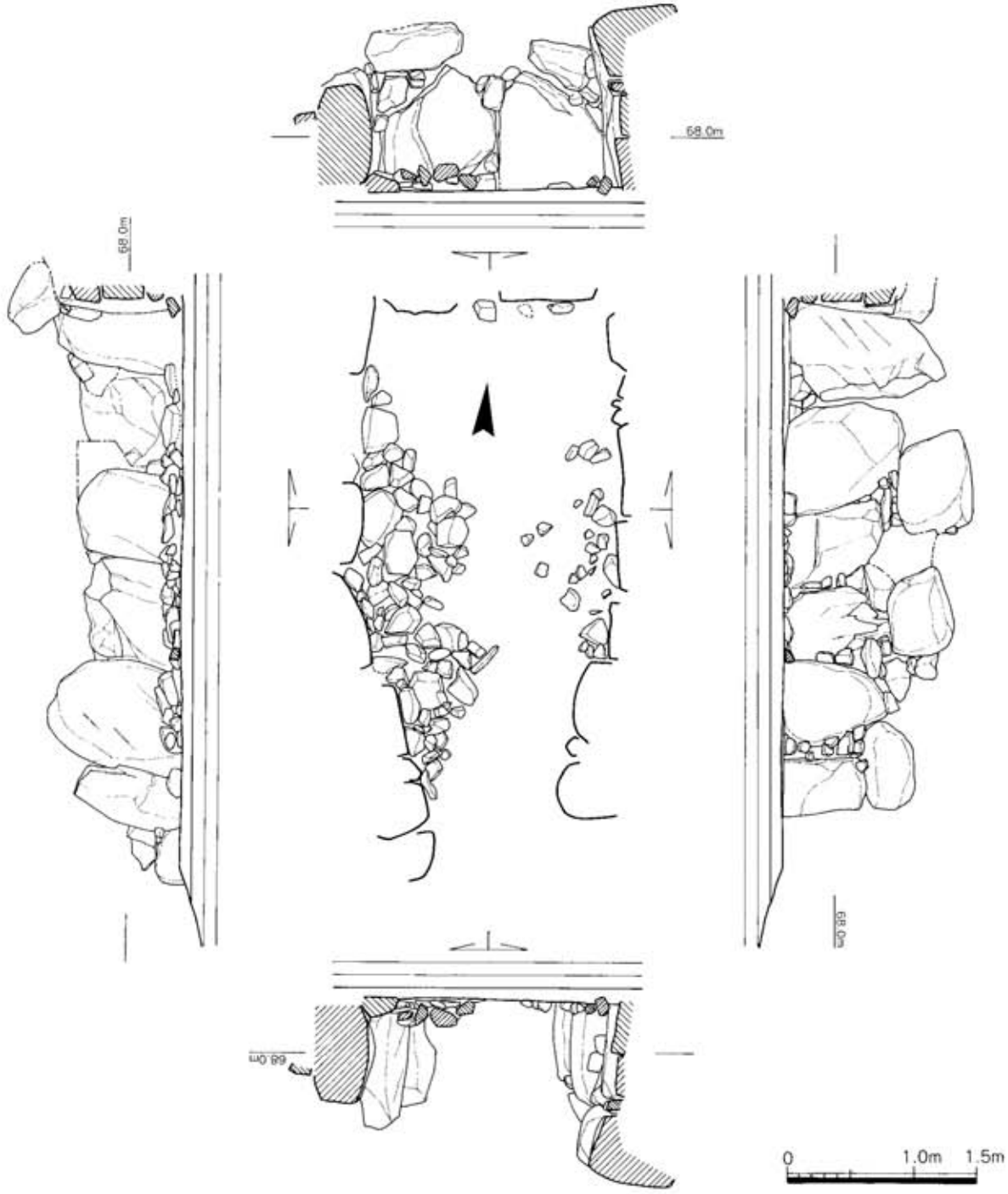


Fig.180　ＳＴ021古墳石室（1：50）

が列石に代わっているものと推定される。この石列は墳丘東側のみ遺存しており、墳丘が削平されていることもあいまって定かではない。しかし石室前面については、戦場古墳群６区のＳＴ040古墳と同様、玄門部から左右に伸びる石垣状の石積みをなしていたものと考えられ、同様に石室前面への墳丘盛土の流出を防ぐことを意図したものと推定される。

内部主体（Fig.180）　単室無袖式横穴式石室である。開口方向は南で、主軸方位はＳ－4°－Ｅである。平面形は奥壁から４個目までの腰石は直線的に伸びて長方形をなし、そこから玄門部を含めた二石分は斜めに配され、

玄門に向かってすぼまりぎみになる。石室内法は全長4.5m、奥壁幅1.8m、玄門幅1.0m、現存する最大高は1.5m。腰石は右左壁共に5枚、奥壁は2枚を配し、玄門部には腰石と同規模の石を縦位に配し立柱石とする。左壁の腰石の内、玄門から3石目の石についてはやや横幅の方が広いものの、その他の石についてはすべて縦位に用いている。石材の大きさは若干の大小の差はあるが、ほぼ同規格のものを用いており、特に奥壁については高さも幅もほぼ等しいおにぎり形の石を二石配している。壁体は右壁が3石、奥壁が2石が遺存するが腰石の2／3程度の大ぶりな石材を横位に配置して小口部分を石内に向けており、隙間に10～20cmの小礫を詰め込んで安定させている。閉塞は玄門部で行い、框石は有しない。石材はすべて花崗岩である。

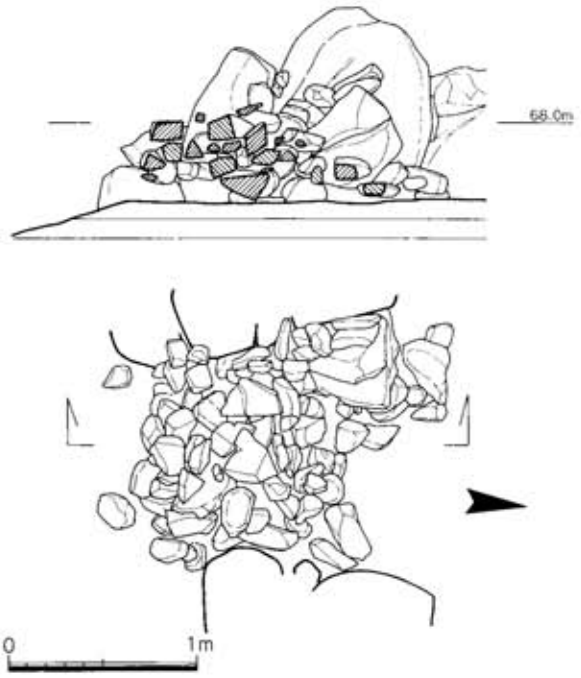


Fig.181　ST021閉塞状況（1：40）

玄室床面は撹乱を受けて敷石の配置も分からない程荒らされていたが、出土遺物として土師器杯の他、鉄釘とガラス玉が出土しており、鉄釘は5本以上が検出されている。

閉塞状況（Fig.181）　閉塞石は高さ1m程度が遺存していた。左壁体に接して大きさ50cm程度のおおぶりな石が置かれるが他は30cm未満の小礫であり、板石は用いられない。石の積み上げ方については上下で大きさを選んでいるような状況は窺えず、やや雑な積み方と言える。なお、前庭部には閉塞石の下部から続いて厚さ10cm程度の腐食質黒色土の堆積が1.5m程の範囲で確認され数点の須恵器片が出土したが、追葬の有無については観察できなかった。

ＳＴ０２１古墳出土遺物（Fig.182）　石室内、閉塞石中、前庭部、周溝内から須恵器・土師器の他、鉄製品・ガラス製品が出土している。1～5・7・10～12は須恵器。1～5・7は杯で1・4・5は杯蓋。1・4は端部にかえりを持つが天井部を失っており、つまみを持つかどうかは不明、5の端部は下方に短くつまみ出す。3・7は杯身、7は受部を持ち、立ち上がりは内傾しつつ直線的に伸びる。出土土器の中では時期的に古く位置付けられ、混入品と考えられる。3は高台部分、断面方形で外側に踏ん張りぎみの形状をなす。外底面には×字のヘラ記号が施される。10・11は甕の頸部、細くくびれた頸部から大きく広がる口縁部をなすものと思われる。10は外面カキメで胴部片部に綾杉文を、11の外面には細かい波状文を施す。10には二箇所に十字のヘラ記号が施される。12は甕の口縁部から頸部にかけて。大きく外反し、端部の断面形はほぼ長方形をなすが、角は丸みを帯びる。胴部片部には格子目タタキが残る。6・8・9・13は土師器。6は鉢、口縁部はくの字形に外反し、調整は内外器面共にナデである。8・9は杯身。いずれも緩やかに内湾し、8は外面ナデ、内面は斜め方向のハケメ、9は外面ナデ、内面はミガキを行い、斜め、あるいは斜格子状のヘラミガキを暗文風に施す。13は甕、頸部から胴肩部までの破片。くびれた頸部から口縁部は大きく外反し、胴部もかなり肩の張る形態をなす。軟質のため、外面は摩耗して調整は不明であるが、胴部内面にはタタキに伴う同心円状の当て具痕が認められる。14～20は鉄製品で釘である。いずれも頂部を平たく叩き潰して片側に直角に折るタイプのもので、頂部の数から5個体分を確認している。すべて石室内からの出土であり、敷石の間から検出されたものもあることより、古墳に直接伴うものと判断した。15・18・19に

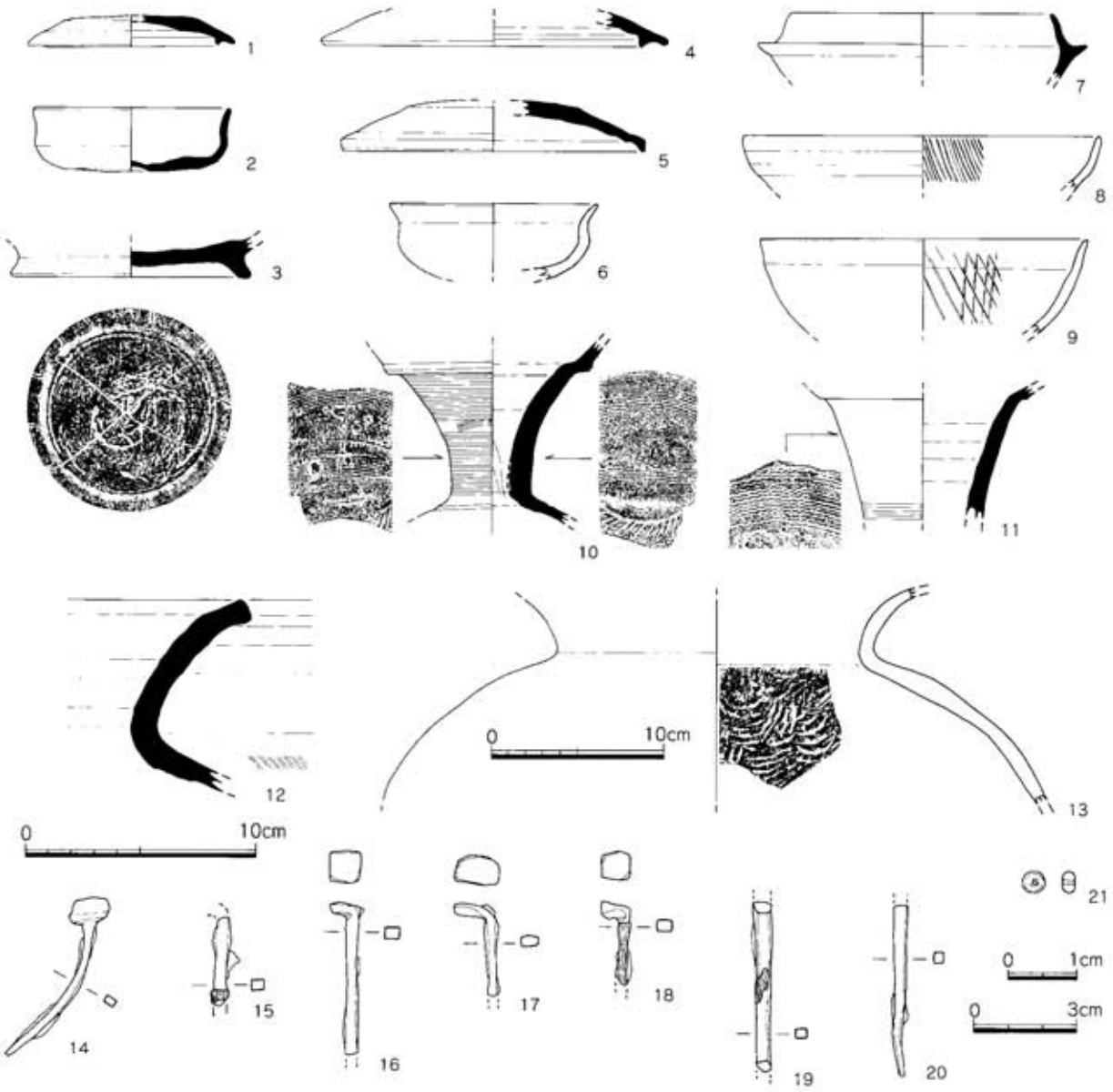


Fig.182　ＳＴ021古墳出土遺物（13は1：4、14～20は1：2、21は1：1、他は1：3）

木質が遺存しており、いずれも釘の長軸と並行に木目が観察される。21はガラス小玉。石室内からの出土であり、石室床面の早い段階で出土したため、埋土についてはすべて洗浄を行ったが、１点のみの出土であった。

ＳＴ０２２古墳（Fig.183～187）

墳丘・周溝（Fig.183・184）　ＳＴ023古墳と３m程離れて東西に並んで位置する。傾斜角18度の斜面上に立地しており、墳丘は石室天井石・及び上部壁体の一部まで削平を受け、盛土の一部が遺存している。周溝は斜面の上部にあたる北側から東西側まで半円形に巡る。南側についてはある程度削平を受けてなくなった可能性も考えられるが、遺存状況の良好なＳＴ023古墳においても周溝は山側にしか巡っておらず、谷側に向く南側についてはもともと周溝がなかったものと推定される。墳形は円墳、規模は東西方向で墳径4.5m、周溝までを含んだ全体規模は径5.5mである。地山整形は周溝の内側部分を若干掘り窪めるだけで比較的平坦にカットした後に石室掘り方を平面隅丸方形に掘り下げ、盛土は石室壁体を一段積む毎に墳裾近くから全体的に盛り上げている。

なお、東側周溝内より須恵器広口壺・杯蓋・杯身・ジョッキ形土器が据えられて状態で出土している（Fig.184）。土器の底面と周溝底面との間には７～８cm程度の厚さで埋土がみられるが掘り方等は確認されず、周溝の埋没過程の比較的早い段階で埋置されたものと推定される。土器の内、広口壺・杯身・ジョッキ形土器は口縁部を上方に向けて置かれていた他、杯蓋もまた逆さまにひっくり返しており、そのまま器として使用しているようにも見受けられる。状況としては液体を入れた壺の周囲に器を並べたといった感じであり、祭祀に伴い酒飲等の行ったのちに周溝内に埋置したものとも想定できよう。

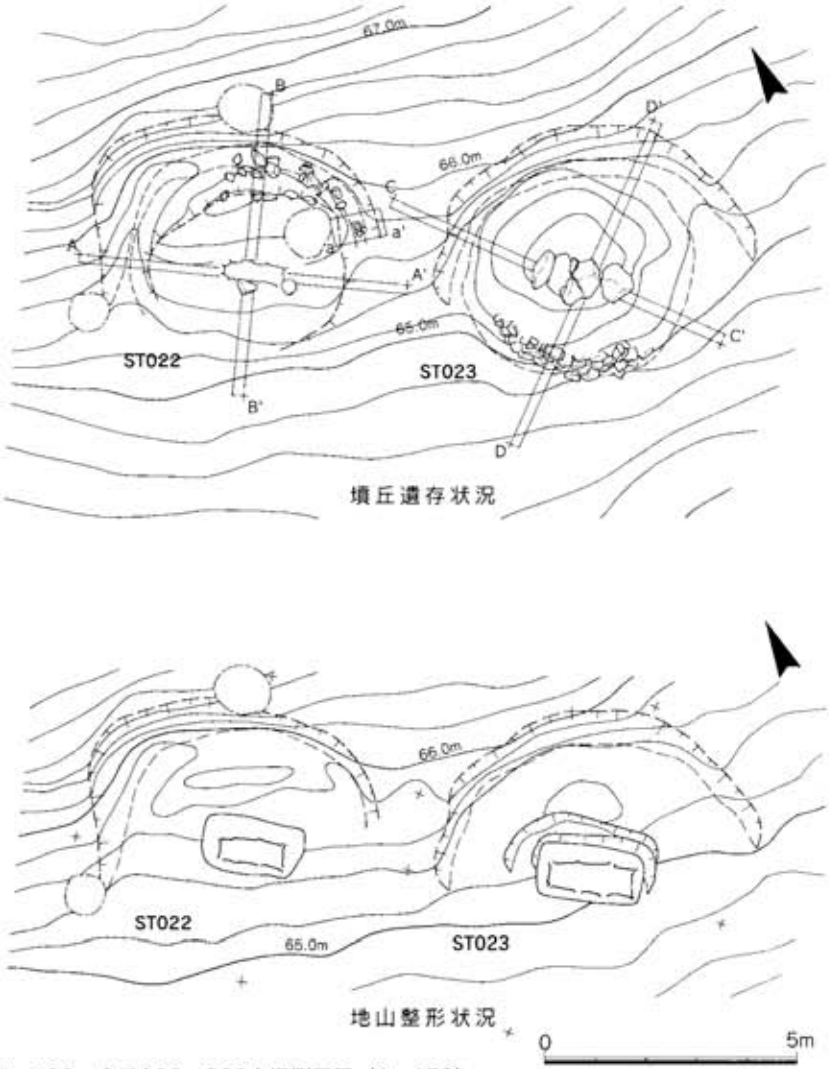


Fig.183　ＳＴ022・023古墳測量図（1：150）

外表施設（Fig.183）　削平を受けているため詳細は不明であるが、墳丘上北東側に大きさ20～30cm程度の礫が一列に巡って据えられている状況が確認された他、周溝内にも同規模の礫が落ち込んでいることから、葺石が存在していたことが窺える。葺石の形態については、遺存状況から墳裾まで巡るものではなく、地山整形段階の周溝内側上端部分に配置されることから、封土の流出を防ぐ意図もあったものと推定される。

内部主体（Fig.186）　内部主体は石棺系竪穴式石室で天井石及び上部壁体の一部を失う。主軸方位はＮ－58°－ｗ、内法は長軸1.2ｍ、東側小口幅0.44ｍ、西側小口幅0.36ｍと、平面形は片側小口幅の広い長台形をなす。床面から残存部分までの高さは約0.8ｍ。壁体は最下段に各壁共に略長方形の石材を横位に立てて石棺状に組み、その上に20～30cm程の礫を横位に並べて積み上げている。壁体の礫は大きさ・形状は不揃いではあるが、積み上げるのに適するように、両面に割合平坦な面を持つものが選択的に用いられているが、石材によって長辺あるいは小口部

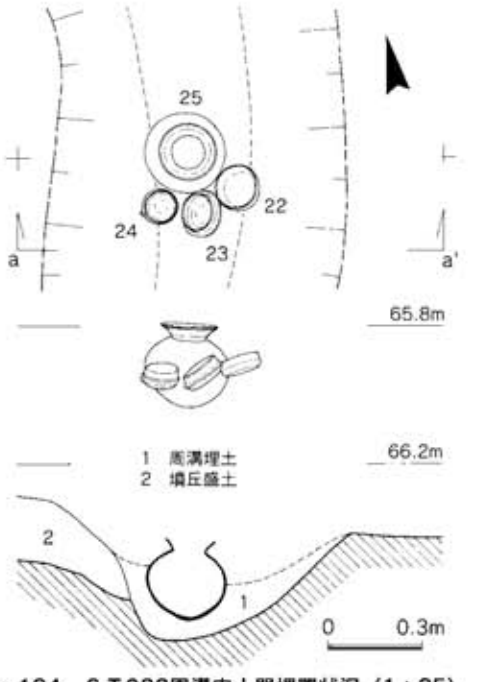


Fig.184　ＳＴ022周溝内土器埋置状況（1：25）

分を壁体としており、その積み上げ方は一定ではなく、また控え積みも行わない。遺存状況が良好な北側壁体で4段、南側壁体で3段が残っており、一段毎に水平に目地が通っていることより、各壁を同時に一段ずつ積み上げて盛土を行うといった工程を繰り返すことによって石室を構築しているものと観察される。石材はすべて花崗岩である。

石室床面に敷石は配置せず、床面についても撹乱された様子もなく、盗掘等は受けていないようであるが、内部からの出土遺物は皆無であった。

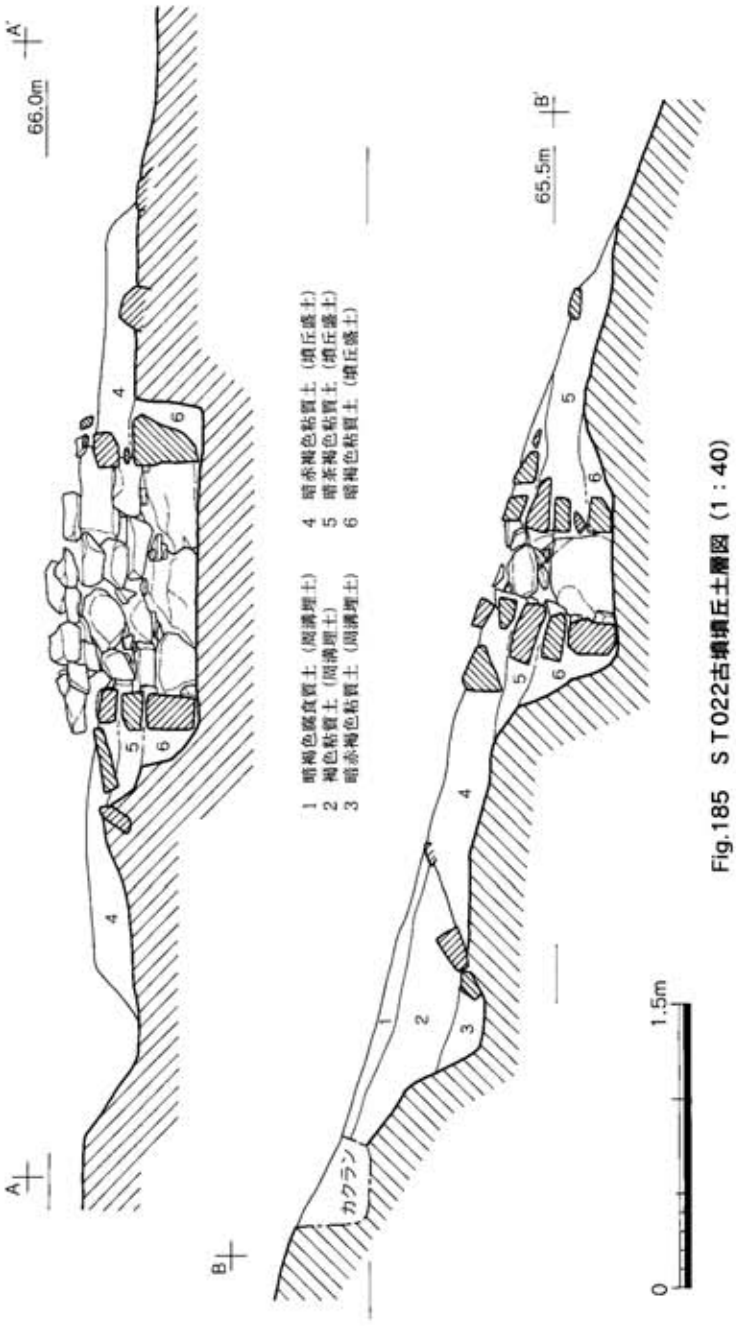


Fig.185　ST022古墳墳丘土層図（1：40）

ＳＴ０２２古墳出土遺物（Fig.187）

須恵器9個体・土師器2個体の他、縄文土器の底部片が出土している。このうち、22～25は周溝内一括出土の供献土器であり、26～33は周溝内埋土上部からの出土である。22～27・30・32・33は須恵器。22・23は杯蓋・杯身のセットであり、22は平坦な天井部をなし、天井部と体部の境に鋭い稜を持ち、体部から口縁部にかけては直線的に伸びて口縁端部は外方に鋭くつまみ出す。天井部外面は丁寧な回転ヘラ削りを施す。口径12.0cm。23は立ち上がりがやや外反しつつ内傾し、端部には平坦面を持つ。立ち上がりの高さ1.8cm、底部外面も1と同様、丁寧な回転ヘラ削りを施しており、ヘラで一条の線が引かれているがヘラ記号であるかどうかは定かではない。24はいわゆるジョッキ形土器。やや凹面をなす底部から丸みを持った体部に続き、口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。胴部に一条、口縁部と体部との境に二条の突帯を持ち、その間には櫛描波状文を巡らす。体部には断面楕円形の粘土紐を曲げた把手が一つ付けられる。25は広口壺。口縁部は大きく外反し、細くくびれた頸部と肩部の大きく張る胴部をなす。底部はほぼ丸底である。口縁端部外面には断面三角形の突帯を一条持ち、頸部には櫛描波状文を二段に巡らす。胴部外面には全面にタタキ目が残し、胴下半部と上半部の接合部付近はタタキの後、ナデを施す。胴部内面には当て具痕は認められず、丁寧にナデ消されている。なお、胴部肩部付近には全周の約2／3に緑色の自然釉が癒着している。

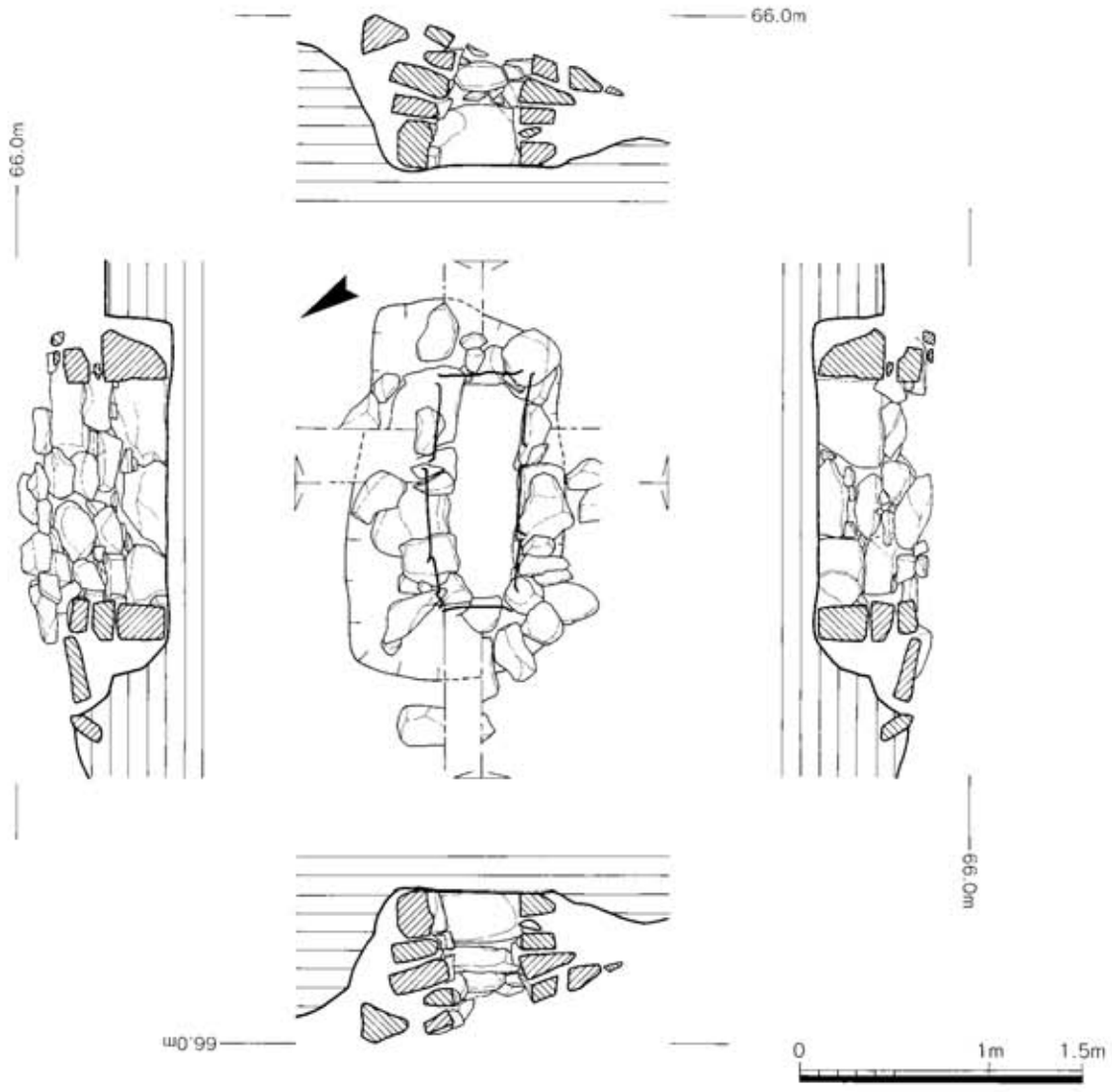


Fig.186　ＳＴ022古墳石室（1：40）

26～33は周溝上面からの出土であり、古墳築造時期とは齟齬が見られるため、ＳＴ021、あるいは北側斜面上にあって既に破壊された古墳等からの流れ込みと考えられる。26・27・30・32・33は須恵器。26は杯蓋、天井部は丸みを帯び、口縁部のみ真っすぐ下方に伸びる。天井部外面は全周の約３／５をヘラ切り離し後、ナデを行っている。27は杯身で立ち上がりは短く外反しつつ内傾し、底部外面は26と同様、ヘラ切り離し後、ナデを行う。30・33は長頸壺で同一個体と思われる。30は頸部から緩やかに外反して口縁端部は僅かに外方に折れ曲げる。33は大きく膨らむ胴部に外方に開く高い高台を持つもので、胴下半部と高台部との接合部付近にカキメを施す。32は甕。頸部から口縁部にかけてやや外反し、端部は上下でつまみ出して断面三角形に肥厚させる。胴部は外面にタタキメ、内面に当て具痕が残る。28・29は土師器。7はかえりを持つ杯蓋で、口縁部の立ち上がりはかえり部分より僅かに下方へ伸びる。天井部外面はヘラ切り離し後、ナデを行う。29は高杯の脚部。くびれ部分から大きく広がり、接地部分ではほぼ平坦面をなし、僅かに内湾する。31は縄文土器。平底の底部小片であり、文様等は見られないが、胎土等は包含層出土の阿高式土器に類似し、平底である点からも本例についてもほぼ同類のものかと思われる。

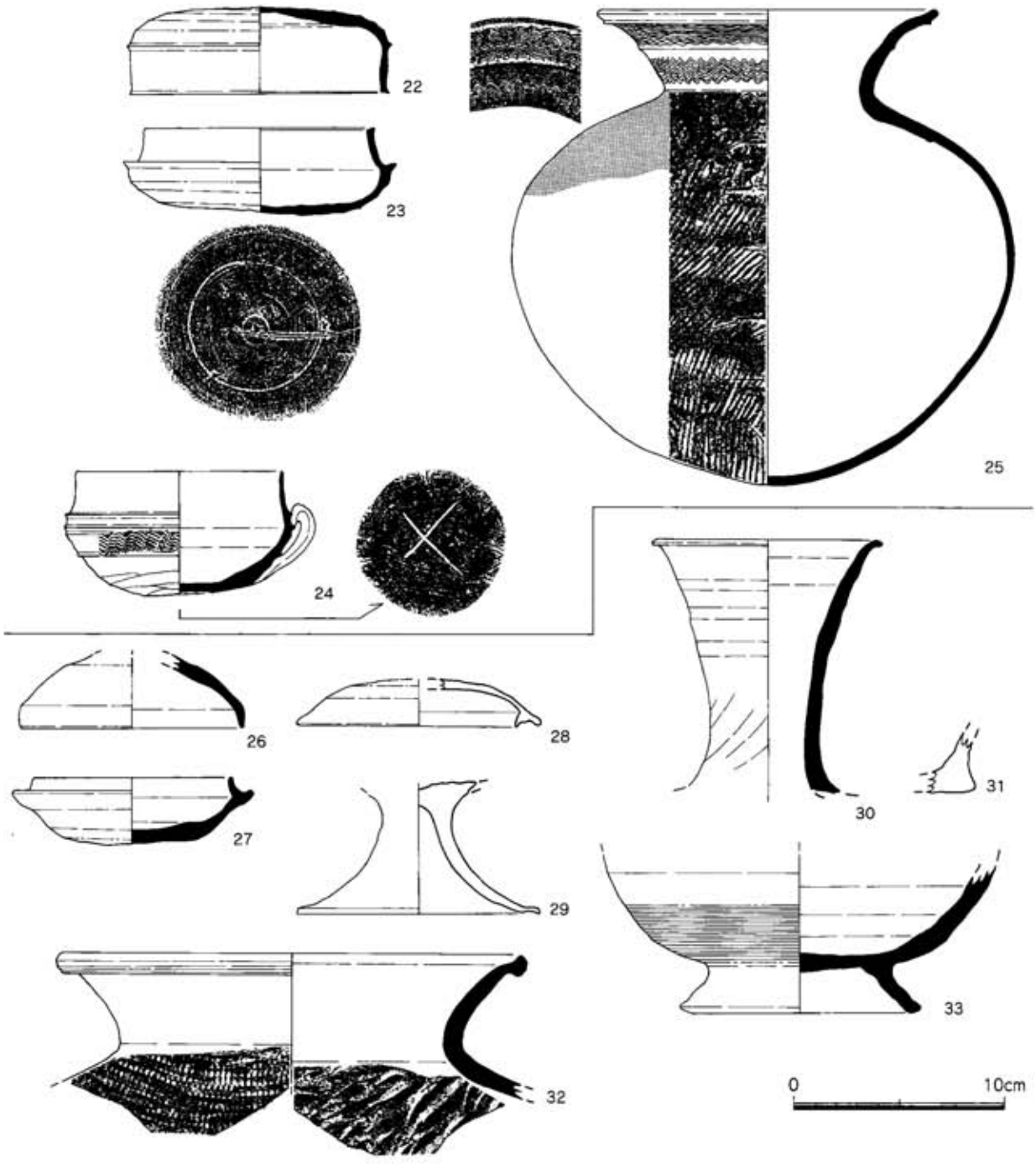


Fig.187　ＳＴ022古墳出土遺物（22～25は周溝内埋置土器、1：3）

ＳＴ０２３古墳（Fig.184・188～190）

墳丘・周溝（Fig.184・188）　ＳＴ022古墳とほぼ同規模の小墳であり、傾斜角８度の緩斜面に共に東西に並んで位置する。本墳は検出時には石室天井石と葺石の一部を検出したことにより古墳の存在を確認し得たもので、土層図に見るように墳丘全体が流土によって覆われていた。谷部斜面に面していることから、築造後かなり早い段階で埋没してしまったものと推定され、天井石を含む石室・葺石等がほぼ築造当時の姿で遺存していた貴重な例と言える。墳形はほぼ整美な円形をなし、周溝もＳＴ022古墳と同様、斜面の尾根側に墳丘に沿って半月形の周

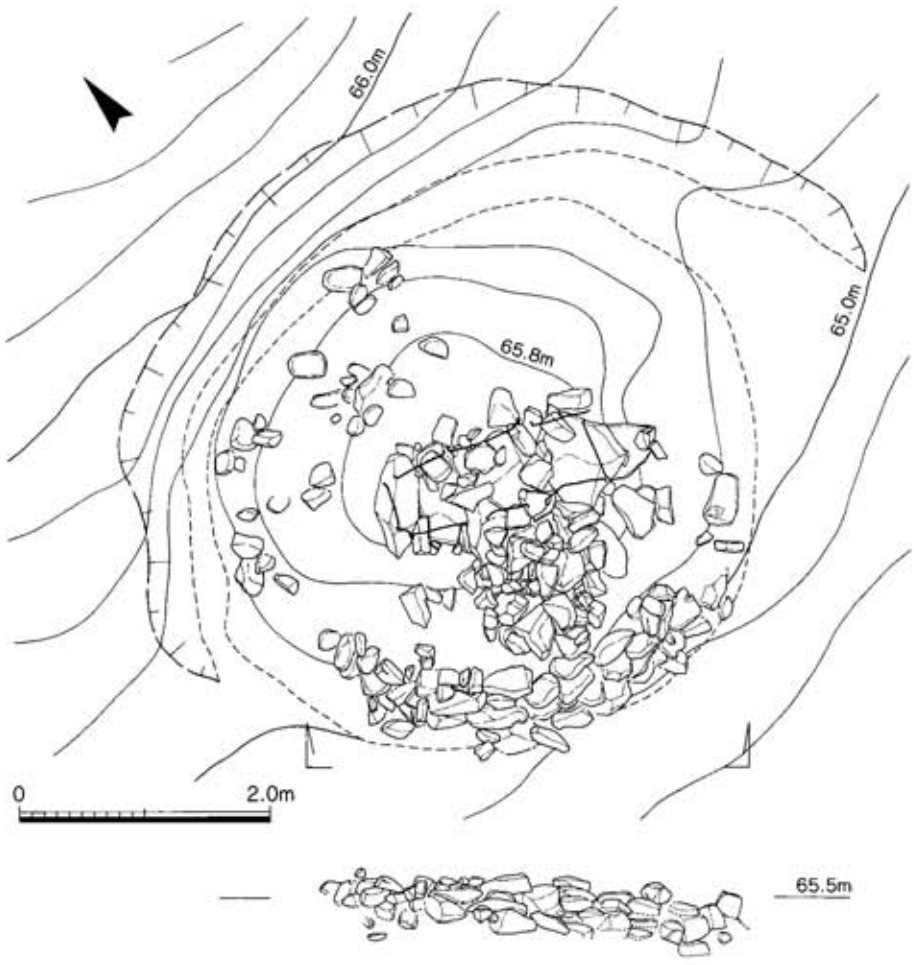


Fig.188　ＳＴ023古墳葺石検出状況（1：60）

溝が巡る。墳径は約4.5m、周溝を含む全体規模は約6.3m、基底面から墳頂までの高さは約0.8mである。

地山整形は周溝内側の肩を一部残して平坦面を造り出した後に、中央部に隅丸長方形の石室掘り方を掘削するところまではＳＴ022と類似するが、掘り方北西側は部分的に狭いテラスを造り出し、二段に掘り窪めている。墳丘の盛土技法はＳＴ022とほぼ同様であり、石室壁体の石材を一段あるいは二段積む毎に平坦面を作りながら水平に盛土を行い、天井石架構後にさらにもう一枚封土を被せている。盛土は当該期の地山であるⅤ層・Ⅵ層の土を用いているが、いずれも同程度にやや粘性を帯びた土であり、土質によって選択的に盛土した様子は顕著には見受けられない。

外表施設（Fig.190）　墳丘上の南側、全周のほぼ１／３弱の範囲の葺石が遺存する。葺石は大きさ30～50cm程度の横長の礫を横位に積んで行くもので、遺存状態が良好な部分では上下４段に積まれている。この葺石は盛土と同時に配置されていったものであり、谷部側のみに残ることからも土留めの目的が大きかったものと考えられる。墳丘斜面その他の部分にも同様の石材が散在し、一部列状になるものも認められるが遺存状態は悪く、その一方で周溝内に落ち込んだ石材も多量なものではなく、列石状の石積みは巡っていたとしても墳丘南側と同様の葺石が全周していた可能性は低いものと思われる。この他、検出時には南側葺石と石室天井石との間に30～40個程度の礫からなる集石がみられた。位置的に別の主体部が存在も予想され、その天井石かとも思われたが、集石下部には何ら遺構は認められず、石室天井石を架構後、積石塚状に天井石を礫によって覆ったものかと推定される。

内部主体（Fig.192）　ＳＴ022古墳と同様の石棺系竪穴式石室である。平面形も同じく東側の小口幅が西側の小

口幅より広い長台形をなしており、主軸方位はN－58°－W、石室床面での内法は長軸1.6m、東側小口幅0.48m、西側小口幅0.36mとＳＴ022古墳に比べてより規模が大きい。壁体構成は最下段に石材を側壁３個、小口部１個ずつを横位に立てて石棺状に組み、その上により小振りで上下に平坦面を持つ横長の石材を横位に配置し、長辺あるいは小口部分を壁体とする。各壁共に４段を積み上げるが、３・４段目には基底部の石よりかなり小さな礫を用いている。北東壁側の裏込めには一部控え積み状の石積みがみられるが、顕著なものではない。各壁はほぼ垂直に立ち上がり４枚の天井石を架構する。天井石はいずれも長さ0.8m、幅0.6mの大型のもので、厚みも0.4～0.6mとかなりぶ厚く重い石材を用いている。天井石除去の際、一個につき大人３～４人でやっと動かせるものであり、重量によって壁体を安定させるためにそれだけの重さを必要としたのであろう。石材はすべて花崗岩である。石室内部には天井石の隙間から流入した土砂によって天井近くまで埋土に覆われており、未盗掘ということもあって副装品の存在も予想されたが、内部からの出土遺物は皆無であった。石室床面には敷石等は見られなかった。

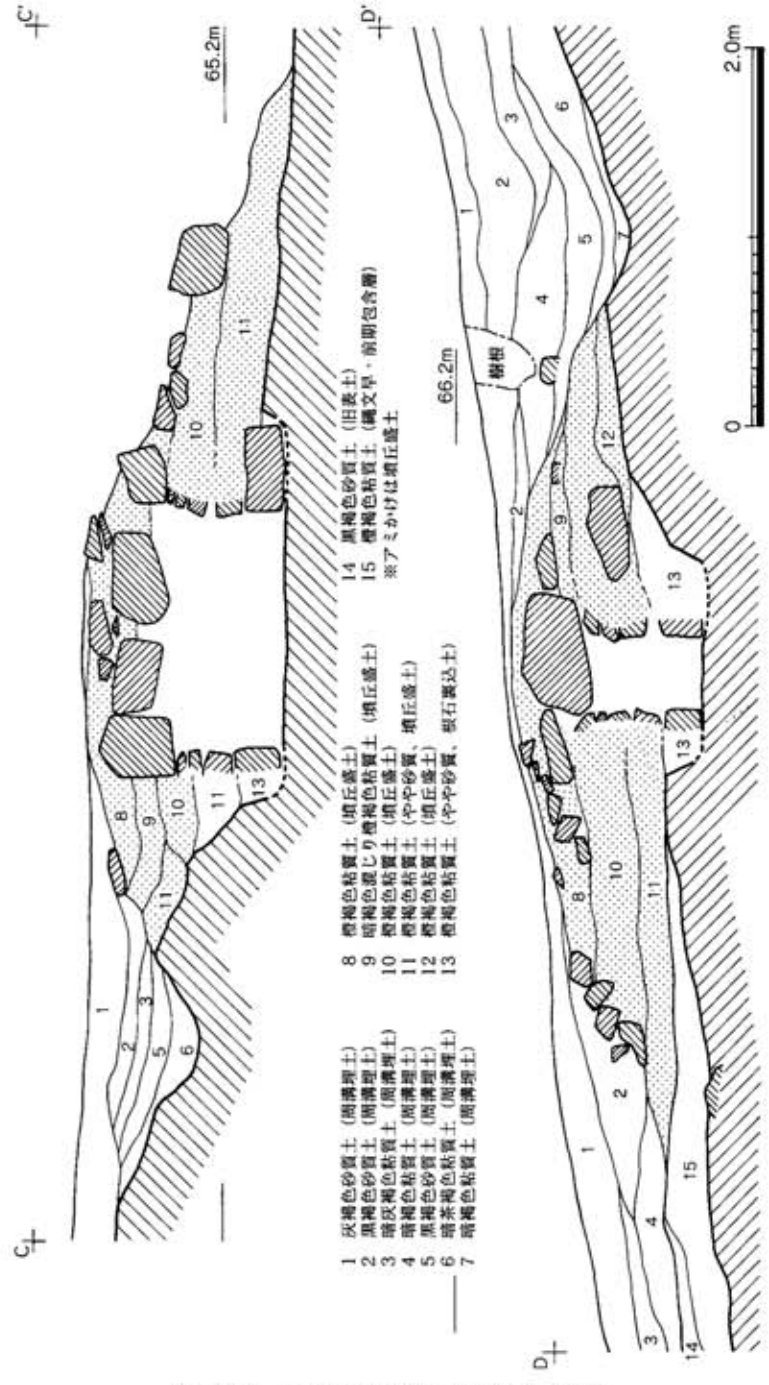


Fig.189　ＳＴ023古墳墳丘土層図（1：40）

出土遺物　本墳からの出土遺物はない。

４．その他の遺物（Fig.191）

その他、検出面及びＳＴ023古墳南側の遺物包含層より若干量の遺物が出土している。

34～37は縄文土器。34は口縁部片で外面及び口縁部内面、口縁部に沈線文を施すもの。器壁は薄いが硬質で胎土中にカクセン石等の鉱物を多量に含む。いわゆる縄文時代前期の轟Ｂ式土器である。35も口縁部片でやや内湾

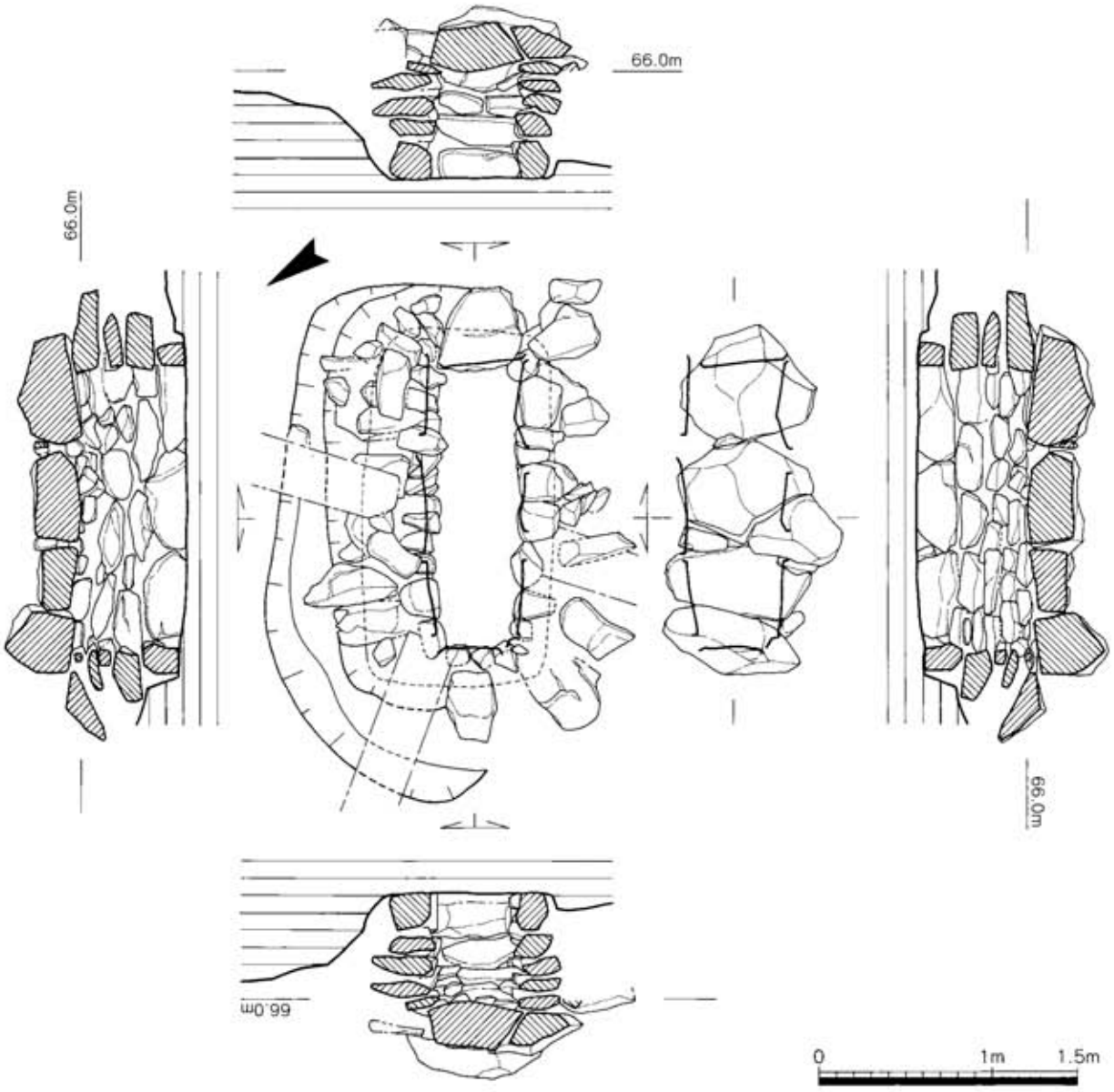


Fig.190　ＳＴ023古墳石室（1：40）

する。口縁端部は水平にならず、山形になるものかも知れない。摩耗が著しいが外面に波状になって横位に伸びる凹線文を持ち、縄文時代中期の阿高系土器と考えられる。36・37は縄文時代早期の押型文土器の胴部片である。いずれも内面はナデ、外面には平面菱形に近い楕円文を縦位に施す。胎土中に金雲母の微細片を多く混入する。

38は弥生土器の壺の底部片。底部のみのため全形は窺えないが、立地から考えても戦場古墳群１区で検出されたような弥生時代前期の壺棺と思われる。底面は平底で粘土板を貼り付けて厚みを持たせ、大きく膨らむ胴部に続く。ＳＴ021古墳の南側斜面からの出土である。

39は磨製石斧。両刃で基部を欠損する。刃部は刃こぼれもなく遺存状態は良好であり、使用中に基部が折れたために廃棄したものか。

5．結　語

浦田古墳群２区における調査の概要を以下にまとめる。

ＳＸ024・025は縄文時代の集石遺構であり、ＳＸ024に近接して阿高系土器が出土している点、あるいは下層から押型文土器・轟Ｂ式土器といった縄文早期から前期の遺物が出土していることから、縄文中期に位置付けられる。脊振山南麓における当該期の様相については、阿高系土器が遺跡毎に数点検出される程度で早・前期にくらべてほとんど詳細不明であり、本調査区における集石遺構の存在は貴重な例と言える。しかし、出土した遺物量の少なさから考えると一次的なキャンプ地といった印象が強く、本格的なベースキャンプ的遺跡についてはまた別の場所に立地していたものと推定される。

古墳は３基確認されており、ＳＴ022・023は石棺系竪穴式石室、ＳＴ021は無袖型横穴式石室である。時期的には、ＳＴ022古墳の周溝内供献土器が陶邑編年におけるＴＫ208並行期に位置付けられることから５世紀後半と考えられる。またＳＴ023古墳についてもＳＴ022古墳と石室構造が類似しており、石室主軸を同じくして東西に並列していることから相互の関連性が強く感じられ、ほぼ同時期の築造と思われる。この場合、ＳＴ022の石室規模よりＳＴ023の方が内法にして0.3m程長く、墳径もより大きい点を踏まえても、ＳＴ023古墳により優位性が看取される。加えて壁体の石積みについても、ＳＴ023古墳の方がより丁寧であるのに対し、ＳＴ022は石材の選択にバラつきがあり、より簡略化されたものと捉らえられる。これらのことから、ＳＴ022・023は５世紀後半のうちに相次いで築造されたもので、築造順序としてはＳＴ023→ＳＴ022と考えられる。

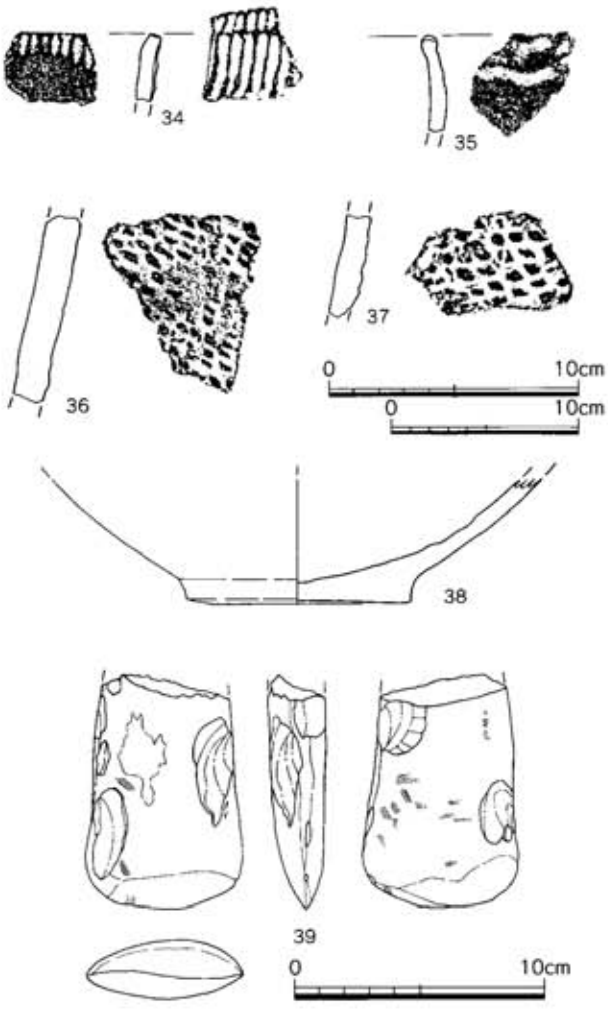


Fig.191　その他の出土遺物（38は1：4、他は1：3）

ＳＴ021古墳については石室形態及び石室内部からの出土遺物（Fig.184－１・２・４）から７世紀中頃の築造と考えられる。石室形態としては無袖、無羨道といった緒特徴は戦場古墳群６区ＳＴ040古墳、あるいは横断道関係調査における寺ヶ里遺跡ＳＴ001古墳と類似している。特にいずれも石室前面の両側に石垣状の石積みを構築しており、この技法が石室形態と密接に関わっていることが窺い知れる。

なお、３基の古墳は５世紀後半、７世紀中頃と150年近くのタイムスパンを持っており、特にＳＴ022古墳の周溝上面近くから７世紀前半の須恵器が出土している点から、ＳＴ021古墳が築造された頃には下方に位置する２基は古墳と認識できないぐらい周溝がほとんど埋没していたものと推定され、３者の有機的な結び付きについてすぐには理解しにくい部分もあるが、同一の分布状況は戦場古墳群３区の３基の古墳についても窺え、空白期には墓域の移動あるいは築造の中止といった経緯を経て、７世紀も中頃以降になって再度、先祖の墓地に古墳を築

いたものと考えられる。特に３基の古墳の存続時期とは時期的に異なる６世紀後半（Fig.184－７）あるいは７世紀前半（Fig.189－26・27）の須恵器を採集していることからも、北側の尾根頂部に当該期の古墳が存在していた可能性は十分想定できよう。

Tab.26　浦田古墳群２区土器一覧表

Fig. 図番号	PL. 番号	県遺物登録番号	出土地点	種別	器種	法量 (cm) 口径	器高	底径	胎土 ※混入物	色調	文様・調整 外器面	内器面
182-1		97002992	ＳＴ021，前庭部	須恵器	杯　蓋	(7.5)	1.4	—	砂粒少量	暗灰色	ロクロナデ	ロクロナデ
2		97002910	ＳＴ021，玄室	〃	杯　身	(8.4)	2.8	—	砂粒少量、雲母含む	灰色	ロクロナデ、底部切り離し後ナデ	ナデ
3		97002912	ＳＴ021，周溝４区	〃	〃	—	(1.8)	(10.2)	小石・砂粒少量	灰色	底部ヘラ切り離し後ナデ	ヘラナデ
4		97002914	ＳＴ021，前庭部	〃	〃	(12.6)	(1.6)	—	砂粒少量、雲母含む	灰色	ロクロナデ	ロクロナデ
5		97002917	ＳＴ021，前庭部	〃	杯　蓋	(13.0)	(2.3)	—	小石・砂粒少量	褐灰色	天井部ヘラケズリ、ほかナデ	ナデ
6		97002918	ＳＴ021，閉塞石中	土師器	鉢	(8.9)	(3.3)	—	小石・砂粒少量	橙色	不明	不明
7		97002913	ＳＴ021，前庭部	〃	杯	(11.2)	(2.8)	—	砂粒少量	灰色	ロクロナデ	ロクロナデ
8		97002909	ＳＴ021，玄室床面	〃	杯？	(11.0)	(2.2)	—	砂粒少量、雲母含む	橙色	ヨコナデ、ナデ	斜格子の暗文有り
9		97002915	ＳＴ021，玄室	〃	杯	(14.2)	(4.1)	—	砂粒少量、雲母含む	橙色	ナデ	斜格子の暗文有り
10		97002919	ＳＴ021，周１区下層	須恵器	甕	—	(7.9)	—	砂粒多量	暗灰色	カキメ	シボリ痕
11		97002920	ＳＴ021，周溝２区	〃	〃	—	(5.8)	—	砂粒少量	暗灰色	ロクロナデ、カキメ	ロクロナデ
12		97002911	ＳＴ021，周溝３区	〃	壺	—	(8.4)	—	小石・砂粒少量	灰色	ロクロナデ、タタキ	当て具痕
13		97002907	ＳＴ021，周１区下層	土師器	甕	—	(12.2)	—	細砂粒、雲母	灰橙色	タタキ	当て具痕
187-22	65-2	97002439	ＳＴ022，周２区一括	須恵器	杯　蓋	11.2	4.1	—	砂粒わずか	灰色	天井部ヘラケズリ、ほかロクロナデ	ロクロナデ
23	65-3	97002440	ＳＴ022，周２区一括		杯　身	10.0	4.2	—	砂粒わずか	灰色	ロクロナデ	底部ヘラケズリ
24	65-4	97002441	ＳＴ022，周２区一括		ジョッキ形	9.7	5.9	—	小石・砂粒少量	暗灰色	底部ヘラ切り離し後ナデ、波状文	ロクロナデ
25	65-1	97002442	ＳＴ022，周２区一括		広口壺	15.7	22.4	—	砂粒、細砂粒	暗灰色	タタキ後カキメ、波状文、自然釉	ロクロナデ、ナデ
26		97002902	ＳＴ022，北側検出面		杯　蓋	(9.7)	(3.5)		砂粒多量	灰色	ロクロナデ	ロクロナデ
27	66-1	97002903	ＳＴ022，周溝２区		杯　身	(9.2)	3.2		砂粒わずか	灰色	底部ヘラ切り離し後ナデ	ロクロナデ
28		97002904	ＳＴ022，周溝２区	土師器	杯　蓋	(9.0)	(2.3)		砂粒少量	橙色	天井部ヘラケズリ、ほかナデ	ロクロナデ
29		97002900	ＳＴ022，周溝上層		高　杯		(5.9)		砂粒少量、雲母わずか	黄橙色	不明	不明
30	66-30	97002899	ＳＴ022，周２区上部	須恵器	長頸壺	(10.3)	(12.0)		砂粒少量	灰色	ロクロナデ、シボリ痕	ロクロナデ
31		97002906	ＳＴ022，周２区上部	縄文土器	深　鉢		(2.9)		砂粒・雲母少量、凝石片	橙色	ナデ？	ナデ
32		97002901	ＳＴ022，周３区上部	須恵器	甕	(21.5)	(6.8)		小石少量	暗灰色	タタキ、ロクロナデ	当て具痕
33	66-2	97002905	ＳＴ022，周溝２区		壺		(7.5)	(10.2)	砂粒少量	茶褐色	ロクロナデ、カキメ	ロクロナデ
191-34	66-5	98001231	遺物包含層 Ⅳ層	縄文土器	深　鉢		(2.6)		細砂粒・金雲母多く含む	茶褐色	沈線文	沈線文・ナデ
35	66-5	98001234	遺物包含層 Ⅳ層	縄文土器	深　鉢		(3.7)		砂粒多量	茶褐色	凹線文	ナデ
36	66-6	98001232	遺物包含層 Ⅴ層	縄文土器	深　鉢		(7.4)		細砂粒、カクセン石	橙褐色	楕円押型文斜走	ナデ
37	66-6	98001233	遺物包含層 Ⅴ層	縄文土器	深　鉢		(4.0)		細砂粒多量	橙褐色	楕円押型文斜走	ナデ
38		97002921	遺物包含層	弥生土器	壺		(6.6)	(11.9)	砂粒・小石多量	黄橙色	不明	不明

Tab.27　浦田古墳群２区鉄製品・ガラス製品一覧表

Fig. 図番号	PL. 番号	県遺物登録番号	出土地点	種別	器種	分類・部位	法量 (cm) 長さ	幅	厚さ	備考
182-14	66-4	98001227	ＳＴ021石室内	鉄　釘	—	—	5.7	1.1		
15	66-4	98001230	ＳＴ021石室内	〃	—	—	(2.6)	(0.4)		
16	66-4	98001226	ＳＴ021石室内	〃	—	—	(4.3)	0.9		
17	66-4	98001224	ＳＴ021石室内	〃	—	—	(2.6)	1.3		
18	66-4	98001228	ＳＴ021石室内	〃	—	—	(2.4)	0.8		木質残存
19	66-4	98001225	ＳＴ021石室内	〃	—	—	(4.9)	0.5		木質残存
20	66-4	98001229	ＳＴ021石室内	〃	—	—	(4.9)	(0.4)		
21	66-4	98001231	ＳＴ021石室内	ガラス小玉			径0.35			色調 藍色
191-39	66-5	98001223	ＳＴ023周溝４区	磨製石斧			(9.2)	6.2	2.2	

Ⅸ．寺ヶ里遺跡２区の遺構と遺物

１．遺跡の概要（Fig.192）

寺ヶ里遺跡は開発対象区の南東隅、白京溜池の北岸にあたり、浦田古墳群１区の立地する丘陵から続く南東側緩斜面にあたる。調査区の南南西70mには九州横断自動車道建設に伴い昭和56年度に発掘調査が行われた寺ヶ里遺跡（１区）[1]が、また池を挟んで東側の対岸には約60m離れて浦田遺跡２区が、南東80mの地点には同じく横断道建設に伴い調査された浦田遺跡（１区）[2]が位置している。寺ヶ里遺跡の調査では７世紀後半の円墳１基が確認され、また浦田遺跡においては古墳時代の竪穴住居・掘立柱建物33棟、平安時代前期の竪穴住居８棟が確認されたことにより、佐賀県下において当該期の一般集落を広範囲に調査した例として重要視されている。

対象地は工業団地内への侵入路建設に伴う白京溜池の拡張のため、丘陵裾部の約2,000㎡が掘削を受けることに先立ち、平成８年６月に確認調査が行われた。周辺部の遺跡の状況から、対象地についても遺構の存在が予想されたが、確認調査の結果、特に南東側1,000㎡程の範囲において旧地形上に溜池を浚渫した土砂が厚さ3.0m近

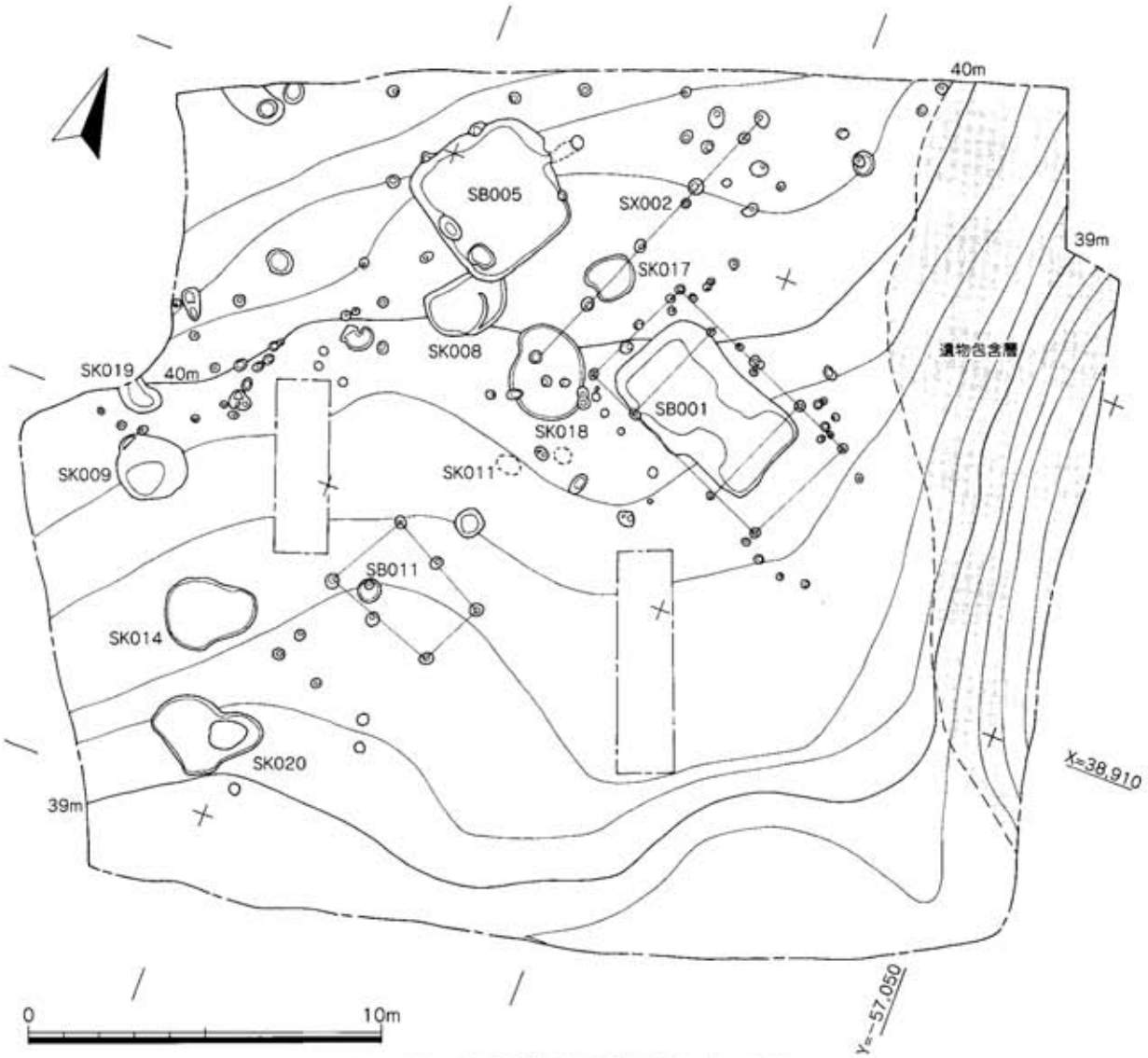


Fig.192　寺ケ里遺跡２区遺構配置図（１：200）

Tab.28　寺ケ里遺跡２区遺構一覧表

遺構番号	種　別	形　態　及び　特　徴	規模(長さ×幅×深さ):m	主軸方位	出土遺物	時代・時期
SB001	掘立柱建物	長方形土壌を4間×1間の掘立柱建物で囲む	6.4×3.4	N－85°－W	土師器皿、土鍋、青磁碗	鎌倉時代
SX002	柵列状遺構	柱穴７個が直線的に並ぶ	全長9.2	N－20°－E	なし	鎌倉時代
SB005	住居跡	隅丸方形、煙道付きカマドを持つ	3.2×3.0×0.6	N－38°－E	土師器(杯・皿・蓋・甕)、鉄製刀子	平安初頭（9C前半）
SB011	掘立柱建物	２間×１間	3.4×2.5	N－60°－W	なし	鎌倉時代
SK008	土壌	楕円形	長軸2.4、短軸1.6、深さ0.25	N－40°－E	夜臼式土器（甕）、石器（叩き石）	縄文晩期末
SK009	土壌	円形	径2.0、深さ0.5	—	夜臼式土器（甕・壺・高杯）	縄文晩期末
SX011	不明遺構	掘り込みなし	—	—	夜臼式土器（甕）	縄文晩期末
SK014	土壌	歪な長楕円形	長軸2.5、短軸2.1、深さ0.1	N－63°－E	夜臼式土器（甕・高杯）	縄文晩期末
SK017	土壌	不整形	長軸2.5、短軸2.3、深さ0.2	N－35°－E	夜臼式土器（甕・壺・高杯）	縄文晩期末
SK018	土壌	歪な楕円形	長軸3.2、短軸2.2、深さ0.2	N－30°－W	なし	縄文晩期末
SK019	土壌	不整形	長軸1.7、短軸1.5、深さ0.15	N－57°－W	夜臼式土器（甕・高杯）	縄文晩期末
SK020	土壌	不整形	長軸3.2、短軸2.2、深さ0.2	N－75°－E	夜臼式土器（甕）、石器（刃器）	縄文晩期末

くも堆積している状況が明らかとなり、その堆積土の下面から縄文時代晩期末～弥生時代前期初頭に位置付けられる夜臼式土器の破片が確認された。この結果を受けて、同年11月より遺構・遺物の確認された約660㎡を対象に本調査を行った。なお、浦田遺跡２区（300㎡）については団地内侵入路の延長上にあたることより、寺ヶ里遺跡と並行して本調査を行ったが、土師器の小片を採集したのみで、明確な遺構は検出されなかった。

厚い浚渫土から現れた旧地形は北西から南東に向かって緩やかに下る斜面であり、東側と南側は白京溜池を掘削する際に改変を受けているものの、復元される実際の地形も、さらに現在溜め池となっている南・東側の谷部にやや急な斜面となって下って行くものと推定され、調査対象地は遺跡の立地に適した「丘陵斜面の傾斜変換点に位置する南向きのテラス状の平坦面」であったと言えよう。

調査の結果確認された遺構は、縄文時代晩期末～弥生時代前期初頭の土壌７基、平安時代前期の竪穴住居１棟、鎌倉時代の掘立柱建物２棟、柵列状遺構１基の他、小穴70基以上が検出され、埋土の状態から小穴のほとんどが中世のものと考えられる。また、平安時代・鎌倉時代の遺構の残存状況の良さに対して、縄文時代晩期末の土壌は残りが悪く、ＳＫ009を除いては概ね深さ20cm程度しか遺存しない。このことは調査区周辺が平安時代・鎌倉時代のそれぞれにおいて平坦に造成されたことを示唆するものである。その証左として調査区内東側の斜面には厚さ最大0.3m程の黒色腐食質土からなる遺物包含層が堆積しており、包含層中から縄文時代晩期末から鎌倉時代に至るまでの遺物が出土している。

出土遺物としては縄文晩期末～弥生前期初頭の土器コンテナ８箱分の他、平安時代の土師器、鎌倉時代の土師器・瓦器・青磁があり、他に鏃・叩き石等の石器、鉄製刀子が確認されている。以下に時代毎に遺構と遺物について述べる。

註１）堤 安信他(1983)：「浦田遺跡」「西原遺跡」　九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書(３)　佐賀県教育委員会
　２）堤 安信(1981)：「寺ヶ里遺跡」「香田遺跡」　九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書(２)　佐賀県教育委員会

２．縄文時代晩期末～弥生時代前期初頭の遺構と遺物（Fig.193～197）

当該期の遺構として土壌７基が確認されている。いずれも調査区内の西半部に位置しており、分布上は中央寄りのグループ（ＳＫ008・017・018）と西側のグループ（ＳＫ009・014・019・020）に分けられる他、ＳＫ018に近接して甕の胴上部が破砕して出土しており、ＳＸ011不明遺構として取り上げている。７基の土壌の内、ＳＫ

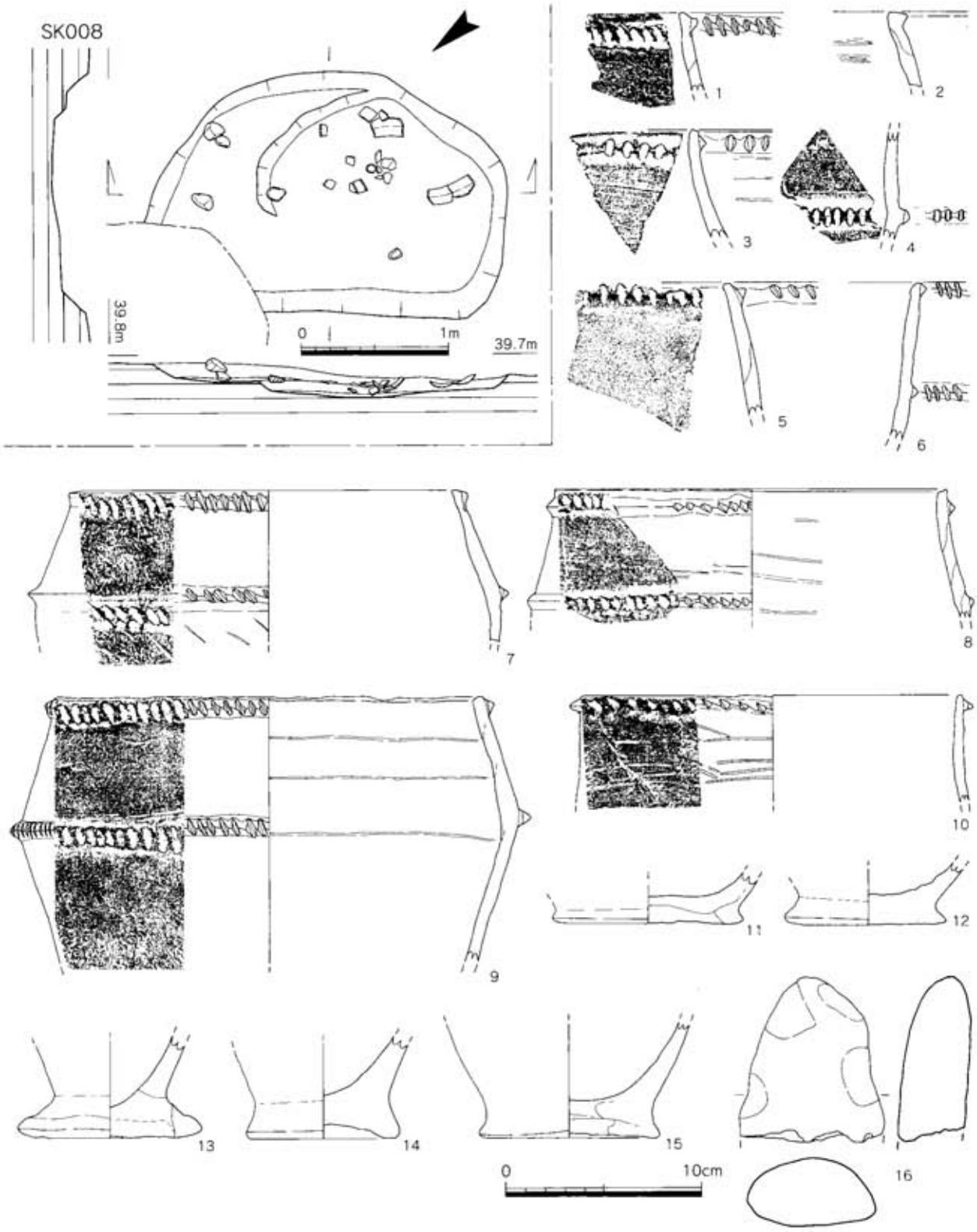


Fig.193　SK008土壙（1：40）及び出土遺物（1：3）

018を除くいずれからも、いわゆる刻目突帯文土器である夜臼式土器が出土しており、遺物を出土しなかったSK018についても土壙の形態・埋土等からほぼ同時期の遺構と考えている。

SK008土壙（Fig.193）

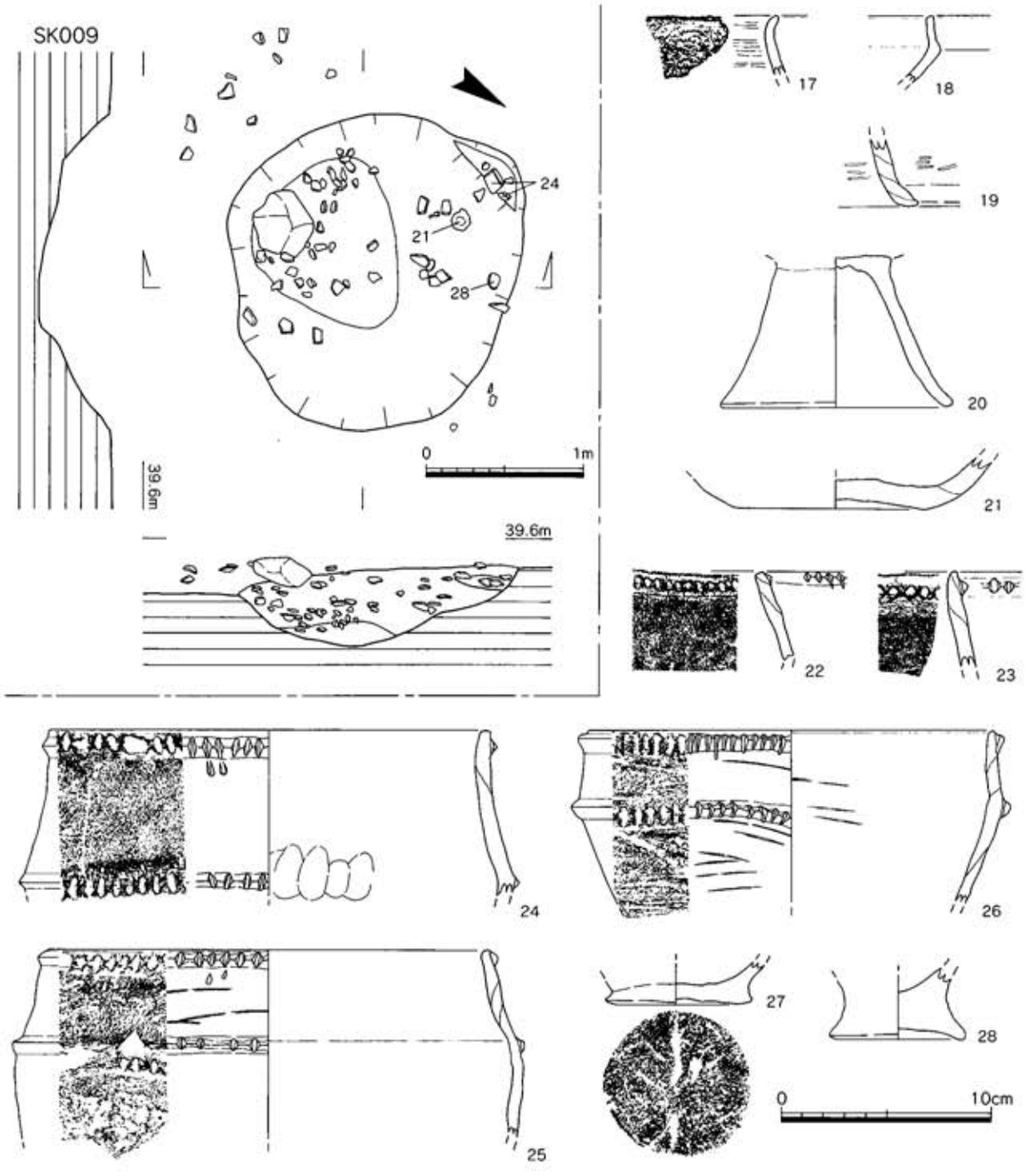


Fig.194　ＳＫ009土壙（1：40）及び出土遺物（1：3）

平面楕円形を呈する。長軸は北東－南西方向にあり、長軸の長さ2.4m、短軸1.6m、断面形は逆台形で深さは最大0.25cm。底面東側に段部を持つが全周するものではない。平安時代前期の住居跡ＳＢ005に切られる。埋土は茶褐色粘質土で埋土中から刻目突帯文土器に属する甕、石器として叩き石が出土している。遺構が非常に浅いこともあるが、遺物はほとんどが床面直上で検出されている。

ＳＫ００８出土遺物（Fig.193）　1～15は夜臼式土器の甕で、1～10は口縁部。いずれも口縁部端部と体部外面の屈曲部に断面三角形の突帯を貼り付け、2を除くすべてが突帯に刻み目が施される。胴下半部が失われているために全形を復元できないが、屈曲部から口縁部にかけては5・7・9のように直線的に伸びて内傾するものと3・

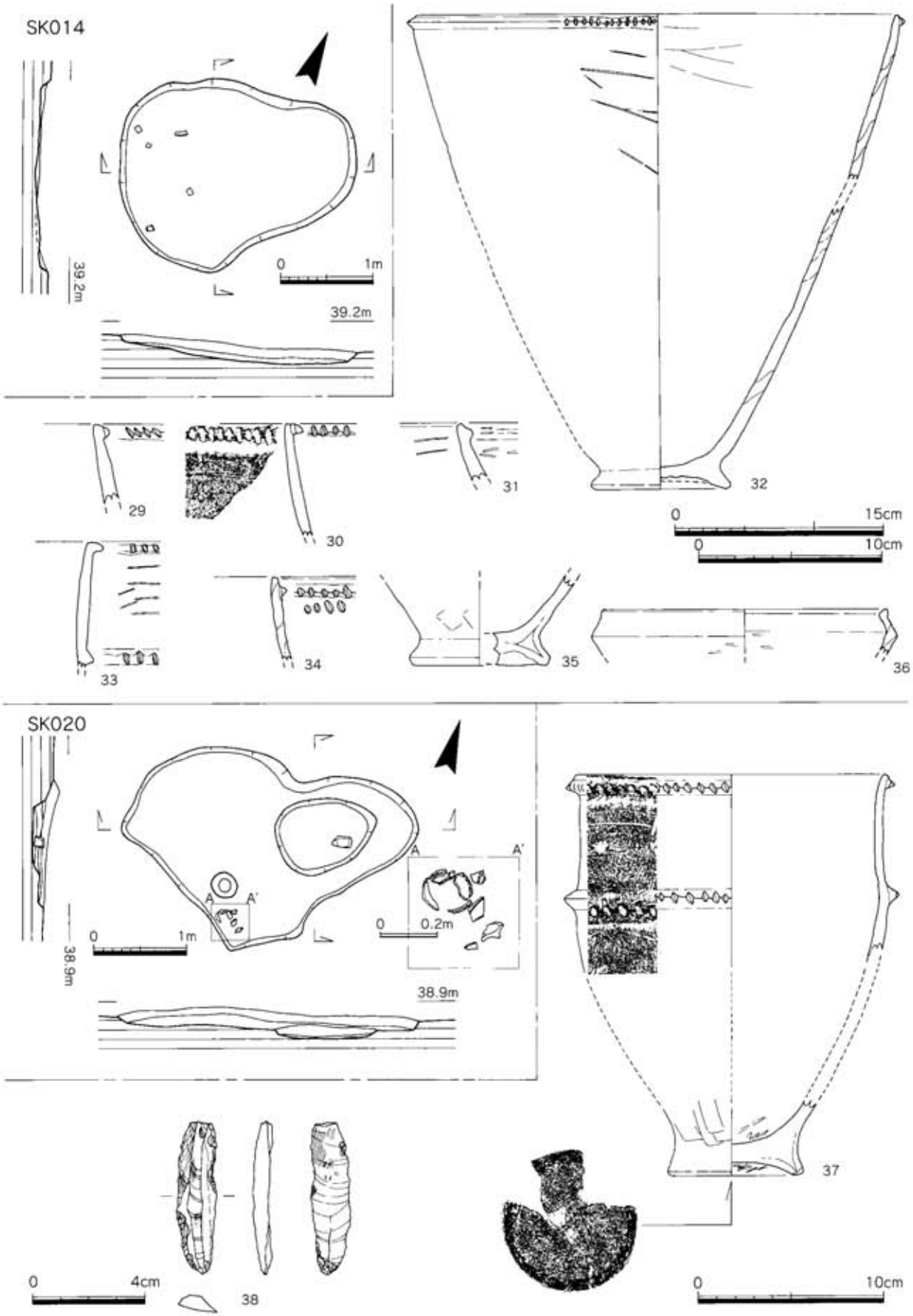


Fig.195　SK014（1：60）・020土壙（1：60）及び出土遺物（38は1：2、32は1：4、他は1：3）

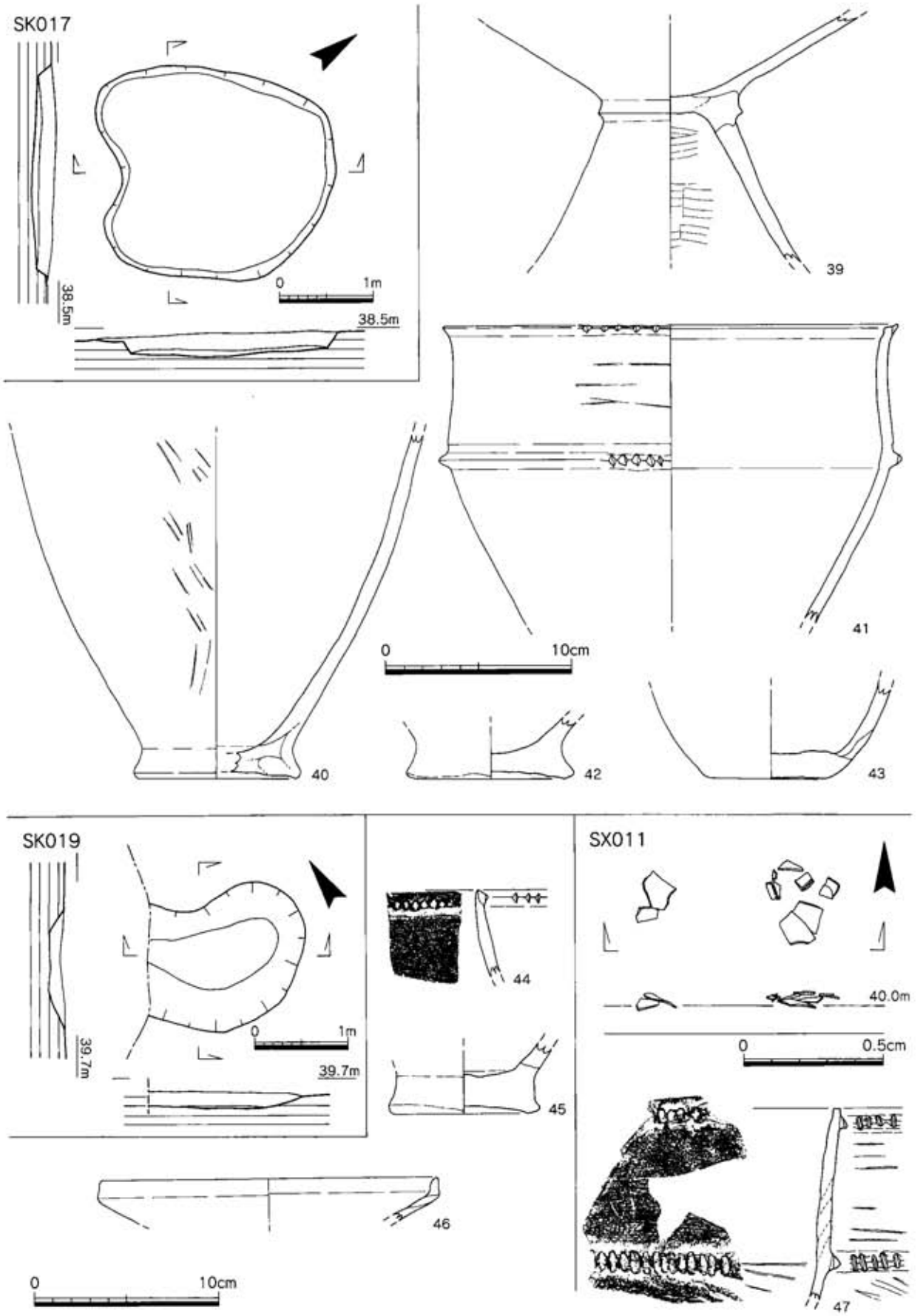


Fig.196　ＳＫ017・019土壙（1：60）、ＳＸ011不明遺構（1：20）及び出土遺物（1：3）

8・10のごとくやや反りぎみに外反して内傾するものの両者が見られ、9などで見る限りは胴下半部は比較的直線的に伸びてくびれる底部に続くようである。ただ6については口縁部が逆にやや外傾するようである。口縁部の突帯は端部からやや下がった位置に貼り付けるものが多く見られるが2・6についてはほぼ端部にして一体化している。刻み目の施文方法については小口を持つヘラ状工具を突帯に対して垂直に押し付けるもの（1・3～7・9）と突帯に対して斜めに押し付けるもの（8・10）の両方があり、その他施文する際に、ある程度押し付けて深く刻みを入れるものと刺突状に浅く施すもの（4・6）が見られるようである。調整はいずれも内外面共に横位の条痕をナデ消している。また工具を押し付ける向きについても、30度程左に傾けるものが多いが、3・4のようにほぼ垂直に施文するものも認められる。11～15は底部片。いずれも別個体であり、最低５個体分は存在することになる。13は極端にくびれ部が狭く、遺存部分で見る限りは胴部も余り膨らまないようである。12・14は底径８cm、11・15は底径９cmとやや大きく、口径の違いから考えても、法量で大小が分けられるものと思われる。底面は11～13が平底、14・15はやや上げ底となり凹面をなす。調整は底面も含めてナデを行う。16は長楕円形の円礫で、明瞭な使用痕は観察できないが、叩き石等の礫石器と思われる。

ＳＫＯＯ９土壙（Fig.194）

平面ほぼ円形で直径1.8～2.0m、断面形は摺鉢状で深さは0.5mと、当該期の遺構としては最も深いものである。埋土はＳＫ008と同じく茶褐色粘質土の一層からなり、遺物出土状況としては埋土中の検出面から下部までのどの層位からも遺物が出土しているが、底面には接しておらず、土層の状態からも埋没過程で投棄あるいは周辺部から流れ込んだものと推定される。出土遺物には土器の他、大きさ0.3m程の礫も上層から検出されている。

ＳＫＯＯ９土壙出土遺物（Fig.194）　17・21は壺。17は壺の口縁部、直線的に伸びて内傾し、端部付近では緩く外反する。器面は内外面共にヘラミガキを施す。21は長胴壺の底部、底面は凹面をなし、外面には丹塗りを行う。18～20は高杯。22～28は甕、22・23は口縁部片で、直線的に伸びて内傾し、22は口縁端部と接して、また23は口縁端部からやや下がった位置に刻目突帯を貼り付ける。24～25は口縁部から胴部にかけて。口縁部及び体部の屈折部分に刻目突帯を持つもので、口縁部は胴部と明瞭に境を持って外湾しつつ、内傾する。25・26の体部はほぼ直線的に底部へと続くようである。22～26における突帯への刻目はいずれもヘラ状工具を用いるが、22・23のように軽く浅く刻むものがある一方、26のように深く刻んで、刻目が縦長になるものもある。また、いずれも内外面とも横位の条痕を施した後にナデ消しを行う。26は外面に煤が付着する。27・28は底部、27は底面に木の葉の圧痕が認められる。いずれも内外面ともナデを行う。

ＳＫＯ１４土壙（Fig.197）

平面形はやや歪な長楕円形。長軸2.5m、短軸2.1m、断面形は逆台形で深さ約0.1m。埋土は茶褐色粘質土。

ＳＫＯ１４土壙出土遺物（Fig.198）　甕と高杯が出土している。29～35は甕でいずれも突帯を持つもの。31・32・34は口縁端部からやや下った位置に突帯を貼り付けるが、29・30・33は突帯上面が口縁端部と接して一体化している。29・30・32・33・35は突帯に刻目を持つが、31は持たない。刻目はヘラ状工具を突体に体して垂直に押し付けるものであり、いずれも小さく浅い。32はくびれ底の底部から口縁部まで直線的に開く体部を持つもので、口縁端部と上端を接して刻目突帯を一条巡らせ、刻目は浅く小さく施される。調整は内外面共に条痕後ナデ。35はくびれ底の底部片で、調整は外面にヘラ状工具によるナデ痕が残る他、内外面・底面共にナデを行う。36は高杯の口縁部。くの字形に屈曲しており、端部は僅かに外方に肥厚する。

ＳＫＯ１７土壙（Fig.196）

平面形は南西側が一部えぐれた不整形をなす。長軸2.5m、短軸2.3m、断面形は逆台形で深さは0.2m。底面は

平坦である。埋土は茶褐色粘質土。

ＳＫ０１７土壙出土遺物（Fig.196）　39は高杯で口縁部と脚部裾部を欠く。杯部・脚部共に直線的に伸び、くびれ部には断面三角形の突帯を貼り付ける。調整は摩耗のため不明瞭だが、内面には目の荒いハケ目が観察される。40～42は甕。41は口縁部外面に突帯を貼り付けるのではなく、外方につまみ出して端部に浅く刻目を施す点に特徴がある。口縁部は外湾しつつほぼ垂直に立ち上がり、胴部との屈折部分に突帯を貼り付け、口縁部と同じく浅く刻目がほどこされ、胴部は直線的に底部に向かってすぼまる。40は胴下半部、42は底部。40の胴部はやや膨らみを持ってすぼまりつつくびれる底部へと続き、底面は40・42共にやや凹面をなす。40～42はいずれも内外面共に条痕後ナデ消しを行い、底部は内外面共にナデを施す。43は長胴壺の底部、調整は内外面共にナデ。

ＳＫ０１８土壙（Fig.197）

調査区のほぼ中央、ＳＢ００１とＳＫ００８・ＳＢ００５に挟まれて位置する。南北に長軸を持つやや歪な楕円形であり、長軸2.7m、短軸2.0m。底面には長さ2.0m、幅1.2mの隅丸長方形の掘り方を持つ段構造をなす。検出面から底面までの深さは最大約0.2m。出土遺物はないが、形態・埋土より縄文晩期末～弥生時代前期初頭の所産と思われる。

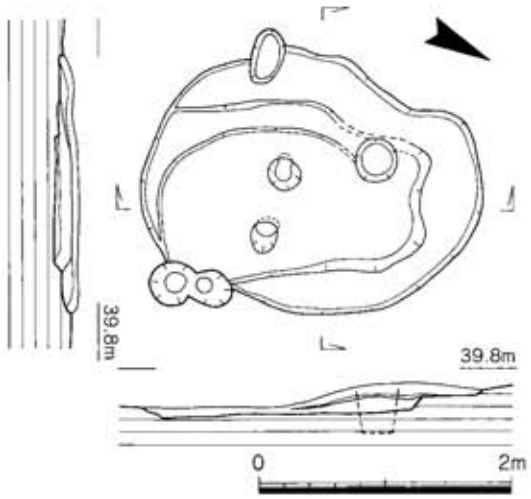


Fig.197　ＳＫ018土壙（1：60）

ＳＫ０１９土壙（Fig.196）

平面形は丸みを帯びた不整形で、西側の一部が調査区外に含まれる。残存部の長軸が1.7m、短軸が1.5m、断面形は逆台形で深さ0.15m。埋土は茶褐色粘質土。

ＳＫ０１９土壙出土遺物（Fig.196）　44・45は甕。44は口縁部片で、口縁端部に突帯を持ち、浅く小さく刻目が施される。内外面共に条痕後ナデ。45は底部、調整は内外面・底面共にナデ。46は高杯。直線的に大きく開く体部から垂直に短く立ち上がる口縁部を持つ。口縁部を指で挟み込んで整形したためか、外面は僅かに凹面をなす。内外面共にナデ。

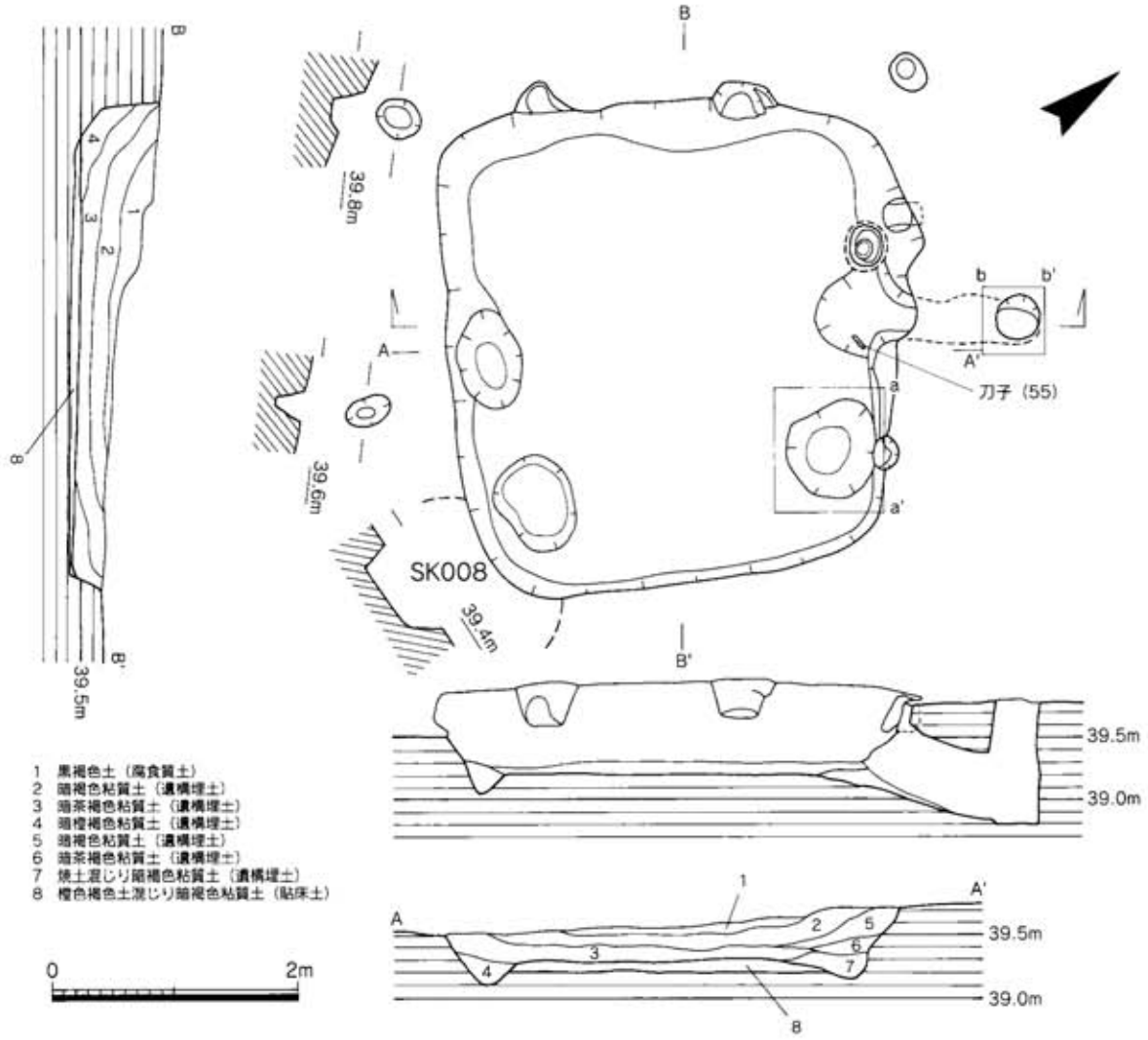
ＳＫ０２０土壙（Fig.195）

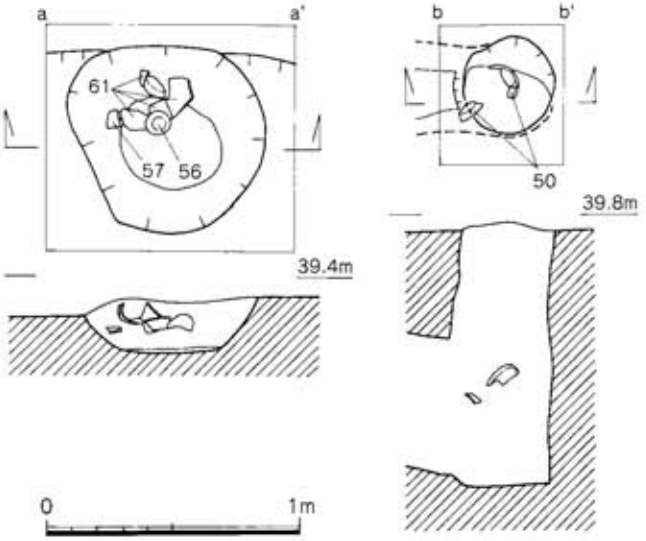
平面形は東西に主軸を持つ不整形で、長軸3.2m、短軸2.2m、断面形はほぼ逆台形で底面東よりに楕円形の浅い掘り込みを持つ。掘り込みの長軸1.1m、短軸2.2m、検出面から掘り込み底面までの深さ約0.2m。埋土中南側壁際より甕の１個体が破砕した状態で出土している。埋土は茶褐色粘質土。

ＳＫ０２０土壙出土遺物（Fig.195）　甕１個体と黒曜石製の刃器１点が出土している。37は器高22cm程度の小型の甕で、胴中央部を欠く。口縁部から僅かに下がった位置と胴上部のそれぞれに浅い刻目を施す突帯を貼り付ける。口縁部は外湾しつつほぼ真っすぐに立ち上がり、上下の突帯部における直径はほぼ等しい。胴下半部を欠くものの、くびれ底の底部からやや内湾しつつ口縁部へと続くものと復元され、底部底面は凹面をなして上げ底となる。口縁部から胴部にかけては内外面共に条痕後ナデ、底部外面にはヘラ状工具によるナデの痕跡が認められ、底部内外面、特に外底面は丁寧にミガキが施される。38は黒曜石製の刃器。縦長剥片の両側縁及び下端部に細かい剥離を施し、刃部を作り出している。

ＳＸ０１１不明遺構（Fig.196）

ＳＫ018の南々東１mに位置する。甕の胴上部片が破砕された状態で検出されたものである。掘り方等は確認





されていないが、元位置から大きくは移動していないものと考えら本来近接するＳＫ018に伴うものか、掘り方等が削平された別遺構に伴うものと判断して記録を行った。

ＳＸＯ１１不明遺構出土遺物（Fig.196）　47は甕の口縁部から胴部の屈折部分。刻目突帯を二条貼り付けるもので、口縁部の突帯は端部からやや下った位置に貼り付けられ、上下共、刻目はヘラ状工具により突帯に対して垂直にやや深く刻まれる。調整は内外面共に条痕後ナデ消しを行う。

Fig.198　ＳＢ005竪穴住居（1：60、1：30）

3．平安時代の遺構と遺物

ＳＢＯＯ５竪穴住居（Fig.198）

平安時代の遺構として平面隅丸方形で煙道付き竈を持つ住居跡が１棟確認されている。一辺の長さは約3.0～3.2mで、深さは西壁側で0.6m程が遺存し、残存状況は良好と言える。北東壁の中程から北東方向に向かって煙道が伸びる。煙道は壁から約0.7mの離れた部分で煙出しのための竪穴を持つ。煙道の断面形は住居床面から傾斜角約20度で一旦下方に伸びて竪穴と接続しており、住居床面と竪穴底面との比高差は約0.4m程である。おそらく煙出しからの雨水等の流入を防ぐ目的があるものと思われる。竪穴内部の埋土中位やや下寄りから土師器皿が出土している。竈本体については煙道との接続部分の壁面で、焼土・炭を多量に含んだ土が約0.5mの範囲で確認されており竈の残骸かとも思われるが、竈を構築していたと見るには土量的に少なく思われ、移動式竈を用いていたものかも知れない。いずれにしても竈本体の構造については詳細不明である。床面では柱穴は確認されていないが、北西・北東壁に沿って２個ずつの小穴がみられる他、住居の掘り込み外の北・西隅、及び北西壁の中程において、壁から約0.3～0.4m離れて小穴が掘られており、柱穴である可能性が高い。床面には南西壁際に２基、北東壁際に１基、平面楕円形の土壙が検出されたが、このうち北東壁側のものについては貼床の下面より確認されており、内部より土師器杯・甕が出土している。この他、住居床面からは土師器の杯・皿の他、鉄製刀子２本が検出されており、刀子のうち１点は竈炊き口付近の焼土・炭の塊中に置かれた状態で出土している。

ＳＢＯＯ５竪穴住居出土遺物（Fig.198）　土師器杯・皿・蓋・甕、鉄製品として刀子２点が検出された他、縄文時代晩期末～弥生時代前期初頭の夜臼式土器が１点出土している。48～55は床面からの出土。48は杯で平底から直線的に開く体部を持つ。底面はヘラ切り離し後ナデを行い、成型後の乾燥段階に生じた板状圧痕が残る。49・50は皿、49は底部から丸みを持って体部へと続き、口縁端部は外方にやや屈曲させる。50は底部と体部の境に明瞭に稜を持ち、口縁部に向かって直線的に開く。49・50共にヘラ切り離し後ナデで板状圧痕が観察される。51は蓋、体部から口縁部へは緩やかに屈曲する。頂部はヘラ切り離し後ナデ。52・53は高台付きの杯。52は丸みを帯びた断面三角形の高台を持ち、体部は直線的に真っすぐ開く。53は底部のみの破片で断面方形の高台を貼り付ける。54・55は鉄製刀子。54は板状鉄片の両側縁を内側に折り曲げることによって茎部を形作る。刃部は欠損するが形態から刀子と判断した。55は完形品。竈があったと思われる焼土の中から出土したもので、刃部の長さ8.0cm、茎部の長さ7.5cm、刃部の最大幅1.3cm。

156～61は東壁土壙内からの出土。56・57は杯でほぼ完形品。いずれも直線的に開く体部をなし、底部はヘラ切り離し後ナデを行う。56は口縁部を幅3.0cm程打ち欠いて片口としたものと思われる。59は甕、くの字形に外反する口縁部を持ち、胴部はあまり膨らまない。口縁部は内外面ともにヨコナデ、胴部の外面にはハケメが残り、内面はヘラ状工具によるケズリ痕が観察される。60・61は素口縁の甕。丸底の底部から垂直に立ち上がる口縁部を持つ。口縁部内外面はヨコナデ、胴部から底部にかけては外面ハケメ、内面ナデ。61は全形の約１/８を欠損する。

58は夜臼式並行の高杯の脚部で混入品である。直線的に広がる短い脚部から細くくびれ、口縁部に向かってはやや外反ぎみに開くものと思われる。くびれ部には断面台形の突帯を貼り付け、断面円形の棒状工具で刺突文が施される。

4．中世の遺構と遺物（Fig.200～202）

中世（鎌倉時代）の遺構として掘立柱建物２棟と櫛列状遺構１条を確認しており、その他多数の小穴について

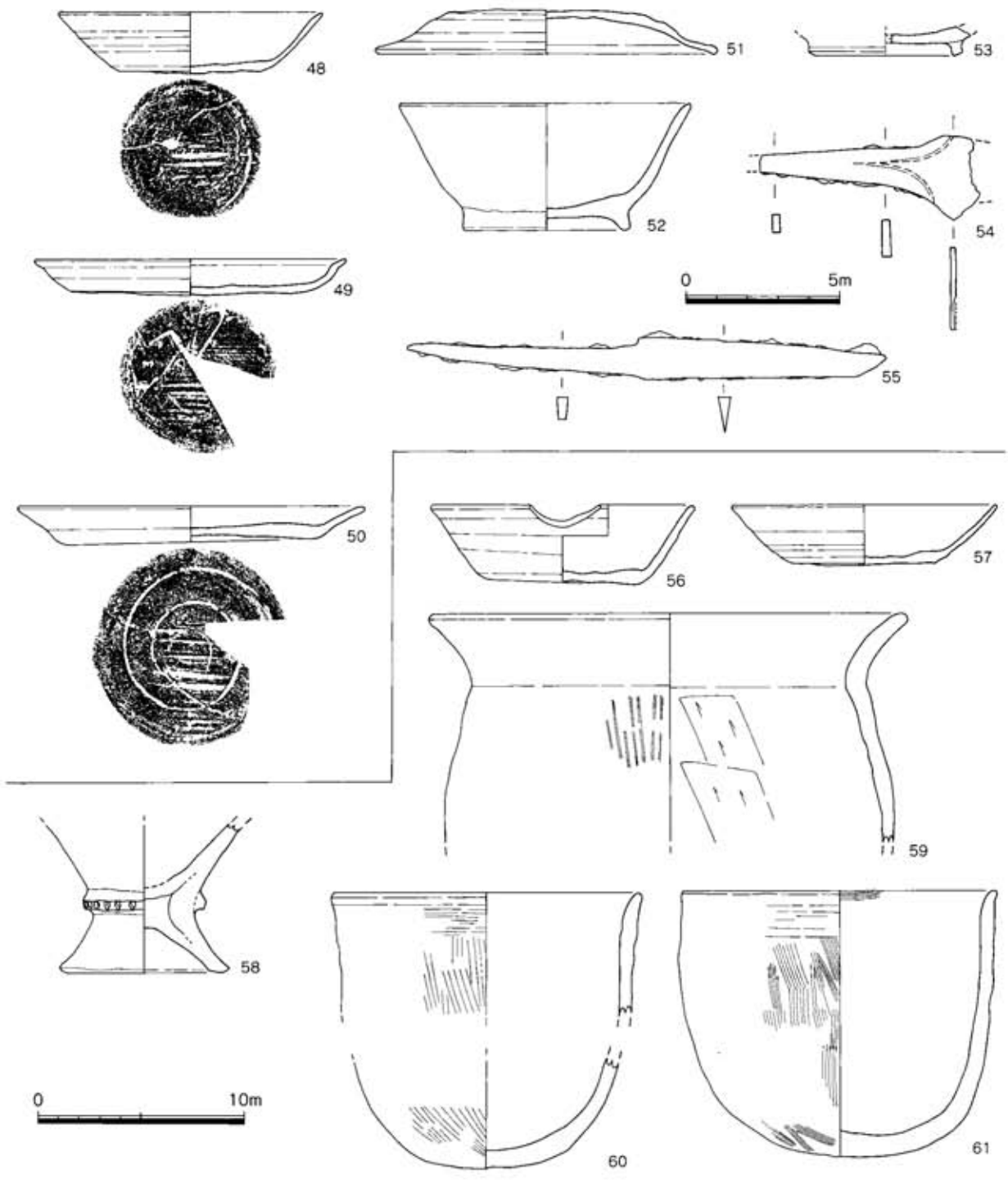


Fig.199　ＳＢ005竪穴住居出土遺物（54，55は1：2、他は1：3）

も出土遺物・埋土等からそのほとんどが当該期に属するものと考えられる。

ＳＢＯＯ１掘立柱建物（Fig.200）

調査区のほぼ中央、やや東寄りに位置し、主軸方位はＮ－85°－Ｗと概ね東西方向に長軸を持つ。検出時は平面隅丸長方形のプランを確認し、弥生時代後期の住居跡かとも考えられたが、遺構埋土中から鎌倉時代の青磁・土鍋等が出土した他、平面プランを囲む形で、柱穴らしき小穴が主軸を同じくして並ぶことから、土壙状の掘り方を伴う掘立柱建物と判断した。隅丸長方形の土壙は長軸約5.0m、西・東辺で約1.3m、中央部で約1.5mの規模

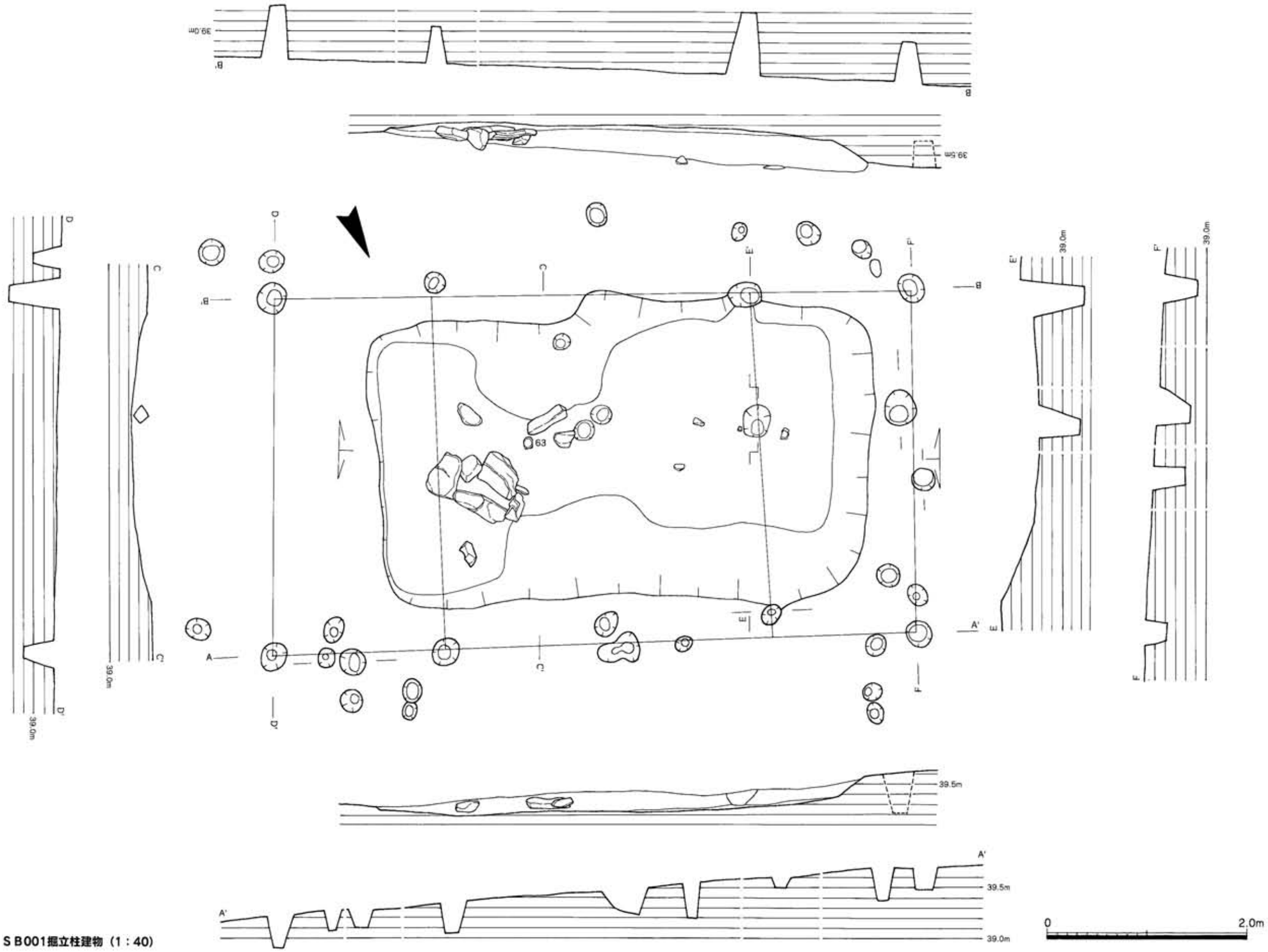


Fig.200　S B001掘立柱建物（1：40）

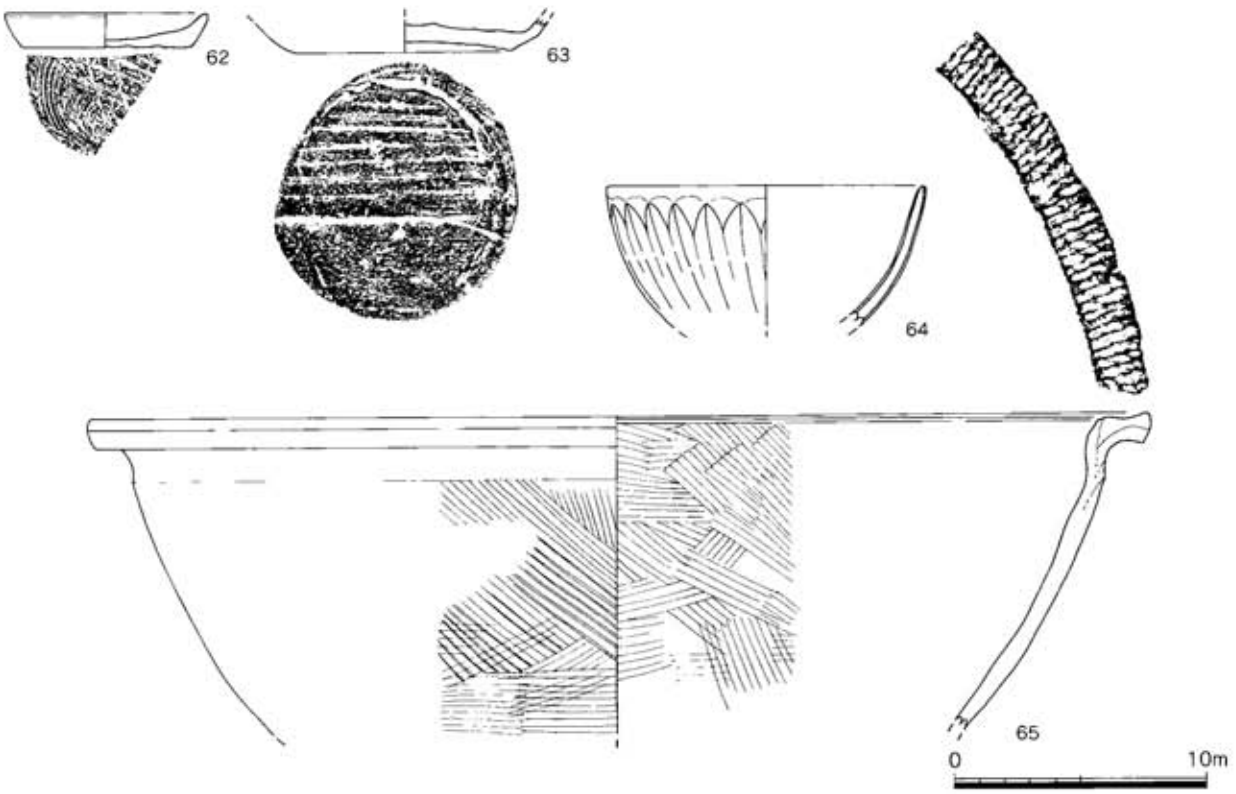


Fig.201　ＳＢ001掘立柱建物出土遺物（1：3）

を持つ。断面形は底面から緩やかに傾斜して立ち上がる逆台形で遺構も浅いこともあいまって下場のラインはあまり明瞭ではない。また、底面のプランは中央部やや東寄りで幅0.5m程度にくびれて狭くなっており、平面で言えば、東側で長さ1.2m、幅0.5mの横長の長方形が、また西側で1.0×1.0mの正方形のプランが作られ、くびれ部を挟んで区画が二つ設けられているように見える。ただ、前述のとおり壁の立ち上がりは緩やかなものであり、実際には図化して表現した程は明瞭ではない。東側の区画部分では大きさ20～30cm程度の花崗岩礫３・４個と15cm程度の３・４個からなる集石がある。一見長方形に組んでいるようにも見受けられるが定かではない。石はその多くが火熱を受けて赤変しており、黒色粘質土からなる遺構埋土中には炭化物も多く含まれることから炉跡の可能性も考えられる。しかし、石組内部から特別多量に炭化物が検出される訳でもなく、礫を組んで火を炊いたことは想定されるものの、集石については作業後に投棄された状態である可能性が高いと考えられる。柱穴については、梁行6.4m、桁行3.4mの規模を持ちおおよそ整った平面形をなしているが、構造についてはやや規則性を欠き、東辺で１間、西辺で２間、また北辺は４間となるのに対し、南辺は中央部の柱がなく３間となる。南辺については中央の柱穴の相当する位置から南側に0.8m離れて小穴がみられ、あるいはこれが柱穴となるかもしれない。このように柱穴の配置については今ひとつ不明瞭な部分があるものの、その直径は20～30cmと小さく、実際用いられた柱材もかなり脆弱なものであったことが想定され、簡単な上屋程度の屋根を支えていたものと考えられる。

ＳＢＯＯ１掘立柱建物出土遺物（Fig.201）　出土遺物は少なく、土師器皿、青磁碗の他、土師質の土鍋が出土している。62・63は土師器の皿。62は口径8.0cmで底部は糸切り離し。63は口縁部を欠くが口径12.5cm程度のもの。底部は糸切り離しで、板状圧痕が残る。64は青磁碗。湾曲する体部から口縁部は舌状に伸び、外面には鎬蓮弁文を施す。口径12.5cmとやや法量の小さなものである。65は土鍋。口縁部は逆Ｌ字形になり、上面には植物の茎状

のものを押圧させている。体部内外面共に斜め方向を主体としたハケメを施す。口縁部内径の復元値は38.0cm。

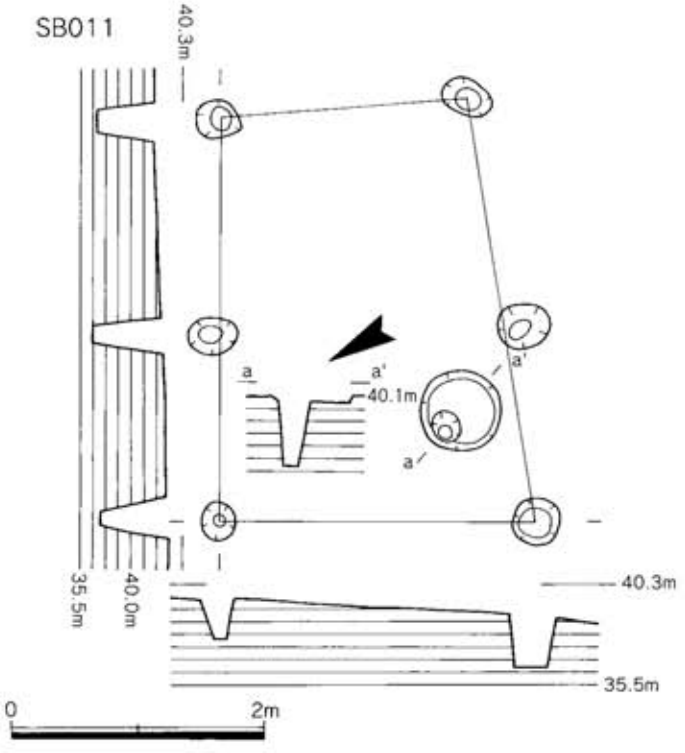
ＳＢ０１１掘立柱建物（Fig.202）

調査区内南寄りに位置し、ＳＢ001掘立柱建物とほぼ主軸を同じくして並ぶ。２×１間の小規模なもので、平面形は北辺3.2m、南辺3.4m、また東辺2.0mに対し、西辺2.5mとやや歪な長方形をなす。また、建物西辺とＳＢ011の西辺はほぼ直線上に並ぶ。柱穴はほとんどが深さ0.4m以上と比較的深いもので、平面円形あるいは楕円形、直径は概ね0.3～0.4m程である。西側隅付近には直径0.7m程の円形の小穴があり、さらに小穴の北側壁に接して径0.25m、深さ0.55mの細く深い穴が掘られている。建物に伴うものかどうか定かではないが、作業台等、建物内の施設であった可能性も考えられる。

柱穴内からの出土遺物はないが、埋土はいずれもＳＢ001と同じく黒褐色粘質土であり、遺構の配置・主軸から考えても同時期のものと推定される。

ＳＸ００２柵列状遺構（Fig.202）

ＳＢ005竪穴住居とＳＢ001掘立柱建物の間に位置し、ＳＫ017をまたがって北々東－南々西（Ｎ－20°－Ｅ）に直線的に伸びる。鎌倉時代の遺構であるＳＢ001・015の西辺と主軸を同じくしてお



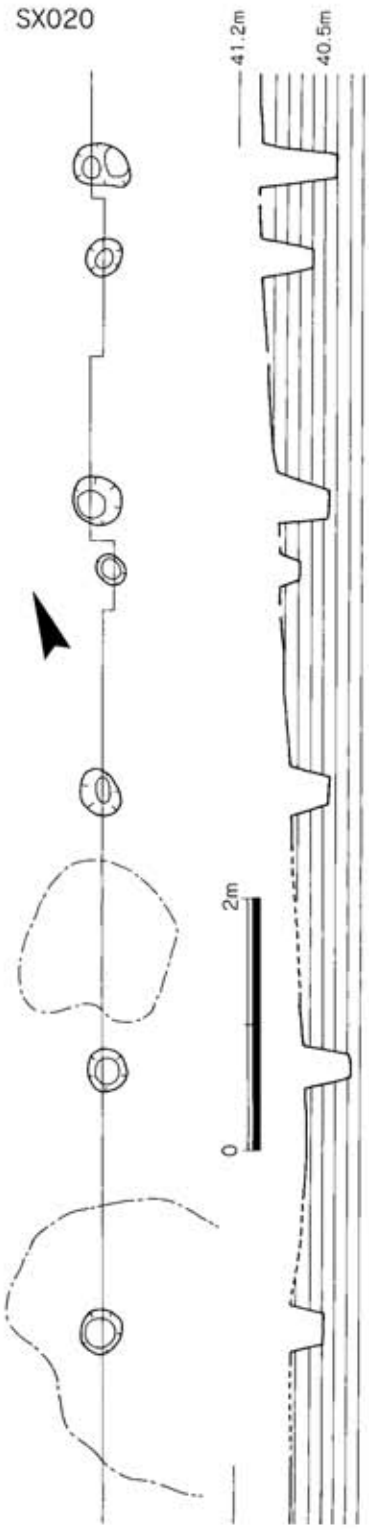


Fig.202　ＳＢ011掘立柱建物（1：60）、ＳＸ020柵列状遺構（1：60）

り、同時期のものと考えている。調査区内では径0.3m前後の５個の小穴とそのうちの２個に付属すると思われるより小さな穴（径0.2m）を検出しており、前者の相互の間隔は約2.2～2.6m、全体としては約9.2mの規模を持つ。小穴埋土は黒褐色粘質土で出土遺物はない。

５．小穴・遺物包含層及び遺構検出面出土遺物（Fig.203・204）

調査区東側の白京溜池に面した斜面に黒色腐食質土からなる遺物包含層が約0.3mの厚さを持って堆積していた。これは前述のとおり、主に平安時代以降に幾度か造成を受けた際の流土からなっており、縄文時代晩期末～弥生時代前期初頭・平安時代前期・鎌倉時代のそれぞれの時期の遺物が混在しており、一部古墳時代・奈良時代、近世の遺物も若干量含まれる。また、縄文晩期末～弥生前期初頭の遺物は遺構検出面上からも多く検出されているが、おそらく後世の削平により遺構が破壊された際に流出したものと思われる。調査段階ではいずれの遺構に伴うものかは特定できず、遺構検出面出土遺物として取り扱う。また、小穴の出土遺物についても述べる。

縄文時代晩期末～弥生時代前期初頭の遺物（Fig.203）

66～73は甕、66～71は口縁部及び胴上半部でいずれも二条の突帯を上下に貼り付ける。66・67・71は口径17～18cmのもの。66・68はくびれ部の屈曲が明瞭で、口縁部は66が直線的に67はやや外傾しつつ、ほぼ真っすぐに立ち上がる。66・67は刻目の断面が三角形、71は逆台形となる工具により施文されており、67は特に斜め方向から深く刻み込んである。71はくびれ部の屈曲は不明瞭で胴部の膨らみから緩やかに外湾しつつ真っすぐに立ち上がる。68は口径13.5cm、69は口径9.8cmの小型品。68の口縁端部の突帯は貼り付けではなく、端部を挟んでつまみ出すことによって整形する。刻み目は小さく浅く施される。66～71はいずれも調整は内外面共に条痕をナデ消している。72・73は甕の底部。どちらもくびれ平底であり、72の胴部はあまり開かず直線的に伸びる。また、底部の成型において、72は粘土板１枚に粘土紐を巻き付けて行くのに対し、73は粘土板２枚を重ねて厚みを持たせ、底面には作業時に敷いた木葉の圧痕が残る。74～78は壺。74・78は口縁部が内傾してすぼまるもの、75～77はほぼ垂直に立ち上がるものである。74は口縁端部が外反するもので、長胴壺と思われる。端部は外面から粘土紐を貼り付けて丸みを持たせる。調整は外面に丁寧なミガキが施され、内面はナデを行う。75も74と同様、口縁端部は外面から粘土紐を貼り付けて丸く肥厚させている。口縁部から胴部へは稜を持たず緩やかに続いて余り肩が張らずに丸く膨らむ。外面は横方向に丁寧なミガキを施し、内面は条痕後ナデを行う。76は口縁部と胴部の境に明瞭に稜を持ち、肩が張って大きく膨らむ胴部を持つもの。調整は外面ミガキ、内面ナデ。77はやや外湾しつつ真っすぐに立ち上がる口縁部片で外面には黒色顔料を塗布する。78は内傾してすぼまる口縁部から連続して胴部に繋がるもので、口縁部と胴部の境付近は指で押さえて一周させたような凹線が浅く観察される。口縁端部はつまみ出すように短く外方へ折り曲げられ、端面は平坦面をなしている。外面及び口縁部内面にはミガキが施される。74・75・77は器壁の厚さ0.5cm程度と厚く胎土中に砂粒・小石を混入するが、76・78は厚さ0.2～0.3cmと薄く胎土も精良である。79～82は高杯。79は杯部で口径12cm程度。大きく開く体部からＳ字形に屈曲する口縁部をなす。口縁部内面には赤色顔料が認められる。80～82は脚部。

くびれ部に断面三角形の突帯を貼り付ける。82は裾部から直線的に開いて接地する。81の外面には黒色顔料が塗布される。83は黒曜石製の鏃。完形品で平面三角形、基部は凹面をなす。長さ1.9cm、幅1.8cm。

古墳時代以降の遺物（Fig.204）

その他の時期として、古墳時代後期・奈良時代・平安時代前期・鎌倉時代及び一部近世の遺物を検出しているが、中でも鎌倉期の遺物の出土量が多い。

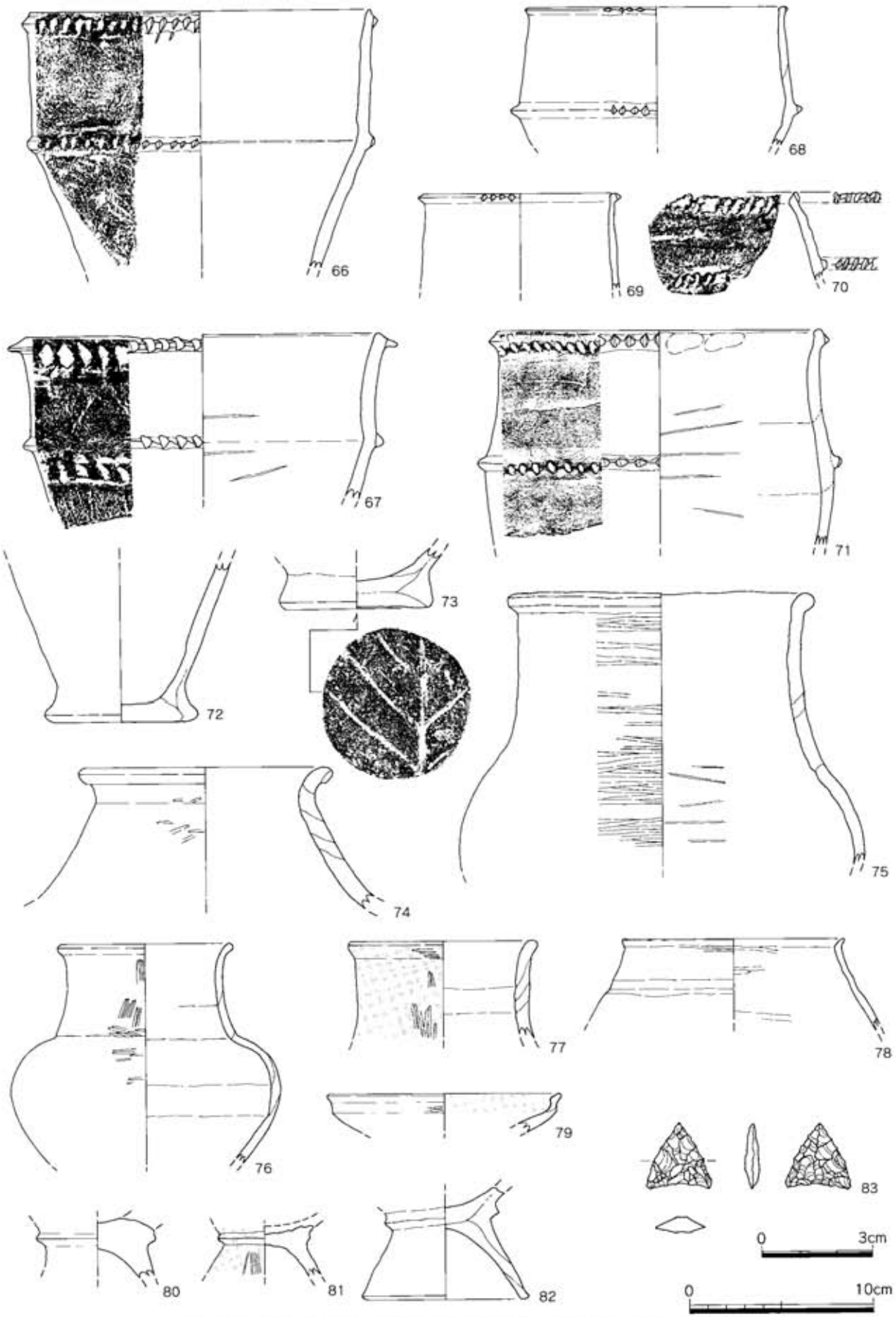


Fig.203　小穴・遺物包含層及び検出面出土遺物１（83のみ1：1.5、他は1：3）

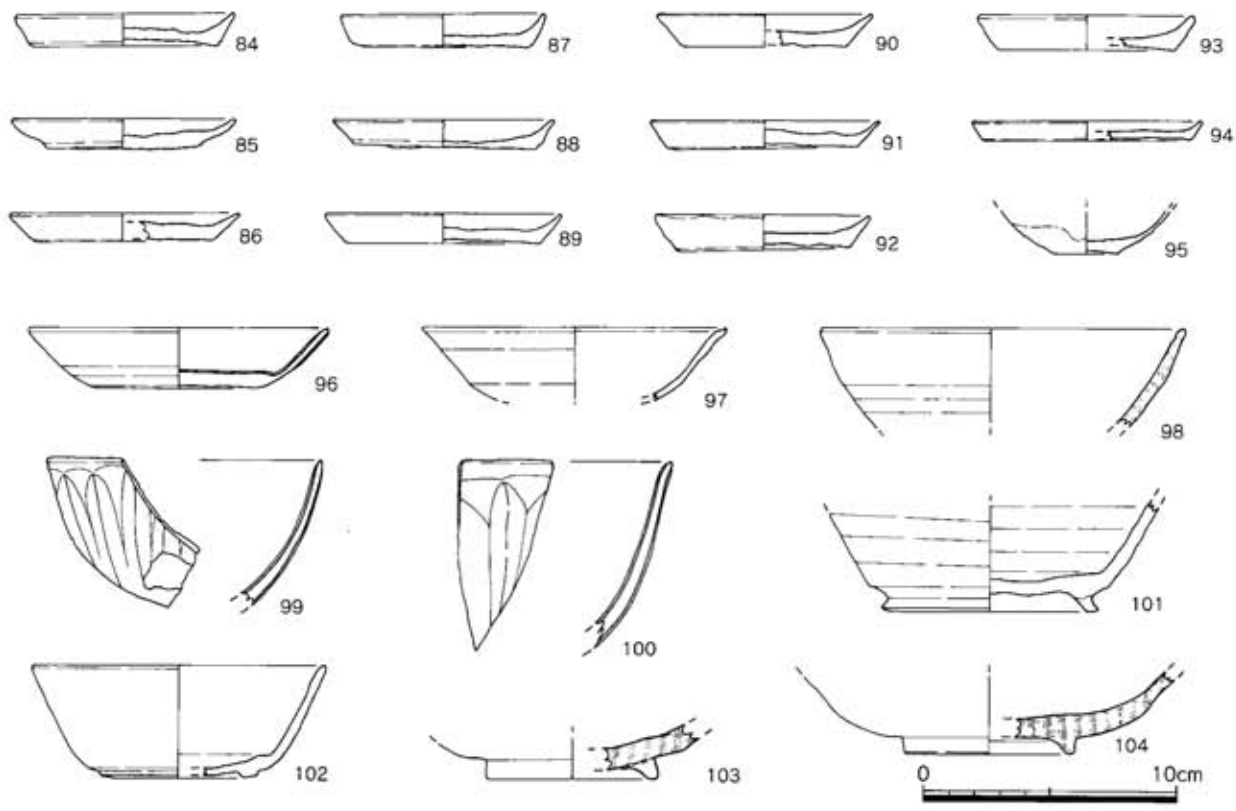


Fig.204　小穴・遺物包含層及び検出面出土遺物２（1：3）

84～94は土師器の皿。84～93は法量の平均が口径8.9cm、器高1.2cm、底径7.3cmとなるもので、底部は糸切り離しである。94は形態はこれらとほぼ同じであるが径12.2cmとやや口径の大きなもの。96・97・99・100は青磁。96・97は青磁の皿で、いずれも直線的に開く体部をなすが、97は端部が僅かに外方へ折れ、端部内面は凹面をなす。内外面には青緑色の釉がかかり、96の外底部は露胎となる。99・100は碗。いずれも外面に鎬蓮弁文を施し、口縁端部は舌状になり、100は僅かに外方へ反る。98・103・104は瓦器椀。98はやや内湾しつつ開く口縁部片で口径14.2cm、103・104は底部片で断面三角形の高台を貼り付け、103・104共に高台径6.8cm。上記はいずれも鎌倉時代の所産である。

101は古墳時代後期の土師器杯身で、断面長方形で外方に踏ん張りぎみの高台を貼り付ける。高台から体部にかけては一度屈曲して開く。高台径8.6cm。７世紀後半の所産。

102は奈良時代の土師器杯身。底部からそのまま直線的に開く体部へと続き、断面台形の低く潰れた高台を持つ。口径11.8cm、器高4.6cm、高台径6.4cm。８世紀後半の所産。

95は陶器の小皿。外面に底部を残して鉄釉がかかる。近世の所産である。

６．結　語

寺ヶ里遺跡２区の概要について以下にまとめる。

縄文時代晩期末～弥生時代前期初頭の遺構として土壙７基が確認されているが、その多くが削平を受けており遺存状態は良いとは言えず、その形態等については不明な点が多い。土壙は平面形が概ね楕円形であり、断面形により二種に分けられる。一つは壁体の傾斜が強く、底面が広い平坦面をなすもの（ＳＫ008・016～018・020）であり、もうひとつは摺鉢状になって底面がより狭いもの（ＳＫ009・019）である。深さは前者が浅く、後者は

深い。脊振山南麓においては縄文時代晩期末～弥生時代前期初頭の墓地の確認例は多いものの、集落としては佐賀市佐賀工場団地内遺跡[1]・赤井手遺跡[2]における円形住居などが知られているに過ぎず、本遺跡におけるような土壙状遺構についても確認例は少ない。ＳＫ009・019のような摺鉢状の深いものについては貯蔵穴の可能性が考えられるが、その他のものについては性格不明である。遺跡の性格としても、ある期間生活が営まれた集落であるのかどうかも判然としないが、土壙より浅い住居跡が削平されて失われている可能性も当然推定され、土器の出土量から推しても集落として考えるべきであろう。時期的にはいわゆる夜臼Ⅱａ式[3]の範疇に収まるものと思われるが、細かく見れば出土土器は新旧の二時期に分けられるようである。

平安時代の竪穴住居は煙道付きの竈を付設するものであり、溜池対岸の浦田遺跡で８棟確認されている住居跡と構造的に同じものである。また出土土器から見てもほぼ同時期のものと考えられ、９世紀前半に位置付けられる。ただ、建物の性格は明確にし難く、背面に比較的急な斜面を控えた住居を作るには不向きな場所に立地している。確認調査においても周辺部からその他の建物等は検出されておらず、何故、集落の谷を挟んだ対岸に住居が単独で存在するのか疑問が残る。ただ、ＳＢ005においては浦田遺跡では見られなかった鉄製品として刀子２本が出土しており、例えば作業場といった一般の住居とは異なる用途に使用されていたのかも知れない。

中世については鎌倉時代の掘立柱建物２棟・橋列状遺構１条があり、多くの小穴も当該期に含まれるものと思われる。掘立柱建物・橋列状遺構は主軸を同じくしており、一連のものとして機能していた可能性が高く、鎌倉期において掘立柱建物を中心とした何らかの施設があったものと推定される。その性格については、集落とするには平坦面も少ないことからこれ以上多くの建物が立っていた可能性はあまり考えられず、恒常的に使用した施設でないように見受けられる。考えられるものとしては山城に伴う見張り小屋的なものや、何らかの作業小屋といった性格のものが挙げられる。調査区内の幾つかの小穴からは多くの焼土を含んだ粘土塊が出土しており、想像を逞しくするならば土師器等の土器を製作した工房であったかも知れない。特に浦田古墳群１区の立地する背面の丘陵部においては山城的な遺構が確認されていないことから、作業場的なイメージが強く感じられる。

註１）西田 巌 編（1996）：「佐賀工場団地内遺跡」
２）古賀 章彦 編(1998)：「赤井手遺跡Ⅰ・先立山遺跡Ⅰ」　佐賀市文化財調査報告書第97集　佐賀市教育委員会
３）山崎 純男(1980)：「弥生文化成立期における土器編年的研究」『鏡山猛先生古希記念古文化論攷』　鏡山猛先生古希記念論文集刊行会

Tab.29　寺ケ里遺跡２区土器一覧表（1）

Fig. 図番号	ＰＬ. 番号	県遺物 登録番号	出土地点	種別	器種	法量（cm） 口径	器高	底径	胎土 ※混入物	色調	文様・調整 外器面	内器面
193-1		97001121	ＳＫ００８埋土	刻目突帯文	甕	—	(4.0)	—	小石少量、雲母微量	黄橙色	条痕後ナデ	ナデ
2	71-2	97000624	〃	〃	〃	—	(4.2)	—	砂粒・小石多量	暗黒色	ヘラミガキ	ヘラミガキ
3	71-2	97000623	〃	〃	〃	—	(5.7)	—	砂粒・小石多量、雲母	黄橙色	ヘラナデ	ナデ
4		97001056	〃	〃	〃	—	(5.6)	—	砂粒・小石多量	黄橙色	ヘラナデ	ナデ
5	71-2	97000622	〃	〃	〃	—	(7.0)	—	砂粒少量、雲母微量	黄橙色	ナデ	ナデ
6		97001122	〃	〃	〃	—	(7.3)	—	砂粒・小石多量	黄橙色	ナデ	ナデ
7		97001120	〃	〃	〃	(18.8)	(7.7)	—	小石少量、雲母微量	黄橙色	条痕後ナデ	ナデ
8	71-2	97001118	〃	〃	〃	(19.9)	(6.6)	—	小石少量、雲母微量	暗褐色	条痕後ナデ	条痕後ナデ
9	70-1	97001115	〃	〃	〃	21.3	(13.5)	—	砂粒多量、雲母微量	黄橙色	条痕後ナデ	ナデ
10	71-2	97001119	〃	〃	〃	(19.0)	(5.4)	—	砂粒少量	黄橙色	条痕後ナデ	ナデ
11	71-2	97001117	〃	〃	〃	—	(2.7)	(8.5)	小石多量、雲母微量	橙色	ナデ、底面ヘラケズリ	ナデ
12	70-9	97000615	〃	〃	〃	—	(3.3)	(8.3)	細砂粒・小石多量	黄橙色	不明	ヘラナデ
13		97000617	〃	〃	〃	—	(5.2)	(9.3)	細砂粒・小石多量	黄橙色	ナデ	ナデ
14	70-8	97000616	〃	〃	〃	—	(5.2)	(7.7)	細砂粒・小石多量	黄橙色	ナデ	ナデ・条痕
15	70-8	97000618	〃	〃	〃	—	(9.2)	(5.9)	細砂粒・小石多量	黄橙色	ナデ	ナデ
194-17	71-1	97001142	ＳＫ００９埋土	〃	壺	—	(2.8)	—	細砂粒・小石多量、金雲母	灰黒色	ヘラミガキ	ヘラミガキ
18	71-1	97001141	〃	〃	高杯	—	(3.2)	—	砂粒・小石多量	黄橙色	ナデ	ナデ
19	71-1	97001139	〃	〃	〃	—	(4.3)	—	砂粒多量	黄橙色	ヘラミガキ、赤色顔料	ヘラミガキ
20	70-6	97001132	〃	〃	〃	—	(7.2)	11.0	細砂粒・小石多量	黄橙色	ナデ	ヨコナデ
21	71-1	97001136	〃	〃	長頸壺	—	(2.5)	8.7	細砂粒・小石多量	黄橙色	ヘラミガキ？	ナデ
22	71-1	97001138	〃	〃	甕	—	(4.3)	—	細砂粒・小石多量	黄橙色	条痕後ナデ	ナデ
23		97001430	〃	〃	〃	—	(4.6)	—	細砂粒・小石多量	黄橙色	条痕後ナデ	条痕後ナデ
24	71-1	97001137	〃	〃	〃	(21.0)	(7.9)	—	細砂粒・小石、金雲母	橙色	条痕後ナデ	条痕後ナデ
25	71-1	97001428	〃	〃	〃	(20.0)	(9.0)	—	細砂粒・小石多量	橙色	条痕後ナデ	条痕後ナデ
26	71-1	97001427	〃	〃	〃	(18.4)	(5.2)	—	細砂粒・小石、雲母	黄橙色	条痕後ナデ	条痕後ナデ
27	71-1	97001133	〃	〃	〃	—	(2.1)	7.0	細砂粒・小石	黄橙色	ナデ、底面に葉脈痕	ナデ
28		97001134	〃	〃	〃	—	(3.4)	6.4	細砂粒・小石多量	黄橙色	ナデ	ナデ
195-29		97001445	ＳＫ０１４埋土	〃	〃	—	(4.3)	—	砂粒少量、雲母	褐色	ナデ	ナデ、脚部はハケメ
30	71-2	97001442	〃	〃	〃	—	(6.0)		砂粒・小石少量	橙色	ナデ	ヘラナデ
31	71-2	97001447	〃	〃	〃	—	(3.2)	—	砂粒少量	橙色	ヘラミガキ	ナデ
32		97001052	〃	〃	〃	—	(6.8)	—	細砂粒・小石	黄橙色	条痕後ナデ	ナデ
34	71-2	97001440	〃	〃	〃	—	(4.9)	(6.9)	砂粒少量	橙色	ヘラナデ	ナデ
35		97000591	〃	〃	〃	(24.0)	(16.1)	—	砂粒少量、雲母	黄橙色	条痕後ナデ	条痕後ナデ
36	71-2	97001437	〃	〃	〃	(15.2)	(2.5)	—	砂粒微量、雲母	黄橙色	ヨコナデ、ヘラミガキ	ヨコナデ、ヘラミガキ
37	70-9,71-3	97001434	ＳＫ０２０埋土	〃	〃	(16.5)	(10.0)	—	砂粒少量	橙色	条痕後ナデ、スス付着	条痕後ナデ
196-39	70-2	97000590	ＳＫ０１７埋土	〃	〃	—	(13.1)	—	砂粒少量、雲母	褐色	ナデ	ナデ、脚部はハケメ
40		97000592	〃	〃	〃	—	(18.4)	(8.4)	砂粒多量	黄橙色	ナデ	ヘラナデ
41	71-3	97000591	〃	〃	〃	(24.0)	(16.1)	—	砂粒少量、雲母	黄橙色	条痕後ナデ	条痕後ナデ
42	71-3	97000595	〃	〃	〃	—	(3.3)	(7.7)	砂粒少量	黄橙	ナデ、底面ヘラナデ	ナデ
43	72-1	97000593	〃	〃	〃	—	(5.4)	(5.4)	砂粒多量	暗褐色	ナデ	ナデ
44	71-3	97000621	ＳＫ０１９埋土	〃	〃	—	(4.6)	—	細砂粒、金雲母	黄橙色	ナデ	ナデ
45	71-3	97000619	〃	〃	〃	—	(3.9)	8.0	細砂粒・小石	黄橙色	ナデ、底面ヘラナデ	ナデ
46	71-3	97000620	〃	〃	〃	(17.9)	(2.4)	—	細砂粒・小石	黄橙色	ナデ	ナデ
47	71-3	97001448	ＳＸ０１１埋土	〃	〃	—	(10.3)	—	砂粒・小石	暗黒色	条痕後ナデ	ナデ
199-48	72-5	97000580	ＳＢ００５埋土	土師器	杯	12.6	3.0	6.6	緻密	橙色	ナデ、底面板状圧痕	ナデ
49		97000583	〃	〃	皿	14.9	1.8	11.4	緻密	橙色	ナデ、底面板状圧痕	ナデ
50	72-7	97000585	〃	〃	〃	15.5	1.9	11.7	小石微量	橙色	ナデ	ナデ
51	72-4	97000586	〃	〃	蓋	16.2	2.2		砂粒多量	黄橙色	天井部ケズリ後ナデ	ナデ
52		99003307	〃　床面	〃	杯	(13.9)	6.2	(4.0)	細砂粒、雲母	橙色	ナデ	ナデ
56	72-6	97000584	〃　東壁土壙内	〃	〃	12.5	3.9	6.8	小石微量	橙色	ヘラ切り後ナデ	ナデ
57		97000582	〃	〃	〃	12.8	3.0	6.8	緻密	橙色	ヘラ切り後ナデ,板圧痕	ナデ
58	70-5	97000581	〃	刻目突帯文	高杯	—	(7.2)	(7.4)	砂粒多量	橙色	ナデ	ナデ
59		97000599	〃	土師器	甕	(22.6)	(11.2)	—	小石多量、雲母	黄橙色	タタキ後ナデ	ナデ、ケズリ
60		97000587	〃	〃	鉢	(14.7)	—	—	砂粒少量、雲母	橙色	ハケメ後ナデ	ナデ
61	72-8	97000589	〃	〃	〃	(15.7)	12.9	—	砂粒多量	黄橙色	ハケメ後ナデ	ナデ
201-62	72-9	97001436	ＳＢ００１土壙内埋土	〃	杯	(7.6)	1.4	(6.6)	砂粒微量、雲母	黄橙色	ナデ、底部糸切り痕	ナデ、底面板状圧痕
63	72-9	97001435	〃	〃	〃	—	(1.0)	(8.4)	砂粒少量	橙色	ナデ、底面板状圧痕	ナデ、底面板状圧痕
64	72-9	97000613	〃	青磁	碗	(12.5)	(5.6)	—	緻密	オリーブ灰	鎬蓮弁文	
65	72-9	97001433	〃	土師器	鍋	(38.0)	(12.5)	—	砂粒多量	褐色・黒	ハケメ、口唇部圧痕	ハケメ
203-66		97000607	東側遺物包含層	刻目突帯文	甕	(18.2)	(14.0)	—	砂粒少量	橙色	ナデ	ナデ
67	71-3	97001143	〃	〃	〃	(18.7)	(9.0)	—	砂粒・雲母	黄橙色	条痕後ナデ	条痕後ナデ
68	72-1	97001145	〃	〃	〃	(16.5)	(7.5)	—	砂粒・雲母	黄橙色	条痕後ナデ	条痕後ナデ
69	72-1	97001144	〃	刻目突帯文	甕	(10.4)	(5.3)	—	砂粒・雲母	黄橙色	ナデ	ナデ
70	71-3	97001150	〃	〃	〃	—	(4.6)	—	砂粒少量	橙色	条痕後ナデ	条痕後ナデ
71		98001235	〃	〃	〃	(17.6)	(11.5)	—	砂粒・雲母	橙色	条痕後ナデ	条痕後ナデ
72		97000600	〃	〃	〃	—	(8.6)	(7.0)	小石多量	橙色	ナデ	ナデ
73	72-1	97001124	〃	〃	〃	—	(3.3)	(7.6)	細砂粒・小石	鈍い黄橙	ナデ、底面に葉脈痕	ナデ
74	72-1	97000606	〃	〃	壺	(13.0)	(7.8)	—	小石多量	橙色	ヘラミガキ	ナデ
75	70-4	97001116	〃	〃	〃	(15.7)	(14.7)	—	小石・雲母少量	橙色	ヘラミガキ	ヘラナデ
76	70-3	97000598	〃	〃	〃	(8.9)	(12.0)	—	砂粒少量	黄橙色	ヘラミガキ	ヘラナデ
77	72-1	97000605	〃	〃	〃	(9.7)	(5.3)		砂粒多量	黒色	ヘラミガキ	ナデ
78	72-1	97001062	〃	〃	〃	(11.8)	(5.0)		砂粒少量	橙色	ヘラミガキ	ナデ

Tab.29　寺ケ里遺跡２区土器一覧表（２）

Fig.図番号	PL.番号	県遺物登録番号	出土地点	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土 ※混入物	色調	文様・調整 外器面	内器面
79	71-3	97001063	東側遺物包含層	須恵器	浅鉢	(12.4)	(2.1)		砂粒少量	黄橙色	楕円押型文横走	口縁部山形押型文横走
80		97001127	〃	〃	高杯	〃	(3.3)		細砂粒・小石	橙色	ナデ	ナデ、ヘラナデ
81		97001131	〃	〃	〃		(2.0)		細砂粒・小石	橙色	ナデ	ナデ
82	70-7	97001128	〃	〃	〃		(6.0)	9.0	細砂粒・小石多量、雲母	黄橙色	ナデ	ナデ
204-84	72-3	97001128	〃	土師器	杯	(8.6)	1.3	(7.2)	小石・雲母微量	橙色	ナデ、底部糸切り離し	ナデ
85		97001112	〃	〃	〃	(8.8)	1.4	(6.0)	小石・雲母微量	黄橙色	ナデ、底部糸切り離し	ナデ
86		97001107	〃	〃	〃	(9.0)	1.1	(6.9)	小石・雲母微量	橙色	ナデ、底部糸切り離し	ナデ
87		97001106	〃	〃	〃	(8.0)	1.4	(6.3)	小石・雲母微量	黄橙色	ナデ、底部糸切り離し	ナデ
88		97001101	〃	〃	〃	(8.6)	1.2	(7.3)	小石・雲母微量	黄橙色	ナデ、底部糸切り離し	ナデ
89		97001104	〃	〃	〃	(9.3)	1.2	(7.3)	小石・雲母微量	黄橙色	ナデ、底部糸切り離し	ナデ
90		97001110	〃	〃	〃	(8.2)	1.4	(5.9)	小石・雲母微量	黄橙色	ナデ、底部糸切り離し	ナデ
91		97001066	〃	〃	〃	(9.0)	1.2	(6.8)	小石・雲母微量	黄橙色	糸切り痕、板状圧痕	ナデ
92		97001102	〃	〃	〃	(8.4)	1.5	(6.6)	小石・雲母微量	黒灰色	ナデ、底部糸切り離し	ナデ
93		97001108	〃	〃	〃	(8.2)	1.4	(6.8)	小石・雲母微量	黄橙色	ナデ、底部糸切り離し	ナデ
94		97001109	〃	〃	〃	(9.0)	0.8	(8.0)	小石・雲母微量	黄橙色	ナデ、底部糸切り離し	ナデ
95		97001103	〃	〃	〃		(1.8)	2.5	緻密	茶色	ロクロナデ、底部糸切り	ロクロナデ
96		97000612	〃	青磁	碗	(11.9)	2.5	(6.4)	砂粒微量	オリーブ灰	底部ヘラケズリ	
97		97000611	〃	〃	〃	(11.9)	(3.0)		砂粒微量	オリーブ灰		
98		97000610	〃	瓦器	〃	(14.1)	(4.0)		砂粒微量	白灰色	ヘラミガキ	
99		97000613	〃	青磁	碗		(3.0)		砂粒多量・雲母	オリーブ灰	鎬蓮弁文	
100		97000614	〃	青磁	碗		(6.4)		緻密	オリーブ灰	鎬蓮弁文	
101		97001064	検出面	土師器	杯身		(4.6)	(7.8)	砂粒微量	橙色	底部ヘラ切り後ナデ	ロクロナデ
102		97001065	〃	須恵器	〃	(11.6)	4.5	(5.1)	緻密	灰白色	底部ヘラ切り離し	ロクロナデ
103		97000608	東側遺物包含層	瓦器	鍋		(2.3)	(5.0)	砂粒少量	黒・灰色	体部ヘラケズリ	ナデ
104		97001113	検出面	〃	〃		(3.3)	(6.4)	砂粒・雲母少量	黒色	ナデ	ナデ

Tab.30　寺ケ里遺跡２区石器・鉄製品一覧表

Fig.図番号	PL.番号	県遺物登録番号	出土地点	種別	器種	分類・部位	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	備考
193-16		98001238	SK008	礫石器	叩き石	—	(8.5)	(7.3)	(3.5)	
195-38		98001236	SK015	剥片石器	石刃	—	(5.4)	(1.5)	(0.6)	
199-54	72-10	97002401	SB005床面	鉄器	刀子	茎部	7.2	2.3	0.2	茎部のみ
55	72-10	97001990	SB005焼土（竈）内	〃	〃	—	(15.5)	(1.4)	0.35	
203-83	72-2	98001237	検出面	打製石器	石鏃	—	1.8	1.8	0.4	完存

X．七田家所蔵遺物について

1．調査に至る経緯

本資料は昭和９年前後から10年にかけて、七田忠志氏により、神埼郡東脊振村大字三津字戦場の丘陵部周辺において採集されたものである。七田氏は当該資料を史前学雑誌[1]において発表するとともに、当時親交のあった東京考古学会の森本六爾氏に資料の鑑定を依頼し、昭和10年に森本氏へ資料を送ったが、それから数ヶ月後に森本氏は死去し、資料は森本宅に置かれたままとなった。最近まではその後の戦災によって焼失したものと思われていたが、森本氏死後、氏の所蔵遺物は形見分けの形で友人らにより分散して所有されたために、戦禍を免れ、戦後奈良県桜井市の森本氏実家へ返還されたようである。その後森本氏の土蔵に人知れず保管されていたものと思われ、近年その存在が知られるようになったものである。現在は森本氏と親交のあった菅谷文則氏によって管理され、奈良県立橿原考古学研究所付属博物館に保管されている。今回三津工業団地造成に伴い戦場ヶ谷遺跡の発掘調査を行い多くの押型文土器を採取しているが、これに加えて新たな知見を得るため、現地に赴き、菅谷先生、橿原考古学研究所付属博物館の御協力のもと、実測・写真撮影等の調査を行った。

2．資料の概要（Fig.205）

資料はコンテナ１箱分の小破片であり、最も大きなもので15cm程度、ほとんどが10cm未満で３cm未満の細片も多い。この中には押型文土器の他に、前期から晩期の縄文土器、弥生土器、土師器と思われる破片も認められ、時間の関係もあり、縄文早期のものに限り実測を行った。なお、Fig.207のうち、1～22は橿原考古学研究所付属博物館保管分、23～26は七田忠昭氏所蔵資料である。

1～3・5・6・12～26は押型文土器である。1～3・5は直立する口縁部を持つもの。1は外面に山形文を横走、口縁部内面付近にも同一原体による山形文を横走させる。2は外面に山形文を縦走させ、内面はナデ、3は口縁部内面に山形文を横走させ、外面には文様は認められない。5は外面に格子目文を横走、同一原体で口唇部にも施文する。6は尖底となる底部片で、外面に山形文を横走させた後、ナデ消しを行う。8は無文土器。口縁端部は外反、外面は「ミガキ」とも言うべき丁寧かナデが施される。4・7は撚糸文土器か。4は底部付近と思われ、底面の粘土板と接合部で剥離している。15～20・23・25は外反する口縁部をなし、口縁部内面に原体条痕を施すもの。外面の文様は12～17が楕円文を横走、25は斜走、18は山形文を横走、19は斜走させる。口縁部内面の施文方法も多様であり、17，14のように楕円文を縦走（17）、山形文を横走（14・23）させた後に条痕を施すものがみられ、その他15・25のように長大なもの、18のように太く短い条痕を斜めに施すものがある。その他、21のように口縁部内外面に大型の楕円文を施すものがある。22は屈曲する胴部片で外面に山形文を横走させるもの。24は外面に斜格子文をもつもの。26は外面に大型の楕円文を斜走させ、底部付近の破片である。なお21は外面に原体条痕のみ観察され、三養基郡香田遺跡[2]出土例に口縁部外面に原体条痕を施し、その下位に楕円文を縦走させる例がみられ、本例も押型文に含まれると思われる。これらの押型文土器を東九州の押型文土器編年[3]に照らせば、1～3・5は稲荷山式、12，13は下管生Ｂ式、14～18・25は田村式にそれぞれ類似するようである。

また、押型文土器以外の早期のものとして、9～11の塞神式土器が挙げられる。いずれも胴部片で、特に10は胴部のくびれ部分の小片である。

註・文献

1）七田 忠志（1934）：「佐賀県戦場ヶ谷遺跡出土弥生式有紋土器に就いて」『史前学雑誌』六巻二号
七田 忠志（1934）：「其の後の佐賀県戦場ヶ谷遺跡と吉野ヶ里遺跡に就いて」『史前学雑誌』六巻四号
香川 光夫（1956）：「各地域の縄文式土器－九州－」『日本考古学講座』3　河出書房
2）堤 安信「香田遺跡」『香田遺跡』　九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書(2)　佐賀県教育委員会　1982
3）坂本 嘉弘（1998）：「東九州の押型土器研究の現状と課題」『九州の押型文土器』　九州縄文研究会

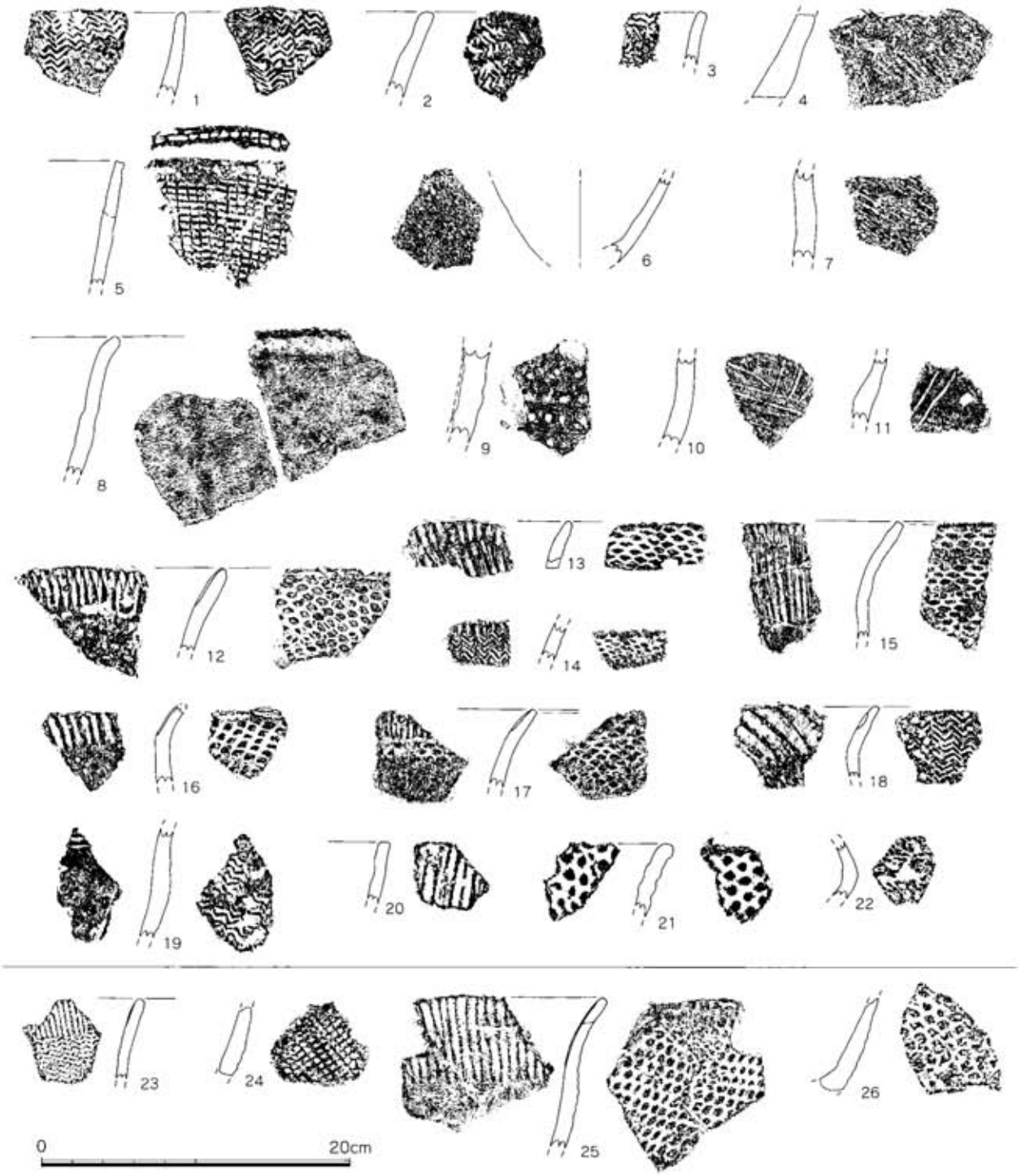


Fig.205　七田家所蔵遺物（1：4）

佐賀県文化財調査報告書第140集

戦場古墳群［本文編］

平成11年３月

編集・発行　佐賀県教育委員会
佐賀市城内一丁目１－59
ＴＥＬ　0952（24）2111

印　　刷　株式会社 三光
佐賀県伊万里市大坪町乙4161－1
ＴＥＬ　0955（23）5808